クリエーター

白カカオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クリエーター

【Ｎコード】
Ｎ３９４５Ｔ

【作者名】
白カカオ

【あらすじ】
ようやく異世界の存在が認知されてきた２１世紀初頭。片田舎のただの一般人神谷晶（アキラ）は、一つの指輪と一人の少女にとの出逢いにより、自身の非凡な魔術の才能に目覚める。この日から晶の日常は、全世界を巻き込む運命の中心になった。晶の力と駄目駄目の指輪が、世界のカタチと根源を大きく揺るがしていく。そんな異世界譚。

プロローグ（前書き）

初投稿です。学園物も考えましたが、（私自身が）感情移入し易いように主人公を社会人にしました。ご意見、ご感想お待ちしております。

プロローグ

ニュースでは汚職がどうだ、あの芸能人がどうだと騒がせる中、何の違和感も無く異世界の話題が挙がり続けるここ、ジャパン。神谷晶は今日も今日とて朝から慌しく家から駆け出す。テレビの中では今も政治家たちが難しい顔をして、最近発見された異世界についてあーだこーだ意見を飛ばしあっている。が、そんなもんかんけーねぇ！と。晶にはテレビの音声を聞く猶予すら残されていなかった。…単刀直入に言うと、寝坊して会社に遅刻しそうなのだ。

――異世界。漫画とか映画とかでよく見る、剣とか魔法とか、モンスターとか神様とか…ようするにこの世界では有り得ないことが跋扈するような世界が発見され、約2ヶ月経つ。

きっかけは異世界側からの介入だった。未開の地、南アメリカのギアナ高地に確認されたゲートは、それを皮切りに世界各国で発現した。

無論ゲートが開いた諸国は大わらわ。慌てに慌てテンパった挙句、核をぶちかまそうとする首脳が出る始末。しかし突如現れたゲート騒動は、またも唐突に現れた一人の人物によって一端の落ち着きを取り戻す。

「マテリアルの世界の皆さん、はじめまして。アストラルの世界、キュートス国の国王、キート＝ベイン3世と申します」

現れた異世界の、それも耳と肢体で一発でわかるエルフの国王によって、あっという間にこっちの世界…マテリアルの世界と、異世界…エーテルの世界の和平は決まった。よくわからないけど、不可侵の条約だか何とかを締結して割とあっさり会合は終了してしまったらしい。こっちの世界の外交問題もこのくらい綺麗さっぱり解決

して欲しいもんだ。
　ちなみにエルフの他に巨人（ジャイアント）とか、妖精（フェアリー）とかドワーフとか…色々いたと某掲示板で祭りになっていたが、興味の対象はやはり妖精だった。巨人が実力行使に出たとか根も葉もない噂も多々あったが、そんなことになってたら今頃全面戦争だ。裏はわからないけど、平和的解決、大いに歓迎じゃないか。僕には関係ないことだ。

　それからゆっくり、本当にゆっくり、双方の歩み寄りが始まった。後々明らかになったことだが、次元とか事象とか、そういう物を隔てている壁のような物が歪んで破綻してしまったらしい。それで元々こっちの世界の存在を知っていたあちらさんがどうせならと穴を空けてきたらしい。何たる無茶苦茶。
　だがこれに近い干渉は昔からあったらしく、それが今に伝わる伝承や御伽噺に残ってるらしい。怪物とか妖怪とかＵＭＡとか、そういった未確認な物もあちらの世界の住人さんと言うから驚きだ。こんな棚ぼたに世界の謎が解明されて良いのだろうか。ある意味夢が無い。
　そういったことも含めて、今は話を詰めている段階らしい。絶対利権問題とか出てくるからね。

　いい歳になってそういう事大好きな晶だが、目下の問題は世界なんかじゃない。ここで遅刻しようものなら、自分を取り巻く世界が地獄に変わる。向こうには地獄に似た世界があると言う話だけど…と現実逃避もそこそこに、法定速度をピリオドの向こう側に置き去りにして愛車を爆走…もとい暴走させる。パトカーが来たら一発で免取りだが、幸いこんな田舎の山道で滅多に遭遇するものではない。とはいえ、山道だからこそ細くて危険なのだが。無駄な所に命がけである。

　そして普段は３０分以上かかる道を半分近あまりで到着した、そ

こそこに立派な建物に広い土地。県下で知らない者はいない神谷コーポレーション。晶の父が一代で築いた「城」である。晶はその弱電部品製造部の検査官を務めている。世間の目は「親のコネ」と写りがちだが、一応きちんと一般採用を潜り抜けた叩き上げである。「七光り」を嫌う父は自分から口外することなく、雰囲気でバレるまでは互いに人前での接触すらほとんど避けていた。…バレた原因は父の弁当を晶が届けに行った事なんだが。

「…ふぅ、危ねぇ。遅刻したら親父に何時間小言言われるかわかんねぇ」

朝礼が終わり、着替えてほっと一息つく。なんとかギリギリ間に合った。低血圧なことは親父も知ってるんだから、親父の権限とかで僕だけ免除して欲しいもんだ。

「ギリギリだ馬鹿タレ」

ビクッと身を竦めるが、決して振り向かない。断固！振り向かない。同僚のニヤケ顔が代わりに目に入るが構うもんか。今振り返ったら、絶対

「イダダダダッッッッ」

決心虚しく、耳という人体急所を捻り上げられ、あっさり観念する。昔から、親父には敵わない。色んな意味で。

――そして視界には、案の定眉間に皺を寄せたわが社の代表取締役社長、神谷剛三が鬼神の如くオーラを放っていた。いや、鬼神って実在するんだよなぁ…向こうの世界で、と早くも本日二度目の現実逃避をするも、同僚の前での羞恥プレイは絶賛公開中だった。

虚ろな瞳でその日の業務を機械的に消化すると、帰りはノロノロと車を走らせる。今度は渋滞的な意味で町中だと迷惑かけそうな速度だが、ここは山の中で滅多に車は通らない。大した距離ではないがポツンと忘れ去られたように煌々と明るい自動販売機で休憩を取る。荒んだ心に炭酸ジュースが染み渡る。

―――キラッ

ぼんやりした視界の端に、鈍く輝く小さな物を見つけた。ノソノソと寄って見ると、蒼と白の装飾が施された指輪だった。

「指輪…か」

何の気なしに指に嵌めてみる。計ったようにジャストフィットした指輪だが、困ったことに今度は抜けなくなった。

「ちょっ…えっ、いやいや」

孤軍奮闘する中、タイミングとしてほんの数秒後、背後に気配を感じた。人の気配などでは勿論無く、そうあれは…

「ゲー…ト？」

テレビで見た、異世界と繋がる、アレ。ゲートは徐々に拡大し、晶の身長と同じ位の大きさになったところでその成長を止めた。

異世界の存在がようやく世間に認知された今日この頃。神谷晶の日常は今日、今この瞬間ゲートの渦に巻き込まれていった。

プロローグ（後書き）

改めましてはじめまして、白カカオです。乱文ではありますが寛大な心でお付き合いください。しっかしいきなり読みにくいよなぁ…処女作なのでっていう免罪符でどうか…ダメ？ともかくよろしくお願いします。

～第一話～ファースト・コンタクト（前書き）

こんにちわ、白カカオです。クリエーター目を通していただいた方、感謝です。（主に私が）悪戦苦闘しながらも頑張って書いていきますので、応援してくださいませ。

～第一話～ファースト・コンタクト

「ゲー…ト？」

晶の前に現れた異形のそれが、空間に黒い渦を広げるように段々と、確実に成長していた。呆気にとられている晶を尻目に、ようやく人の丈と同じ位の大きさでそれは安定した。

「よい…しょっとっ」

突然の事態に硬直している晶を展開は待ってはくれず、中から見た目１０代後半であろう少女が現れた。もう何がなんだかわからない。状況を整理しようとも、超展開過ぎて頭がフリーズしてしまっている。いや、テレビで見たエルフの国王が出てきた時と同じなのだが、まさか自分の身に降りかかろうなんて雀の涙ほども思っていなかった。

「確か…この辺で魔道反応があったはずなんだけど…あっ」

鈴の音のような澄んだ声で独り言を呟きながら何やら探っていた少女は、呆然と立ち尽くしている晶にようやく目がいった。あっと言う声に晶は思わずビクッと反応してしまう。

「ねぇねぇ、ちょっと聞きたいことあるんだけど…」

体が一瞬動きを取り戻すと、ようやく半分方思考が蘇る。背丈は、晶の肩位であろうか。綺麗なブロンドの長い髪に、淡い紫のドレスがよく似合う。まだ幼い顔立ちをしているが、髪から覗いた長い耳が否が応にもあちら側の存在であることを主張している。おそらく、

いや十中八九エルフだろう。エルフ族とは、皆容姿端麗なのだろうか。体つきは華奢だが、どことなく気品のようなものが窺える。

「もしもーし」

目の前で手を振り振りされ、現実に戻される。どうやら半分も思考は回復していなかったらしい。

「はっ、はいっ!?なんでしょう!?」

思わず声が裏返る僕。自分でもビックリするくらいみっともない声だ。

「この辺にさ…指輪、落ちてなかった?父上からの頼まれごとで探しにきたのだが…」

指輪ってこr

「あああああああああーーーーーーーーーー」

返答より早く、エルフの少女が声を上げる。声の大きさに、またもビクッとなる。

「ちょっ、これ、外れないの?てゆーか!なんで貴方がつけてるの!?」

「えっ、いや…つい。なんとなく。ごめん、君のだったの?それなr痛い痛い痛い痛い!」

謝罪の言葉も聞かず、僕の指から指輪を外そうとする少女。つう

か指もげるって！

「ハッ…ごめん、ちょっと気が動転してて…」

気が動転された相手に指をもがれましたなんて、カタギじゃない人の世界でもないぞ？たぶん。いや、悪いのはたぶん僕だけど。それより何より、驚くべきはその力。亜人種は力が強いって設定は間違いじゃなかったんだな。…身をもって知りたくは無かったけど。

「とりあえず、事情を説明して貰えるかな？」

なんか少女にとって大変な事をしてしまったみたいだし、僕も謝罪なりするならきちんと何に対して謝らないといけないかは聞きたいところだ。

「えっとね。貴方がつけてるその指輪、私の国の秘宝の一つなの。私のうちの蔵から盗み出されてしまって」

待て待て、いきなりついていけない。とりあえず、何で国の宝が小さな娘っこの家の蔵に何かあるんだ？

「あっ、その前に自己紹介しなきゃね」

怪訝な顔をした僕に気づいたのか、いきなり自己紹介を始める少女。

「私の名前はキート＝エル＝リーナス。エルフの国、キュートス国の国王、キート＝ベイン3世の娘です」

皆さん、お元気ですか?神谷晶です。僕はなにやらとんでもないことをしてしまったようです。泣きそう。

ここはゲートの内側。そうです。僕は今、アストラル界に向かっています。車、鍵つけっぱ。

と状況をしごく簡単に語ってみたものの、言葉以上に大変な状況です。今、リーナス姫…

ーーーエリーでいいよ。みんなそっちで呼んでるから。

エリーに手を引かれて光の向こう側に向かっています。美麗な少女に手を繋がれて一部の方々は羨ましがりそうですが、僕にとっては半ば強制連行です。いや、それで正解かも知れんが。

事の次第は、あの場でエリーが説明してくれた。賊から盗まれた指輪を取ってきて欲しい、との国王様、エリーのお父上からの勅命でやってきたというエリー。護衛も連れずなんと無茶なと思ったが、

ーーーだって護衛の人準備長いし、マテリアル界興味あるし、これも修行だと思って一人で来ちゃった。

…とのことだ。行動派すぎるだろこのお嬢様。つうかなんの修行だ。何を目指してるんだ。

そして、指輪の事も。強力な加護(エンチャント)を施されたこの指輪は、「ダビデの六星環」という、あの「ソロモンの指環」と対をなす物らしい。後者とは対称に、こちらは神とか天使とかそれらの眷属を使役出来るのだというが、本来なら儀式やら何やらして装備する物らしい。勿論そんな事せずに簡単に嵌めていた僕を見て、エリーは二重の意味でビックリしたんだとか。そんなもん僕の理解からフライアウェイしてるが、とっくに。しかも主を選ぶというこの指輪、いくらサイズがピッタリでも普通はするりと抜け落ちてしまうそうだ。なぁ

んで僕の指に嵌まってんのかねぇ、こいつ。
　まぁそんなことより、そんな大儀を背負ってやってきた一国の姫様が、人懐っこい見た目相応の女の子で良かった。これが忠義に厚い騎士様とかなら、その場で切り伏せられてもおかしくない。いやぁ僥倖僥倖。

「ホントは来る予定だったよー。忠義に厚い騎士様」

　…運命の神様、マジ感謝します。貴方のおかげで私めのか細い命は救われました。出来ればこんなことに巻き込んで欲しくなかったが。向こう側の世界にいるみたいだし、会ったときはその件について小一時間話し合いたい。
　で、運命の悪戯で指輪が外れなくなってしまった僕ごと、お父上の御前に連れてって事情を話すとのことだ。僕の意思の介入一切無し。ガッデム。なんてこったい。

「さぁて、着いたよー。ようこそ、我が国へ」

　…思ったより騒がしい。ゲートの中を徒歩数分、初めて見た異世界の街はイメージ的にはまんまロープレの城下町。ちなみに僕らが出てきたのは、門の外の森の出口。僕らを見つけた門番がいきなり切りつけてきたが、エリーの制止で事なきを得た。まぁいきなり外の世界に出てったお姫様が、今度は異世界の男と手を繋ぎ戻ってきた。…なんて良からぬ想像をされても無理もない状況だ。事実はエリーが手を引いてるんだけど。
　それにしても、さっきはエリーの毅然とした態度にも驚いた。

ーーー下がりなさい！この方はキュートス国の客人として参ったのだ！剣を収めよ！

やっぱ国の中では王女様なんだなぁ。少しばかり感心する。そしてもう一つ。まぁ視線は痛いほどに感じるが、王族がこうして街中を闊歩できるのは平和な証拠だ。子供達がエリーにまとわりついてくるが、当のエリーは軽く相手にしつつも城までの歩みは止めない。この世界、この国に対する好感度が少しアップする。活気があり、王族も大衆に慕われ、そして子供たちは皆笑顔だ。微笑ましい限りではないか。

そうして一人感心していると、城が眼前に迫っていた。…でけぇ。白い煉瓦を基調に作られた城。こちらの中世ヨーロッパの城と遜色無いかもしれん。

向こうではエリーが兵士達と何やら話している。困惑した表情を浮かべているが、最後に渋々頷くと、二人一緒に中に入れてくれた。まぁ当然のやりとりだわな。

「すぐに迎えが来るから、アキラはここで待っててね」

二人きりになるとエリーは言葉を崩し、そして調度品たっぷりな客間に通すとせかせかと出て行った。お姫様には色々と準備があるのだろうと大きく構えて待つことにしたが、いざ一人取り残されると不安が大きく自己主張してくる。元の世界でも異国の地に一人で行ける度胸もない。どーせチキンだよ。ケッ。

…待つこと十数分、体感にして数時間。仰々しい鎧を来た兵士が迎えに来た。

「カミヤ・アキラ殿。お迎えに参りました。さ、こちらへ。国王様と姫君方がお待ちです」

歳は晶と同じ位だろうか。エルフは長寿な種族だからもっといっているんだろうが、とりあえず青年騎士に連れられ廊下を歩く。

「あの…エリー、じゃなかった。リーナス姫はどちらに？」

「リーナス様は国王様とご一緒です。さぁ、着きましたよ」

朱に塗られた大きな扉が開いていく。たぶん一般人で初めて、今僕は異世界の国王に謁見する。

～第一話～ファースト・コンタクト（後書き）

早くも晶が異世界に踏み入ったわけですが…安西先生、もっと文才が欲しいですｏｒｚ

晶が手にしたダビデの指輪ですが、完全に私の創作です。どの本見ても（たぶん）載ってないので、あしからず。たぶんこういうのちょいちょい出していきます。

それでは、ご意見、ご感想お待ちしてます。

～第二話～キュートス国（前書き）

おはようございます。夜勤明けです。どうせすぐは寝れないので第３話執筆しまする。あー、汗くさ

～第二話～キュートス国

物々しく開く大きな観音開きの扉。初めて見る、それも自分を導くレッドカーペットの先には、また大きめサイズな玉座。テレビで目にするようになった、キート＝ベイン3世が小難しい…もとい威厳に満ちた表情で座している。なんとなく、剛三を思い出して身震いした。いや、ね？迫力満点のオーラとかさ、そういうの。ある意味慣れ親しんだ空気だけどさ。

その向かって左隣には、恐らく王妃様、逆隣にはスラッとした青年（？）が立っている。あと他に数人の女性がその三人を中心にくの字に並んでいる。王様とはかくもこんな美女達を侍らせるものなのか。よろ〇び組とか。べっ別に羨ましくなんかないんだからねっ！！

ーーーストップ。そこで片膝ついて。頭を下げて平伏して。

持ち前の集中力のなさを脳内で発揮させてる最中に、突然その脳内に直接話しかけられた。内心のビビリ具合を表に出さぬよう必死にその声の主に従う。ワンテンポ遅れでそれがエリーの声だと気づいてからは、寧ろさっきの脳内がエリーに筒抜けだったのではないかといらぬ心配をする。その思考処理速度僅か半秒。いきなりテレパシーのチャンネルを開かれた事よりそっちの方が晶としては問題だった。

「表を上げよ、カミヤ・アキラ」

国王に声をかけられ、はっと宮廷っぽい儀礼をなぞる。ホントに自分がこういう事をするハメになるとは今でも信じられないけど。

「さて…エリー。事の顛末を説明してくれるな？」

「はい、お父様」

女性陣の中から、薄黄緑のドレスを身に纏った髪をティアラでアップにした女の子が一歩前に出る。

ーーーちょっ、…えっ？あれ、エリー？

さっきのテレパシーからここの何処かに居る事はわかってはいたが、さっきまでの子供っぽいエリーとかけ離れている今の姿に全く気づかなかった。よくよく考えなくとも、王女と自分でカミングアウトしていたのだから、国王の傍にいてもなんら不思議ではないのだが。

「…では、お話しします」

頼むぞエリー！お前の話し方如何で、僕の運命が大きく変わるんだから…

「指輪の気配を追ってマテリアル界にゲートを開いたところ、アキラが指輪をしていました！以上です」

ーーー待て待て待て！！違うだろっ！いや合ってるけどさ！間違いじゃないけどそれだと僕が盗った賊みたいに…ってほらぁ！そちらのお姉様方の目つきがどんどん険しくなってってるしさぁ！違うんです！確かに僕は指輪を嵌めたよっ！？ただそれは好奇心というかノリというか…だからそんな睨まないでくださいって！

もうなんだか、突っ込みたいこととか言いたい事とか多すぎて言葉が出てこない僕を見据えていた国王の口が歪む。

「くくくく…ハハハハハ…」

いやね、だから国王様？違うんですって。だからその恐怖で心臓を握り潰されそうな笑いをお止めください！？

「ハッハッハッ…ハーッハッハッハッハ」

…てアレ？これって普通に爆笑してるだけ？

「エリー、くっくく…もう少し言い方というものが…クハッ」

「貴方…」

「お父…様…？」

隣の女性や取り巻きの方々が呆れ、または呆気にとられている。つうかそこみんな家族かよ！？なんて美人なお姉様方…よし、うまれかわったらぼく、えるふになる！

ひとしきり笑い終えて呼吸を整えた国王様は先とは違う、全く穏やかなオーラを放っていた。もうなんというか、日曜日に子供の遊び相手をするお父さんみたいな。

「アキラ君、楽にし給え。実は大体の事は知っているのだよ。君は偶々その指輪を見つけただけということも」

えっ何これ？ゼンゼンツイテイケナインデスケドー。つまり…茶番？初めて異世界に踏み入れて一発目がこれ？

「気を悪くしたならすまん。私も君らの世界との外交に少々疲れていてね。そこにあんまりエリーが『アキラを悪くしないであげてー』と頼み込むもんだから、つい」

ついってアンタ…それが一国の国王のすることかーーーっ!!っとか言ってみたり。うん、エリーに声色真似たとこ、正直気持ち悪かったッス。なんか…一気に気が抜けた。父親のからかいに憤慨してるエリーもなんかさっきまで通りだし。

「あと…その指輪に選ばれた異世界の青年、という者にも少なからず興味がある」

国王の目が妖しく光る。

「そういえば、指輪…」

王妃様の隣のお姉様が声を上げるが、冷静になって初めて、エリー以外の女性のエルフの声を聞いた気がする。透き通っていて、なんだか心地いい。

「外せない…んだろう？アキラ君」

「そうなんスよ…正直困ってるんス」

「貴様！王に向かってなんだその舐め腐った言葉は！」

広間の脇の方に控えていたたぶん偉い人が叱責する。だってなんかもう…空気がアレだし。元はといえばあんな小芝居仕込んだ国王が悪い。つうかアンタもよっぽど口が悪い。王の御前であるぞ！

「よいよい。そやつは指輪に選ばれた時点でただの一市民ではない、そもそも我が国の人間でもないがな。ここは友好的にいこうではないか。外交以外の異世界の民との親交というのも、必要ではないかね？私はアキラ君を友人として歓迎しよう。今日はゆっくり休んでいくがよい。アキラ君が望むなら、酒も用意しよう」

厳格な（？）国王の暴挙に晶含め皆しばらく茫然自失だった。ただ、目をキラキラ輝かせはしゃぐエリーを除いて。

結論。エルフの国の王様はめっちゃいい人だった。

ＰＳ．僕の世界での顛末は千里眼で見ていたとか。何でも高位のエルフは修行と資質次第で使えるようになるんだとか。エルフってずるい。

～第二話～キュートス国（後書き）

書き上げてみたら王様以外ほとんどしゃべってＮＥＥＥＥ
すみません、他の方々は追々ということで…。読み返してみると展開速すぎる上に超展開すぎる気がｏｒｚ次話はもっと推敲します。きっと…そこまで練れる頭があれば。今しばらく薄っぺらい話を見守ってください。お願いだから匙を投げないでください。ご意見、ご感想、罵倒お待ちしてます

～第三話～意外な潜在能力（前書き）

こんばんわ。頭痛が痛い白カカオです。毎週バンド練が終わった直後頭痛がするのは脳が月曜日を拒否してるからなのでしょうか。バファリン飲んで元気いっぱい！

～第三話～意外な潜在能力

「えっ？でもそろそろ帰らないと家族も心配しますし…」

国王にゆっくりしてけと言われたが、そろそろ帰りの時間が気になってきた。よく考えると、今僕は会社から帰ってる途中なのだ。それに体感で数時間は下らない時間こちらに滞在している。明日も仕事あるのに。

「むぅ…ふむ。ジイ、アレ持ってきてくれ。あー、違う。水の方」

そう言われて水が入ったガラスっぽい器を持ってきた初老の男。

「アキラ様や、はじめまして。私はこの国の魔法監督省の大臣をやっております、マリオンと申します。さぁさ、アキラ様。こちらの水に手を入れてみてくだされ」

いかにも好々爺というような大臣の笑顔に、晶は棚上げになった帰宅時間を忘れ、思わず言われるがまま手を差し入れる。そして時を置かず水に変化が現れた。

ーーーき、汚ねぇ

思わずもう片方の手の汚れを確認するほど、水が茶色く濁っていく。それも絶え間なく。

「判別水というものですわ」

突然頭の方から言葉が降ってきた。水を覗き込んだ顔を上げると、

王妃が静かな微笑を浮かべながら言葉を紡いだ。

「こちらの世界では皆、生まれついての属性を持っています。生まれたばかりの赤子を産湯代わりにそれに浸け、その子の属性を判別するのです。属性が火なら沸騰し、水なら嵩が増える…といったように」

「アキラ様は泥のように濁られた…土のようですな」

王妃の言葉に続き、大臣がアキラを占った。

「土…かぁ」

なぁんか、地味だなぁ。ロープレだと、回復とか補助とか、パっとしないポジションが多い。主人公タイプは火とかが常だし…いや、別に冒険とか戦闘とかしたい訳じゃないけど、なんかなぁ、なぁんかなぁ…

「土属性の者は回復魔法や、攻撃でも大地に働きかける、かかせぬ存在ですぞ。さぁ、もうお手を抜いて結構です」

やっぱり予想通りだなぁと、渋々手を抜く…が。

ーーー!?

水がまとわりつき、雫がゆっくりと器に落下していく。

「これは…」

「ほう…」

国王と大臣が感嘆の声を上げる。王妃は声を失い、他の者はわけがわからぬという表情を浮かべた。

「えっ、これ、なんスか！？」

状況がわからない晶は周りの反応もあいまって、軽くパニックになっている。雫の方はあと数滴といったところだが、それでもやはり落ちるスピードは変わらない。

「時の…属性？」

「時の属性？」

エリーが小首を傾げ、王妃の言葉に疑問を投げかける。

「時の属性。火、水、土、雷に氷、風の基本属性に属さない独立属性の一つ。これを持つ者は皆、後の大魔導士に名を連ねている。それも…二つの属性を共に持つ者など聞いたことがない…」

「え、ちょっ待って！僕はそんな大層なもんじゃないしっ、普通の…ただのサラリーマンですよ？今日だって遅刻しかけて親Ｊ…社長に怒られてるような情け無い一般人ですし！」

テンパりすぎて余計な事まで喋ってしまう。

「アキラ様は向こうの世界ではともかく、こちらの世界では得がたい人材のようですな」

「だからっ、僕魔法とか全然わからないし。それにそろそろ帰らな

いと」

自分に不利な状況を打開するためなら浅知恵がよく働く、ホントコずるい頭だと思う。

「いやはや、魔法のことでしたらこちらでいくらでもお教えしますわい」

「それに、時の魔法が使えるなら帰る時間も心配いらんて、なぁジイ」

「えぇ」

またも二人が笑い合うが、今度は何やら含みがある。回避、失敗。所詮浅知恵だったか。

「アキラ様、ゲートに案内しますぞい。着いて来てくだされ」

内心でホっと胸を撫で下ろす。なんだ、帰れる。でもこっちの世界も居心地は悪くなさそうだ。帰る前にこっちの世界への来方とか教えてもらおうか。そんなことを考えている間に門の外、ゲートの前。何やら国王様ご一行も随行しているが、大丈夫なのか？治安的な意味で。

「さぁアキラ様。両手でゲートに触れて下さいませ」

大臣に言われるがままにする。なにせ、こちらはこういったファンタジーな物に対する事は何一つわからん。

「ちょいと失礼…ふぬっ」

大臣が晶の背中に手をかけると、背中越しにエネルギーの奔流が自分を通してゲートに流れるのを感じた。

「よし、OKじゃ。これでゲートの時間の流れを、アキラ様がここを最後に通られた時間に固定出来たぞい。こっちでいくら月日を過ごそうとも、アキラ様が帰られる時向こうでは今日の日付の夕刻になっているはずじゃ」

ちょっ…騙されたあああああぁぁぁぁぁぁぁ!!!後ろの方ではなんか娘っこどもがはしゃいでるけど、そんなの関係ねぇ。こちとら絶賛硬直中じゃ!

「なんだ、詐欺師にでも会ったような顔して。こっちはただゲートに触れてくれとしか言っておらんぞ?さぁ今夜は宴を開こうじゃないか。我が友にして、指輪に選ばれし未来の大魔導士の誕生を祝して!ほら、可愛い娘達に囲まれて食事など、若いアキラ君なら胸が弾むだろう?」

よくまぁぬけぬけと…やっぱタチわりぃ、このオヤジ。それに自分の娘を可愛いとかよう言えるなこの親馬鹿め。いや、確かに皆美人だけどさ。

…でも考えようによったら便利な魔法だな。疲れて眠いときとかこっちに来て気が済むまで休んでけばいいし。

「ただし、この魔法多用は禁物ですぞ。時間の流れは止めれども、肉体の時間はそのままなのでの」

…たしか人間、人生の三分の一は睡眠に費やすって話だよな…ダメじゃん。まぁ、一晩位は…いいよな?こうなったら楽しまなきゃ

損な気もしないでもないし。

「そっ、そうなのか？大臣」

国王…貴様。

「あら、杯が空ですわ。どうぞ」

今お酌してくれているのが、セリーヌ第一王女。エリーの一番上のお姉さんだ。毛先が若干内巻きになっているロングのブロンドに、ピンクのドレスがよく似合う。いかにもお上品な感じ。

「ほら、お皿も。盛って差し上げますわ」

「あっ…すいません」

取り分けをしてくれているのがディーン第二王女。こちらはポニーテールのように後ろ髪を縛り上げ、白く細いうなじがのぞいている。セリーヌやエリーほど愛想はよくないが、悪い子じゃなさそうだ。つうか料理多すぎだろ！こちとらドワーフや豚鬼（オーク）じゃねぇんだ。そんなに食えるか！…まぁ両方ともまだ会ったことないけどさ。

…ということで、お邪魔させて貰ってます。なんでも僕の為にこんな晩餐会を開いていただいてるみたいで、なんか申し訳ない。

ちなみに晩餐会開始から半刻ほど、すでにほぼ皆出来上がっている。エルフはどうも酒が弱いらしい。みんな真っ赤だ。僕は歓迎会とかで散々鍛えられたからまだそこまで至ってないが。この場で素面なのは…僕と大臣くらい。大臣は最初の一杯しか飲んでない。ちなみにエリーはノンアル。葡萄のジュースを美味しそうに飲んでいる。髪も下ろしている。なんとも微笑ましいが、僕の周りにまとわ

りつくのは止めてほしい。落ち着かない。第一王子のアレンさんはにこにこ笑顔を絶やさないが、酔いつぶれるのを我慢しているのがあからさまにわかる。食事にも手がついていない。なんでも、

「国王になれば食事会で酒を飲むことなど日常茶飯事だ。今のうちに慣れておかねばならぬ」

との国王のお言葉。なんという体育会系。それ、危ないですから止めといた方がいいかと。ちなみに料理の量についてのさっきのツッコミを王妃にしたところ、

「あら、無理に全部食べなくていいのよぉ？残った分は使用人達の賄いになってるからぁ」

…さっきの聖母のような王妃はどこへ行ったのやら。語尾が完全にだらしなくなっている。つうかどうりでメイドさんが料理を運んで来る度に、僕に対する興味津々な視線と同じくらい、料理に向ける視線が長いわけだ。

「楽しんでおりますかの？アキラ様」

国王一家が騒いでいる傍ら、大臣が楽しそうに話しかけてきた。

「えぇ。最初は正直騙された感いっぱいでしたが。今は感謝してます」

実際この空気を楽しんでいるので、正直な気持ちを話した。

「国王も私らも、初めての異世界の方の…それもこのように素晴らしい資質をお持ちの方のご来訪にとても喜んでおります。魔法の件

やこの世界のこと、アキラ様さえよろしければ明日にでもお話させていただければと思いましたのですが…」

「まぁ…そうですね。状況次第ですが」

…今がこんな半カオスな状況だし。

「ほっほっほ。そうですな。では老骨に堪えるゆえ、私はこの辺で失礼させていただきます」

「それではまた、明日。良い夢を」

「えぇぇ。ジイ、もう寝ちゃうのぉ？」

エリーが寂しそうに駄々をこねる。確かに楽しい宴から一人でも抜けるのは残念だ。

「無理言うな、エリー。大臣だって疲れてるんだろうよ。ほら、僕が相手してあげるから」

「そうやって子供扱いしてぇ。いいもん、私アキラの分も料理全部食べてやるから」

「こらこら、はしたないわよ」

「セリーヌ姉様だってお肉、何杯目？」

「ディーンだって」

…結局食べるのに飽きたエリーの相手をして、月が真上からさら

に傾いたころ、ようやく綺麗にメイキングされたベッドに就くことが出来た。

～第三話～意外な潜在能力（後書き）

まさか城での一晩に二話使うとは思いませんでした。その代わり…でもないですが、この世界の属性について軽くふれさせていただきました。細かいことは、またの機会に。予定してたとこまで全然辿りつけない…

～第四話～キュートス国、二日目（前書き）

こないだはバファリン飲んで元気いっぱいとかほざいてたけど、見事に蕁麻疹発症…ｏｒｚ今日は会社休ませてもらいました。なんとかならんかねぇこの虚弱体質…

～第四話～キュートス国、二日目

さて、カオスな宴から一夜。今僕は城の執務室の一角を間借りさせてもらってる。大臣のマリオンさんも一緒に。ようはこの世界についてご教授して貰ってるところだ。

「アキラ君、アストラル界について説明させてもらいますぞ。アストラル界は三つの階層にわかれております。正確には三つの星に分かれておるっと言ったほうが正しいかの」

「三つ…ですか？」

「左様。まずは我々エルフ族などの亜人や魔獣が住む、通称半マテリアル界。アキラ様が住むマテリアル界の物理法則の大半が適応される為にそう呼称されておりますのじゃ。ちなみにマテリアル界の地球と似た世界…海と大陸にわかれております。しかし大陸はたった一つ。エルフ族やドワーフ、妖精やホビットなど比較的善良な亜人が住むセラス地方と、ゴブリンやコボルト、オークにオーガ、レイス等の邪悪な者どもが住むギラン地方。二つの地方は大陸を隔てるガラリオン山脈で分けられております」

大臣が地図を開きながら説明してくれる。地図には歪な海岸線に囲まれた正方形に近い形の大陸。それが真ん中で広大な山脈にわけられている。南側がセラス地方。こちらは平原や森が多く、そのセラス地方の真ん中やや下にキュートス国が位置している。その南東に小さめな森が隣接していて、恐らくあのゲートがあったのはこの境目辺りだろう。他にも国とか集落とかが点在しているが、僕にこっちの国の言葉は読めない。対照的にギラン地方は山岳や沼地が多く、明らかに住むのには適していない。

「でも、この山脈完全には横断してませんよね？」

そう。東端と西端が僅かながら山脈が途切れている。

「そう、そこなのですじゃ。そこはリザードマンや獣人族が多く暮らしておる所なのじゃが、ギラン側からの侵攻にたびたびさらされております。彼らが度々凶暴な種族に見られるのは、ギラン側の影響を受けやすいという理由もままあるのじゃ」

…ということで、こちらの世界もちゃんときな臭い感じがプンプンするようで。もう僕は巻き込まれないように祈るばかりで…無理だろうな。なんかそういう悪い予感がビンビンしてる。悪い予感ほど当たるよね。うーん…こっちの世界との関わり方もちょっと考えないといかんかもな。

「そして残りの星は、天界と魔界。まぁわかりやすく言うと天国と地獄じゃ。こちらは完全なアストラル界で、霊的、または精神的なもので構成される世界じゃ。こちらの解説は…まぁ追々話そうかの」

ということで、ひとまずこっちの世界…半マテリアル界のことはだいたいわかった。ちなみにセラスとギランの争い事関係についてちょっと聞いたが、山脈を越えたり迂回したり、ちょいちょいこちら側に攻めてきてるらしい。この国からも、軍を派遣したりして応戦してるらしい。ますます持って不安なんだが。ただでさえも特異な属性持ってるらしいし。

「さて、いったんお昼にしましょうかの？昼食の時に王女様方が街を案内したいと申しておりましたので、ごゆるりと楽しんでくだされ」

なんか至れり尽くせりで申し訳ない。…が、僕もこっちの貨幣とか勿論持ってないので甘えることにする。執務室に迎えに来た王女様と王子様は、昨日と違い割とカジュアルな服装をしていた。それでも何か雰囲気が違うのは、やっぱり王族効果なのだろうか。

「ほら、アキラ。早く行こうよっ」

僕の腕をグイグイと引っぱるエリー。なんでこんなになついてくれてるんだろう、この子は。

城下町はやっぱり賑やかで、見ていてこっちまで元気が貰えるようだ。自然と笑顔になる。

「あら、エリーちゃん。皆でお出かけかい？おや？そちらさんは…」

城から出て数百メートルといったところで、恰幅のいいおばちゃんがエリーに話しかける。

「はい。ある事情で昨日マテリアルから来た、アキラ様です。今日は是非我が国の街並みを見て貰いたくてご同行してもらってます」

セリーヌが先んじて説明する。長女らしい、落ち着いた声つきだ。昨日のアレは忘れてあげたほうがいいのだろうか？

「おやおや、それはご苦労様だねぇ。アキラさんと言ったかい。何か食べて行くかい？」

普通は異世界人って多少は怖いもんではなかろうか。おばちゃんの豪気な笑顔にこっちが驚いた。

「よろしければ是非…でも」

「でも、なんだい？」

「怖くないんですか？異世界のよくわからん人種の人間と接するの」

実際、僕は少し怖かった。本とかでイメージはあったが、事実はわからないものだ。僕の世界の本は、あくまで創作やイメージってだけだし。それに、人は自分たちと異なるものは排除しようとする心理も働く。所詮僕はここでは、異端なのだ。

「やだねぇ。今朝、ベインが来て言っていたよ。素晴らしい友人が出来たって。たぶん君のことじゃないかねぇ。あんなに楽しそうなベインは久しぶりに見たよ。それにエリーちゃんのお気に入りなら、悪い人間なわけないさね。さぁさ、座った座った」

「あっ…ありがとう…ございます」

予想外にかけられた温かい言葉に、不覚にも胸を打たれた。オープンカフェのように外に配置されたテーブルに座り、おばちゃんが腕によりをかけたという食事を口にする。

「やっぱりカレンおばさまのご飯はいつ来ても美味しいわね」

「うん…家庭の味ってこういうものなのかもな」

「アキラ、美味しい？」

王女様三人が思い思い口にしながら食事を頬張る。あくまで、上品に。

「あぁ…すごく美味しい」

「良かった。アキラ君も少しはこの国を気に入って貰えたかな？」

僕の隣で食べている、アレン王子がニコニコしながらこちらに顔を向ける。穏やかな、本当に優しげな笑顔だ。

「えぇ。ありがとうございます。こんな、異邦人の僕に優しくして貰って…正直、少し離れがたくなってます」

温かい食事に温かい人達。こんないい国他にはないと思う。世界がこんなに優しい所ばかりだったら、どれだけ幸福なことか。

「おや、アレン王子様。先の先遣隊、誠にお疲れ様でございました」

鎧に身を包んだ、いかつい兵士が王子に話しかける。胸当てに綺麗な装飾をしていることから、もしかしたら騎士かもしれない。

「いえ、簡単な任務でしたから。次週の遠征もまた、よろしくお願いします」

王子が爽やかに会釈すると、騎士は低頭して辞した。

「アレン王子。先遣隊、遠征って…？」

「あぁ、王国騎士団ですよ。先日ギラン側からの襲撃があった、山脈の麓の村へね」

「アレン兄さんはね、騎士団の部隊長さんなんだよっ」

「エリー…部隊長じゃない。正確には小隊長」

「でも、アレン兄様はよくやってらっしゃいますわ」

「王子が軍に出るほど…戦況は酷いんですか？」

アレン王子はキュートス王家の唯一の息子だ。もし何かあったら、それこそ国の一大事だ。その王子が戦場にでなければいけないほど、芳しくないのだろうか。こんな優しげな王子が戦場に立つ姿など、出来れば想像したくない。

「いや、キュートス家は必ずしも男系で世襲しているわけではないからね。もし僕に何かあっても、大したことではないよ。戦況は、可も無く不可もなくってところでしょうか。油断はできませんが」

「何かあったらなどと、縁起でもないこと言わないでください！」

ディーン王女が突然声を張る。怒声に近いそれに、僕と王子が一瞬固まる。

「ほらほらディーン、そんなに大きな声出さないの。ごめんなさいね、アキラ様。この子ったらいつまでも兄様離れできなくて」

「い、いえ…」

実際、物静かなディーンの意外な一面に驚いたが、本当にこの兄弟は仲がいいんだろう。見ていて微笑ましくなってくる。いや、ウチも仲悪くはないんだけど。

この国に対する情を深めてしまった昼食後、僕は再び執務室へ。

「お昼は楽しんでいただけましたかな？」

「えぇ。とても有意義に過ごせました」

「それはなにより。では、午後からは魔法について少し。昨日おわかりの通り、アキラ様は土と時の魔法属性をお持ちです。魔法とは魔力…つまり己、もしくは周囲の魔素を練成して顕現する力です」

向こうの世界では好んでそういった作品に触れていたので、大体のイメージはつく。

「そこで必要なのは精神力と想像力。基本的にそれだけです」

「えっ…それだけ？」

意外と単純なそれに、思わず拍子抜けしてしまう。

「えぇ。それだけです。詠唱もとくに必要ありません。ただ、一部の召喚魔法等は、召喚するための魔導的なチャンネルを開く為に多少の詠唱と、多大な精神力が必要になりますが。中には、好んで詠唱を行う者もおりますが、いわば集中する為の個人的な儀式のようなものですな」

なるほど…なんとなくわかったような…たぶん。

「アキラ様の土属性の場合、例えば回復魔法ですな。その場合、怪我などはそれが完治した状態を思い浮かべてその部分にアキラ様の

魔力を送り込めばいい。それだけです。実際の体内組織のイメージまで出来れば完璧でしょうな」

ぬ…精度が高い魔法には、それなりの知識が必要ってわけだ。ゲームで高度な魔法ほど中盤以降にならないと覚えられない理由がなんとなくわかった。

「実際やってみるのが一番わかり易いでしょう」

そう言うと、大臣は懐から出したナイフで軽く自分の手の甲に傷をつける。薄皮が裂けただけだが、うっすら血が滲んでいる。

「ちょっ！何やってんすか！？」

「さぁアキラ様、早く。わしの属性は雷ゆえ、自分で回復は出来ませぬ」

意外な行動にテンパるが、なんとか落ち着かないと。

「そうじゃ。大事なことは先ず落ち着く事。そして、イメージじゃ」

深呼吸して、大臣の傷を凝視する。そして、傷が治っていく、イメージ。

「手をかざしてくだされ。アキラ様の手から、魔力が伝わるイメージ。そして、傷を癒すイメージを」

言われた通りに手をかざす。手から温かい何かが放出され、大臣の傷口が徐々に小さくなっていく。完全に塞がるのを確認すると、ドッと疲れが押し寄せるのがわかった。

「初めてでこれは大したもんですじゃ。まぁ、アキラ様ならお出来になると信じておったがのう」

カッカと笑う大臣。このジジイ、Ｍっ気でもあんじゃねぇか？

「疲れたであろう？しかしいずれ慣れますゆえ安心してくだされ。もしかしたら、時の属性を持つアキラ様なら、もっと高度な回復魔法も編み出せるかもしれないのう。それも、我々の理解よりもっと高みにある…」

「いや、買い被りすぎですよ、大臣」

でも、おかげで魔法を行使する方法は大体わかった。

「しかしアキラ様。アキラ様の世界には魔法という概念はありませぬ。概念とは理。魔力という概念が存在しない世界では、魔法は使えませぬゆえ、お気をつけくだされ」

勿論。向こうで魔法なんか使ったら何を言われるか、何をされるかわからん。つうか、黄色い救急車呼ばれんだろうなぁ。

「ただ、ゲートを開いてこちらに働きかけるようなことは可能じゃ。特定の場所で魔力を行使すればゲートが開きます。例えば、アキラ様とリーナス様がお会いになった所。あそこがそうじゃ。さきほども申し上げたとおり、イメージじゃ。そちらとこちらをゲートで繋ぐという、イメージ」

なるほど。こちらにはまた来ることもあろう。そのときに自分の意思で来れるというのは助かる。

「ときに大臣…この指輪、向こうでは結構不便なんですけど…なんとかなりませんか？」

「…なんともなりませんなぁ」

二人で苦笑するしかなかった。

一段落ついたところで、一旦もとの世界に帰ることにする。時間は留めてあるけど、これ以上今こっちにいたら、向こうに帰った時に感覚が麻痺してそうで怖い。自分の世界での日常、こっちの世界の人情や戦が起きているという事実。自分の秘められた力…考えたらキリがなさそうだが、とにかく受けた温かな好意に少しでも報いられたらと思う。そして幸か不幸か僕には非凡な力が備わっている…らしい。否が応にも巻き込まれそうな、もはや確信がある。マテリアル界とエーテル界。関わりはまだ始まったばかりで不透明だけど、なんか自分も大きく関与しそうで溜息が出た。僕、普通のサラリーマンだったよなぁ？言葉にして、一応確認してみた。

～第四話～キュートス国、二日目（後書き）

さて、ＰＶアクセス２００突破とユニークも６０越え、本当にありがとうございます。なんか半端な所でのご挨拶になりましたが、たくさんの人が見てくれているという実感で、いやはやなんとも。これからもよろしくお願いします。あっ、ご意見とう遠慮せずにドンドンください。読みづらいでもつまんないでも氏ねでもなんでも喜んで受け付けます。…ではではまた次話で。

～第五話～久しぶりの日常（前書き）

こんばんわ。毎度おなじみ白カカオです。今日は気分が乗ってるのでもう一話掲載します。…ホントは体調の問題で運動が出来なくて時間があるだけなんですけど。ともかく、お楽しみいただけたら幸いです。

～第五話～久しぶりの日常

…世界を渡ったときと同じようにゲートを渡り、一日ぶりにこっちの世界に帰ってきた。けど大臣の言う通り、車に残した携帯を見るにまだ『あの日』の日付と変わらなくて。夢幻だったのではないかと思わせる。しかし指で自分の存在を主張する蒼と白の指輪と、

ーーーこれを持っていきなさい。これがあれば、今度こっちに来る時は何も怪しまれず城まで来れる。

と帰り際に国王から渡された書状が現実であることを実感させる。現実…なんだよなぁ。僕は本当に、向こうの世界に行ったんだなぁ…。

落ちつけず、収拾がつかない脳内をリセットするために、もう一度、今度はあまり好まないブラックコーヒーと、懐から煙草を取り出し車のシートに体を沈める。流れてくる音楽に耳を傾け、やっぱりせめて微糖にすりゃ良かったかなぁと今更な後悔を思い浮かべる。一思いにコーヒーを全部のみ、煙草で口直しをしてエンジンをかけるまで早三分。そして車を走らせ家に到着するまで僅か五分足らず。夜にこっそり向こうの世界に行くにはちょうどいい位、近すぎるよなぁ…ゲートの発現ポイント。駄目だ、どうしても向こうの世界に思いを馳せがちだ。それくらい向こうの世界が居心地いいというのも事実だけど。

「おかえり。あら？何それ」

玄関に入ってすぐのキッチンで、母の里美が晩飯を用意していた。肉の焼けるいい匂いがする。

「指輪」

何故かそっけなく答えてしまう。

「見ればわかるわよ。何？誰かから貰ったの？」

「いや？たまたま拾って興味本位に嵌めてみたら抜けなくなっただけ」

…間違ったこと言ってないよな？

「ふーん。別に恥ずかしがらなくてもいいのにね。アンタももう結婚してもおかしくない歳なんだから。アンタの同級生の○×君もこないだ結婚したってね」

「はいはい、そろそろ耳が痛くなってくるから止めて。泣くよ？」

その話は一昨日も聞いた。ちなみに地味婚だったから式がなかっただけで、決して式に呼ばれなかっただけではない。…同窓会、もう何年も行ってないけど。

「アンタまだ彼女もいないもんねぇ」

二個上の姉貴、美月姉さんがリビングであぐらかいてテレビ見ながらビールをかっくらっている。夏前のそろそろ暑くなってきた時期だけど、タンクトップに短パンはどーよ？

「無駄口叩いてる暇あったら、家とはいえその格好なんとかしたらどうよ？晴彦さん見たら腰抜かすぞ？」

「押し倒されるかもねぇー」

「聞きたくない。身内のそんな話、聞きたくない」

「アンタもまだガキねぇ」

「ＤＡ☆ＭＡ☆ＲＥ」

お袋、我関せず。ちなみに晴彦さんとは姉貴の新しい彼氏。たまに一緒に飲む程度には僕も仲がいい。なんでこんな女がいいんだか。悔しいけど、お袋譲りで顔はいいのは認めるけどさ。

「そういや親父と兄貴と順子は？」

「お父さんはまだ仕事。兄さんもじゃない？順子はまだ部活」

「そっか」

昭彦兄さんは地元の地銀で働いている。家持ちだが、奥さんが身重で実家に帰っているため、今は実家に戻ってきている。神谷家の初孫だけあって、厳格な親父の頬が日に日に緩んでいくのが見て取れる。ちなみにこっちは親父譲りのクソ真面目。順子とは妹でただいま高三の受験生。僕と同じ高校で、特に力を入れている陸上部のホープで、最近はインハイがかかった地区大会が近いので遅くまで部活にいそしんでいる。クソ真面目な兄貴にちゃらんぽらんな姉貴、いつまでもふらふらしてる僕に素直で真っ直ぐな妹。なんとバランスのとれた四人兄弟だろうか。これも親父の力とそれを支えるお袋の良妻賢母っぷりの賜物だ。何不自由ない生活には感謝せざるを得ない。しかしなんで僕と姉貴みたいな人間が育ったのか。

「そこ、姉貴は余計だよ」

はいはい、人の心を読まないでね。僕はたぶんアンタに影響されたんだろうよ。

着替えようと二階の自室に上がろうとしたとき、

「ただいまぁ」

妹が帰ってきた。ジャージ姿だが、そこに女の子っぽさが損なわれないのがこの歳の女の子の役得といいたらいいのだろうか。

「姉ちゃんまたそんな格好してぇ。男の人がいるんだから少しは遠慮してよ。兄ちゃん今彼女いないんだから」

「ほっとけよ。それに間違っても身内にそんな劣情は湧かんから安心しろ」

まぁ本音は思春期の時は多大な苦労を強いられたけど。…顔の部分は想像力たくましくグラビアアイドルに挿げ替えて。

「あんたのブラコンっぷりも相変わらずだねぇ二人して似たようなこと言って。晶が彼女連れて来たときに慰めてあげたのは誰だっけなぁ？アンタの大好きなお兄ちゃんも、もう女とあんなことやこんなことを…」

「あーあー！聞きたくない！そういうこと言わないのっ！私だってあの時はまだ子供だったんだから…」

「ほぉう…そろそろ男の味でも知ったか」

「知らないもんっ！姉ちゃんと違って軽くないしっ！」

「僕…居づらいから部屋に戻るわ」

二人の色々と…一部世間的にまずそうな会話に疲れ、自室に戻って部屋着に着替える。たしかに僕でもわかる順子のあからさまなブラコン具合には頭を悩まされる。僕が例の彼女と別れた時は訳も聞かず彼女を責める程の『お兄ちゃん至上主義』には兄貴として困った。最近ますます可愛くなってきたし。僕も大概に兄馬鹿なのだろうか。…間違っても血の繋がった劣情を催すほど愚かではないし。念のため断り。

しかし部屋に戻りパソコンからお気に入りの曲を流しゆっくりすると、今日のこと…キュートス城の事を思い出す。賑やかに、穏やかに流れるキュートス城下の平穏。ギラン側との諍い。エリーや皆の顔を思い出す。思い出しながらベッドから体を起こすと、

「兄ちゃーん！ごはーーん…」

Tシャツにボクサートランクス一枚の僕の視界に、順子が飛び込んできた。順子の瞳にもこの格好の僕が映っているのは明白で…

「服着ろーーーー！！」

手に持っていた漫画を思い切り投げられた。それも、昨日僕が貸したやつ。…角が当たった。痛い。

「ごめんなさい…」

順子が殊勝に謝りながら箸を進める。

「いいけどさ、ノックはしような？それと…部屋ん中だからそこは自由にさせてくれ」

…別にナニしてたわけでもないし。

「あっ、それあたしにも貸してよ。〇ンピース」

「…自分で買えよ、社会人」

「アンタ持ってるなら、借りたほうが無駄が無いじゃない」

まぁ、そうだけどさ。順子よりもタチが悪いことに声もかけずに入ってくるアンタが毎度部屋にいきなり来るのは心臓に悪い。律儀にそういうマナーを守ってるのが馬鹿馬鹿しくなってくる。いきなり入ったとこで叫ばれるのは目に見えてるんだけど。なんでこんな肩身狭いんだろう？

「ごちそうさま。なんか疲れたから風呂入るわ」

「はいはい。食器ちゃんと流しに入れなさいよ」

「わかってるって」

「あと洗濯物は」

「洗濯機の中、でしょ。わかってるって」

お袋の子ども扱いをさらりとかわし、着替えを持って風呂に入る。湯船に浸かると、疲れが一気に毛穴から抜け出す感じがする。日本人でよかった。

「ダビデの六星環…か…」

左手をかざし、中指に嵌まって抜ける気配のない指輪を眺める。幸せな家庭が待ってるこっちの世界。異端の僕にも優しく接してくれる向こうの世界。その世界で恐らく今も燻っている戦火。たった一日半の滞在だったが、他人事とは思えないほど揺らいでいる僕の心境。あの国に何かあったら、果たして僕はどっちをとるんだろう？おそらく向こうをほっておける程、僕は薄情者ではないのはわかっている。それに、こちらと一番外交があるキュートス国に何かあったら、こちらもただではおけないだろう。

「なんだか、厄介な事になったなぁ…」

考えすぎで長湯になった僕は、ぶくぶくと湯に沈んでいった。

…火照りを冷ました僕は、腰にタオルを巻いたままに冷蔵庫からビールを取り出す。これは姉貴が買ってきたビール、つまりギッて飲んでいるのは秘密だ。どうせバレてんだろうけど。

「また兄ちゃんそんな格好で…」

タオルを持った順子が仁王立ちで呆れている。

「風呂上りのビールは正しい日本人の習性だろ？」

「あと野球中継に枝豆もね」

「なんだ、わかってるじゃないか」

「まだ夏じゃないし、野球もやってる時間じゃないけどね」

「お前は今からか？」

「うん、課題、なかなか終わらなくて」

我が妹ながら、感心するほど勤勉だ。とても僕と血が繋がってるとは思えない。

「明日も学校あるんだから、早く寝ろよ？」

「わかってるよ。…おやすみ、お兄ちゃん」

「あぁ、おやすみ」

部屋に戻ると、僕の方はガタがきていたらしい。一瞬で眠りにつく。の〇太もびっくりだ。

ーーーるじ。我が主よ。

暗闇の中、誰かの声がする。自分でもわかる。明らかな明晰夢。男の声が、僕を呼んでいる。

「誰だ…？」

ーーーようやく応えてくれたな、主よ。我は指輪の意識。汝の僕なり。

「ダビデの六星環の…あぁ、じゃあダービーか」

ーーーいきなり妙な呼称で呼ぶなっ！…まぁいい。幾千霜と時を重ねてきたが、汝のような主は初めてだぞ。それに…名を付けて貰うのは意外と悪い気がせんしな。

「じゃあお前は今日からダービー。決定な」

いかにもタキシードが似合いそうな紳士な声だし。是非ギャンブルで勝負してみたい。

ーーーところで、主は驚かぬのか？

「んっ？何が？」

ーーーいや、我が話しかけていることに。

「あぁ、魔法を一度使ったことで僕の体に魔力の回路が出来たとか、寝てて意識がそっちの世界に傾いてるからとか、そういう事だろ？」

ーーーぬっ…逆に我が驚くべきことだが、両方正解だ。

まぁ、お約束みたいなもんだし、キュートスに行って、魔法が実在する世界に行って、僕の中の常識もかなり緩くなってるみたいだし。

「で、今日はどしたの？はじめましての挨拶かなんかか？」

ーーーそういうもんだな。それと我の昔話も交えてな。…我は魔導具が幾年もの月日を経て意思を持つようになった存在。魔導具というより、神器（アーティファクト）と呼んだ方がいいくらいの上位に位置する装備品だ。

「…自分で言うか、上位って」

ーーーゴホン。腰を折るでない。我を使役するものの中には、我の力に酔い、心を乱し、悪道に落ちた者もおる。汝は愉快で気のいい主だ。そうはなって欲しくない。

「あぁ、別に身の丈に合わない野望だとか持ってないから安心しな」

ーーーならよいが。これは我の願いと忠告だ。それに覚えておくといい。汝には大抵のことは成し遂げてしまえる力があることを。汝には大切なものを守る力がある。力に溺れるなよ。

「そうならないって思ってるから、賊に従わず、僕を選んだんだろう?」

ーーー半分外れだが、そういうことにしておこう。

「半分って…もう半分はなんだよ?」

ーーーノリと、汝の強い魔力に引かれてあの場でゲートのリンクが開いたという、偶然だ。

「お前も大概にいい性格してるよ。叩き割ってやろうか」

ーーーすまんかった。勘弁してくれ。ぬっ?夜明けも近いようだ。そろそろ奥に引っ込むとしようか。

「えっちょい待て!もうそんな時間かよ!」

うんともすんとも言わずに意識の奥に引っ込んだダービーと、思

わず目を覚ましてしまった僕。なんだろう、全然寝た気がしないのに目が冴えてしまった…出社まで時間は有り余ってるし、どうしよう…

「アンタ。クマ凄いよ？」

朝食の時間に怪訝な表情で人の顔を覗き込む姉貴。

「何故か全然疲れが取れなかったんだよ…」

何故かは言わないけど。

「大方やらしいサイトでも見てたんじゃないの？」

「お姉ちゃん！」

隣で飯を食ってる順子が噴飯する。

「…氏ね。仕事行ってくる」

出勤する前に、またコーヒーのお世話になりそうだ。今度は微糖にしよう。

「あ、晶。父さんの弁当も持ってって」

…はいはい。

「あれ？神谷さん、今日は早いッスね。昨日のが堪えたんすか？」

後輩の水谷が防塵服に着替えながら喧嘩を売ってくる。

「お前のその元気を分けてくれよ」

「ハッハッハ。晶、今日は早いな。昨日の説教が身に沁みたか」

…クソ親父め。水谷と同じことを言うな。

「今日は早く目が覚めたんだよ。それよりまた弁当忘れてったぞ」

赤い包みにくるまれた弁当を渡す。

「そうか、すまんな。里美に愛してると伝えておいてくれ」

「…自分で言えや」

水谷が離れたらこれかよ。厳格な社長のこんな一面、絶対会社の人間には見せられんだろうなぁ…つうか僕がやだ。溜息をつきながら自分のデスクに戻り、書類を片っ端から片付ける。パソコン脇に置いた、栄養ドリンクはほっといてくれ。

「神谷さん、部品のチェックお願いします」

防塵服を着た、笹野が製品を差し出す。

「あぁ、んー…」

僕も手袋を嵌め、細部まで覗き込む。精密器部品につき素手厳禁。

「四番と七番のプラグが曲がってる。それ以外は大丈夫」

「はい、すぐに直してきます。あれ？指環？」

手袋を外した僕の指輪に目ざとく気づく。

「あぁ、道端で見つけて、興味本位で嵌めたら抜けなくなって」

「私、対処法知ってますよ。手伝いますか？」

「いいよ、割と気に入ってるから」

「綺麗な装飾ですよねぇ」

「まぁ、あははは…」

おい、やっぱ目立つぞ、お前。なんとかならねぇの？

ーーー主が望むなら、錯覚と催眠で周りに見えなくすることは出来るぞ。

「うをっ！？」

応えやがった。周りに見られたじゃねぇか。

ーーーすまぬ。ただ主が話しかけてくれたのでな。チャンネルが開いたのだ。

なんだ、寂しがり屋か、お前。

ーーー……

まぁなんだ、悪かった。しょげるな。さっきの、頼むぞ。

ーーー承知した。

はぁ…。

慌しくも平和（仕事中はある意味戦場だが）な日常を終え、今日も帰路につく。改めて、これが僕の日常なんだなぁ思う。

ーーー向こうにも、顔出そうかな…

忙殺され、ようやくキュートスの事に気を向けたのは、アレから三日後の週末だった。

～第五話～久しぶりの日常（後書き）

さて、第五話でした。いつの間にかアクセス数も結構伸びてて驚いてます。本当にありがたい…何度も読んでくれている方、いましたら感謝の言葉もありません。もっと面白く、読みやすい話がかけるように精進します。

～第六話～キュートス国、再び（前書き）

こんにちわ。あなたの白カカオです。…すみません。第五話読み返して見たら、誤字とか酷いのなんの…気がついた範囲で加筆、修正しました。

～第六話～キュートス国、再び

金曜日。月末前の週末の追い込みに追われた僕は、生気の抜けた目で車を走らせた。自分でも気分で運転技量ががらりと変わる自覚はあるので、例の自販機で一休み。ここまで来れば帰った方が楽なんじゃないかという意見もあるが、気分の問題だ。寄り道して帰るということに意味があるのだ。

「なぁ、ダービー。後で向こうに顔出そうと思うんだけど、どうかな？」

ーーーいいのではないか？主よ。汝の欲する事をせよ、と、昔の偉人も言っておろう？

「なんか言い回しが微妙に違う気もするけど。そしてお前に昔のとか言われてもなんか違和感ある」

ーーーほっといてくれ。しかし主よ。どういった風の吹き回しだ？

「あぁ、ただなんとなくだ。それに、ちょくちょく顔出してあっちのこと勉強しないと、いざという時に困る」

そう。実はもう覚悟は決めていた。やっぱり難儀を抱えている者を放っておける程、僕はドライにできてない。お人好しすぎるとも言われるが。それにどちらにせよ、僕にいずれ白羽の矢が立つこともわかっている。こっちの世界では一般人のサラリーマンだが、向こうまで含めると『ただの』とか『一般人』とかそういう素晴らしい言葉は効力を失ってしまう。なんせ国王のお墨付きだし。嬉しくないけど。

ーーーそうか…大した心がけだ。

「なに、後で面倒になるのが嫌なだけさ」

…というか、半分はお前のせいだ。ほぼ毎晩人の夢に邪魔しにきやがって、さらに人類や亜人や神々の闘争の歴史なんて見せられたら嫌でも覚悟が決まる。僕はそういう難儀な性格なのだ。最初は流石にびびってたけど。つうか確信犯なんじゃねぇか？こいつ。

ーーーならば我はそれまで麗しい汝の姉君と妹君の姿を目に焼き付けるとしよう。キュートスに行けばまた麗しい姫君達も見れるしな。いやはや、汝を主に選んでよかった。

「しばらく寝てろ！この色情聖霊が！」

強制的にチャンネルを閉じた。僕の中の魔術回路が相当緩くなったおかげで、暇人（？）なこいつはポンポン外に意識を向けて来ているのだが、力をつけたのはこいつだけではない。こいつとの接触で魔術的思考がすくすく育った僕も、自分の意思でチャンネルの開閉位はできるようになった。…にしてもこいつ…ただの変態ではなかろうか？順子なんてまだ未成年だぞ。

ーーーなに、そんな瑣末なことは主の国の決まりごとにすぎ…

「引っ込んでろ！！」

こいつ、本当に凄いアイテムなのか？

夕食を終え、トレーニングウエアに着替えた僕は、日課にしているロードワークに出た。田舎は車社会だから、意図的に運動しないと簡単に豚になってしまう。よくここまで体絞ったもんだ、本当に。数キロの道のりを歩きつつ走りつつ、ゲートが開き易いという自販機前。

「さて…行くか」

ひとりごちて虚空に集中する。魔力の練り方は、癪ながらダービーのおかげで大分慣れた。

ーーー主のこの『とれーにんぐ』とやらもな。健全な魂は健全な肉体に宿る、とはよく言ったものだ。だがゲートの顕現はまた力の種類が違うからな。どれ、我も手を貸そう。

それは助かる。ちなみにトレーニング中こいつに話しかけて暇を潰してるのは秘密だ。主にこいつに。癪だし、調子こきそうだし。

無事ゲートが開き、数日ぶりの異世界旅行。ダービー曰く、正確には次元の位相が違うだけで隣合わせに存在している世界ゆえ、異次元と表現しても差し支えない、そうだ。異次元旅行か。そういやハ〇ヒで異次元人だけまだ出てなかったよな…たしか。…とか考えているうちにゲートの出口へ。そして懐かしのキュートスへ…

「アキラーーーー!!」

ぶっっ!いきなり鳩尾にタックルを食らった。襲撃かと思ったらエリーだった。とりあえず、痛い。悶絶する時間くらいくれ。

「ってぇ…つうかなんでここにいるんだ?もう結構な時間だぞ」

確か向こうを出たのは２２時を回っていたはずだが。

「なんとなくアキラの魔力の気配がしたから抜け出してきたっ！」

犬じゃあるまいし…。つうかエリーでもわかるなら国王もわかってそうな気が…

「エリー！アキラ君やーい！」

ほら、やっぱり。子供か。

「やっぱりアキラ君か。待っておったぞ。さぁ、とりあえず我が城へ」

「展開はやっ！いや、こんな夜分遅く悪いっスよ。今日は適当に野宿して、明日日が出たら伺います。にしても国王まで…」

「アキラ君の匂いがしたのでな」

匂いて…なんかエリーのときよりやだな…。つうか時間まで計算に入れなかったのは流石にまずかった。科学が発展していないこちらさんはもう寝ててもおかしくない時間だ。なに、こんな暖かい夜なんだ、風邪も引かないだろう。

「いいのかな？アキラ君。冥の刻はすなわち地獄の時間。悪霊（レイス）なんかはこの時間活発に動き回るからのう。実戦経験もないのに、いやいや大した男だ…」

「泊めてください国王様」

それは流石に泣きが入る。幽霊こあい。

「さぁさ、参ろうか」

「アキラ、汗臭いよー？」

三人仲良く城を目指す。汗臭いなら嗅がなきゃいいのに。

「あぁ。あっちの世界で運動してきたからな」

「うむ、日々の鍛錬を欠かさないとは見上げた騎士精神よ。他の騎士共にも見習わせたいもんだ」

待て…？僕は騎士じゃねぇぞ？

「湯浴みでもするがよい。そのままでは体調を崩してしまう」

「私も一緒に」

「だが断る」

このガキんちょめ。

夜分遅くに訪問し風呂を貰い一泊させて貰うなどと非常識にも程がある僕は、朝食までご列席させて貰った。なんというＶＩＰ待遇。

「ときにアキラさん？今回はどのような事由で？」

王妃がこないだと同じ微笑で僕に尋ねる。まぁ深夜近くに突然訪問したとなっては聞かない方がおかしい。

「勿論、私と遊びに」

「違います」

ここの国王、こんなんで国統治できてんのか？

「違うよねー。私と遊びに」

「それも違う」

馬鹿親子…。

「此度は一つ相談と…この世界についてもう少し教えていただけたらと思い参りました」

「ほう、相談とな…早速聞こうか。必要なら人払いもするが？」

「いえ、このままで結構です」

「しかしなんだ。急になんだ改まって…」

「真面目な話だからです」

流石に普段の調子でこんなことは話せない。

「国王、僕も自分の世界に帰って色々考えました。この世界のこと、僕の世界のこと、自分自身のこと…そして一つ、決めたことがあります」

「結論を聞こう」

国王がシリアスモードに入ってくれた。良かった。

「僕を、この国の軍に入れてください」

頭の中で『僕はエ○ァンゲリオン初号機パイロット、碇シ○ジです』とか先に集中力が切れたり。決して表情には出さず。

「なりませぬ！」

予想外に、ディーン王女が反論する。

「アキラ様はいかに素晴らしい素養をお持ちであれ、あくまで客人です。この国の、この世界の問題はこの世界の住人が解決すべきです」

渋い顔の国王。

「ディーン王女様、お聞き下さい。前回こちらに訪問したときに感じました。この国はなんと温かい、素晴らしい国だろうと。そして僕はこの国が好きになりました。しかしこちらの世界ではギラン地方からの侵略を度々受け、少なくない数の犠牲がでていることも知っています。僕が希少な魔力を持っているなら、それで少しでも多くの悲しみや苦しみが減らせるなら…僕は力になりたいのです」

我ながら優等生臭い回答だなぁ。本心だからどうしようもないんだけど。

「しっ、しかし…」

「それに、キュートス国はこちらの世界の盟主であり、この世界と僕の世界との重要な拠点です。もしこの国に何かあったら、僕の世界の平穏だって危ぶまれるでしょう」

ここで利己的な見解。そして…これが恐らくトドメの一言。

「勿論戦は怖いですが…僕に踏み出すきっかけをくれたのはこの指輪でした」

「ダビデの…」

「六星環？」

王妃とセリーヌ王女が久方ぶりに口を開く。

「えぇ。向こうに戻ってから、こいつはよく僕に話しかけてくるようになりました」

しょうもない会話しかしてないけど。

「なんと…指輪の聖霊が…」

大臣が絶句する。

「大臣が、体を以て僕に魔法の使い方を教えてくれたおかげです」

何故そこで顔を赤らめるジジイ。僕の周りは変態だらけか。間違った事言ってないよねっ！？

ーーー主、類は友を呼ぶと言うぞ。

…黙れ、筆頭変態紳士が。

「そして聖霊が教えてくれました。僕には大切なものを守る力があると」

しばしの沈黙。昔からこういう沈黙苦手なんだよなぁ…

「うむ、許可しよう」

「「貴方（お父様）！！」」

「というより…こちらからもお願いする。どうか…この国に、この世界に手を貸してくれ」

「父上っ！」

アレン王子が頭を下げる国王に叫ぶ。

「アレン、お前も現場にいるならわかるだろう?今、決して押されてはいないが余裕もないこのセラスの現状を…。民を預かり、守る者としてこれは千載一遇の機会なんだ…なぁアキラ君。こんな私を、汚い人間（?）だと思うか?自分の為に、利用できる者は利用する。例え、それが外から来た友人だとしても…」

これにはアレン王子もぐうの音も出ない様子。現実を見てきたからこそ、閉口してしまう事実もある。

「いえ、国の頂点に立つ者として、当然の判断だと思います。それ

に、これは僕からの陳情ですから」

「ありがとう。アキラ君を護国騎士団の一員と認めよう」

「ありがたきお言葉にございます」

平伏してふと見上げると、エリーがドヤ顔で成り行きを見守っていた。

『全部わかってるもんねー』

と言わんばかりに。本当にわかってるのか？

「それと大臣、アキラ君はこの先この世界に滞在する事も増えるだろう。必要なこと、望む事は全て教えてやってくれ」

「仰せのままに」

これで（僕のせいで）長くなった朝食はお開きになった。

からのこないだと同じ執務室。あの（頬を染めた）表情の後ジジイと二人っきりはなんとなく嫌だったので、暇そうなエリーも誘ってお勉強会が始まった。

「とりあえず、こちらの時間の感覚とか日付について教えてください。まずはこっちの日常に慣れないと」

時間の感覚は重要だ。でないと昨日のようになってしまう。

「はいはーい。私が教えるー」

挙手制ではないんだが…元気な先生で何よりです。たぶんわしが育てたとか後で言い出すタイプだな。

「んとねぇ、まずは季節っ！四つに分かれてるの。『芽吹きの節』『緑葉の節』『紅葉の節』『枯葉の節』の四つっ！テストに出るよー」

テストすんのか？これ。にしても自然と調和するエルフらしい暦でわかりやすい。

「一つの節は十二週の曜から出来てるの。で、曜は六つ！『水』『金』『地』『火』『木』『土』」

神様は学ばなかったのか効率を覚えたのか、はたまたサボったのかこの世界をたった六日で作ってしまったらしい。どっちが先かは知らんけど。こっちは惑星の順番か。

「ちなみに金と木以外の四つの曜は、その名の属性が持つ作用が大きく影響を受けるのじゃ。満月は力がより大きく、新月は逆により小さくなってしまうので注意じゃぞ。月の周期は七日で一回りじゃ」

七日か…随分と早いんだな。

「へぇーそうなんだぁ」

知らなかったのか、『先生』よ。

「最後に一日の中の時間っ。『天』の時間と『冥』の時間ね。細かい時間は感覚だから気にしないでっ」

「ちょっ、そんな適当なのか！？」

「えぇ、エルフは寿命が長き故」

…そんな問題でいいんだ。

「では、次は我が国の軍についてじゃ」

「私わからないから任せるねっ」

ちょこんと僕の隣に座り直すエリー。聞いてもわかんないだろうけど、本人がいたいなら好きにさせてやろう。別に何も拙くないし。

「我が軍は『騎士団』と『魔術師団』の大きく分けて二つで成り立っております。この二つの総称が『護国騎士団』と呼ばれておるのじゃ」

ふむふむ…。

「これらはさらに、前衛と後衛の二つずつ、計四つに分かれ、陣形もこの四つの比重の違いで成り立っております。基本的には、前衛騎士団、前衛魔術師団、後衛魔術師団、後衛騎士団という順番の配置じゃ」

なるほど、サッカーみたいなもんか。ＦＷ、ＯＭＦ、ＤＭＦ、ＤＦって感じかな。前騎は突撃部隊、前魔は攻撃魔法及び魔法補助、後魔は回復と魔法補助、後騎は最後の砦ということらしい。

「さて…以上を踏まえてアキラ様、ご希望の配置はございますかな

？」

「はい、僕は後衛魔術師団を希望します」

「後衛か…確かに後衛なら前衛より命を危険に晒す心配はないですな」

「いえ大臣、僕はあくまでそんな消極的な理由で後衛を選んだわけではありません。僕の回復魔法は確かに後衛向き…ですが気持ちはあくまで『攻め』の後衛です」

思わずニヤリと笑みを浮かべる。決意を決めた日から考えていた構想が実現すれば、この国の戦をガラリと変えてしまうかもしれない。そう思うと、笑みを隠すことが出来なかった。

～第六話～キュートス国、再び（後書き）

さて、今回も説明回になってしまいましたが…思ったより長くなってしまいました。たぶんネタを挟まなければ多少は…そこは私の気分だったってことにしてください。なんという自分勝手。どうもすみませんでした。なんとこの話、書き上げるまで普段の一、五倍時間かかってます。なぜだぁ…

～第七話～いざ、魔術師団へ（前書き）

こんばんわ、早くも参上しました白カカオです。いや何があったって反響をくれた方々、本当に、本っっ当にありがとうございます！嬉しくて嬉しくてニヤケ顔が止まらないので、調子こいて早くも次話いっちゃいます！いっちゃうのは頭の中だけにしろとだれか止めてください…はじめましての方も、お楽しみいただければ幸いです。

～第七話～いざ、魔術師団へ

「それで、です。大臣？僕の後衛魔術師団入り、許可してもらえますね？」

絶句のまま固まった大臣に追い討ちをかける。貴方が国王の次に実権を持っていることくらい、僕の頭にはきちんと入っているのですよ？何せ、王族と昼夜つきっきりでいる官職なんて、貴方位だ。

「…この場ですぐ…とは参りませぬ。今一度、お待ちください。私めはあくまで魔法監督省の大臣。護国騎士団とは管轄が異なりますゆえ、魔術師団長とかけあって参ります」

そういうと、大臣はよろよろと執務室から出て行った。なんか、無茶言って悪いことしたかなぁと少し反省してみる。エリーはポカーンとしている。返事がない。ただのしかばね

「アキラ、魔術師団に入るの？」

エリーが曇りの無い瞳をこちらに向ける。初めて会った時は王族らしく振舞っていたが、こうして見るとまだあどけないローティーン（？）の少女なのだ。

「あぁ」

ニコっと笑って短く返事をする。

「でも、魔術師団だって、兵隊さんなんだよ？人（？）、殺すお仕事だし、もしかしたら殺されちゃうかもしれないんだよ？」

どうやら、今になってやっと僕が戦場に赴くことへの実感が湧いてきたらしい。

「あぁ。わかってるよ。僕はきっと敵を殺すし、殺されるかもしれない。だけどね、大切な人を守ることって、きっとそういう事なんだ。誰かを守る為には、他の誰かが傷つかなきゃいけない。そりゃ話し合ってみんなで仲直りできれば一番いいよ？だけど…全部が全部そうはいかないんだ。山脈の向こうには、こっちの人を傷つけようとする人がいっぱいいる。中にはいい人もいるかもしれないけど、僕にはそれがわからない。だから少なくとも、僕は僕の周りの大切な人たちを守りたいから、戦うんだ」

宥めすかすように、ゆっくりエリーに話しかける。今は全部わからなくても、一部だけでも伝わってくれればと。

「大切な人…？」

「うん。エリーや、国王様、王妃様にアレン王子、セリーヌ王女にディーン王女。大臣と、食堂のおばちゃんも、この国の人みんな」

「この国の人みんな？会ったことない人も？」

「うん。会ったことなくても、誰かを失えば誰かが悲しむから。それと、後僕の世界の家族や友達もね」

「うーん…」

エリーは少々消化不良を起こしている様子。まだ早いかな？こういう話題。

「エリーだって、家族とか友達がいなくなったらいやでしょ？」

「うん…」

「それと一緒さ」

「だったら…」

「んっ？」

俯いていたエリーが僕を見上げる。

「アレン兄ちゃんやアキラもいなくなるのも嫌。だから、戦争に行っても、絶対帰ってきてね？」

「あぁ。約束するよ」

じゃあ約束っと、不意打ちにアキラにキスする。ホント、マセガキだなこいつ。キスが持つ色んな意味、わかってやってるのか？つうか色々死亡フラグ立ててる気がするんだけど…気のせいだと思いたい。あぁそりゃもう全力でっ。

突然、バタンッと乱暴に扉を開ける音がした。

「ここか？大臣。騎士団に入りたいという人間のガキがいるのは」

「待たれよマドラ団長！そのものは我が魔術師団を希望されているという話ではないか」

「なぁに、非力なくせに戦場に立ちたいなんて命知らずのツラを拝みに来ただけだ。そうピリピリするなセラトリウスの爺さん。あぁ？こいつか？この真昼間から王女様と乳繰り合ってるこの坊主がそうなのか？」

こいつホントにエルフか？ってくらい筋骨隆々なおっさんと、白い髭を胸下まで伸ばした爺さんのご登場。なんか…テンプレ通りだ。わかりやすくていいけど。

「ちっ、乳繰り合ってなんかないもんっ！」

エリーが顔を真っ赤にして反論するが、そういうのは得てして逆の結果を生むんだけど…。

「まぁまぁ。アキラ様はエリー様のお気に入りじゃからのう」

ほら、そこの大臣ジジイが何の解決にもならんことを言う。

「そんなことは置いておいて、本当にしておるのう、指輪」

セラトリウスと呼ばれた爺さんが僕の指を見て目を丸くする。流れが変わったことに、なんとなくホッとした。なんでだろ？

「じゃあ、やっぱりただのクソガキではないんだな？」

マドラと言ったか？このおっさん。僕、もう2〇歳のそろそろおっさんの仲間入りする歳なんだけど…。まぁエルフは寿命が長いからそういうもんなのか。少し腹立つけど。

「だからそうだと言っておろうに」

大臣が頭を掻く。なんか…苦労してんだな。散々けなしてごめんなさい。そりゃ男色に走ってもたぶん文句は言われないよ。

「アキラ様？何か失礼なこと考えてませんでしたかの？」

おっと、顔に出てたか。

「声に出ておりましたぞ！？」

それは失敬。

「面白いガキだな。マリオンの爺さんや。こいつと一手合わせさせてくれんか？」

「何を言って「いいですよ」何ですと！？」

大臣の言葉より早く、僕が返事した。人間様を舐めてるおっさんに一泡吹かせたくなった。

「面白そうじゃないか。マリオンや、一つ許可してはくれんかの？」

「セラトリウス、お主まで…」

「魔術師に必要なのは冷静さと判断能力。…まぁ勝てるとは思えんが、その辺、じっくりと観察させてもらいたいのでの」

「よし！賛成多数で決まりだな。早速演習場へ行こうぜ」

マドラ団長が息巻いてノシノシ歩く。大臣、面倒ばっかかけてごめんなさい。
あっ

…というまに演習場へ。コロシアムのような丸い場内に、囲む観客席。…つうかまんまコロシアムだ、これ。

「ようし！勝負は簡単、どちらかが負けを認めるか、あるいは審判の判断でこれ以上は危険と見なされたら終了だ。異論はないな？」

「うん、それでいいよ」

ちなみに審判はセラトリウス団長。大臣は公平な判断が出来かねるということで、エリーと観客席へ。
…なんで満席なの？

「おぉぉ、アレが人間か」

「意外と小さいな」

「私人間って初めて見たぁ」

…どうやら僕が客寄せパンダだったみたいで。噂話に戸は立てられぬって言うからなぁ。つうか小さいって言ったヤツ、後で一撃かます。これでも日本人の平均ジャストはあるんだよ！…あくまでジャストだけど。

「アキラ君やーい！頑張れよー」

「なんでアンタまでいんだよ国王っ！！」

…この国、ホントに救う価値あんのか？

「じゃあ…そろそろ行くぜ？」

ゴング…があるかは分からないけど、合図も待たずにいきなりマドラ団長が駆け出した。これ、軽いめのスチールプレート借りたけど、やっぱ慣れないから動きづらい！

ゴウッと言う音と共に背後の地面がえぐれる。外した？…違う。わざとだ。証拠にこっち見てニヤニヤやらしい笑みを浮かべている。

「こんんのやろ…」

急いでその場を離れると、あくまで余裕しゃくしゃくと言ったところか、首と手首を鳴らしている。

ーーー落ち着け、主。興奮しすぎるな。

「わかってるよ！」

始める前は自分でも驚くほど落ち着いていたが、いざ蓋を開けると鼓動の早鳴りが自覚出来るほどあがっている。心の中で落ち着けと数度唱えながら相手をよく見る。さっきの攻撃をもう一回するとなると、あくまで直線運動だ。避ければいいだけだが、プレートの動きにくさに余裕を持って早く行動に出ると、進路変更されて追撃を喰らいかねない。見ろ…相手をよく見ろ。そして、自分の動けるギリギリまで見切って…

「今っ！」

サッと…とはいかず無様に転げ回りながらもかわすことに成功した。さっきまで立っていた所から土煙が上がっている。

ーーーよし、それだ！主よ。

「まだだっ」

土煙の中で動く影を見つけ、もう一度横に転げ回る。ワンテンポ遅れてもう一度轟音が鳴り響いた。

「ほう…二度目はともかく、三度目もよけたか」

「あいにく、視力だけはいいからね」

余裕ぶって見せるが、すでに肩で息をしている。プレート、マジ動きにくい。

「だが、よけてばかりじゃ勝負にならん…ぞ！」

「わかってるさ！」

ぞと同時に突っ込んできたマドラ団長と僕までの間合いに意識を集中させ、魔力を放つ。ぶっつけ本番だけど、大事なのはイメージならきっと上手くいく…ハズ！

ーーーズゥンッ！

と地面が響いて、高さ２ｍ半位の土の壁が出来る。質量保存の法則によってか、その全面と背面に深い堀が出来ていた。観客からど

よめきが起きる。ちょっと気持ちいい。

「思ったよりやりおるな。だが、俺の前では無駄だよ」

壁の向こう、マドラ団長の声が低く唸った。

「…拙い！」

言うが早いか、この日三度目の土の味を味わう。初めての戦闘での魔法の感動に酔う時間すら霧散させ、壁を爆散させたマドラ団長の恐ろしい笑顔が目に映る。

「ふはっはっは。本当に楽しいな、坊主」

うるせえ。こっちは死ぬ気でやってんだ。楽しむな戦闘ジャンキー。でも…

「やっべ。ちょっと楽しくなってきたわ」

どうすればこの化け物に膝をつかせれるんだろう？

ーーー主、いかんぞ。争いを楽しむような

「違うよ…」

ーーー何？

「殺す気なんてこれっぽっちもないさ。ただ…どうすれば一撃食らわせれるか、考えるだけでワクワクする。一撃、一撃でいいんだ。あいつのド肝を抜く、一撃があれば…」

ダービーとの会話の間にも、マドラ団長の攻撃は手を緩めない。進路の土をえぐり足場を崩し、突進の勢いを時の魔法で緩め、逆に自分の速度を加速させてもなお、マドラの攻撃は止まない。ところどころに傷を受け、体が痛みを訴えても、僕は笑うのを隠せない。そんなエルフの騎士団長と突然現れた人間のまさかの壮絶な『試合』に、観客席は静まりかえっていた。

「なぁ、おっ…マドラ団長」

「なんだ坊主?」

「そろそろ僕ガス欠なんだ。次で最後にしよう」

「根性なしめ。もうへばったか」

「うるせえよ」

そう。もう限界が近い。体の痛みはアドレナリンが誤魔化してくれているが、気力がもう限界に近い。あーあ…まだ一泡吹かせてないのに…。

「さぁ…来なよ」

「自分で動けぬか。しょうがない、これで終わりだ!」

マドラ団長の最後の一撃が来る。せめて、これを完璧に防いでこの試合を終わろう。…完敗だ。気持ちいいくらいの。

「っはあああぁぁぁ！！！」

人間、精一杯力入れると出る声ってやっぱこれなんだなとどこかで考えながら、最後の力を振り絞る。目の前にせり立つ、壁。

「馬鹿めっ！これでは最初と変わらんだろう！？」

「違う、違うよおっさん…今度こそ、怪我するぜ？」

僕が仰向けに倒れるのと同時に、鈍い音が耳に届いた。最初に土の壁でブラインドを作り、鉄製の胸当てとヘルムを変異させ内側に内蔵させた、特製の壁。マドラ団長のあの突進なら、死にはしないだろうがダメージは与えられるだろう。カウンターでドン。

ーーー主…主！よく戦った。見事であったぞ。

「へっ…もう精も根も尽き果てたっつーの…」

やけに印象的だったのは、澄み切った空。こっちの空も僕らの世界の空も、変わんないなぁ…って。

「勝負ありじゃ！勝者、マドラ団長！」

今、僕はさっきまで戦っていたマドラ団長の背中にいる。早い話が、いい歳こいておんぶされてるわけだ。本当は抗いたいが、そんな体力どこにもない。実際、最後の方は気力だけで戦っていた。

「のぅ若造」

「一応格上げ…されてんのか？坊主から若造」

「一応な。お前、ウチに入らねぇか？」

僕をおぶっているマドラ団長の頭には幾本か赤い筋が流れている。そうやら厚い鉄の板の部分にちょうど頭が入ったらしい。…偶然だけど。

「遠慮するよ。武器の扱いより、魔法の方が僕には合いそうだ」

「そうか…」

「それに敵が見当もつかないような魔法で痛い目合わせる方が、楽しいし」

「そいつぁいい性格してるわ。やっぱ魔術師向きだ、お前のひねくれ方」

「ひねくれとは失敬な！」

隣のセラトリウス団長が憤慨する様が、なんだか可笑しい。

「ちなみに聞く？僕がどんな隠し玉持ってたか」

「おうおう！聞こうじゃねぇか」

「あの土の壁に無数の棘を生えさせて…」

「えげつなっ！」

「なぁに、そんなもん俺が本気の大剣を持ってすれば…」

「のぉ、なんか、仲良くなっておらんか？あの二人」

間に入ったツッコミを虚しくスルーされ、国王御一行に話を向ける大臣。

「まぁ…いいんじゃないか？上手くやっていけそうではないか、騎士団と魔術師団」

国王が取りまとめた。珍しい事に。

「アキラの護国騎士団入り、これで文句なしだねっ？」

「うん、初めての実戦であの実力を見せつけられたらね…」

アレン王子が、あまりにも様変わりした演習場を思い出した。アレは…騎士と魔術師の戦いじゃない…ちょっと落ち込む王子だった。

何はともあれ、神谷晶、自分の意外な一面を発見し、護国騎士団入隊決定…。

追記

翌日、二人仲良く…もとい連帯責任で巻き込まれた魔術師団長と大臣の四人が黙々と演習場を直す光景が見られた。

「これ、兵士の基礎体力作りにやらせればいいのに…観客席で煽ってたんだし」

っと、晶の呟きに皆が気づかされたのは日が傾き、作業も終了間近のころだった。

～第七話～いざ、魔術師団へ（後書き）

ということで、いかがでしたか？初めての晶の戦闘シーン。…ごめんなさい、もっと上手く書けるように精進します。それとエリーがどんどんアホの子みたいになっていく…そして晶が最強系にズンズンと…罵声非難どんどんください、覚悟してます。…それではまた次話、お楽しみに。

～第八話～ども、新入りのアキラです（前書き）

こんばんわ、白カカオです。今日は会社＋バイトの久々のフル出勤でこんな時間になりました。お客さんが入って来た瞬間ガン見されたと思ったら高校の時の同級生でした。十年近くぶりなのによく私の顔がわかったもんです。読者の皆様は全話ガン見していただけると光栄です。

～第八話～ども、新入りのアキラです

ーーーかくして、後の大魔導王となる運命の星の下に生まれた天才魔術師、アキラの初陣は苦い敗戦となった…だが、彼の冒険は始まったばかりだ！頑張れアキラ！負けるなアキラ！

「すいません、恥ずかしいフレーズを枕元で熱弁するの止めてもらえますか？全然休めないッス。あと、途中の打ち切りエンドっぽいくだりもどうかと。クリエーターはちゃんと完結させますから」

「ぬっ？すまん」

最初のアレは国王の発言でした。僕の中で株が上がったり下がったり、やっぱり下がったり忙しいお人だ。疲れて寝ている横でこんな様子じゃ、そりゃメタっぽいことも言いたくなるさ。

現在、僕がキュートスに来て三日目、冥の刻夕暮れ。つまり自らめちゃくちゃにした演習場を直して、僕が今回の滞在で使わせて貰っている部屋で横になってすぐのあたり。夕食前に暇を持て余した国王が正しい意味で邪魔しに来ている。

「しかし、天才魔術師というのは本当だぞ？魔法にとって一番重要にして一番難しいコンセントレーションをよく身につけておる。訓練を受けた者でも、並みの術者じゃマドラを前にしたら実力を出せんというの、ぶっつけ本番であれだからのう」

「まぁ…ノリで」

これで途中から楽しんでましたとか正直に言えば何言われるかわ

からん。変態紳士とかに。

ーーー聞こえてるというに。

「うをっ!?」

油断してた。虚脱状態でダービーにまで意識を向けられなかった。

「どうした?」

「えっ、いや…指輪のやつが急に話しかけてきたもんスから」

「ほぅ、指輪の聖霊か…私も一度話してみたいもんだ」

「あー…しない方いいっスよ?こいつ王女様方のこと邪な

「ば、馬鹿者っ!!」

「「うをっ!?」」

「…あっ」

…声だけ外に出やがった。

「お前…出れんのか?」

「いや…ノリで。なんか知らんが、緊急事態だと思い慌てたら…出ちゃった☆」

己の恥部を誤魔化す為に本気になりやがった。つうか「出ちゃっ

た☆」じゃねぇよ気色悪ぃ。お前はもう口髭とタキシードが似合う紳士で決定事項なんだ。僕の中で。

「主、気色悪いとは失敬な。私だってたまには背の小さい可愛いおしゃまな女の子役とかやってみたいのだ」

「色情魔に女装趣味か…お前、ますます持って変態っぷりに磨きがかかれた。今は指輪の宝玉の一部をプロジェクター代わりに、白い壁をスクリーン代わりにダービーがウチの姉と妹がいかに麗しいかプレゼンし始めている。どんだけ器用だお前。僕が疲労で動く気力もないことをいいことに。

「なぁアキラ君。今話してるその声の主が本当に…」

「えぇ、誠に残念ながらキュートス王家秘宝の変た

「左様、我こそがダビデの六星環に宿りし聖霊。名はダービーと申す」

…今更偉そうにしたっておせぇぞ。お前なんか聖霊じゃなくて淫魔だろうが。

そして残念ながら、程なく馬鹿と変態の間には駄目友好関係が築

「ほぅ、これは…」

「湯上りで髪が濡れている主の姉君もまた格別だろう?」

「しかも弟の前であるにも関らず布切れ一枚というこのシチュエーションもなかなか…アキラ君は果報者だな」

…黙れ馬鹿二匹。果報者の意味違うし、人の身内を勝手に値踏みすんな。死んでもお前らのような輩にはやらん。

「つうか国王、てめぇ妻子持ちだろーがぁぁぁ！！！」

「ア、アキラ君、ほら、大声を出すと体に障るぞ？」

「出させてんのはどこの誰だあぁぁぁ！」

「あらあら騒がしいわね。ほら貴方もアキラ様も夕食の…」

…いらっしゃいませ、麗しい王妃様。この馬鹿国王をなんとかしてください…つうか休ませて。お願いだから。

「アキラ、大丈夫？痛そう…」

「試合の後なのですから、無理はお控えください、アキラ様」

エリーが腫れた僕の顔を痛そうに覗き込み、セリーヌ王女の見当違いな心配に心まで痛める。真実を知っているたまたま通りがかったディーン王女はダンマリ、事情を知らない王子は所在なさげに視線を動かす。王妃と、僕の数倍顔面が腫れあがった国王は沈黙…なんだこの空気の重い夕食は。つうかなんで僕までボコボコにされてるんだ。悪いのは僕じゃなくて変態指輪なのに。

ーーー罰を受けようにも我には実体がなきゆえ、許されよ。

嘘つけ。本当は出れるんだろ？声どころかあんな便利機能まで発揮しやがって。もっとまともに僕を驚かせろ。

ーーーアレは…火事場の馬鹿力というか…。

んなわけあるかっ！火事場でもねぇし。お前、共同浴場でムサイ男の裸祭強制鑑賞会の刑な。

ーーーご勘弁をーーーー！！どうか、平に！平にぃぃぃ！！…というより、それは主も辛いのでは？

僕は全く平気だ。なんでもかんでも邪なフィルターを通してしか見ないお前らとは生きる次元が違う。

ーーーここが異次元だけに『次元』が違うっと。誰か、主に座布団を

「いらんっ！黙れっ！……あっ」

僕の空の皿に野菜をよそおうとしたエリーが身を竦め、しだいに涙目に…。

「ごめんなさい…アキラ。さっきから眉間に皺寄せてるから、辛いのかと思って…余計なことしちゃって、ごめんなさい…」

「ごっ、ごめん、違うんだ。これは…」

結果、ダービーの事は卓を囲んだ皆に知れ渡りましたとさ。ざまぁ。最後の僕の「」が、浮気現場を目撃された彼氏みたいになってるのはこの際置いておこう。瑣末なことさ。

つうか…こっち来て、城でまともに飯食った記憶ねぇぞ？

次の日、奇跡的に、実はほんのちょっぴり回復魔法を使って僕はやっと軍に顔出しすることが出来た。ちなみに回復魔法の際にダービーにちょっと力の補助をして貰ったので、昨日の罪は許してやることにした。なんという心の広い主。

で、今全軍の皆様の目の前。マドラ団長とセラトリウス団長に挟まれ、捕獲されたエイリアンの境地に至る僕。なんでエルフはこんなに身長高いんだ。ぐれるぞ。ちなみに騎士団約三千人、魔術師団約二千人、総勢五千人の前に僕は立っている。正直、怖い。

「静粛に！知っている者も多かろうが、本日より魔術師団に正式に加入することになった、マテリアルの同志を紹介する！」

セラトリウス団長が高らかに宣言する。正直、数少ないキュートスの良心だと思う、このお方。やっぱり威厳が違うわ。見た目によらないよく通る声で、ざわつく群集を一発で黙らせた。

「手加減していたとはいえ、俺に傷を負わせた若造だ。ただもんじゃねぇぞ？しめてかかれ」

いや、おっさん。なんかそれ、違う。

「…ゴホン。それではアキラ殿。前へ」

セラトリウスが背中を押し、壇上…のような全員が見渡せる小高い台に立つ。僕の身長に合わせ、気持ち高く作らせたらしい。悔しいが、比べると小さいのは事実なので反論できない。

…どうしよっか、ダービー。挨拶なんて全然考えてなかった。

ーーーここは陽気に、「おっす、おらアキラ。いっちょやってみっ

か」とか…。

却下。色々怒られそうだし。

ーーーじゃあ、「西高のアキラっちゅーんは俺のことや。よろしく頼まぁ」みたいな。

却下。僕西高じゃねーし口調ちげぇし。いつのどこのヤンキーだよ。つうかもういいや、ありがとう。お前の知識は色々と間違えてる。普通でいいや。

「えー…神谷晶です。後衛魔術師団で今日からお世話になります。皆さんよろし

ーーーパァァァ！！

っと突然強烈な光が差した。方向的に僕のすぐ後ろから、後光が差す感じで。こんなとこでブロッケン現象なんかあるわけないし、何だ！？

「…ふぅ、人前で姿を見せるなど久しいな。アクアリウスよ」

「そうね。思ったより悪い気分ではないわ、レオ」

振り返ると、僕の二倍はありそうな等身の、ライオンの獣人っぽい人と綺麗に輝く布一枚を纏い水瓶を持っている美女がそこに立っていた。開いた口が塞がらない。

ーーー…普通の挨拶などつまらないのでな。我の力で力で十二宮より二人呼び出した。昨日主が『もっとまともに僕を驚かせろ』とお

っしゃっておったろう?我こそがダビデの六星環。神々を屈服させるアーティファ

「タイミングっつうもんがあんだろぉがぁぁーーーーー!!!!」

～第八話～ども、新入りのアキラです（後書き）

…ということで、今日は短めに。今回も残念ながら不真面目全開な回でした。物語は生き物だと実感する今日この頃です。なかなか思うようにいきません。どうすれ手綱を握ることが出来るのでしょうか。誰か教えてくださいｏｒｚ

～第九話～魔術師、神谷晶その１（前書き）

おはようございます。白カカオです。えー…1千ＰＶ、2百ユニーク突破しました。本当にありがとうございます。最近皆さんの反応が楽しみで、ついつい書きたい気持ちが逸りまくりんぐです。これからも生温かく見守ってください。とりあえず、感謝しか出てきません。それでは第九話、お楽しみください。

～第九話～魔術師、神谷晶その１

「何をそんなにかりかりしている、アキラよ」

「そうですわ。美容に良くないですわよ、アキラさん」

「ええい！わからいでか！何でアンタ達はこの状況になんとも思わないんだ！」

状況を確認したい。僕は魔術師団に入団して、挨拶の為にここに立っている。それは覚えている。で、普通に挨拶して終わろうとしたら、背後に獣神様と女神様が立っていました。うん、これ、普通はフローチャートとして繋がらないよね？

「だから『普通』など主には似合わぬと言うに。諦めが悪いぞ？主。状況判断力は魔術師にとって大事なこと」

「「我々はただ、指輪の精に呼ばれたゆえ」」

「お前ら三人空気読めぇぇぇぇぇ！！！」

歴戦の騎士達と魔術師達（団長二人含む）がフリーズしている中、怒鳴り散らす僕と若干、あくまで若干しょげ気味の三人。なんでこんなとこで漫才せにゃならんのだ。

「ぬっ…すまん。では我は戻ろう」

「アキラさん、また…呼んでくださるか？わらわを…」

「あー…悪かった。そう落ち込むな、アクアリウス。必要な時はちゃんと僕が呼ぶから」

「ふふ…待っておるぞ」

美女にそう帰り際寂しそうにされると僕が悪いみたいじゃないか。つうか消えるとき、哀愁を漂わせて振り向くな、レオ。なんで僕の良心が痛んでるんだよ。

「ダービー、お前後で説教な」

「なんとっ!?」

「全面的にお前が悪い」

二人が消えたあと、ようやく喧騒が戻ってきた。

「あいつ、いきなり二体同時召喚とかしやがったぞ…」

「それに、例の指輪、しゃべっているのか?」

「つうか、召喚した神に説教するとは…何者だ?」

…訂正。喧騒というか、騒然としている。なんかすごいことしちゃってたみたい、僕。

「ア、アキラ殿…」

「あぁ、セラトリウス団長。すみません、下がります」

僕の入団挨拶は、変態紳士のおかげで思わぬデモンストレーション…もとい晒し者になって幕を閉じましたとさ。

半刻後、騎士団と魔術師団に分かれ各々演習となった。僕がいるのは軍部魔術師棟の一室。あんなことやらかしてしまった手前、皆が向ける視線が…痛い。ただでさえも唯一人の人間というだけで目立つのに。

ーーーなに、歴史に名を連ねるものは必ず通る道だ。主も、早いか遅いかの違いであろう。

名を連ねるつもりはさらさらないんだが。お前、反省してねぇな。昨日の刑、やっぱり執行してやろうか？

「よ、よう。元気してるか？」

ちょっと引きつった表情で、麻のローブを着た青年が話しかけてきた。いや、そんな腫れ物に触れるような扱いされても傷つくんだが。無理も無いけど。

「あ、あぁ。でも別に無理に話しかけてくれなくていいよ？気ぃ使ってくれてるの、わかるし」

「えっ？あぁ、そうじゃないんだよ。面白そうなやつだなと思ったから、話かけたかったんだ。でも…こんな空気だし」

たしかに…気の弱い転校生なら初日で登校拒否しそうなこの空気は、ちと僕も辛い。

「まぁ…あんなことやらかしたからな」

「俺、カイム。アンタ、アキラ…で合ってるよな？」

苦笑とはいえ、本心の僕の笑顔を見たことで安心したようだ。別にとって食うわけじゃあるまいし。この国のエルフはいちいち大仰だ。

「あぁ。よろしくな、カイム」

「ところでさっきから難しい顔してたけど」

「こいつだよ、さっきのアレも、全部こいつのせい」

「主、それはあんまりでは」

「だから勝手に出てくんな。ややこしいことになる」

「すげぇ！本当に指輪の聖霊と話せるんだ！」

カイムの傍にいた、肩口でばっさり髪を切ったエルフが息を巻いて話しかけてきた。

「俺、グレン。よろしくな」

握手を求めてきた。シェイクハンドは全世界共通らしい。

「あぁ、よろしく」

それをきっかけに、パラパラと人が集まってきた。ええい！そん

ないっぺんに名前覚えられるか！でもまぁ、なんとかぼっちにはならずに済んだ…ところで、ようやくセラトリウス団長が戻ってきた。随分長い会議だったな。たぶん、僕のことだろうけど。

「静かにせんか！ほれ、アキラ殿も。ここからは特別扱いせんぞ。ここにきた以上、そなたもこやつらと一緒じゃ」

「はい、ありがとうございます」

他のみんなと同列に扱われることを嬉しく思い、何故か爽やか笑顔モードで礼を言う。学生時代を思い出して、楽しくなってきた。

「それではまずは…」

席に着き、魔術師団の戦術理論の講義に入った。午後からはこれを元に前衛、後衛に分かれ実技の時間に入るらしい。とりあえず、必要なことをメモにとろうと思ったのだが、残念ながらノートも筆もない。しかたなく出来るだけ頭に詰め込んで、後でカイム辺りに見せてもらうことにしよう。

意外と早く講義が終わり、昼食の時間に。さて…相変わらず何の用意もないんだけど、どうしよう。こっちの飯は、全部国王とは王女達に世話になってたし。そういや、こういう国王ご家族のいない食事はこっち来て初めてだったな。

「アキラ殿！」

セラトリウス団長が息を切らしてこっちに来る。手には、ジャラジャラいってる袋。

「どうしました？そんなに急いで」

「これ、国王からじゃ」

袋を受け取ると…おっ、重い。口を縛っていた紐を解くと、まぁ半分予想通り金貨や銀貨がぎっしり。ちなみに、この国の感覚だと、銅貨が百円、銀貨が千円、金貨が一万円位の感覚らしい。

「手紙も預かっておる」

手渡された手紙は二通。国王からとエリーから。

ーーーでぃあアキラ君。君の入団が正式に決まり、私も嬉しく思う。そこで、色々と必要な物も増えてくるだろう。これはキート家から君へ用意した支度金だ。遠慮せずに使ってくれ。ＰＳ．たまには私とも遊んでくれよ?首を長くして待っておるからな。いきなりでも大歓迎だぞ。国王より。

「寂しがりの子供か！つうか多いだろ！これ」

この袋、金貨と銀貨ばっかだぞ?魔術師の世界ってそんなに金かかるのか?

「…なぁ、カイム。そのローブ、値段いくらだった?」

「うーん…銀貨三枚くらいかな」

「ユニ○ロレベルかよ！こんないらねぇじゃん！」

「ユ○クロとかわかんないけど、もう一枚の手紙、読んでみたら?」

「あぁ…そうだな、すまん。ちょっと取り乱した」

ーーーでぃあアキラ。今晩はご馳走するから、お城に帰って来てね。初めて料理作るからわかんないけど、絶対美味しいから楽しみにしててね！アキラの為に、頑張って料理つくるからね！エリーより

「不安だよ！つうかエリーの初料理とか不安すぎんだろ！」

王女モードじゃないボケボケのエリーの料理とか…悪いがちょっと怖いぞ。頼むから、胃に入るもの作ってくれよ？

「えっ！？エリーってリーナス王女！？すげぇ！いーなー」

「え？なに？そんな興奮すること？」

手紙をぶん取り、興奮しているグレンに呆気にとられる。

「だってあのリーナス王女だぜ！王族美人三姉妹の！」

へぇ…そんなもんなのか。あいにく、僕はエルフとはこういうもんだと思っていたから感覚が麻痺していたらしい。外人の顔はあまり区別できないのと一緒で。それで、一般人より王族の顔を見る機会が多い騎士団とはいえ、滅多に見れるもんじゃないそうだ。エリー辺りはちょくちょく城下に遊びに出ているって話だが、それにより他の二人より認知されている…そうだ。まぁあいつガキンチョだし。

「なんだ、グレンってロリコンだったのか」

「違うわ！あの姫は別格」

「へぇ…そういうもんか」

「アキラ、温度差気づこうよ」

カイムが溜息をついた。

そして僕、カイム、グレンの三人は、こないだ姫様と王子と行った食堂に入った。昼食時なので、やっぱり混んでいる。向かう道中聞いたのだが、エルフの寿命は人間の約二倍、１６０~２００歳位らしい。そして青年期が長いのも特徴のようだ。エリーもあぁ見えて、４０歳近いらしい。僕より年上だったのか…。

三人分空いたテーブルに、おばちゃんが水を置きに来た。

「あら、人間の…アキラ君だったかい？へぇ…魔術師団入ったのかい。うんうん、なかなか様になってるじゃないかい」

「ども。カレンさん…でしたっけ？忙しそうですね」

ちなみに今僕はカイムとグレンが見繕ってくれたローブを纏っている。普段の格好だと、目立つし。早速国王から貰った支度金を使わせてもらった。こっちに来たときに着てたトレーニングウエアは、一緒に買った袋…もといバッグに突っ込んである。

「そりゃ騎士団と王族はこの国の華だからねぇ。数人まとまって来てくれるだけでその日は繁盛だよ」

「待って？騎士団と…王族？」

「ほれっ」

カレンが指差す方を確認すると、思わずテーブルに頭をぶつけた。

「あらっ？」

「あらっ？じゃありませんよ！護衛もつけずに何やってんスか！セリーヌ王女」

一角で穏やかに本を読みながら、セリーヌ王女がにっこりと笑みを浮かべてこちらを見ている。

「護衛など、平和なこの国に必要なくてよ？アキラ様」

「そうでした。…じゃなくて！」

「私も、エリーほどではないけど、たまにカレンおばさまのお料理を食べに下りてくるの。アキラ様もお食事に？」

「えぇ、まぁ…」

「早速お友達も出来たみたいで、私も嬉しゅうございます。アキラ様のこと、よろしくお願いしますね」

セリーヌ王女の笑顔に陶酔していたカイムとグレンがコクコクと頷く。

「あら？お店も混んできたようですわね。私はこれで。夕食、楽しみにしててくださいね。エリーったらはりきってもう準備してますの」

「今からって…早すぎだろ」

「うふふ。ではアキラ様、皆様。御機嫌よう」

あくまで上品にセリーヌ王女が去って行った。

「いてっ」

背後から思いっきり殴られた。

「お前ってやつは、お前ってやつは…」

殴った犯人はグレンのようだ。エルフの力で殴るな。コブできたぞ馬鹿野郎。

カレンおばちゃんがご飯を持ってきて、やっと落ち着いて飯が食える…わけではなかった。僕らの周りでギャラリーがうるさい。

「まぁマテリアルの世界の人間が、王女様と対等に、それも楽しそうに話してるなんて注目されない方がおかしいよ」

ニコニコとカイムが箸を進める。カイム、お前は自覚が足りない。さっきカレンおばちゃんが『騎士団も』って言ってたのを忘れたか？お前らも客寄せパンダだぞ？

「パンダってのはわからないけど、にぎやかでいいじゃん」

お前いい人オーラ出しすぎだろ。グレン見てみろ。一心不乱にかっ食らってる。

「あの…」

「んっ？」

魔術師の格好をした女の子が、こっちを見てモジモジしている。
なんだ一体。

「あの…サインくださいっ！」

僕に向けられたその言葉に、ブッとグレンが飯を噴出す。

「きたなっ！」

襲撃をかわし、適当にサインしてあげる。ちゃんと書いてやれって言われても、生まれてこの方書類にしかサインしたことねぇんだもん。しかし、積極的で物好きな女の子はどこの世界にもいるもんだな。

「なんでアキラばっかりこう…」

落ち込むグレンに、慰めるカイム。たぶん普段からこうなんだろうな、こいつら。

「安心しろグレン。人間が珍しいから注目されてるだけで、じきに落ち着くだろ」

僕のフォローに耳を傾けてくれない。

「今度…リーナス様と飯食うとき俺も誘え…」

「わぁかったから」

ーーー主、これは主の『はーれむ』を作る絶好の機会では？

んな野望持ってねぇよ！！お前の思考回路は熟成されすぎて腐ってる。

こうして野次馬とグレンのせいで、午後の演習前に走って魔術師棟に向かうハメになった。

～第九話～魔術師、神谷晶その１（後書き）

えっと…お断り。晶はそこまでイケメン設定じゃありません。本人が言っている通り、どっちかっていうと珍しさ先行のこの有様です。次回は午後編と晩餐会の回です。収まるかなぁ…引き続き、お楽しみいただければ幸いです。あと、ご意見ご感想いつでも大歓迎です！それではまた次回…白カカオでした。

～閑話休題～晶、１〇歳のころ（前書き）

白カカオです。第九話、加筆修正しました。粗ありすぎて困る…そして、なんかここ数日で驚くほど爆発的にアクセス数が伸びてるんですが、どういうことでしょうか…どっどれだけ感謝されれば気が済むの！…すみません。ということで、夜勤前に短めの小話を投下します。

～閑話休題～晶、１〇歳のころ

「なぁ…僕ら別れよっか？」

受験も終え、卒業間際、いつも通り僕の部屋でくつろぐ僕と、交際中の彼女、倉橋香奈子。三年生の春に交際をスタートして、もうじき、一年になるところだ。

「ほら、僕は東京の大学に行くし、香奈子は北海道だろ？結構な遠距離じゃん」

「うん…そだね」

僕は東京の三流私大になんとか合格。香奈子はどうしても行きたい大学があると、自分の進路を曲げなかった。彼氏に流されがちなこの世代の女の子にしては、なかなかたくましい子だと思う。だから付き合ったんだけど。それが互いの道を分けることになったのだから、皮肉なもんだ。

「そうだよね…私が譲らなかったんだよね」

「受け入れたのは僕だけどな」

思うことがあったんだろう、しばし、気まずい沈黙…。切り出したのは、僕の方だけど。きっと、お互い離れ離れになったら、恋人という関係を維持出来るほど強くない。香奈子もわかってくれているんだろう。付き合うきっかけをくれたのは香奈子だから、せめて別れるきっかけくらいは僕が持とう。香奈子も、きっとわかってくれる。

ベッドで漫画を読んでいた香奈子が立ち上がり、あぐらをかいて座っている僕の背中にコツンと頭を預ける。

「私があきちゃんより、自分の夢、とったんだよね…」

泣くのを我慢しているような、振動が伝わる。

「いいことじゃないか。夢とかこれっぽっちもない、僕にとっては羨ましいよ」

「ごめんね…」

「なんで謝るかな、フったのは僕なのに」

僕も泣き笑いのような顔を浮かべ、向き直らせ正面から香奈子を受け止める。香奈子の体温が、愛おしい。

「服、汚れちゃうね」

「気にすんな。香奈子は滅多に甘えてこないんだから、今のうちに甘えとけ」

「ありがとう…あきちゃんの胸の中、安心する。すごい癒される。全部包み込んでくれるような」

香奈子が笑いながら顔を擦り付けてくるのがわかる。

「冬で太ったからな」

「違うよ馬鹿…あきちゃん」

「んっ？」

香奈子が胸から離れ、真っ直ぐ僕を見据える。いつもの薄化粧は頬に幾重もの筋を作っているが、やっぱり香奈子は綺麗だ。

「私、あきちゃんが好きだった。ううん、今でも大好き」

「あっ…」

『晶、私たち、付き合わない？』

一年近く前、放課後みんなでカラオケに行った帰りに向けられた、香奈子の言葉を思い出した。

『私…晶なら嫌いじゃないし、付き合ってもいいかなぁ…なんて』

あの時は、随分と婉曲な言い回しだったけど。

「でも、明日からは、友…達として…よろしくお願いします」

言葉に詰まりながらも、僕の結論を受け入れてくれた。泣くな僕！加奈子の前ではせめて、笑ってやれ。

「あ、ぁ…」

「でも、今日だけは、あきちゃんの傍にいさせて…」

また僕の胸に顔を埋める香奈子。身長差、頭一個分。香奈子の頭は苦もなく僕の胸の位置に収まる。背中に回る腕に力が入っている。

「あぁ…」

その後、しばらく二人で抱き締め合って泣いた。結局、僕は堪え切れなかった。軟弱者め。

「お邪魔しましたー」

「あらぁ、帰るの？また遊びに来てね？」

「はい！また、いつか…」

最後に小さくこぼしながら、お袋の言葉を背に香奈子と僕は玄関を出た。田舎の春先は、やっぱりまだ肌寒い。空を見上げると、綺麗な星空が迎えてくれた。

「あきちゃん、夜空の下で散歩するの、好きだったよね」

「うん」

「実は私寒いの結構我慢してたんだけど」

「嘘っ！？ごめん。言ってくれりゃ良かったのに」

「んーん…空見上げるあきちゃん見るの、趣味だったから」

「なんだよそれ」

「ほら、人間好きなものの為なら我慢できるじゃない？」

「そんなもんか？」

「私、あきちゃんの家族もみんな、好きだった。居心地良かった。順子ちゃんの目、たまに怖かったけど、それでも可愛らしくて、好きだった」

…沈黙。二人の足音だけが、響いている。

「じゃ、この辺でいいよ」

コンビニがある、いつもの待ち合わせの十字路で香奈子が切り出す。

「でも…」

「これ以上、あきちゃんの傍で甘えられない。もう、覚悟したから」

「そっか」

こういう時って、たぶん女の子の方が強いと思う。僕なんか、自分で出した答えに未だに迷っている。

「最後に…」

そういうと、香奈子は唇を重ねてきた。震えは、寒さなのかそれ以外の何かがあるのかは、僕にはわからなかった。

「じゃあね、晶！」

笑顔で去っていく香奈子の方を、必死に笑顔を作って見送る。きっと、これで正しかったんだと思いたい。

ただいまも言わず、部屋に戻る。家族には、今日は言えそうにない。帰り際のアレで、あの場にいたお袋と姉貴はわかってそうだけど。窓を開けると、冷たい風が身を切るようだ。何かを誤魔化すように、僕は生まれて初めて煙草を買った。空き缶を灰皿代わりにして、一息吸って思いっきりむせる。

「お兄ちゃん…あれ、煙草吸ってるー！」

「…ノックくらいしろよ」

ゲホゲホと咳き込む僕の目に、涙が浮かぶ。きっと、慣れない煙草の煙のせいだ。

ーーーして主。香奈子殿の抱き心地はいかほｄ

「お前…台無しだよ。僕の美しい思い出を」

～閑話休題～晶、１〇歳のころ（後書き）

ということで、いつもと違うテイストでお送りしました。お口に合いましたでしょうか。ふぅ…こういうのって、書いててしんどいんだなぁ…出来るだけ爽やかにしてみました。学生の恋だし。でも別の小説でチャレンジしてみようかな？次回、キュートス編に戻ります。

～第十話～魔術師、神谷晶その２（前書き）

ども、最近ニコニコにも歌い手進出を割と真剣に考えてる白カカオです。夜勤明け、直で半日田植えの手伝い…すみません、死んでました。最近、話の進行が遅すぎると思うのは私だけでしょうか…えらい長編になりそうなｏｒｚまぁ、出来るだけ更新速度は維持するよう頑張ります。現状すでに不安定な気もしますが…それでは第十話、お楽しみください。

～第十話～魔術師、神谷晶その２

……ギリギリ間に合った…。

カレンおばちゃんの大衆食堂から魔術師団専用演習場まで、カイムとグレンと仲良く猛ダッシュ。もうこないだのマドラのおっさんとの試合に近い体力を使い果たした。だってさ、買い物したから荷物は多いし、道わかんないって結構なストレスだ…何よりお前ら二人速過ぎなんだよ！なんだよ途中から荷物持ってもらってもついて行くのが精一杯って！僕だって一応鍛えてはいるんだぞ！エルフの身体能力ってこんなチートかよ！せめてドワーフくらい鈍重そうなら…。

「いや、戦場でのドワーフのすばやさもなかなかだよ」

…あぁ、そう。あのずんぐりした体躯でそれは、軽く恐怖だな。でも置いといて涼しげに笑いかけるなカイム。こっちは息も整えられん位重篤なんだ。横っ腹、痛い。

「よう人間。人間の体力じゃこの世界は生き辛いか？」

にやけヅラの趣味の悪いローブを着たエルフが突っかかってきた。なんか、穢れた血め！とか言ってそうだな、お前。

「みんな優しくしてくれるし、僕は好きだよ、この世界も」

ここで同じレベルで相手にしたら負けだと思う。何に負けるかはわからないけど。こっちは大人な余裕を見せ付けてやるのが一番こういう輩にはダメージでかいだろう。ざまぁ。なおも顔を赤くして突っかかってこようとするこいつを、カイムが宥める。

「やめなよガラム。アキラはまだこっち来て間もないんだよ？」

ガラムと呼ばれたこいつは、見事に基本に忠実な捨て台詞を吐いて去る。

「ケッ。今のうちにちやほやされて調子こいてるといいさ」

なんだ、お前もグレンと同じクチか。

「待て待て、俺は違うぞ」

なんで僕の思考回路ってこうも読み取られるんだろう？ダービー、お前のせいだろ。

ーーー主、それは酷い。濡れ衣にも程がある。

「さて、午後を始めるぞ」

セラトリウス団長はいつもいいタイミングで入ってくる。廊下で待ってるのか？

ーーーいや、我の力で探索してみたが、そのような気配はなかった。偶々なのだろう。

いや、ありがとう。でもいいよ、そんな無駄な労力使ってくれなくていいよ？つうか姉貴とか順子とか、それで覗き見してんじゃねぇだろうな。

ーーーそ、そのようなことは決して…。

…してんだろ。

ーーーい、いや！我の矜持にかけて、そのような下劣なマネは決して！

ほぅ。変態にもいっちょ前に矜持なんてもんがあるのか。軽く見直した。変態紳士の変態道か。

「…アキラ殿？早く分かれなされ」

あぁ、すみません。ほら、お前のせいだぞダービー。

ーーー主…理不尽…。

ということで、僕は希望通りめでたく後衛魔術師団の組に決まりました。カイムと一緒らしい。内心カイムかグレン辺りと一緒でないと不安だったから、正直助かった。グレンは前衛らしい。性格的に、目立ちたがりっぽいし。

「セラトリウス団長、質問いいですか？」

「なんじゃ？」

「属性によっての役割とかあるんですか？」

「そうか、アキラ殿はまだわからんか。うむ、皆のおさらいも含め説明するかの」

ありがとうございます。助かります。

「では、アキラ殿は後衛じゃから、後衛についての属性の役割から教えよう。後衛を構成する属性は主にアキラ殿の土、風、水の三つじゃ。治癒や後方支援を得意とする者が多いのが特徴じゃ。反対に前衛は火、雷、氷の三つ。こちらは攻撃魔法を得意とする者が多い」

なるほど。なんとわかりやすい。

「そこで、午後からは前衛は攻撃魔法の精度、後衛は回復魔法の精度を高める時間にしてもらう」

「今日はっていつもじゃん。じいさん」

ガラムがレベルの低い野次を叫ぶ。どこにでもいるもんだ、こういう輩。

「静かにガラム。お主は少しはアイスメイクの安定性を上げたらどうじゃ？」

ガラムは氷属性で前衛らしい。グレンは火。属性に性格でも出るのかね？

「俺はちまちま工作なんか性に合わないんだよ」

「…続けてよいか？では先半分の時間は思い思い過ごすが良い」

その声で仲良く個々固まって雑談…もとい自習の時間が始まった。ちなみにカイムの属性は水らしい。なんとなく、納得。

「アキラはどうする？俺は図書室で資料見てくるけど」

「じゃあ僕も一緒に行くよ」

水の回復仕事は、主に水の形質変化でのアイテム生成らしい。ってゆーか…

「魔法ってもっと汎用性ありそうなんだけどなぁ…」

人体の半分以上は水分なんだし、大気中にも水はふんだんに存在してるし…僕の世界と同じならだけど。

「アキラは何見る？」

図書室につくと、既に何人か黙々と資料を読み耽っている。どの世界も、図書室って静かなもんだ。

「僕は…この世界の生物とか歴史とかそこら辺調べてみようかと」

僕の回復魔法は、ぶっちゃけたぶんこの世界で学べることは少ないと思う。向こうの世界に戻って、医学書とか読んだほうがまだレベルが上がりそうだ。

「なんか、余裕そうだね」

カイムが窓の外の野外演習場を眺める。たまに聞こえる怒声から、恐らく度々見える炎の残滓はグレンだろう。

「まぁ、医療はそこそこ知識あるから」

「そうなの？」

「あぁ、向こうのは科学だけどね」

さらに言えば、僕のは民事療法とか、学生時代の生物の授業とか、そういうレベルだけど。

「なかなか興味あるね」

「いずれ、向こうに行く機会もできるだろうさ」

「…ゴホン」

どこからか咳払いが聞こえた。僕らはこそこそとそれぞれの目当ての棚に移動する。文字は気合で覚えた。文字列の組み合わせだから意外と楽な作業だった。文法、日本語に割と近かったし。さて、生物学関係は…と、あったあった。待て、あんな高いとこかよ。カイーム！ヘルプ！

「はい、これ」

あっ、ありがとう…持つべきは心の友だ。今なら、背が低くてうんしょうんしょしてる女の子の気持ちが分かる。

さて、パラパラとセラス地方の人種構成について。基本的にエルフ、ドワーフ、妖精、ホビット、獣人族の五種類。人口的にはエルフが一番多く、ついでドワーフと獣人族が同じ位、ホビット、妖精の順。ちなみに獣人族は蜥蜴人（リザードマン）、人狼（ワーウルフ）、人虎（ワータイガー）など全部ひっくるめての総称で、セラス地方の中では好戦的な部類らしい。次にギラン地方。基本的に下位種族のオーク、オーガ、ゴブリン、コボルト、スライムに食屍鬼（グール）あたり。他、幽霊（ゴースト）、悪霊や各種骸骨（スケルトン）にゾンビ（レイス）の不死

族。上位種になると吸血鬼（ヴァンパイア）とか、他の種族を使役するロードがいるそうだ。ちなみにかの有名な竜族（ドラゴン）はガラリオン山脈に生息していて、あくまで中立の立場を保っている。意外な事に個体数は多いのだが、高い知能を有する個体は古代竜（エンシャント・ドラゴン）だけらしい。下級のドラゴンや亜種に位置するワイバーンは、本能で生活するか使役されることがほとんどのようだ。実に薄ら寒い話だ。最後に有名なケンタウロスやミノタウロス、グリフォンやスフィンクスなどは『幻想種』と呼称して、定住せず各々大陸の好きな所に点在している。伝説の生き物はこっちでも希少種ってことだ。

突然、図書室の扉が乱暴に開いた。

「非常召集！非常召集！騎士及び魔術師は至急各棟まで移動！」

んっ？なんか嫌な予感に火急の事態な気配が…。

「っ！行こう！アキラ！」

棚の迷路からカイムが顔を出す。

「きっと、緊急出動だよ！」

おいおい、僕今日入団したばっかなんだけど、まさかぁ。

…魔術師等に移動した僕らを待っていたのは、予想通りのスクランブルだった。山脈の麓のバリアスというドワーフの集落で、大量のゴブリンやオークが出現したらしい。

「現れ方が不自然じゃ。ロードが交じっているやもしれぬ…心してかかれ」

セラトリウス団長の言葉に、緊張が走る。そう、これはこないだの試合なんかじゃない。これから向かうのは命がかかった戦場なのだ。なんとも形容しがたい心境に心臓が高鳴る。むしろ恐怖しているのかもしれない。

「アキラ？大丈夫？」

隣でカイムが心配そうに顔を向ける。相当震えていたらしい。

「おい、ビビッてブルってるのか？人間。尻尾巻いて元の世界に帰るか？」

「やめろよガラム」

カイムがかばってくれるが、ガラムの嘲笑は止まらない。

「人間風情がちょっと注目されたからって調子に乗るから恥を晒すんだ！今ならまだ間に合うんじゃないか？『怖いからおうちに帰してください』ってなぁ」

「おい、いい加減に

「いや、礼を言うよ、ガラム。ありがとう」

「アキラッ！」

「ふはははは！じゃあ言ってみろよ、さっきの言葉、一字いっ

「戦う理由を思い出させてくれた。サンキュー。ガラム」

そうだ、おうちに帰るで何故城の皆を思い出したかは甚だ疑問だが、僕は守る為に戦いに来たんだ。目的をすっかり忘れていたようだ。思わず自分のチキンっぷりに苦笑してしまう。

「それでは各自準備を揃え、整い次第出発じゃ！」

バリアスまでは片道二日かかるらしい。まぁ、どっちにしろエリーの手料理は食べられそうにないな。ごめん、エリー…。帰ってきたら、また作ってくれるの楽しみにしてるよ。せっかくはりきって作った初めての料理、食べられなくてごめん。

～第十話～魔術師、神谷晶その２（後書き）

さて、第十話でした。今回は本当に筆が重かった…そして晩餐会の予告しといてやらかしてしまった…なんか、色々ごめんなさい。なんでこう思い通りにいかないんだろ。

～第十一話～バリアスの攻防（前書き）

こんばんわに、白カカオです。実はこの十一話、今朝の明け方まで執筆していたのですが…ブラウザさんがやらかしてしまって消えましたｏｒｚあと少しだったのに…そして今まで田植えのお手伝いしてました。最中に別の書きたい小説のプロットとか次々に浮かんできて…もしかしたら同時進行で書くやもしれません。…すみません、ちゃんと、こっちのことも考えてますよ?ただ、そろそろ私の苦手な戦闘シーンが…精進します。では第十一話、どぞ。

～第十一話～バリアスの攻防

何やら城中が慌しい。こっちもこっちで慌しい。今晩はアキラに手料理を振舞うのだ。私の初めての料理、アキラの口に合うといいなぁ…。シェフには悪いことをしたけど、早起きして仕込みの準備も手伝って貰った。アキラの入団祝い、喜んでもらいたいから。

『エリー、それはきっと、アキラ様に恋をしてるんじゃないかしら？』

セリーヌ姉ちゃんにそう言われたとき、私はいまいちよくわからなかった。

『エリーは、アキラ様といると、どんな気持ちになる？』

『んーとね。なんだか楽しくて、居心地良くて、ふわふわして幸せな気分になる』

『それはね、きっと恋してるからなのよ』

『よくわかんない』

『そうね、エリーにはまだ早いかもね』

『子供扱いしないでよっ』

そうか、私はアキラのことが好きなんだ。自分の気持ちが言葉になったら、なんだか途端に嬉しくなった。恋愛というものを、知識としては前から知ってた。けど、自分がするとは思わなかった。私

…大切な人出来たんだ。アキラに喜んで欲しい。アキラの役に立ちたい。アキラに…笑って欲しい。今日はその為の、第一歩なのだ。失敗は許されない。さぁて、じゃあこのお肉は…。

「エリー様！大変じゃ！」

ジイが乱暴に扉を開けた。ちょっとびっくりしてしまい。頬を膨らます。

「ジイ！こっちは今日が終わるまで大変なの！」

「違うのです！エリー様、緊急出動です！護国騎士団が、今しがた、北のバリアスへ…」

そうか、敵が来たんだ。バリアスだと、徒歩で二日はかかる。アレンお兄ちゃんも大変だなぁ。無事、帰って来るってわかってるけど。そうか…護国騎士団？魔術師団も？じゃあ…。

「はい…アキラ様も、ご一緒です…」

えっ？だってアキラは今日入ったばっかりなんだよ？いくらマドラのおじちゃんに認められる位強くても、まだ、初めてなんだよ？今日だって、アキラの入団祝いをしようと…頭が上手く回らない。ううん、そんなことはもういいの。どうか、お願い、

「アキラ…無事で帰ってきてね？約束、したんだからね…」

キュートスから北へ向け、歩くこと丸二日。僕たちの目的地は山

脈の麓のドワーフの集落、バリアス。正直入団初日からこんなてんやわんやな事態を想定できるわけなく、集落がようやく見えてきた頃、僕の頭は見当違いな錯覚をした。

「やっと、休める…」

「なぁに寝惚けてるのよ新入り！今回の目的は何？その目かっぽじって村をよく見なさい」

目はほじれない…と声が振ってくる方向に屁理屈をこねようとする。声の主はシーリカという女性エルフ。今回はスリーマンセルで行動し、僕たちは救護が最重要任務だ。側に騎士団の人も随伴して、敵の駆逐とかはそっちでやってくれるらしい。正直、助かる。そんなこんなでやっと僕の目にも村が見える距離に迫ってきた。今は冥の刻、月が正中にさしかかる辺り。エルフのように遠目や夜目が利かない僕は、ここに来てやっと集落の惨状を目の当たりにした。

「えっ…」

見事なまでに死屍累々。または地獄絵図か。戦火が燻る集落は、もはや原型を留めていない建物の瓦礫で溢れていた。

「ここまで…酷いのか？」

「頑強さに定評あるドワーフの建造物でも、敵の物量攻撃には為す術がなかった…ということだな」

道中一言も口をきかなかったスリーマンセルのもう一人のパートナー、ガロンが答えた。寡黙なこの男でも口を開かざるをえない程、酷い有様らしい。

「それに、あいつら加減を知らないから。飽きるまで、目の前にあるものを壊し続ける」

シーリカが苦々しく吐き捨てた。こっちもどうやらここまでとは思っていなかったらしい。

「それでは各班、生存者の確認と非難にかかれっ！」

どこかで部隊長の声が響き僕らも移動した。なぁダービー、お前の探索で何とかならないの？

ーーーすまぬ、主よ。我の探索は、探す対象の顔など情報がないと発揮できぬ…口惜しいが、力になれぬ…。

そっか…気にスンナ。別にお前が悪いわけじゃない。地道に探すとしよう。

ようやく成果が出たのは、探し回って体感で数時間後のことだった。

「アキラ！ガロン！早くっ！」

シーリカの声に反応し側まで駆け寄ると、瓦礫の下に数人の老ドワーフが体を横たえていた。水属性のガロンが近くの汚泥から数本の腕を生成し、瓦礫の山をどける。三人に加え、これだけ文字通り手があれば作業は早い。

「すまぬ…。ゴブリンの襲撃で、怪我を負って動けんかった…。普段ならこの程度の瓦礫など、くっ」

「大丈夫、もう大丈夫だから、しゃべらないで」

礼を言った老ドワーフは足が折れ、腹からも大量の血が流れている。この怪我でここまで話せるのだから、ドワーフは本当に生命力が強い人種らしい。が、一刻を争う怪我には変わりない。急いで治癒の魔法をかける。腹の傷を優先的に。流れ出た血はどうにもならないが、止血と組織の回復だけなんとかなれば、ひとまず大丈夫だろう。

「すまんな、もう大丈夫じゃ」

顔の血色はまだ戻らないが、怪我の治癒だけでも相当楽になったらしい。集中力を途切れさす暇が無く、初めて人を救ったという実感は、まだない。ただ、感謝されるだけのことはしたという、認識だけはできた。…折れた足に関しては、骨の結合と神経や血管の繋ぎ直しとかで相当苦痛に顔を歪めていたが。すみません、次はもっと上手くやります。

この一人が一番重傷だった為、あとの数人は楽だった。重傷にはかわりなかったけど。シーリカは風の魔法で伝令を、ガロンは瓦礫の撤去と退避ルートの確保を。急造にしては、上手くやってると思う。

「して、ご老人。他の方々はどちらへ？」

何やら交信を終えた、シーリカが訊ねた。額にはうっすら汗が浮かんでいる。

「おそらく、北のはずれの鍾乳洞に隠れておるだろう。…随分と、少なくなってはいるだろうがの…」

「では、長居は無用です。さぁ、こちらへ」

ガロンが退避ルートへ案内する。改めて聞くと、渋いいい声だ。歩いて半刻ほど、道中何も無いことに油断をしたのか、シーリカが振る明るい話題に、ドワーフ達もしだいに笑顔になっていた。僕はしんがりで、辺りをきょろきょろ見渡していた。壊滅状態とはいえ、ドワーフの集落が物珍しかったというのがあったが。

「ほう、お主は人間なのか、少年よ」

「いや、もう少年という歳では…」

話を振られ、談笑に加わる僕。そう、敵地の真ん中で、決して油断してはいけなかったのに…

「っ！？」

確かに、さっきから後ろは気になっていた。何やらぴょんぴょん飛び跳ねている影が見えていた。緑葉の節、虫か何かだろうと思っていた僕は、やっぱり頭が幸せだったらしい。小さくしか見えない位置からなかなか近づいてこないそれに、僕は見事に騙された。壁の魔法が間に合ったのは、本当に奇跡だった。油断しきっていた僕らは、それが背後に迫っていることに気づかなかった。いきなり急速に近づいてきたそいつは、突如牙を剥いて僕らに襲いかかってきた。壁の魔法を自分と、前を歩くシーリカの間に展開する。

ーーーガチンッ！！

壁についたその傷は、間違いなく鋭利な刃物か何かで刻まれたも

のだった。無様に転げた僕の目に、ようやくそいつが何者か映った。

「…ゴブリンッ!?」

緑色の汚い肌に小さい背。先が切れた長い耳に小さく自己主張する尖った歯。そして好んで着るという赤いボロボロの服。間違いなく、先日図書館の資料で見た、ゴブリンだった。

「アキラッ!!」

「いいから早く逃げて!僕も後で合流しますから!無事着いたら、伝令飛ばしてください」

「で、でも…」

「明らかなターゲットがいた方がそっちに矛先が向く危険性が減る!シーリカが言ったんでしょ、飽きるまで破壊するのを止めないって!僕は、大丈夫だから!」

「…わかった。でもね、伝令は飛ばさない。自分の目で無事を確認なさい」

「…厳しいリーダーだ。わかったよ。約束するから、さぁ、早く!」

僕の声と同時に、シーリカ達が駆け出す音、そしてゴブリンが突っ込んできた。

「なぁ、僕、フラグ立ててないかな?これ」

ーーー主、そんな悠長に構えてる場合では…。

「わかってる…よっ！」

ギリギリの見極めで、ゴブリンの攻撃をかわす。たしかに速いけど、マドラのおっさんほどの威圧感は感じない。ついでに、ゴブリンの攻撃方法がわかった。刃物と思っていたそれは長く、砥ぎ抜かれた爪だった。

「そんな不衛生なもん喰らうか！この雑魚モンスター風情が！」

確かにゲームの中でのゴブリンは、序盤の雑魚モンスターの印象が強い。しかし、現実のゴブリンはとても、特にマテリアルの一般人が相手に出来るような相手ではないほど獰猛で、狡猾だ。二度の襲撃をかわし有頂天になっていた僕は、僕よりはるかに力の強いドワーフの集落がこいつらに壊滅させられたという目先の事実すら忘れていた。再び助走をつけるように飛び跳ねるゴブリン。

「そろそろうるさいんだよ、それ！」

地面から巨大な棘を生成し、ゴブリンに放つ。が、あっちこっち跳ね回るゴブリンはいとも容易くそれをかわす。

「うっざ！」

次々と放ち、易々とかわされる。すでに目の前の地面がぼこぼこになっている。

「マジ、当たれよっ！」

ーーー主！落ち着

「こないだ聞いたよっ！！」

逆切れしても何も解決しないのだが、罰が当たったのか一瞬の隙を突かれ、スチールプレートの胸当てに衝撃が走る。

「ってぇ！」

背後の壁に強か背中を叩きつけられ、胸は潰され、呼吸が出来なくなる。意識だけは手放すまいと必死に歯を食いしばるが、その視線の先の状態に息を呑んだ。

「嘘…だろ…？」

搾り出した声に力が入らない。鉄製の胸当てが、横一線に凹んでいる。壁と同じように、傷跡のおまけつきで。これが皮の胸当てなら、死んでいたかもしれない。

ーーー主…

あぁ、ごめん。僕が悪かった。大丈夫、肝も冷やしたけど、頭も冷やした。さっきは逆切れしてごめん、ダービー。

ーーー主、今はそんな場合では

うん、わかってる。これが、戦場なんだ。これが、命の遣り取りなんだ。本当に、僕は甘かった。僅か数メートル先で、ゴブリンがちょこまか跳ね回っている。忙しないやつだ。恐怖は、もう刻み付けた。気がつけば、足も切られている。肉が裂け、血がドバドバ流れている。痛みは、覚悟できた。こいつも、今だけは意識の向こう

に追いやれる。ゴブリンの下卑た笑いも、気にならない。挑発のつもりだろうが、作戦は始まったばかりなんだ。お前にもう、使ってやる体力はない。

「ダービー、次で、終わるよ」

ゴブリンの足先の地面を、ちょいと動かしてやる。ほら、予想通り。トドメの一撃を食らわせに向かってきた。たしかに、小さい上に始終跳ね回ってるあいつに、遠撃を当てるのは難しい。だが、僕に攻撃してくる時は…必ず僕の目の前にやつは来る。視界いっぱいにゴブリンが迫る。初めて、こんなにも大きな殺気を感じたかもしれない。おっさんの時は…試合だったし。ありがとう、僕はお前と戦って、こんなにも色んな事を学んだ。だから…

「グゲッ…ギッ？」

僕のほんの数センチ前で、ゴブリンの醜悪な顔が固まる。もう、動かない。ゴブリンの胸を、太い棘が貫いていた。そう、背後の壁から、僕ごと貫いて。

ーーーある…じ？主っ！何故このような馬鹿な…。

「大丈夫、僕は生きてるよ」

ゴブリンから棘を抜くと、それは何事もなかったかのように僕の体を通り、壁の一部に戻った。

ーーーなっ！？

つうか僕が死んだら、僕の魔道反応でわかるでしょ？ダービー。

ーーーしかし…えっ？確かに主の体を…

「貫いてるように、見えた？」

だから、ダービーはここまで狼狽しているのだろう。絶句するダービーに、そろそろ種明かししてやろうか。

つまりはこうだ。僕が壁もたれている時間と、壁から棘が生える『時間をずらした』。正確には、同時に起こった事象を、別々の時間に発生した事象として『時間を分けた』。壁の前にいない時間に生成した棘に、僕を貫けるはずがない。それを同時に発生させたから、僕の体ごとゴブリンを貫いたように見えたわけだ。この世界の魔法は『イメージ』と『集中力』だから、一旦頭に浮かべたなら、後は強く、それを『起こす』ということに集中すればいい。

ーーーしかし主、それなら背後の他の部分から伸ばすとか、地面から生やすとかすれば良かったのでは？

「意外と甘いんだな、ダービー」

ーーー？

「最短距離で、しかも思いもよらない手段で攻撃が来るから、敵は避けれないんじゃないか」

愉快そうに笑う僕に、ダービーがまたも絶句する。

ーーー我は、とんでもない主を選んでしまったかもしれんな…

「ハハハ、前から思ってたけど、買い被りすぎだよダービー」

生まれて初めての戦闘で相手を出し抜き、勝ったという事実に少しハイになってるのかもしれない。笑いが止まらない。でも…

「サンキュー…ゴブリン」

視界の端に映る、驚愕しているのか、笑っているのか区別がつかないゴブリンの亡骸に小さく呟いた。たぶん、今日のことは一生忘れないだろう。初めて命がけで戦い、初めて相手の命を奪ったということを。そう、僕は命を奪ったんだ…。

「おかえり、アキラ…って何よそれぇぇ!!?」

シーリカが血まみれの足を見て悲鳴を上げる。目立つからやめれ。

「ごめんガロン、なんか、血、作って…」

傷口の治療はしたけど、出てった血はどうにもならない。覆水盆に返らず。

ーーー主、意味が違うのでは…

「…ニュアンスは、似たようなもんだ」

出血と疲労で突っ伏す、僕。あーあ、血さえあれば疲労くらいなんとかなるのに。

～第十一話～バリアスの攻防（後書き）

最後まで見ていただいて、ありがとうございます。私、白カカオでございます。今回、戦闘シーンのネタは浮かんでいたのですが、ホント、描写がむずい…私まで疲れた…。そして今回やたらとドとソの打ち間違えが多かったです。なんだよ、ソワーフってwでも気合が入っていたのは確かなので、楽しんでいただければ、読者の皆さんの意表もついた戦術であったなら幸いです。それではまた次話。

この次も、サービスサーｂ

～第十二話～バリアスの攻防その２（前書き）

おそばんわ、白カカオです。バイト先の先輩とダベってたら、いつの間にかこんな時間に…。でもまぁどうせ不眠気味だし、突っ走らせてもらいます。そしてやっぱ女ってこえぇ…そう思いました。しばらく彼女はいいや。今でさえクリエーターとかバンドとかで充実しまくりで時間が足りないのに、そんなもの作ったら過労死する。つっ、強がってなんかないんだからねっ！

～第十二話～バリアスの攻防その２

僕はどうやら数分ばかり気を失っていたらしい。たぶん、血が足りないせいだ。倒れ際にガロンにああは言ったが、人間とエルフの血液は根本的に違うらしく、増血は不可らしい。まぁ人間同士でも血液型が違うと輸血も出来ないし、無理も無い話だ。

「シーリカ…状況を、教えてくれ」

たったこれだけの言葉でも、息が絶え絶えだ。かっこわりぃ。

「あ、うん。じゃあ横になったままでいいから聞いてて。ここは北のはずれの鍾乳洞…って、それはわかるか。現在、ドワーフの生存者が四百余名。魔術師団約一千九百六十名、騎士団二千六百余名がここにいるわ」

「ちょっと待て、そんな入るのか!?ここ」

「うん。元の空間が結構広い上に、ドワーフが散々炭鉱で掘りまくった後だからね。まぁ…スペースはギリギリだけど」

そうか、それなら一応は納得出来る。ガラリオン山脈に続いているここなら、掘削する余地は多大にある。まぁ…それでも四千人強が入っていることを考えると、驚異的な事には変わりないのだが。さらに、上の地盤も心配だけど。

「しかし…もうそんなに減ったのか…」

魔術師団の二パーセント、騎士団に至っては三十パーセント近く

人数が減っている。たしかに魔術師団に比べ、自分の身を矢面に立たせる騎士団の方がはるかに危険な目に遭っているのはわかる。が…作戦開始初日でこうも消耗するものなのだろうか？戦況は、僕が聞いているよりもずっと悪いのかもしれない。

「アキラ？たぶん誤解してると思うから先に言うけど、戦死者数は二十一名よ。この作戦の規模でこの人数は上出来の部類だわ」

「えっ？だって今ここにいるのは…」

「これ見て」

シーリカがこの鍾乳洞と周辺の地図を広げて見せる。

「ここの鍾乳洞の出入り口は東西に二十箇所。そのうちこの集落に隣接しているのは四箇所。今言った人数に含まれない騎士団員と魔術師団員は、その出入り口の周辺の警護に廻ってるわ」

…唖然とした。地図を見れば、ここはガラリオン山脈のセラス側のかなりの部分に渡って伸びている。寧ろ、山脈の長さとほぼ同じと言っていい。

「つまり、後ろさえ気をつければ逃げ放題ってわけか」

「そうも言ってられないのよ」

「？」

「山脈の脇には、鍾乳洞とほぼ同じ範囲の広大な森林が広がってるでしょ？」

ふむふむ。確かにバリアス以外の全出口が森林部分と重なっている。

「第一の問題はここ」

シーリカが地図でのバリアスの右、すぐ東側を指す。

「ここはセラス側でほぼ唯一と言っていい、緑竜（ランド・ドラゴン）の生息地なの」

ゲッ！たしかこないだ資料で見たぞ。確か古代竜（エンシャント・ドラゴン）の一種で、比較的温厚な種だったはずだけど…あくまで『比較的』で、亜人にとって脅威であることには変わりない。それに、緑竜は他の下位のドラゴンも従属させてた気が…。そんなとこに残りの出入り口の内の十箇所、六割弱が集中している。

「じゃあ、こっち側なら…」

僕が残りの出口バリアスの西側を指差す。

「こっちはこっちで、妖精（フェアリー）の中でも最も排他的（偏屈）な人たちが住む、『迷いの森』。それも森のこっち…北側からの生還者は…ゼロ。せめて南側からなら、妖精の気まぐれか何かで脱出出来たって報告も数件あるけど」

なんという八方塞り…。どっちにしても絶望的じゃないか。今からゴブリンやらオークやらを蹴散らしてバリアスから帰った方が安全なんじゃないか。

「で、現状に話を戻すわね。敵勢の数は、セラトリウス団長の千里

眼によりこちらより二割半多いことがわかってるわ。そして…向こうにロードがいることも。で、こっちは鍾乳洞の出口が狭くなってるせいで相応数の出撃が出来ない。下手に警戒範囲を広げると、いざ鍾乳洞に撤退するときに余計な犠牲が出る。それに幸い敵はこっちの存在にまだ気づいてない。下手に大人数で警らしたら、薮蛇になる危険もあるからね。それで入り口を崩されたりしたら元も子もないから、今警らには騎士団の精鋭が出ているわ」

「状況は芳しくないな…」

「えぇ。突然の襲撃だから食料の問題もあるし、上部も今日様子を見て情勢が不利なままなら、東の森からの脱出を視野に入れてるわ」

「東のって…緑竜の森か!?」

「そう。幸か不幸か、出口の範囲は広くなってるし、緑竜自体の活動範囲はそこまで広くない。当たったとしても確率的に高くてせいぜい、十分の三、四くらいだわ。実際は護国騎士団を二つに分けて全軍まとまるよりは動きを目立たなくし、最悪ドワーフの生存を最優先として、片方を囮（デコイ）にして逃げる方法もあるわ」

「動きを目立たなくするための数字が二つの意味は?もっと多くバラければ、さらに目立たなくなるんじゃないの?酷い話、出口十箇所分に分ければ、どこかは必ず緑竜に当たるけど、その分確実に時間稼ぎになる」

「部隊一つにつき五百弱人くらい…アキラ、普通ワイバーン一匹を討伐するのに用意される人数は何人だと思う?」

ワイバーンとは、小型の竜の亜種だ。竜程力や魔力、知能はない

が、攻撃的な性格と機動力、小型ゆえの小回りの性能は一個体としての他の種族のレベルをゆうに凌ぐ。

「魔術師や、飛行種だから弓兵も必要だし…二十くらい？」

「正解は三十。ワイバーンでさえ、一匹に一小隊動かす程手ごわい。竜はその数百倍…文字通り、レベルが違うわ。緑竜の森は、ワイバーンとかの亜種だけじゃなく下位の竜まで生息している。半分という数字は…ここまで騎士団員を費やして尚、最も安全な数字なのよ…」

「じゃあ、全軍まとまるとか」

「馬鹿。そんなの竜の息吹（ブレス）でも狙い撃たれれば一撃で全滅よ」

そっか。駄目だ、血が足りなくて頭が働かない。何にせよ、出発は明日だ。とりあえず頭が働かない今、せめて休息をとり明日に備えるのが先決だろう。明日、緑竜の森なんて物騒なところで皆に迷惑かけたくないし。シーリカに礼を言うと、最後の文字を発した瞬間眠りについた。

翌日、これ以上状況が好転しないと判断したセラトリウス団長は、緑竜の森への出向を取り決めた。こういう時に外れクジを引くのって、だいたい僕なんだよなぁ。はぁ…悪い予感しかしない。

～第十二話～バリアスの攻防その２（後書き）

すみません、頭が働かないのは僕でした…。執筆中に何度も舟を漕いで、あげくただの説明回で終わらすとか、ホントすみません…。後できちんと加筆修正します。…寝よ。

～閑話休題～魚釣り（前書き）

チーッス、白カカオッス。…すみません、調子こきました。生まれてきてごめんなさい。っということで、またかと思うかもしれませんがまた閑話です。ちょっと私生活で色々あって、メンタルの均衡を保つ為に今回は遊びに走ります。続き期待してた方、本ッッ当にごめんなさい。今回だけです。それと、もう一つお詫び。本編より時間が若干飛びます。敢えて明記はしませんが。それにより酷いネタバレとかはない…とは思うので、できればご了承してください。

～閑話休題～魚釣り

「のうアキラ君。アキラ君の世界では、料理を作ると竜を召喚できるのかい？」

冒頭から何イってんだこの親父は。今、国王が僕の部屋に遊びに来ている。僕は国王と遊んでやっている自覚はないのだが、誰かとプライベートで一緒にいる感覚がいいらしい。アンタは彼女か。僕が放置プレイ決め込んで資料の整理をしている傍ら、国王は僕のベッドで漫画を読んでいる。こっちに滞在している間、気分転換になればと思って持ってきた代物だ。たまに国王は、マテリアルの世界の研究の一環とか大層なお題目を唱えては何冊か拝借…もといほぼ無断で持って行っては、次巻の催促をしてくる。迷惑以外の何者でもない。一回それについて言及したことがあったのだが、しょげにしょげて逆に面倒になったのでしかたなく許している。

「…はっ？何言ってんスか？」

「だって、ほら」

純粋無垢な瞳をかっ開き、本を開いて見せてくる。子供か。この親にしてこの娘あり。いや、最近エリーは気持ち大人びてきてはいる。どんな心境の変化かはわからんが、いいことには変わりない。お前も見習え。

「中〇一番はフィクションだろーがー！」

まぁファンタジーな世界の住人に言う台詞でもないような気もするが。

「えっ？だってほら、背後に竜が…」

「一国の国王がだってとか言うんじゃねぇー！それは演出！竜が昇るくらい凄く美味いって演出なの！実際飛んでないの！」

「そうなのか…」

ちょっと、いやあからさまに残念そうの表情を浮かべる。あぁもうめんどくせぇ。

「そういや…刺身食いてぇなぁ…」

フォローするように絶対興味ありそうな話題を提供する優しい僕。…なんでフォローせにゃならんのだ。

「サシミ？」

「そう。ＪＡＰＡＮＩＳＥ　ＳＡＳＨＩＭＩ。均等に切った魚の生肉に、豆で作った調味料をかけてそのまま食す！この美味さ、プライスレス」

「ほう、興味あるな。よし！海へ魚釣りへ行こう！」

「えっ？いきなり？」

…ということで、第一回、魚釣り大会が始まった。何故か護国騎士団フューチャリング国王家で。ようここまで来たよ。南の海まで

そこそこ距離あるのに。政治はどうすんだよ。それに全員分用意した釣竿と、数百隻もあるこの小舟も、明らかに無駄遣いだろ。国のお金の。

ーーーこれで刺身の美味さが広まったら、国の経済活動にもプラスになるからってことらしいぞ。主。

明らかにローリターンだろうが！刺身にそこまで過剰な期待すんな！

「これより、第一回護国騎士団大漁旗争奪大会～ポロリもあるよ～を始める。ルールは簡単。騎士団と魔術師団で分かれ、より多く魚を釣った方の軍部に、第三王女であるリーナスが夜なべして作った、愛情たっぷりの大漁旗を授与する。なお、一番多く釣った者には個人賞として、『ゴールデン・ウルトラ・スーパー以下略アングラー賞』を与える！」

ーーーうおおお！！！ワーワー！！

何故か士気がグンと上がる。いや、いらないだろ。どっちも。大漁旗なんて、制作の半分以上僕が頑張ってたのに。エリーは途中からスヤスヤ寝息立ててたぞ。騙されるな皆。真実は言外しないけど。

逸る気持ちを抑えられず、スタートの合図も待たず小舟に向かって走り出す一同。いいや、僕はゆっくりで。小舟は一人一隻とはいかないので、僕はカイムとグレンと三人で沖に出る。始まって数時間…釣果、出ず。

「主、暇だ。何がいいのだ？こんなボーっとしてるのの」

ダービーが痺れを切らしたのか、声を隠さず話しかけてきた。

「ちょっと黙ってろ、ダービー。今僕は集中している。暇なら一人で小噺でもしてろ」

なんだかんだでかなりのめり込んでいる僕。人生何があるかわからないもんだ。

「つまらんのう。死ぬまで一回見てみたい、女房が膝繰り返すとこ。どうも烏蛇魔流です」

「お前、それはへそくり隠すとこだろ。なんだ膝繰り返すって。お前の女房は三〇寿ばりに膝故障してるのか？それとも十回ゲームか？」

「主、なんだその十戒ゲームとは。モーゼか？」

「中身が想像出来なさすぎんだろ！」

「あー、懐かしいね、十戒ゲーム」

「あったのっ！？」

まさかのカイムからの口撃！アキラはふいをつかれた！

「俺んとこは川とか池とかの水割りすぎて、禁止令出たんだよね。こんな風に」

カイムが舟の鼻先から向こうの海を割る。どこの大魔導士様だ。遠浅の海底が根こそぎこんにちわしている。

「俺んとこはよく石版隠して遊んでたぜ…懐かしいな」

らめぇ！返してあげてー！その石版、人類にすっげぇ大事なモンだから！グレン、お前は人類に多大な罪を犯したんだぞ。つうかカイム、海を元に戻して！なんか露出した海底の向こうで黒い大きな何かがビクンビクンしてるから！…黒い大きな何か…だと…！？

「ピッピー！そこ！十戒ゲームは止めなさい！」

「やっべ！先公だ！カイム、早くしろ！」

「わかった！」

…どこに先公がいんだよ。つうかこの世界学校あんのか？…それより、なんで誰もアレに気づかないの？

「お主らのおかげで助かった。危うく天日に干されてくさやになるところだった。礼を言う」

「いや、当然のことをしたまでさ」

違う！このやりとりは致命的に色々違う！海を割ったのはお前だ、カイム！なに、さも困ってる魚に手を差し伸べたみたいなニュアンス出してんだ。お前、加害者！

「命の恩人には変わりあるまい。我が名はバハムート。海の覇者なり」

バハムート…だと…!?お前が、メ○フレアとか名前に改とか零式とかついたりする、あのかっこいいアレか?いや、ホントはわかってたけどさ、バハムートが実は魚だってことくらい…でもさ、わかってるけどさ…

「お前、でかい出目金じゃん…」

そう、ただのでかい出目金なのだ。しかもこっちに正面向いて話してるから、なんか、その…ごめん、すっげぇ気持ち悪ぃ。魚って、真正面から見るもんじゃねぇな。最後の幻想は本当に幻想だったらしい。ついでに言えば、カイムの海割りの軌道上にピンポイントでいるという不運っぷり。お前、本当にあのバハムートか?

「もし海でお主らが困ったことがあったら、吾に言うがいい。必ずや力になろう」

僕の呟きはあっさりスルー。驚く周囲に、和気藹々と話すカイムとグレンと、でっかい出目金。僕はというと、逆にこっちが死んだ魚の目をしている。

「じゃさ、今俺ら釣り大会してるんだけど、一匹もまだ釣れてねぇんだ。助けてくれよ」

…僕はこの現実が釣りであることを願いたい。してグレンよ、海の主にそれを頼むのは、どうよ?

「…承知した」

シェ○ロンのように、朝飯前だといわんばかりにドヤ顔して消えていく出目金。いや、決まってねぇし。

…ということで、第一回護国騎士団大漁旗争奪大会～ポロリもあるよ～は、バハムートのおかげで魔術師団が勝利した。物議はかもしたけど。そして『ゴールデン・ウルトラ・スーパー以下略アングラー賞』は、なりゆきで召喚獣もゲットしたカイムに輝いた。～ポロリもあるよ～の副題は、バハムートが海からポロリしたことにより見事成された。僕には、疲労感だけが残った。

第二回の開催は…是非自重願いたい。最後に、こっちの魚も意外と美味かった。

～閑話休題～魚釣り（後書き）

ということで、遊びに遊びまくった今回です。なんかすいません。そして是非言わなきゃいけないお礼が。３５００ＰＶ、５００ユニーク達成！本当にありがとうございます！こんな乱文お気に入りに入れてくれてる方や、評価してくれている方、次回を楽しみにしてくれている方。ホント竜が背後に飛ぶほど感謝！神レベルに感謝！もっと…たくさんしてくれていいんだよ？日本は八百万の神が住む国だから。…調子こいてごめんなさい。期待に応えれるシャーマンになります。

～第十三話～緑竜の棲家（前書き）

こんばんわ、白カカオです。日付が変わってから執筆しました。明日はたぶんもっと早い時間にお届けできると思います。つうか、お待たせしました。続きです。さて、今からプロット立てるか。嘘です。ちゃんと考えてます。それでは、ニコニコをＢＧＭにはりきって書きますか！お楽しみいただければ幸いです。

～第十三話～緑竜の棲家

今、僕たちは作戦通り二つのグループに分かれて、緑竜の森（ランド・ドラゴン）を抜けている。僕のグループは、指揮にマドラのおっさん、見知ってる人だとカイム、グレン、ガラム、シーリカ。ガロンだけ向こうのグループに行ってしまった。これだけ知っている人が揃っているとそれだけで心強いが、どうせならガロンも一緒のグループにして欲しかった。もしかしたら、このグループ分けにも恣意的なものがあるのかもしれないが、考えてもわからないことは考えないことにしよう。

緑竜の森は広い。最短で縦断するのにエルフの足でこれまた二日かかるらしいから、百キロはくだらないかもしれない。その広大な森を牛耳る、緑竜。この森の生態系ピラミッドの頂点だ。体躯はエルフが六人乗れる馬車十台分。成竜どころか古代竜（エンシャント・ドラゴン）の為人智を超えた頭脳、それを駆使した竜魔法（ドラゴン・フォース）を使う。フィジカルの強さに加えてそれは反則だと思う。そんな文字通り怪物が棲む森に、最低でも一泊は野営しなくてはいけないというこの状況。天気はあいにくの曇り空。太陽よ、僕は君にもう一度会うことが出来るのだろうか。一応ルート選択は、セラトリウス団長の『千里眼』で緑竜がいなく、尚且つ周囲のドラゴンの個体数が最も少ないルートを選んだらしいが…如何せんどのルートにも緑竜の姿はなかったらしいから、これはもう運任せでしかない。

「さぁて、お前ら！今日の晩飯は竜鍋だ！気合入れて仕留めろよ！」

…なんでこのおっさんはこんなに元気なんだ。もしかしたらこの胆力の強さこそがこの人が団長に就く所以なのか。たしかに出てきてもいないものに怯えるのは、騎士として愚かなことなのかもしれない。つうか、割と正論だ。僕も割り切ることにしよう。…出てこ

られたらそれはそれで、すげぇ困るけど。

「…はぁ、気張っていくか」

「おう！…にしてもお前、もう平気なのか？」

珍しくグレンが僕の心配をしてくれている。これは本当に竜が降ってくるかもしれない。

「あぁ、ぐっすり寝れたからだいぶ。そうだ、まだ礼を言ってなかったな。ありがとう、シーリカ」

出立前にガロンから、シーリカが誰よりも遅くまで僕を看ていたという話を聞いた。明け方前にふとガロンが目を覚ました時にも、シーリカは必死に癒しの風（ヒール・ウインド）をかけてくれていたらしい。全く、頭が下がる。

「あんたが寝た後、あんたのこと団長達が話してるの聞いたからね。今回の作戦で戦闘になった時、こっちのグループのキーマンはアンタだって言ってたし。マドラ団長との試合、私も見てたからね。団長達の判断には私も同意。べっ、別にアンタが心配で寝れなかったわけじゃないんだからね！」

ここでツンデレキャラの真似事で誤魔化さなくてはいけないほど、もしかしたら僕はこの人に負担をかけてしまったのかもしれない。一応言っておくが、この後僕にデレるとかは全く無い。バリアスに向かう途中、暇だからと散々騎士団にいる彼氏の惚気話を聞かされた僕が言うんだから間違いない。もう一度言う。この後デレるとかフラグとかは一切無い。

ーーー短い期間ではあるが、おはようからおやすみまで主の暮らしを見つめてきた我が断言するが、主は絶対鈍い主人公体質だぞ。

馬鹿な。僕はハーレム系の主人公になるつもりなど一切ない。好きなの主人公のタイプは、のらくらとダル気に智謀を巡らすタイプの方だ。ほら、アー○ンも言ってたろ？『これは、お前の物語だ』って。僕は自分でなりたいようになる。それにツッコミ忘れてたけど、お前は百獣の王でも花の王でもない。変態の王だ。

ーーー全く意味が通じないところでアー○ンを出す主に言われとうない。ただなんとなくそれっぽい事言いたかっただけだろう？

うっ、五月蝿い！ちょっとそれっぽい事を言いたかっただけさ！悪いか！

ーーー主、それは酷い。

「アキラ！何ボーっとしてんの！」

拙い、馬鹿の馬鹿話に乗ってやっていたら部隊の動きが全然理解出来なかった。先頭がワイバーンと遭遇したらしい。急いで援護の準備をしないと！

「…何してるの？アンタ」

「はっ？」

「人間が戦場で気を抜くとは、随分余裕だな。異世界から来た大魔導士様よ？」

「お前はうっせぇんだよ。早くフォイフォイ言ってみろよ」

「なんだと!?何をわけをわからな

「アキラ、終わってるんだよ。団長の戦闘」

「へっ?だって、今先頭で戦闘がって…いやいや、ギャグじゃねぇし!いてっ!」

「何をギャーギャー騒いでいる。ワイバーンならとっくに俺様が倒してやったよ。それともまた坊主に格下げされたいのか?」

背後から思いっきり拳骨を喰らう。カイム達が一斉に後ずさったのは、『先頭で戦闘』のせいじゃなくて、僕の背後に迫るおっさんの剣幕に退いたらしい。

「いってぇなおっさん!あぁ悪かったよ、気ぃ散ってたよ!わかってるからもう拳骨はやめてくださいお願いします」

つうか鉄のヘルム越しでもこのダメージってどんな馬鹿力だよ。もう一度喰らうのはごめんなので、最後は卑屈なまでに低姿勢になる。

「ようし、わかればいい。今日は小僧に降格で許してやる!カッカッカ!」

クソッ、地味なランクダウンにしやがって。いつか…絶対勝ってやる。

「しかし竜殺しのマドラ団長にあの態度って…こないだの試合とい

い、アキラ、何者？」

…おい、待て？カイム、今何て言った？

「はぁ…マドラ団長は、ドラゴンスレイヤーなの」

シーリカが呆れ顔で代わりに答える。おい待て！あのおっさんが、ドラゴンスレイヤーだと！？本気か？マジなのか？いや、予想外にハイスペックじゃねぇか、あのおっさん。超える壁、想定の斜め上を行く高さだぞ。なんでも、軍に入る前に冒険者をやっていた時代に、一人でガラリオン山脈に山篭りしてドラゴンを討ち取ったとか。『竜を倒さないと落とした片眉生えてこない病』にでもかかったのではないかという位の規格外の命知らず。世間では実際に罹ったのではないかという噂が流れたとか流れてないとか。

「主…大概に余裕そうだな。さっき拳骨喰らったばかりなのに」

「だって竜殺しのおっさんがいるなら大抵平気だろ、この森。普通討伐に一個小隊組むワイバーンすら一人で屠れるおっさんいるんだから。もう緑竜でも何でも来いってんだ。よかった、今回は外れクジ引かなかっ

ーーーガサッ。グルルルロオォォォ！！！！！

…いらっしゃいませ、緑竜さん。本当に、来なくてもいいよ。ほら、そちらにも都合とかスケジュールとかあるだろうし。しかも…ご丁寧に隊列の前方から三分の一、僕の最短距離で。

「アキラッ！」

半泣きになりそうに現実逃避する僕の傍らに、グレンとガラム。さらに騎士団の連中が固まる。どうやら、かなりの高い精度の『擬態』で姿を消していたらしい。そりゃセラトリウス団長の千里眼にも引っかからず、この周囲に竜とかワイバーンとか、少ないわけだ。

ーーーグルルルル…（来ちゃった☆）

「来ちゃった☆…じゃねえぇぇ！！」

「アキラ！何こんな時にトリップしてんの！」

「いやよ、シーリカ。こいつがそう言ったんだよ」

「さっきの拳骨でとうとう…って、危ない！」

カイムが僕にタックルをかます…いや、緑竜の不意打ち気味な息吹（ブレス）を捨て身で庇ってくれた。庇われ際に何やら失礼なこと言われた気がするが、今はおいておこう。なんせカイムのブーツのつま先がグズグズに融けている。他の皆は散開して事なきを得る。

「カイム！」

「大丈夫！中までは侵されてない」

そうだ、資料に書いてあった。古代竜はその色の特徴を持つ息吹を吐く。赤竜（フレイム・ドラゴン）なら炎。白竜（アイス・ドラゴン）なら氷、黄竜（アース・ドラゴン）なら石化のように。そして、緑竜は…毒。全てを腐食させる猛毒。

ーーー主。

「あぁ、わかってる。腹括る、しかないな」

何故あの一瞬緑竜の言葉を理解出来たかわからないが、それは全てを終えてから聞くとしよう。僕が油断したせいで、カイムが「ブーツがね」重傷を負ってしまった。守られたのは僕の方じゃないか。何の為に僕はここにいるんだ。もう、誰も傷つけさせない。

「僕がここにいる理由は、守る為…絶対に、皆を、カイムを守り抜く。ダービー！！」

ーーー承知！

「いや、僕はまだ全然無事なんだけど…まぁ、ブーツ一つでアキラが本気になってくれたなら、いいか」

カイムが燃える晶を他所に、楽しそうに溜息をつく。

「そういう問題！？いえ…随分落ち着いてるわね」

「いや、アキラが本気になったら、何とかなるかなぁって」

「相当気に入ったみたいね『金色の守人』、カイム様が」

シーリカが妖しい光を瞳に湛え、カイムにニヤリと笑いかける。

「やめてよ、その二つ名は。嫌いなんだ。なんていうか…アキラ、違うんだ。空気が」

「空気？」

「うん。上手く説明できないけど、指輪の精、ダービーって呼んでたっけ？千年近く主を選ばなかったあの聖霊が、アキラを選んだ理由、感覚でわかるんだ」

「ふぅん。あいにく一般人な私には理解出来ないから、任務に専念させてもらうわ」

「たぶん、君も歴史の裏表問わず、巻き込まれることになる器だと思うよ」

「…勘弁してよ。つうかアキラ、アイツ後衛でしょ。ここで出張るとこじゃないでしょうに」

シーリカがそれだけ残し、自分がいるべき持ち場に戻る。

ーーーそう、アキラなら大丈夫なはずだ。君は神々を従える創造主（クリエーター）が、創世の為に作り出した指環に選ばれた器なんだ。今は神が気まぐれで貸し出した人間、ダビデの名前を冠しているが、その指環の正式名称は『天国への扉（ヘブンズ・ゲート）』。アキラ、見せてよ。幾千霜と俺の魂が夢想した、その力の片鱗を。

古代竜とは、現世でもっとも生身で神に近い存在。その力の奔流で、アキラが覚醒することを、カイムは一人期待していた。

「「出でよ！獅子宮『レオ』！！」」

晶とダービーの声に従い、閃光の中より人獣の姿をした、レオが降り立つ。威風堂々と、百獣の王に相応しい尊大なオーラを放つ。

「久しいな、アキラ。あの時は世話になった」

「…何の話だよ。それにたった数日ぶりじゃねぇか」

「ふっ…半マテリアルの世界は不思議な居心地のよさがあるからな。首を長くして待っておったぞ」

「クリスマスを待つ子供でももうちょい辛抱できるぞ。まぁ…イケるか？」

「わかっておるくせに、アキラも人が悪い。竜退治を成すのは昔から勇敢な英雄と相場が決まっておる！そして我は『勇気』と『栄光』を司りし、獅子宮のレオ！我ほどの適任はおらぬわ！！」

猛る獣王が不敵に笑う。アキラの目覚めの戦いが今、始まった。

～第十三話～緑竜の棲家（後書き）

最後まで読んでくれて、ありがとです。白カカオです。前半の薄い内容から、後半の予想外に熱くなって私が驚いてます。だから勝手に動くな、キャラ！でもなんかいい感じにカイムも怪しくなってきたし、結果オーライってことで、駄目でしょうか？ご意見ご感想の他、質問やご指摘も逐次受け入れバッチコイです。

～第十四話～才能（ちから）の片鱗、それぞれの心（前書き）

こんち！白カカオＤｅａｔｈ！改めて前の話見てみると、誤字とか表現とか酷いなぁ…少しずつ直していきます。ご指摘あったら是非教えてください。あと前話のお詫び。アレン王子も晶グループです。騎士団にいたこと忘れてた…。それでは、本日のお話、どーぞ！

～第十四話～才能（ちから）の片鱗、それぞれの心

「なぁ…これ、本当にこないだ入った、しかも魔術のマの字も知らなかった人間の戦闘だよな…」

グレンが遠巻きに木々の間から激震地を眺めている。

「うん…戦ってるの、アキラ君だよね…後衛のハズの」

同じ火の魔術師のココがぽつりと返事する。二人とも、開いた口が塞がらない。

「本当に、何者なんだ。君は…」

更に遠巻きにアレン王子が険しい顔で見つめる。あれは本当に、我が城で毎食父上とエリーと漫才を繰り広げている、あのアキラ君なのか…？

何故騎士団の王子が傍観を決め込んでいるかというと、目の前の非現実的な光景に理由がある。

一つ、緑竜とアキラの戦闘は明らかに人外の領域だ。たかだか一般人に毛が生えた位の騎士が参戦したところで、晶の足手まといになって状況を悪くすれど、何の利にもならない。

一つ、彼の上役である『竜殺し』マドラ団長は、その少し離れたところで騒ぎで集まってきたワイバーンを無双中である。それも嬉々として。ちなみに緑竜に近づいたワイバーンは、戦いの余波に巻き込まれ何体か無残な亡骸を晒している。こっちも、とても普通の騎士が挟み込む余地はない。

したがって、アレン王子やグレン、ココを含めた他の騎士は何もすることが無いのである。

「…私たちは、セラトリウス団長の所にドワーフの人たち送ってこようか。どうせ、隣のルートだし、周りのワイバーンや竜、ここに集まってるし。向こうの方が逆に平和だろうから。シーリカ君、セラトリウス団長に伝令を」

「はっ、はい」

アレン王子の提案に、目の前の現実のせいで表情が半ば抜け落ちたシーリカが気もそぞろに返事する。

「アレン王子、向こうは承諾したとのことです。…行きましょうか」

「ごめん、シーリカは俺と一緒にここに残ってくれる？」

微笑の形から全くぶれないカイムがシーリカに声をかけた。

「伝令役がいないと、戦いが終わった二人を、誰が出口まで先導するの？」

「よくもまぁいけしゃあしゃあと…」

シーリカが苦々しい眼差しでカイムを見るが、それも尤もな事なのでしかたなくカイムの話を飲む。

「…ということですみません、王子。私はカイムとここに残ります」

「そうか…お気をつけて。主にとばっちり食わないように」

「はい…」

アレン王子はシーリカに同情の視線を送ると、他の一行を従えセラトリウス団長のところへ向かう。背後に轟音のＢＧＭを聞きながら。

「…で、私を残した本当の理由は何？」

アレン王子ご一行の背中が見えなくなり、シーリカがカイムに振り返る。カイムの笑顔の中身が変わる。

「特にないよ？ただ、君には今後の為に見て貰った方がいいかなってなんとなく思っただけだから。ねぇ、『隠者（ハーミット）』？」

「やめてよ。その二つ名が嫌いで、身を落としてここにいるんだから」

「ふふふ、ほらまた形勢が変わった」

カイムが楽しそうに晶の方に向き変わる。悠久の時を魂に刻んだ青年は、人智を超えた戦いを目に、ただ笑っていた。

「アキラ…君はやっぱり素晴らしい」

「があああぁぁぁぁ！！」

幾本もの木々が、倒れる。

「ぬうぅぅ！！」

地面が土煙を上げ、抉れる。

「グルルルァァァァ！！！」

衝撃で、爆風が生まれる。

緑竜とアキラの戦いは、森の被害を拡大させながら、尚も一向に治まる気配が無い。召喚された『獅子宮』レオが、緑竜を組み敷く。負けじと緑竜も息吹で応戦する。アキラは目一杯の精神力を使い、レオを援護する。その場に、普通の人間は存在しなかった。

「レオっ！！」

何度目になるかもわからない魔力供給をレオにする。

「アキラ！我はまだ大丈夫だ！休んでるがよい！」

「へっ！左手なくなってんやつがよく言うよ」

つい今しがた、組み合っていたレオに緑竜が、離せと言わんばかりの息吹をかけた。緑竜を突き飛ばしその勢いで体を半転させかわしたレオだが、このとき余計な欲目を出しやがって…一撃引っかこうとした矢先にその毒の息吹の残滓に触れてしまい、緑竜に浅い創傷と引き換えに左手の掌半分を失う結果になった。召喚した神のダメージは使役者にもダメージを与える。神の召喚は、レベルが高い魔術師ほど自分と神を切り離し、個として独立させ顕現出来る。逆にレベルが低い者ほど双方の干渉が強く、ダメージが連動し易い。つまりエ〇ァの逆パターンか。シンクロ率は低い方が良いという。僕が疲れたり痛いと、レオも疲れたり痛い。逆も然り。…というこ

とでレオがダメージを受ける度に、僕の体がボロボロになる。左手、すっげぇいてぇ。どうなってるのかわからないけど。手の状態を確認するより、ダメージを回復させた方が賢明だ。見たところで痛みが治まるわけでもないし、ならさっさと治して、僕もレオもすっきり回復！！としたほうが二人の為だ。

「ならば回復したら体を休めよ」

「そうしたいんだけどねっ！」

ちなみに回復魔法は僕自身にかけて、レオには魔力供給というのが今のスタイルだ。完全な肉体を持たない魔力で構成されたレオにとって、魔力がたんぱく質であって、エネルギーなのだ。つまりこっちが魔力を送れば、勝手にレオが肉体の再構築をしてくれる。ただ、すげぇ疲れるんだよ、僕が。そして魔力を使って自分の疲労とかを回復させるというスパイラル。そしてガリガリ削られて行く精神。ダービーを介して魔力を送っているおかげで増幅されてはいるが、ジリ貧なことには変わりない。たぶん、今僕を支えているのは守るべき者の姿と、戦いの中で自身が研ぎ澄まされていく感覚。更にダービーの干渉を強く受けている分、ダービーの今までの記憶による戦いの経験が体感して吸収できる。僕は精神力をコストに膨大な経験値を手に入れた！

「おっと！」

レオの攻撃の余波がこっちまで襲ってきた。レオの、インファイトとヒットアンドアウェイを使い分けた巧みな戦術で創傷がだんだん大きくなっていく緑竜に比べ、僕からガンガン魔力を吸い取って回復するレオ。慌てて属性魔法で周りの土から質量を頂戴し、吹き飛ばされないように重心を低くする。ほら、おっさん。ワイバーン

二体そっちに吹っ飛んでったぞ。頼んだ。

また暴風が俺の体に叩きつけられる。小僧と緑竜の戦いは、依然落ち着く様子を見せない。あいつらの騒ぎに誘き寄せられて、次々とワイバーンどもがこっちに来る。屠った数は、三十を越えた辺りから数えるのを止めた。これは近くのやつらが軒並み集結してきてるな。ご主人様を守る為にーってか。ケッ！大層なこった。

アイツらの戦いに参戦できないのだけが残念だが…ありゃヒトの戦いじゃねぇ。まぁ、文字通り竜と神サマが戦ってんだからそうなんだろうけどよ。こっちはこっちで楽しませてもらうわ。俺様に傷一つつけられねぇ三下のゴブリンやオークどもの相手はもう飽きた。そろそろ下位の竜どもも来るだろう。久しぶりの竜狩りだ。やっぱり強いヤツと戦うのは気分がいい。そいつらを倒して最後に立っているのが俺だから気持ちいいんだ。目の前のアイツら？あぁ、あれはもう地上の戦いじゃねぇから駄目だ。それにアレはアイツの獲物だ。人の手つきの獲物を横取りしてまで勝ちたくねぇ。

そういやあの小僧、さっきワイバーン二体吹っ飛んで来た時…笑ってやがった。前に戦った時はただの面白いガキかと思ったら、あっという間にこっち側に来やがった。なんというか、アイツには才能があるんだろうな。戦いに身を置くものの才能ってのが。大したもんだ。やっぱりウチの団に欲しかったな。騎士として、戦士としても立派にやれるだろう。実は俺はアイツが将来どんな傑物になるか楽しみなんだが、あの小僧調子こきそうだからな。ぜってぇ言ってやらねぇ。アイツはまだ小僧で充分だ。

おっ？！来やがったな？竜どもが。って二匹同時かよ。こりゃ骨が折れるな…。おっ、なんだ。まだ二人残ってるじゃねぇか。一匹くれてやるよ！お前らもボケッとしてねぇで手伝え。

「ちょっと！バレたじゃない！」

「そだね。じゃ、しょうがないから行くか」

団長がこっちに気づいた。あの人も只者じゃないなぁ…。あの人もヒトの領域から逸脱しかけてるのかな？しょうがない。あまりチカラ見せたくないんだけど…まぁどうせ相手は下級の竜だし。適当に苦戦して、さっさとアキラの観戦に戻りたいなぁ。

「カイム、あんた真面目にやりなさいよ！相手は竜よ！？」

シーリカ…彼女はいつまで道化を貫くつもりなんだろう？彼女だって、神器戦争（アーティファクト）の担い手の一人なのに。俺を騙しているつもりなのだろうか？もしかしたらそれすら計算なのかもしれない。だとしたら隠者の二つ名は錆びてないようだ。あまり知られてはいないだろうけど、要人には変わりない。

「…わかったよ」

とりあえず、やれやれをしておくか。さて、俺の目下の興味は君だよ、アキラ君。早く、もっと、俺を楽しませてくれ。

カイムは侮れない。自分の役目に疲れて、今の世になって力を隠し普通に生きるつもりだったけど…どうやらそれも無理なようだ。カイムのせいで。天国への扉、ヘブンズ・ゲート。アレが真の力を手に入れようとしてる今、どうやら私と同じように役目を担った方たちも、ちらほら集まってきているみたいだし。カイム以外はまだ

気づいてないみたいだけど。
私は…私だ。他の誰からも影響されない。誰にも私の邪魔はさせない。ただ…アキラ、何故か彼だけが妙に気にかかる。彼は私にとって希望をもたらす者なのだろうか？それとも疫病神なのだろうか？

「ぬおあああぁぁぁぁ！！！」

レオが乾坤一擲の一撃を放つ。竜が苦悶の表情を浮かべる。そろそろ僕の魔力も枯渇しそうだ。つうか、ここまで持っているのが奇跡的だ。しかし、ようやく…本当に、ここまで来た。レオはまだ、ギリギリだが余裕がある。そして回復の術を持たない竜は、息も絶え絶えになっている。その証拠に、自分自身の毒に抗えていない。ところどころ末端が腐食し始めている。

「……ニン、ゲン…」

緑竜が訊ねてきた。明らかに人間としての僕を意識している。

「…なんだ？」

「お前…が新しいその指輪の主か…」

「…！？何故ダービーの事を知っている！？」

「遥か昔…その指環を持った若者が、お前と同じように我らを狩りに来たことがあったのでな…。もっとも、そのときはお前程指環を使いこなせてはいなかったし、この世界の何世代か前だったがな」

「ダービー！お前こいつのこと知ってるのか！？」

「あぁ…確かに昔、竜にボロ負けしたことがあったのう。その時の主は、主ほど気のいい者ではなかったし、故に我も今ほど力を貸したわけではなかったのでな。そうか…グーラスを屠ったのはお前だったか…」

「昔話さ…して、天国への扉を持つお前は、この世界に何を求める…」

「天国への扉？なんだその漫画家のスタ◯ドみたいなやつは」

「主…」

「天国への扉、ヘブンズ・ゲート…お前がしているその指環の、名前だ」

「ダービー…」

「すまぬ主…決して隠していたわけではないが、言い出すタイミングがなかったのだ…」

「いや、別に気にしてないさ。じゃあお前、今日からブンさんだな」

「…いや、今まで通りダービーと呼んでたもれ」

「…二人よ、続きをいいか？」

「あぁ、ごめんごめん」

今の今まで命がけで戦っていた相手とは思えないアキラの態度と、神器の精との掛け合いに、年老いた竜は思わず笑いを漏らす。

「ふっ…よい…主を見つけたのだな、指環よ…」

「あぁ。古の竜よ。我が主は、ニンゲンそのものだ。人を思い、人を憎み、狡賢く、愚かで、神がヒトを作った時に与えた『自由』の全てを謳歌せんとする…そんな主が気に入ったから、我は主と認めたのだ」

「あぁー…緑竜さ、いいか？」

「なんだ、指環の主よ」

「さっきの質問の答えと、お前がしてる誤解について。僕がこの世界に求めるのは、僕が大切に思う人達の平和。それだけ。正直、今の自分に力が足りないのはわかってる。でも、僕が戦うことで大切に思う人達が、その人達がさらにまた大切に思う人達が、平和に暮らせるなら頑張れる。僕が思うのは、それだけだよ」

「ふん…大層な心がけだ。皆の為か」

「いや、言葉が足りなかった。結局自分の為さ。僕が、周りの人の悲しむ顔を見たくないからこうしてるだけ。あと誤解についてな。別に僕らは狩りに来たわけじゃないぞ？敵に襲われて、ここしか逃げるルートがなかったんだ」

「なんと…そうか…悪いことをしたな」

「いや、こっちこそ。寧ろ、こっちがお前の仲間大量虐殺しちゃっ

てるし。あのおっさんとか。それに…お前だって守る為に戦ったんだろ?お前と、仲間が暮らすこの森の秩序を」

「ふっ…なら指環の主よ、もし我の家族を殺したことを悪いと思うなら最後に一つ、頼みを聞いてくれないか?」

お前、ここで家族とか言うなよ。良心が痛むじゃねぇか。

「…なんだ?」

「我の命は、もう残り少ない。ただ…このまま死ぬのは忍びない。最後の勝負をしようじゃないか。竜の…古代竜と呼ばれる我の血が、滾っているうちに」

「あぁ…いいぜ…」

「…感謝する。最後の相手が、お前で良かった。我の命をかけた竜魔法(ドラゴン・フォース)を受けて、立っていればお前の勝ちだ。では…いくぞ」

年老いた竜は感謝した。自分より少し位の上の、神に。アキラと言ったか…不思議な男だ。思えば、こやつの声は妙に心地よい。今までの、ただ名声の為、復讐の為に我を狙ってきた人間とは違う。全くの自然体なのだ。人間というモノを、最後に理解出来て良かった。そのくせ、この男は何故か手を合わせたくなる気質を持っている。悠久ともいえる時間を過ごしてきた我も、このような男は見たことはなかった。竜の血が言っている、誇り高き竜が、人間に負けてなるものかと。だから、最後に一撃を見舞いたかった。もっとも

…我はその勝負の結末を知っているがな。では…行くぞ、新たなる指環の主よ！

「タンマ！ストップ！」

いきなり制止され思わず気合だけ前にぶっ倒れる。おのれ、無駄な体力使わせよって…。

「なんだ？いきなり。やっぱりやめだとか抜かすのではなかろうな？」

「違う違う。男の最期の頼みを無下に断るほど非道じゃないよ。じゃなくて、言葉！お前の言葉はこの世界の言葉でも、日本語でもなかった。なんで僕に理解出来るんだ？」

何かと思ったがそんなことか。最後まで調子を狂わせる男だ。だが、冥土の土産に教えてやってもいいか。

「その指環の精に聞けばよかろう？まぁいい。この世界の全ての記録と知識の結晶にして、それこそが神、アカシックレコード。それすらも従えるのが、お前の指環だ。それに、我は男でも女でもない。性など、必要なかったのでな」

「お前！何で言わねぇんだよ！」

「だから主、タイミングが…」

「だって、苦労して覚えた意味ねぇじゃん！こっちの言葉！つうか、緑竜！お前、男じゃねぇの！？」

「主！フタナリ！フタナリ！」

「お前は黙ってろ変態！！」

「ふっ…アキラ、行くぞ…！」

「んっ…サンキューな、緑竜」

なんとも、最後まで愉快な連中よ。アキラ、もう少し、早くお前と会いたかったぞ…。しかし永かった…本当に、永い生涯であった。我の生にも、何か意味はあったのだろうか…もしかしたら、この男を覚醒させるために、神よ、そなたは我に永い生を授けたのか…？

そんなことを考えながら最後の力で、魂の爆発と共に己の宿命である、毒を放った。

「戻れ！レオ！皆を守れ！アクアリウス！！」

レオを強制的に下げつつ、宝瓶宮のアクアリウスを召喚する。

「承知！アキラさん！」

アクアリウスが叫ぶと、水瓶から大量の水の膜を作り、僕と、近くにいるおっさんとカイム、シーリカを保護する。そういや、なんで二人はここにいるんだ？まぁ、いっか…。

しばらくして辺りを覆っていた毒が引くと、周囲は緑竜の毒に地面まで溶かされ、沼地と化していた。おっさんが大量虐殺した、緑竜の家族と共に。

「なぁ、ダービー」

「なんだ？主よ」

「なんか、悪いことしたのかなぁ…こいつらは、ただここで生活してただけなのに」

「主は悪くはないぞ。主だって、守るべき者の為に戦ったのであろう？」

「まぁ…な。でもさ」

「なんだ？」

「あいつ、みんな連れて逝ったんだ。そこで寝てた、家族。寂しく、ないよな？」

何を馬鹿なことをと、自分でも思う。でも、そう思わずにいれなかった。緑竜は悪いやつじゃなかった。でも、戦わなくちゃいけなかった。戦わなきゃ、僕が守れなかった。たとえ原因が、すれ違いだとしても。

「そうだと…良いな、主よ」

そうか、こんな戦いもあるんだな…。とりあえず、意識を失う最後に思ったのは、これでエリーの料理食べれそうだな…なんてことだった。

～第十四話～才能（ちから）の片鱗、それぞれの心（後書き）

最後までお読みいただいてありがとうです。やっぱり書くときは集中して書かないと駄目ですね。あれもこれもで逆に疲れた…。その上こんなペラい内容でだらだら続いて申し訳ないです。それと最近のエピソードを一つ。ここ数日、左手がやけに疼いて寝れません。邪気眼ではありません。念の為。蕁麻疹がやっと落ち着いたと思ったらこれだよ…

～第十五話～帰還、その後（前書き）

ども、白カカオっす。まず、前話があまりにも酷い上に今日は夜勤前で短めっていう体たらく…申し訳ないです。ホントすません。煙草は吸います。…頭働かない。なんとか皆さんが楽しめるレベルを保てるように書きます。

～第十五話～帰還、その後

どうやら、また僕は気絶していたらしい。なんか戦闘の度に倒れるって、どうよ、この虚弱っぷり。もっと魔力が欲しい。もしくは周囲の魔力を効率良く内部変換できる機能。

ーーー何を言っておる主。はっきり言ってあの神に近い古代竜を倒すために、ダメージのフィードバックに耐え、ほぼ無休でレオに魔力を送り続けた主ははっきり言って規格外だぞ？我も正直驚いてる。

って言ってもなぁ…。

ーーーなに、国に帰れば主は英雄だ。上手いもの食って、美女を侍らせて存分に気分転換できるだろうに。それまでの辛抱だ。言うであろう？遠足はお家に帰るまでが遠足だと。

こんな遠足は全力でご遠慮願いたい。そしてお前、前から思ってたけど発想が俗物過ぎる。別に今は美女侍らすつもりもないし、そんなことしたら休めないだろう。

ーーー休めないとは…主の絶倫っぷりならきっと大丈夫だ。

見たことないだろ！僕のそういうの！いや見せるつもりもないけど。それに…

「何が英雄だよ。僕ら、負けたんだぞ…」

そう、これは敗走なのだ。緑竜の森を無事に抜け、さらに討伐までしてしまったから錯覚もやむなしなのだが、バリアスでは完全に

負けたのだ。集落は占拠され、バリアスは敵軍の新たな拠点と化してしまった。こっちの本命の戦果は、ドワーフの保護、それだけだ。

ーーードワーフの保護だけ…充分ではないか。民は生き延びておる。生きているなら、またやり直せる。奪われたなら、奪い返せばよい。戦いに、一度に多くは望めんよ。主にはまだわからないかもしれんが…それに、主は瓦礫の中からドワーフを救い出した。重傷のドワーフを助け出した。主がいなかったら、あのドワーフ達も今を生きていなかった。主の成したことは、充分胸を張るに値することだと思うぞ。

そうか…とりあえず、ありがとうダービー。次は…絶対勝つ。ただ今は、負けたことが悔しい。これは個人的な感情だけど、やっぱり負けるのは嫌だ。

ーーー主、意外と負けず嫌いなのだな。覚えておけ、主。女の子はそういう『おとこのこ』な部分に

あー、いらん講釈ありがとう。ブンさん。今それ、いらない。

ーーー主…ブンさんはやめてくれ…。我が悪かった。

「そろそろ着くわよ、アキラ。目、覚ましたら?」

隣にはシーリカとカイムが付き添ってくれている。僕はあの後、またもおっさんに担がれ、何故かその場に残っていたこの二人に介抱されて今に至る。緑竜との戦いで精根尽き果てた僕に、馬の手配もしてくれた。…なんであの場にいたか聞いてみたら、

『そんなの、アキラが心配だからに決まってるじゃん』

とカイムは言っていたが、絶対嘘だろ。おっさんと一緒にいたところから、もしかしたらこの二人もおっさんの竜狩りに加担していたのかもしれない。なんか、何て言ったらいいかわからないけど、この二人雰囲気が変わった気がする。

ーーーそれはきっとデキておるのではないか？この二人。

…お前はそういうフィルター通さないと人間関係を見れないのか。シーリカ、彼氏いるだろうが。

ーーーなに、略奪愛とか、三角関係とか、男女がいればどんな愛憎劇が背景あるかわからんだろう。もしかしたらカイムがシーリカに横恋慕している可能性もあるやもしれん。シーリカは美しく、よく出来た女傑だ。

…お前のせいで人間不信になりそうだからやめれ。修羅場とか嫌いなんだ、僕は。元の世界に戻っても、お前には絶対昼ドラは見せん。

「いてっ！」

騎乗でだれてる僕をシーリカが頭を叩いた。

「アンタが起きないからよ。ほら、もう国着くわよ。馬から下りて、シャンとして。アンタ、竜殺しの英雄なんだから」

お前はかーちゃんか。わかったよ起きるよ。ただお前と、ダービーにも言っておきたい。

「僕の竜殺しは英雄なんかじゃない。平和に生きていた老竜の命を奪った、ただの殺人者だ」

「アンタまだそんなこと言ってるの？」

「そうだ主。あの竜は、最後に主に感謝していた。その者にそのようないじけた態度なぞ、愚弄だぞ。今は無事に帰還出来た喜びでよいではないか。あの竜も主を恨んでなどおらん」

「おっ、指輪の聖霊！貴方も良いこと言うじゃない」

「ではシーリカ、我に褒美としてそなたのおっぱ

「黙れ色情霊。被害を受けるのは僕だ」

隣でやりとりを傍観していたカイムが笑う。普段は胡散臭い笑顔だと思っていたが、今は何故か救われた気がした。つい、僕からも笑みがこぼれた。

「アキラ、今なんか失礼なこと思ってなかった？」

「なに、気のせいだよ」

「「ぷっ…アハハハハハ」」

「…なに？あの二人」

「さぁ…我も偶に、主がわからなくなる時がある」

今は、ダービーの言う通り命があることを喜ぼう。無事に帰って、

約束を守れた自分を誇ろう。だって、ほら。

「アキラーーーー！！！」

開門して僕が見えた途端、エリーが抱きついてきた。

「ただいま、エリー」

「おかえりっ！アキラ！」

頭を撫でてやると、僕の胸に頭を擦り付けてくる。お前は猫か。

「エリー、ごめんな。せっかくの手料理、食べれなくて」

「いいの。料理はまた作れるから。だから今晩はアキラが無事帰って来たお祝いと、入団のお祝いにいっぱい作るね！」

「いや、今日はまず休みたいかな…。明日、明日な？」

「ぶーーー」

「それと…公衆の面前だから、やめような？こういうの」

なんか、視線が痛い。民衆の僕の付近の人達は王女のこの姿に、唖然としている。

「あと、アレン王子にもちゃんと、おかえり言おうな？」

ハッとして周囲を見回すエリー。そして実兄なのにスルーされたアレン王子。なんか…すいません。

「では…大儀であった。魔術師アキラ」

「はっ。ありがたきお言葉」

赤い顔を隠して取り繕うエリー。本人的には大真面目なのだろうが、さっきの今では茶番以外の何ものでもない。リーナス姫がこんなガキンチョってのが、周知になったな。

「おかえりなさいませ、お兄様」

「あっ、あぁ…」

視覚効果でアレン王子の顔に汗とか見える気がする。なんとも複雑そうな顔を浮かべる王子。当事者の僕としては非常に気まずい。

「ちょっと、何よさっきのアレ」

シーリカがわき腹を小突いてきた。

「アレがお城の中の、ガキンチョなお姫様だよ」

「…デキてんの？」

「ブッ！！」

口にしかけた水が霧になった。人間、本当に噴くんだな。たしかに普段からお茶吹いたとか、コーヒー返せとか書き込んでるけど。

「…んなわけあるか。よくわからんけど、ただ懐かれてるだけだ」

「ふーん…私にはそうは見えなかったけどね…」

「僕はただの愉快なお客さんのオジサンだよ。…年齢、負けてるけど」

「私にはお姫様、完全に乙女モードに見えたけど…まぁアンタがわからないならいいや」

「なんだよ一体…」

ーーー言ったであろう?主。主は鈍感な主人公体質だと。

「だからお前までわけわからないこと言うな。ほら、グレン。行くぞ」

「なんでアキラばっかり…ブツブツ」

ほら、意味分からないことで固まってないでさっさと歩け。…んっ?

『魔術師初の竜殺し『アキラ様』ご帰還!!討伐したのはあの『緑竜』!!』

…なんで広まってるんだよ。足元の号外を拾い、溜息をつく。

「…なぁ、ダービー」

ーーーなんだ?主。

「落ち着いたらさ…魔法のこと、お前のこと、あと、僕自身のことも、教えてくれよ。僕はもっと、もっと強くなりたい。僕のせいで…僕の為に命を散らせてしまったあの緑竜の為にも。もうすれ違いで、あんな戦いしたくないよ。すれ違いがあんな不幸を生むなら、それをねじ伏せる力が欲しい。あの時だって…僕にそんな力があったら、緑竜も死なずにすんだかもしれない」

「主、それは驕りというものだ。人は全ては救えない」

「でも！」

「しかし、主がそんな無茶を言うようになったことは、正直嬉しく思っている。だから、我は手を貸そう。我の力の全てを主に託そう。主なら、きっと誰も到達出来なかった高みに辿り着けるやもしれん。主が主のような人間で、我は嬉しいぞ」

「ダービー！！」

嬉しくて、色んな感情の昂りで泣き笑いになってしまう。

「ほれ主。主のお姫様がこっちに手を振っておるぞ。応えてやってはどうだ？」

「…だから公衆の面前でそういう誤解を生む表現はやめれ」

一瞬で体の力が抜けるようなことを言うが、相棒がこいつで良かったと思う。調子こくから絶対聞かせないけど。…伝わってんだろうなぁ。本当に不便な機能だ。内心で溜息をつき、笑顔で大手を振っているエリーに応える。アイツ、慎んだんじゃないのか？まぁいいや。今は、このキュートスの日常を楽しもう。

～第十五話～帰還、その後（後書き）

慌てて書いたんで、なんかまとまりのない回になってしまいました。…いつか、納得いく話を書けるときが来るのでしょうか。…もうそろ時間がやばいんで、それでは皆さん、また次回で。

～第十六話～エリーの手料理、そして…（前書き）

さて、早いものでクリエーター書き始めて二週間弱経ちました。白カカオです。ほぼ何も考えずに始まったこの作品、ほぼ毎日更新していますがちょっと練ってから投下した方がいいのかなぁとか思ってみたり。この設定いいんじゃね？って思って書いたものが意外と創作の王道行ってたとか、割とショックな出来事があったりして。熟練の読者さんからすればどうなのかと、内心気になってます。つうかこの作品どんな風に認知されてるんだろ…。周りの目が気になるお年頃なんです☆…えぇ～…とりあえず、しばらくはこのペースを保つんで安心してください。

～第十六話～エリーの手料理、そして…

その日、城の情報はカオスな事になっていた。

「ありのまま今聞いたことを話すぜ…」

「我が軍が敵勢に押され、敗走しているじゃと…？」

「なっ…何を言ってるかわからねーと思うが、おれも何を話されたかわからなかった。頭がどうにかなりそうだった…」

「なんと、避難ルートは緑竜の森だと！？」

「しかも、緑竜を倒しただと！！？」

「ハルマゲドンだとかラグナロクだとかそんなチャチなもんじゃあ、断じてねぇ。もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…」

「誰かその髪を逆立てたやつを黙らせろ！！！」

…侮れないとはいえ敵の下級種族の軍勢には敗走し、伝説（レジェンド）クラスの緑竜には勝利するという矛盾。その状況をその場で正確に把握していたのは、千里眼でその光景を静観していた国王。唯一人だった。

「アキラ君…君は…」

何かを言いかけ、フッと笑い胸の内に秘める国王。

「我々は、とんでもない男を味方にしてしまったのかもしれんな…」

国王の呟きは、錯綜する城内の誰の耳にも入らなかった。

「アキラ殿！そなたは何を考えておる！！」

僕達がキュートスに到着して一晩明け、城に用意して貰っている部屋でくつろいでいた時、いきなり団長二人が入ってきた。珍しく息を巻いているのはセラトリウス団長の方だった。…で、ハイパー説教タイム。

「そなたは後衛のはずじゃろう！？それが前線で戦闘し、それもあの緑竜と！！奇跡的に…今でも信じられんが本当に奇跡的に勝てたから良かったものの、本来なら軍罰どころの話ではないぞ！」

「いいじゃねぇか、勝ったんだし」

「ええい！そなたは黙っておれ！マドラ団長！」

…早く終わらねぇかな、これ。

ーーー主…自分のしでかしたことに反省の色無しとは、随分と　図太くなったものだな。

だって、今疲労とか精神的虚脱感とかでそれどころじゃねぇもん。一晩で回復しないとは、僕も歳をとったもんだ

ーーーまぁ主がしたことは、言葉が見つからないくらいとんでもないことだからな。

…でさ、そんな状態でもちょっと考えたんだけどさ、ダービー。

ーーー何だ？

僕、今度は西の森にも足を運んだ方がいいと思うんだけど。

ーーー主…あの緑竜を倒したからってまた大きく出たものだな。

違う違う。そうじゃなくて、理由を聞け。

ーーー言うてみよ。

バリアスのことなんだけどさ。あのままにしとくわけにはいかないから、いずれ奪還しに行くじゃん？そこであそこらへんの地理的なことなんだけど。

ーーーふむ…。

あそこって、背後にガラリオン山脈、西に迷いの森、東に緑竜の森で立地としては天然の要塞に近いものがあったと思うんだよね。でも僕が緑竜を倒しちゃったから、東側の守りはもう期待できない。そしてガラリオン山脈もあくまで中立だから、守りは完璧じゃない。今回だって信られないけど、山越えの説が濃厚なんでしょ？そうすると最後は西。ここが崩されれば、あそこは丸裸に等しいわけじゃん？

ーーー主、あそこが丸裸とはなんと卑猥な…

「五月蝿い！…あっ」

セラトリウス団長が青筋を浮かべてプルプル震えている。その後ろでは別の意味でおっさんがプルプル震えてる。これがチワワとかあのゲームのスライムとかなら助かるんだけど…。てゆうか、軽い既視感(デジャヴ)を覚えてるんだけど…

「あの…セラトリウス団長?…寒いとか泣きそうとか、加速の魔法で残像作ってるとかそんなことは

「真面目に聞かんかあぁぁぁ!!!」

「ギャハハハハ!!!」

その後、セラトリウス団長の『超』説教はエリーが夕飯の呼び出しに来るまで続いた。うん、自業自得だということは自覚してる。ごめんなさい。

「まぁ…今回のところは緑竜の討伐という大手柄に免じて、これにて処分無しとしよう」

「ハッ!爺さんの長話は下手な軍罰よりきついぜ」

「…ふん!これは最初から最後までアキラ殿の自業自得じゃわい」

「違えねぇ。小僧!俺は竜殺しの件、褒めてやるぞ。初めての竜殺しが古代竜ったぁ大したもんだ!」

「気持ちはありがたく受け取るけどよおっさん。一度でも難しい竜殺しを、平然とやってのけるあんたのがよっぽどバケモンだ。何だよ幾ら竜と比べて個体値が低いワイバーンっつっても、三桁はねぇ

だろ三桁は。どこのシモ・〇イへだ」

「誰だよそれは。まっ、後は王女のお嬢ちゃんとよろしくヤってろや」

「字体を変えんな！！」

バタンと閉められる扉。長かった…。まぁ団を統べる者としてはセラトリウス団長の説教は至極当然なのでちゃんと反省する。僕はそこら辺はわきまえてる人間なのだ。頭空にしてたらちょっとは疲れ取れたし。

「主が殊勝な態度を取るとは面妖な…」

「馬鹿タレ。そんな展開でこないだは緑竜が本当に出やがったんだ。アレはグレンのせいだけど」

「主…それは絶対違う。流石にグレンが可哀想だ」

「さて…着替えて食堂に参ろうかね。エリーの作った料理か…」

正直、ここまで期待と不安が拮抗した食事も珍しいと思う。ローブを脱いでジャージに着替えるか。

「…なぁダービー」

「なんだ主」

「廊下の方から、不吉なドタバタ音が聞こえるのは僕の気のせいか？」

「いや、私にも聞こえる。しかし主。ここで動作を止めるのはこの後のフラグを受け入れる覚悟が出来たということか？」

今の僕の格好は上半身裸で下はパンツ一枚。俗に言う、パン一だ。そんなことを誰に言うでもなく説明したくなるほど、このタイミングはある意味芸術で、ある意味確信犯的だった。

「いや…でもまさか。お前が期待する、そんなベタなラブコメ紛いの展開には…。そう、これは賭けなのだ。僕が運命という強大な力に打ち勝つ器なのか否か。見てろよ運命の女神。その幻想をぶち

「アーキーラー！おーそーいーっ！！」

開け放たれた扉から、弾丸もかくやという速さで僕に突撃して来る一条の閃光、もといエリー。

「ごぶふぉあっ！！」

そんな質量がそのまま破壊力になる勢いを生身の僕が受け止められるハズがなく。見事に押し倒される。

「エリー？待ち遠しいのは分かるけど、もう少し落ち着い…」

なんというベッタベタな展開。エリーに押し倒される僕。更に僕の格好は上半身裸…っつーかパン一。そんな光景を目に入れ、名状し難いオーラを背中から放つ、セリーヌ王女。

…勝者、ダービーアンドベタな運命の女神チーム。

「…美味い」

意外ッ！それはッ！味付けッ！未熟だがッ！こってりと…あっさりッ！押すところは押しッ！引くよころは引くッ！基本的だがッ！それだけで口内に広がる絶妙なハーモニーィィィィ！！！ブラボー！おぉブラボー！！

「シェフというッ…！聞けば答えてくれる道しるべッ…！そしてッ…！アキラの部屋にあったッ！料理の漫画ッ！見逃さなかったッ…！私はッ…見逃さなかったッ…！アキラにッ…なんとしてでもッ…美味しいと言わせるというッ…『覚悟』ッ…！充分じゃないかッ…それだけでッ！充分だッ！」

「まさかッ…！期待以上だッ…！僕がッ負けるなんてッ…！侮っていたッ…！エリーはまだ子供だとッ…！侮っていたッ…！敗北ッ…これは必然の敗北ッ！！」

ぐにゃあああ。

「勝ったッ…！あのッ！難攻不落と言われたッ…！アキラにッ！ついにッ…！私は…ッ！」

「……何やってんのよ、アンタ達。色々混ざりすぎて元ネタがさっぱりですわ」

ディーン王女の冷静なツッコミに、思わず言葉につまる僕とエリー。エリーは結構頑張ってたのか、相当恥ずかしそうだ。

ーーー主に合わせて必死に覚えたんであろうな…実に健気だ。主の姉君のあけすけなお姉さんキャラや、シーリカのような姉御肌キャラもいいが…エリーのような元気っ子が見せる健気な可愛らしさもやはり捨てがたい…。

お前は何のルート選択をしてるんだ。キャラとか言うな。実体を持たないお前にそのチャンスは永遠に来ないから安心しろ。

ーーー口惜しや…。我も体さえあれば…。

…こいつこれ以上実体がないことでいじれば、そのうち本当に実体化（リアル）しそうで怖い。いつの世界も、性欲（エロ）の力は時としてとんでもない行動力を発揮するからなぁ。主に駄目な方向で。

しかし…

「本当に美味い（マテ）」

食材は基本的に肉、魚、野菜とパンだが、味のバランスが本当に素晴らしい。魚料理を敢えて大味にし、意外にも肉料理であっさりとした繊細な味付けにする。スープも何時間煮込んだのだろうか、野菜の出汁と肉のこってりとしたエキスが、存分に存在感を発揮している。本当に作ったエリーの気持ちが伝わってくる、いい料理だと思う。朝早くからバタバタ慌しい気配がしてはいたが、本当に僕の為に時間をかけて作ってくれたものだ。悔しいけど感激してしまう。それだけではなく、初めての料理でシェフの指導にここまで応えれるのもなかなかの才能だと思う。これなら、将来どこに出しても立派なお嫁さんになるだろう。王女が料理をするのかどうかは知らんが。

「ありがとな、エリー」

隣で僕が咀嚼する様を嬉しそうに眺めるエリーの頭を、わしゃわしゃと撫でる。目を細めて、実に気持ち良さそうだ。だからお前は猫か。

「これでどこに嫁いでもやっていけるな」

さっき思ったことを口に出してみるが、瞬間エリーの顔に翳が差した気がした。

「……そっか…。ありがと、アキラ」

「んっ？どうした？」

「ううん、何でもない。アキラは…」

「んっ？」

「料理が出来る女の子って、好き？」

なんか上目遣いで、値踏みするように僕を見る。…どうした？

「あぁ。奥さんの美味い料理が待ってるってだけで、浮気もせずに真っ直ぐ家にも帰れるってもんだ」

…実際浮気出来るような甲斐性もねぇけどよ！ケッ！

「そっか…なら、もっと頑張る」

「おぅ！頑張れ！」

エリーの顔に、幾らか光が戻ったようだ。ホント…なんなんだ？

「アキラ様のアレ、天然なのかしら…？」

セリーヌが傍で食べる国王と王妃に訊ねる。

「うーん…アキラ様ってたしかにこういう空気って読めなさそうですわね」

苦笑する王妃と、思案顔の国王。国王はたぶん父親として、晶の友人として悩んでいるのだろう。

「あそこまでいけば、最後までしてしまえばいいのに、エリー…」

セリーヌが先ほどの光景を思い出しながら、どちらに言うでもなく呟いた。

ーーーなぁダービー。何この和やかだけど微妙に緊張感ある空気。

ーーー主…頼むから色々気づいてくれ。我の方が気が気でない。

もう…何なんだ。

エリーの手料理で振舞われた晩餐会は、一応成功という形に治まった。

人間、腹が膨れれば眠くなるもんだ。ベッドへダイブする。

「ダービー。さっきの続きなんだけどさ」

「さっきと言うと？」

「バリアスの話」

「ほぅ」

「忘れてたくせに偉そうにほうとか言うなこのヘッポコ指輪」

「主、主。話を進めてくれんか？」

「あぁ、悪い。でだ。ガラリオン山脈の抑えも東の森も当てにならなくなった今、せめて西だけはせめてこっちで確保したい」

「にしても主、勝算はあるのか？相手は生還率ほぼゼロの迷いの森だぞ？」

「まぁ…なんとかなるさ」

「主…それは見切り発車というものでは」

「でも…やらなきゃいけないだろ？あそこらへん一帯がギランに落とされると、一気に向こうに流れが傾く」

「むぅ…」

「まっ、最後に勝つ為には今少しでも無理は必要かなってとこだ。早いうち、団長に掛け合ってみるか。なんなら単独で行ってもいい

し」

この先のことを方針が決まったら、急に眠気が襲ってきた。明日はそろそろ軍の方に顔を出さないとなぁ…。

～第十六話～エリーの手料理、そして…（後書き）

やっと、晩餐会書けました。だんだん外堀が埋まってきた感じになってます。ここでい○ご１００％みたいにどんでん返しも面白いかなぁとか考えてみたり。それではまた明日！

～第十七話～迷いの森、攻略への布石（前書き）

ただいま帰りました、白カカオです。二週間ぶりのバンド練楽しかったです。…三人しかおらんかったけど。そして気づいた方もいるかと思いますが、文学ジャンルで「チーム「H」」という群像小説を連載し始めました。もしよかったらそちらもご愛顧いただけたら幸いです。

～第十七話～迷いの森、攻略への布石

遠征から帰って来て初めて軍部に向かった僕は、セラトリウス団長に面会した。

「セラトリウス団長、先の遠征においては勝手な行動をとり、誠に申し訳ありませんでした」

先ずは謝罪。ダービーのせいで火に油注いじゃったし。

「う、うむ…。その件についてはもうよい。…して、また別の話があるのじゃろう？」

さすが団長。打てば響くとはこういうことなのか。いや、違う。

「話がお早いですね、では今後について僕から提案があるのですが…」

昨日の晩、ダービーと話していた事を説明する。

「うーむ…確かにアキラ殿の話にも一理ある。しかし、今それをするにはあまりにもリスクが大きいのではないか？急じゃし」

「勝算…というか、秘策はあります。そこで、曜が一周する間、暇をいただきたいのです。この作戦を成功させる為に…」

「じゃが、何も聞かずに決行するわけにはいかぬ。一端でよい。教えてくれぬか？」

まぁ一団員の言葉を全て鵜呑みにすいるわけにはいかないからな。

「えぇ…一端というか、ほぼ全容なのですが。この作戦には、僕の世界の妖精に働いて貰います」

「何っ!?アキラ殿の世界にも妖精はいるのか!?そしてアキラ殿は使役できるのか!?」

「使役というか何と言うか。まぁ…色んな意味で期待はしないでください。こちらに迷惑はかけませんし、作戦は絶対成功させてみせますから」

ニヤリと笑う。なんか楽しみで、そしてある意味凄く不安なプランだけど。

ーーー我もその秘策とやらは聞いてなんだが、主がこういう笑みを浮かべる時は、絶対に悪いことを考えておる時だ。我にはわかるぞ。

「うむ…ではアキラ殿が戻ってくるまで、全軍に作戦の準備をさせよう」

「いえ団長。今回の作戦は、森に着くまでの護衛程度で充分です。一個小隊くらいで」

「護衛じゃと?」

「えぇ。向こうの妖精は戦闘技能を持ってないので。ただ…メンバーの中に、シーリカとココ。この二人は入れてください。できれば女性陣気持ち多めで」

「むぅ…アキラ殿の意図が読めんが、『騎士王』と名高い国王が信頼しているアキラ殿じゃ。わしも信用しよう」

信頼じゃなくて信用ね…まぁこの国に来て日も浅い上に、こないだの遠征でやらかした僕を信用してくれるなら、有り難く受け取っておこう。ってゆーか、あの駄目国王、『騎士王』なんて大層な二つ名もってやがったのか。絶対嘘だろ。

その日の昼休み。

「アキラ、また面白そうなことやらかすんだって？」

「あぁ、そういや俺にもさっき団長から伝達があったな。迷いの森に行くんだって？」

「私のとこにも来たわよ。ココのとこにも。ねぇ？」

「うん…私も呼ばれた。なんか…アキラ君の推薦だって…？」

一緒に昼食をとっている、カイム、グレン、シーリカ、そしてココ。カレンおばさんの食堂は今日も大繁盛している。…大方、僕が『人間』のドラゴンスレイヤーとして更に有名になってしまったからだろう。失敗した。落ち着かない。

「ああえ（まぁね）」

口の中をいっぱいにしながらしゃべる。だって美味いんだもん、ここの料理。

「アンタ…飲み込んでからしゃべりなさいよ」

「あいはい」

ゴクリと嚥下したが、如何せん量が多かった…苦しい…喉が痛い…。

「はい、水」

「……ふぅ。ありがと」

ココが差し出してくれた水を飲み干した。あっ…。

「全部飲んじまった。わりぃ。僕の分あげるよ」

「えっ…あ…」

正面に座っているココに水を押しやる。なにやらココが顔を赤くして戸惑っている。

「あっ、ごめん。僕が口つけたやつだもんな。って言ってもココのグラスにも口つけてるし…おばさーん、グラスもうひ

「ううんっ、いいの。これ…ありがとね」

「…?そっか。ごめんおばさん、何でもない！」

なんだかわからんけど、ココがいいならいっか。

ーーー…主、主のそれは天然か？

何がだよダービー。

ーーーいや、完全に無意識なんだろうな。何でもない。

なんだよ、教えろよ。

「でも、何でまたシーリカとココなんだ？」

ダービーの話は棚上げになってしまったが、確かにグレンの疑問はご尤もだ。シーリカは優秀な魔術師だが、ココははっきり言って魔術師としては並だ。だが、今回の作戦にそれ以上に大事な要素をココは持っている。

「今回の作戦のキーパーソンは僕の世界の妖精だ。そして、その妖精を最も効率良く従えるのに必要なのが、シーリカとココなんだ」

「ふーん…よくわからないけど、後で説明してくれるんでしょ？」

シーリカが興味なさ気にフォークでサラダを食べる。作戦なんだからちったぁ関心持て。いや、特に説明することもない…あまり説明したくないや。

「うん。つうか、シーリカとココはいつも通り仕事してくれたらいいから」

「わかった！頑張るよっ！」

ココが目を爛々とさせて返事する。よし、いい返事だ。

「…で、俺達は？」

カイムが興味あり気に聞いてくる。目に何か別の意味で爛々とした輝きがあるのは、何故だろう？

「カイムとグレンもいつもどおり。僕の交渉がメインになるから。…半ば力押しだけど」

「ふーん。わかった」

グレンが肉の最後の一切れを飲み下す。ちゃんと噛め。

「…ということで、今日から少し元の世界に帰るから」

「アキラの世界の妖精か…楽しみだぜ」

グレンが拳で掌を叩く。

「…いや、期待しないほうがいいよ？」

…ということで、帰ってきました。我が家に実に一週間ぶりくらいなのだが、キュートスに行くときゲートの時間を止めてきたので、実際は週末の夜のままだったりする。カモフラージュの為に、しっかり汗かいてから帰宅。

「ただいまぁ」

「おかえりぃ…アンタ、そんな髭生えてたっけ？」

お袋が怪訝な顔をする。やばい、そんなに髭伸びるペース速くないから油断してた。肉体年齢までは止めれないこと、忘れてた。

「ほっ、ほら。一週間くらい走ってたから」

「…何わけわからないこと言ってるの？早くお風呂に入って寝なさい」

「はぁい」

ふぅ…忍法『わけわからないこと言って煙に巻く』成功したな。人は十の嘘で塗り固められた話より、一でも真実が混ざった話の方が騙されやすい。この場合、走ってたって部分が嘘にあたる。ふっ…自分の天才っぷりが怖い。

ーーー主、何も知らない人からすれば頭のおかしい人だぞ。

お前はお前の主を何もわかっちゃいない、ダービー。僕は…分の悪い賭けは嫌いじゃない。

ーーー…もっとまともなやりようがあったのではないか？

ふっ…昔の人はこんなことを言っている。『敵を欺くにはまず味方から』っと。

ーーー主は何と戦ってるんだ…。

風呂に入ろうとシャツを脱ぐと、ちょうど順子が風呂から上がっ

てきたようだ。濡れた髪に、ほのかに石鹸の香りがする。僕は静かにダービーとのチャンネルを閉じた。

「お兄ちゃん！こんなとこで脱がないでよ…ってアレ？傷？」

…さすがにそこまでは想定外だ。異世界で戦争してました…なんて、それこそ頭がおかしい人だ。それでブラコンフィルターが解除されるなら、それはそれで喜ばしいことなんだが…兄妹の交流を永久に失ってしまいそうで怖い。

「いや、熊に襲われてさ。戦って勝って来た」

この場合、熊の部分が嘘。正解は竜。事実は小説より奇なり。

「何無茶苦茶なこと言ってるの。…よくわからないけど、危ないことはしないでね？」

ううん…色んな意味で心が痛い…。でも、ウチの家族があまり立ち入って聞かない人間ばかりでよかった。安心して風呂に入れる。

ーーー主、いきなりチャンネルを切るなんて酷いではないか。

順子のあんな姿お前に見せたら、後でナニに使われるかわからんからな。

ーーー実体の無き我に、ナニに使えるわけなかろう。

…お前に実体がなくて、ホント良かったよ。さて、月曜日が楽しみだ。これが上手くいけば、あっちの作戦は九割方成功したようなもんだ。ジャ〇プも読めるし。

ーーー主…いい歳こいて未だにそんなもの読んでおるのか。表紙になんて書いてあるかわかっておるのか?主。週刊『少年』ジャ○プといえばうるさい。僕は少年の心を忘れないんだ。

ーーー主、世間ではそれを『大きいおともだち』と呼んでおるらしいぞ?

ええい!お前の知識は偏りすぎだ!

～第十七話～迷いの森、攻略への布石（後書き）

なんとか、日付が変わる前に投下できました。間に合った…。明日はリアルにジャンプの発売日なので楽しみです。…出来れば早く金曜日になって欲しいです。給料日まで遠い…。

～第十八話～迷いの森、攻略への布石その２（前書き）

こんばん白カカオです。例の如くバイトがある日はこんな帰宅時間になってしまいます。現在、２３時５０分。日付が変わるまでは…間に合わないな。でも、ほぼ毎日更新のペースは保ってます。日付変わっても、一日休んだわけじゃないからねっ！ねっ！

～第十八話～迷いの森、攻略への布石その2

「おはようございます、香川さん。ちょっといいですか？」

いてもたってもいられなく、今日は二十分前に出勤した。皆えらいびっくりしていたけど、そこまでしなくてもよくね？流石に傷つくぞ？泣くぞ？

始業前に呼び出したのは、設計部の香川さん三十三歳。彼女居ない歴＝年齢。生粋の童帝。つまり、こちらの世界の妖精さんというわけだ。

「なっなんでしょう？かっかみゃ…神谷さん」

困ったことに少々コミュニケーション能力が低い。というか対人スキルが低い。僕は全然気にしないんだけどなぁ…こないだの飲み会、あるゲームの話で盛り上がった仲だし。

「あのですね。今週の週末って、空いてます？」

「あっあの…特には…」

「なら良かったです。香川さん確か同人サークルに入ってましたよね？いいネタを提供出来そうだなと思って声掛けたんです。出来ればサークルの皆さんも一緒に」

ピクリと香川さんの片眉が上がる。眼鏡の奥に光が差したようだ。

「神谷…さん？某どもは幾度となく同人イベントでブースを守り抜いた歴戦の勇者であるぞ？生半可なネタで飛びつくと思うのかい？」

…急に口調が変わりやがった。香川さん、悪い。そのドヤ顔ちょっとうぜぇ。何が勇者だ。こちとら実際に古代竜倒してんだよ。…悪い竜じゃないけど。

「はぁ…私を舐めて貰っては困りますね」

ーーーあるじ主！若干移ってる！口調！

ふぅと前髪をかき上げんばかりの溜息をつくと、香川さんの耳元に口を寄せる。

「実物のエルフや妖精、見たくないですか？」

「えっ…？」

「香川さん、ちょっとトイレ行きましょう」

香川さんの手を無理やり引っ張っていく僕。餌に食いついた香川さんの表情を確認すると、もう楽しくて仕方が無い。嗚呼、策が次々と成っていく様はなんと愉快なことか。

「香川さん。異世界とこちら。行き来出来る事実は知ってますよね？」

「あぁ…しかしそれは国家機密レベルの情報ではないか？」

「…あるんですよ。ゲート。近くに」

「なん…だと…！？」

「偶々、僕の通勤する道に、ゲートが出来てるんです。ねぇ、見てみたいと思いませんか？」

「しかし…証拠がない」

「知ってます？エルフって、本当に美形揃いなんですよ？シーリカもココも良かったし、あとエリー王女もあと何年かすれば…それとも、香川さん達にしてみれば熟す前の果実の方が好物ですかな…？」

みるみる顔色が色んな色に変わる香川さん。

「代償は？この話が嘘であったときは、神谷氏はなんとして賠償とする？」

ビンゴッ！ついに針を喉の奥まで飲み込んだな？これでこの勝負、僕の勝ちだ。

「…次のコミケ、確か一ヶ月半後でしたよね？僕が突貫でお手伝いします。それか、情報捏造して某巨大掲示板で僕を社会的に抹殺してもいいですよ？」

「言質はとったぞ？まぁ後者は我々連邦軍にメリットはないが、前者は…覚悟しておくがいい。我々の戦場は、プロの技術者が泣きをみるほどの死の行進…デス・マーチだ」

悠然と去っていく背中。いや、こんなところで男気見せられても…ここ、トイレだし。

ーーーシーリカやココだけじゃなく、エリーまで巻き込むとは…主、

外道なり。

ふん。何とでも言え。僕は目的の為なら手段を選ばない、非情で冷血な男なのだ。

そしてあっという間に金曜日。待ち遠しい日とは、案外早く来てくれるものだ。現在、午後の八時前。約束の八時まであと数分を残し、何と香川さんのサークル、全十二名が揃っている。うーむ…実に優秀だ。

「さて、恐れ多くも我らリング・トゥエルフを呼び出したのは彼かね？香川中尉」

誰が円卓の騎士だ。だれが中尉だ。

「うむ…神谷三等兵。心の準備はよろしいかな？」

誰が三等兵だっっ！！！くそ、やっぱりこいつら、腹立つ。しかし煽りも煽られも僕だって修羅場は潜ってきている。そう、僕らの巨大掲示板でッ！

ーーー主…なんか色々方向性を見失っておるぞ。

えぇい！こまけぇことはＡＡ略。…おっと、いかんいかん。こいつらのペースにかき回されてはいかん。それこそ、カ○ッサ機関の思う壺だ。

ーーーいや、主…全っ然直っとらん。

「…ごほん、それでは皆さん、今宵はマッド・ティー・パーティーへと洒落込みますか」

ちょっとかっこつけて手を翳してみる。きっと、さっきまで崩れていた反動だ。ダービーを嵌めた右手を虚空へ広げると、その変化はすぐにやってきた。

「なんと…これが…」

「ゲート!?」

「本当にあったのか!というより…」

「神谷三等兵が作り出したのであるか!?」

なんか最後気に食わない感じのこと言われたするけど、まぁこうやってさっきまで小馬鹿にしていたやつらが驚いているとこを見るのは、実に気持ちがいい。

「…って、え?なんかこないだとちょっと違くない!?」

そう。前回も前々回も、ゲートは黒い影が回りながら一定まで広がっていっていた。しかし今回は…。

「なんか…うねってる?」

外周が、ちょっとうねうねしている。それもう、しっかり視認出来る位に。それに、こないだよりでかくない?

「主！こやつはゲートではない！『外なる神』、ヨグ＝ソトースだ！！」

……ヨグ＝ソトース…だと…！？

～第十八話～迷いの森、攻略への布石その２（後書き）

今回は気持ち短めで。一端区切った方が、展開的に読みやすくなるかと。しかし、ネタは書いてて楽しいです。皆さんに伝わっていればですけど。実は私自身元ネタを理解していないトコもあるのですが、それはご愛嬌ということで。それと、オタの方々は一昔前のステレオタイプをモデルにしています。私自身偏見とか一切ありません。…同類だし。不快に思った方、いたらすいません。

～第十九話～迷いの森、攻略への布石その３（前書き）

…はい、白カカオです。えぇー…今、帰りました。我ながらこの帰宅時間には驚いてます。現在零時半前。バイト先でたとき既に零時回ってたという…。あっあと最近自分のページっつうかこの作品のページの『一緒にお気に入りされてます』ってとこ見てたら、どうやらランキング上位のお作品や大御所さんのお作品と一緒に並べてもらってるみたいで…非常に恐縮してます。…なんかこんなこと書いたことある気もしますけど。いつか少しでも肩を並べれるように精進するんで、改めて応援してください。

～第十九話～迷いの森、攻略への布石その３

『ヨグ＝ソトース』…あのクトゥルー神話に出てくる、クトゥルー、ハスター、ヴルトゥームの生みの親である『外なる神、アウター・ゴッド』。「全にして一、一にして全なる者」「門にして鍵」の異名を持つ神性。なぜここに…。

「拙い主！あの者達に防御を！耐性の低い者は、火脹れや組織の乾燥、骨の露出を起こしてしまうぞ！」

「ようはとんでもないダメージを受けるってこったな！アクアリウスッ！あいつらを守れっ！」

「イエス、マスター」

急いでアクアリウスを召喚する。なんか呼ばれ方変わったか！？…なんて細かいことに突っ込んでる場合じゃない！僕の魔力の半分を、アクアリウスへ！

「主！それでは自分の分が！」

「おぉぉ！美女キタコレ！」

「あぁ、女神さま！」

「こら！お前ら腰折んな！そして伏字にするのも場面的に微妙な発言すんな！」

…あいつら、案外余裕だな。やっぱ魔力の供給、減らしてやろう

か。

「マスター、なんか、あやつらあまり相手にしとうない」

僕の後方で水で出来た半球の護封壁を張り続けながら、アクアリウスが乞うような視線を飛ばしてくる。

「奇遇だなアクアリウス。僕もちょうど似たような事を考えていたところだ」

でもこれで万が一あいつらに何かあったら、後で面倒なことになりそうだしなぁ…。訴訟とか裁判とか、通報しますたとか。しょうがないから第一優先で守ってやる。自分の為に。

「なぁ、ダービー」

「なんだ？主」

「あいつ、神性だろ？僕の？お前の？力に取り組んでやろうかと思うんだけど、どうだろ？」

「なっ！？」

「出来ると思うんだけどなぁ…あいつは時間と空間を自由に行き来出来る門の神性。僕は時の属性を持つ魔術師に、お前は神を従える指環。やってやれない事はないと思うんだよね」

周囲にはヨグ＝ソトースと僕の間に行き来する膨大な魔力で、局所的に暴風が起こっている。魔道嵐というべきか。イメージ的には、赤い着流しの某ニート侍が時々剣気とやらで起こす、アレ。これで

僕とダービーのこの会話があいつらに届く前に霧散させている。まぁそういう世界に今から連れて行くんだから、聞かれたところで特に何も無いけど。ゲート（？）開くとこ、見せちゃったし。

「そんなこと！今までにそんな無茶苦茶なことした主はおらぬ！危険過ぎる！」

「今までは…だろ？じゃあダービー。今まで時と他の属性を同時に持って、膨大な魔力を持った主はいたか？」

「ぬぅ…」

ーーー確かにここまでの魔力を持つ主はいたことはいたが…ここまで設定が規格外の主はいなかった。

「緑竜が、教えてくれた気がするんだよ。神に近い古代竜をも下す力を、僕は持ってるんだって。そんな存在を倒せる力を持ってるなら、お前を以ってして出来ないはずがない！」

そう、僕の後ろには力を持たない者たちが脅威に晒されている。…あんなやつらでも、巻き込んだ以上僕が護らねばいけない存在。なら、こいつを倒さなければ護れないなら、きっと僕は出来る！やらなきゃいけないんだ！

「主の力が…上がった？」

覚悟とは心の強さ。魔術の基本にして極意が心なら、今の晶に勝るものは無い。

「うおるあぁぁぁぁ！！！」

一歩一歩、ヨグ＝ソトースに近づいていく。魔力の嵐に負けない『心』が、宇宙規模の神性に負けない力を示す。歩くこと僅か数歩。ついに晶の手がヨグ＝ソトースにかかる。

「あっ、が…あああああぁぁぁぁぁ！！！！」

「主っ！」

「マスター！！」

膨大という言葉が生温い程の力の奔流に触れ、アクアリウスに向けられる魔力が一瞬不安定になる。しかし涙目になりながら、持ち堪えると、残った魔力を自動（オート）でかかっている自分の防御の分までヨグ＝ソトースに注ぎ込む。触れた手が火脹れする。

「主！何を！」

「なに、魔力に上限があるなら、逆にそれ以上の魔力は保持し得ない。パンクするってことだろ！？ならっ！パンクするまで送り込んでやる！触れて感じた！こいつはたかがヨグ＝ソトースの一部だ！一部ならタンクの容量も小せぇだろ！やってやるよ！護る者がいる強さ、盲目白痴な神サマに見せてやるよっ！！」

あいつらは確かに若干気に食わないとこもあるけど、こんな神サマの気まぐれで消されていい人間じゃない。ほら、なんだかんだ言って、心配そうにこっちを見てるじゃないか。悪いやつらじゃない。なら充分に護ってやる価値はある。護る為の戦い、僕の信念を懸けた戦い。この戦いで勝てないんじゃ、僕の意思が無価値になる。勝たなきゃいけない。ほうら、侵食が手首で止まっている。火傷です

ら、この程度じゃ致命傷には到らない。僕は、負けてない。負けてないなら…勝つまで粘ってやる！

「いい加減諦めやがれっ！！この虹野郎がっ！！」

ゲートに纏わり付いた触手のような腕が、鈍く虹色に輝く球体に変化していく。晶に魔力を送り込まれ、牛乳に酢を入れられたようにカタチが固定化されていくヨグ＝ソトース。晶の力が、逆にヨグ＝ソトースを追い込んでいた。

「跪けぇっ！！僕は魔術師アキラ！！ヘブンズ・ゲートを従え、大魔導士になる男だあああああ！！！」

渾身の魔力を込めると今までの圧力が一瞬膨れ上がり、嘘のように退いた。硬質の、野球ボール位の虹色に輝く球体が晶の足元に転がる。魔道嵐は霧散し、辺りの風景が正常に戻る。

「ヒトの想いの力…一部とはいえ、宇宙を覆う神性すら退けたか…ってんなわけあるか！！それで解決するなら人類皆スーパーサ○ヤ人化しておるわ！！」

ダービーのツッコミが聞こえるが、例の如くドサッと倒れこむ僕。今回は、奇跡的に意識は保っている。

「マスターッ！」

アクアリウスが、忘れていたかのように今護封壁を解除し、僕の元に駆け寄る。

「こんな無茶をして…寿命がいくつあっても足りないわ。私、寿命ないんですけど」

そう言いながら、僕に回復魔法をかけてくれる。そういや無我夢中で感覚なかったけど、最終的に下腕半ばまで侵食を受けていたらしい。ある所は火脹れし、ある所は著しく乾燥し、骨も見えんばかりになっている。我ながら痛々しい。こんな状態でも指輪はしがみつく様に指を離さない。相当だな、ダービーも。そういや、シャウトしっぱなしで喉も痛い。

「我の魔力も分ける。これで体力も歩ける程度には回復するでしょう」

「んっ…サンキュ」

何故か知らんが僕が治癒を受けている間、円卓の馬鹿共が羨ましそうにこちらを見ている。ちなみにその僕の状況は、仰向けに倒れている僕にアクアリウスが跨り、僕のシャツを捲くり剥き出しにした胸に手を当てている。アクアリウスの格好は素肌に薄布一枚。…入ってはいない。断じて！入ってはいない！

「あのさ、アクアリウス？もうちょい違うやり方があるんじゃないかな？」

「ふふ、マスター？直にマスターの体に触れるほうが、マスターを感じられ、奴隷である我も力を発揮出来るというものよ？…んっ。あっ…」

「馬鹿タレ！！紛らわしい表現と声を出すな！！」

「はぁんっ！マスターの、凄い…力抜けちゃう…」

「主…人間やエルフだけでは飽き足らず、ついに神まで手篭めにしたか…」

…僕はそっと、しかし有無を言わさぬ強制力で馬鹿（アクアリウス）を還す。変態（ダービー）は、傍に転がってるヨグ＝ソトースの球体にガンガンぶつけてやる。

「主！おぐっ！あるじゃ！悪かった！悪かった！許してくれ！ぶへぁ！」

ほうら、硬質化したヨグ＝ソトースは痛いだろう？もう、主に逆らう気も失せるだろう？

「うぅ…神器と神性をこんなに雑に扱う主は初めてだ…」

「自業自得だし、逆にお前が今までこういう目に遭わなかった方が不思議でならない」

ふと視線を向けると、円卓の馬鹿共が何かを必死に耐えるように前屈みになっている。ときどき、オゥフ！とか言ってるけど、あえてシカトする。もういいよ、このくだり…。

「思わぬことに時間を食った。おい、そろそろ行くぞ」

時間は九時を回ったあたり。あの戦闘がたった一時間弱の間の出来事ということに驚きだが、そろそろ行かないとまたエリー達に迷惑かける。アクアリウスが馬鹿なことしたせいで回復は中途半端だけど、歩けない程ではない。

「うっ…某はもう既にいっているござる」

…黙れ。こいつらヨグ＝ソトースはともかく、「女」にも耐性なかったのか…。いや、わからんでもないけどさ。もうなんか、ダービーが話してることになんらリアクションしてこないし。しゃべる指輪よりそっちの方が衝撃的だったか。んっ？そういや、

「なぁダービー。こっちって、基本的に魔法使えないんじゃなかったっけ？」

「アレは非常事態だったゆえ、我の力の一部を開放し、一時的に限定解除した。この世界にとっては不自然な事だから反発が強く、それだけで精一杯だったが」

「なるほど。だからアクアリウスに魔力送った時、相応にしか供給出来なかったわけだ」

納得してヨグ＝ソトースを無造作にバッグに放り込むと、半ば強制的に後ろの野郎共のケツを叩き正常化したゲートを潜った。

「おかえりなさい…アキラ」

前回と同じ轍を踏むものかと身構えた僕に反して、エリーが落ち着いた微笑みを向ける。調子が狂う。何かあったのか？

「あぁ…ただいま」

んっ？ただいま？これは挨拶が違くないか？僕はこっちでは食客だぞ？…護国騎士団には所属してるけど。

ーーー細かいことはいいではないか、主。故郷は幾つあってもいいものだ。

んっ…そういうもんだな。ってダービーがまともな事を言ってるぅ！？本格的に何かあったか！？

「私は千里眼で先ほどの戦い、全て見ておった。アキラ君…大したものだ。アキラ君の勲功、君の帰りを一番首を長くして待っていた愛娘には教えてやっても、構わなかったろう？」

僕に近づいてきた国王まで、落ち着いた面持ちで話しかける。これはマジで天変地異の前触れか！？

「心配したんだよ？アキラ…緑竜こと聞いた時も、今回も…」

あぁ、そういうことか。そりゃ悪いことをしたな。

「悪い。でも、僕は大丈夫だから。護るべき者がいればさ」

涙を溜めているエリーの頭を優しく撫でてやる。エリーが僕の胸に顔を押し付けると、ようやっと後ろの面子に気が付いた。こないだ昼食を一緒に取った、四人。シーリカがニヤニヤしてこっちを見ている。こっち見んな。ココは…どうだろう？暗いし、長い前髪に隠れてよく見えない。

すると突然、後ろから声を掛けられた。

「神谷三等兵…いや！お師さん！！」

エリーにシーリカ、ココの姿を視界に入れた円卓の馬鹿共の目がキラキラ輝いている。ある意味純粋無垢な瞳で。

…まず言いたい。お前らのどこがサ○ザーだ！！聖帝じゃなくて童帝だろうがお前らは！いや、確かに『（二次元への）愛深き故に（三次元への）愛捨てた男』だけどよ！

「アレが…アキラの世界の妖精…いや、違う…むしろ…オーク…」

グレンはすっかり色を無くしている。だから言ったろ？期待すんなって。そしてその横で馬鹿笑いするカイム。ああもう！毎度毎度収拾つかねぇなこいつらは！

～第十九話～迷いの森、攻略への布石その３（後書き）

なんか前半部分が思ったより長くなってしまい、大変でした。それとクトゥルーについてですが、一応神話は神話なので組み込みました。なるべくバランス崩さないようにオリ設定などで調整していきます。そして…ようやくタグに最強とハーレムを入れる覚悟が出来ました。だってチートがとどまる所を知らないんだもん、主人公。そっちは書くつもりなかったんだけどなぁぁ…

～第二十話～作戦決行《前編》（前書き）

昨日途中で寝落ちして更新できなかった白カカオです。だって家に着いたの零時半前なんですもん…ついつい話し込んでしまった。口から先に産まれてきたんだと思います。タラコだし。じゃあ鼻から産まれたらもっと鼻高くなったのでしょうか。あと、昨日今日とアクセス数が跳ね上がりすぎて驚いています。何か、悪いことでもしたのでしょうか。告白されたら真っ先に罰ゲームを疑う白カカオです。

～第二十話～作戦決行《前編》

ーーー主、主？

香川とやら達を宿屋に任せ、我が主は城の一室に着くなり熟睡してしまった。まぁ短時間とはいえ、あの、ヨグ＝ソトースと激戦を繰り広げたのだから仕方が無い。

…というより幾ら才に恵まれているからと言って、人間が外なる神に勝つなぞ聞いたことが無い。主の一つ前の世代の世界、マサチューセッツ州のダニッチという農村で、ヨグ＝ソトースと人間の間に産まれた異形を倒した学者連中ならいたが…それだって、異形は脅威だが外なる神ほどは勿論力はないし、一人ではなかった。それが…一部とはいえ、ヨグ＝ソトースを、しかも一人で立ち向かい撃退しただけでも凄まじいのに、更に最後まで魔力が枯渇することはなかった。マドラ団長と対決したとき、あの緑竜を倒した後、魔力切れで意識を失ったあの主がだ。前代未聞どころの騒ぎではない。内包魔力量が人間とはデコピンとＮ２爆雷ほど差がある神々でさえ、アレを相手どるには相応の代償は覚悟する。いや、単体では勝つのも難しいだろう。外なる神とはそういう存在なのに…。

ーーー有り得ない。主はまだただの人間だぞ。だが……芽生え始めているのか…？主の心臓に…。

我が主となる者に宿るという『無限の魔力（エターナル・マナ）』。何人もの主に仕えてきたが、終ぞそれを発動しえたのは我を生み出した創造主（クリエーター）のみ。まさか、主が…。しかし、それなら…死闘を重ねる内に主の中に無限の魔力が芽生えたとしたら、その種が成長しているとしたら…。マドラ団長の時は己が魔力のみで戦い気絶したが、我も手を貸したが限界を超えて魔力を供給して緑竜を倒したこと、本来なら自然に

増えることがない魔力値が増えていたこと。そして瞬間的に、外なる神すら撃退しえるほど魔力が上がったこと。全てが解決する。そして主に待ち受ける幾多の試練に、必ずや主に必要になるだろう。

しかし…

ーーー恐らくアレは、使えば使うほど成長するタイプの代物…。最後には、ヒトの枠を越えてしまう…主は、主は人間の主だからこそ良いのだというのに…主が人外の存在になってしまったら、我は…。フッ、我も大概に主に誑されておるな…人のことを言えぬ…。

主と出逢い、信頼という名の心地好さを知った。人を大切に想うという優しく、温かな心を知った。人を護るという、強さを知った。創造主は人間に負の感情も等しく与えたが、それでも人間はこんなにも美しい。全て主が教えてくれた。口は悪いし扱いもぞんざいだが、本当は主は誰よりも優しい。常に繋がっている我には主の心の機微が分かる。本当は我の事を言えない位邪で小賢しいところもあるが、それも含めて主は『人間』そのものだ。だからこそ、我は主を気に入った。いや、好きである。心酔している。アッー！な方向ではない。断じてない。こんな主だからこそ、我は喜んで仕えようと思った。主の選んだ道なら、我は喜んで力を振るおう。そんなことは絶対にないが主が世界を敵に回すなら、我は誰にも負けぬ力をやろう。今では、主の力になることが喜びでさえある。…しかし、主が力を使えば使うほど、無限の魔力を増長させる。そして、その機会は何度も訪れるだろう。なんという皮肉なことか…。

ーーー我を創り、我が初めての主、創造主…貴方は、何を考えておるのですか…？これは、貴方が作り、貴方が望むシナリオなのですか？創造主…。何故、我が初めて心を開いた、アキラなのですか…？

ダービーの呟きは虚しく月夜に消え、静寂だけが辺りを支配して

いた。

「さぁて、向かう前に一つ言っておく。お前らだ！円卓の馬鹿共！」

ここはキュートス北の城門のすぐ外。昨夜はダービーが茶々を入れる隙もなく爆睡したから、すこぶる調子がいい。僕の前にいるのは、騎士団十五名、魔術師団十名、僕の世界の妖精ども。そして…

ーーー私も行く！二度もあんな心配させて、またお留守番なんて絶対に嫌っ！私も一緒に行く！今回は絶対譲らないからねっ！！

…と、駄々をこねてついて来る事が許可されたエリー。生きて帰って来れる保障などどこにも無い迷いの森などに！！っと王妃は反対していたのだが、国王が僕がいるから大丈夫だと説得したらしい。…その件は王妃の心証に賛成。まぁご都合的に秘策が一つ増えたから、国王の言う事も実は正解なんだけどさ。馬鹿共の別に必要ない士気が上がるけど、そこは置いておこう。エルフ側の男衆の士気も、ついでに上がってるし。特に、グレンとかグレンとか、あとグレンとか。

「お前ら…お前らの為に今回の作戦は女性を多めに配置して貰った。一応連れて来た理由も理由だから、そこはお前らにちゃんとメリットを立てる。…皆にはもう色んな意味で申し訳ないけど」

ちなみに今回は騎士団の内七名、魔術師団の内五名が女性で構成されている。出兵にしては有り得ない男女比だ。別に差別するわけじゃないけど、やっぱりフィジカル的な強さは男性に軍配が上がるから、このようなことは普通有り得ない。だが討伐や制圧が目的で

はない今回は、残念キーパーソンの為にこの構成でよしとしようと判断した。セラトリウス団長も相当渋い顔してたけど、最終的に納得してくれた。マジ心広い、あのお方。

「だが…」

ーーーブォン…ザシュッ！！

大地から薙刀を召喚し、地面に突き刺す。仕掛けは、地中深くの地質から金属分を凝縮、同じく地中のその圧力と熱量で成形、さらに時の魔法でその過程にかかる時間を短縮。出来た薙刀をその上部の土に働きかけエレベーターよろしくここまで運んでもらった。だから召喚と言っても実際は地面から飛び出してきたに近い。何で薙刀かというと、剣術の心得はないし、剣を使うような間合いだと即死亡コース。槍だと長い間合いで戦闘出来るが、かわされたらそこから切り返せるような技量がない。石突とか出来ないし。故にこちらも振り回してるだけでも中距離までは牽制出来て、槍よりも小回りが利く形状をしているからとしか言えない。うーん…今度来るときまでにもっと僕的に使いやすそうな武器調べよう。三国志あたりで。つうか今回別に白兵戦闘しないけどな！とりあえず武器を出そうと思って出て来たのが、これ。出した理由は、

「この世界でここの住人に下手に手を出そうとしたら、僕が叩き切る。それを元の世界で裁こうという事を思う人もいるだろうから、連帯責任。全員殺す。ただし鑑賞する分には自由。いいね？」

この脅しの為。それ以上でもそれ以下でもない。だってこうでもしないと何するかわかんないし、こいつら。

「「「サー！イエッサー！！」」」

全員が一切のブレも無く敬礼する。お前らは某隣国の兵隊か。その周囲では、呆気に取られている護国騎士団の方々。たぶん土魔法をこういう使い方するという、発想とか知識とかないんだろうなぁ…。魔法ってイマジネーションだし、イマジネーションは知識という下地がないと浮かんでこないから。

ちなみに、僕がこの作戦の責任者。僕が立案した作戦っていうのと、たぶん竜殺しの名声も一役かっている。なんだかんだ言って、名声って時に便利なんだね。じゃないと、ぽっと出で異世界人の僕が隊をまとめることに納得するわけがないし。

「そして騎士団の諸君。今回の作戦は知っての通り、後のバリアスの奪還及び、ギラン側からの侵略に備えた、今後を左右する作戦だ。東の森の主が倒れ、ガラリオン山脈の守りが不完全になった今、悪名高いあの森を押さえられれば、戦況はグッとこっちに傾く。たかがこんなオー…妖精どもの護衛とはいえ、気を抜くな！こいつらはこんなだが戦闘技能はまるでない。お前らが護ってやってくれ。そして、迷いの森まで無事に着いたら、あとは僕が全てやってやる。絶対成功させてみせる。お前らがこの『竜殺し（ドラゴンスレイヤー）』アキラについて来た事、後世まで自慢させてやる！さぁ、僕らで未来への礎を築こう！！」

ワァァァ！！！

たかが三十人弱とは思えないほどの、エルフの騎士団の喚声が大地を揺らす。時々、セラスの地に平穏を！っと聞こえるがこれが彼らの掛け声なのだろうか。

ーーー主も大したものだな。この人数を前に淀み無く事を進めるとは。残念妖精で下がった士気を、上手く盛り上げる。…だが主よ。

緑竜を倒したのは主であるぞ。

こちとら検査官とはいえ、時には開発会議に出張して、プレゼンとかやってんだ。たかが一クラスにも満たない人数くらいなんだ。あと、細かいツッコミ禁止。

ーーー主はしょっちゅうツッコんでおるではないか。

…五月蝿い。

「アキラ…かっこいい…」

何暢気なことを言ってるんだエリー。今馬鹿どもの視線が向いてるのは、何故か僕の横に居るお前だぞ。

そんなこんなで出発。今回は荷が少ないから、馬鹿どもと僕、エリーは馬車で移動させて貰った。道中、何度かコボルトとか、湿地帯ではスライムとか出て来たけど、難なく撃退してきた。いやぁ、ちゃんと見たことなかったけど、本当は強いねこの人たち。全く危なげない。状況が揃ってると、こんなに強いのか。…まぁ、所詮コボルトスライムレベルだけど。ちなみに格は、先のゴブリンよりやや下の程度。実はゴブリンは単体で僕の世界でのライオンとか熊とかより強かったりする。その下でも、僕らただの人間が遭遇すると簡単に命を落としかねない。毎年野生動物相手に何人もお亡くなりになってるじゃん？

ーーー主…どの口で『ただの』などと言うか。

だからツッコミ禁止。魔法が使えないと、僕は無力な一市民だ。

ーーー主は町民だろうに。

五月蝿い五月蝿い！田舎の何が悪い！最寄のコンビニまで普通自転車使う距離で何が悪い！ジャ◯プはちゃんと月曜日発売だこのやろー！！

ーーー主…泣いておるのか？

その日、僕は初めてダービーに口で負けた。こいつ口、無いくせに。

その森は昼というのに闇を内包していた。正面から見ると、非常識な位高い木々。平原ばかりのセラス、ガラリオン間に、明らかにその森は異質で異様な存在感を放っていた。

「…よし、行くか」

尻込みする団員らに気合をかける。生還率、ほぼゼロパーセント。この死の森を目にしては、当然の反応かもしれない。

「大丈夫、万に一つもないけど、そんな事態になったら、皆だけでも外に出すから。ほら、お前らも。円卓の馬鹿ども。もうひとつのお目当ての妖精は、この奥だ。」

そう言うと、僕は森に足を踏み入れた。馬車の馬達には、少しの間お留守をしてもらう。この作戦の責任者と、自分で言ってはなんだが団員にしてキュートスの要人である僕が先導すると、他の皆も

ついて来る。円卓の馬鹿どもも重い足を上げる。優しく言ってやったのが利いたのかな?たまには飴もあげないと。

ーーーいや、主。たぶん敵が出るようなところに自分達だけで居れないだけだと思うぞ?

あっ、なるほど。クソッ。飴やって損した。

森に入ること数時間。僕達はベタな手に引っかかったようだ。

「クソッ!またここじゃねぇか!おいアキラ!どうなってんだよ!」

グレンが僕に当たる。お前がご執心の、僕の腕から離れないエリーがジト目で睨んでるぞ?まぁお前の文句も無理ないけどさ。あとエリー。そろそろいい加減疲れたから離せ。

「たしかに疲れたし、もう頃合いかな?」

歩き始めてから、どうやら同じところをグルグル回っていた僕ら御一行。ベタに、木に印をつけていたのが災いしたか。

ーーー主…、ベタとわかってて何故やるか…。

お約束は踏襲しないといけないだろう?ほら、念の為バッグに入れてたパンをちぎったりして。

ーーー主はお菓子の家にでも行こうとしておるのか?

うっ…そろそろ周りの目が痛い。足場の悪いところの行軍は、どんな予想をも上回るほど兵を疲弊させた。

「…いるんだろ?見てるんだろ?この森の主。そろそろ姿見せてよ」

僕が虚空に笑いかけた途端、辺りの景色が崩れて開けた。幻影(ミラージュ)か。木々に囲まれた、綺麗な湖の湖畔に僕らは立っていた。

「ホッ、小人族(ホビット)!?」

意外なことにそこには、セラトリウス団長のように白髭を垂らした、小さな老人が立っていた。

「…正確には、小人族と妖精の混血じゃ。名はトルド・ウォーレンという。お前か、東の緑竜を倒した人間は」

身長に見合わない威圧感が周囲を包んだ。

「なんで、わかった?」

「お主から、あの竜の匂いがする。気のいいやつじゃったのに…」

うっ…やめれ。心が痛い。すっげぇ痛い。泣きそう。

「我が主を責めるのは止めよ、ウォーレン。あれは不幸な行き違いだ。緑竜も納得しておる」

「ほう、ヘブンズ・ゲートか…。持ち主を非業の死に追いやる。呪われたアイテムよ」

～第二十話～作戦決行《前編》（後書き）

さて、中途半端なところですが、一端区切ります。次回、後編お送りします。…ちゃんと、明日に。

～第二十一話～作戦決行《後編》（前書き）

ども、白カカオです。美容院行ってきました。頭がずいぶん軽くなりました。震災直後以来でしたからねぇ…伸びるわけだ。それより最近皆さんのリアクションが多く、えらい嬉しい思いをしてます。ありがとうございます。よし、今日も阿部真央聴きながら頑張ろう！

～第二十一話～作戦決行《後編》

「ぐっ…」

ダービーが言葉に詰まる。駄目だ。今のはちょっと許せない。僕の相棒を今、愚弄しやがった。傷つける一言を言いやがった。

「訂正しろウォーレン！ダービーは呪われてなんかいない！」

「主…よい。今までタイミングがなく言わぬままだったが…事実だ」

「けどっ！」

「…して、お主らは何の為にこの森に来た？」

ウォーレンが冷淡な瞳で僕らを見る。落ち着け…泣きそうなくらい腸煮えくり返ってるけど、ここで激情に身を任せたら、何のためにここに来たのかわからなくなる。落ち着け。こいつにほえ面かかせるのは、後で出来る。

「この森を、セラス側の人間に開放して欲しい。正確にはセラスの者にとって、『迷いの森』ではなく普通の森として受け入れて欲しい。お前達もわかってるんだろう？緑竜が倒れ、ガラリオン越えをしてきたギランのやつらにとって最早セラス側の防壁は、ここだけなんだ。お前達もセラスの地に住むものなら、わかってくれるだろう？勿論この森を開放してもらっても、好き勝手はしない。敵がこの地で暴れて助けが必要なら、こちらも手を貸す。交易だって、少しずつでもそちらに良い方向で考えていく。だから…頼む。」

声を絞り出してなんとか理由を話す。しかし、腕を組んでいるウォーレンの仏頂面は変わらない。

「くだらん。こちらにとって、メリットがない。ギラン側からの侵攻に対しては、今まで通りで充分こと足りる。それに、この森は自然のままに生きている。交易などいらん。開放してみろ。いくらお前が大丈夫だと言っても、どこにも無法者はおる。そんなやつらを入れとうない」

「じゃあこの森に消えていった者は全て無法者だって言うのか！？そんなわけがないだろう！」

「ふん、そんなもん知らんわい。疑わしきは全て罰するのがワシの遣り方じゃ。そうして、幾年もの間この森を守ってきた。さて、交渉決裂じゃ。どうするのじゃ？お主。この森に来て、易々と帰れると思っておるのか？あの優しき緑竜を殺しおった、人間風情が」

いつの間にかウォーレンの周りに、小人族や妖精が集まってきた。皆僕の腰上位の身長で、女の子の妖精はさらにそれより小さい。ゴクリという音と共に、騎士団の皆が晶を見る。

「ここに、エルフと別に僕以外の人間がいるだろう？」

「？」

「こいつらは、三十歳を越えてなお己の貞操を守り続けていることによって人外に進化した、僕の世界の妖精だ」

ーーーものは言い様だな。実際はただの童貞の連中だろうに。というか、人外とはちと酷いな、主。

「こいつらは僕が本来の力を封印している。しかし、ある一言呪文をかけることによって、この森の住人を恐怖のドン底に叩き落す程の力を発揮するだろう。たった一言、『お前ら、あの妖精(ようじょたち)と小人族を死ぬほど愛でていいぞ』っと言うだけでな」

円卓の馬鹿どもの目がキラリと輝くと同時に、妖精と小人族に一斉に悪寒と寒気が走る。黒目がちのつぶらな瞳をした何人かの妖精が、体を震わせウォーレンや大人にしがみつく。涙目になって怯える彼女達、うぅ、なんかちょっと悪い気がしてきた。つうか、何もしてないのにここまで怯えられるこいつらもある意味すげぇ。

「こいつらは女子供が大好物だからなぁ！ハァーハッハッハ！！」

ーーー主、今の主完璧に悪者だぞ…。

「ふん、脅しか。しかし幻影(ミラージュ)で惑わせてしまえば済む話じゃ」

「一つ教えてやろう、ウォーレン。人の力は想いの力。一途に研ぎ澄まされた想いは、どんな魔法をも貫く。それも、性欲なんて本能に準じた感情なら尚更なぁ！」

ーーー主、言ってて情けなくなってこないか？

…五月蝿い。実際僕がヨグ＝ソトースに勝ったのは想いの力だ。その後性欲が出てきたのはちょっと…アレだったけどさ。クソッ、あいつらのレベルに合わせた発言をすると、なんでか締まらん。一途な性欲とか…たしかに情けなくて溜息が出る。つうか、後ろの騎士団の連中の呆れたような顔がオートで再生される。クッ…耐えろ、僕。

「何をわけのわからんことを」

「それに…」

バッグからヨグ＝ソトースの球を取り出す。ダービーの力で抑えていた瘴気をあえて少し開放してみせる。こっちの世界に来て、何故か少し活性化したこいつを、抑え込むのはなかなかしんどかった。ダービーの魔力の媒体は、あくまで僕の魔力だし。エルフの一団からはざわつきが聞こえ、ウォーレンの眉がピクリと動く。

「それは…」

「僕がこの世界に来る前に偶々退治した、ヨグ＝ソトース。外なる神だ。こいつは時間と空間を自在に行き来出来る門の神性だ。こいつの力を借りれば、簡単にここから出られるさ。さぁ。どうする？」

ウォーレンが表情を歪める。チェックメイトだ。

…不意に辺りに静寂と共に、ある圧倒的な存在感が現れた。

「ユニ…コーン…？」

湖の畔に、淡く儚い光を全身から放ちながら、一頭の一角獣（ユニコーン）がどこからか現れた。ここは、ユニコーンの縄張りなのか？

「そうじゃ…清浄と処女を好むあの幻獣。あやつの恩恵を受け、わしらは生きておる。簡単に、ここを開放するわけにはいかんのじゃ…」

なるほど…。溜息が漏れるほど美しいその姿は、見るもの全てを

魅了する。そして生え変わり落ちた一角獣の角には、どんな怪我や病気も治す効果がある。それを悪用せんとする輩は五万といるだろう。

一角獣がこちらに気がつくと、突然目の色を変えてこちらに突進して来た。

「いかん、主！あやつ、ヨグ＝ソトースの混沌（カオス）の魔性に、この聖地が侵されたと思っておる！」

それはヤバイ。あの突進を喰らえば、この場に居るどんな者でも命を落とす危険がある。急いでヨグ＝ソトースに封をかける。

「っ！？拙い！フェアリーが！」

こちらへの進路上に、妖精の女の子が二人挟まれてしまっている。突然の事態に、体が動かないらしい。クソッ！今からじゃ間に合わない！僕は交渉しに来たのであって、誰かに危害を加えにきたのじゃないのに！

「あっ！」

「きゃっ！」

二人にぶつかると思った直前、巨体が二人を抱き庇い、弾き飛ばされる。思考が一瞬ついていかないが、アレは…

「香川さんっ！！」

二人の妖精を庇うように覆いかぶさる、香川さんの姿があった。ヨグ＝ソトースを封印し直した為、勢いを殺した一角獣は少しの間

うろうろし、また水辺に戻って行った。

「お師さん…一つ勘違いしてますよ」

「香川さんっ！なんで無茶を…」

「僕達は女の子(幼女)を陵辱したいんじゃない。ただ儚くて、か弱くて、可憐な花のような彼女らを愛でたいだけなんだ。世界的財産(可愛い女の子)を身を挺して助けることは、そんな僕達にとって当然じゃないですか」

香川さんが、誇らしげに僕を見上げる。よく見れば、怪我一つしていない。

「主…わかったぞ。死ぬほど意外だが、あやつらの想いは純粋過ぎる程に純粋で、愛に満ちている。そして、勿論童貞であるから身も清廉。一角獣が傷をつける理由がない」

なんと…死ぬほど意外だが確かにそれなら納得だ。しかしこれで二人に何も無くて本当に、良かった。嬉しい誤算だが、その誤算のおかげでこいつらをこの森に放つという最終手段が使えなくなった…。どうしよう…。

「おい、指輪の主人。名は何と言う？」

ウォーレンが何とも言えない表情でこちらを見る。

「晶…神谷晶だ」

「魔導士アキラ…ヘブンズ・ゲートの主人(マスター)よ。お主の提案、呑もう」

「ウォーレン…」

「何故オークを従えておるか疑問だったのだが、結果あやつらにこの森の者が護られた。あやつら、見た目は醜悪だが…あやつが子供達を庇ったとき、その瞳には正義の光が灯っていた」

あの変態馬鹿に正義…？に、似合わねぇ。

「それと…」

「？」

「子供達が助かったとわかったときのお主。明らかにホッとしておったろ？口ではああは言っていたが、実際わしらに危害を加えるつもりはなかったのであろう？」

「何をそんな」

「主、もう無理しなくていいのでは？バレバレユカイだぞ」

「五月蝿い。色んな意味で」

「指輪の精…そしてアキラ。先ほどは侮辱してすまなかった。心から詫びよう。お主らに邪悪な魂胆は無いようだな。信用するに値すると判断した」

「ウォーレン…ありがとう」

なんか憑き物が落ちたように、すっきりした気分だ。何とか無事に作戦を遂行出来た…。僕の策から随分乖離した流れになったから、

内心焦ってた。そして、ダービーの件も謝ってもらったし。

「こちらも、必要以上にここに介入するつもりはないよ。ただ、有事の時はお互い助け合っていこう」

「ふんっ…」

僕とウォーレンが握手すると、エルフと小人族、妖精から歓声が湧いた。良かった…これで目的が本当に達成できた。

…で。

「お前はいつまで妖精抱いてんだ！このデブッ！」

妖精から香川さんを引き離す。驚くべきことに、補助魔法で筋力を強化しないと離れなかった。本当に豚人（オーク）なんじゃないか？この人。なんで一角獣、こいつを轢き殺さなかったんだろう。

～第二十一話～作戦決行《後編》（後書き）

さて、なんとかかんとか迷いの森編、終わりました。前置きの割りに、薄い感じになってしまった…すみません。そして、１万ＰＶと１千ユニークのお礼を言おうと思ったのですが、その倍の数字のお礼を述べることになってしまいました。本当に、ありがとうございます。

～閑話休題～地球に生まれたもう一人の天才（前書き）

こんばんわ、白カカオです。今回の登場人物は物語に後で出てくるキャラなのですが、今の大筋とあまり関係ないのであえて閑話扱いで登場させたいと思います。

～閑話休題～地球に生まれたもう一人の天才

地球の、ある紛争が絶えない地域。ここに一人の日本人がその身を投じていた。彼が所属するのは反政府のレジスタンス。彼もまた、悪政から人々を救う為に戦っていた。

「ここもそろそろ潮時かな…」

俺達は今、政府軍の圧倒的火力に押され、塹壕に身を隠している。ここに移ってもう三日目、外で敵軍の銃声が聞こえた。あの特徴ある銃声は、ウージー。俺達が使う銃、ＡＫ－４７アブトマットカラシニコフとは明らかに違うから聞き間違うはずがない。…もっとも、銃声が聞こえる時点で近くで戦闘が起こっていることには変わりはないが。

「さぁ、撤退しよう。次の地点はもう確保してあるな？」

女子供、老人ばかりの避難民達。彼らを挟むように、反対で様子を見ていた女に声をかける。

「えぇ。向こうにはもう確認済み。食料も確保して貰ってるわ。…行きましょうか、リーダー」

女が険しい表情を浮かべてこちらに背を向ける。恐る恐るやりとりを見守る避難民達。俺は交戦中と思しきグループの班長に無線で連絡を取り、彼女らに続いた。

俺は日本で生まれ、本来ならこの地球では最も恵まれた生活を甘受できるはずだった。しかし、父親は日常的に家庭内暴力を振るい、母親はそのせいでヒステリー。年齢が二桁に達する前に、二人は心中した。最低な夫を捨て切れなかった母が、俺がいる目の前で父を刺し殺し、その包丁で自分を喉の脈を掻っ切って死んだ。辺りは血の海という言葉が相応しい程、紅く染め上げられていた。

親戚から面倒事と拒否され、俺は施設に入った。居心地は悪くはなかった。今思えば、それまで最低な環境で育ってきたのだから当然だ。衣食住は保障され、誰も俺に暴力を振るわない。…ただ、思春期に差し掛かった辺りから感じた、奇異を見るような目だけが絶えられなかった。

そんなとき、俺はある外国人の少女に出会った。同じ施設の子だったのだが、父親と二人、この国に密入国してきたらしい。園長がそのことを知ってか知らずかはわからないが、その子が入って二ヶ月が経過しようとした時だった。

「あのね、私…国に帰ることになったの」

密入国がばれたかと思ったが、実際は違ったらしい。父親の国が内乱で酷いことになっていて、父もそこに行かなければいけないという事だった。彼女自身にも選択権は与えられたらしいが、一緒に行くことを決意したようだった。

「そっか…寂しくなるな…。そうだ。じゃあさ、俺も連れてってよ」

自分の初めての体の交渉の相手だからとか、そういう些細な情かもしれない。着いて行けば、何かがあるかもしれない。そんな理由で俺は彼女に着いて行った。そして、気がつけば十年以上の時間が経っていた。彼女は今女だてらこの組織の副リーダーをしている。

…さっきの女がその彼女なのだが。親父さんは数年前に捕まってしまい、あげくに俺らや同じような組織への見せしめで処刑されてしまった。それも、ご丁寧に俺らにちゃんと見えるところで。俺は…親父さんの意思を継ぎ、彼女の想いを同じく感じ、周りの人達を護る決意をした。復讐、私怨、そして…同じような子供達を出さないように。

ーーードゴォッ!!!

「リーダーッ!」

突然、塹壕の壁が吹き飛んだ。衝撃に吹き飛ばされ、反対側の壁に叩きつけられる。頭から突っ込んだのか、意識が酷く混濁している。その瞳と耳に入ったのは…。

ーーーパラララ!!

ーーーキャアアア!!!

……銃声と悲鳴。さっきまで恐怖に怯え、今は無残に肉塊に変わっていくレジスタンスの皆の姿。それも、幼い子供にも等しく降りかかる無慈悲な弾幕。

ーーークソッ!何で、何でわかったんだ…。何でこんなことが出来るんだ…何で…何で…!!俺にもっと力があったら!俺にこの子達を護る力があったら…!!クソッ!!

政府軍の何人かがこちらに視線を向ける。こちらに近づき、一斉にその銃を構える。そのマスクの奥に、どんな表情を隠しているかわからない。哀れんでいるのかもしれないし、俺らの組織によるテ

ロで誰かを失った者なら、そのリーダーを前に憎しみを露にしているのかもしれない。はたまた、有数の力を持つレジスタンスを討てるという、ヒロイックな愉悦か。

ーーー何で…俺はただこいつらに、いつかどこかで平和に暮らして欲しいだけだったのに…。こんな所で散るために戦ってきたんじゃないのに…。クソッ！俺はまだ死ぬわけにはいかないんだ！！俺がここで倒れたら、誰がこいつらを護ってやれるんだ…まだ、俺は死ぬわけにはいかない…死ぬわけには…

「うおあああああああ！！！！！！」

気がつけば、咆えていた。それを合図に、無数の銃弾が俺に降り注ぐ。それは、正に断末魔だったのだろう。

…だが、その時はいつまで経っても訪れなかった。

「……ぇ？」

死んだと思った。あれだけの銃弾の雨を受けて、生きているはずがない。だが…生きている。

ーーー汝の想い、しかと受け止めた。

どこからか声が聞こえる。硝煙の煙が引いた頃、俺は見た。俺の体を纏っている物を。

それは、中世の西洋の鎧のようだった。二十世紀のこの時代に、それも銃弾が行きかうこんな戦場に酷く不釣合いな黒い甲冑。それ

も、薄っすら妖しい黒い光を放ちながら。何が起こっているかわからず、思考が働かない。

ーーー漆黒の天使（フォービドン・エンジェル）。汝が着ている鎧の名称だ。私が力を貸してあげよう。汝が思うままに、目の前に居る憎き敵を屠ろうではないか。

何を言っているかわからない。何が起こっているかわからない。

ーーー何をしている？憎いのだろう？目の前にいる、たった今汝の同胞を無残にも粉々にした人間が。

ただ、その言葉だけが響いた。憎い…目の前に居る、こいつらが。俺の仲間を、護るべき者を無慈悲にもたった今砕いた、こいつらが。殺してやりたい。殺してやる。完膚なきまでに、叩き潰してやる。

ーーーそうだ。憎め。憎め！憎め！！それでこそ、私の主に相応しい。

両の掌に、小さい影の渦が出来る。そこから何が出てくるか、何故か俺は知っている。右手に、蛇腹の剣。左手に、脇差程度の長さの両刃の剣。こちらは刀身と柄の間に、瞳のような宝玉がついている。どちらも鎧と同じく漆黒と真紅に染められた、魔剣。

ーーー魔剣、罪人の剣（ガリアン・ソード）と魂喰い（ソウルイーター）。さぁ、それでやつらを切り刻め。

脳髄に響くような声に導かれるように、ゆっくり俺は踏み出した。敵が驚いたような、しかしその直後嘲笑するように笑う。

「おい、それは何てアニメのコスプレだ？」

「ここは日本のコミケ会場じゃないぜ、ジャパニーズ」

それを聞いても俺は何も感じない。仲間がこいつらに殺されたという、憎しみしか感じない。ヘラヘラ笑うそいつらに近づくと、何の予備動作もなく左手の剣で一人の首を胴から切り離す。淡々と、それが当然な作業というように自然な動作で。何の感情も湧かない。ただ、憎しみの漆黒しか感じられない。

「ホワット!?」

もう一人が驚愕の声を上げるが。それを聞き終えると同時に同じようにそいつの首を刎ねた。

「「っ!?」」

周りの敵兵がこちらに気づき、一斉掃射してくる。悪意の塊が次々と俺の体に向かってくるが、鎧に吸い込まれ、しかし俺の体に届かない。無造作に右手の剣を横薙ぎに振る。伸びた蛇腹が次々に敵の胴を薙ぐ。胴が繋がっている者は、心臓に魂喰いを突き立てられ大量の血飛沫を上げる。数分後そこに立っているのは、返り血で黒い鎧を真っ赤に染め上げた俺だけだった。両手の剣が興奮している。血を渇望している。魂喰いは敵の血を吸う毎に成長し、倍以上に刀身を伸ばしていた。俺も、まだ収まっていない。

ーーーザクザク…グジュグジュ…

転がった敵の亡骸に、尚も剣を突き刺す。たっぷり剣に血を吸わせるように…渇きが収まるまで…。

「まだまだだ…もっともっと…俺の仲間達と同じように、臓物をば

ら撒け…！人の形じゃなくなるまで…ぐちゃぐちゃに崩れろ…！ハッハッハ…ヒャッハッハ！！」

そう、貴様ら全員ぐちゃぐちゃになってしまえ。もう俺の仲間に手を出せないように…恐れ、もう牙を剥けないように…。もう一度来てみろ…これよりもっと痛く苦しく、殺してくれと頼んでも…永久に辛苦を味あわせてやる…。お前ら『罪人』の『魂を喰らって』、生きたまま地獄を見せてやる…。

数時間に及ぶ血の狂宴が終わると、その声は訊ねてきた。

ーーー主…名を、教えてくれぬか？史上最も血の雨が似合う、我が主よ。

「俺の名は…黒城白夜。いつでも明るい子でいれますようにと、馬鹿な親がつけた馬鹿馬鹿しい名だ」

ーーーコクジョウ…ビャクヤ…。私は暗黒の血を持つ者に仕える腕輪。『地獄（ヘル・ブリング）をもたらす者』だ。これからよろしく願おう。闇と光の名を持つ者よ。

妙齢の女性の声がそう言うと、俺の体は元通りに戻った。着ているのは、レジスタンスの服。やはり、銃弾を受けたような痕はない。

「リーダー…白夜…」

爆破された瓦礫の影で、副リーダーの女が俺に震えながら声をかける。全面に、俺に対する恐怖の色が見える。その背後には、同じ

ように俺を見て震える何人かの子供の姿が見える。良かった。何人かだが、あの銃弾の雨から生き延びてくれた。

「リーダーは、これからお前に任せる。こんなになってしまった俺じゃ、お前らを導けない。ただ…お前らの見えないところで、見守ってやる。影から、お前らの道を作ってやる。じゃあな…もう、会う事もないだろう。今まで俺を支えてくれて、ここに連れてきてくれてありがとう」

女に二の句も言わせず、その場を去る。

「護る為に傍にいれなくなる…本末転倒だな」

苦笑した俺の言葉は、誰にも聞かれることはなかった。ただ、左腕に在るバングルが輝いた気がした。少し前に、今回と同じように銃弾の犠牲になった女の子から託された、形見のこの腕輪だけが俺を護ってくれるかのように、微笑んだような…そんな気がした。

その後、紛争は終わった。表向きは白夜がいたレジスタンスが政府を倒したとなっているが、事実は異なる。白夜はレジスタンスの障害になるであろう政府軍を、独り片っ端から叩き潰していった。残った死体の有様から悪魔の所業と噂されたが、そんな『非現実的』なゴシップはいつの間にか消え去っていた。その国は、新しく生まれたその国の女性の指導者の誕生という歓喜に沸いていた。

「なんか…やっと終わったな」

小高い丘の上、沸き立つ民衆を遠めに白夜は眺めていた。

「フフッ。怨敵はあのおなごにとっておいてやったのだろう?」

隣にいる、漆黒のドレスを着た長い黒髪の美女が笑う。

「なんのことだ?俺は仕留め損ねただけだ」

「ククク…素直じゃないねぇ、白夜は。全て計算なんだろう?」

「ふん。あいつが倒さねば、革命の意味がないからな」

「父親を殺されたあの子に華を持たせてあげたって、素直に言えばいいじゃない」

微笑を浮かべた女が、白夜の首筋に指を這わせる。白夜は素っ気無く身を返すと、その女に訊ねた。

「で、今度はお前が連れて行ってくれるんだろう?俺がいるべき世界へ」

「えぇ、私が導いてあげるわよ。不安そうな顔しないでよ。子供なんだから…」

「してねぇよ。…行くぞ、ヘル・ブリング」

「はい…マイ・ロード…」

二人の姿が荒野に消えた。こうして『死を呼ぶ道化』『灰色の堕天使』と呼ばれるようになる、暗黒の属性を持つ男、黒城白夜は異世界へと旅立った。…天国と地獄が交わるのは、もう少し先の話で

ある。

～閑話休題～地球に生まれたもう一人の天才（後書き）

思ったより長くなってしまいました。同じ「護る者の為に戦う」二人ですが、晶と対比の存在として出しました。いつか、本編に出ます。ちなみに魂喰いと罪人の剣ですが、これは完璧にＢＡＳＴＡＲＤ！！のそれをイメージで書きました。あの武器好きなんで、昔から私が物語を書くときは出したいと思ってたのですが…。元々は主人公の武器として考えた武器です。あっ、丸パクリは嫌なんで、設定は変えて書きます。あと、白夜の名前ですがブ〇ーチの六番隊隊長は全く関係ありません。念の為。

～第二十二話～三人の夜《晶、ダービー編》（前書き）

こんばんわ、白カカオです。楽しい時間はあっという間に過ぎていくもので、というか私はいくら時間があっても足りないもので。きっとそれは人間の体内時計が２５時間なことに起因するわけで。生まれ変わるなら火星に住みたいもので。…絶対関係ないですね。すみません、絶対関係ない。今日も缶チューハイ片手にジャンヌ聴きながら頑張ります。

～第二十二話～三人の夜《晶、ダービー編》

ゲートまで円卓の馬鹿共を送って行くと、僕はそのままキュートス城に帰った。残念だったなエリー。今回は僕あまり仕事しなかったからな。まぁ一応和平結んで来たから、任務達成ってことで。

国王とセラトリウス団長に報告を済まし…すでにこちらでの住居になっている城の一室に戻る。僕用に簡易クローゼットや机、本棚とか揃っている位の本気っぷりだ。広さにして六畳間位だが、ここでは電気がないため余計なものを買うこともなく、充分な広さがあった。机の上の短めの蝋燭に火をつけ、先日ココに教えてもらったこの国のお香をたくと、壁に掛けてあるジャージに手を伸ばす。僕の世界から持ってきた数少ない私物の、音楽プレーヤー。部屋の中で僕個人的に楽しむ物だから、別に支障ないだろうと持ってきた物だ。イヤホンをつけると、そのままベッドにダイブする。

「なぁ、ダービー。ウォーレンが言ってた事、本当か？呪われたアイテムってやつ」

何気なく訊ねると、言いにくそうにダービーが答えてくれた。

「あぁ…。別に呪いがかけられているわけではないが、似たようなものだな…ウォーレンが言っていた事は、ある意味事実だ…」

「ふーん…そっか」

「主は…何も聞かないのか？そんな物いらないと我を捨てたいと思わないのか？」

ダービーの声が、いつもと違う弱気一辺倒になっている。無理も

ないことだけど。なんだかんだ言って大事なことはしっかり話してくれる男だ。話したくないからと隠すような性格ではないこと位、短い付き合いだが僕にはわかる。まぁ別に話したくなかったとしても、僕は何も言わないけど。その話の内容が負い目を感じるものなら、尚更話しにくいだろうし。

「んー…。別に？」

「何故!?我は主を不幸にするような存在なんだぞ!?」

「うーん。別にお前が直接呪われてるわけじゃないし、僕はお前と出会ってから、特に不幸な目にあってないし」

「何度も命の危険にあっておるだろう！」

「まぁ…それもひっくるめて僕が選んだ生き方だから。流石に自分の人生の責任を誰かのせいにするほど、ガキじゃねぇよ。僕をみくびんな」

「しかし！」

「それにさ…」

たぶん、こっからが本当の僕の気持ちなんだろうな。いや、今までも本当の気持ちだけど。それに、あまり言うとこいつ調子こくからこういうときしか言わないけど。僕もハズいし。

「お前がいないとさ、寂しいじゃん。四六時中人の頭ん中入ってきやがってさ。そんなやつを、はいそうですかって簡単に捨てれるほど僕はドライに出来てないの。お前が僕んとこに来てから、この方

向性が見えない日常を何気に楽しんでるし」

「…！？」

「もしお前が呪われてるなら、解呪する方法探してやろうとか、思うくらいは僕はお前を気に入ってるよ。だからお前も僕から離れた方がいいとか馬鹿なこと考えんな。これはお前の主人の命令だからな。もっともお前のシステム上、そう簡単に離れられないだろうけどな」

「主…！」

ダービーの声が心なしか涙ぐんでいるような気がする。お前、涙腺とかないだろ。

「だから、僕はお前の過去がどんなであっても別に聞かない。今僕の指にいるのは、過去のダービーじゃなくて今のダービーだろ。だから、この話はお終い」

足の反動でベッドから起きると、ジャージから同じく向こうの世界から持ってきた煙草を取り出す。これも、煙草を吸う文化がこっちにないので他の人がいるときはなるべく自粛している。横着して蝋燭で煙草に火を点けると、傍に置いてあるお香の煙と紫煙が混ざる。部屋に三つ目の蛍が現れた。こんなガラにもない雰囲気なのは、たぶんイヤホンから連続でバラードが流れているのと、お香があまりに優しい香りで僕を包んだせいだ。クソッ、あとでココに文句を言ってやろう。窓から差す月明かりがすごく綺麗だ。

「見てみろよダービー。満月。月がこんなに明るいぜ」

思わず窓を開け身を乗り出すと、空に満天の星の絨毯と、一際大きな月が輝いていた。

「昔は、香奈子とよく一緒に夜空の下こうやって空を見上げてたなぁ…」

「…香奈子お嬢は、主を見ていたのだろう？」

「五月蝿い」

なんだか、何でもないのに可笑しくなってきた。僕の過去に何があろうと僕は僕だし、ダービーだって同じだ。投げやりな意味じゃなくて、今がいいならいいじゃん。どうせ、過去も今も未来も、一本の同じ線で繋がってるんだから。そう考えると、自然に笑みがこぼれ出す。

「…主」

「うんっ？」

「主が聞かぬと言ってくれるなら、今は主に甘えさせてもらうとしよう」

「んっ」

「ただ…我の過去の話から、一つ忠告させてくれ」

「なんだ？」

「必ず主の前に現れるであろう黒衣の女、地獄（ヘル・ブリング）をもたらす者と言う

名の女だ。そいつを従えた者。努々、気をつけてくれ…」

ふーん。ダービーが天国で、そいつが地獄ね…。

「なぁ、その女って、美人？」

「まぁ…何故だ？」

「いや、天国なら、その女も見せてくれそうだなって」

「主は阿呆か！そいつは我に次ぐとも言われるほど、強敵なのだぞ！？」

「なら、お前の方が上じゃん。大丈夫大丈夫」

「はぁ…まぁ、主がそういう下世話な話をするのも珍しいから、今回はもう何も言うまい」

シリアスモードは疲れるから、今夜はもうお終い。僕とダービーは、こうやって軽口叩き合う位がちょうどいいんだ。こうやって、笑いあうような空気が一番心地好い。だから、今が幸せだからそれでいいさ。主人と従僕の関係だが、僕にとってはこいつは立派な相棒だ。

ーーーガチャッ…バン！

「アキラー。お外見て何してるのー？」

エッ、エリー！？ちょっ、待て。音楽プレーヤーも煙草も出しっぱなし！ちょ…

「アキラー。これ、なぁにぃ？」

音楽プレーヤーに手をかけるエリー。あーあ…。

…ウォーレンの言う通り、我は呪われた指輪だ。我の魔力の源は主人。つまり主人の魔力を吸い取って力を発揮している。我が主人を選ぶ基準は、その者の魔力の透明度だ。力に懸ける想いが純粋であればあるほど、その魔力は透き通っていく。たとえそれが、純粋な『悪意』だとしても…。だから我はそのような者に心は開かなかった。そして、どの時代も強く、透き通るほど透明な思いはそのような者ばかりだった。若しくは、人の道を外れてしまうほど器が歪んだ想いだった。そのような者にも、我は力を貸さなかった。そうしていつしか、ヒトに対して何も期待しなくなっていった。不感症になっていた。

…だが、主は例外だ。出逢った当初は逆に透明な魔力など持ってはいなかった。ただ、時と土の多重属性という異質な魔力に惹かれただけなのだろうと、そう思っていた。しかし、エリーと出会い、国王と出会い、この国の民と出会い、そして戦いに身を置き…。主の魔力は純度を増していった。『護りたい』というただそれだけで、主は透明になった。美しい程、全てを吸収し、受け入れてしまう程透明になった。いずれは敵の想いすら受け入れてしまいそうな、そんな危うい透明感のあるココロに、我は心酔してしまった。

だからこそ、自身が憎かった。暴虐なほど主人の魔力を喰らい、そして戦いの中でその命を散らせる。そんな過去を幾度となく繰り返し、いつしか呪われていると揶揄されるようになった自身の力が怖くなった。

しかし、たった今この主は言ってくれた。我がいなかったら寂し

いと。僕から離れるなと、命令してくれた。『天国への扉（ヘブンズ・ゲート）』、あるいは『ダビデの六星環』としての我ではなく、『ダービー』としての我を求めてくれた。幾千霜と月日を漂い、悠久の間孤独を拠り所にしていた我を。呪われた運命を持つ我を、受け入れてくれた…。涙が止まらなかった。主は「どうせ実体のないお前に、涙腺なんてないだろうに」とか思っているのだろうが、心の涙がとめどなく溢れていた。あらゆる感情が押し寄せてきて、自分の心が溺れかけていた。主は、創造主以来たった一人無限の魔力（エターナル・マナ）を発現した者だ。その強大な魔力で、我に喰い尽くされる事はないかもしれぬ。だが、肉体だけは話が別だ。どんなに魔力が強くても、心臓を突かれれば、脳を飛ばされれば、血を大量に失えば、簡単に命を落としてしまう。今回の主は…何があっても失いたくない。だから…気をつけてくれ。あの女には。地獄（ヘル・ブリング）をもたらす者には…。

～第二十二話～三人の夜《晶、ダービー編》（後書き）

すみません。全部が入りきらずまた前編になってしまいました。なんという…。さて、次はどう展開させようかな…

～第二十三話～三人の夜《エリー編》（前書き）

ども、ホワイトカカオです。…実はこの話書くの、今日二回目です。操作ミスっつうか誤ってキーに触れてしまい、まさかの全消去…半分くらい書いたのに…。マジ心が折れそう。原稿と頭の中がホワイトになりました。誰か、慰めてください。

～第二十三話～三人の夜《エリー編》

初めて、アキラと旅に出た。ずっと離れず、くっついていた。ただ、アキラが本当に迷惑そうな顔をする前に離れたけど。家族と離れ、向かう先は『迷いの森』。でも、アキラと一緒だと、何も怖くなった。アキラが全部護ってくれる気がしたから。

ーーー僕は今回は何もしてないよ。

アキラは苦笑してそう言ったけど…話し合いを決定的にしたのは、たしかにアキラが連れて来た『妖精さん』だったけど。でもアキラがそんな策を考えなければ、あの森はずっとあのままだった。私達だけでは何一つ状況を変えられなかった。だけどアキラはあっさり打開してしまった。やっぱり、アキラは凄い。

アキラは、私がいないところで二回、命の危険に会っている。一度目は東の森で緑竜と戦ったとき。幾度となく冒険者が挑み、また軍を派遣してもなお立ちはだかる凶大な古代竜。シーリカさんの伝達が城に入り、アキラが緑竜と戦っていると聞いたときは、目の前が真っ暗になった。魔術師団に入ったばかりのアキラに、敵うはずがない。そう思っていた、しかし、アキラは帰って来た。この国に、私の元に帰って来てくれた。しかも、あの緑竜を打ち倒して。アキラの姿が見えた時、思わず民衆の目の前であるにも関らず、私は抱きついてしまった。その行為に関してはあの後少し反省した。そして、あの竜のことを聞くと、「あいつは悪い竜なんかじゃない。あいつもただ、大切なものを護ろうとしただけだ」って、ちょっと怒られてしまった。護る為に…アキラと同じだと思った。だから、今まで何人もあの竜に殺されてきたけど、あの竜を恨む気持ちが薄れてしまった。そういえばシーリカさんは、城に伝達を飛ばすのと

同時に、セラトリウスお爺ちゃんにも通信してたみたい。同時伝達は意識を二つに分けなきゃいけないから、普通の魔術師では出来ない技なんだって。シーリカさんって、すごい魔術師さんだったんだ。

二度目は、アキラがこっちの世界に戻ってくる直前。お父さんは外なる神とか言ってたけど、私にはよくわからなかった。とにかく、もの凄く強い神サマだってことは伝わった。あの緑竜よりも強い神サマだってことはわかった。私はすぐにアキラの元へ行きたかった。何も出来ないけど、行ってアキラの傍に居たかった。でも、お父さんに怒鳴られて止められた。私が行っても、アキラの邪魔にしかならないって。アキラに惚れてるなら、惚れた男を信じてやれって。悔しいけど、その通りだった。だから私は、ただ祈ることしか出来なかった。何も出来ない自分が悔しかった。だからせめて、アキラが勝ってきたら、笑顔で迎えようと思った。そして、アキラは勝って来た。緑竜を遥かに上回る、あの門の神サマに勝って来た。笑顔で迎えよう、そう決めたのに、アキラの顔を見たら色んな感情が止まらなかった。アキラが生きてて良かった、もう危ない事して欲しくない、そう考えると、涙が自己主張してきた。泣いたらアキラを困らせてしまう、でも私に心配ばかりさせて…そんなアキラを甘えて困らせてやりたい。そう思ったら、アキラの胸に飛び込んでいた。アキラは、随分困った顔してたけど、それでも温かいその手で頭を撫で続けてくれた。大好きな、アキラだった。

そして、今回。先の二回は、私がいないところで危険な目にあって、私はただ遠くで心配することしかできなかった。だから、今回は。せめて今回だけは誰に何と言われようと、アキラの傍に居てやると決めた。…そういう時に限って、危険な事はなかったけど。ただ、コボルトやスライムが襲撃してきたとき、森で歩いているとき。常に私を背に回し、攻撃が来るかもしれない方向から私を庇ってくれた。それはつまり、私がまだ役に立てないことの証明だったけど…だけど、アキラに護ってもらっているという安心感が、凄く幸せに感じた。アキラのことを、こんなに頼もしく感じたことはなかっ

た。マドラおじちゃんに負けて、戦いではいつもギリギリで。だけど、アキラならどんな悪いモノからも私を護り通してくれるって、安心感があった。それだけで、この旅に出た価値はあった。ただ…ココちゃんの目が偶に複雑そうな視線を送ってきてたのは何でだろう?もしかして、ココちゃんもアキラのことが好きなのかな?だとしたら、私はどうしよう。偶に一緒に遊んでくれる、優しくて可愛いココちゃんのことは勿論好きだけど…アキラのことは取られたくない。こんな問題も、アキラなら解決してくれるのかな?でも、その為にはアキラに気持ちを伝えないといけないし…うーん…。

城に帰ってきてからもアキラのことが頭から離れず、私はベッドから飛び出した。別に疲れてないし、アキラも同じ城に住んでるんだから、いいよね?

息を殺し、アキラの部屋の扉の前に到着する。なにやら話し声が聞こえるけど、アレはダービーさんかな?そういえばダービーさん、ウォーレンの爺ちゃんに『呪われたアイテム』って言われてたけど、アレはなんだったんだろう?あの後のダービーさん、酷く悲しそうな声をしてた。確かにエッチで邪な事ばかり言ってるけど、あの二人はいつも楽しそうだし、ダービーさんもアキラの事大事に思ってることはわかる。だから、私もダービーさんのことは結構好きだけど…アキラはどうするんだろう?でも、今の声を聞く分には大丈夫そうなのかな?二人とも楽しそうだし。だから、私も輪にいれてもらおう。勇んだ私は、ノックもせずにアキラの部屋に入った。

「アキラー。お外で何してるのー?」

いきなり扉を開けたから、アキラがなんだか慌てている。その様子が、ちょっと可笑しい。そして、アキラの耳から何かぶら下がっ

ているのが見えた。何となく、それを手に取ってみる。

「アキラー。これなぁにぃ？」

アキラはまだ慌ててたけど、少ししたら困ったような笑顔を浮かべて私の頭に手を置いた。

「これは、僕の世界から持ってきた音楽を聴く為の機械と、気分を落ち着ける為の吸うタイプのお香…みたいなもの？」

「機械って…機械（マキナ）のこと！？」

凄い！機械なんて、初めて見た！アキラの世界では、こんな小さくて薄い箱一（？）で音楽が聴けるんだ！…ん？そういえば初めてアキラに逢ったとき、アキラの傍にもっと大きい箱があったけど、アレはなんだろう？車輪が付いてたから、馬車かなにかなのかな？

「だね。まぁ…こっちにはない技術だから、隠してるんだ」

「なんで隠してるの？」

「ほら、無闇に向こうの技術を持ってきても、二つの世界のバランスを崩してしまうかもしれないだろう？だから、秘密。二人だけの、秘密な？」

アキラはそういうと、人差し指を立てて私の唇に当ててきた。『二人だけの秘密』という言葉の響きとアキラの指が私の唇に当たっているという事実に、私はただ頷くことしか出来なかった。たぶん、今顔が真っ赤になってる。冥の闇で、アキラに見えない事を祈る。

「主…そんなことしなくても、エリーのＨＰはとっくにゼロだぞ」

「何をわけのわからないことを言ってる」

確かにダービーさんの言ってる事はわからないけど、たぶん私の心中的には正解を言ってるんだと思う。気づかれてるのかなぁ…ダービーさんに、私の気持ち。お父さんにも、いつの間にかバレてたし。あっ！いいこと思いついた。

「じゃあさ、アキラ…。秘密にするから、一つ私のお願い聞いて？」

「…なんだ？」

アキラが、ちょっと警戒するような表情を浮かべる。ふんっ。いつまでも私を子供扱いする罰だっ！

「今日は、もう少しアキラと一緒にいたいな…」

「ほう…エリーもついに大人の階段を上る覚悟が出来ブヘァ！！」

「お前は何を言ってるんだ、ダービー」

最後まで言う前に窓枠に叩きつけられるダービーさん。痛そう…。実はダービーさんの言葉に少しドキドキしてしまったのは、秘密。

「まぁ一緒に話すくらいならな…そうだ、ちょっと外散歩しようか」

そう言うと、アキラは腰掛けていた窓枠から飛び降りた。

アキラに手を取られ、こっそり城の裏手から城門の外に出る。風が涼しくて、心地いい。夜空は、星達で埋め尽くされていた。

「昔な…恋人とこうやってよく夜空の下で散歩してたんだ」

アキラが懐かしむように空を見上げながら歩く。

「恋人…」

アキラの、恋人。私以外の誰かがアキラと一緒にいて、そしてその人はアキラに愛されていたという事実。何故かわからないけど、涙腺が泣きそうに震えている。

「うん。とっくに別れたけどな」

そんな私の事など知らず、アキラが笑いながら話を続ける。

「あいつは、寒いの我慢してたらしいけど」

クククとアキラが笑う。ダービーさんがいる、アキラと私を繋ぐ手をいつの間にか強く握っていた。わかった…私は今、嫉妬してるんだ。アキラに愛してもらえた女の人に、嫉妬してる。

「主、いくらなんでもデリカシーが…」

「エリーが二人目だな。こうやって一緒に歩く人は」

不意に言われた言葉に、アキラを見上げる。私より、頭一個半位高いところにあるアキラの顔は、凄く優しく微笑みかけてくれてい

た。

「えっ…」

「大切な誰かと、一緒にこうやって歩くって、やっぱいいもんだな」

アキラがしみじみと言う。虫の声が、とても耳心地良く感じた。

「アキラ…」

「んっ？」

アキラがさっきと同じ、優しい顔を向けてくれる。

「アキラ、今幸せ？」

『隣にいるのは、その子じゃなくて私だけど』っという言葉を、必死に飲み込んで、なんとか聞けた。

「あぁ。幸せだよ？エリーと…大切な、護るべき、護りたい人とこうやって、のどかな時間を過ごせてる今は、凄く幸せだ。勿論、ダービーの事も」

「大切な…護りたい人…？」

「うん。エリーは、大切な人だよ？何を今更」

アキラは何が可笑しいのか、声を殺して笑っている。

「その恋人よりも？」

思わず、値踏みするようにアキラに訊ねてしまう。答えを聞くのが、怖いのに。

「なぁに馬鹿なこと言ってんだ。あいつもエリーも、ダービーも皆、僕の大切な人だよ。あっ、ダービーは人じゃないか」

「主…別にそれ、面白くないぞ…」

ダービーさんの抗議に耳を傾けず、私に向き合って頭をグシャグシャと撫でる。髪がぼさぼさになるけど、気にならなかった。求めていた言葉と少し違うのが悔しいけど、悔しいけど…

「感じちゃう…ビクンビグバァッ!!」

私の心を読んだ（？）ダービーさんが小石で殴打されている。…懲りないなぁ。

「だからお前はな・に・を!」

「主!ギブ!ギブ!!」

そんなアキラの様子を見て、やっぱり思ってしまう。こんな、楽しそうなアキラが…大好きなんだって。そういえばディーン姉さんが前に言ってたなぁ。

ーーーエリー?恋は、惚れた方が負けなのよ?だからエリー。王女である貴女は、勝ちなさい。

後半はよくわからないけど、ごめんなさい、ディーン姉さん。私

は完敗してるみたいです。そして、なんだか振り切ったような気がした。アキラが昔誰と付き合ってようと、今、この場にいるのは私なんだ。アキラの隣を独り占めしてるのは私なんだって。※ただしダービーさんは除く。

「ねぇ、アキラ」

「んっ？」

未だにダービーさんを殴打しているアキラに声を掛ける。なんかダービーさんのむせび泣く声が聞こえるけど、無視しよう。

「アキラ…もう、一人で危ない事しないで？」

「うーん…まぁ…善処する」

本当に困ったような顔を浮かべる。これは、絶対守るつもりのない人の顔だ。

「はぁ…じゃあさ、誓いのキスをして？」

「はぁっ！？」

「さっきの約束が守れないなら、絶対、絶対どこに行っても、誰と戦っても、生きて…私の元に帰って来るって…ずっと、私のこと護ってくれるって。アキラは騎士で、私は王女なんだから」

「あぁ、そういう事か。いや、僕は魔術師なんだけど…」

「いいの！護国騎士団に入ってるんだから、私の騎士様なの！ほら

っ、早く片膝ついて、手を取って！」

「エリー…今勢いで告白に近い事言わなかったか？私のカ○ル様みたいな感じの単語で…いや、主なら気づかないだろうが…」

いいの！ダービーさん！今日は、これだけは絶対譲れない。私の、精一杯の勇気だから。それと、そんな十五年近く前にジャ○プでやってた短期漫画なんて誰もついてこれないでしょ！せめて、テニ○の王子様くらいじゃないと！…って気づいたら私がテンパってきたじゃないの！私こういうキャラじゃないのに！

「…わかった」

私の覚悟が、気持ちが伝わったのか、アキラが私の前で片膝を付く。

「エリー…キート＝エル＝リーナス王女。僕、魔術師晶は、どんな戦であろうともリーナス王女の下に還り、いつまでも護り続ける事を誓います」

心臓が爆発しそうなほど高鳴る私を余所に、アキラは恭しく私の差し出した手を取り、その甲に口をつけた。柔らかなアキラの唇の感触に、卒倒しそうになる。

「…ふぅ。これで、満足かな？お姫様」

アキラが訊ねると、ショートした思考が正常さを取り戻す。

「う…うんっ！絶対、絶対守ってね！」

「あぁ。じゃあ、そろそろ帰ろうか」

アキラが再び手を差し出す。その手を繋ぎ、いつまでも城に着かなければいいのにと、馬鹿なことを考える。でも詮無き事だとわかっているから、私は繋いだ手に全神経を集中させる。いつまでも、この手の温もりを覚えていられるように…。

～第二十三話～三人の夜《エリー編》（後書き）

※これを書いてるのは二十台半ばのキモオタです。えぇえぇわかってますよ！全然女心の描写なんてリアルに出来ませんよ！半ば願望ですよ！…泣きたくなってきた。さて、今日は時間が出来たらもう一話投下します。読みたかったら応援してください。…嘘です。読んでいただけるように頑張って書きます。

～第二十四話～キュートスと農業（前書き）

本日二回目の白カカオです。さて、今回のお話は結構こういう異世界ものとかではベタな部類のお話です。今更ベタな展開ばかりなんだからとか思いますけど、念の為。まぁ晶にある行動をさせる為のお話なので…。

～第二十四話～キュートスと農業

迷いの森を攻略して早一週間。僕は未だにこの国でダラダラと過ごしている。何気にお城の生活って、いい感じにだらけれるし。軍部の方は、一日拘束される事もないし、僕の場合はダービーのことが周知の事実になっているので、魔法の事はむしろダービーに教えてもらっていることの方が多かったりする。最初の内ダービーは、何故か僕が力をつけることに難色を示していたが、なんか自己解決して教えてくれるようになった。初めから協力しれ。今は、城の一室。今日は軍部が半休日の為、カイム達と昼を済まして城でダービーに勉強をつけてもらうことにしたのだ。

「…では主。前回の復習からしようではないか」

最近ではめっきり自分の声を隠さなくなっているダービー。しかしその場に居る女性に対して品のない事をいう時に限り頭に話しかけてくるので、なんか僕まで洗脳されかけてる気がする。率直に言うと、いい加減溜まってきてるのである。なので、こういう完全なオフの時はなるべく女性陣とは会わないようにしている。勢いでどんな事をするかわからない…程は限界ではない。別に性犯罪者の仲間入りしたいと思うほど僕は理性がすっ飛んでない。ただ、全部ダービーが変な事を言うから悪いのだ。妄想は自由。…たとえ、自分の首を絞めることになろうとも。

「おう。僕の現在黄道十二宮から呼び出せる神は二人。みずがめ座のアクアリウスと、獅子座のレオ。そして、例外的にヨグ＝ソトースの一部」

「その二者が選択出来る理由とは？」

「アクアリウスは僕の生まれ、二月の守護神だから。レオは黄道十二宮の中心、太陽を挟んでちょうど反対側、つまり向こうで言うアクアリウスの位置にいるから」

「ふむ…正解だ。では、その二人の象徴とは？」

「アクアリウスは『知恵』と『探究心』、そして『美』。レオは『勇気』と『栄光』。あとは…『求心力（カリスマ）』？」

「…危なかったが正解だ」

「うへぇ…これ、あと十人分覚えなきゃいけないの？」

「まぁ被っているものもおるから、そこは安心するのだ、主」

「うーん…」

「では、次だ。主が現在その二人しか使えない理由は？」

「魔法を使った戦闘の、圧倒的経験値不足」

「うむ。正解だ。主の場合内包魔力量は規格外なのだが、経験が圧倒的に足りない。実績がない者には誰もついていかないからな。だが、緑竜の件とヨグ＝ソトースの件で相当上がったとみて間違いない。もうそろそろ、天蠍宮（てんかつ）のスコルピオンと金牛宮（きんぎゅう）のタウルス辺りは出せるかもしれんな」

「マジか！？」

「かもをつけただろうかもを。それに主が思うておるよりこの世に神々は多く存在するのだぞ?日本神話に中国神話、インド神話、バビロニア神話、メソポタミア神話、ギリシャ神話、ローマ神話、ケルト神話、ゲルマン神話、スラヴ神話、北欧神話、エジプト神話、アステカ神話…ざっとメジャーどころを挙げたところで、これでも足りん。マイナーなところならインカ神話、ハワイ神話、あとは畑違いならクトゥルー神話とかな。国の数だけ、宗教の数だけ神は存在する。それにキリスト教やイスラム教の天使だって、この世界の創造主の配下、つまり使役対象になりえるのだぞ?まぁ創造主と天使は重複も多いがな。そして主、これだけは覚えておいてくれ。どんな宗教にも、どんな国にも、最上位の神が存在する。…稀にないものもあるが、ともかく。唯☆通信」

「おい…」

「なんだ?」

「電波挟んでないで、その『これだけ』を早く言え。さっきの神話の羅列で、頭痛い」

…ホント、パンクする。こんなん全部記憶するのなんて、封神傍のリスト覚えるのよりきつい。クッ!あの話も中国神話モチーフか。オノレ…中国、恐るべし。それに我が日本だって八百万とかいうトチ狂った単位の神サマがいやがるじゃねぇか。僕にアカシック・レコードと同期でもしろっつうのか?この馬鹿指輪は!…助けてくださいヨグ=ソトース。今、無限の知識を持つ貴方の力が必要です。…マジでは願わないけど。一部であんなに苦戦したんだ。完璧な屈服なんて、無理。

「…そろそろよいか?主。我も悪かった。続けるぞ。唯一神や太陽

神など、様々な呼び名があるが、それは全て創造主…クリエーターのことを指す名称だ。そして…創造主は、我を創りし、我の最初の主人でもある」

……。なんか、最後にさらっと爆弾落とさなかったか？こいつ。つまりは、この世界の原初から続いているコイツの主の末席に、僕がいると？その系譜を遡ると、この世界の創造主に辿り着くと？

…本格的に頭痛くなってきた。おい、大魔導士どころの話じゃねぇぞ！？スケールが違いすぎるだろ常識的に考えて！！

「ダービー！！…一服」

「主…」

「とりあえず…消化して、理解する時間をくれ。お前の話、ちゃんと受け入れるから」

そう言いながら、残り少ない煙草に手を伸ばす。窓枠に肘をかけ、部屋の外に煙を吐き出す。肺と頭に、沈静効果が染み渡っていく。

「…なんか、やけに街が騒がしくねぇか？」

僕の部屋は窓が一つ。その窓は城外の平原を映しているのだが、ちょっと身を乗り出せば城下町の端位は見る事が出来る。当然、窓を開けていれば町の喧騒が耳に入ってくる。

「なんでも、南の海の漁業が画期的な方法で解禁されたから、その祝いだそうだぞ？」

なんでお前は僕よりそこんとこの事情詳しいんだ。つうか、アレ

か。こないだの釣り大会か。なんか意外と経済効果あったのか。それに、こんなお祭りごとでも起こせば消費活動も跳ね上がり、経済の動きも活発になるだろう。結果オーライな政策だな、ホント。しかし…

「美味かったなぁ…魚」

そう、意外に美味かったのだ。こっちの世界の魚も。あの後シェフや料理が出来る者に僕が見様見真似な魚の捌き方を教えたところ、鮮やかに彩られた刺身パーティーが始まった。…厳密に言えば醤油なんてこっちにないから、カルパッチョに近い形になったが、それでも充分満足のいく出来だった。

「くそう…寿司が食いてぇ」

そういや、もう暫く向こうの世界に帰っていない。そろそろ、日本食が恋しくなってきた。

「そういや、この国の農耕事情はどうなってるんだ?ダービー」

「うむ…主の世界と比べると、天と地の差があるほど発展しておらん。こちらの世界の住人は、それほど食に関心がないのやもしれんが」

「なんと勿体無い!ダービー!早速国王と大臣にこのことを話すぞ!そしていつかこの国に、寿司の文化を広めるのだ!」

「主…無闇な文化の流布は世界のバランスを崩すと、こないだ自分で言っておったではないか」

「嗚呼、寿司…ＳＵＳＨＩ…何という甘美な響きだ…禁断の果実に、勝るとも劣らない奇跡の産物…今の僕なら、ルシファーに騙されることも厭わない…」

「主…滅多なことを言うもんでない…主ならリアルに誘惑しにきそうだから、あの悪魔」

「寿司王に、俺はなる！！」

「えらくスケールが小さいな…。主はゴム○ムの実など食っておらんだろうに…。いや、これからの避妊具の使用頻度を考えるとある意味ゴム人間だが」

「五月蝿い」

ーーーゴスッ！

「あうっ」

「変態紳士があうっとか言うなっ」

ーーーゴスッ！！

「グボァッ！」

そうして晶は早急に国王と大臣を呼び出し、マテリアルの世界と半マテリアルの世界の異文化交流の会議が僕の世界で行われることになった。最重要事項は、この世界で米を作ること。世界は、一人の男の食欲のせいで大きく変わろうとしていた。

「へぇー。お兄ちゃん、向こうの世界の人たち、こっちの世界に来るようになったんだね」

「あぁ…そうみたいだな」

自分の世界に帰り、ある日曜日。久しぶりに順子の部活が午後からになった神谷家は、一家団欒で朝食を採っていた。テレビのニュースをつけていると、ベイン国王がこちらの世界の各国首脳達と握手をしている。科学と魔法は相容れぬものかもしれんが、科学技術を使わない農耕技術は双方に問題ないだろうとのことで締結したようだ。

「へぇー。あっちの世界のイケメンはどんなかなー？この王様も、案外渋くていい男だし」

姉貴がニヤニヤしながらテレビを眺める。いや、実際は馬鹿もいいとこだぞ、あのオヤジ。オーラだけは無駄にあるけど。

「まぁ、実際顔はいいけど…馬鹿ばっかだぞ？」

「なんでアンタが知ってんのよ？」

僕のぼそっと言った独り言に耳ざとく反応する姉貴。やばい、ちょっと無用心だったか？

「では、ここ日本では、H海道とN潟、そしてA田の三つの道県を

交流対象とすることに決まりました」

キャスターが原稿を読み上げる。まぁ稲作の技術が最重要事項だと、国王に言ったからなぁ。日本の代表的な生産地が選ばれることはなんら不思議ではない。不思議ではないのだが…。

「お兄ちゃんお兄ちゃん！A田だって！エルフさん見れるかな！？」

ホッ…。順子の勢いで上手く姉貴の追撃を誤魔化せそうだ。

「うーん…どうだろうなぁ？A田って言っても、広いし」

「えぇー」

「最後に、ベイン国王から一言あるそうです」

カメラが国王に向けられる。バストアップで大きく写される国王。

「この度は、こちらの世界とこのような交流が出来る事を大変嬉しく思っております。そして、この世界のある人物をマテリアルの世界と、半マテリアルの世界の親善大使として指名させていただければと思います」

唐突な国王の物言いに、会見会場に喧騒が広がる。おい…まさか…おい待て！嫌な予感しかしない！！

「この世界…この国の交流指定地であるA田に住まいの、私の友人。そして我が国の軍部の要、護国騎士団の魔術師団に所属し、未来の大魔導士になるであろう男、カミヤ・アキラく」

「おいこんの馬鹿国王ぉぉぉ！！！！全部台無しだろぉがあぁぁぁ！！！」

テーブルを跳ね上げんばかりの勢いで立ち上がり突っ込む。おい！流石にこの展開は予想できねぇぞ！！つうか何やらかしてくれてんだあああああ！！僕にもこっちの生活があんだろうがあああ！！

「ちょっ！？…お兄ちゃん！？」

「…マジ？」

お袋はと言うと、完全にフリーズしている。親父と兄貴はいないけど、速報扱いのニュースだからきっと知ってんだろうなぁ…。

ーーー主、あれだけならまだ同姓同名の線で誤魔化せたものを…はぁ…。

言うなダービー…。溜息つきたいのも、僕の方だ。墓穴掘った…泣きたい…。

～第二十四話～キュートスと農業（後書き）

といことで、久しぶりに帰ってきました。そして…3万ＰＶ、3千ユニーク本当にありがとうございます！お気に入り登録も着実に増えて、それ以外にもユーザー登録してないたくさんの人がこの作品を楽しみにしてくれていると考えると、マジ感涙ものです。…涙腺弱いんで。これからもクリエーターを楽しみにしててください！でも人間って欲張りなもので、Ｐｉｃｋ　Ｕｐされるにはどうしたらいいのかなとか、ランキング載りたいなぁとか、贅沢なこともちょっと考えてたりしてます（笑）でも先ずはファンになってくれた皆さんがもっと楽しめるように、もっともっと精進します！あと、神話の勉強もしないとなぁ…

～第二十五話～Xデーその1（前書き）

…ども、白カカオです。すみません、一日穴空けてしまいました。
そうです、寝落ちです。疲労か寝不足か、逆にどっちもだと思いますけど…昨日は打ちながら座椅子で寝てました。その割りに今日も大して話は進みません。ホント、申し訳。

～第二十五話～Xデーその1

……食卓の空気が重い。こんな沈黙、小学校のときクラスメイトが悪戯したのを先生が咎めて、正直に名乗り出るまで帰しません！…ってなった時以来だ。今思うと、あの教育ってどうなんだろう？明らかに叱り方間違えてるよね？教育者として、子供の心の成長について一からやり直して欲しい。

ーーー現実を逃避するより、なんとかする方法を考えるべきではないか？

まともな事を言ってくれるなよダービー…。僕の頭はもう高速回転しすぎて、ピリオドの向こう側までイってしまってるのだよ。

ーーーならいっそあの派手なリーゼントにしてしまってはいかがかな？主なら、きっと似合うぞ？

やぁよ！やぁよ！そんなことしたら、特攻の○の武○みたいになってしまう。僕はインパルスじゃなくて、ニンジャに乗りたい。

ーーー…若干伏字が伏字になってない気もするが。それにあんな厳つい顔はしてないから安心するがよい。更に言えば、これを読んでるユーザーの層も考えてはどうだ？あとエ○オスネタも一部にしか伝わらん。

五月蝿い。メタな発言すんな。気になるやつはググレ。

ーーー伏字にしておいてなんという横暴な…。

「お兄ちゃん…」

順子が口火を切った。うっ…そんな瞳で僕を見るな妹よ。覚悟を決めるしかなくなるじゃないか。

「あぁ、順子…黙ってて、ごめん。あの馬鹿国王が言った事は、本当」

もう後先考えずに、馬鹿正直に話すか。考えるのも手詰まりだし、嘘つくのもやだし。

「順子、姉貴、お袋…僕がさ、こないだからこの指輪外さずにしてるの、わかるよね？これ、こっちの世界の物じゃないんだ」

「あんた…何を言ってるの？」

冗談に思われたのか、お袋が不愉快な表情を浮かべる。

「…信じれないかもしれないけど、事実なんだ。なんなら、証拠見せてあげるよ。ダービー、声、聞かせてあげてよ。僕の魔力気にせず使っていいから」

「…承知した」

ダービーが声を出すと、体が少し重くなる。世界が魔力の行使に慣れていない為か、法則の歪みが体に負担をかける。

「しゃべった！？」

「でも、腹話術の可能性だって」

姉貴が驚き、お袋が邪推する。こんな時に腹話術などで誤魔化すか。そもそも腹話術なんて出来ないし、中学校の時、昼の放送で腹話術芸人のアレをやって、教室で失笑をかったトラウマは今でも続いている。

「ダービー。歌ってやれ。腹話術なんかじゃないってこと、教えてあげて」

「承知した。何故歌かはわからぬが。では…アッアー。…ボエーー！！」

「まさかのジャイ○ンリサイタル！？」

「主…泣いていいか？泣くぞ？」

「…お前にはU○Aで歌うことをお勧めする」

「晶…本当に、しゃべってるの？その指輪」

姉貴が恐る恐る声をかける。うん、麻痺してたけど、これがきっと正しい反応なんだよね。

「うん。誠に残念だけど、これが事実」

「主の姉君、母君、そして妹君。はじめましてであるな。我の名はダービー。この指輪の精でござる」

「…お侍さん？」

「姉貴、騙されるな。こいつはジェントルメンだ。どれも超弩級がつくほどのへんた

「おっと旦那ぁ。美しい姉君の前でそんな無粋なことを言っちゃあならねぇゼ」

「美しい…姉君？」

「おい…嬉しいのか？こいつ、人ですらないぞ？つうかダービー。いや、お前誰だよ」

「あの…お兄ちゃん？」

「晶？」

「おっと失礼。これまた美しい妹君と母君も気にしちゃならねぇゼ？あっしと旦那ったぁもうツーカーもんよ」

「美しい…妹君…」

「いや、お前もかよ、順子」

「美しい…母君…ハアァ…」

「もうあきた。お前ら褒められりゃ誰でもいいのか。…ダービー」

「へへッ。なんでさぁアキラの旦那ぁゲボファ！！！」

数分後…一通り拷問を掛けて、ようやくダービーは観念した。やはり味噌汁浸けの刑が効いたか。

「うっ…うぅ…主…酷い…味噌汁は…錆びる…」

「ようやく反省したか」

「アタイ…汚されちゃった…」

「…まだわからんようだな」

「嘘！嘘だ主！ノーモア味噌汁！！ノーモア映画泥棒！！」

「お前はあのカメラの人か。なら僕の代わりに今までの経緯を三人に説明しろ。いいか？『正確に』だぞ？」

「オーケー、ボス！！」

ということでもうしゃべるのがめんどくなったから、後は全部ダービーに任せた。途中、

ーーーあちらの世界の王女や同僚、果ては女神まで手篭めにしぶるぁあ！！

ーーーダービー…言ったよな？『正確に』だと。

ーーーうぅ…事実であるのに…。

ーーーそんなことした事実は僕のログにはない。

とかあったけど、概ね（ダービーにやらせて）説明した。ちなみにこの後、暫くダービーは味噌汁恐怖症になった。

「ううん…まだちょっと信じがたい所もあるけど…ダービーちゃんがしゃべってる以上有り得る話よね…お父さんと昭彦には？」

「あぁ。これから話さなきゃとは思ってる。親父には、会社のこともあるし」

ーーーキキィィィーーー！！！

突然外でけたたましいブレーキ音が聞こえてきた。噂をすればなんとやら…か？

「やっほー！アキラ君！元気にしておったか？今日は皆連れてきたぞー。いやぁしかし、この『りむじん』という車はなんとも乗り心地がいいな！ハッハッハ！！」

「アキラー！！会いたかったよー！」

…馬鹿が家族連れで来やがった。王妃やセリーヌ王女、ディーン王女にアレン王子までいる。セリーヌ王女とアレン王子は好奇心も隠さず。ディーン王女、普段のクールっぷりを貫き通そうとしているのはわかるが、顔が真っ赤だ。はしゃぎたいのバレバレだぞ。不覚にもちょっと可愛いと思っちまったじゃねぇか。王妃は…流石だ。顔色一つ変えない。馬鹿国王も見習え、王妃の完全無欠っっぷりを。

「ちょっとエリー、ごめん」

抱きつくエリーをはがし、国王のとこに向かう。

ーーーツカツカツカ…ゴスッ！

「あいたっ！」

一国のトップを殴った。グーで。

「こんの馬鹿国王！全国ネットどころか全世界規模の会見であんなこと言いやがって！！僕はこっちでは一般人だって言っただろ！！？どうしてくれんだ僕の立場！！！」

「いや、ほら。有名になればアキラ君も街でチヤホヤされて一気にスターダムに…」

「必要ねぇ！！」

「でももしかしたら、ＣＤデビューとか全米デビューとか、バラエティーでも引っ張りダコに」

「なるか！！！つうか国王もダービーも、なんでそういう俗っぽいとこだけ詳しいんだよ！！」

ーーーキキィィィーー！！バタンッ！

「あっ晶！！お前…国王様になんて事を…！！」

兄貴の車から親父が飛び降りて来る。そうか、兄貴が迎えに行ったからご登場が遅くなったのか。図ったかのようにタイミングが悪いのは、最早仕様か。そして親父の超土下座（ハイパー）は凄い。一部の隙もな

い、完璧な動作、ワザのキレも段違いだ、流石大企業の社長は格が違う。

「いや、だってこの国王（バカ）が全面的に悪いんだもんよ」

僕…悪くないよな？

「もっ申し訳ございません国王様！！この馬鹿息子がやらかしたことの責任は全てこの私が…」

「よい、アキラ様のお父上。これは全面的にベインが悪い」

ほら、王妃はわかってる。

「…して、アキラ様」

「はい？」

「『ろっぽんぎひるず』とはどちらにあるのです？」

駄目だったーーー！！！王妃も大概に浮かれきってるぅ！！セラトリウス団長、助けてください…こいつらもう駄目です…。大臣？あのジジイは駄目だ。こいつらと同じ穴のムジナだ。

「……ゴホンッ！」

…あ。総理並びに各国の首脳のお歴々の方々。全力で置いてけぼり。

～第二十五話～Ｘデーその１（後書き）

今日考えた計画毎週日曜日は向こう（チーム「Ｈ」）の日に当てようかと思います。第二話で止まってるので。それ以外の日はなるべくこちらを進めますので、そこんとこよろしくお願いします。一日両方は…ＭＵＲＩ

～第二十六話～Xデーその2（前書き）

そうです、私が変な白カカオです。ということでこんばんわ。昨日思った事。この作品の女性陣、ワンパターン過ぎない？とりあえず現状だけで、エリーと順子に若干ココ、シーリカと美月のキャラが被ってる気がするんですが…。私のイマジネーション不足です。すみません。パソゲでもやって引き出し増やしますか。…ゲームやってる時間がねぇｏｒｚ

～第二十六話～Xデーその2

今僕んちの庭は、なんか黒い車とSPの方々でまっくろ○ろすけです。ここ、A田県のクソ田舎だよね？確かに外壁は白いけど、ホワイトハウスじゃないよ？ここ。つうか疑問二つ。

「あの…長谷川総理？誠に僭越ながら、二つ程質問させていただきたいのですが」

長谷川総理は一昨年就任した、今までと比べ若めの総理だ。外交面に滅法弱かった日本の内閣を一新し、主要国内での日本の立場を見事に復権させた手腕の持ち主だ。正直、僕はずっとこの人が総理でいいとすら思っている。

「…なんですか？」

うおおお！！微笑を浮かべ柔和な態度ながら滲み出るオーラがパネェェェ！！！…どっかの馬鹿国王とは大違いだ。日本人で良かった。

「えー…会見は、生中継でしたよね？つまりさっきでしたよね？なんでこんな所にいらっしゃるんですか？それと、なんで僕の住所がおわかりなのでしょうか…？」

「そんなことかアキラ君。代わりに私が答えよう」

いや、代わんな。出たがりか？若手の芸人か？

「それはあの会見が終わった後、ゲートで一っ飛びさ」

「ごめん、国王（バカ）。全く説明になってない」

「バカって言われた…」

あー！もうシュンとすんなめんどくせー！！

「わかった済まなかったよベイン国王。もっと分かりやすく説明してくれ」

「ベイン国王なんて水臭い。アーちゃんべーやんの仲ではないか」

「一回も言ったことねぇだろ」

「先ず会見が終わり、すぐ『アキラとは誰だ』となった」

だろうな。つうか進めやがった。いや、進めてくれ。突っ込んだら負けだ。

「その後『はいはーい！私知ってるー！』っと私が手を挙げて案内することに」

「初期のハー○イオニーか。つうかアンタが僕の名前出したんだから知ってて当然だろ。逆に知らなかった方がびっくりするわ」

「ここで皆さんをこのりむじん…『るるるりぃぃぃむずぃぃん』に乗せてゲートで我が国へ」

「いや、そんなル○ン3世とか若○みたいに言い直す意味がわからんし。つうかキュートスにリムジンごと連れてったの！？」

「うむ。ゲートはマテリアルの世界間での移動は出来んからな。そこは私と大臣でちょこちょこーっと」

「アンタらほんとはすげぇ魔術師なんじゃねぇの!?…あとエリー。暇なのはわかるけど、僕のポケットまさぐるの止めて。音楽プレーヤーなら後で貸してあげるから」

「ぶー」

確かにまさぐるのは止めてくれたが、今度は僕のパーカーの紐とファスナーで遊び始めた。もう、いいや。

ーーーフォンフォン!!

「…で、アキラ君とエリーの逢瀬の為の愛の穴を通りこちらの世界に戻り、アキラ君の魔力を嗅ぎ分けて辿り着いたと言うすんぽーだ」

ーーーフォンフォン!!

「あー…とりあえず…今んとこ、前半部のかなり卑猥な誤解を生みそうな表現はよそうか。ゲートな。つい一瞬前まで普通に言えてたろ?そしてそんな駄目GPS使うんじゃない。僕の行動筒抜けか?つうかアンタら犬か?政府の狗か?あっ文字通りか」

ーーーフーォン!!

「狗ではない!私はアメ○トリス軍大総統キングブ」

「はいはい傲慢傲慢。ちなみにアンタはキュートス国の国王のキート＝ベイン3世だ。オーケー？」

ーーーフォフォフォン！！

「あいたっ」

あーもうなんだよこの家族は落ち着きねぇなぁ。あーあ…エリーがファスナーに指挟んで切っちゃってるよ。さっきからファスナーのヘッドをそんな高速上げ下げしてるから。

「ほらほら。こっちの世界では治癒魔法使えないから、後で治してやるから。なぁ順子ー。絆創膏持ってきてー！」

「あっ…うん！」

呆気に取られながらこの状況を傍観していた順子が、猛ダッシュで絆創膏を取ってくる。流石陸上部のエース。

「ほれっ。これでとりあえず大丈夫だ」

「んっ…ありがと、アキラ…」

涙目で僕を見上げるエリーの頭を軽く撫でてやる。指に、名前を出しただけで恐ろしい事になりそうな、世界的アニメーションのセーラーアヒルの絆創膏をして少し機嫌良くなったようだ。

「…いいじゃん！可愛いんだから！！」

お前高校生にもなってそれかよ…という僕の生温い視線を感じて

か、顔を真っ赤にして抗議する順子。

「そうだ。お前ら二人遊んでこい。順子、部屋に案内してやれ。エリー、順子の物を壊すなよ?」

「「うん、わかった」」

よし、子供は素直でよろしい。

「主も…やるな」

「だろ?ダービー。これで話に集中出来」

「いや…我にはわかる。まだあどけない二人が、つたないテクニックでくんずほぐれつ『手遊び』しているところに、頃合いを見計らって混ざるというそんな高等テクを」

「リメンバー・味噌汁ハーバー」

「ガクガクブルブル」

おい指輪、震えんな。痛い。

「あっ、晶君。その指輪、今しゃべらなかったかい?」

長谷川総理が恐る恐る聞いてきた。他の首脳の方々もざわついている。すみません、存在忘れてました。

「えぇ、そうですよ?これは僕が子供の頃、親父から四歳の誕生日プレゼントにト○ざらすで買って貰ったイチキュッパの」

「我はたかが紙幣で、しかも玩具屋で買える存在か」

「何言ってるの？１９８円に決まってんじゃん」

「まさかの三桁！？」

「晶、その指輪、あの時の…」

うん、親父、そんな事実ないよね？あの時買って貰ったの二万ピースのパズルだよ？忘れてないよね？もし乗っかってきたのなら、親父は一応数少ない常識人サイドの人間なんだから、やめて。それともあのパズル一緒にやろうとしたのに、親父が会社に行ってる間に全部完成させたこと、未だに根に持ってんの？

「主…四歳児に二万ピースのパズルをさせるスパルタ鬼畜のどこが常識人だ。あと主はマジで規格外だな。どこにもおらんぞ？そんな四歳児。ル〇ィなんてワンピースでも苦戦してるのに」

「あっ、良い事思いついた。総理、今からキュートスに行きませんか？僕が大魔導士アキラと呼ばれる所以をお見せしましょう。他の首脳の方々も」

「自分で大魔導士とか言ってしまうか、主…それにしてもこの主、ノリノリである」

こうして僕と首脳陣、僕の家族ご一行はキュートスへ着いた。こんな面子の中、我が家の肩身はさぞ狭かったろう。

「よーし、いいぞー！グレン！ガラム！」

大規模なゲートから現れる異世界の要人達を見ようと、キュートス城の城門前には多くのギャラリーが押し寄せていた。花火まで上がっている。…どこの馬鹿だ。その中から目ざとくいつもの面子に、ついでにガラムまで見つけた僕は、総理達に僕の力が本当だと証明するべくあるデモンストレーションを思いついた。

アクアリウスを召喚して半径数十メートルのドームを作り、グレンとガラムを中に招く。戦闘形式の方が盛り上がると思ったからだ。勝負はどちらかが負けを認めたら終了。ほら、読みどおりあちこちで賭博が始まっている。つうかこの国の人って、ホントお祭り好きだなぁ。見てみろ。マテリアル人なんかエルフの群集と、突如出現した薄絹の美女が作った水のドームに呆気に取られてる。あと、たぶん僕が魔法使ったことにも。

ちなみに対戦相手が何故この二人かと言うと、単純に前衛魔術師団だから。ココは僕に攻撃魔法使う事を頑なに拒否した為、残念ながら不参加。楽しそうなのに。

「よーし、いっちょ女の子の前でいいとこ見せて、アキラに負けないハーレム作ってやるか！」

拳をぶつけ気合を入れるグレン、相変わらず雑念の塊だ。

「そんなことだと魔法一つ練成できないぜ…っっとぉ！」

開始の合図前に、グレンが横型の炎の竜巻を僕に放つ。たしかに合図決めてなかったけど。横っ飛びに避けた僕を、ニヤニヤ笑っている。

「なんか…言ったか？」

「…何でもねぇよコノヤロウ」

後ろを確認すると、水の壁にぶつかるまで芝が焦げた跡が続いている。

「魔法は想いの力…だろ？」

「…って何かっこつけてんだ！！よくよく思い出したら、竜巻の螺旋がハートの形してたじゃねぇか！気色わる！！」

「誰がお前に俺の熱い気持ちを向けるか！そう！あれはこの勝負を見ている、全女性へのラブだ！！」

…確かにその想いは強そうだけど、お前の魔法はある意味で致命的な欠陥がある。そうも言いながら、グレンは大小様々な炎の放射で攻めてくる。

「お前はダンマリか！？ガラム！」

スタート時から腕を組んだまま動かないガラムに叫ぶ。

「…五月蝿い。馬鹿馬鹿しい。俺は出るぞ」

「いいのかー？お前前から僕の事気に食わなかったんじゃねーのかー？ブルったかー？フォイフォーイｗｗｗ」

「…んのやろう！人間の分際で！！」

安い挑発に引っかかり、一瞬で作った氷の槍で本気で僕の胴を狙って来る。こいつ、成長してやがる。

「おわっと！氷の槍（アイスジャベリン）とはお前らしいじゃないか！ガラム！つうかここには僕以外の人間もいるんだから、そういう物言いは止めれ！」

自分で言うのもなんだが器用にブリッジで避け、そのまま後ろに跳ね上がり向き直る。僕だって伊達に鍛えてない。

「うるせぇ！！」

立ち直った所にすぐ槍の一突きが飛んでくる。ちょっと、避けるのは間に合わないかな？

ーーーガキィィン！！

僕も土中から薙刀を作り、広い刃幅を利用し矛先の軌道を逸らす。

「俺もいるぜ！」

どこのテ○ーマンだ！ガラムの背後から、グレンがジャンプして炎の剣を投擲してくる。

「のわっ！？」

後ろや横に避けたのじゃ間に合わない。受けるにしても、体勢が充分じゃない。そう判断すると、逆に前転して投擲の角度の内側に入りやり過ごす。槍のリーチで小回りの利かないガラムの懐にそのまま詰め、そのままの勢いで蹴りを放つ。

「がっ！！」

胸板に蹴りを喰らい、僕の運動エネルギーそのままに吹っ飛ぶガラム。そのガラムを尻目に、こちらもジャンプした勢いそのままに剣が突き刺さった傍に着地したグレンが得物を回収する。

「つうかお前！！剣なんて持ってなかったろ！？お前魔術師だろうが！！」

まぁ僕も薙刀とか出してるし、人のこと言えないけど。

「主、優れた魔術師は魔導装飾された武具を媒体にし、より強力な魔法を放つ者も少なくないというぞ」

「あああ…わからなくもない。でもグレンそんなモン持ってなかったろうが！」

「なんかさ…俺も不思議なんだけどよ、お前と戦ってると底から魔力が溢れてくる感覚がするんだよ。俺だけど俺じゃねぇみたいな？それで…炎の事象の向こう側からこいつが出てきたんだ…魔剣『フレイム・タン』」

～第二十六話～Xデーその2（後書き）

いつもながら前半部が長くなるもので…そしてこんな想定外なバトル展開になってるのもいつものことで…端的に言うと、私もビックリしています。補足を一点。同じ魔剣でも、白夜のとグレンのは意味合いが異なります。白夜のは、『魔的な剣』、グレンの方は『魔法剣』です。紛らわしいですが。

～第二十七話～Xデーその3（前書き）

ども、白カカオＤＥＡＴＨ！今日はコンビニの夜勤の日なので、親父の会社は早上がりです。この話執筆して最後に投稿ボタン押したとき、一度エラーで話のデータが飛びかけて嫌な汗をかきました。マジ心臓に悪い…。

～第二十七話～Xデーその3

魔剣、フレイム・タン。魔法装飾された装備品の中ではかなりの高位種に位置する。何振りか在るその大半はダンジョン等に封印されてあるが、稀に亜空間からの召喚もされる。

「なんだろ…すっげぇ楽しい」

グレンが目を輝かせると、その刀身から炎が立ち上る。

「おらぁ！！」

正眼に構えたそれを、剣の間合い外から振り下ろす。振り下ろした軌道上に、刀身から生まれた炎の奔流が押し寄せる。拙い！僕の後ろには（僕の攻撃で）動けないガラムがいる！結果、避けるという選択肢はなし。

「防ぎきれ！！」

何重もの土の壁を目の前に作り、その炎の荒波に備える。僕の手前、壁ホンの二枚でなんとかそれは止まった。

「おいおい…融解してマグマになってんじゃねぇか…どんだけ高温だよ」

「主っ！危ない！！」

背後に殺気を感じると、地面から霜を巨大な氷柱にした波が一直線に僕に向かってくる。

「チィッ！」

こちらは壁一枚でなんとか防いだ。魔剣の補助があるグレンに比べ、こちらはやはりパワー不足は否めない。

「グレン！！貴様ぁ…！」

「わり、テンション上がってお前いるの忘れてた」

生成した土の壁をキャンセルし、視界を広げる。わかっちゃいたけど、挟み撃ちだ。それも、相反する炎と氷の。これで同時攻撃されたら、どんな力場が生まれるかわからん。つうか、最悪水蒸気爆発起こすかもしれん。

「…先手必勝！！」

お返しに、こちらも土棘の波をお見舞いする。まぁ牽制程度だけど。

「しゃらくせぇ！」

「ふんっ！」

グレンの前に炎の壁が、ガラムの前には氷の壁がそそり立つ。

「なにも壁（ウォール）の魔法を使うのはお前だけじゃねぇぜ」

グレンの笑い声が聞こえる。壁自体は誰でも作れるに等しいが、その頑健さはその魔術師の知識、魔力、そしてイメージ力に多分に

左右される。例えば炎の壁なら、分子の振動を激しく加速させるイメージ。そして氷なら逆に、あらゆる分子の動きを停滞させ、絶対零度に近ければ近いほど頑強な壁が出来る。どちらにしろ、かなりの魔力と知識が必要だ。二人のそれは、及第点を遥かに越えているだろう。

「まぁ…そうだろうよ」

「お主ら何をしておる！！！」

僕の苦笑と同時に、水の壁の向こうから球体を抱えたセラトリウス団長の怒声がかかる。更に同時に、水の壁が一瞬で消え失せる。

「えっ！？ちょっ…」

「主、団長が抱えているアレは、属性魔法のあらゆる事象を打ち消す相克の宝貝（パオペイ）…『大極図』だ」

おい！封神演技で太上老君が持ってる、あのスーパー宝貝か！？こんな魔術師泣かせの武具を持ってたのか！？セラトリウス団長は！そりゃ団長の座にい続けれるわけだ。つうかアレも神代の話か。あるわけだ、この世界に。なんてったってあの話、最終的にみんな神サマだし。

「面白そうなことしてんじゃねーか！！俺も混ぜろや！！」

今度は反対側から、それも豆粒位の大きさに見える位の距離からマドラのおっさんの声が聞こえる。つうか、土煙上げてこちらに走ってきてる。……ん？なんか、飛んできてね？

「拙い！主、アレは雷槌―『ミョルニル』だ！！」

…オイ！！！北欧神話最強のトール・ハンマーなんてそんな危なっかしいもん味方に使うな！！それ、世界蛇ヨルムンガルド位しか防いだことねぇだろ！！即死攻撃だろ！！つうか死ぬ！死ぬ！！

先ほどの比ではない程の壁を生成する。…が、それで幾分か投擲の威力は軽減されたが、微々たるものだ。重ねた壁と壁の間に遅延の時間魔法を練っているにも関らずだ。音を立てて、次々と壁が割られていく。

「クソッ！僕のＡ（ありったけの）・Ｔ（土の）・フィールドでも！！」

「主、別に上手くもなんともない！！」

「つうかアレ、『雷』属性だろ！？なんで『土』で雷分だけでも対消滅しないんだよ！！」

「主っ！！来るぞ！避けよ！！」

最後の障壁を砕き、真直ぐこちらに向かって来る。

「…拙い！アクアリウスが！！」

僕のすぐ後ろには、水の壁がセラトリウス団長に解除され、丸腰のアクアリウスいる。雷のミョルニルに水のアクアリウスの相性は最悪だ。つうか、いくら神格とはいえ、アレを喰らえば最悪消滅する！避けるわけにはいかない。

「主！アクアリウスを戻せ！！」

いや、駄目だ。戻している時間がない。それより…。

「属性補正、全開！！」

全魔力を使ってでも、僕が受け止め護る！それしか間に合う選択肢がない！

「あああああああ！！！！！」

全身に土属性で雷に対する耐性を強化し、さらに肉体強化をかけた両手で受け止める。それでも尚、破壊力は致死量なそれは僕を吹き飛ばそうとする。アクアリウスは神格ですら打ち砕きかねない猛威に、へたり込んでしまっている。

「駄目だ主！！主の体が持たない！！逃げよ！！」

体がミシミシと悲鳴を上げる。強化された感覚が、同じく強化されたはずの筋組織が断裂していく様を伝える。

「…堪るかっ…！こんなことでアクアリウスを失って堪るかあぁぁぁ！！！！！」

「主っ…！！？」

僕の中で、膨大な魔力が生まれるのがわかる。アクアリウスは、僕の僕（しもべ）だ！絶対…絶対にこんな馬鹿げたことで失っていいはずがない！アクエリアスが動けないなら、主人である僕が護る！！

「アキラ殿の我が同胞への想い、胸を打たれた。我が力を貸そう」

声が聞こえると、背後から光が溢れると同時に背中を支えられる感覚が伝わった。首だけ振り返ると、首から上が牛の、背中から戦斧が覗く腰蓑一枚の大男がいた。

「お前は…」

「我が名はタウルス。金牛宮のタウルスだ！」

タウルスが名乗りを上げると、さらに強大な力が背中から伝わった。

「「うおおおおあああああ！！！」」

ーーーズドンッッ！！

重く響く音と同時に、目の前の猛威が力を失った。無骨な槌が、僕の足元に突き刺さる。

「ハハッ…やった…ありがと、ミノさん…」

「…たしかに我の姿はミノタウロスだが、そのあだ名は色んな意味でやめてくれ。…ってアキラ殿！？」

久々に全ての体力を使い果たし、仰向けに倒れる。もう立ち上がる体力も残ってない。つうか、筋組織があちこち断裂してすっげぇいてぇ。あーあ…空が青いなぁ…。

～第二十七話～Xデーその3（後書き）

今回もバトル回でした。ちなみに封神演技も、史実が混ざっているとはいえ神代の話なので神話扱いにしました。藤竜版ではないです。好きですけど。このバトルがこんなに続くとは思ってませんでした。Xデー編、たぶん次話で終わります。たぶん…。それと大事なこと！5万PV4千ユニーク到達しました！本当にありがとうございます！

～第二十八話～Xデーその４（前書き）

数日振りです。ブルーフェイス・ホワイトカカオです。土曜はバンドのメンバーと飲み、昨日はチーム「H」の執筆で二日ぶりの更新です。その間ご訪問してくださったかた、すみませんでした&お待たせしました。さて、無事Xデー編終わるのでしょうか（笑）ちなみにこの二日間で私は、良いライターとアクセサリーを購入してご満悦です。そろそろ、電波ソング聴きながら頑張りますか。

～第二十八話～Xデーその４

「アキラっ！！」

「お兄ちゃん！！」

倒れている僕に、エリーと順子が駆け寄ってくる。同時に僕の元に到着し、そして同時にお互いを認識し、顔を見合わせる。いや、僕を挟んでお見合いされても困る。学童野球の外野に飛んでいったボールの気持ちを世界一理解出来る気がする。いや、お前ら僕を心配で来てくれたんとちゃうんかと。どうぞどうぞするな。ダ○ョウ倶楽部か。その瞬間、傍にまた新たな光が現れた。

「そなたの想い、いたく感激した。タウルスに続き、わらわも力になろう」

左にエリー、右に順子。さらに頭の方に幼女が現れた。腕を組んで、なんか偉そうだ。幼女のくせに。突然現れたその子供に、両脇の二人が怪訝な顔をする。

「お前は…？」

まぁ、こいつの言葉と流れ的に新たな十二宮の一人であることは間違いなさそうだけど。

「わらわは処女宮のバルゴー。得意分野は治癒だ」

ぺったんこの胸を張り、さらに偉そうに構える。

「う、うむ。バルゴーの治癒能力は天下一品だぞ？アキラ殿。アキラ殿も骨抜きになること受けあいだ」

少し離れたところにいるタウルスが、頬を赤らめ大仰に頷く。何かあまり聞く事がよろしくない表現が聞こえたんだが。つうかタウルス…こいつ、幼女だぞ？お前、まさか…。おまわりさん、こっちです。つうかこのロリコン牛出っぱなしだったんだな。僕の意思じゃないとはいえ、不幸なことに同時召喚というこの状況。確認しよう。僕が倒れてるのは魔力が枯渇しかけているからだ。

「うぅ…倒れる…倒れてるけど倒れる…」

「何を馬鹿なことを言っておる。治癒を司るわらわが術者を消耗させてどうする。わらわを呼び出す時の消費ＭＰは、ゼロじゃ」

お前の言うＭＰはマジック・ポイントのことなのか、ご時勢とキャラを考えてモエ・ポイントなのか。僕にはそんな属性ないから、後者なら確かにゼロだが。

ーーーガスッ！

「いてっ！」

「そなた、けしからんことを考えておったな？」

「考えてねぇし。つうか、偉そうにしてるけどさっきからパンツ丸見えだぞ？」

ワンピ姿で倒れてる頭の上で踏ん反り返られたら、そりゃ嫌でも視界に入ってくる。別にどうでもいいんだけど。

「～～～っ！！！」

ーーーガシッ！！ボガッ！！

「アタシは死んだ。スイーツ（笑）」

「ダービー…代弁、ありがとう…」

うん、少なくとも鼻の骨は折れてるかな。鼻血で苦しい。

「おばえら…だずけおよ（助けろよ）…」

「お兄ちゃん、最低…」

「アキラの馬鹿…」

とりあえず、二人に僕を助けようと言う意思はもうないようだ。さっきは駆けつけて来るほど心配してくれたのに…月日の流れは早いもんだ。こうやって、いつの間にか大人になっていくものなんだな。

「主、散文的になる意味がわからない」

「…フンッ！ペッ！つうかバルゴー、回復する相手にダメージ与えてどうする…。僕は聖水でダメージを受ける不死族（アンデッド）じゃないぞ。ダメージを受けて興ふ…一部が回復するような性癖もないし」

なんとか顔を横にし、鼻血を噴いて口の血を吐き、呼吸を確保する。つうか、実害的に先ほどの二度のシリアスより傷を負っている。

こいつ何しに来たんだ。

「ふんっ！どうせ回復してやるんだ。変わらんだろ」

「なんと横暴な」

「…そろそろ回復していいか？」

「つうか、是非してくれ。今すぐに」

僕の瞳の強い光が伝わったのか、バルゴーは咳払いをすると、力を集中し始めた。…なぜ顔を赤らめる？アクアリウスのときみたいな展開は勘弁だぞ？公衆の面前だし、バルゴー…幼女だし。絵的に拙すぎる。僕はあの通学路に飛び込んでみたいとか思わない。そんな僕の思考回路を無視し、バルゴーが僕に手をかざす。

「いっ…いたいのいたいの、とんでいけー」

……その発想はなかった。おい、ホントに子供か！？僕、成人してる！

「…って、引いてる…マジ？」

先ほどの暴行の傷が癒え、体を巡る魔力すら湧いてくる。これが…萌えの力か…。

ーーーゲシッ！

「違うわ馬鹿タレ！もうしてやらんぞ！？」

やっと満足に動かせるようになった体を起こしてバルゴーがいたところを見ると…なんか更にちっこくなってた。

「わらわの力は、わらわの体を代償に対象の消耗の全てを回復させる。純粋なアストラル体のわらわは、魔力で構成されておるからな。暫くはこのままじゃ。…そうなってまでもそなたを癒してやったのだ。感謝するがよい」

待て、お前の善意だよな?この行動。勿論回復してもらったことは感謝するけど、お前に強要されるのは違くないか?周りを見渡すと、エリーと順子は小さくデフォルメされたバルゴーをつついて遊んでいる。タウルスは、その様子を何とも名状しがたい表情で見つめている。お前、もう引っ込め。その更に少し遠くでは、マドラのおっさんとセラトリウス団長と説教に近い口論をしている。当たり前だ。戦闘の参加の意思表示にあんな凶悪なものを投げつけるやつがあるか。

～第二十八話～Xデーその４（後書き）

すみません、何度も寝落ちしてしまい、頭も働かないので分けます。
明日、Xデー編最後のまとめに入ります。

～第二十九話～Xデーその5（前書き）

こんにちわ、白カカオです。なんとか回復したと思います。たぶん。昨日は十時前に寝たにも関らず今朝寝坊するというこの感じ。寝てたい…一週間くらい…。そういや休んでいる間にちゃんとこの先のプロットを考えていました。いやぁ…探せばこの作品に使える設定いっぱいありました。それは…楽しみにしててください。割と暗熱い展開かと。今回のお話じゃないけど。二章分くらい先の設定です。

～第二十九話～Xデーその5

バルゴーのおかげで歩けるようにまで回復した僕は、その足で各国首脳の方々の下へ向かう。僕が一歩進むに連れ、怯えに似た動揺が走っている。軽くへこむ…。デモンストレーション、効果ありすぎたか？

ーーーそりゃ主、無理もないであろう。さっきの諸々の出来事は、主の世界の人智を超えておる。今まで科学を絶対的に崇拝していた者たちにとって、受け入れがたい事であろうな。

まぁハリウッド映画よりも迫力あったろうからなぁ…生の魔法戦闘は。でもさ、非科学的とはいえ目の前の出来事すらありえないと否定してしまうのは、ナンセンスを通り越して憤りすら感じるぞ？それも、国のトップの人たちなら尚更。

ーーーそれを理解出来る者は意外と少ないぞ、主。

全く、何のために想像力があると思ってるんだ。自身の理解力や状況判断力を補填するためにそれを活用せずにどうする！

ーーーそれは主、オナ

ダービー、後で覚えてろよ？

「長谷川総理、いかがでしたか？これが、こちらの世界の…そして、僕達の世界をも覆いかぶさるリアルです」

「晶君…これは…本当に、君が…」

長谷川総理が渋い顔でずっと唸っている。うーん…この人にも少し多くを望みすぎたかな?まぁ、人としてわからんでもないけど。

「そうですが、安心してください。僕らの世界では、基本的に魔法は行使できないようになっていますから」

「そっ…そうなのか?」

「はい。技術の行使は、世界の集団意識によるらしいんです。僕らの世界の科学では当たり前のことが、こちらの世界では認識がないから実装できない。逆に、僕らの世界では魔法を使えるという共通意識がないから、魔法を使うことが出来ない。集団意識というのが、その世界の法則やルールみたいなものらしいですから」

「しかし、私達は実際見てしまっているぞ?晶君が使う魔法を。これでは、魔法が使えるということは、否定しようのない事実だ」

「大丈夫です。大多数の人間は魔法なんて馬鹿げた空想の産物としか思っていません。世界の法則がそうである限り、僕らの世界で使えないことに変わりはありません。まぁ…いずれ変わってしまうかもしれませんが」

僕だって、伊達に毎日のようなダービー講座を受けているわけではない。魔法や世界に関する基礎知識は、かなり高難度でも理解できるくらいにはなった。僕が落ち着いた笑みを見せると、総理はぬぅと押し黙った。総理の後ろでは、他の首脳達がひそひそ話している。通訳さんを通して。

なぁ、ダービー。お前、ヨグ＝ソトースに介入して、知識の言語

プールから、英語と中国語と、ドイツ語とフランス語を僕にインストール出来ない？最悪ストリーミング程度でもいいから。

ダービーも、僕と生活していくにつれ、現代用語とそれの意味もかなり精通するようになってきた。

ーーー一時的なものなら出来なくもないが…。ずっとは無理だぞ？主の記憶容量が追いつかん。

だからそれでいいよ。

ーーーしかし何故？

僕のいるところで知らない言語でひそひそ話されているのはなんか、不愉快。

ーーー…まぁいいが…。

一拍置いて、脳内に膨大な情報量が流れてくる。いつぞやと同じような眩暈が感じられる。失敗した、英語だけにしておけばよかった…英語なら、基礎知識はあるからこんなに入れなくて済んだのに。

「しかし、彼の言っていることはブラフかもしれん」

「うむ、我々が知識がないことをいいことに、戦略的に我らの世界に攻めてこんとも限らん」

「なぁに、いざとなれば我々には核がある。こちらの世界一つ潰す位わけなかろう」

「そうだな。見たところ、こちらの世界は我らの中世程度で文明が止まっておる。いくら魔法が使えようとも、手も足も出まい」

「むしろ、不安分子は今ここで消すか？」

…大方そんなとこだと思った。これだから今でも戦争なんかしてるお馬鹿さん達は困る。その人の国の内情を考えると、妥当な疑念ではあるけど。

「はぁ…なんでそんなに懐疑的に受け取るかなぁ？」

彼らの国の言葉で、溜息をついてやる。まさか僕が外国語を習得しているとは思わない首脳の方々は、一様に驚いている。ざまぁ。あと、僕の中ではアンタらに使う敬語なんて持ち合わせてない。そもそも、言語的に敬語という概念すらあまりないけど。

「言っとくけど、僕らの世界で魔法が使えないように、こっちでも他人に影響を及ぼす文明の利器は使えないんだよ？それに、僕らの世界だって神サマの影響受けてるんだから、下手にパイプラインであるこっち潰してみな？一気に死ぬよ？僕らの世界。知ってる？神サマを否定する側の数学者や科学者達が、突き詰めれば突き詰めるほど、神サマを肯定しないとありえないことがあるって。神の見えざる手ってやつかな？更に言えば、僕が本気で僕らの世界を魔法で征服すること考えてたら、今この場でアンタら殺してるから。世界のトップを潰せば、あとで幾らでもやりようがあるからね。それがお望みなら、今ここでやってやろうか？」

脅しの視線を込めて、軽く手を下方に振る。振った地面から、何本もの得物が生える。それを見た首脳陣は顔を蒼白にしている。あぁ、気分いい。

ーー主、完全に暗黒面に堕ちた笑みだぞ？それは。それにアダム・スミスもマラドーナもそういう意図で言ったんじゃないぞ？

五月蝿い。マラドーナのあれは見えてる左手だ。それに、ムカつくんだもん、こいつら。前々からニュース見るたびかなりの頻度で腹立ててたしさ。不敬罪？天皇様じゃあるまいし。こいつらのそんなもんは、客側が掲げるお客様は神サマ精神と変わらん。馬鹿馬鹿しい。そんなこと言うオタンコナスがいたら、この場で叩き切ってやる。

「晶君…武器を引きなさい…」

総理が顔を青くしながら僕に注意する。ちなみに時の魔法を無駄遣いして、この場にいる方々の国の言葉に合わせ一人同時通訳してたから、さっきの言葉も総理には筒抜けだ。まぁ総理の方には、きちんと敬語で流してたけど。

「安心してください。今回の目的は、平和的な文化交流です。僕らの世界でも、必ずプラスになるでしょう。それに、争いごとは嫌いなんです」

ニコッと笑い、武装を解除すると、一先ず安心したような空気が流れた。エルフの国王陛下は、ただ成り行きを見守っていた。

「では、こちらの世界の魔術師、僕らの世界の少しこちらの世界に精通している一般人は、ベイン国王陛下の評価相応の力を持っていることをお見せしたので、家に帰ります。後の確約に関しては、そちらでお決めください。僕は後で馬鹿国王に伺いますので」

「ちょっアキラ君、このタイミングで馬鹿って」

「ほら、みんな帰ろう？」

家族の方を向きなおすと、たぶん信じがたい出来事ばかりでショートしている。これが本当の放心演技。…演技じゃないか。ただ、意外なことに親父だけは真正面から僕を見据えていた。

「アキラ…もう帰っちゃうの？」

エリーが寂しそうに上目遣いで裾を引っ張る。

「あぁ。今日はな。またすぐ来るから。なっ？」

頭をガシガシと撫でてやると、いつものように気持ち良さそうに目を細める。

「絶対すぐだよ？明日だよ！？」

「いや、それは無理だろ。ちゃんといい子にして待ってろよ？」

そう言って、フリーズしている家族達を引っ張ってゲートへ向かった。

「晶…お前、今月いっぱいで会社に来なくていいぞ」

その日の晩飯の時、珍しく同席してる親父がいきなり言いやがった。

「ちょ…はっ？なに、僕クビ？なんかした？」

いきなりの展開に、動揺して箸を落としてしまった。三秒ルール！セーフ…。

「会社の都合での退職にしてやるから、退職金も用意してやる。職業安定局に行けば、失業保険もたぶんくれるだろうから、当座のこっちでの生活には困ることはないだろう」

「だから、話が見えないって！」

「晶、お前は向こうの世界に行け」

親父が静かにそういうと、重苦しい晩飯の空気がさらに重くなった。

「いや、なんでだし。今まで通り、向こうもこっちも両方上手くやるし」

「順子が、エリーさんから聞いた話を、私も聞いた」

「…順子？エリーとなんの話をしたんだ？」

別に怒っているわけでは勿論ないが、僕の視線に順子が黙って俯く。

「お前、あっちの世界で何度も死に掛けているらしいな？」

「いや、そこまでいってないけど…エリー、あの馬鹿そう話したん

だ」

「それに、軍部に所属して一度は軍を率いているそうだな」

「あの馬鹿…あとで説教してやる」

「これはあの会見でも言っていたし、あちらの国王様にも聞いたことだ。エリーさんではない。なんでもかんでもあの女の子に押し付けるな」

うっ…。

「お前はもう大人だろう?私の会社とあちらの軍隊、両方とも片肺で上手くいくと思ってはあるまいな?はっきり言って、そんな者うちの会社にはいらん。迷惑だ」

そこまで言われると、ちょっと涙目になる。そんな言い方しなくてもいいだろ、馬鹿親父…。

「あなた、何もそんな言い方しなくても…」

「里美は黙っていなさい。晶…聞け」

半ばいじけて魚をほぐしている僕に親父は口調を変えて話し続ける。

「私も何百人の上に立つ人間として、受け入れるべきところは受け入れる度量はあるつもりだ。晶、お前はあちらの世界に必要とされている。お前と話す、国王様やエリーさんを見ていればわかる。あのとき戦っていた若者も、軍部のお前の友人ではないのか?晶、認

めろ。お前の居場所は、あちらだ」

「でもさ、こっちだって家族とかいる世界だし、僕の世界だし…」

「なに、あちらに行ったって、別に今生の別れではないだろう？世界が違うだけで、お前が学生時代に一人暮らししていた時と変わらん」

「そうね…」

「お袋…」

「それに、こうでもしなきゃお前は動こうとしないだろう？」

親父はそう言うと、それっきり食事に集中してしまった。

「晶、エリーちゃんと結婚式するときは呼ぶんだよ？」

「なんでそうなるんだよ、姉貴」

溜息をつくと、順子が驚いて姉貴に訊ねる。

「えっ！？お姉ちゃんわかるの！？」

「あんたみたいにエリーちゃんと話してはないけど、まぁね。見てればわかるわよ。あんな可愛い子がどうしてこんな馬鹿晶に惚れてるかわからないけど」

「ブフゥッ！！」

…味噌汁を思いっきり噴いて、そしてむせた。何を馬鹿なことを言ってるんだ。

「ちょっと、お兄ちゃんに失礼だよ？お兄ちゃんいいとこいっぱいあるんだから」

「ガハッ」

立て続けに二度も噴かせんな。喉が…痛い…。

「主、着実に外堀が埋まっておるな…。エリーは実はもの凄く頭が切れる子なのではないか？ここまで計算に入れてるとは…」

「…んなわけあるか。つうかなんの計算だ…」

「主…本当は気づいていて、あえて目を逸らして気づかない振りをしているんではあるまいな？少しでも長くチヤホヤしてもらおうと」

…無言で醤油差しを手に取り、ポタポタとダービーに一滴ずつかける。

「塩分はらめぇぇぇ！！！中に！（装飾の溝から）中にキちゃうのおぉぉ！！」

うっさい。家族の前でらめぇとか言うな。ほらみろ、順子が赤くなって俯いてるじゃないか。家族と映画見て、濡れ場にさしかかった時の気まずい空気を味あわせるな。あと、醤油で痒い。洗うからお前取れろ。指を洗う邪魔だ。

ダービーごとグリグリ指を洗い、部屋に戻った。ベッドから見上げるあまり高くない天井に、やけに圧迫感を感じる。そのくせ体は

浮遊しているようで落ち着かない。

「エリーが僕を？…マジか？」

～第二十九話～Xデーその5（後書き）

なんかタイプする感覚が久しぶりに感じます。それと先日友人に、「マテリアルの反対ってアストラルじゃね？」っと言われました。…序盤の設定からしてやらかしたぁぁぁぁ！！！別にさして使ってない設定だし、ゴリ押ししてやろうかなとも思いましたが、今後の展開にまた出てくる予定があるので訂正します。すみません。生まれてきてすみません。リアルに、くぁｗｓｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ状態になるとは思わなかった…。

～閑話休題～ギラン、新たなる胎動（前書き）

こんばんわ、本日二回目の白カカオです。夜勤前ということなので、閑話扱いの短めのお話を一つ投下します。本編絡みの。今週あまり進めれなかったので…ｏｒｚ

～閑話休題～ギラン、新たなる胎動

「ここが、お前の言う異世界か？」

隣に佇む黒髪の女に話しかける。俺の等身大位の黒い渦を生み出したヘル・ブリングは、相変わらずわ何も読み取れない笑顔で俺を引っ張っていった。そこまで時間はかからなかった気がする。渦を抜けると、黒雲が覆い雷が響く、見渡す限り岩肌と森ばかりの大地に降り立った。壮観とも言える光景だが、何故か不安感や焦燥感をかき立てる。当てもなく、俺はただこの女の後をついていく。

「そうよ？貴方の大好きな血と暴力が支配する世界…気に入ってもらえそうかしら？マスター」

「勘違いするな。俺は殺戮が好きなんじゃない。今まではあいつらの道を作ってやる為に汚れ役を買って出ただけだ」

「へぇ…その割りに、肉塊に剣を埋める貴方、楽しそうだったわよ」

「…勘違いだ」

たまに、戦闘中に意識が自分の制御から離れる時があった。血が飛び散り、臓腑が引きちぎれるのが愉快で堪らない自分がそこにいた。最近は理性的な自分と、仄暗い愉悦を貪る自分のどちらが本当の自分なのかわからなくなる。

「つうか、そもそもあったんだな、異世界」

「ニュースでもやってたわよ？貴方の世界との交流も。知らなかっ

たの？」

「…テレビなんて見てる暇なかったからな。それに、あの国は自分達のことでいっぱいいっぱいだったじゃないか。外の報道なんてする余裕あったのか？」

「さぁ？ただあの子の腕にいた時の記憶ではそうだっただけだもの」

あの子…俺の目の前で大型の口径の銃弾で内臓をぶちまけられ、たんぱく質の塊になってしまった、このバングルを俺に渡した女の子。

ーーーリーダー…いつか…いつか、皆が笑顔になるように…導いて…それまで…死なないでね…？…このバングル、お守り…私のことは守ってくれなかった…けど…。

そう言って俺の腕の中で事切れた、まだ十代前半の女の子の顔が思い浮かぶ。

「何故…あの子は笑って逝けたんだろう…」

「さぁ？わからないけど、『信頼』ってやつじゃないの？私は、人間のそういう綺麗な感情なんてわからないけど」

「何故…あの子を助けてくれなかったんだ…」

ヘル・ブリングが立ち止まると悪戯っぽい笑いを浮かべてこう言った。

「だってあの子の心、綺麗すぎるんだもの。魔力も微量だったし。

貴方の後ろ暗い心と魔力の方が心地好かったしね。それに…どうせ主に選ぶなら、女の子よりいい男の方がいいじゃない？」

そう言うとヘル・ブリングは俺の顔を手で挟み、そっと唇を重ねてきた。舌が口内に入る感触がしたが、俺は応じない。

「もう、つれないマスターだね」

「くだらねぇことしてないで、行くぞ？目的地位いい加減言ったらどうだ？」

小悪魔のような笑顔を浮かべるヘル・ブリングを無視し、前に進む。

「まぁいいわ。今から向かうのは、あのお城。この地の有力な支配者が住んでいるお城よ」

岩肌だらけの断崖の中腹に、他の光景に明らかにアンバランスな城が見える。あれはまるで、ドラキュラ城のようだな。

「ふふふ…ご名答。私達が会うのは、正真正銘のドラキュラ伯爵よ。それも、真祖の」

そう言うと、先ほどと同じように俺を先導していく。

「あっ、油断しないでね？ここはゴブリンや鬼族（オーガ）も出るし、お城手前の森に入れば不死族（アンデッド）も出るわ。貴方はまだこの世界の住人じゃないんだから、きっと襲われるわよ。私の主なんだから、簡単に死なないでね？」

「ふんっ。あの銃弾の嵐を幾度も潜ってきたんだ。今更何を恐れる必要がある」

歩く事三日間。ようやく目的の城に到着した。途中、ヘル・ブリングが言うような化け物が言った分の種類みな出てきたが、問題なく屠った。あんな雑魚ども、全く問題ない。ただ、不死族は倒すコツを掴むまで少し時間がかかったが。魂喰いで魂を吸い取ってしまえば、なんの造作もないことに気づいた時には少し苦戦した自分が悔しかったが。

城に入ると、中は人の気配がない、がらんどうの空間だった。調度品はあったが、生活感がまるでない。

「こっちよ。この城の主が、魔力で道案内してくれてる」

ヘル・ブリングが目の前にある階段を上る。

「そうなのか？」

「マスターは、魔力感知に関してはまだまだね」

「…五月蝿い」

大仰な扉を開けると、どこかの王室の謁見の間のような部屋の正面、椅子にただ一人腰掛ける男がいた。

「…久しいな、地獄をもたらす女よ」

「久しぶりね、ソーン・ウラヴェリア伯爵」

「…で、そいつが今度のお前の主か？」

「ええ。どう？いい男でしょ？」

「ふん。ところで、ヘル・ブリングよ。天国への扉が復活したことは知っているか？」

俺の存在を無視し、話を続ける二人。…まぁいい。俺は二人の会話から情報収集に徹しよう。

「えぇ。主と同じ世界から来た、あのお坊ちゃまでしょ？キュートスお抱えの」

「あぁ。では、そのお坊ちゃまが緑竜を倒したことも知っているか？」

「っ！？まさか…あの古代竜は、いくら力が衰えたとは言っても、常人に倒せる竜ではないのよ！？」

おいおい…竜までいるのかよこの世界。しかも、俺と同じ『人間』が倒しただと？どういうことだ一体…。

「残念ながら事実だ。…して、協力してくれるんだろうな？」

「えぇ、勿論。だけど、一つ勘違いしないでね？伯爵。私に命令出来るのはあくまでマスター…白夜だけだからね」

「わかっている。…白夜」

「…なんだ?」

椅子から立ってこっちに向かってくる伯爵。いきなり話を振られ驚いたことをなんとか隠し、上目遣いに睨む。こいつ…でけぇ。

「我々が住むこの地は、ギランと呼ばれている、岩山しかない殺伐とした地だ。山脈を隔てた向こうはセラスと言って、平原と肥沃な大地が広がっている。我々は、そこからつまはじきにされた種族なのだ。向こうのやつらはその大地だけでなく、今度はこちらの大地まで手を広げようとしている。なんの目的かは知らんが、我々を根絶やしにするつもりだ。そんな言われもないのに。どうか…力を貸してくれないか?私は、同胞を護りたいのだ」

『同胞を護りたい』…最後の言葉だけがやけに耳に残った。なんとも信用し難い男だが、特に目的もない俺は話に乗ってやってもいいかなと思った。

「いいよ、手伝ってやる」

「本当か?」

「あぁ。話を全面的に信用するわけではないがな。ただ…誰かを護る戦なら、俺も手を貸してやる価値はある」

「そうか!!」

伯爵が俺の手を取りシェイクハンドする。

ーーーふふふ…暗雲としたマスターの心を唯一動かす言葉、『護る』

。如何せん綺麗な感情なのは癪に障るけど、これでもっと楽しめるわ。待ってなさい、ヘブンズ・ゲート…。

～閑話休題～ギラン、新たなる胎動（後書き）

ども、白夜回でした。目的もない男なので、この位軽くてもいいかなと。出勤まで時間がないからとか、そういう事ではないです。…９割は。とりあえず、白夜はギランにつきました。

～第三十話～親善大使、カミヤアキラ（前書き）

こんにちわ、会話の九割が下ネタの白カカオです。いやぁ、ぐっすり寝ました。睡眠はいいねぇ。リリンが産んだ文化の極みアッー！！ということで頭の中が残念に絶好調です。仕事中は今後の展開を構築して内容で泣きかけてたりしてました。マジメに仕事しれ。…では、おかげさまで三十話の大台、スタートです。

～第三十話～親善大使、カミヤアキラ

「おい、ダービー。…お前も気づいてたのか？」

先ほどの姉貴と順子の会話を頭の中で反芻する。今まで超展開は何度も経験してきたが、この話はまた畑違いだ。ジャンルが違いすぎる。…今まで恋愛経験が皆無ではなかったが、不慣れな事には変わりない。故に、どういった対応をしたらいいかわからない。

「我は大分初期の段階から気づいておったぞ。というより、今の今まで気づかなかったのは主だけだ」

はぁ…。これじゃいつぞやにダービーが言っていた、『鈍感なハーレム系の主人公』そのまんまではないか。いい加減、自分で全くコントロール出来ない運命に憤りすら感じる。こんな問題、まだギラン側と戦闘してた方が気が楽だ。

「滅多な事考えるでないぞ、主。恋愛問題、良い事ではないか。実に平和だ。主も、もっとこんな幸せな、一般的な悩みを楽しんではどうだ？ちなみにまだまだいるぞ？主に想いを寄せるオナゴは。例えば…」

「…言わんでいい。本気で頭痛くなってきた」

というより、姉貴といい順子といいコイツといい…そういう類の好意を第三者が本人にバラすのはどうかと思うぞ？エリーの気持ちも勿論だが、僕の気持ちを考えてくれ…。エリーと会った時、どう接していいかわからん。

「そこで相手の気持ちをきちんと気遣いの範囲内に入れるあたり、流石モテモテの主であるな」

…黙れ。こういうポジションは、イケメンどもにやらせておけばいいんだよ。グレンなんかきっと大喜びだから。こっちとキュートスの外交のことも（何故か）考えないといけないのに、余計なことを持ち込むんじゃない。運命の女神、出て来い。第一話で出来なかった分の説教を今ここでしてやる！

「…出てきやしねぇ。十二宮の連中なんか呼んでもないのにホイホイ出てくるのに」

「当たり前だ主。あの女神は上位の神性だからな。いくら女誑しの主の呼びかけとはいえ簡単には」

「誰が女誑しだ誰が！」

「痛い痛い主！水晶部をグリグリするのはやめてくれ！」

最近気づいたことだが、装飾の中央部に気持ちついている水晶はこいつの弱点らしい。さっきも醤油を垂らしたとき、ここにかけた時はことのほかダメージがデカかったようだ。

「はぁ…外交のことは明日、キュートスに行ってみないとわからんか」

溜息をついて目を瞑る。そろそろ頭が消化不良を起こしそうだ。何も考えたくない。つうか、件の二件だけでお腹いっぱいだ。これ以上問題が増えない事を祈る。

「しかし、なんでお前についてる宝玉は水晶なんだ?もっと何か、得体の知れない鉱物でも良かったろうに」

「ふっふっふ。主、これにはちゃんと訳があるのだ」

「言え」

「水晶とはな、魔術において最もポピュラーで汎用性が高い鉱物なのだ。さらにもっと重要な理由があるのだが…」

「…もったいぶらずに言え」

「続きはウェブでだ」

「何処に開示してるんだ何処に!」

「まぁ、時期が来たら主も知ることになるだろう」

「あああ!モヤモヤすんなぁもう!でもどうせなら、水晶は水晶でも紫水晶(アメジスト)が良かったなぁ」

「…何故だ?」

「僕の誕生石だから」

「…主は馬鹿なのかロマンチストなんだか」

「なんか言ったか?」

「いや?」

「お前いい加減にしないとダービーじゃなくてＤＢにすんぞ」

「あまり変わらんのではないか？ブンさんよりはよほどいいが。むしろダーク・〇ュナイダーみたいでかっこいいではないか」

「…いいか？これは略称は略称だが、ダービーでもドラ〇ンボールでもないぞ？ＤＥＢＵの略だ」

「やめろ主！我の姿は主の思念で決まってしまうから本当にそうなってしまう！本当に、後生だからやめてくれ！！」

…そうなのか。クソッ。それが本当なら、美少女の設定にしておけば良かった。全部ダービーが渋い声だからいけないんだ。今更美少女の真似事されても気持ち悪いだけだ。なんてこった…。なんか、口髭が似合う紳士が女装して『ご主人タマ（ハァト）』とか言ってんの想像しちまった…死ねる…。

「主、我はそれでもよ」

「却下だクソ変態が」

……。

脳内の疲労とは意外と侮れないようで、早めに寝たにも関らず僕は昼過ぎにノコノコ起床した。

「おあよー…」

ワシャワシャと歯を磨くと、遅めのブランチに舌鼓を打つ。そう、

僕の大好物、オムライスだ！

「米はいいねぇ…リリンが産んだ文化の極みだ」

「晶、私のカヲ○君像を汚さないでくれる？」

「いや、汚すもなにも立派な変態キャラだろ、○ヲルんは」

「ちょっと、お兄ちゃんもお姉ちゃんもご飯中に変な事言わないでよ」

順子、知ってるぞ？お前の部屋に、一冊シ○ジ×カ○ルの同人誌があることを。もうやだこのライトなんだかコアなんだかわからない姉妹。兄貴？堅物の割にパソコンには色んなフォルダ隠してるよ？奥さんには内緒だけど。…どうやら神谷家には残念な血が流れているらしい。どっから来た。

「まぁいいじゃない。私も昭彦と晶の名前、本当は○ッチの達○と和○にしようと思ってお父さんに止められた位なんだから、可愛いものよ」

…元凶はお前か、お袋。というかその由来でその名前つけられなくて良かった。事故で死ぬぞ？僕。そして伏字が多すぎる。作者がそろそろ疲れるからやめてあげて。

「そうそう、晶。貴方今日どうするの？」

オムライスのおかわりを頼もうとした時、お袋が珍しく僕に予定を聞いてきた。

「あぁ、飯食ったら、とりあえずキュートスに行って来る」

「そう…気をつけて行くのよ？」

「あぁ」

「お兄ちゃん、エリーちゃんにヨロシク伝えてね！」

「おぅ…」

一晩経っていい感じに現実逃避気味に忘れていたが、順子と姉貴のせいでエリーと会うの気まずいじゃねぇか。はぁ…どうすんべ。

「アキラ君、待っておったぞ」

久しぶりに来る謁見の間…をまさかのスルーして、国王の私室で例の件について話をする。別に誰に聞かれても困らんだろうに。まぁあそこよりは肩凝らないからいいけどさ。

「…で、どうなったの？例の件」

「それでは端的に説明しようか。アキラ君に関しては、キュートスと日本国を結ぶ大使となってもらう」

「それ、とりあえず本人の意思確認必要だよね？もうなし崩し的になっちゃったからいいけどさ」

「済まなかったな。勿論褒美は弾むから引き受けてくれないか」

「まぁ褒美は別にいいけど…」

「ありがとう！では次にだが、アキラ君にはそちらの世界で農業を学ぶ場を提供してほしい」

「僕が言い出したことでこうなったんだから、一応アテはつけておいた」

まだ確認はとってないけど。

「流石アキラ君！仕事が速い」

「流石の意味がわからないけど、他には？」

「うむ、これで最後だ。そちらの世界に向かう研修生はこちらで用意した。入っていいぞ」

国王が声をかけると、数人の男女が入ってきた。見た目、僕より幾分か若い。それでも僕より年齢上なんだろうけど。

「彼らはアカデミーで募集し。さらに選考した結果選ばれた四人だ。農業の適正を考え、属性を土と水に絞ってある」

ほう…国王（馬鹿）にしてはなかなか考えたものだ。そこまで準備してくれたのなら、あとは僕がやるべき仕事は少ない。

「ありがとう、国王。そこまで準備してくれたらあとは僕がやるよ。…で、文化交流という名目上こちらから向こうへの動きもあるんだろ？」

「うむ…鋭いな、アキラ君」

「科学や魔術の情報交換は出来ないとして…残るは工芸か」

「正解だ、アキラ君。向こうから農作業の技術と幾分かの種子を分けてもらう代わりに、こちらからはドワーフの工芸技術とミスリル、アダマンタイトの多少の輸出を考えておる。幸い今キュートスには、バリアスから避難してきたドワーフの難民の工房があるからな」

なるほど。ドワーフの鉱物加工技術はお墨付きだし、少量とはいえ、ミスリルやアダマンタイトなら向こうには無い鉱物だ。レアメタル以上の画期的な技術革新があるかもしれない。ちなみに、稀少な順に、オリハルコン、ミスリル、アダマンタイト。オリハルコンは伝説クラスの武具の、ミスリルは上位魔法補助装備、アダマンタイトは上等な一般装備の材料に使われている。ちなみにダービーと団長二人の装備はオリハルコン、グレンのフレイム・タンはミスリルだ。たしかアレン王子の装備はアダマンタイトだった気がする。

ちなみにこちらの世界に農耕技術が発達すれば、食生活の改善が大幅に進み生活水準は一気に上がるだろう。僕の世界で米やその他作物の種子は稀少ではないが、重要度を比べるとトントンだろう。

「ま、ちょうどいいんじゃないか？」

「ではアキラ君、後は頼む。さっき言った褒美の件だが」

「別にいらないって」

「先払いとして既に用意してある。大臣」

「ハッ」

大臣が黒い布に包まれた何やら長い…つうか結構でかい得物を両手に持っている。

「ダービー様と一緒に蔵にしまって置いた物ですじゃ。グレン君のフレイム・タンを見てようやく思い出しました」

国王が布を取ると、無骨な大剣が現れた。両刃の、柄拵えもない、ぱっと見ただの古い鉄の大剣だ。

「これは…」

ダービーが絶句する。

「やはりダービー君はわかるようだな。機械神（デウス・エクス・マキナ）が神器にして最上位種のオリハルコン製の武器、『無銘（ネームレス・ソード）の大剣』だ」

……この国、なんでそんなチート品がほいほい出てくんだ。

～第三十話～親善大使、カミヤアキラ（後書き）

機械神に関しては、本来の意味とは違いますが近い意味のモノを考えています。あと、大剣の名前は魔導書「無銘祭祀書」と、デモンベインのネームレス・ワンをもじりました。あの最強っぷりが好きだったりします。リベル・レギスも好きなんですが。マスターテリオンかっこいいです。

～第三十一話～文化交流とトホホな人たち（前書き）

ＪＰＳがコンビニになくて失意のドン底にいる白カカオです。二回目の登場です。理由はなんとなくです。では、三十一話、どぞ。

～第三十一話～文化交流とトホホな人たち

「アキラ、遊ぼ？」

国王の部屋から大剣を抱えてきた僕を、エリーが目ざとく見つけた。

「いや、ちょっと忙しくなりそうだから、悪いけど、遊ぶのはまたな」

別に、気まずいとかそういうことではない。色々消化不良ではあるけども。

「また…戦争に行くの？」

エリーが悲しそうな表情を浮かべる。確かに僕がこっちに来てそういうこと多かったから、心配するのもわからんでもない。

「いや、お前の馬鹿親父に仕事頼まれてな。争い事じゃないから安心しな」

そう言うと、いつものようにエリーの頭を撫でる。こちらもいつも通り、気持ち良さそうに目を細める。

「そっか…アキラ、お仕事頑張ってね」

強めに掴まれた服を離すと、エリーはやはりどこか寂しそうに笑った。

「まぁ…落ち着いたら、また一緒に散歩でもしような」

「ホント!?うんっ!約束だよ!?」

エリーの顔がパッと輝く。やっぱり、エリーはこうして笑っている方が可愛い。笑顔で手を振り去っていくエリーに僕も手を振り、とりあえず今は使わないこの大剣を自室に置いて来る。

「ほう…?」

「なんだよダービー」

「主もエリーのこと、まんざらではないようだな」

「うっさい」

今のうっさいにも、何か含む意味があったのだろうか。昨日の件から、自分の気持ちすらよくわからない。なんだこれ。思春期のガキじゃあるまいし。

「よいではないか。主にも正常な男子としての感情が働いておる証拠だな」

「お前の上から目線はなんか、ムカつく。さぁ馬鹿言ってないで、戻るからな」

「戻る?」

「僕の世界に戻って、交流の手配をしないと」

そう、僕は急務で手配をしないといけないのだ。恋愛なんぞにうつつを抜かしている場合ではない。

「今の主には必要なことだと思うのだがなぁ…」

ダービーの呟きは、あえて無視した。

「もしもし、透？ああ、そうなんだよ、マジ参ったよホント…。そう、その件でさ、お前に頼みがあるんだ。うんじゃあ、明日お前んとこ行っていい？うん、高校の方でいい。昼過ぎ頃向かうわ。うん、じゃあな」

自宅の自室で携帯を離すと、一先ず溜息をついた。とりあえず、第一段階クリア。

「主、誰と話しておったのだ？」

「あぁ、昔のクラスメイト。そいつが今農業高校で教師してるから、今回の件で協力願おうと思って」

中学の同級生の高階透。今回の文化交流に関して、僕にとっての最重要のカードだ。こいつの勤め先は前述の通り、農業高校。これほど身近に手軽でおあつらえ向きの舞台はないだろう。こいつは一介の教師でしかないが、これが駄目ならかなり面倒くさい手続きが必要になる。その場合、僕が厚生労働省とか農林水産省とかに掛け合わなければいけないが、そんな面倒くさいマネはごめんだ。つうか、僕は一般人のはずだ。

「主…そんなカンダタの蜘蛛の糸より細い希望的観測にすがるのはもうやめぬか？」

嫌だ。僕はごく普通の一市民だ。少なくともこの世界では！

「主…手遅れだと思うぞ？」

うっさい。泣きたくなってきた。

翌日親父の姦計で今月中に会社を去ることになった僕は、分割した引継ぎ業務のその日の分を手早く済まし、一旦キュートスに向かった。交換留学生を迎えに行く為だ。そして更に、何故か着いてきたエリーも車に乗せる為に、透のところに行く前にもう一度自宅によるハメになった。僕の車は運転手を除き四人までは詰めれば乗れるが、一人オーバーしてしまったためにお袋に車を借りなければいけなかった。まぁ滅多に使わない中型のファミリー車だから、たまには使ってやるのも悪くないだろう。ちなみに、車に乗った事は勿論見たことも無いエルフ四人は、興奮して五月蝿かった。

「よお親善大使様、お疲…れ…」

高校の職員用玄関から入った僕達を出迎えた透は、こちらを見るなり絶句した。確かに初めて見る生エルフだ。それに連れて来ることは確か話してなかったから無理もないかもしれない。それは僕の失策だ。

「そんな口をきくなよ…僕も頭痛いんだから」

「アキラ、頭痛？大丈夫？」

僕に半ば抱きつき加減でエリーが僕を見上げる。そうじゃない。そうじゃないが…ほら、目立ってる。部外者のおっさんに、エルフの群れ。ただでさえも人目を引くのに、お前、離れろ。前にもあったろ、こんな衆人環視。

「いや…言いたい事は山ほどあるが、まぁいい。とりあえず応接室に座ってくれ。エルフの方々もどうぞこちらへ」

透が先導して案内する。おい、最後の含みの在る笑みはなんだ。いや…考えたくない。少なくとも今は考えたくない。たとえエリーの見た目が二十歳未満だとしても！

「はぁ…」

応接室のフカフカのソファーに座ると、一気に疲れが押し寄せてきた。主に精神的な。若い女教師の人が、お茶を運んできてくれた。緊張しているのか、顔が強張っている。別に緊張なんかしなくていいのに。僕はそんな大層なもんでもないし、こいつらは見た目どおりの精神年齢なんだし。

ーーーコンコン。

ノックが聞こえ、透と校長先生と思わしき先生が入ってきた。さて、ここが正念場だ。

……と気合をいれたのはいいものの、好感触過ぎて逆に拍子抜けした。周りを珍しそうにキョロキョロするエルフ達を、さらに同じような視線で眺める校長先生と透。たぶん、学校のネームバリュ

ーが上がるとかそういう裏もあったと思うんだけど、とりあえず教育委員会に通して、そこから厚生労働省まで話を持っていくそうだ。まぁ、完全に不本意ながら親善大使を任命された僕の名前を使っていいと許可したから、悪くは転ばないだろう。利用できるものは利用するのが僕の主義だ。総理も、今回に関しては助成金とか工面してくれるらしいし。

…つうか、なんで僕は総理とそういう会話できるようになってんの？

「よし、僕の仕事はここまで！あとは、キュートスの外交官に任せる！」

完全に仕事をブン投げ、留学生四人を送り、キュートス城の自室に引きこもる。今エリーは自分の部屋に戻ってぐっすり眠りに落ちている。ホント、何しに来たんだあいつは…。今僕の部屋にいるのは、この国の外交官二人。両方ともう消えないだろうクマが刻まれ、がっつり…げっそりじゃなくてがっつり頬がこけ、慢性的な疲労が滲み出ている。つうか僕が出来ることも知識的にも外交能力的にもここまでが限界だから、後はやってもらうしかない。僕は一般人なんだ。でも流石に、こんな状態の外交官にタダで仕事を増やさせるのも良心が痛むので、酒の一杯でも奢ってあげることにする。ポケットマネーにはかなり余裕があるし。

城下の居酒屋につくと、二人がもの凄い勢いで酒を煽る。

「アキラ様はまだわかっておらぬ！我々が如何に水面下で苦労しているのか！」

「そうだ！アキラ様、先日のアキラ様の世界との条約を結ぶ会議の

時は…」

はいはい、お二方、その話、四回目のループ突入。そうとう溜まってたんだな。察するよ。

「しかし、決して悪いお方ではないのだ、騎士王は…」

「そうとも。だからこそ我らもついていっているんだが…」

なんとも涙がちょちょ切れる話だ…主に話のループ加減で。健気過ぎるだろ、この人たち。僕は国王のアレな素行しか知らんけど。

「おや？アキラ殿ではないか」

おぉ！！いい所にセラトリウス団長！助けてください！この無限地獄から。

「全くマドラの馬鹿にはほとほと呆れるばかりじゃ…」

……アレ？

「アキラ殿。そなたももう少し普段の行動を謹んで…」

……アレ？

「「アキラ様！まだ話は終わっておりませぬ！！」」

待て、状況悪化してる？三対一か？コレ。

「主…腹を括るのだ。人間、時には耐えることも必要な時期もある」

「店員さーん、麦酒もう四杯くださーい」

もうこいつら潰さないと駄目だ。幸いエルフは酒が弱いことは確認済みだ。

「アキラ殿…聞いておるのか？そなたは…」

「アキラ様、我が国王は…」

「しかし国王もあれで…」

駄目だ、こいつら更に悪酔いしただけだ…。こうなりゃ緊急回避。エマージェンシーモード発動。

「店員さーん！麦酒、ピッチャーでー！」

僕が潰れよう。早く意識を手放すことを祈る。

「主…」

あー、念の為ゲートの時間止めてきて良かった。明日、会社だし。一日こっちで休んで肝臓フル活動してもらお。気持ちわる…。

～第三十一話～文化交流とトホホな人たち（後書き）

本当は国王はそれなりにしっかりした人なんです。ただ、他の方々が振り回される割合が多いだけで…。それと、外交の件ですが、あんだけ風呂敷広げておいてあっさり終わらせました。政治が関ってくると、私もわからん！！…すみません。次話から、またシリアスになる予定です。あくまで予定ですが…。

～第三十二話～戦火、前夜（前書き）

ども、珍しく早起きな白カカオです。仕事の小間使いで起こされて、バンドの練習も今日はなくなってしまったので、こんな時間に投稿します。夜はチーム「H」に方に取り掛かるんで。雨降ってて寒いです。

～第三十二話～戦火、前夜

文化交流事件から月日が流れる事四ヶ月。僕は無事親父の会社を退職し、キュートスの護国騎士団の一魔術師として悠々自適な生活を送っている。ずっとここで暮らしていると、案外こちらの生活も悪くないと思うようになった。住めば都とはよく言ったもんだ。

今部屋に転がっているこの『無銘の大剣』の扱いにも、だいぶ慣れてきた。こいつは実戦的な面よりも魔術媒体的な側面の方が強く、僕の魔力の方向性にも素直に応じてくれる、実にいい子だ。僕の魔力の波動を減少させず、そのままの威力を保ち放ってくれる。たぶん、他の媒体ではそうもいかなかっただろう。さすが神器。

ちなみにその間、僕は魔術師団の部隊長に任命された。過去の勲功が評価され、逆に一般兵の立場に僕を置きづらくなったのだろう。シーリカとグレンも同列に座している。そしてそれぞれの副官には、シーリカの所にはガロン、グレンの所にはカイム、僕の所にはココがいる。シーリカは意外と万能選手だからこの昇格はなんらおかしくない。ガロンも本来ならシーリカとコンビを組むことが多かったから、納得。グレンもフレイム・タンを召喚してからは急速に力をつけ始め、一気に頭角を現した。バハムートを従えるカイムだって本来はグレンに勝らずとも劣らない力を持っているのだが、なにやら観察がどうこう言ってて敢えてグレンの下についているようだ。

「本当はアキラのこともまだ見たいんだけど、また時期があるから…」とかわけのわからないことを言ってたけど、寒気がするから止めて欲しい。あいつとの付き合い方を考えなくてはいけないかもしれない。そして僕のとこのココだが…この子は本当に成長した。火属性の割に引っ込み思案な前衛という微妙なポジションだったからどうせならと僕の部隊に入れたのだが、こいつには炎を使った熱治療と、遠距離からの魔法攻撃に長けるという意外な才能があった。今では並みの魔術師と比べると頭一つ分抜きん出ている。ただ、も

う少し自信持ってくれればなぁ…。
そしてある日の夕刻、軍部の仕事が終わり自室でダラダラダービーをいじめて遊んでいた僕は、王城の謁見の間に呼ばれた。シーリカとグレンも一緒だ。騎士団側の人も何人かいたが、如何せん自分と関わりが薄い人は覚えられない。が、たぶんこの人たちも部隊長クラスなのだろう。

「急な話だが、ギラン側にまた動きが見られた。敵本拠地はガラリオン山脈の裏側。ウラヴェリア伯爵が怪しい動きをしているらしい」

「ウラヴェリア伯爵？」

「うむ、ウラヴェリア伯爵は吸血鬼（ヴァンパイア）で、真祖で非常に他の魔族に影響が強い人物だ。ロードすら支配下における実力者だ」

「…で、何故そんな人の動きが察知出来たんだ？」

「私がセラトリウスを介して軍部に頼んでおった、千里眼の改良技術がやっと完成したのだ。強力なボイドも看破できるそれで、ようやく向こうの動きを少しずつだが把握出来るようになった」

はぁ…こっちの技術も日々進歩してるのね。御見それしました。

「…で、僕達に遠征して出鼻を挫いて来いと」

「アキラ君…ちょいちょい先に言ってしまうのやめてくれないか？まぁ予想はつくだろうが。…ゴホンッ。今回の作戦は、初めてこちらが先手を打てる。皆の者、心してかかってくれ。そして…出来るだけ生きて帰って来てくれ」

「「「御意！！」」」

さぁて、なんだかんだ言って久しぶりの開戦だ。気合入れてかからないとな。ココに部隊通達を任せ、入念な仕度にかかる。…と言っても、大した準備もないんだけど。

「主が敵と直接戦うのは、ヨグ＝ソトース以来だな」

「そういやそうだな。まぁ僕もその間何もしてこなかったわけではないし、なんとかなるでしょ」

「主…気合入れないとと言った矢先にそれか。努々、気をつけるのだぞ」

「あぁ…」

これが最後の晩餐でないことを祈りながら、国王達と食事を済ます。僕はなるべく和やかに過ごすように勤めていたが、エリーの表情は終始曇っていた。全く心配性だなぁ、こいつは。

部屋に戻ると、気分を落ち着ける為にお香を焚き、ベッドで横になりながら寝煙草をふかす。なんとなく、儀式みたいなもんだ。

ーーーコンコン…

突然、控えめなノックが部屋に響く。生返事を返すと、エリーが沈痛な面持ちで立っていた。

「まぁたそんな顔してるのか。ほれ、菓子くらい出すから入りな」

エリーの背中を押すと椅子に座らせ、机に茶菓子を出す。少し前にマテリアルの実家に帰ったとき、こっそりちょろまかしてきたものだ。確か、エリーはこれが好きだった気がする。

「アキラ…」

そう言いながらも何も続けず、下を向いてばかりいるエリー。珍しく、菓子にも手をつけない。沈黙が数分。チェーンスモークしていた煙草も、もうすぐ二本目を吸い終わる。

「エリー？何もないならもう寝るぞ？夜更かししないで、体力を温存しておきたい」

声をかけると、エリーが唐突にベッドに座っている僕の横に座ってきた。

「アキラぁ…」

エリーが涙声になって急にしがみついてくる。そういや、こいつ僕のこと好きなんだっけ？やばい、急に鼓動が早くなってきた。ダービー、なんとかしろ！クソッ、余計な空気読んでチャンネルを切ってやがる。

「アキラーッ！」

嗚咽に近い声で僕の名前を呼び、さらに勢いを増して僕に抱きついてくる。支えきれず、そのままベッドに倒れこむ。僕の胸に顔を沈め、涙やら何やらで僕の服を濡らす。

「エリー…？」

「絶対、絶対帰ってきてね…？帰って来て、私から離れないで…」

「なにを急に…」

笑いながら頭を撫でてやるが、エリーの感情の昂りは収まらない。

「だって、だって…相手はあのウラヴェリア伯爵だよ？私でも知ってるくらいの人が敵なのに…もしかしたらアキラだって今度こそ…」

「こら、縁起の悪いこと言うな」

笑いながら小突いてやると、エリーが顔を僕に向ける。顔が汁でぐしゃぐしゃだ。

「だって…き…ん…もん…」

「えっ？」

「アキラのこと、好きなんだもん…！」

「っ！？」

…ついに、エリーの口からその言葉が出てきてしまった。今までのらくらとかわしてきたが、目の前で言われると決定打だ。逃げ道がない。

「アキラに傍にいて欲しいんだもん！また一緒にお散歩行きたいん

だもん！もっと、アキラと一緒にいたいんだもん！」

一気に捲くし立てるように気持ちを伝えると、またエリーは胸に顔を埋めて泣き出す。どうしていいかわからず、僕はただエリーの頭を抱いていた。

どのくらい時間が経ったかわからない。いつまでも気持ちの整理をつけられずにいると、エリーが突然上体を僕から離した。

「エリー？」

「アキラが、別に私のこと好きじゃなくても構わない。でも…」

「っ！？」

「戦に行く前に…私を…抱いてください…」

そう言うと、エリーはするりとドレスを脱ぎ落とした。薄暗い部屋に月明かりが差し、エリーの白い肌が浮かぶ。

「ちょっ！待て！お前、わかってやってるのか！？」

顔を逸らし、必死に抵抗する僕に、エリーは静かに告げた。

「わかってる…わかってるから、アキラに抱いて欲しい…お願い…私の我が儘、聞いて…今だけでいいから…私を見て…」

言葉を紡ぎながら、そのまま僕に覆い被さってくる。目の前にエリーの細くしなやかな裸体が迫り、裸の胸に頭をかき抱かれる。頬に、エリーの弾力が伝わる。

…おい、ちょっと待て。エリーだぞ？あの、小動物みたいに僕にまとわりついてくる、あのエリーだぞ？

ーーー本当にお前の評価はそうなのか？

ダービーではなく、もう一人の僕が疑問を投げかける。

五月蝿い。今までだって、こうならないように必死にかわしてきたじゃないか。

ーーーただ認めたくなかっただけではないか？妹分として、保護者みたいに接してきたエリーを、そういう対象として見ないように、お前は本当の気持ちを誤魔化していただけじゃないか？

五月蝿い五月蝿い！

ーーー『必死に』ならないとかわせなかったのが、その証拠なのではないか？思い出してみろ。お前が大変な時、傍にいたのは誰だった？

もう一人の僕の言葉に、ふと記憶を馳せてみる。初めて国王の前に立ったとき、僕が魔術師団に入団したとき、そして緑竜を倒した時。僕の身を案じ、一番心配してくれたのはエリーだった。エリーが初めて作った食事は、僕の事を考えて悪戦苦闘した、愛情が感じられた。迷いの森に行った時、無理矢理ついてきたエリーを、何に代えてもこいつを護ろうと思っていた。あの日夜空の下散歩した時、不思議と心地好かった。エリーの手に口をつけた時、こういうのも悪くないとどこかで思っていた。

そう、いつの間にか、隣にエリーがいることが当たり前になってしまっていた。なんてこった。エリー以外の女のお子が隣にいるこ

とが、考えられなくなってしまっていた。

ーーーもう、自分の気持ちを隠さなくていいのではないか？エリーの気持ちに、応えてやってもいいのではないか？もっと、自分に素直になってはどうだ？

その声は確かに僕の声だったのに、何故かダービーが言っているようにも聞こえた。

「エリー…」

僕が顔を離しエリーを見上げると、ただ辛そうなエリーの顔が僕を見下ろしていた。そっとエリーの首に手をやり、頭を下げさせて唇を重ねる。

「あっ…」

唇を離したとき、エリーの顔に困惑の表情が浮かんだ。

「今のはいつぞやの、意味も理解していなかったお前のキスじゃない。僕も…エリーのことが好きだからしたキスだ」

そう、自分にとっての最終通告を告げると、エリーの頬にまた一筋の涙が零れた。

「僕は必ずお前の隣に帰ってくる。だから、待っててくれ。待っててくれるっていう、証を僕にくれ」

そう出来るだけ笑顔でエリーに言うと、エリーは顔を押さえて泣きながら何度も頷いた。その晩、月が下を向くまで僕達は体を重ね

た。眠りに就く前に、これで帰って来れたら僕は竜殺し（ドラゴンスレイヤー）ではなく、フラグ殺し（ブレイカー）を名乗ろうかとかそんな馬鹿馬鹿しいことを考えながら、隣で笑顔で寝ているエリーを眺めていた。

「全く、どんな夢見てんだか…」

～第三十二話～戦火、前夜（後書き）

はぁ…ついに書いてしまった、この回。この位の表現なら、セフセフですよね？エリー、歳だけならアキラより上だし。こういうシーンいらなかったという方、ごめんなさい。

～第三十三話～若者達の旅立ちの朝（前書き）

ちゃおっす。白カカオです。予告すると、三週間後にデスマが確定して戦々恐々しています。夜勤明け、同窓会、バンド、夕勤。これがたった二日間に詰め込まれました。死にます。その間は更新勘弁してください。なるべく時間は作りたいですが…。

～第三十三話～若者達の旅立ちの朝

「アキラ…これ…」

一夜明け、小鳥の囀りが聞こえた辺りで、ようやく僕らはもぞもぞと起き出した。しばらく離れようとしなかったエリーだが、何かを思ったのか体を起こした。なんか、もう裸の恥じらいとかないっぽいな。女はたくましい。

「お守り…というわけじゃないけど、これでいいから私も連れて行って」

そう言うと、エリーはネックレスを外し、正面から腕を回し僕の首にかける。

「おい…」

「私が…ついてるから…」

エリーは僕を見つめるとその至近距離を利用し、そのままキスをした。僕は、もう抗う事をしなかった。互いの唇が銀の糸を引き、そのまま見詰め合う。

「あぁ…」

そう返事してもう一度唇を重ねようとすると、

「アキラ様ー。朝食の時間ですよー。あとエリー知らないかしら？あの子ったらどこに行ったのか…」

ノックもせずにドアを開けるセリーヌお姉様。お、おはようございます。に、二度目ですね、こうして顔を合わせるのは。こないだと確かによく似ていますが、決定的に違うこの二人裸というこの状況、いかがお写りでしょうか。あと、どうします？この状況。とりあえず、思考がまとまりません。

「アキラ様…ご朝食はもうお取りになったととらえてよろしいのでしょうか…？」

そう言うと、静かに笑顔でドアを閉める。

「タンマ！ストーップ！！待って、待ってくださいセリーヌ王女！食べてない！入ってないから今！！！」

僕の絶叫がセリーヌ王女に届いたかはどうかはわからない。届いてくれていることを切に願う。

「アキラ、寒い…ちょっと温めて？」

男が全裸で手をドアの方に伸ばし、その背中に女がピタリと抱きつくという恐ろしくシュールなこの空間。ダービーが起きてたら大爆笑してただろうな…。その日の朝食が何故か僕とエリーの分だけ豪勢だったのは敢えて言及すまい。今日が出陣だからとか、そういう理由だと思い込むことにしておく。しておきたい。…だから色々な思惑のありそうな視線で僕らを見るのは止めてください、皆さん。戦の前に、ＳＡＮ値やらＭＰやらガリガリ減る。マジックでなくメンタルポイントが。

「では、いってきます」

「はい…いってらっしゃい、アキラ」

城を出ると、そのまま軍部を目指す。目指すと言っても城とは目と鼻の先なので、ものの数分もあれば着いてしまうのだが。その間、ダービーの無言がやけに気になった。気配はするんだが…。

「…アキラ、絶対お姫様と何かあったでしょ」

護国騎士団の精鋭を以っての出陣。城外までの道のりの間の壮行パレードの最中、隣の隊列にいるシーリカが話しかけてきた。

「なっ、なんだよ藪から棒に」

「だってお城の高見からアキラを見るエリーちゃん、なんかいつもと違って落ち着いてるもん」

「そっ…そんなことも、あるんじゃないか？」

おっ、女の勘、こえぇー…。全っ然わからんぞ、僕には。何が違うんだよ？

「あっ、首元にキスマーク発見」

斜め前にいるカイムが楽しそうに振り返って言う。

「おいっ、マジかよ!?」

「おい…マジかよ…」

カイムの前にいるグレンが、完全に引いた表情を浮かべる。…カイム、鎌かけたのか？謀ったのか？貴様…。

「お前、散々俺をロリコンだのなんだの言っておいて…なんて羨ましいことを…。俺の心は今、憎しみの紅蓮の業火が渦巻いているぞ…」

「グレンだけに」

「お前はぁぁぁ！！」

「馬鹿っ！街中で火炎流の魔法使うなっ！！カイム、ガロン！ローブに火がついちまったじゃねぇか！消火しろよ！」

「プッククク…」

「クックック…ハッハッハ！」

「笑ってんなぁ！あーあ、穴空いてんじゃねぇか…」

戦闘前に味方パーティーの防御力減らしてどうすんだ…対物理用の装備だったんだぞ、これ…。

「ア、アキラ君、それ…」

「あぁ…エリーが。お守りだってさ。よくわかんないけど」

わしゃわしゃと頭を掻きながらココの質問に答える。もう…隠し

立てなんて無理だし。

「そっか…そうなんだ…」

ココがそう言いながら下を向く。ココには刺激が強い話だったか？この流れ。ったくこいつらはデリカシーの欠片もない。

「さくばんはおたのしみでしたね」

「「ギャハハハハ！！」」

「うっせぇぞクソダービー！！いつから宿屋の親父になったんだお前は！！お前らも笑うな！」

「…やれやれ。馬鹿ばっかじゃ」

先頭を乗馬で闊歩するセラトリウスが頭を抱えていたが、その顔には成長した愛弟子達の姿に微笑が浮かんでいた。

「この僅かな期間で、本当に頼もしくなったものじゃ。これも…アキラ殿のおかげかの」

「なぁに老け込んだこと抜かしてんだジジイ。もうそろそろ寿命か？」

「なっ、何を失礼なことを言いよる、マドラ！」

「まぁ…頼もしくなったことに関しては同意だな。ガキの成長は早

いからな。あの若造も、大したもんだ」

「ふっ…」

気がつけば、マドラにも似た表情が窺えた。この男も、憎まれ口を叩きながらも愛弟子達の成長を心から喜んでいるようだ。

「…ところでジジイ」

「なんじゃ？」

「本当にあの若造と嬢ちゃんが乳繰り合う仲になったということは、例の賭け、俺の勝ちだな。ほら、とっとと金貨六枚よこしやがれ」

「くっ…覚えておったか」

何やら軍部トップの秘密裏の賭博が、隊列の前方で決済される。

「ふん！これが三途の川を渡る六文銭にならぬといいがの」

「ケッ。金貨六枚じゃ銭よか上等な舟で渡してくれるだろうよ」

「はぁ…家内になんと今月の小遣いを無心すればいいかの…」

魔術師団を率いる大魔導士の、悲痛な呟きが零れた。…とても偉大な老師に見えない背中だった。

内容は聞こえないが、今から死地に向かうとは思えないキュートスを担う若者達の陽気に、高見にいるキート王家の皆は自然と安心感を覚えていた。

「…あの子達なら、大丈夫よね？」

「あぁ…。見てみろ、あんなに明るく真直ぐで、仲間想いで優しい子達ばかりだ。きっと、皆またこの地に帰って来てくれるよ。あの子達は…私の、我が国の誇りだ。勿論アキラ君もな」

王妃と見詰め合う国王は、最後にエリーに優しく微笑んだ。

「…はいっ」

昨日までの子供っぽさが消え、一人の淑女として一皮剥けたエリーの姿がそこにあった。

「アキラ君が帰ったら、祝言をあげようか」

「それにはまだ早いわ、お父さん。今はまだ、もう少し恋人気分を味わいたいの」

大人びたエリーの頬を、優しく心地好い秋風が撫でた。それは、あの日のアキラと散歩した夜の風に似ていた。

キート王家の面々の目の前を小鳥達が数羽、戯れるように弧を描き、何処かに飛んでいった。

空は快晴、風は微風。旅立つには絶好の日和だった。

～第三十三話～若者達の旅立ちの朝（後書き）

まさかの予定してたところまで進まなかった件について。余計な肉付けばかりして進まないのが私の作品の真骨頂です。誰がＤＥＢＵやねん。…痩せよ、体も文も。どうすれば文才って身につくんですか？教えてエロい人。

～第三十四話～草原の住人（前書き）

し～ろ～白カ～カ～オ～。ども、白カカオです。昨日は書いている途中に完全に落ちる予感がしたので、意識がある内にに中断しました。おぉ白カカオよ。睡魔に負けるとは情け無い。…情け無い。大丈夫！今日は精神的疲労だけだから。マジ、今日はメンタルが最終防衛線を明後日の方向に突破されました。私にとってどっちが耐えれるのか…。

～第三十四話～草原の住人

キュートスを出て丸三日。僕達は西の平原を縦断している。敵地までのルートは、迷いの森を更に西へ。ガラリオン山脈の切れ目から大回りで山脈の裏側へ向かう。理由は二つ。一つは山脈に住まう古代竜とのエンカウントを防ぐ為。もう一つは敵本拠地が大陸のやや西側に位置する為。そもそも山脈を突っ切るルートはバリアスが制圧されているから無理なのではないか？っとお思いかもしれないが、僕も知らないうちにバリアスの奪還は終わっていた。何故僕が知らないかと言うと、その時僕はこっちと僕の元の世界の外交の真似事をしている内に他の方々で済ましてしまったからだ。一説によると、このゴブリンオーク大量掃討作戦こそが、シーリカやグレン達の大量昇格の契機になったらしい。まぁ力をつけたあいつらにとっては、物量攻撃なんてものは防いで当然のような気もするが。ちなみに、半数近くのドワーフはキュートスに残っている。その多くは年老いたドワーフだが、その技術は現役さながらでキュートスの新たな産業を築いている。

「あぁぁぁ…疲れた…」

「なぁに寝ぼけたこと言ってんのよ。アンタは馬に乗ってるでしょうが」

騎乗でだれてる僕にシーリカが呆れ顔でツッコミを入れた。確かに一番辛いのは徒歩の一般兵のみんなだけどさ。だってこの風景、飽きたもん。最初の時は眼前に広がる地平線と美しいガラリオンの山並に感激したけどさ、やっぱり絶景ってのは、たまに見るからいいもんだ。

「だって暇なんだってばよ。だってばよ」

「なんで二回言うのよ…」

シーリカの言葉を無視し、首元に光るネックレスのヘッドをいじる。キュートス王家の家紋を象ったそれは、北極星らしい。無意識に星の角をぐりんぐりんいじっているらしいが、どうやら装飾品をいじるのは僕の癖のようだ。慣れてないし。ネックレスなんて、気合が入った外出の時くらいしかしないもん。たまに角をダービーに刺してみたりするが、愉快な悲鳴が聞こえるだけで別に何も面白いことはない。ダービー、うっさい。

「そんな首輪ばっかりいじって、リーナス王女が恋しくなったか？」

ちょっと先を行くグレンが、馬の上から首だけこちらに向ける。

「いや、別にそんなことはな」

「うんうん、やっぱ可愛いもんなぁ、リーナス王女。俺もグーたんとか言われてぇぇぇ！！」

「いや、別にアキラ呼びだし。つうかグーたんって何だ。飯でも食って雑談すんのか？」

「こら、馬鹿隊長ども。もうすぐ中継地点じゃ」

セラトリウス団長の声につられ遠方を見ると、住居らしき影がちらほら見える。イメージ的に、遊牧民の簡易住宅。その集落につくと、ぞろぞろと住人達が総出で出迎えた。

「長旅ご苦労だったな、セラトリウス」

「なんのこれしき。ワシはまだまだ現役じゃわい」

「ハッハッハ！！相変わらずだな」

そう言って団長と握手するのは…獣人だった。ここはガラリオン西の端、両端にある獣人族の集落の一つだ。

ーーー主。

珍しくダービーが頭の中に話しかける。どうした？今度はケモナー属性か？

ーーー違う！我をグレンと一緒にするな。

グレン？あぁ、そういやあいつ狼耳の女性に話しかけられて、だらしなく鼻の下伸ばしてるな。さっきから。エリーエリー言ってたのに、気の多いやつだ。アイツのことは愛の多方通行（たほうさん）と呼んでやろう。

ーーーあの今セラトリウスと話している、恐らくこの種族の長の虎の男。たぶん、我は以前会ったことがある。

マジか！？

ーーーあぁ。あの者に、前世の記憶があるならな。依然緑竜と話した時に出てきた、グーラスと言う名を覚えておるか？

うーん…忘れたっ！

ーーー…まぁよい。我の歴代の主の一人だ。そやつが緑竜に挑む前、一度獣人族と戦ったことがあったのだが、恐らくあやつはその時の部族長だ。

ほぉ…お前、色んなとこで因縁があるんだな。寧ろ、世間が狭いのか？

ーーーいや、今時代は大きく動こうとしている。そういう時は、因縁を持つ者達が惹かれあうものよ。

ふーん。そんなもんか。僕に何の因縁があるかわからんけど。

ーーーなるほど、そうかあやつか…。…主、面白いことを考えたぞ。暫く口を挟まず見ててくれ。

そう言うと、ダービーは虎耳おっさんに話しかけた。

「セラトリウス、すまぬ。少しこやつと話させて貰ってよいか？」

「ほう、しゃべる指環とはまた滑稽な」

虎耳さんが愉快そうに笑う。笑うっつっても。虎の笑い声は豪快なんてもんじゃない。正直、幼少時代サファリパークの虎を見てちびった経験がある僕は肝を潰しそうだ。こえぇ。

「お主、前世の記憶はあるか？数世代前の前世だが、我はお主と戦ったことがある。グーラスという名前に、聞き覚えはないか？」

「うーむ。知らねぇなぁ」

お前、外したか？

「そうか…しかし獣人の長よ。こいつはあるはずだ。お主の魂が覚えているだろう？」

言うや否やダービーは僕の許可も得ずに、勝手にレオを召喚する。腹減ってんだから、やめろや。矢継ぎ早に、タウルスも。だから同時召喚は疲れんだって…。

「おぉぉ…！！獅子神様！獅子神様だ！！それに…牛頭様もっ！！」

族長の声を合図に、周りの民もざわつき始める。ダービー、どういうことだ？

「一口に獣人と言っても、主の世界にも伝わっているように数多の種族が存在する。百獣の王と呼ばれるライオンと、日本の牛頭信仰。この二つは、獣人の信仰の代表格だ。この二人はこの獣人族の信仰対象。恐らく…グーラスを見限っていたこやつらが、戦っている相手が獣人とわかるや離反したその戦いが発端であろう」

へぇ…レオはともかく、あのロリベコンがねぇ…。まぁ一時期ネットでもかなり広まったから、そういうもんなのか。つうかシシガミ様って響き、ジ〇リのアレ思い出すから止めて欲しい。レオ、お前デエダラに変身

「出来んぞ、アキラ」

こいつ、読心術を会得して

「おらん。アキラの考えることはわかり易過ぎる」

クッ…今まで姉貴とかに考えてることを読まれてたのはそういうことか…。そうか！僕は単純だったんだ！

「主、う○ぎのシャ○アみたいに笑っても見開きではないぞ？そんなしょうもないこと」

「五月蝿い。獣人族の集落なんてまんま動物園だろうが。お前の名前なんて麻雀の役なんだし」

「…それを言うなそれを。嶺上開花（リンシャンカイホウ）のバーゲンセールよりマシであろう」

「獣神様の召喚…しゃべる指環……アキラ！？お前、あの」

今まで呆気に取られていた虎耳さんが捲くし立てる。

「そうです。私が変なアキラです」

後ろ！後ろ！な人の物真似をしてみたが、通じるはずもなく…くそう。こんな屈辱昼の放送のアレ以来だ。わかってはいたけど。

「そうか…緑竜を倒したというあのアキラか。ということは、あの獣神を召喚した麻雀の役の名前の指環とは、ヘブンズ・ゲートだな？緑竜、ヘブンズ・ゲート。思い出したよ。グーラス、あのいけ好かないガキか」

「思い出してくれたか…」

「つうか虎耳さん、麻雀知ってるんだ」

「知ってるとも！昔、そこのセラトリウスにいくらぼられたことか…」

…セラトリウス団長？貴方いたいけなアニマル相手に何やったんスか？口笛を吹いて顔をそらさないでください。チラッと横目で十二宮の二人を見ると、なんだか崇め奉られていた。おい、まんざらでもない顔してんな、馬鹿。

「しかしあのアキラを従軍させてきたとは…本当に、ギランに一泡吹かせられるかもしれんな」

「ふんっ。かもしれんじゃなく、吹かせるのじゃ。その為に、我らは行くのじゃからな」

麻雀で詐欺られたのに水に流したかのような虎耳さんの態度。若干評価が下がった団長の爺さんよかよほど器広いのかもしれん。

「…決めたぞ。皆の者！聞け！！」

虎耳さんが民の方に振り返ると、声高らかに呼びかけた。しかし、虎の大声はホント…腹に来るな。こりゃこえぇわ。

「キュートスの同胞は今！巨大な力を味方につけあの忌まわしいギランに向かおうとしている！我らも今、立ち上がろうではないか！獣人族の誇り、今一度世界に見せ付ける時ではないか！！戦いに命を懸けられる者、予に続け！戦場こそが、我が獣人族の聖地だ！！！」

一瞬の間の後、獣達の雄たけびが幾重にも重なって地鳴りを起こす。鼓膜破れかねないぞ、これ。シーリカあたりは聴力いいから、きついんではないか？

「さぁ…あの女狐…九尾を出し抜いてやろうか」

「女狐…？九尾!？」

「そうだ、東の獣人族の長は九尾の狐。あの姦計ばかり企む、いけ好かない女性（にょしょう）よ」

なんとまぁ…。こうして、なんと獣人族の軍勢が新たにパーティーに加わった。

～第三十四話～草原の住人（後書き）

以前の回の反省。別にヨグ＝ソトース使わなくても、ダービーはアカシックレコードにアクセス出来るからそんな手間必要ありませんでした。すみません、大事な設定くらい把握します。それと、麻雀漫画の兎とかはたしてどれくらいの読者の方が知っているのでしょうか…掲載誌、近代麻雀だし。ちなみに咲は、アニメ第一話しか知りません。あしからず。

～第三十五話～敵のお膝元（前書き）

こんばんわ、悪い事の後に悪い事は続くけど、やっぱりちゃんと良い事が待ってる！そう信じないとやってられない白カカオです。今日は自室に引きこもります。何故か、パンドラの話の解釈が頭を駆け巡ります。希望って、災厄の一つなんですかね、やっぱり。

～第三十五話～敵のお膝元

獣人族の集落を後にして更に二日。ただいま、ようやくギラン地方に入りました。正確な現在地は、ガラリオン山脈の切れ目を過ぎ、ギランの入り口にある湿地帯。…ここで一つ言いたい。例え山脈隔ててるとは言え、こうも空が一面雷雲の雷の柱があちこちで跋扈するこの変わりよう、なに？どこのス○ラだ。○ュックだったら気絶してるぞ！？よし！僕は今日からザナル○ンドエイブスのエース、○ィーダを名乗ｒ

「主…現実逃避癖はそろそろ直した方がよいのではないか？」

「だってよ！なにあの量産型雷！？別に百回かわしてもご褒美とか貰えないんだよ！？マドラのおっさんご乱心してんじゃねぇいてっ！！」

「アホなこと言ってんじゃねぇ。ほれ、敵さんのお出迎えだ」

おっさんに拳骨喰らった頭を撫でながら涙目を向こうに向けると、数百はいそうな蜥蜴人（リザードマン）が湿地帯の背の高い草をものともせずこちらに向かって来た。ちなみに蜥蜴人も亜人の一種なのだが、人種としては全く別物だ。セラス側の蜥蜴人は糸目で割りとのんびりした人種だが、こっちの蜥蜴人は猫の目のように瞳孔が縦に開いていて、非常に好戦的だ。今目の前にいる彼らは、皮の鎧に鱗の盾、ククリ刀やカタールなどの装備、またはパルチザンやハルバートを両手持ちの大変物騒な連中だ。ちなみに鱗の盾は、死んだ仲間の遺体から剥いで何重にも重ねて作られているそうだ。吐き気がする。

「…すぅ。全軍、突撃ぃぃぃ！！！」

虎耳の長が声を張り上げた。獣人族達が唸り声を上げて突進して行く。えっ!?ちょ、隊列とか作戦とかなんも無し!?つうか得物持ちに素手で突撃って、勇敢にも程が…。

「おいおいマジかよ…」

慌てて追従した騎士団の方々が戦闘を開始するが…アレ?僕ら加わる必要ねーんじゃねぇの?数的には騎士団の方が数割多いけど、撃破数がほとんど変わらないってどういう事?しかも、素手で。

騎士団の名誉の為に言っておくけど、騎士団だって、セラス最大軍力を自負出来るくらいには鍛え抜いている。つうか、あまり出番はなかったけど、実際強い。筆頭がマドラのおっさんだし。

エルフも決して低いわけではないけど、身体能力ってこんなに作用するんだ…。みんな動物ベースだから、筋力にしろ俊敏性にしろ桁が違う。更に言えば、戦闘スタイルは我流そのもの。つうか、本能のみで相手を屠っている。ちょっと、チート過ぎね?おかげで僕ら後衛はほとんど回復魔法と魔法補助に回っている。まぁ、本来の姿なんだけど。ちなみに両魔法の力の源は『母なる大地の恩恵』とか言われてるけど、いまいちイメージとか具体的なフローチャートとか浮かばないから結構苦手なんだよね。精神論でなんとかしてるけど。

「アキラ君っ!!」

前線にいたはずの騎士団部隊長、ジュダイが僕のところに駆け込む。綺麗だった白銀の鎧が泥にまみれ、血汗が端正な顔を汚している。

「どうしました?」

ちなみに、騎士団部隊長の名前は進軍中あまりにも暇だったので、暇つぶしにこっそり名簿を見て覚えた。

「足場がぬかるんでまともに動けない！優勢ではあるが…犠牲者はなるべく出したくない」

なるほど、そういう事ね。こういう補助なら、喜んで協力しますよ。割と得意分野だから。

「了解です。ジュダイさんが戻るまでに間に合わせます」

「助かるっ！！」

そう言うと、ジュダイさんはその場から消えるように前線に戻る。これは風属性の誰かが追い風（トップスピード）の魔法かけてるな。さっきここに現れた時のも、それなら納得。

「…あっ」

そうだ、加速の魔法使えるんじゃん。とりあえず、足場整えたらかけよう。部下の水と土属性の魔術師を何人か呼び、土の魔術師を地面に手をつかせる。

「下地は僕が全部やる。土のみんなは地面を固めて安定させることだけ集中して」

「「「はいっ！！！」」」

魔力の力場を作り魔術師同士を繋げると、水の魔導師に湿地の水

分を全て飛ばさせる。そして水分を不自然に抜かれて緩んだ地盤を、土の魔導師の魔術師達に固定化させる。これで、かなり足場は改善されただろう。そして水の魔術師が抜き取った水分は、そのまま遠隔の攻撃魔法にあてさせる。相手は蜥蜴人だから、水攻撃はあまり効果は期待出来ないけど。ちなみに魔術師同士を繋げたのは、魔法が作用する水を抜いて地盤を固めるという流れを、魔術師同士にも流動的に感じさせる為。更に言えば同じ属性の魔術師を繋ぐことにより魔法効果を高める為もある。一応、一つ一つの動作にもきちんとした理由があるのだ。

「これでよし…かな？」

足場の問題に関して言えば、魔術師達の力場の維持に多少魔力を裂いてやれば問題ないだろう。幾ら魔力量が増えても、後に備えてなるべく魔力は温存しておきたい。なんか、絶対僕が矢面に立つ場面がある気がするし。あとは…。

「ふんっ！！」

前衛の騎士団と魔術師団に加速の魔法をかける。とりあえず、これで獣人族レベルの機動力に上がったはず。むしろ、誰かの追い風（トップスピード）の魔法に上乗せされ、まさに疾風という言葉がふさわしい出来に仕上がっている。急に勢いを増した騎士団に獣人族は驚いていたが、これで一気に突破出来る。味方の驚きもなくはなかったが、僕の傍にいたシーリカが一斉伝令をしてそこまで動揺は広がらなかった。味方に動揺されて混乱されるのは避けたかったから、これはシーリカにグッジョブとサムズアップしてやりたい。便利な能力だな、シーリカ。

「しっかし、召喚しないとここまで魔力負担減るんだなぁ…」

足場の草で輪っかを作ったりブービートラップを弄しながら、しみじみ思う。わかってはいたけどさ。

七割方戦闘が消化した頃、シーリカが話しかけてきた。

「ねぇ、加速の魔法で、もっと速く出来ないの？その方がもっと早く終わらせれるんじゃないの？」

「いいか？加速の魔法は、他の属性魔法より世界の理を歪める作用が大きいんだ。たぶん、今もどっかで、あるいは周囲で帳尻を合わせるように時間の流れが不自然に遅くなるか停滞したりしているところがあるはずなんだ。そういった歪みは、なるべく作らない方がいい」

マドラのおっさんと試合した時はそんなの知らなかったからガンガン使ってたけどさ。しかもその作用が、位相や次元を越えてマテリアルの世界にまで波及する恐れがあるなんて知った日にはそりゃガクブルもんだったわ。

「ふーん。そういうものなのね…っ！？アッ、アキラ！アレ！！」

いきなり慌てたシーリカが指差す方を見ると、かなり減少した蜥蜴人の少し奥、新たな敵さんが向かっているのが見えた。

「幽霊（ゴースト）に悪霊（レイス）に骸骨（スケルトン）…不死族（アンデッド）か！？」

灰色に透けた体に黒い襤褸を着た死神のようないでたち。さらに骨で出来た槍をもつ骸骨。中には小脇に自分の頭を抱えている輩までいる。順番に、それぞれのわかりやすい見た目的特徴だ。

「敵後方に不死族の集団を確認っ！！みんな、警戒して！！」

声を出さずともよい一斉伝令を大声で叫ぶシーリカ。物理攻撃のほとんで効かない不死族は、特に肉弾戦が主要の獣人族にとって天敵のような存在だ。最前線で戦っていた獣人何人かは既に接触を許し、倒れている。

「クッ…。あいつら…」

獣人族が次々と倒れていくのを見て、思わず歯軋りが漏れる。不死族に対抗するには、浄化の魔法か、魔法加護（エンチャント）された装備を使うか、または不死族の弱点、銀で攻撃するかのいずれかだ。浄化は、時や無と同じ独立属性の光を持つ者しか使えないし、魔法加護装備は前者の物がその場で付与するか教会などの聖別された空間で何年も魔力を吸わせなければならない。前者はこの場にいないし、後者も今の装備での数は限られている。あとは弱点の銀を使うしかないが、生憎こちらの装備は鉄が主原料だ。アダマンタイトの物も、破魔の効果は薄い。クソッ！他に方法はないのか…。属性魔法にも『浄化』自体はあるにはあるが、それは最上位魔法の一つだ。おいそれと出来るものではない。

「っ！？」

あった。一つだけ、しかもとびっきりの手段が。銀ならこの場で手に入る。しかも大量に。さっき地面を固定化させる時についでに直下の地層を分析したとき、鉱物をふんだんに含む地層が見つかった。そりゃもう、なんでこんなところに不死族がいれるのか不思議でならないくらいの。敵の大群に対しては心もとないが、全員に致死量を与える位の量はあった。

「シーリカ！伝令飛ばして！早く！」

「えっ、えっ？何を？」

「不死族は僕とグレンが片をつける！他のみんなを早く下がらせて！」

「ちょ、何言ってるの！？そんなこと、出来るわけ…」

「いいから早く！！これ以上犠牲を出さない為にも！！」

僕の剣幕に押され、シーリカが伝令を飛ばす。加速によって機動力が跳ね上がった味方陣営は、僕とグレンを軸にして敵から充分な距離をとるまで下がった。不死族は動きが緩慢だから、尚の事味方の犠牲は早々に最小限に回避出来た。

「小僧、おめぇ何するつもりだ？あんなやつら、俺のミョルニルで一撃で…」

「一撃は無理だろ、おっさん。これが味方の犠牲が無く、確実に相手を全員討つ最適な手段だ」

「アキラ殿、一体何を…」

「セラトリウス団長、すみません。集中します」

丹田に意識を集中し、深く数度深呼吸する。

「グレン…。僕の攻撃があいつらを貫いたら、それごと相手を焼き尽くして」

「アキラ、不死族を焼き尽くすって、浄化の炎は俺はまだ使えないぞ？それに、不死族に物理攻撃は…」

グレンが、火属性最上位魔法の一つの単語を出す。そんなもの使わなくても、不死族は倒せるんだよ。

「いいから。とりあえず後で説明するから、グレンは今は炎の量と火力の調整だけを考えて。ヒントは、ドワーフだ」

「…っ！わかった…」

ニヤリとグレンが笑う。普段はアホそうな言動が目立つが、グレンは意外と頭がいい。僕の意図をそれだけで察してくれた。

不死族の大群が、ゆっくりとこちらに向かう。まだだ…グレンの火力は、遠ければ遠いほど威力が拡散し、制御が難しくなる。この作戦で、一番重要なのはグレンの炎の制御だ。そして、こいつはきっと応えてくれる。あとは…僕のタイミング次第だ。

「いっけぇぇぇぇ！！！」

敵が眼前数十メートルまで近づいたとき、辺りの地面から僕の魔力を内包させた土の棘で、不死族を貫く。足元から正確に貫いたそれに敵も驚きを見せたが、不敵に笑い再び進軍を開始しようとする。その攻撃が致命傷に到らないのは、僕も分かっている。

「アキラ！それじゃいつもと変わらないじゃない！」

「…？？」

が、僕の時の魔法を含んだそれは、相手の動きを奪う。どうせ不死族の時点でこいつらの時は歪んでるんだ。今更何も変わるまい。今度は、僕が不敵に笑ってやる番だ。

「グレンッ！」

「おうっ！！」

フレイム・タンで増幅された炎が、僕の棘ごと敵を包む。土で出来た棘の表面が熔かされ、中に詰め込んだ銀がその形に練成される。

「「「…ッグ…グオオォォォォ！！！！」」」

辺りを、すでに生前に済ませたはずの断末魔が木霊する。炎の燻りが治まった頃、銀の一撃を受けた幽霊と悪霊は消滅し、敵軍に残されたのは魔素を含み、中身を失いながらも炎に耐え切った骨の山だけだった。

「はぁあ…ちょっと疲れたな…」

コテンと後ろに倒れた僕を、誰かが優しく受け止めた。

～第三十五話～敵のお膝元（後書き）

ビッグブリッジの死闘を聴きながら、戦闘シーンのモチベーションを上げて書きました（笑）やっぱＦＦの音楽はいいッスなぁ。ところで！！皆様のおかげでお気に入り登録百件突破！誠にありがとうございます！！これを記念して、人気投票…とまではいきませんが、皆様のお気に入りのキャラのアンケートをとってみたいと思います。人気キャラは、スピンオフとして外伝でも書こうかと思いますので、読みたいと思ったキャラを投票してください。メッセージボックスでも、感想欄でも、どちらでも結構です。では、また次話で。

～第三十六話～晶と白夜（前書き）

ども、白カカオです。金曜日です。昨日色々ありまして、今日は親父に出社免除してもらいました。久々に、ぐっすり寝れました。あと、昨日の後書きで書いてた投票について…。期限決めるの忘れてました。期限は日曜日の日付が変わるまでにしたいと思います。外伝の執筆は…今回の章が終わってから取り掛かります。

～第三十六話～晶と白夜

脱力して後ろに仰向けに倒れこんだ僕を、柔らかい感触が包んだ。

「…お疲れ様です。大召喚師、アキラ様」

「「「あーーーー！！」」」

首だけ後ろを向くと、獣人族の集落からついてきた中の女性の一人、狐の獣人のコトリが優しく膝枕してくれていた。狐なのにコトリとはいかがなものか。しかし彼女はなかなか面白い経歴の持ち主で、遡れば東の獣人族の長、九尾と同じ血筋らしい。彼女の親の代が、九尾の得体の知れない存在感に恐怖し、こっちの集落まで逃げてきたということだった。ベースが狐の九尾の血筋なので、日本や中国系の力の行使をするそうだ。法力や妖術の類が得意分野なのだが、同じ日本の出身の僕が色々ありえないことをしているので面白がってついて来たのだ。巫女装束の割に、意外とお転婆なお嬢さんだ。しかし、狐耳に巫女装束って…狙ってるとしか思えない。

ちなみにさっきの叫び声は、シーリカとグレンとココ。…なんだよ？

「エリーちゃんがいるのに…アキラって意外と軽薄なのね…言ってやろ」

「アキラ…貴様、貴様…さっきの戦闘では俺がかっこよく締めを決めたのに…」

「あの子…アキラ君に膝枕を…うらやま…っ！許せない…あの女狐…」

グレンはこの際無視していいとして、シーリカ、すまん、それは止めてくれ。別に狙ってやっていることじゃないんだ。偶々コトリが受け止めただけなんだ。それと…ココ？なんか後半怖かったけどどうした？ほら、こういう時なんて言ったっけ？…笑えば、いいと思うよ。

ーーー主！巫女みこコナ〇ス！ミコミコ〇ース！

ダービー？そういうのは声を出して言おうな？それにしても懐かしいネタを…。つうかコトリナースじゃねぇし。

ーーー本当はネコミミ〇ードと迷ったんだがな。コトリは猫じゃなくて狐耳である故。

だからどっちにしろ電波だろ。緑竜の時のフタナリと言い、お前は全属性網羅してるんじゃないか？

ーーー確かに先日ケモナーはグレンに譲るようなことは言ったが…いや、実際獣耳の巫女とはなんという破壊力っ！！クッ…このヘブンズ・ゲート、簡単に篭絡してなるもの…ふぅ。

おい……おい。最後だよ最後。何した。

ーーーさて、主殿？フタナリとか属性とか、何を馬鹿げた事を言っておるのだ？

お前っ！賢者になりやがったな！？つうか人の指に寄生してる分際で賢者とかこの変態指環が！！死ね！！今すぐ砕けて死ね！！！

「ふふ、アキラ様…よしよし」

何を勘違いしたのか、ダービーとの会話で顔をしかめる僕の髪に、コトリが優しく指を通す。

「お主ら…もうちょっと集中力持続できんのかね…」

セラトリウス団長が頭を抱えるのが、コトリの背後の気配でわかった。だって、残った蜥蜴人もグレンの炎でかき消しちゃったからもう勝利のファンファーレ流れてるんだもん。

「アーキーラー!!アンタ別に疲れてないでしょ!!!本気でエリーちゃんに言うよ!!?」

「ガハッ!」

待て、別になんもやらしい気持ちとかなかったんだぞ!?膝枕が寝心地よかったからこうしてただけで!…それがいけなかったのか。つうか、お前の一撃でダメージがやばい。

「…わかった、わかったって。だから別に浮気とか全くそんな気はないから、エリーに言うとかやめて」

「へぇぇ…アンタ無自覚でやってたんだぁ…最っ低!!」

「いいんじゃないですこと?別に一夫一妻制とは法律で決まってなくてよ?」

そう言うと、何とか立ち上がったコトリが僕の腕に抱きついてくる。巫女装束越しにわかるほど、胸の弾力が腕に伝わる。漫画なら、

『ドキッ☆』とか言って顔が斜線で赤くなっているだろう。

「頼むから…少し自重してくれ、巫女…」

戦闘後に生傷を増やして経過すること丸二日。鬱蒼と木々が生い茂る中、目指すはウラヴェリア伯爵家。道中、何度か敵さんとご対面したが、エンカウントしたときの敵数が少なかったために危なげなく行軍を続行している。…流石にエルフゾンビの背後にドラゴンゾンビがいたときは一斉に退却したけど。それ以外は全く問題なかった。長年負の魔力にさらされて瘴気が充満しているこの地で、ドラゴンゾンビと戦う馬鹿はいない。総力でかかれば倒せなくは無いが、大局を見据えて余計な消耗は避けるべきだ。

「団ちょー。セラトリウス団ちょー。ドラキュラ城はまだですかー？」

「あと二日はかかるわい。ドラゴンゾンビのおかげで、大分遠回りをしたからの」

「えぇぇー。遠いー」

駄々をこねても早く着くわけもなく。ただただ進軍は続く。

「アレが…セラス軍か？そこまで強そうには見えんが」

「ふふ、油断は大敵よ、マスター。そしてあの子、あの馬に乗って

る子が、貴方のライバル。アキラ君よ」

黒衣の女が笑う。

「アレが…アキラ。アキラ?」

なんとなく、見覚えのある顔だった。たしか俺が孤児院に入って間もない頃、たまたま近所の子供が遊びに来たとき、友達もいない俺も分け隔てなく輪に入れてくれたあの男の子…面影が似ている。

『僕ね、妹が出来るんだ!妹がもう生まれそうだから、お母さんの実家があるここに来てるんだよー。生まれたらすぐ向こうに帰っちゃうけど…それまで遊ぼうよ!』

『なんで、俺も?みんなから、嫌われてるのに』

『だって白夜君、別に悪い事してないじゃん。悪い人でもないし。だから、ほら、行こうよ』

そう言って俺の手を取り、みんなのところに走っていった彼。両親が死に、心が瓦礫のように荒んだ俺。そんな俺に向ける、あいつの屈託の無い笑顔がやけに胸に刺さり、印象的だった。たしか…あいつの名前も晶と言った気がする。

「どうしたの?まさか、緊張してる?」

なんとなく馬鹿にされたようで、軽くムッとしてヘル・ブリングを睨む。

「んなわけあるか、今更。…行くぞ」

漆黒の天使（フォービドン・エンジェル）を換装し、両手には二本の黒き魔剣。俺は、眼下を横切っていくセラスの軍隊に舞い降りた。

「んっ？」

「どうしたの？アキラ君」

急に明後日の方向を見上げた僕に、ココが疑問を向ける。

「いや、ダービーになんとなくよく似た気配がしたから…お前はずっとここにいるもんな？」

「あぁ、確かにここにいるぞ？我思う、故に我在りだ」

「どこのデカルトだ」

「いや、冗談だ。しかし…主も感じたか」

「っ？おい、まさか」

「うむ、近くに…我の同属がいるようだ。なぁ…ヘル・ブリング？」

「っ！？」

ダービーが誰かに話しかけた途端、頭上から急襲を受けた。馬の腹にかけていた無銘の大剣で剣戟を受け止めるが、バランスを崩し馬上から落ちる。急いで起き上がると、漆黒の鎧を纏った剣士が立

っていた。隊列の中ほどを敵に襲われ、恐慌が広がる。

「アキラ君！！」

すぐ傍にいたココが火球を作り、目の前の剣士に放つ。

「えっ！？」

直撃すると思ったそれは、当たるには当たったのだが剣士の鎧に触れた瞬間に霧散し、または吸収された。

「おいっ！なんなんだよダービー、アイツは！？」

「漆黒の天使…物理魔法の如何に関らず、あらゆる遠隔攻撃を吸収する、私のコレクションよ。ねぇ？ヘブンズ・ゲート」

突然現れた漆黒の美女に、驚きを隠せない。つうか、今僕を襲ったあいつ…人間じゃなかったか？そいつを中心に、囲い込む騎士団のみんな。袋にするのは騎士道に反するが、そうも言ってられない位にこいつの放つ存在感は異質だった。

「喚くな囀るな。お前らはこいつらに遊んでもらえ。…食屍鬼（グール）！！」

そいつを囲った騎士団を、さらに囲うように食屍鬼が出現する。森の瘴気が、一気に跳ね上がった。

「みんなっ！」

「俺の狙いは…お前だよ。アキラ」

そう言うと、黒い剣士は瞬間移動してきたかのように僕の目の前に現れた。

～第三十六話～晶と白夜（後書き）

昨晩ですが１０万ＰＶ突破しました！！ありがてぇありがてぇ…いや、マジでありがとうございます。もののついでにめいさんの『勝手にランキング』を覗かせてもらったら、クリエーターはファンタジーで２１１位でした。本当に…ありがたいです。

～第三十七話～対立、絶望（前書き）

グーグーレーカスッ！白カカオです。若干ボカロ厨です。クリエーター、ググってみたらそこそこ上の方にいて驚きました。そういやダービーとカービーって似てるよね。とかアホなこと考えてます。まだ、昨日の酒が残ってるのかなぁ…。そういや一人で梅酒のパック空けたし。

～第三十七話～対立、絶望

「俺の狙いは…お前だよ。アキラ」

そう言うと、黒騎士は次々と剣戟を繰り出してくる。

「クッ！」

壁の魔法で防ごうとするが、こいつの剣はいとも簡単にそれを砕いてくる。おいおい、こいつの剣の威力はおっさんクラスか！？つうか、

「なんで僕の名前を知ってるんだよ！！」

闇雲に反撃しようとするが、僕の剣技は至って素人だ。何の問題も無くかわされていく。僕は騎士じゃなくて魔術師だっての！その内僕が繰り出す適当斬撃の一撃を、そいつは唐突に受けた。この鍔迫り合いで押せれば、チャンスが生まれる。

「お前…黒城白夜という名前に覚えがないか？」

黒騎士が最中に話しかける。はっきり言って、こんな時に質問されても冷静に思い出す余裕なんかない。

「はっ？いきなり、何の事だよ？」

「お前の妹が生まれるとき、顔を出したM城県の啓愛館という児童施設にいた、お前と同い年の黒城白夜だ」

「待てよ！いきなり、んなこと言われてもわかんねぇよ！」

「…ふんっ！」

それまで拮抗を保っていたと思っていた力の駆け引きは、いとも簡単に弾き飛ばされた。

「グハッ！」

強かに背中を打ち、思わず呼気が漏れる。派手に吹っ飛ばされた割に、ダメージはない。その代わり頭がぐるぐる回っている。いきなり何を言い出すんだ？こいつは。妹が生まれたとき…啓愛館…児童施設…黒城…白夜？白夜？白夜…君？

「…白夜君なら僕の友達だ。お前、白夜君がどうした！？」

「その白夜君には、眉に傷がなかったか？」

そいつがするりと兜を脱ぐと、左眉に見覚えのある傷があった。白夜君が小さい頃、お父さんに灰皿を投げつけられ、そのまま消えてくれないと言っていた、あの傷と同じだ。

「な、なぁ…ダービー…。この世にさ、変化の魔法なんて都合の良いものないよな…？」

「あるにはあるが、それは妖怪変化の類だ。それ以外が使う変化は、大抵粗がある」

「じゃ、じゃあさ…これはどういう事だよ…。あいつ、白夜君と全く同じよころに傷があるんだよ、僕が知ってる…小さい頃遊んだ白

夜君と同じところに。あんな傷、知らないとわからないようなものなのに…」

声が震えるのを抑えられない。まだ、他人かもしれない。まだあいつが白夜君の名前を出しただけで、本人だとは言っていない。ただ…僕を晶と知っていて、白夜君がいた県や施設まで正確に知っていて、白夜君が僕に打ち明けた、あの傷を持っていて…それはつまり…考えたくない。悪い冗談であって欲しい。だけど…。

「主、それは…」

「ふっ…脆いな、神谷晶。そうだ。俺が白夜だ」

ーーーザシュッ…

膝から崩れ落ちる。耳の奥で、自分が斬られる音が聞こえた。数メートル離れた位置から、白夜君が右手の蛇腹の剣を伸ばして僕を斬りつけるのが他人事のように見えた。不思議と、痛みはなかった。

「「アキラーーーー!!」」

「アキラ君っ!?いやぁぁぁぁぁ!!!」

晶が崩れ落ちる様を見て、周りの食屍鬼を蹴散らしながらグレンとシーリカ、ココが叫ぶ。助けに近づこうにも、周りからわらわらと集まってくる食屍鬼が許してくれない。

「クッ…まだ早い…まだ早いよ、ヘル・ブリングのマスター…!ま

だ、その時じゃない…」

同じく敵の群れを蹴散らす、カイムが誰にも聞こえないように呟いた。ヘル・ブリングのマスターが、トドメを差そうと近づいていく。

「クソっ！お前ら邪魔だぁぁぁ！」

「駄目！全然離れてくれないっ！」

「いや！いや！アキラ君！アキラ君っっ！！」

三人が感情のままに魔力を最大限に放出するが、次々に湧き出てくる食屍鬼の群れの勢いは衰えない。

ーーーふっふっふ…私の主もえげつないでしょう？それに比べて…セラスに回った貴方達は、随分甘くなったようね…。

突然グレン、シーリカ、カイムの頭の中にヘル・ブリングの声が響く。

「おい、なんだよ！？今の！誰の声だよ！！」

「ヘル…ブリング…貴女はぁぁぁ！！」

グレンとシーリカの絶叫が木霊する。そうしている間に、黒い騎士は晶の前に立っていた。

「……るじ…主っ！！」

頭の奥にダービーの声が聞こえる。どうやら軽く、意識が飛んでいたらしい。目の前には地面が広がっている。僕は、倒れているのか？

「意外と…他愛なかったな。じゃあな、晶」

声と同時に、背中に殺気を感じる。そうか、僕は白夜君に斬られて倒れていたんだ。

「「「アキラーーーー！！！！！」」」

「っべ！！」

間一髪横に転がり、九死に一生を得た。自分の血溜まりの上を転がるのって、気持ち悪い。大剣を杖代わりに立ち上がる。白夜君が地面に左手の黒剣を突き刺した辺りに広がる紅が自分の血だと再認識すると、途端に痛みと貧血で意識が遠くなる。傷自体は決して深くは無いが、蛇腹の剣の斬られた際にその刃についた櫛で、組織の損壊が酷い。左胸から右脇腹にかけて広範囲で出来た創傷に、回復の魔法をかける。表皮と血管を繋ぎ合わせるだけしか応急処置がとれない。

「ふんっ…悪運が強いな」

白夜君が離れた間合いで地面から剣を抜きながら笑うが、それに答える余裕はない。ヘモグロビンが酸素を体中に届けるように、マテリアルの体は概念的に魔力も血液が体を循環させている。その血の量が、圧倒的に足りない。瞬間的に大量に失血し、失血性ショッ

ク死でもしなかっただけありがたいのだろうか。とりあえず、止血だけで精一杯だ。バルゴーでも呼べばいいかもしれないが、白夜君がそれを許してくれないだろう。とにかく、今はこの状況を打開する方法を考えないと…。

「くっくっく…ヘル・ブリング…白夜。楽しみは私にもとっておいてくれと言ったはずだが？」

突如、黒い影が僕と白夜君の間に割って入った。大柄な体躯に、黒いマント。周りには、大型の蝙蝠が羽ばたいている。

「ウラヴェリア伯爵…」

ダービーが苦々しく呟く。

「主…戦況は最悪だ…なんとしても…この場から脱出せんと」

「脱出って…どうやってだよ…」

息をするのも苦痛な痛みの中、僕は目の前の吸血鬼が先ほどの僕の血溜まりをすするのを見た。

「んぐっんぐっ…っふーーー！なかなかに旨いな。流石ヘブンズ・ゲートに選ばれた男だ。まぁ、これでお前が生娘なら最高だったのだがな」

…うるせぇよ処女厨が。

「しかし…やはり新鮮な生き血を啜ればまた格別だからな。感謝しろ。今度は私が直々に、木乃伊になるまで喰らってやろう」

…おいおいおい。僕は男に吸われて喜ぶ趣味はねぇぞ。

「待て！晶は俺の獲物だ。手ぇ出すんじゃねぇ」

白夜君の声を無視し、ドラキュラ伯爵が僕に近づいてくる。やっべ、本当に体に力が入らね…。

「…ふむ。普通にかぶりつくのもよいが、せっかくの久しぶりの魔術師の血だ。首を裂いて、贅沢に血飛沫を頭から浴びて飲んでやろう。鮮血に染まることの、なんと心地好きことか」

僕の少し手前、その長い腕のリーチなら僕に届く距離で、こいつは止まった。くそ…ここまで深手を負った白夜君よりもさらに、圧倒される威圧感。洒落になんねぇ…。

～第三十七話～対立、絶望（後書き）

これから、バンド練習です。久しぶりにドラムが叩けると思うと楽しみで仕方ありません。おかげで、こっちもいいテンションで書けました。そして、友人からこの作品なかなかに酷評され、若干へこんでおります、こんなノリでも（笑）昔から、ポーカーフェイスには定評があるんで（笑）たしかに、もっと緩急つける表現力欲しいなぁ…。

～第三十八話～暴走（前書き）

こんばん！白カカオです。さっきまで東京に住んでた頃の友人とスカイプしてました。連絡自体がホント久々すぎて未だにテンション抑えききません（笑）私の近況はどうでもいいって？さいですか…。まぁ、まだ週末に無理した体力が回復してないんで、いつも通りに頑張ります。抑えようと思ってもどうせ文量は同じになるし。

～第三十八話～暴走

ヴァンパイアの無慈悲の一撃は、僕を貫く事はなかった。覚悟と恐怖と悔恨に思わず目を瞑った僕の目の前には、ボロボロになったココが立っていた。あの食屍鬼の群れをどう脱出してきたかはわからないけど、今目の前にいるのは、僕の部隊の副官の、ココだった。

「コ…コ……？」

ただ、いつも通りのか弱い光を放つ笑顔に、ただ一片だけ違うところがあるとしたら、口から流れる一筋の紅い線。どう見ても、ココは血を流していた。それも僕を向いたその胸からは、腕が生えている。禍々しく鋭利に尖った爪。間違いなく、ヴァンパイアの…僕を葬らんとしていた吸血鬼の腕だった。その腕が引き抜かれ、ココの大量の血が僕を濡らす。

「ココ…？ココ！ココッ！！」

支えを失ったココの体が倒れる前に、同じく血が足りない体に鞭を打ち抱きとめる。

「ほう…これはなかなか…」

ココの向こうから舐めた声が聞こえた気がしたが、関係ない。

「ココ…なんで…何で…っく…」

ココの体から生気が抜けていくのを腕に感じながら、混乱した頭にそれだけが口をつく。ココは、ただ笑っていた。

「しつこくなくしかしまったりとした舌触り…この娘は生娘か。うむ、うむ！ターゲットは変わったが、実に！実に美味い！素晴らしい前菜だ」

「黙ってろよ…」

「はっ？何か言っ」

「黙ってろって言ってんだよクソ野郎がぁぁぁーーーー！！！！」

感情のままに叫びを叩きつける。怒りの激流が僕の体から溢れ出し、周囲を飲み込もうとそんなことは関係ない。頭の中が完全にホワイトアウトする。

ひとしきり叫び喉の痛みに気づけるようになると、辺りの様子が一変していた。

皆、動かない。下卑たツラを浮かべた伯爵も、白夜君に隣の女。騎士団や食屍鬼も、風にたなびいていた木々ですら、その形のまま止まっていた。

「凄い…これが…アキラ君の、魔法…なんだね」

「ココッ！！」

僕の腕の中で、ココが柔らかく笑う。

「たぶん私はもうすぐ…だからわかるの。これは…アキラ君が作っ

た世界…。時の力が…あふれ出して…私達二人以外…そうでしょ？ダービーさん」

「う…む…」

血の気が引いたココの顔は、それでも歳相応の、僕がいつぞやに作戦にその容姿を組み込む程の、可愛らしいココそのままだった。

「なんで…なんで…こんな…馬鹿なこと…」

「馬鹿な…こと…？馬鹿にしないで？アキラ君」

いつも困ったような顔を浮かべているココが、初めて僕に向けるムッとした顔。最後の方は力を込めた為か、途切れず流れるように言葉を紡いだ。

「私…アキラ君を護ろうと…したんだよ？大切な人を護る為の…その行動が馬鹿なんて…私は思わな…い」

「ココ…？」

「それに…いつもその…馬鹿なこと…してるの…アキラ君の方なんだから…私…やっと…隣に来れた…かなぁ…私…ずっと…アキラ君のこと…好きだった…」

「っ！？」

何度目か分からない、しかし種類の違う衝撃に、僕の喉がキュウっと締まる。

「私達を導く為に…無理して…護る為に…無理して…でも…最後には…ちゃんとそれを成し遂げて…でも…皆といる時は…同じように笑ってみせて…何も、辛い事ないよって…そんなアキラ君が…私…大好きだった…憧れてた…」

ところどころ声が裏返りながらも、必死に僕に告白する、僕の副官。信じられないと同時に、自分の鈍感さに嫌気がする。

「エリーちゃんが…羨ましいな…私は…エリーちゃんほど、自分の気持ちに正直に…振舞えないし…シーちゃんみたいに…自然に一緒に…いれないし…あの巫女さんみたいに…積極的に…なれないし…私は…いつも…少し離れて…眺める事しか…出来なかった…ふふ…馬鹿だねぇ…こんなに早く、死ん…じゃうなら…もっと…早く…アキラ君に…告白すれば…よかった…だから…アキラ君が私を傍に置いてくれたとき…凄く、嬉しかった…」

「馬鹿なわけがない!!ココ!返事は全部終わってから聞かせてやる!!お前が望む返事を聞かせてやる!だから生き延びろ!!!上官命令だ!!!!」

「アキラ君…そんな無茶、言わないでよ…それに…守れない期待…させないで…私は…ただ…アキラ君が幸せならそれで…いい…だから…エリーちゃんと…」

「僕の命令が聞けないのか!!ココ!!ダービー!なんか、なんかあんだろ!?」

「そんな都合の良いものは…ない…それだけは、受け入れる運命(さだめ)しかないのだ…」

「ダービー！！っ！わかった！！今すぐバルゴーを呼べ！なぁ！！！早く！！！！」

「アキラ…君…あまりダービーさんを…困らせないであげて…」

「ココは静かにしてろ！！僕が治すまで安静にしてろ！！ダービー！！お前神を呼ぶ指環だろ！！？」

「出来ん…」

「おい！！この」

「我だってなんとかしたいのだ！！しかし…！！っく…」

「お前いい加減に…」

「アキラ君…」

僕の袖を、力なくココが掴む。何か、訴えるような目だ。

「もう一つ…私、わかるの…」

「何がっ！！」

「これは…アキラ君が作った世界…私の…こんな私の為に…時間が流れなければ…私が…死に辿り着くことはないから…神サマの干渉も…及ばない位に…そんな強い想いで…私を助けようと…してくれてる…それだけで…私は幸せ…」

「だったら早くこんな世界から出よう！！外ならバルゴーも呼べる

んだろ！！？」

いつもならそんなことが出来る事に驚くだろうが、今の一番はココを救うことだ。そんな瑣末なことに気を取られている場合じゃない。早く！早くバルゴーを呼ばないと…やっと光が見えたのに…。

「主…それも…出来んのだ…」

「なんでだよ！！」

「この力は、主の今本来のキャパシティを越えておる。主の魔力が尽きるまで…出られん…」

…何を言ってるかわからない。それはつまり…これで間に合わなかったら、僕がココを殺すことになるのか…？わからないワカラナイ分からない。理解できない認識出来ない納得できない許せない…この時間の狭間の中、僕の時間も止まったように何も考えられない。

ーーーチュッ…

凍結した思考を溶かしたのは、唇の感触だった。

「えっ…へへ…私の…最初で最後のキス…」

「ココ…」

頭脳が回転を止め、力が入らないこの体に、口付けの感触だけが浮き彫りになる。

「エリーちゃんに…悪いことした…よね…？でも…最後のキスだか

ら…許してくれるよね…あとは…エリーちゃんだけのものだから…」

「何を…」

「アキラ君…さよなら…アキラ君の腕が最期の場所で…良かった…」

新たに一筋の涙を流し、ココが笑顔とともに無情な別れの言葉を突き刺す。

「何…言ってんだよ…ココ…おい！返事しろよ！！ココ！ココ！！ココォーーー！！！」

いくら揺すっても、もう動かない。最後の涙の筋が歪に形を変えるだけで、もう、ココの目は開かない。か細い、つい今まで聞いていたココの声が、もう聞こえない。ココの存在が、零れ落ちてしまった。こんな僕を慕ってくれた、あまつさえ愛してくれていた、大切な護るべき仲間を護れなかった。僕のせいで、失ってしまった。僕のせいで、ココの周りの皆から、ココを奪ってしまった。僕のせいで…今、ココがこの世からいなくなってしまった…。

「あっ…あああ…あああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！」

僕を取り巻く世界が、僕を残して爆散した。無限に叫びながら、世界がひび割れ、崩れ真っ暗な闇が辺りを支配するのを、僕は見た。

～第三十八話～暴走（後書き）

随分前から考えていた話だけど、やっぱ辛い…。重要なファクターだから外せませんでしたけど、文字に表すとこんなに辛いとは思いませんでした…。まぁ、私が感情移入型だからかもしれませんが（苦笑）

～第三十九話～グレンの想いと暗闇のアキラ（前書き）

ども、ハーレム物書いてたら実生活もハーレムじみてきた白カカオです。でもね、聞いて？こっちのハーレムには、恋愛のれの字もないの！逆に凄くない！？普通絡むでしょ、そこらへんの感情。全くないの！はぁ…泣けてきた。さ、気を取り直して頑張りまひょ

～第三十九話～グレンの想いと暗闇のアキラ

何が起こっているかわからなかった。

周りの食屍鬼の群れに気を取られ、他の仲間のことに意識がいかなかった。アキラが深手を負って駆けつけようとしたが間に合わなかった俺に対し、アキラの近くにいたココが次々と敵を蹴散らし、どんどん近づいていく。たまたまあいつの所が薄かったのかもしれないが、俺は、ココがあんな圧倒的な暴力的力を使っている所を見たことがない。

俺とココは幼馴染だった。キュートスから少し南西に外れた小さな村。そこが、俺とココが育った村だ。俺とココが二十歳になったとき、俺らがアカデミーに入学する為に、家族ごとキュートスに越してきた。村でもキュートスでも、俺とココは隣の家だった。

俺達の村の象徴である火の証。少なくとも俺にとって誇りだったが、ココにとっては重荷でしかなかったらしい。実際二人ともアカデミーを卒業し魔術師団入りは果たしたが、俺に比べ引っ込み思案なココは、戦場でも活躍できることはなかった。気弱だけど心優しいココ。俺にとって、ココは妹のような存在だった。

しかし、アキラと出逢ってココは変わった。自分に自信のを持てないところは相変わらずだけど、少しずつだけど、自分を前に出せるようになった。

『いつか、アキラ君の隣に並びたい』

それが、最近のココの口癖だ。そしてその口癖通り、あいつはアキラの副官になった。アキラが私をアキラの隊に入れてくれたと、俺の目の前ではしゃいでいたココが嘘のように、強くなった。そう、

ココは俺の前では歳相応の女の子なんだ。好きな男の為に頑張り、好きな男の言動に一喜一憂する。そんな普通の女の子なんだ。

そのココが、制止する間もなく惚れた男のところに追いついた。その男を護る為に。まるで、これから起こる全てがわかっているが止める手立てはない…夢を見ているような感覚だった。そして、俺の予想通りそれは起こった。ココの小さな体をウラヴェリアの腕が貫き、アキラにその血飛沫がかかる。ウラヴェリアの腕を失いココがバランスを崩し、アキラがそこを抱きとめる。

不思議と、声も出なかった。体も動かなかった。体中食屍鬼に嬲られ、噛みつかれ、蹂躙されるが、目と意識だけがはっきりしている。

「ココーッ！はっ！？グレンッ！？」

シーリカの声が聞こえた気がしたが、何も反応出来ない。目の前の現実が、ただ信じられない。ウラヴェリアが何か言っているが、耳にすら入らない。

ココが、胸を貫かれて倒れている。その『事実』だけが頭に入っている。そして、自分には何も出来なかったことも。あれは、誰がどう見ても致命傷だ。そして俺もこのままダメージを喰らい続けると、命が危ない。でも、そんなことはどうでもいい。

俺は女好きな性格をしている自覚もあるし、そんな行動もしている。ナンパなんて毎日のようにしてるし。いつか刺されるんじゃないかとすら思ってる。でも、ココにはちゃんと女の子らしい普通の幸せを享受して欲しいと思っている。その好きな相手がアキラなのは若干複雑だけど、あいつも別に悪いやつじゃないし。見守ってやるだけの気持ちもある。いつだか、あいつの結婚式に出るときは泣くんだろうなぁっと、何故か思ったことがある。まぁその相手は少

なくとも俺じゃないだろうが。…そんな妹同然のココが、今消えようとしている。

信じられない。ココのいない世界なんて、信じられない。兄貴分として、あいつを見守ってやることがもう出来ないなんて、信じられない。信じられない。でも、これだけ認識しているということは、受け入れていることと同じなんだ。ココが今…死に絶えてしまう…。

「黙ってろって言ってんだよクソ野郎がぁぁぁーーーー！！！！」

アキラの絶叫が聞こえる。そしてその直後、ココとアキラが数秒停止した。その後もウラヴェリアが何か言ってたような気がするけど、そんなことはどうでもいい。ココを失う…あれはもうアキラでも無理だろう。

唐突に、二人の時間が戻った。アレはやっぱり、アキラの力だったのか？しかし、ココの容態は改善されてない。

「…ほぉう？」

ウラヴェリアが下品な笑いを浮かべた。その足下でココとアキラの唇が重なるのが見えた。

「涙が出そうだねぇ…死に行く女が捧げる最期の接吻。実に、実に美しい愛の形だねぇー。待っててやろう。私は紳士なのだ。恋人達（ラヴァー）の最後のひと時、せめてそれ位の慈悲くらい与えてやろうではないか！」

大仰な振る舞いで演技をするウラヴェリア。滑稽な一人芝居など、見るに値しねぇ。不快なだけだ。　二三、二人のやりとりがあったようだが、アキラの腕の中、ココの存在が希薄になる。それも一瞬、ついに…ココの肉体…命の器が空になってしまった。

「ココ…最期、いい笑顔だったな。ホント、いい女になった…俺が言うんだ、間違いねぇよ…好きな男の腕の中で逝けて、幸せか…？」

虚空に向かって話しかけてみるが、勿論答えは返ってくることはない。わかってる。わかってるけど…。

「でも…でもな…」

「あっ…あああ…」

アキラの慟哭が、ようやく聞こえた。

「俺は…お前を失いたく…なかっ…たよ…クソッ！クソ…」

涙が俺の双眸を濡らし、景色がぼやける。俺の肉体も、いい加減限界が近づいてる。でも、その前に…ココ…ココ……

「あああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！」

「ウラヴェリアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！！」

俺の絶叫とアキラの絶叫が重なった。

「っ！？お前の目覚めが先か…グレン…『煉獄育ち（フロム・フラム）』」

周囲が爆散すると同時に、何処からかカイムの声が聞こえたような気がした。

「今度は…どこだ…？これも、僕の世界なのか？ダービー」

一握の光もない、魔黒の空間に気づいたら僕はいた。今度はなんだ！僕は、あの吸血野郎をぶちのめさなくちゃいけないのに！

「…ダービー？」

いつも余計な所で出しゃばる、ダービーの声が聞こえない。お前、ホンット役立たずだな。

「おい！いい加減に…？」

空気が読めない相棒を恫喝しようとしたところで、気がついた。

「…いない？」

僕の右手から、ダービーの感触がなくなっていた。大剣も何処かにいってしまっている。

「おい…おい…！何処だよ！何処行ったんだよ！？ダービー！！」

急に心細くなった。こいつに依存していたとは思いたくはないが、こいつがいなくなったとしたら僕の力は半減以下だ。

「なん…なんなんだよ…ココ…ダービー…なんでいないんだよ…もういい加減にしてくれよ！！！」

「ここは生命の樹『隠されたセフィラ』ダアト。物質界マルクトと幽子界（アストラル）イェソドとその先、創造主が住まうケテルに繋がるパスに隠された、お前の為に用意されたセフィラだ」

急に前に人の気配がする。暗くて姿が確認出来ない。でも…

「ダー…ビー？」

僕の呼び方は違うが、確かにダビデの六星環、天国（ヘブンズ・ゲート）への扉の精…

ダービーの声だった。

～第三十九話～グレンの想いと暗闇のアキラ（後書き）

真面目な章なのに、カイムの台詞のせいで邪気眼が頭から離れなくなってしまいましたｏｒｚ最後、ネタの出典はカバラです。一応次回、説明も入れながらお送りします。まぁ、私設定を多分に含んでおりますが…。エヴァのＯＰやまどかマギガに出てくる、あの生命の樹です。

それと先週行った投票の結果ですが…ダービーに決まりました！！…人一倍灰汁が強いキャラなんで、私自身も想定内の結果ではありますが（笑）ということで、この章が終わったらダービー外伝を考えています。箸休めだと思っていただければ…。皆さん、投票ありがとうございます！

～第四十話～対話（前書き）

白カカオです。今日の昼、ウチの後ろの山に二つの熊の足跡が見つかったそうです。先日夜半過ぎ頃外で電話してる時に聞いた、ウシガエルをもっと響かせたような鳴き声は本物だったのでしょうか…。私は実家の辺りを、リアルモンハンと呼んでます。洒落ならん…あぁー、ＬＩＱＵ@可愛いーなー。声フェチの私はそれだけでお腹一杯です。声が可愛い子と付き合いたい。

～第四十話～対話

「ダー…ビー…？」

目の前にいるはずの者の声は、間違いなくダービーの物だった。

「ん？あぁ、そいえやお前は俺の事をそう呼んでいたのだな」

お前…？俺…？違う！ダービーは絶対そんな話し方をしない。

「お前は誰だ？ダービーはどこへ行った。返してくれ。アレは僕のモンだ」

「全く、悲しいな。俺は今までずっとお前の右手にいた、ダービーだよ」

そいつの背後から急に後光が差す。突然の光に顔をしかめながらそいつを盗み見ると、肌が浅黒い、スーツと修道衣の中間のような不思議な格好をした壮年の男が立っていた。そいつは恭しくお辞儀をして見せると、含みのある笑みを投げかけた。

「これはこれはマスター。この姿では初めましてだったな？俺はダービー。お前の指環の精だ。そういや…この姿の時はナイ神父と呼ばれていたな」

「ナイ…神父…ナイアルラトホテップか！？」

暗黒のファラオ、無貌の神、這い寄る混沌、そして…クトゥルー神話のトリックスター。幾度と影で人類の歴史に関ってきた、あの

フェイスレス・ゴッドが…ダービー?

「…待て。全く話が見えない。アレか?今までただのアホ指環だと思っていた変態は、実はアザトースの息子の神性でしたなんて、んなぶっ飛んだ話理解出来るか!」

アメリカ人バリのオーバーリアクションで頭を振ってみるが、ダービー…ナイアルラトホテップは不敵に笑うだけだった。

「お前は俺の兄弟であるヨグ=ソトースを退けたじゃないか。今更俺だけ信じれないなんて話があるか」

「まぁ…それならお前に女装癖があるのも頷けるが」

なんせ、無貌だし。

「待て、それは俺じゃなくてあいつの趣味だ!誤解するな!」

「…わけわからないこと言ってないで認めろよ?お前は生粋の変態だ…じゃねぇよ!つうかここ何処だよ!?僕は一刻も早くあの処女厨の変態野郎をぶっ殺さなきゃいけねーんだよ!知ってんだろ!!」

危ない、いきなりこんなところに放り出されて、不安なところに現れた知っている人間の存在に、危うく弛緩するところだった。今は、そんなことしている場合じゃない。

「まぁ…落ち着け。言ったろ?ここは隠されたセフィラ。お前のところとは次元とか位相とか根本的に違うからな。話をしてからでも充分間に合う」

「…そこまで言うなら聞こうか」

一旦こいつの話を聞いて、その間にクールダウンすることにする。忘れていた。感情のままに突っ走ったら負けだ。こういうときこそ冷静に、クレバーに…。どうやってあいつを嬲ってやるか、考えをまとめられる位にはせめて、冷静に…。

「先ずは、何から話そうか…アキラ、お前がどう俺を思考的処理をしたかは知らんが、俺とダービーは、同一人物だ。正確には、俺があいつの一部、あいつが俺の一部ってことだ」

…失念していた。こいつのこういうカミングアウトはぶっ飛んだ類ばっかだった。

「…わけわからん」

「今はそれでいいさ。まぁ、元は一つの存在ってこった。そしてあいつは小難しく考えているようだが、俺がお前に惹かれたのは、俺が土の神性で、お前が土の属性持ちの中で唯一俺を使役するに足る魔力の持ち主だったってだけだ」

「…なんだ。そういうことか」

「あと、お前が神器戦争（アーティファクト）の時に俺を持っていた男の子の生まれ変わりだったってとこくらいかな」

…また爆弾投下しやがった。なんだよその、戦争って。

「…そこ一番重要だろ。なんだよ、その戦争」

「数千年…数万年より遥か昔、創世に程近い頃の話。まだ、天使も悪魔のヒトも分け隔てなく暮らしていた、その頃の話だ。一つの指環の存在がきっかけで、多くの禍根を産み、今に至る因縁を作り出した戦争が起こった」

「その指環が、お前なんだろう？全く、ホント疫病神な、お前」

「…続けるぞ。話はよくある類のものだ。悪魔が誘惑してその指環を狙い、逆サイドに天使が指環の防衛せんが為に、争った。善悪どちらでもあるヒトは、その尖兵に使われた…」

「まぁ…わからんでもない話だな。それまでは上手く調和がとれていた世界が、たった一つのファクターで滅茶苦茶になるのはよくあることだ」

「その中、件の指環…つまり俺は、一人の男児の所有物として平和に暮らしていた。力の行使もせずにな」

「…なんでお前みたいな指環が男児なんかの手にあるんだよ？聞いたぞ？お前、創造主の指環なんだろ？」

そうだよ、この世界に普通にこいつがいることがそもそも不思議だったんだ。

「それは…あの方の道楽としか言いようがないな。自分に代わり、ヒトの手にこの強大な力を渡したらどのようになるか…と」

「…しょうもねぇ理由」

「…でだ。その件でヒトが俺を使うより先に、悪魔の方がそれに反

応してしまった。計画を頓挫された創造主は怒り、一人の悪魔が謀反した瞬間から悪魔は悪、守ろうとした天使は善とされるようになった。もともと両者とも属性の違いだけで、善悪という明白な区分けはなかったのだ」

「…創造主。導火線みじけぇなぁ」

「その戦争の最中俺を所持していた男児は、両者の攻撃において生じた事故で死んでしまった。そして自動で働いてしまう俺の強力なボイドのせいで転生が遅くなり、ようやくその男児が転生を果たしその計画の続きが今…。アキラ、お前は神器戦争の時代に創造主に選ばれし男児、後の箱舟の神話で有名になったノアの直系の先祖、ノア＝キーランスの生まれ変わりなのだ」

…頭痛い。つまり、ダービーの主を辿れば、創造主に行き着く前にもう一度僕がいるわけだ?…やっぱり、頭痛い。

「ちなみにその頃の縁者が、今のお前の回りに集まってきているぞ。魔道書（グリモワール）金枝篇の原本著者にして天使に数々の神器の番人を代々任された『金色の守人』カイム、『隠者』シーリカ、『煉獄育ち』グレン…はつい今しがた目覚めたばかりだがな。お前と同じく、ココの死により触発されたのだ。思えば、ココは『鍵』の使命を持っていたのかもしれんな…。あの娘の命も、無駄じゃなかったと…」

「…んなくだらねぇことの為に、ココは死んだのか…?」

思わずダービーの胸倉を掴む。じゃあアレか?ココはそんなくだらない理由のせいで死んだってのか?

「あいつはなぁ…僕を護る為に、こんなくだらねぇ男に惚れて、そ

の男を護る為に死んだんだよ!!それじゃあ…お前の話が本当なら…ココは…僕の為に死ぬ運命だったってことじゃねぇか…」

「『鍵』を担うもの…それも運命だったのだろうな…」

「ふざけんな…っ!あいつは、ココは『鍵』なんかじゃねぇ!!ココはココだ!!」

怒りで涙目になる。許せない…全ての運命が許せない…これが創造主の道楽なら…そんなもん僕がぶち壊してやる…!

「…すまん、俺が無神経だったかもしれん。手を、離してくれ」

自分より幾分背の高いダービーを降ろすと、脱力してへたりこんだ。

「アキラ、さっきも言ったがここはお前の為に作られたセフィラ、ダアトだ。お前は、マルクトに帰らねばならん」

「なんだよ…それ…つうか、セフィラってなんだよ…」

「セフィラとは創造主が作った幾つかの玉座…つまり、簡単に言うとその玉座の一つ一つが世界というものだ。アキラ、お前は生命の樹…セフィロトというものを見たことがあるか?」

「あぁ…絵だけならな」

「まぁ人間で実物を見たことがあるのは、ヤコブだけだからな。その第十のセフィラ、マルクト。それがお前達が住む世界だ」

「…で？」

「お前が俺を通じて召喚される神はその上、第九のセフィラ、イェソドの住人だ。その一直線上にある最上位のセフィラ、ケテルに創造主がいる。後者二つの間に隠されたのがダアト。つまりお前の世界と神々の世界、ここと創造主は一繋ぎになっている」

「セフィラが上がる毎に存在に必要な魔力…精神値が上下する。だから神を召喚する時は膨大な魔力が必要。そして一直線に並んでいるが故、創造主はその三つの世界に干渉し易い。更に言えばダアトが何故ケテルの直下にあるかと言うと、創造主の真理に最も近い場所だから。隠しているとは画している…つまり他の存在と一線を画し、創造主の指環を使役する僕の為の世界…そんなとこだろ？」

「お前の理解力の良さと頭の回転にはいつも驚いてばかりだ。しかし…俺が説明する意味がなくなってしまうじゃないか」

「…で、お前の宝玉の水晶はなんでだ？」

「アキラの理解力の前だと酷く下らない理由になってしまう気もするが…マルクトの象徴する惑星が地球、そして鉱物が水晶だからだ」

「そんなことか…」

「ほら…」

「…大体わかった。僕はもうあっちの世界に帰る。帰ってココに手をかけたあいつを殺して、そして…創造主まで辿り着いて、百発くらいぶん殴る。てめぇの勝手な道楽でココに辛い想いをさせた、創造主をぶっ飛ばしてやる」

「お前をこの世界に連れて来た甲斐があったよ。この世界の使命は、お前に自分の使命を自覚させ、覚悟を決めさせること。アキラ…お前の使命はその優しさだ。ヒトを想う気持ち…忘れるな。今回のことに関しては…復讐でなく、あの娘を想うが故の弔いとして目を瞑ることにしてやる。…そしてお前の使命は…生命の樹の頂、創造主の元に辿り着くことだ。」

「使命使命って…んなくだらねぇもん、僕がぶち壊してやる！…お前には働いてもらうぞ？」

「はっ！俺はあくまでトリックスター。せいぜいかき乱してやるさ。アキラ…我が主。主に、これを用意しておいた」

「お前、やっぱダービーなんだな。所々、ダービーの口調に戻ってるぞ」

「ふんっ…主の、本当の装備だ」

ダービーが、どこに持っていたのか大剣を差し出す。…どこか、仕様が違う気がする。黒く輝き、鍔…柄と刀身の間に、ダービーと同じ水晶が嵌まっている。そして、大きさ故の辟易していた重さが、なくなっている。

「セフィロトの剣、マルクトに住みし我が主、『神』の水『晶』、神谷晶よ。受け取れ。…『輝くトラペゾヘドロン（シャイニング・トラペゾヘドロン）』だ」

～第四十話～対話（後書き）

…詰め込みすぎた感があります。すみません。そして、好きなんです、クトゥルー。つうか、デモンベイン。おいおい、話が進むにつれて補足も入れていきますので、今はこんなもんだと思っておいてくだされば幸いです。オリジナル改変設定も入れてるし。そしてお断り…金枝篇の著者はジェームズ・フレイザーです。実在する人物です。あしからず。金枝篇も魔道書じゃなくて研究書です。デモベ厨ですみません。

～第四十一話～残された者の戦い（前書き）

ども、白カカオです。今更ながら、これが処女作だということを思い出しました。このような出来すぎた評価いただき、本当に感謝です。明日、私の町で一部で有名になってしまった萌え系の祭があります。痛車が大挙するそうなので、十年ぶり近くに行って来ます。この作品にイラストがついたらどうなるのかなぁ…とか、ちょっと思ってみたり。せめて、地図くらいは欲しい。

～第四十一話～残された者の戦い

「輝くトラペゾヘドロン（シャイニング・トラペゾヘドロン）…」

ダービーから渡された元、無銘の大剣を眺める。

「まぁ…正確には、無銘の大剣に、トラペゾヘドロンをカスタマイズした物だがな。元々厚みのある剣だったろう？今は中が空洞になっていて、輝くトラペゾヘドロンの『箱』を体現している。強度が心配かもしれんが、元々の材質がオリハルコン故、全く問題ない。あとは…主次第だ。では…戻ろうか、主」

「最後…ぶん投げやがったな？」

光の粒子を残し、指環と剣の鍔の装飾部についた水晶に分かれ消えていくダービー。おそらく指環にダービー、剣にナイアルラトホテップが入っていったのだろう。ダービーが僕の指に戻ると、今までにない力を感じた。

「主…」

「聞きたいことは後で…だろ？」

「うむ…」

何故か、久々にダービーと話す感覚になる。酷く、懐かしい。

「それとだが…」

「なんだよ?」

「早く出ないと役目を果たしたこの空間、壊れるぞ?」

「ちょっ!?」

何もないはずの空間が、ガラガラと崩壊する音が聞こえてきた。

「おいっ!!どうやって出んだよ!?ここから!」

「斬れ!!このセフィラは主の物!主は、この空間の神だ!己の物ならなんとでも出来よう!振るうのだ!!主はセフィロトの剣!新たな力と共に、元の世界に戻ろうぞ!!!」

「好き勝手言ってくれやがって…ええい!ままよ!!」

横薙ぎに大剣を振るうと、僕の前の空間に切れ目が覗く。否が応にも引きずり込まれる。あの向こう側は…ゲートに似ている。

「じゃあな…ダアト…ココ…。そして、待ってろよ…っ!ウラヴェリアアアアアーーー!!!!!」

アキラとグレンが起こした魔道(フレア)爆発は、ギランの四分の一を覆い尽くすほど強大だった。純粋な魔力と、炎を帯びた魔力がぶつかり、相乗効果を生み出し無限とも思える高まりを繰り広げた。

爆心地付近に残されたのは、ココの亡骸だけだった。辺りの木はなぎ倒され、地面はえぐれているが、ココの体だけは不思議と損傷はなかった。

「クッ…ハッ…アキラとあの娘の血を吸っていなかったら、どうなっていたことやら…」

血まみれで右足も折れ、しかしまだ生きているウラヴェリアがいた。アキラの咆哮の直後、とっさに間合いをとったのが幸いしたのだが、グレンからの爆発までは想定外だった。

「ふんっ…あの男は、お寝んねか。所詮人間ということか…」

視線を移すと、爆発の衝撃で吹き飛ばされ、気を失っている白夜の姿があった。

「あちらは…おうおう、満身創痍ですなぁ…おや？まだ三人…いや、四人か。立てる者がいるようだな」

全員命は落としていないが、白夜と同じく衝撃に吹き飛ばされた騎士団は、全身を叩きつけられ起き上がれなかった。ただ、団長二人とカイム、シーリカを除いて。

「くっ…アキラ殿…グレン…」

杖を使い、やっと起き上がるセラトリウスが二人の身を案じる。

「大丈夫、団長！グレンは、気絶してるだけ」

「全く…覚醒した途端これか…。昔からやんちゃっぷりは変わらないなぁ、『煉獄育ち』は」

シーリカとカイムがそれぞれ起き上がる。二人は、それほどダメ

ージを負ってなかったようだ。

「あの小僧がいねぇ…小僧っ！！」

辺りを見渡し、アキラがいないことに気がついたマドラが、最後にアキラがいた、ココの元に駆けつける。

「小僧…」

マドラが見たのは満足そうに眠っているココと、その胸の上に置いてあったダビデの六星環だけだった。

「小僧っ！！！」

「おっと、そこまでだ」

マドラの周りに、またもや無数の食屍鬼が出現する。

「おのれ…ウラヴェリア！！」

マドラがミョルニルを解き放ち、一面に雷のカーテンが生まれる。

「小賢しいマネを…さぁ、早く私にその指環を渡すのだ。それと…その娘の血もまだ飲み足りないのでな」

「マドラ！！一旦退くのじゃ！！アキラもグレンも欠いた今では、勝算は少ないぞ！」

「うるせぇジジイ！！こいつだってボロボロじゃねぇか！俺のミョルニルがあれば叩き潰せるだろう！！それに…これ以上この小娘の

体を好き勝手されて我慢できるか！この娘は…俺の可愛い姪っ子とその将来の旦那が愛した娘だ。死んでも持って帰ってやる。小僧…アキラ！！早く帰って来やがれ！！！」

「姪…？」

マドラの叫びに、不自然な所を感じたシーリカ。カイムも、はてなマークを浮かべる。

「そうじゃ…マドラの苗字はキート。フルネームはキート＝マドラ＝グランダル…あやつは…ベイン国王の実兄。第三王女、エリーの伯父だ」

「あいつのどてっ腹に風穴ぶち開けろ！！トールハンマー！！！」

粗方自分に群がる食屍鬼を駆逐すると、マドラが手に持った神槌をウラヴェリアに投げつける。アキラの時と違って、かわす事も受け止めることも出来る距離ではない。

「フッ…アキラには、まさか受け止められるとは思わなかったがな…」

まだ半年も経っていない事なのに、酷く懐かしく感じる。ウラヴェリアが貫かれたのは、その呟きの直後だった。

「ぬぅ！！グワアアーーー！！！！！」

神槌、ミョルニル。本来は、マテリアルに順ずる存在に防ぎきれるものではない。ウラヴェリアは風穴を開けられるどころか、上半身と下半身が分断された。生命の供給が断絶された下半身が、無数

の蝙蝠と化して散開する。

「へへっ…ざまぁねぇな…こいつを以っても、あいつを殺せなかったか…」

「あのタワケ！！爆発で負ったダメージを軽視しておったか！！」

セラトリウスの叫びの先、もう一つ伏せていた影が動いた。

「見えたっ！！吸血野郎だ！！」

「あのヤツを貫いた槌…マドラか！主！チャンスだ！！」

ダアトからマルクトへ続く経路（パス）。その切れ目から、ウラヴェリアの下半身が吹っ飛ぶのが見えた。

「さて…マルクトに残した我の残滓も戻そうか。主、指環が完全に顕現するぞ！これが我の…『天国への扉（ヘブンズ・ゲート）』の真の力だ！！あやつを…ココの敵を叩き斬ってやれ！！」

「応よ！！喰らえっ！！ウラヴェリアーーーー！！！」

位相の切れ目から飛び出し、ウラヴェリアの下半身が霧散した直後、まだ落ちずに中空に浮いた形のウラヴェリアを袈裟切りに斬る。

「グルルルァァァーー！！！」

獣じみた声を上げ、血反吐を吐くウラヴェリア。今度は、左肩か

ら右腰にかけて分断してやった。
着地を決めると、転がり息を荒げるウラヴェリアの姿があった。
「これでもまだ死なねぇのか…大した化けもんだよ、お前は…」
「くっ…はっ…」
しゃべる事もままならない吸血鬼を、冷たい双眸で見下ろす。その今吐いている血は、僕とココのものだろう?返せとは言わない。だが、お前に持って逝かれるのは不愉快だ。こいつにもう動く術はない。冷静に、確実に滅殺してやればいい。復讐に、ドス黒い愉悦が精神をかける。
「ふぅ…おっさん。流石だな。つうかミョルニルが流石なのかな」
幕引きの前の前に、最終章の立役者のおっさんに声をかける。なぁにボロボロになってんだ。アンタらしくない。
「アキ…小僧…お前…本当に小僧か?」
「耄碌したか?ほれ、この通り。いつもどおりのアキラだ。ほら、おっさん、セラトリウス団長も…おっ、カイムとシーリカも無事か。まぁ『守人』と『隠者』だもんな。無事か。みんなで、この下衆野郎を袋にしようぜ。ココを殺しやがったこいつ…っ!?」
…この作戦中もう何度目になるかわからない衝撃。…というより、ココの時と同じく、一瞬思考が理解に至らない衝撃。突っ立っているおっさんの体から、見覚えのある蛇腹の剣が突き出ていた。
「おっさん…?オッサァァァァァン!!!!」

奇しくも、ココの時と同じくおっさんの背後からの襲撃だった。

～第四十一話～残された者の戦い（後書き）

今回は、こんなところで。切り方があざとい気もしますが、気にしないでください（苦笑）最後アキラが不自然に延ばしていますが、アレです。思いがけなく訪れた復讐の好機に、テンションが上がってしまっているという、あの感じです。…あの感じっていっても、わからないですよね（笑）

～第四十二話～兵どもが夢の跡（前書き）

こんちわ、白カカオです。マッサージチェアが最近の睡眠場所です。そしてよく、お前は働きすぎだ…的なことを言われます。ここ数年は、仕事嫌いでワーカホリックの白カカオでした。

～第四十二話～兵どもが夢の跡

「おっさん！！おっさぁぁーん！！」

「心臓を貫く感触があった。…致命傷だな」

傾いたおっさんの影、蛇腹の剣が収縮していくのが見えた。僕も受けたあの剣の凶悪な刃だ。体組織をズタズタにするそれで胸を貫かれれば、まず助からないだろう。そして…不敵に笑うあいつがいた。

「白夜く……白夜ぁぁぁーーー！！！！」

僕の咆哮と共に、おっさんが大きく揺らいだ。

「おい、クソガキ…後ろからとは穏やかじゃねぇなぁ…」

「ハッ！戦いの最中に背後の警戒を怠った方が悪いだろう？俺は…なぁっ！？」

電光石火の如く駆けるおっさん。蛇腹に追いつくと、手が切れるのも厭わずその刃を握り、白夜を恐ろしい力で引っ張り込む。

「お前…さっきの様子だとあの小僧の知り合いだな？人間は人間同士…仲良くやれや…」

キスするほど迫った刹那、マドラの拳がフック気味に白夜の側頭部にヒットし、その言葉を電撃に乗せて直接白夜の脳内に叩き込む。白夜は軌道を変え吹き飛び、マドラはその場に倒れこんだ。

「おっさん!!おっさん!!!おいっ、しっかりしろよ!!」

背後の吸血鬼の断片に目もくれず、おっさんのもとに走り出す。
おい!!ふざけんな!決心した傍からどうしてこんななってんだ!!

「ふん…確かに、注意を怠った俺がわりぃや…生死を懸けた戦いに、卑怯もクソもねぇわな…」

「何言って…何言ってんだよ!!クソッ!再生が間に合わねぇ!!」

召喚魔法や戦闘技術やらにかまけて、治療魔法の修練を怠っていたことが仇になった。確かに致命傷かもしれないが、それでも魔法が支配するこの世界では希望はゼロじゃないかもしれないのに…ココだって助けられたかもしれないのに…。

「もうよせ…小僧、あいつに、一つ説教してやったよ…お前、あいつと知り合いなんだろ?…友達か…?」

「あんなやつ!!僕の仲間を傷つけるやつが友達なわけがあるか!!クソッ!クソッ!!塞がんねぇよ!!」

「いいから聞けって…。小僧…こっちの世界に住む…人間同士…仲良くやれや…あいつをぶん殴った瞬間、わかったことがある…あいつの剣には、お前と同じ…強い想い…そして同じくらいの、悲壮感がある…お前と同じだ…。あいつも…護ってやれ…。お前は、小娘が死んだ時…どっかで何かを掴んできたんだろう…?俺だって、馬鹿じゃねぇ…。お前が戻ってきた時…お前の変化に気づいたさ…魂

レベルの、変化にな…。だから、護ってやれ…」

「わけわかんねぇよ!!おい!遺言ならまだはえぇよ!!」

「それと…リーナスは確かにまだガキだが…女だ。…お前が、お前が護ってやってくれ…。最期だからしゃあねぇから言ってやるか…俺は…お前の将来…楽しみにして…たんだぜ…俺の身内から…大魔導士が生まれるのを…な…」

「なんで…エリーが出てくんだよ…それに、身内ってなんだよ…おっさん、わけわかんねぇよ…」

もう何を言っても聞かないだろう。おっさんが笑いながら話すのを、ただ聞く。

「あいつは…俺の姪だからな…セラトリウスッ!!」

「なんじゃ!?」

呆然とする僕の近くに、いつの間にかセラトリウス団長が立っていた。

「お前に、六枚貰っておいて…良かったぜ…向こうに逝く時は…豪華客船で地獄クルーズでも洒落込めらぁ…」

「くっ…最期まで減らず口を…」

セラトリウス団長が顔を逸らす。声が、少し震えていた。

「フハッ…そろそろだな…。ミョルニルも…帰るところに帰るだろ

うよ…アレがまた、戻ってくる時があるなら…また、セラスだといいな…。じゃあな、セラトリウス…アキラ…」

最期にそう告げると、おっさんの目が静かに閉じた。あのクソ野郎…今まで一度も、名前で呼んだことなんかなかったじゃねぇか…。それに…将来僕の親戚になってたっつうことじゃねぇか…。

「おい…卑怯だぞ…最後の最後に名前で呼びやがって…」

「アキラ殿…」

「それに…僕はまだアンタに勝ってないんだぞ…勝ち逃げかよ…テンプレ過ぎて面白くねぇよ…。アンタに勝って、僕の実力を認めさせてやる予定だったのに…」

「アキラ殿…マドラはもう充分お主の実力を…」

「もう一度戦えよッ!!おっさん…マドラ団長ぉぉぉーーーー!!!!」

雷雲に隙間が空き、そこから真っ赤な夕日が僕らを照らした。セラトリウス団長のすすり泣く声と、僕の慟哭が戦場に響いていた。

遠征から約一週間、僕達はキュートスに帰って来た。結果的にウラヴェリアを暫く戦闘不能状態にさせるも、それぞれ体に、心に深手を負った僕達は、三日間自宅待機となっていた。僕は、一歩も部屋から出なかった。ウラヴェリアは残ったパーツを蝙蝠に分解し、白夜を回収して去ったらしい。

待機三日目に、マドラ団長らの殉職を悼み、盛大な国葬が行われたそうだ。騎士団、獣人族含め作戦参加者総勢千名強。その内、殉職者は二割半にも及んだ。そこには、やはりココの名前もあった。隊長格から葬儀に出なかったのは、僕だけらしかった。

近況は、エリーが足しげく自室のドアの前に通い、話してくれた。僕は何も返事はしなかったが。ダービーとも、チャンネルを切っていた。手付かずの料理を毎食片付けていくエリーには若干申し訳なかったが、それ以上に…エリーの顔が見れなかった。

ーーーコンコン。

「アキラ…入って、いい？」

引きこもってちょうど一週間後、エリーが声を掛けてきた。いつも通り、無視をする。口を開くと、どんな言葉が出てくるかわからないから。

「入る…ね…」

ギィッとドアが開く音が聞こえる。沈黙を、エリーは承諾と捉えたようだ。

「アキラ…」

エリーの呟く声が聞こえるが、何も言わない。

「アキラ…聞いたよ。マドラおじさん、私の…伯父さんなんだってね…葬儀の時、お父さんが言ってるのを聞いて、初めて知った…。冒険者になって家を出たとき、キート家の苗字を捨てたんだってね…フフッ。伯父さんらしいね」

そのエリーの伯父を、僕は護れなかった…。

「そして、伯父さんに手をかけたのが、アキラの友達だってことも…聞いた…」

あんなやつ…もう友達でもなんでもない。倒すべき…殺すべき、敵だ…。ウラヴェリアと、同じように…。

「セラトリウスじいちゃんが言ってたよ?伯父さんが、アキラに友達と仲良くって言ってたって…」

無言が続く。気まずさばかりが先立つ。さっきから無視してるの、わかるだろ?早く、出て行けよ。

「ココちゃんのこと…残念だったね…でも、アキラを護って、くれたんだよね…」

もう一人の護れなかった者の名前。いつまでも、最期の声と笑顔が頭から離れない。そう、僕のせいで死んだ、ココ…。

「最後に、キスした…」

何故か、言葉が口をついた。もう、ぐちゃぐちゃでわけがわからない。そんなことを言ったら、エリーがどう思う事か。嗜虐的になっているのかもしれないが、これ以上心のタガが外れないように精一杯だ。エリーの、優しさが辛い。

「そう…」

エリーがそう呟いたっきり、沈黙する。

「どうして何も言わないんだ？僕がココを死なせて、僕の知り合いがお前の伯父を殺したんだぞ？お前を抱いたたった数日後に、違う女とキスしてんだぞ！？」

エリーは、何も言わない。虫の鳴き声だけが、部屋に響く。

「なんか言えよ！エリー！！」

耐えられず、思わず声を声を荒げる。本当に最低だ。最低過ぎて、涙も出ない。枕に顔を押し付け必死に自分を抑える。感情が昂り過ぎて、過呼吸寸前になっている。つうか、間に合わない。息が…苦しい…。

「アキラ…」

「エリー…僕を、責めろよ…」

呼吸困難に喘いでる最中入ってきたのだろう、いつの間にか、エリーの胸に頭を抱かれている。一瞬、何が起こっているのかわからなくなってパニック状態に陥りかける。

「ココちゃん、アキラのこと好きだったんだよね…」

呼吸が辛い。涙目になり、何でもいいから助けを求めるように、エリーの胸に顔を押し付ける。決して死なないのはわかっているから、剣が近くにあったら首を掻き切るかもしれない。

「ココちゃん…最後に、アキラに気持ち伝えれて…良かったね…」

エリーの腕が、それより強く僕をホールドする。最後の方が不明瞭になった代わりに、鼻をすする音が聞こえる。

「ココちゃんが死んじゃって、伯父さんもいなくなって…でも…アキラが戻って来てくれて…良かった…」

エリーの言葉が胸に刺さる。いつの間に、エリーはこんなに成長したんだろう。その温かい言葉が嬉しい。でも、エリーから大切な者を奪った自分が憎くて、護れなかったことが申し訳ない…。強い感情だけが溢れてくる。

「ぁっ…あぁ…あああああぁぁぁぁぁぁーーー！！！！！！！！！」

気づけば、子供のように、ただ大声を上げて泣きじゃくっていた。いつの間にか過呼吸の辛さが無くなった代わりに、胸の奥の押しつぶされそうな圧迫感で喘ぎながら泣いていた。

～第四十二話～兵どもが夢の跡（後書き）

たぶん、クリエーター書いて初めて、ボロボロ泣きながら書きました。自分の作品で泣くとかキメェｗｗｗｗｗｗもうホント、辛かったです。

～第四十三話～後始末《前編》（前書き）

ども。汗でベタベタ気持ち悪い白カカオです。最近、リアルに改革したいなぁ…とか思ってます（笑）いや、町単位で。つうかウチの町。まだコネが根強い地域なので、爺ちゃん顔広いから聞いてみよっかなぁ…役場職員。土曜日祭に行ってからそんなこと考えてます。

～第四十三話～後始末《前編》

泣くだけ泣いた。一晩中エリーに抱かれて、赤子の頃でもこんなに泣かなかったんじゃないかと思う位泣いた。涙が枯れるまで泣いたら、不思議と気分が透き通っていくのがわかった。約一週間ぶりの朝食も、驚くほど喉通りが良く、逆に心配されたくらいだ。当然じゃん、その間マジ断食してたんだから。胃腸がびっくりしないことを祈る。

さぁて…ここからまた僕の戦いが始まる。ぶっちゃけ僕のエゴだし、グレンからもしかしたら後で猛抗議が来るかもしれないけど、これればかりは譲る事が出来ない。僕から一度に二人も大事な者を奪った、あいつ等に…人誅を下してやる。子供でもわかる事だ。因果応報、ミラーの法則…『やられたら、やり返される』。僕から大切な者を奪った代償は、お前らの命だ。せいぜいそれまで浮かれてろ。ウラヴェリア…白夜。奪われた者の負の感情は、強い。

マドラ団長とココの後任は、僕が休んでいる間に既に決まっていた。騎士団団長の座には、今まで騎士団の統括を努めていたカルバン氏が、僕の隊の副官には、雷属性のデンゼルが選ばれた。

カルバン新団長は、まだ若い団長だ。せいぜい僕らの一世代上くらい。…僕は世代の基準が違うけど。前任のマドラのおっさんがあまりにもインパクトが強すぎて目立たなかったけど、その前団長の緩みっぷりをフォローして回っていただけの統率力、求心力…カリスマと、厳格さがあった。たぶん、新撰組の土方歳三のポジション。あのマドラのおっさんが団長でどうして騎士団側が回っているんだろうと前々から疑問だったのだが、この人が粉骨砕身で尽くしていたからこそだと後で知った時は、多大に同情と尊敬の念が浮かんだ

ものだ。ただ、トップ二人が堅物だと、護国騎士団が随分と殺伐とした軍になりそうな気がする。

次に僕の副官のデンゼルだが、こいつもココと同様前衛から引っ張ってきたクチだ。副官が連続で純粋な後衛陣から出ないと言うのは、なんか我ながら某ウサギの球団みたいで気が引けるけど。…つうか、僕が決めたことじゃない。…納得はしてるけど。こいつは常にニコニコ人畜無害な笑顔を振りまいている好青年だ。僕の頼みにも二つ返事で応えてくれる、ココが右手なら左手に当たる男だ。割と無茶な要求や陳情が多い僕に、「アキラ君が、そう言うなら…」と困った笑顔で承諾してくれるか、「はい、アキラさんのお言葉なら」と快諾してくれるかの違いだ。…前者のココのあの笑顔を思い出して若干胸が痛んだけど、あえて受け入れることにしよう。ココが、この胸の中にいるならば。そしてこの男の凄いところは、欠点らしい欠点が思い当たらないところだ。器用貧乏というか、雑務までそつなくこなしてしまう優秀っぷり。ただ余りに計算高く、ときどき疑いの眼差しを向けてしまうくらい完璧なのが強いてあげる問題だ。…絶対、カイムのせいだ。もうちょい、抜けたところがあっても人間らしくていいんじゃないかと思うんだけど。そんな部下が、なんで僕のことを心酔しているのかというのもデンゼルの七不思議だ。余計、前述の疑いを強めてしまう。…まぁ…決して悪いヤツじゃない。

「アキラさんっ！」

休んでいた僕に新任者の紹介を兼ねた隊長会議を終え、軍部の廊下を歩いていた僕の下ににデンゼルが駆け寄って来る。

「んっ？どした？」

「会議が終わってから団長室へなんて、何かあったのですか？例え

ば…吸血鬼退治の相談とか」

「…そう含みのある笑いをするな、デンゼル。ただ、改めて欠勤の謝罪をしに行くんだよ」

おぉ、こえぇこえぇ。まぁ…謝罪もしに行くから、嘘は言ってないよな？正直、図星だけど。

「そうですか…。しかし、アキラさんとセラトリウス団長の話はいつも長くなります。ただ部隊員を待たせるというわけにもいかないので、何か指示でもあれば…。無ければ、各々修練や座学の時間に当てますが」

「いや、先ずは反省会だ。先の遠征、世間では辛勝と見られているが…僕は決して勝ったと思ってない。寧ろ、こっちは永久に飛車と銀将落ちの憂き目に合ってるんだ」

「マドラ前団長が飛車で、ココさんが銀将ですか…。言い得て妙ですね。アキラさんは金将、ボクは差し詰め桂馬と言ったところでしょうか」

「勝手に自分のランクを落とすなよ？桂馬だって使いようによっては脅威だし、お前も…ココも、金に成ることは充分可能だったんだ。…話を戻すぞ。お前は『三室』に戻って、今回の作戦で浮き彫りになった、我が隊の弱点を徹底的に洗い出せ。そして、お前らなりに改善案も出せるなら出しておけ。これは今後作戦後の通例にするからな。省みない者に成長なしだ」

「仰せのままに」

「あっ…良い発見も挙げておけよ?反省は、何も欠点ばかり突っつくモノじゃないからな。自分達の優れた、秀でたところを見つけ、長所を自覚することも反省だからな。じゃなくても、粗探しばかりの反省会なんて気が滅入るだけだろう?」

「…はい、心得て置きます。では、後ほど」

変わらずの笑顔で頷くと、僕らにあてがわれた部屋…キュートス国軍部魔術師棟第三隊室…通称三室に戻って行った。

「魔術師第三隊隊長アキラ、入ります」

二つ並びの団長室…その魔術師団団長室の扉を軽くノックし、足を踏み出す。セラトリウス団長が、沈痛な面持ちで柔らかい椅子に座っていた。

「あっ、あぁ…アキラ殿か…どうしたのじゃ?」

「昨日までの無断の長期欠勤、誠に申し訳ありませんでした」

「いや、気にせんで良い…アキラ殿、お主の事情は特別過ぎた。他の者も同情こそすれ、責める者はおらん」

「いえ、辛い思いをしているのは、セラトリウス団長や、他の皆も一緒ですから」

「うむ…して、お前さんのことだ。それだけじゃないのであろう?」

机に肘をつき、一度うなだれるように顔を下に向けたセラトリウス団長が上目遣いで僕の表情を伺う。

「…流石は団長。全てまるっとお見通しっというわけですね」

「はぁ…お主の考えていることくらい、大体わかるわい。大方、マドラとココの敵討ちの相談といったところであろう？」

溜息をつきながら、頭を振るセラトリウス団長。いやぁ、察しが良くて助かる。

「えぇ。お察しの通り、吸血鬼退治をば。その準備に、少々団長のウラヴェリア伯爵に関する秘匿資料を拝見したいのです」

「…全く、この軍部でここまで勝手をするのは、マドラとお前さんくらいじゃわい。…しかし、ワシもアレとは何度か対峙した事があるが、全盛期のワシでさえ今回と同等のダメージしか与えられんかったのだぞ？どうせお主のことじゃ。一人で向かうつもりなのであろう？」

「えぇ…これは譲れません。それに、それだけダメージを与えたデータがあるなら、それほど心強い情報（武器）はありません」

セラトリウス団長が、俯き暫くの時間思考の海に沈んだ。この部屋は完全防音になっているのであろう。これだけの静寂の中、廊下や隣の部屋の音は全く聞こえない。

「…わかった。アキラ殿に託そう。マドラが去り、ワシももう全盛期程の力は出ぬ。新しい風に、次代を任せるのにはちょうどいい頃

合いかもしれぬの…」

「セラトリウス団長、お言葉ですが僕は風でなくつ…」

「しょうもない突っ込みも無しじゃ！はぁ…お主、マドラの馬鹿に似てきたのう」

「全力で否定します」

「それともう一つ。…グレンも似たような陳情もしてきおった。方向性は違うがの。アキラ殿のことだ。隠密で事を済まそうと思っての単独行動を希望であろうが、せめて…あやつも連れていってやってはくれんか？あやつは火の魔術師で直情型であるから隠密行動には向かぬやもしれぬが、お主ならそれすらいいように持っていく考えくらい思いつくであろう？…あやつの…妹同然のココを目の前で失ったグレンの想いも…汲んではくれぬか…頼む…」

この老賢人の懇願する姿など、初めて見た。そういやグレンとココのアカデミー入学の手はずを整えたのはセラトリウス団長だと、少し前に酒の席で酔っ払ったグレンとココから聞いたことがある。たしか、あの二人は同郷だとか。そういや、属性以外共通点がなさそうなあの二人は、妙に仲が良かった記憶がある。

ーーー主…。

この一週間、強制的にチャンネルを閉じ、碌に会話もしなかったダービーの声がした。酷く、懐かしい感じがする。自分のせいだけど。

ーーー我からも頼む。主は想いを執行する剣。想いを伝え続ける時

の翼。グレンの…『初まりの者達（スターターズ）』の宿命を背負う、あの者の想い…悲願。叶えさせてやっては貰えんか？

こいつが他人をここまで気にかけるのも珍しいな…。そんなこと言われたら断る瀬もないじゃないか。つうか、『初まりの者達』ってなんだ。

ーーーダアトでナイアルラトホテップと交わった時、我の失われし記憶の一部が蘇ってきた。近いうち、主にも話そう。

近いうちじゃなくて、今晩だ。それが、グレンを連れていく条件だ。

ーーーわかった。約束しよう…。

よし、交渉成立だな。

「わかりました。グレンも同行出来るよう策を練り直します」

「済まぬ、アキラ殿…お主にばかり、辛い想いばかり負わせてしまって…」

「構いませんよ。こういう役目は、慣れてますから」

「その代わり、ワシも出来うる限り協力させてもらおう。ワシの想いも…届けてくれ」

「はいっ！魔術師団第三隊隊長アキラ、ココと…マドラ団長の弔い、必ず果たしてみせます。どんな手を使っても…」

～第四十三話～後始末《前編》（後書き）

さて、目処はついてるとは言え、また風呂敷広がったぞ…どうする、私？まぁ作者の利点は、切れるカードを幾らでも増やせるってとこもありますからね。興冷めな展開にだけはならないよう、頑張ります。まぁ、だいたい構想は立ててあるんですけどね。それと一つ。スターターズの初まりは誤植でも誤変換でもありません。敢えてこの表記にしてあるので、あしからず。はぁ…ますます厨二っぷりに磨きがかかってゆく…

～第四十四話～後始末《中編》（前書き）

お久しぶりです。白カカオです。二日連続で座椅子で寝るハメになるとは…すいませんｏｒｚしかも寝落ちしやがった分際で、姿勢のせいで全然疲れが取れてません。あー…感覚狂う…。梅酒、うめぇ。

～第四十四話～後始末《中編》

「ダービー。そろそろ話してくれていいんじゃないか？日中言ってた、『初まりの者達』ってやつらのこと」

最早習慣となった寝煙草をふかしながら、ダービーに話しかける。目の前の中空が、紫煙に白く濁る。

「うむ…まずは何から話そう…。初まりの者達とは、この世界の原初の世代より魂の連綿を連ねておる、またはその魂が変位するとこなく生きてきた者のことだ」

「つまり、初まりとは原初の世界から今までの魂の系譜というものか」

すげぇ、因縁濃そうだな。

「大体そうだ。今の所、器を変えない…つまり原初の頃のままの姿で今を生きているのを確認出来ておるのは『金色の守人』と、『隠者』のみ」

「金色？隠者？」

「二つ名のようなものだ。そして二人とも主のすぐ傍におる。カイムとシーリカがそうだ」

「おいっ…」

急展開過ぎて言葉が続かない。あの二人が…えっ？

「ちなみに、『煉獄育ち』のグレンはちょうど目が覚めたところじゃないか？」

「…何モンだ、あいつら…」

「主だってノアの始祖の転生体のくせに…」

…僕には全くその、ノア＝キーランス時代の記憶がないから、ノーコメントで。それに、僕は僕だ。他の誰でもない。足で反動をつけて起き、灰皿に煙草をにじり消す。ついでにお香でも焚こうと思ったが、手を伸ばしかけたところで止めた。これはココの香りがする、滅多にないお香の最後の一本だ。入手ルートを聞いておけばよかったんだろうが、そのココにはもう聞けるはずもなく。仕方なく窓を開ける。最近めっきり冷たくなってきた風だが、頭をすっきりさせるにはちょうど良さそうだ。

「…で、あと何人いるんだ？その、初まりの者達とやらは」

「あとは『詭弁を論ずる者（フィロソフィア）』と『死霊の女王（レイス・クイーン）』の二人だな。主と因縁がありそうなのは」

「おい、なんか最後すげぇいい感じの言葉が聞こえてきたぞ」

「レースじゃなく、レイスだ！…こやつは、神器戦争の際ほぼ中立を保ってきた初まりの者達の中でも、唯一悪魔側に近い力を持っていた女子だ。…金色の守人（ゴールデン・スランバー）…カイムとはある意味対極の存在だな」

「待て。ゴールデン・スランバーって、僕の記憶が確かなら、黄金のまどろみって意味じゃなかったか？ビートルズとかの」

「上位の存在により宝具を守護することを命じられ、有事の際にはまどろむことすら許されない。それがカイムの一族に踏襲された二つ名だ」

「ふーん…大変なんだな、アイツも」

「まぁ、細かい事は我の記憶もまだ不完全なのでな。追々話すことにしよう。…約束する」

「んっ。おけ」

「…して、主?差し当たって、どうするだ…主のことだ。策はあるのか?」

「ん?」

「ヴァンパイア…ウラヴェリア伯爵だ。それと…白夜の事も」

「あぁ…あまりよく考えてねぇや」

ぼけらーっと外を眺めて呟く。窓から身を乗り出すと、城下町と反対側の方角へ体を向ける。ギランは…あっちか…。

「主っ!?」

「まぁ…グレンのことは、意外だったよ。同情も…っ!?」

突然、強烈な頭痛が襲った。クソッ!いてぇ…窓から転げ落ちるとこだったぞ…。今度は何なんだ一体…。

「ダービー…！これ…」

「これは…共感覚…！」

「共感覚…？なんだよそれ…つうか、頭いてぇ」

「主、先ほど因縁が濃そうだと言ったな…。我ら、原初の繋がりを持つ者は、極稀にだが強い感情が伝播し合うことがある。これが…共感覚だ。どうやら覚醒者限定らしいがな…」

「覚醒者限定って…これ…この悲しみ、グレンの…だろ…涙が止まんね…」

何故かは知らんけど、グレンの、その炎の色の通り赤より高く、高温の青い悲しみを感じる。どこかで、ココを想って慟哭しているんだろうか。

「主…そこまで…」

「ダービー…決めた。今回は、グレンに華を持たせる。僕にとってもココは大事な存在だったけど、あいつにとってココは……おい、これ…マジか…？」

「主？…主っ…！？」

瞬きの一つ一つに、ビジョンが浮かんでくる。試しに目を瞑ると、連続した映像が流れた。黙って、耳を澄ませる。

「待てよー！シーリカーッ！」

「やだよーだ！追いついてみなさーい！ほらー、ノアー！遅いよー！」

子供が、いる。石造りの街並みを、元気良く駆けている。先頭を走る女の子は、その次の男の子からシーリカと呼ばれていた。…シーリカ？シーリカと呼ばれた女の子が、僕に向かって急き立てる。つうか、走っているのか、僕の光景も上下に揺れている。

「待ってよー！」

「グレンお兄ちゃーん！私も混ぜてーっ！」

僕なのに僕と違った声帯が返事をする。振り返ると、更に後ろに小さい女の子が走っている。

「ココルにはまだ早いっていったろー？しょうがないなー」

シーリカと叫んでいた男の子が、最後尾の女の子を抱き上げる。抱き上げられた女の子は、酷くご満悦そうだ。

「全く、グレンはいつもココちゃんに甘いんだから。エグソダス家の男の人ってどうして女に弱いのかしら？」

「親父のことは関係ないだろ！お前のせーだぞ、ココル」

「えへへー。グレンお兄ちゃんもシーリカお姉ちゃんもノア君も、遊んでくれるから好きー！」

グレンと呼ばれた男の子が、恥ずかしそうに顔を逸らす。シーリカ?グレン?ココル…ココ?それに、ノア…は僕か?これは、原初の記憶か…。つうか、これって…。

「クソッ!こんなの、あるかよ…」

「ある…じ?」

「あの二人、大昔本当に兄妹だったんじゃねぇか…」

「グレンッ!!」

次の日、軍議が始まる一時間前。中庭を俯いて歩いていたグレンに声をかけた。生気のない瞳が、僕を覗く。

「おい…大丈夫か?」

目は腫れ大きな隈ができ、拳の皮膚はボロボロに破れている。さながら、ゾンビのようだ。

「あっあぁ…」

蚊の鳴く声で頷くと、近場の大石に腰を下ろした。

「あぁ…じゃねぇだろ!あーもう!回復してやるからじっとしてろ!」

全身にヒーリングの魔法をかけてやると、目ぼしい傷は小さくなり、やがて消えた。

「ちょっと前はな…」

隈も目の腫れも消え、しかし虚ろな目をしたグレンがボツリと呟く。

「んっ？」

「お前んとこで鍛えられた、ココがこうやって治してくれたんだ…」

「あぁ…」

「ココのこと、色々感謝してる…」

「……」

答えに窮して、言葉に詰まる。だって、責められるならまだしも感謝されることとした覚え、ねーもん。

「アキラ…お前、昨日の晩…見たか？」

おそらく、あの幻視のことだろうな。お前が原因だとは、言わないけど。

「ココと俺シマイだったんだな…」

「お前…姉妹じゃお前は姉ちゃんか？兄と妹でも、キョウダイでいいんだよ」

「そっか…兄妹だったんだな…」

「あぁ…」

それ以上の言葉が出てこないから、煙草に逃げる。最近は開き直って、別段隠すこともしなくなった。勿論灰皿はないが、グレンに焼き尽くしてもらうか、土の魔力で分解すればいいや。

「…吸うか？」

「なんだこりゃ？」

「タバコってんだ。僕の元の世界の嗜好品だ。落ち着くぞ？」

「サンキュ…っ！？グハッ！ゲホッ！ガハッ！！」

予想通り、盛大にむせるグレン。大げさっぷりに、空笑いが漏れる。

「お前…ハメやがったな…」

「違う違う。あー…やっぱ駄目だったか」

涙目で抗議するグレンに、僕も手をヒラヒラさせてサレンダーを伝える。

「グレン…」

「…あんだよ？」

未だに苦しそうなグレンが、僕を睨みつける。

「お前も、セラトリウス団長んとこ行ったんだってな」

「!?お前もって…アキラも行ったのか?」

「あぁ…。グレン」

「なんだ?止めるなら無意味だぞ?俺は一人でも絶対に…」

「一緒に行こう?一緒に、マドラ前団長と…ココの敵を討とう」

僕の問いかけに、目をパチクリさせるグレン。状況を理解していないようだが、それでも僕は続ける。

「お前のことだ。無策で突っ込もうとしてたんだろ?策は僕が考えてやる。お膳立ても、僕がやってやる。だから…僕らでアイツを討とう?」

グレンがパチクリさせた目をそのまま見開き、暫くして虹彩が揺れるのが分かった。

「アキラ!タバコ!」

顔を背けて、震える声を張る。結果は見えているけど、あえて乗ってやろう。あとその言い訳、もう随分使い古されてるからな?

「はいよ」

さっきのはもう吸いきってしまってから、新しいのに火を点けてやる。手だけ僕に向けて催促するグレン。いっそ根性焼きでもしてやろうかと思ったけど、一応空気は読んでやった。一口吸うと、さっきよりも盛大にむせる。…若干わざとらしさはあったけど。

「ちっくしょう…目にしみないか？これ。あー、涙止まんねぇ」

ほら、思った通り。

「あぁ…しみるな…」

「アキラ！」

「んっ？」

わざとらしく、煙草でむせたままのふりをしながらグレンが言った。

「ありがとな…俺の、いもう…との為に…」

こういう場で礼を言うのに慣れてないんだろうな。お前の頬が紅蓮だ。

「違うよ、グレン」

「…？」

「僕に告白してきた可愛い元副官の女の子の為に、だよ」

「おっ前…！！」

「コレッ！馬鹿隊長ども！！会議が始まるぞ！！」

建物の二階の窓から、セラトリウス団長の呼ぶ声が降ってくる。
不思議と、言葉ほど怒気は感じられなかった。

「お前のせーだぞ、グレン」

「いーや！アキラのせーだ」

いつもの調子を取り戻すと、建物の扉に向かって走り出す。

「早く…来なさいよ。グレン…アキラ…。全く、予定が狂わされっぱなしね」

窓から、何か楽しそうに呟いてるシーリカの姿が見えた。

～第四十四話～後始末《中編》（後書き）

現在、この話が終わった後の閑話と外伝をどうするか思索中です。
外伝はダービーで確定ですが、構築中の閑話をそのまま組み込んでもいけるかなぁ…とか。でもそうしたら外伝の意味が薄れるかなぁ…とか。難しい…。

～第四十五話～後始末《後編》（前書き）

お久しぶりで申し訳ありません、白カカオです。体力の低下か夏で消耗が激しいのか、寝落ちが多くてへこんでます。それでもアクセスしてくださってる方々…マジ感謝。ホント、ありがとうございます。

～第四十五話～後始末《後編》

セラトリウス団長から資料を借り、執務室にこもること二日目。紙の山に押しつぶされながらいつのまにか突っ伏して寝ていた。ダービーは根詰めている僕に気を使って話しかけないようにしていたのかもしれないが、机の上で紙の山に潰されて見る夢なんてロクなもんなはずがなく…結果最大の見返りであるはずの記憶や思考の整理も体力の回復もままならないまま現時点に至る。ぶっちゃけ部屋でやっててもいいんだけど、執務室の方が理由をつけて仕事の時間も使えて便利だからここに引きこもっているのだ。隊のことは、粗方デンゼルに任せてある。優秀だからね、あいつ。完っ璧に勘繰られてるけど。

「復活まであと約一週間半か…」

セラトリウス団長の資料によると、吸血鬼は今回と同程度のダメージの回復に約一ヶ月を費やすらしい。あの後キュートスに帰るまで一週間。僕が部屋に引きこもって一週間。さらに僕の軍部復帰日と昨日今日の研究に費やした日数が二日。ぶっちゃけもう時間がない。何かしら吉兆がないまま時間がすぎるというのは、本当に気ばかり急いて逆に思考がまとまらない。だけど思考のストップをかけるわけにもいかないので…。

「ダービー」

「なんだ？」

「状況の整理をしよう」

こういうのは、第三者を交えて声に出して確認した方が、往々として自身の理解度を客観的に分析できると言うものだ。

「うむ」

「あいつの復活まで、約一週間半。攻めるに最も最適な日取りは？」

「復活ギリギリであろうな。主の魔力の回復、グレンの精神的立ち直りの時間を考えるとギリギリまで待ち、こちらのコンディションを限りなく完璧に近づけつつ、敵方は全快に至らないギリギリの見極めで向かうのが上策だろう」

「その間吸血鬼の魔力が著しく下がる新月を挟むけど、その日に決行しない理由は？」

「新月の日はそもそもこちらの魔力、施行力のふり幅も大きい為、そもそもの戦力の低下は避けられん。向こうは数多の眷属を抱えているのに対し、主とグレン二人だけのこちらは取るべき日取りではない」

うん、この件に関しては、もう見直す余地は無さそうだな。

「じゃあ、戦力について。向こうはウラヴェリアが仮死状態で体組織の復元中、白夜に関しては不明。ここからウラヴェリアの状態は好機だけど、ヘル・ブリングを持った白夜の様子が知れないから下手に現状の僕たちが攻めるべきではないと判断できる。じゃあそのこちらの現状を良くする為に、自軍の情報を整理。まずはグレンから」

「魔力値は全快時で、団長レベルよりやや下。しかし覚醒に伴いグ

レンの性格を考慮に入れると、最大値は大幅に上昇すると見て間違いない。火力も、下手すると今回で火属性の最大レベルを凌駕する可能性もある。なんせ、あやつの故郷は煉獄だからな」

「それ、チートじゃね？」

「まぁ今回は隠密ゆえ、元々の仮定の作戦通り陽動に回ってもらうのがいいだろうな。なんせ…」

「なんせ？」

「下手するとクトゥグアを呼び出しかねん」

「あぁぁ…お前、ナイアルラトホテップ時代は犬猿だからな」

仲良くしてくれよ。そして、絶対呼ぶな。ギランどころかこの世界が焦土と化しかねないし。

「次は僕として…。使える神はレオ、アクアリウス、タウルス、バルゴー…あと、ヨグ＝ソトース。あと属性魔法が並より上って位か…神々どもも性質上隠密には向かないから、割と自力で戦うことになるな。まぁ、輝くトラペゾヘドロンもあるし、妙案が浮かばない場合は、最悪アドリブでなんとかするしかないだろうな」

「主…申し訳ない訂正がある」

「…一応聞いてやる。なんだ？」

決行直前で僕のアビリティに不備があるとかならマジで洒落ならん。今のうちに知っておくのは幸運と思っておこう。さて、心の準

備も出来た。

「…上がっておるのだよ」

「…はっ？何が？」

「主の器としてのレベルと無限の魔力（エターナル・マナ）の成長率が。ダアトでの事によって、主の魂の位階が第七のセフィラ、ネツァクレベルまで。黄道十二宮全ての召喚と、さらに別の神々も幾人か。十二宮に関しては、相対的に召喚コストが下がり、全員同時召喚出来るようになっとる」

……それ、なんてチート？

「痛い痛い痛いっ！！主っ！すまんかった！！痛い痛いからやめてくれ！！！」

「だから！何でお前は！報告が！いつも後手後手なんだ！！」

「だから済まんかったと言っておるだろう！！だからペン先で水晶をグリグリするのは止めてくれ！！」

…なんだ。全然イケるじゃん。ちょっと手を加えるだけで、割と簡単にあいつ嬲れるわ。なんだか、ご都合過ぎて笑がこみ上げてきた。

「ックックック…アーハッハッハッハ！！勝てるぞ！ココ！お前の命は、こんなにも僕に力を与えてくれた！！お前の仇、これで完璧に討てるからな！！」

嬉しくて、怨敵を討てる喜びがこんなにも昂って、それが嬉しくて涙が出てきた。

「でも…そんな力いらないから、お前がいてくれるのが一番嬉しかったんだけどな…ココ…」

「主…」

急なハイテンションの直後のこの急降下。まだ大概に不安定なのかもしれない。でも、希望は見えた。その希望が、たとえ夕焼けにも似た、仄暗く闇が支配する光でも。

「ダービー。この作戦で、なんとしても使役したい神がいる。やっぱり、決行はギリギリになりそうだ」

「うむ」

「だけど…絶対、勝つから、誰も、失わずに…」

～第四十五話～後始末《後編》（後書き）

すみません、ちょい短めです。平日の朝方なんで。あと先日うちのバンドのギターとドライブしていたら、この作品のサントラっつうか、曲作ってみないかと提案がありました。自身の作品のそういう二次創作（？）は勿論凄く嬉しいのですが、更新に加え作詞とか…ｏｒｚ過労死しそうです。

～第四十六話～Ｆｌｙ Ｔｏ Ｔｈｅ ＤＡＲＫＮＥＳＳ（前書き）

こんばんわ、白カカオです。やっと、調子が戻ってきそうで来て無さそうな感じです。さて、この編もクライマックスです。早くネタ書きたいけど…まだかかりそうですね。

～第四十六話～Ｆｌｙ　Ｔｏ　Ｔｈｅ　ＤＡＲＫＮＥＳＳ

仮病を使わせてもらい、しばらく軍から離れ神話の世界に没頭すること一週間。やっとお望みの神サマとの会合を果たし、無事に使役契約を結んだ僕。いやぁ大変だったよ。ダービー（ナイアルラトホテップ）の力を借りて一肉体（マテリアル体）と一精神体（アストラル体）を切り離し、第九のセフィラ、イェソドへ。その前段階での座禅や瞑想でのトランス状態に入る所から一苦労し、更に今回のお目当て…インド神話の神々のおわすところに向かうのに一苦労。なんせ、幾ら人間としては特別な立ち位置にいるとしても、右も左もわからない世界じゃお手上げしそうになってもおかしくないでしょ。めげそうになるもこれも目的を果たすための必要な過程だと言い聞かせなんとか踏破。うん徒歩だったんだよね、移動。時間の感覚がなかったのが幸いだったけど、もし通常の流れだったら、確実にタイムオーバーよ？

更に目的の神サマに会うも、お目当て二人の内片方はいきなり斬りかかって来るし。肉体に戻ってみたら同じ切り口にちゃんと鮮血が残ってるっていうサービス精神。エリーが入って来なくて本当に良かったと思う。まぁ、なんやかんやで作戦に必要不可欠な鍵はゲット。残りの数日を疲労の回復に費やし、ようやく、本当にようやく決戦の日時を迎えた。

「グレン…」

「あぁ！もう心配ない！やっと、妹の仇が討てると思ったら武者震いが止まんねぇよ！」

時刻は冥の刻、下弦の月が正中に差し掛かる前だから、たぶん二十三時くらい。この作戦は軍内ですら秘密裏の事だから、日中の目

立つ時に出立するわけにはいかない。ちなみに、情報操作は全てセラトリウス団長に任せた。僕らが今からすることが明るみに出るのは、全てが終わった後だ。別名、尻拭いしてもらうとも言う。月明かりに、気合の入れた装備姿の、グレンが映える。暗い黒いローブに白銀の胸当て。さらに…。

「おいグレン。その背中に担いでる剣はなんだ?」

「これか?これは俺の魂に呼応して召喚された、フレイム・タンの最終形態だ。まぁ…後の楽しみにしておけ」

…こいつ、少し楽しんでるな?今から向かうのは私怨を討つ戦いだぞ?もしこないだの僕と同じ状態なら、まだ時間が足りなかったのかもしれない。怨敵を討つ死闘に、愉悦はいらない。戦場では、いつでも冷静さを保っていた方が勝つのだ。…でだ。もう一つ疑問。

「それと、なんでお前らがいるんだ?」

…カイムとシーリカ。この二人も、いつもと違った装備でこの場に居る。…つうか、なんでいんの?

「なんでって、ココは今も昔も私の妹分よ?私が立ち上がらないわけがないじゃない!」

「うん。ココちゃんは、俺らの大切な仲間だからね。それに…今回は久々に昔の仲間の前で本気を出したくなって」

いつもニコニコしているカイムの目が、キュッと結ばれている。こいつも、まがりなりに仲間意識はあったというのだろうか。…いかんいかん。まがりなりにっつうか、元々カイムは僕らの仲間だろ

うが。僕の方も、昂りすぎてるのかもしれない。

「…まぁいいか。魔術師団の主力隊長副官が非公式の作戦にこうも志願するのはどうかと思うけど…。じゃあ、先に作戦を伝えておく。一番先に言うが、今回あいつにトドメを差すのは。あくまでグレンだ。本当は僕もだけどシーリカもカイムも自分の手で討ちたいって思うところだろうけど…原初での唯一人の妹を殺されたグレンにその権利を譲ろうと思う」

「アキラ…すまねぇ…」

「気にすんな。…でだ。プロセスは至って単純だ。グレン、カイム、シーリカは今回陽動に回ってもらう。あいつ…ウラヴェリアを眷属からなるべく孤立させて欲しいんだ。配置としては、グレンが吸血鬼城の南、カイムは北、シーリカには東を攻めてもらう」

「じゃあアキラは西ね…」

「いや、僕は城を攻めさせてもらう」

「えっ？でも西はどうするのさ？北は俺がいるからいいとして西から迂回してギランの奥に逃げられたら追走は難しいよ？」

うん、カイムの疑問も尤も。ぶっちゃけ、この陣形はカイムとシーリカの参加と僕のスキルアップが偶々重なった結果産まれた、アドリブに近い産物だし。

「西には、僕の召喚神を置く。これで、僕が中央に潜入し、全部のお膳立てをしてやる。だから、お前らは安心して暴れ回ってくれ」

「でも、アキラ一人か？城には、アキラのあの…人間もいるんじゃないか？」

「それに関しては我が答えよう」

ダービーがいきなり声を発した。内心ちょっとびっくりした。このやろ…。

「あの女の気配…反応は何故か今あの城にはない。つまり…あの城の本丸は、ウラヴェリアだけだ」

「まぁ…ダービー氏が言うなら間違いないね。…マドラ団長の仇がとれないのは残念だけど」

カイムが首を縦に振り納得している。たしか、カイムには原初の記憶がそのままあるんだよな…つうか、その頃から器変えてないって言ってたし。ダービーの言葉にも、こいつらには事の他重みが違うのだろうか。

「じゃあ…そろそろ行こうか。ココの、弔い合戦だ」

「うーわ…アンタ、こんな隠し玉持ってたのね。道理で、伯爵復活のギリギリまで我慢出来たものね。普通なら一週間前後かかる道も、一っ飛びか」

「俺らは飛行の魔法は持ってないからな。…こりゃ便利だわ」

今僕らは地表より高度数百メートルの高さを、文字通り『飛んで』

いる。僕らの背中には、それぞれ一対の翼。僕がイェソドに行った時に使役関係を結んだ、迦楼羅…つまり、ガルーダの力。それを双児宮のジェマイニの力…乱暴な言い方をすれば影分身の術みたいなもので増やして三人にも適用させ、さらに加速の魔法でジェット機も涙目になりそうな勢いでギランへ飛翔している。衝撃波？んなもん自分で防御壁張って護れ。加速による時間の歪み？知らん！！今の僕にとって、世界よりも目の前の敵の方が大事だ。本当は旅客機とかはもっと高度を上げるんだけど、そこまでの距離じゃないし。

「さて…竜族の頭上も軽々飛び越えてきたし、目標は目と鼻の先だ！みんな！！また、後でな！！」

「「「おうっ！！！」」」

魔族が踊る冥の刻。復讐の二文字を胸に抱き、怨敵の血飛沫の期待に胸は躍り。古より連ねし因果を孕んだ四人が、獲物の頭上を散開する。その想いは等しく、同じく、今は亡き大切な人の為に。

～第四十六話～Ｆｌｙ Ｔｏ Ｔｈｅ ＤＡＲＫＮＥＳＳ（後書き）

今回の四人の方角の配置決めですが、一応四神の配置を基準にしました。…それ以上の意味はありませんが。そして、五行じゃなく四大元素ですが。ちなみに、この物語の主要人物の四人が四大元素に符号しているのは、全くの偶然です。まぁ書いてるのがファンタジーなので、ある意味必然なんでしょうけど…。

～第四十七話～鎮魂歌（前書き）

ども！集中力のムラっ気に定評のある白カカオです。そしていつも尻上りです。…さて、たまには前置きなしでスッと入っちゃいましょうか！やだなんかひわい

～第四十七話～鎮魂歌

中空からそれぞれの配置に散ると、僕は先ず西に降り立った。僕自身が攻めるのは中央として、召喚神を出さにゃならん。手早くやっちまおう！

「…と思ったらこれだよ」

着地して分足らずで次々と地面から湧き出て、または這い寄ってくる食屍鬼や幽霊悪霊の皆さん。なんか既に、あの時位包囲されてる気がするんですけど…。

「ギャー！ギャー！ニンゲン！ニンゲン！ニンゲンハ食エ！ホネマデ食エ！」

頭の上を、一匹の夜鷹が旋回している。指示を出してる？こいつが、食屍鬼のロード…？

「ゲギャ！ギュエーー！！」

…あ。五月蝿いとばかりに振り上げられた食屍鬼の一匹の一撃に、羽を散らしてすっ飛んでいった。ですよねー。アレがロードなわけないですよねー。ただの冷やかしか。確かに少し不気味だったけど。顔、人型だったし。

ーーーフゥオン！

「おっと」

戦場にシュールな笑いを届けてくれた夜鷹に苦笑いをしてやってた矢先に、背後から風切り音。忘れてた。今包囲されてんだった。これも作戦か…恐るべし。

「いや、違うと思うぞ？」

ダービー、ツッコミ禁止。

「ハッ！！」

堅牢な土の壁で結界を張ると、一気にコンセントレーションのギアをマックスに。深呼吸して、一言。

「さぁ…我が声に応えよ！黄道十二宮の神々よ！！」

周囲の土の壁が爆散し、並び立つ十二人の神たち。こう見ると、壮観な絵だなぁ…。つうか、皆軒並みでけぇ…。任意で大きさは変えられるそうだけど、本来の姿で来たのだろう。大体人並みの大きさは、バルゴーとジェマイニくらいか。アクアリウスも、実は相当な大きさだ。

「アキラ…」

列の中央に立つ、レオが真面目な顔で呼びかける。

「あぁ…」

「マイ・マスター…。御武運を…」

「あぁ…すまん。ここは頼む。なるだけ派手に…でも地形は変えな

いように暴れてくれ。それと、戦闘苦手なやつは無理すんな。バルゴーとか」

「ムッ。わらわも役に立つのだぞ？」

頬を膨らませ、バルゴーが無い胸を張る。子供かお前は。

「そっか…頑張れ。無理、すんなよ？きつかったら、タウルスとかに護ってもらえ」

「委細承知！！」

牛が鼻息を荒げ、斧を構える。寧ろこいつから護るべきなんじゃないか？っと思ったり。

「じゃ、こっちは俺らの任せて早く行ってこいや！主野郎！」

白羊宮のアリエスが食屍鬼をグーパンで殴り飛ばしながら背中で笑う。お前、初対面の、しかも主に向かってそれかよ…。モフモフの羊の癖に。まぁ、人型だけど。

「おう！サンキュ！ラムちゃん！」

「お前っ！殺す！！」

青筋がかったアリエスの声を聞き、懐から球を出す。さぁ、ようやくお前を使う機会が来たな。

「ダービー！！」

「応っ！！」

輝くトラペゾヘドロンを地面に突き刺し、柄の宝玉が収まる部位にヨグ＝ソトースを押し当てる。そのまま剣ごと握り、魔力を供給する。

「盲目白痴な弟よ！汝が兄、ナイアルラトホテップの名において命ず！」

球が身震いするように振動を上げ、鈍く光る。

「汝が兄の主、そして我を導け！！虚空の門よ！！」

ーーーパリィィ！！

ダービーの祝詞（のりと）が終わる刹那、球体が弾け次元跳躍が起きた。ちょ、これ、少し酔う…。

「あだっ！」

いきなり地面に這いつくばるはめになったが、どうやらここは城内の廊下のようだ。乱暴者過ぎるだろ、お前の弟…。

「しかし、これで難なく本丸に辿り着いたわけだ。…待ってろ、ウラヴェリア…」

「焼き尽くせ！！レーヴァテイン！！」

グレンの声と共に、南の空に何本もの巨大な火柱が上がる。

「五火七禽扇！！皆吹き飛ばすわよ！！」

東から巨木を幾本も巻き込んだ巨大な竜巻が現れる。

「全く…二人とも、熱血ヒーロー物じゃないんだから…。アキラもあんな怪獣大戦争召喚してるし。でも、こうなったら俺も張り切らなきゃね。ココちゃん、盛大に送ってあげるよ。溢れろ、マナの壷」

カイムの呟きと共に、北の森に限定的な津波が起き、木々をなぎ倒し渦を巻いている。

北に津波、南に火柱、東に竜巻と西に神性の軍勢。派手過ぎる奇襲に、城の者も慌てて窓に張り付いて見ている。

「何事だ！！」

「なんだこれは…世界の終焉か…？」

「早くっ！お館様にお伝えしない…ハッ！？」

部屋から飛び出した人狼に人虎に、人蛇（ナーガ）。ウラヴェリアの側近と思わしき三人が、廊下の気配に振り向く。

ーーーニタァ…

その笑顔は、果たしてアキラのものだったのだろうか。恐怖に硬直する三人へ、歩みを進める。

「夜叉…モード憑依」

「ッヒィ！！」

アキラが呟くと、小さな悲鳴もままならなく人狼と人虎の半身が泣き分かれする。一瞬で間合いを詰められ、味方二人がやられた人蛇の女は、呆然と立ちすくみただ歯をガチガチと音立てることしか出来ない。

「おっ、お願い…誰だかわからないけど、命だけは…何でもしますから。ほら、こうして人型になれば望むまでご奉仕も出来ますから…どうか、命だけは…」

「お前らは、逆の立場でそうやって命乞いをする敵を助けるのか…？」

「…えっ？」

半ば開かれた足の間に輝くトラペゾヘドロンを差込み、一気に振り上げ人蛇を縦に分断する。

「…醜悪な…」

ーーーコツ、コツ…

「クソッ。命乞いをする相手を斬るのは、辛いな…」

ーーーコツ、コツ…

「クックック…アーッハッハッハッハ！！！」

アキラの意識とインド神話が八部衆、『鬼神』の夜叉の意識が入り乱れ、涙を流しながら高笑いを上げ、闇夜の廊下を歩く。目指すは正面、ウラヴェリア伯爵の寝室。仮死状態の吸血鬼は、生半可な騒ぎじゃ起きない。暗殺者、虐殺者…復讐者は、ただ悠然と刈りに向かう。

～第四十七話～鎮魂歌（後書き）

まだ終わらない…。ホント、まとめる力がなくて歯痒いです。登場人物に持たせる武具は、すっげぇ悩みました。本当はシーリカに弓を持たせたかったのですが、目ぼしいものが無くて…。なんとなく、与一の弓な感じじゃないですし。迷った結果、封神演義でもマイナーな部類ですが、藤竜版の妲己の五火七禽扇を持たせました。ほぼ活躍の場のなかった宝貝ですが。カイムも、本当は杖とか持たせたかったんですけどねぇ…。

～第四十八話～罪と罰《前編》（前書き）

どもにちわ、白カカオです。前回の最後の方について…。本当はもっとあっさり各々の武具を宣言するはずでしたが、斬〇刀の始解みたいになってしまいそうで止めました（笑）…という、しょうもない裏話でした。

～第四十八話～罪と罰《前編》

血の匂いが漂う廊下を抜け、正面の重厚な扉を律儀にも静かに開ける。呼吸音すらしない、静寂の暗闇。ベッドには、目当ての敵が無防備に眠っていた。否、仮死状態で横たわっていた。この状態になった吸血鬼は、大抵のことで起きることはない。現に、外で派手な戦闘音がするにも拘らずこの有様だ。ウラヴェリアの腕と足を、特殊な呪法を施した包帯でベッドに縛る。元々怪我人の応急処置用のアイテムなんだけど、吸血鬼とか『魔』を冠する者にはそのままダメージになるという効果がある。まぁ、聖水とかと一緒だね。

「…おい」

わかっていたけど、起きない。意識のないままサクッといっちゃうのもありといえばありなんだけど、ここは自分の置かれた状況に慌てふためくこいつの姿も見ておきたい。どんな表情するんだろうなぁ…。一度退けた敵が、自分を遥かに上回る神気を持って自分に復讐しに来たとわかったときのこいつは。…こいつには、恐怖を以って制裁してやらないことには済まない。

「ダービー」

「承知」

流石、相棒はわかってくれてる。…内心迎合はしてないんだろうけど。トラペゾヘドロンを床に突き刺し、ヨグ＝ソトースの時と同じように指環を柄に押し付ける。元々、この武具…この物質は、ナイアルラトホテップを任意に召喚する為に必要な物だ。これで最上位近い神性の魔素を当ててやり、とりあえずその次元の違いに恐怖

してもらうという寸法だ。

「輝くトラペゾヘドロンの導きにより、汝が存在を証明せよ。『暗黒神』…『這い寄る混沌』よ」

僕の詠唱が終わると同時にベッドの下から、周りの空気から高濃度の魔素が収束していく。混沌が、這い寄る。

「っ!?なんだ!!?何なんだ!これは!!っ貴様は!!」

「よぉ。真祖にして最も不死に近き吸血鬼よ。今日は軍を指揮していたアキラじゃなくて、大事な人をお前に殺られて怒り猛った復讐者として来てやったぜ」

「大事な人…あぁ、あの娘か。お前の恋人の血は、格別に美味かったぞ」

「…別にココは彼女じゃねぇよ。彼女じゃねぇけど…大切な仲間だ。つうか、お前わかってないのか?このお前を遥かに上回る魔素を持つこの…ってアレ?そこのお前…ダービー?」

さっき魔素が収束していた辺りに、妖艶な女が佇んでいた。その背中には、漆黒の翼。額には、第三の目というべきものが浮かんでいる。あれは…邪眼か?

「あら、主、我がわからなくて?ふふ…貴方がご存知の、ダービーよ。この姿のことなら、別に不思議じゃないわ。我は無貌の神(フェイスレス・ゴッド)。こんな血の香りが煙る闇夜に、謎の美女。なかなかオツなもんじゃない?まぁ…翼とおでこの目は、トラペゾヘドロンで召喚されたときのデフォルトなんだけど」

…意外とノリノリだな。つうか…。

「そんな、声まで変わってる…」

「ナ〇ミよ」

「いつのエステのコマーシャルだ！！今の子供達はわからんだろう！！つうか貴様ら！！私を置き去りになにコントなぞ始めている！！」

「…うっせぇよ。あまり調子こくな」

ーーーズダン！！

「っ！？ギャアアアーーー！！！！」

ベッドに括りつけた左腕を、大剣を突き立て切断する。肩口から、大量の血が吹き出る。本来なら再生も出来るのだろうが、この大剣はただの剣なわけはなく。外宇宙からの特別な呪法が組み込まれた作用で、もう腕が生えてくることはない。別次元にポツンと浮かぶウネウネ再生する腕とか…シュールだな。

「五月蝿い。騒ぐな喚くな囀るな。お前の生殺与奪の権利は、僕が持っていることを忘れるな。騒がしいから、もう一本も切り落としてやろうか」

ーーーズダンッッ！！

同様に右腕も根元から切り伏せる。今度は声を上げることもしな

かった。…どうせ、後で始末されんのにな。

「クックック…アーハッハッハッハ！！」

もがき苦しむ怨敵の姿に、醜く歪んだ愉悦が溢れる。お前はまだ生きてるんだろう？生きてるから痛くて苦しいんだろう？…ココは、それすらもう感じれないんだよ。生きてるお前は、なるべく長くその責め苦に苛まれるがいい。

「くっ…ヘル・ブリングは…あの女はどうした？」

「あぁ？知らねぇよ。僕らが来た時は居なかったからな。そんなにあの女に会いたいか？安心しろ。割とすぐお前のとこに向かわせてやるから」

「あら？我は最初からここに居るわよ？」

天井の方…虚空に、女の声が聞こえた。間違いない。白夜の傍にいた、あの女の声だ。

「ヘル・ブリング…貴様…」

「ごめんなさいね、伯爵。我も、この坊や達と同類だから、こんなとこで死ぬわけにはいかないの。…勿論、我の拠り代…マスターもね」

「…おい、女。白夜は何処にいる？」

どこにいるかはわからないが、その気配のする方向に睨みを利かせる。倒すべき敵が…図らずともここに二人揃ったわけだ。マドラ

のおっさんの仇が。

「そんなこと言うはずがないじゃなーい。だって教えたら、貴方マスターを殺りにくるでしょう?酷い人よねぇ。マスターは、今でもきっと貴方を友達だと思ってるのに。あのオジさんの一撃で深い眠りについてる今でも、きっと貴方のことも夢に見てるわよ」

「…関係ねぇよ。あいつも、僕の大事な家族に手をかけた。倒すべき敵なんだよ」

「ふーん。まぁ…それは置いといて。伯爵?貴方には一応感謝を言うわ。右も左もわからないマスターを、一時でも囲ってくれてありがとう。我のマスターは、そういう義理は忘れないから」

「…ふんっ!こういうときに救援に来れないなんて、使えない男だったがな」

ーーーキィィン!!

「ぐっ!!」

金属音と共に、ウラヴェリアの右足が弾けた。

「もう少しだけ長生きしたければ、我のマスターを愚弄しないことね」

「ヘル・ブリング…」

ダービーが、呻くように声を絞り出す。女声だから、若干聞きなれない。

「あら、ヘブンズ・ゲート…。その姿は止めてって言ったでしょう？キャラが被るから」

「もう…止めはせぬか？『鍵』…あの娘が死んで、何も思わなかったのか？お主だって、昔はあの子とよく…」

「…くだらない昔話も止めて」

今のところで何が凄いって、女版ダービーの普段のダービー口調でも、全く違和感がないということだ。…なんか、もっと大事なことを右から左してしまった気がするけど。

「いつまでそう意地を張ってるのだ？ヘル・ブリング…『死霊（レイス・クィーン）の女王』よ」

「「「っ！？」」」

ウラヴェリアと僕の驚愕と、女の苦虫を潰したかのような雰囲気が同時に広がる。

「待て、貴様、あの…初まりの者達の…私は、なんて…」

「本当か？ダービー」

「このタイミングで、嘘を言うわけなかろう」

「その名ももう捨てたって、言ったよねぇ！？…それに、アンタに何が分かる！！ヘブンズ・ゲートォ！！…いいわ！どっちにしろ、私達はいずれまた戦場でまみえるでしょうから。せいぜい我のマス

ターに殺られないように精進することね、キーランス！…ヘブンズ・ゲート…」

女は言い残すと、再び闇に気配を消した。

「さて…とっ」

あいつを仕留められないのは悔しいが、当面の目的はこいつだ。眼下には、左足一本だけふざけたようにくっついているウラヴェリアの姿がある。

「馬鹿な…あの女…初まりの者達…こいつらも、あの小娘も…殺される…間違いなく殺される…私は…私はなんて相手を敵に…殺される…」

恐慌状態に陥り顔面蒼白で震える吸血鬼。はっきり言って、目障りだし耳障りだし、油断するとうっかり捻り殺してしまいそうな位憎い。だけど、今それをしてしまうのは馬鹿のやることだ。私闘でもあるがこれはグレンを立てる作戦でもあるんだ。

「…五月蠅い言ったろ？」

即座に残った足を切断する。今更だけど、失血死されても困るから止血だけはしてやる。そもそも吸血鬼が失血死ってのも皮肉だが。

「ハハハ！！ダルマってやつリアルに初めて見たよ！来い。つうか引きずってでも連れてってやるよ」

もう用済みの手足の包帯を解き、今度はタスキ掛けにウラヴェリアに巻きつけ、宣言通り引きずって城の外に出る。

「クックック…アーハッハッハ！！」

ただ、突然笑いがこみ上げてきた。何故かはわからない。さっきと同じ泣き笑いなんだけど、おそらく何かが違うのだろう。外に出るまでの間、ずっと僕は狂ったように泣き笑いを止められなかった。

「連れて…きたのね」

「アキラ…いいのか？お前だって、こいつにトドメ差したいだろうに」

「大丈夫。僕は充分こいつで遊ばせて貰ったから。つうかなんだよお前ら、さっきの絶叫は？どこのヒーロー物だ」

「アハハ！俺も同じこと思ってたところだよ」

簀巻きをフルシカトして薄い談笑をする僕ら。もうこいつに足元を掬われることは、まずないだろう。

「そして何なんだ。お前らの装備。そんなチート品ばっか持ちやがって」

「まぁ…俺もこの剣は覚醒後にやっと持てるようになったからな。この最上位の剣」

「てゆーか、アキラには言われたくないわよ」

「アハハハ！！」

「さて…始めるか。ココを奪った大罪人の断罪を。グレン…この許されざる咎人を、煉獄の炎で焼き尽くしてやれ。これは…僕らみんなの願いだ」

「あぁ…サンキュ」

～第四十八話～罪と罰《前編》（後書き）

一度、消えてしまいました、この話。じゃなきゃ昨日のうちに投稿出来たのに…ｏｒｚ構想も微妙に変わってしまったし。いやぁ…なんとか、次で終わります。

若干休載のおしらせ

こんばんわ、白カカオです。

プライベートや仕事上の問題でストレスがマッハで、クリエーターに意識を回す余裕がないっつうか、頭が働かない為誠に勝手ながら数日お休みを取らせていただきます。長くても今日から一週間はかからないと思いますが…。ただでさえ最近不定期になっているのに、本当にすいません。

ちなみになぜこっちに書いてるかと言うと、活動報告よりこっちのが多く読者の方々の目に留まるかと判断した為です。

次回は頭も心もリフレッシュさせて、ウラヴェリア編最終回からお送りさせて頂きます。

～第四十九話～罪と罰《後編》（前書き）

お久しぶりです、白カカオです。この休載していた間、英気とそれを倍するストレスを蓄え復活しました！…溜め込むなし。まぁいいこともあったんで、それを糧に頑張ります。ウラヴェリア編最終話から、どうぞ！…一ヶ月以上かかったなぁ…、この話。

～第四十九話～罪と罰《後編》

グレンの魔力が込められ、神剣レーヴァテインが実装モードに移り変わる。柄はそのままに、鍔に当たるところは大きく広げた不死鳥の翼。その刃は本体と区別が出来かねるくらいに神気の炎を纏わせている。つうか、気の上がり方がヤバイ。たぶんこの炎は、ソドムとゴモラを一晩で焼き尽くした神の炎と同種なのだろう。…どちらの神さんかは知らんけど。

「マジチートだな、その剣…。グレン、オーバーキルもすっきりするけど、じっくり楽しむのもまたいいぞ?僕も結構楽しんだし」

「…復讐に愉悦はいらないんじゃなかったのか?アキラ…」

「待って!私にも…やらせて。一撃でいいから」

珍しくシーリカが前に出る。決して派手ではないが、こちらも圧倒的存在感を持つ鉄扇だ。ある程度以上高位からの武器は、持ち主を選ぶ。それこそ、ダービーのように意識があるかのように。そのシーリカの鉄扇…五火七禽扇も、シーリカ以外の者だと持つ事すらままならないのではないだろうか。扇は扇でも、鉄扇は重いのだ。

ーーーゴギャッ!ヌチャッ…バギッ!!

…一撃でなく二撃与えやがった。しかもご丁寧に頭部と胸部に一発ずつ。この場合、ご丁寧にというか、明確な殺意を持ってか?元々シーリカの五火七禽扇は、風による衝撃波や気圧の変化を重視して戦う武器だ。勿論桁違いに物理も強いが、大体は衝撃波、かまいたちでの攻撃を好む。シーリカとしては、浄化や本来の姿でダメー

ジを与えないように…且つ手応えがダイレクトに伝わる物理攻撃を選んだんだろう。エゲツな…頭蓋を砕き脳漿が飛散する感触なんて、よほど…と思ったけど、少なくとも僕らはその『よほど』の殺意をこいつに持ってるんだったな。頭の鼻から右上半分を叩き潰され中身を露呈し、尚ウラヴェリアは虫の息で生きている。ホント…よう生きてるよ、こいつも。死んでる方が数倍楽なのにな。

「とか言いつつ、伯爵に生命維持魔法をかけてる主も、かなりいい趣味してると思うわよ？それに、少しずつ痛覚神経に強化（ブースト）かけてたり、露出した脳にコレ幸いと、直接感覚遅延の魔法かけてる辺り相当外道よ？」

うっ…離れていてもさすがは僕の半身。全てお見通しなわけだ。

「…カイム。お前はどうなんだ？」

完全にマッドな僕を無視し、グレンがカイムに振る。コノヤロウ…。

「俺はこれだけでいいよ。ここに来るまで結構楽しんだし」

…とか爽やか笑顔しつつ、皮膚という防壁が剥がれた組織に、これでもかという位濃硫酸や水酸化ナトリウムの溶液をかけまくる。あーあ、溶けてるし煙出てるぞ、コレ。つうか、混ぜるな危険じゃなかったか？酸とアルカリ。まぁここにそれで害されるようなヤワな連中はいないけどさ。

「なぁ…そろそろ…」

「あぁ…」

唐突に子供達の残虐な遊戯が終わり、静寂が訪れる。

「貴方の場合、私達みんなのお膳立てが必要でしょ？」

「あぁ。最後はみんなで一緒に…だ」

「とか言って、手を下すのはグレンなんだけどね」

お互い、ケリのつけかたはもう決めている。僕も、記憶は無いが感覚がそれを教える。誰ともなく、頭の先からフルボッコにされて最早どうなっているかわからないウラヴェリアを中心に、四方に収まる。僕が西に立つ以外は、先ほどの攻略の時と同じ方位だ。

「我は水…全てを受け入れ、全ての始まりと終わりの器なり」

カイムがマナの壷を胸に抱き、静かに朗々と詠う。

「我は風…理を運び、想いを届け、水面に波紋を作りし真理」

シーリカが五火七禽扇を掲げ、大仰に続ける。

「…我は土。波紋を受け入れ、それが形作るはヒト…神の似姿」

僕もいつの間にか輝くトラペゾヘドロンを地に突き刺し、目を閉じて二人の言の葉を繋げる。

「我は火。地より受けし熱き滾りを、御心のままに顕現する紅き空

なり」

ーーーアオオオォォォーーーー！！！

グレンのレーヴァテインから放たれた不死鳥が、僕らの頭上を旋回する。辺りを照らすのは戦火の残り火と輝く月。そして不死鳥の翼の炎。目を開けると、いつしか皆目から涙を零していた。あの、カイムもだ。

「ウラヴェリア…お前は奪うものを間違えた…。俺の命なら、紅蓮の業火に焼かれずに済んだものを…」

「それは違うよグレン。例えアレがココじゃなくてお前でも、俺らは同じ手段に出ていたよ」

「それに…これが決定されていた運命…私は…私の中の隠者は、こんな未来を見たくて、表舞台に出てきたんじゃないのに…」

「グレン…終わらそう？ココの為に、僕らの為に！」

「…あぁ！！」

グレンの決意と共に、不死鳥がウラヴェリアの上に止まる。直接癒しの炎に焼かれ、闇の住人は苦悶のうめき声を上げる。

「ウラヴェリア…真祖の吸血鬼、ウラヴェリア伯爵よ。貴様はこの地で永久（とこしえ）に己の罪を悔やみ、そしてその大きさと煉獄の炎の熱さにもがくがいい」

グレンの宣言が終わり、僕ら四人は同じタイミングで息を吸う。

「聖なる炎、浄化の炎…」

「「「「クリス・クロス」」」」

不死鳥の炎圧が上がり、ウラヴェリアに断末魔を上げる暇も与えず巨大な一本の火柱が上がった。中空で十字が輝くそれは、まさに『聖なる十字架（クリス・クロス）』だ。グレンの宣言どおりそれは、永遠にこの地で炎を上げ続けるだろう。ココというか弱い命の火が、いつまでも絶えないようにと。

「アキラ…おかえり」

全てを終わらせ行きと同じく特急でキュートスに帰って来て、窓からこっそり入ろうとした僕を迎えたのは、何故か僕の自室にいるエリーだった。…まぁもう明け方近くだけどさ。

「…起きてたのか？」

「うん…アキラ達が戦ってると思うと、寝られなくて」

「…つうか、知ってたのか」

「うん…なんとなく、そうかなぁって…」

フリーズしているわけにもいかず、しょうがなく窓枠に足を掛けて中に入る。降り立った途端、エリーが抱きついてきた。

「血の…匂い…」

「あぁ、相当切ってきたからなぁ…」

「でも…」

「うんっ？」

エリーが僕を見上げる。その目が若干赤いのは、寝不足だろうか。

「帰ってきた…ココちゃんの仇を討って、帰ってきた…」

…なんだ、大体お見通しなわけだ。その内…そう遠くない未来、エリーには敵わなくなる気がする。

「未来…か…」

「うん？」

「なんでもないっ」

誤魔化すように、エリーの頭をわしゃわしゃ撫でる。シーリカは決定付けられた運命とか言ってたけど、僕にはそんなのわからないし。もしかして、また誰か大事な人を失う未来に繋がっているかもしれないけど…この娘だけは…エリーだけは、命に代えても護ってやる。それに、どんな分岐をしようとも、エリーといる『今』だけは変わらない。だから…抱きしめよう。この、精一杯の幸せを。

「大丈夫…僕は、エリーを残して遠くになんか行かないから」

「うん…」

「エリー…」

もう一度、エリーを抱く力を強める。鼻腔に、エリーの甘い香りが広がる。昂ってんのか?自重しろ、僕の分身!…つうか、下半身。

ーーー主、エレクチオンして…

五月蝿い。言うな。台無しだ。…しかし、ダービーもいつも通りに戻ったみたいだな。

「エリー、ただいま」

「…おかえりっ!アキラ!」

…なんとなく締まったようで締まってないけど、僕の過去を受け入れ、過去と決別する長い戦いは、ようやく一段落ついた。

…クソッ。シモさえ反応しなければ綺麗に終わったのに!

～第四十九話～罪と罰《後編》（後書き）

これにて、ウラヴェリア編終了です。お付き合いありがとうございました。つうか、二週間近くの間見捨てずにいていただいて本当にありがとうございます。これからは、しばらく日常系の話を書いていこうかと思います。

～ダービー外伝～記憶旅行（前書き）

ども、白カカオです。ウラヴェリア編が終わり、リクエストいただきましたダービーの外伝です。実はこのキャラ、ギャグではわりかし使い勝手いいけど、その他のところは意外に動かし辛い仕様になってます…それをどう動かすかがまた作者の楽しみでもあるんですけどね。では、箸休め程度ですがどうぞ。

～ダービー外伝～記憶旅行

「待ってよー！置いてかないでよー！」

声が聞こえる。これは、主がノア＝キーランスだった頃。これは神器戦争の最終末…ノアの最期の日だ。我の視点は今、ブレにブレている。ノアが足場の悪い、元石造りの街…今はただの瓦礫の山を逃げ惑っているからだ。ノアの数百メートル先には、同じく戦火から逃げるカイム、シーリカ、現ヘル・ブリングの精にして死霊の女王…ヘラが走っているはずだ。グレンはノアと並走、ココルはまだ幼児の為か遅れをとっている。

「ココル！走れ！追いつかれる！！」

「お兄ちゃっ…もう、足が痛いよ…！」

「っ！？ココル！！危なっ…」

数メートル後ろを走る、ココルの頭上に戦いの地鳴りで瓦礫が崩れるのが見える。ちょうど下敷きになってしまうコースだが、認識に注意喚起が間に合わない。我にも、止める事が出来ない事態だ。

「お兄ちゃ…ノア…っ」

「「ココルぅーーーー！！！」」

兄と主の名を叫び、瓦礫のカーテンにココルが埋まっていく。幸か不幸か、主とグレンの手前で瓦礫の雪崩が途切れる。二人の差し出した手は、届くことなく宙を掴んでいた。

「コ、ココル…ココル…！！」

グレンがうわ言のように妹の名前を呟き、逃げる事も忘れ瓦礫を掻き分ける。主も忘我状態でグレンに倣う。

「馬鹿っ！！ココちゃんはもう助からないわ！それよりアンタ達が…ノアが逃げる事が大事よ！！」

シーリカが超視覚で我らの様子を捉え、今にも活きている伝令を使い叫ぶ。

「駄目っ！私じゃ下級デビルクラスしか抑えられない…！あいつに…追いつかれる！！」

ヘラがシーリカの伝令に、悲痛な声を乗せる。そうだ、主…ノアよ！！きゃつらの狙いは我…つまりお前だ！我がきゃつらの手に渡れば、世界は…。クッ！！ノアにこの声を届けられないのが歯痒い…！！

「グレン！ノア！！上っ！！！」

カイムの叫びに二人が上を見ると、大きな影が二人を飛び越えて着地した。漆黒の毛に覆われたそれは、醜悪な象のようであり、その傍らには、人狐のような男が立っていた。

「強欲ども…ベヒモス！マモン！！」

グレンの怒号が傍で聞こえるが、ノアの体が動かない。正確には、

恐怖で声帯が麻痺し、体が震えている。…どちらにしても、背には瓦礫の壁、仲間達と合流しようにも、ベヒモスとマモンが立ちはだかっている。

「あっ…あっ…」

「お前ら…よくも…よくも妹をーーー！！！」

……そして次の瞬間、ノアの意識が途切れた。

「ハッハッハッハ！！こっちはこの指環さえ手に入れれば後は…」

ノアからの魔力供給が途絶え、遠くなる聴覚。最後に耳に入ったのは、マモンの高笑いだった。ノアは、不意打ちで入った神速のベヒモスの腕の払いに命を刈り取られた。

「ノアーーーー！！！！」

自分の叫び声で目が覚める。ダアトの件以来実体化する術を学んだ我は、眠りに就き、夢を見るようになった。実際のところ実体化には主の魔力に依存する為、したことはないのだが。と言うか、主がさせてくれない。

「ううん…パ○ス自重…」

エリーと仲睦まじく眠っている主の声が、ここが現実の世界であることを教えてくれる。主、若干違うし…。

「いつもさせてくれないし、主が眠ってるなら勝手にしちゃうぞ☆」

誰に聞かれているわけでもないが、あえて誤解されそうな言い方で実体化の許可を得る。いや、正確には得てはいないのだが。

「…ふぅ」

起きた時に魔力量でどやされない程度に…マテリアルよりも薄く、半幽子体（アストラル）で実体化する。容姿の選択は、ナイ神父。今日は女体化する気分ではない。そもそも、女装趣味はない！断じてない！数日前のアレは…むしゃくしゃしてやった。今は反省していると言ったところか。…別にむしゃくしゃはしてなかったが。なんというか、ノリと勢いだ。

「月は…いつの世界も在り方は変わらないのだな…変わるのは、人のそれの見方か…」

主がいつもするように、窓枠に腰をかけてみる。空には満月…とは言わないが、綺麗な月が輝いている。むぅ…意外と器用にバランスをとるのだな、主は。しかし、それがまた、主と自分の姿が重なって見えて悪い気はしない。

月明かりに照らされ夜風を受ける。あの夢の後、ベヒモスとマモンは駆けつけたシーリカとカイム、ヘラがグレンに協力し退けられた。…あの、ウラヴェリア戦で主達が見せた、合体魔法の一種によって。その代償として、まだ幼いグレンはその魔力に体が耐え切れずに死亡。息子と娘を失ったエグソダス家は途絶えた。シーリカとカイムはそのまま世界に残り、精神的負荷がかかりすぎたヘラは、自身の魂を神器に封入…今に至る。詭弁（フィロソフィア）を論ずる者のあやつは、貴族階級であった為、最初から難を逃れた。実質…その戦争は初まり

の者達の最後であった。

いたたまれなくはなったが、その若干低いテンションの勢いで過去のマスター達に思いを馳せる。幾人もの人間が我を手にしてきたが、印象に残っている者は多くない。途中で、勝手に人間を見限り、心を閉ざしてしまったからだ。

きちんと記憶にあるのは、その内二人だけ。グーラスとニーナ。

…ニーナに関しては、これもきちんと覚えているかと言えば微妙なラインだ。なんせ、特等席を良い事にずっとおっぱい！おっぱい！状態だったからな。我に腕があったなら、きっとおなじみの腕の振りをしていたに違いない。…まぁ、傾国の美女ではあったし、悪い女子ではなかった。

己の美の追求…それも、立派な純粋な思いだった。戦がなき時代ゆえ、我のことも装飾品程度にしか思っておらんかったし。流石に我が初めて声を発した時は心停止しかけるほど驚いていたが。

彼女の死因は、心室細動。我をつけている時にうっかり、鏡の前で「時よ止まれ、汝はいかにも美しい」などと言ってしまったから、我の強力な魔力とこの有名なフレーズでメフィストフェレスを呼び寄せてしまい、止める間もなく魂を持っていかれてしまった。…哀れなのかなんなのか最早分からない死に様であったな。いや、不幸な事故という点では悲劇なのか。あまりの出来事に、我ですらその後暫く呆然としてしまった。…色んな意味で衝撃的なマスターではあった。

グーラスは、王族の第三子であった。王族ということで散々我が儘し放題であったグーラスの思いは世界の全てを自分の手中に…。それもまた、グーラスの元来生のままの…つまり純粋な思いであった。実際、王族にしか持ち得ないカリスマ性とその行動力、また幼

少時代に鍛えられた胆力は、世界の覇者になり得る器であった。…普通に人間だけを支配下に置くのであれば。

時代は戦乱の世。その中で好き放題してきたグーラスは、自分に不可能はないと過信していたのであろう。実際、放蕩してはその先で勲功を上げるというやっかい極まりないスペックの高さも、グーラスの自信に繋がったのか。しかし、人間の世界だけの話であればだ。欲が出たグーラスは、亜人、魔物…幻獣種や神獣種までも支配下に置こうとした。途中までは確かに順調だった。だが油断する者にはいつかしっぺ返しが来るというもの。

獣人族…現族長のあの人虎の男の前世、それもまた人虎であった。あの男との戦闘から、グーラスは落陽していった。タウルスとレオは離反、自身も満身創痍で痛み分けという憂き目に会い、その憂さ晴らしに更なる勲功をとその足で出向いたのが…緑竜。グーラスはよく戦った。何度もあの息吹を受け、ただでさえ満身創痍の体は腐食していき、しかし基礎は出来ているが出鱈目で、剣戟も適当ながら鱗の隙間を通す繊細な技術というわけがわからない手腕でそれなりに善戦していた。…だが、それが限界だった。もしかしたら、万全であったなら遣り方次第で勝てたかもしれない。緑竜はそれをひっくるめていけ好かないと表現したのであろう。

古代竜相手に一歩も引かない、むしろ神経を逆撫でするような憎たらしさ…。確かにグーラスの目的はエゴの塊ではあったが、その勇気と豪胆さは間違いなく勇者のそれであった。

そして…。

「うーん…んあ？ダービー…起きてたのか…」

この寝惚すけの現主…アキラ。我は確信する。この主が、我にとって最後の主になるであろうと。原始の世界…救う事が出来なかったノア＝キーランスの生まれ変わりであるこの男が。

「ん…？ダービー…？ナイ神父…？…っておい！！お前勝手に実体化しやがって！」

「んー…アキラ…駄目だよこんなところで…恥ずかしいよ…」

「お前はどんな夢見てんだエリー！！？」

「…ップ！クク…」

これほど愉快な主は見たことがない。これほど心から笑える世界を見たことがない。

「何笑ってんだダービー！」

「いや、アキラが出兵するときは眠れなくなるのに、ツッコミだと寝続けられるエリーが器用だなと思ってだな…」

「まぁ…たしかに」

ウラヴェリア討伐から数日…。主も今は普段通りに眠れるようになった。当初は原始で救えなかったもう一人の子…ココの敵討ちを成し遂げ、その神経の昂りでセルフコントロールが利かずに不眠気味に陥っていたが、この通りだ。調子を取り戻した途端…この有様だ。半身を起こす主。布団から出た主の上半身は裸…隣にいるのはエリー、つまり、そういうことである。全く、元気なものだ。まぁ英雄色を好むという位であるし、別に止めはせんが…。

「…主」

「なんだ？」

「お楽しみの時は、我とのチャンネルを閉じる事を推奨する」

主の顔に、さっと赤みが差す。ワナワナと震えている気がするが、普段は我が散々いじり倒されておるのだ。珠にはこのような意趣返しも許されるであろう？

「エリーも色っぽいいい声で泣くようになったな？二回目の契りでこれほどとは…。あの主と出逢ったころの乳臭さ残るあの娘とは思えない程の成長っぷりだ。これも主のあの執拗な攻勢の賜物か…もしくはエリーに元々素質があったか…。いずれにせよ、主の開発があってこそ！日本男児として、誇っていいところだぞ？しかし優れた戦の才を持つ者は、ベッドの上でも…アダダダ！！！」

「お前は人の情事を出歯亀しといて！冷静に批評するな！！」

我が半幽子体であることを見抜いたのか主は、我にでなく本体の指環に攻撃をしてきた。輝くトラペゾヘドロンの切っ先で、器用に水晶と溝の境目をガリガリ削ってくる。見事…敵の弱点を確実に突くその手腕は確かに見事なのだが…。

「イダダダ！！しっ！しかし主！あの中盤の展開は、主の同郷、ファルコン・カトーの…」

「まだ続けるか！！」

「止めて！止めてくれ主！我が悪かった！！出ちゃう！！！そんなにグリグリされると出ちゃうのぉぉぉーーー！！！！」

「何がだ！！それに、最後女体化ヴァージョンで言うの止めれ」

「魔力が！！魔力が溢れてくりゅうぅぅ！！！」

「…それは悪かった。洒落にならん」

…ふぅ。ようやく止めてくれた。しかし、こんなにも穏やかなひと時は久しぶりだ。我が守ってやろう。主の平穏を。…主が創造主の元に辿り着く、その日まで。

～ダービー外伝～記憶旅行（後書き）

ということで、外伝というよりただのダービーサイドのお話になってしまった…ごめんなさい！話が段々と逸れていって…結局いつも通りな感じにｏｒｚ

～第五十話～休めない休日（前書き）

ども、白カカオです。シリアスが多くて自分的にも大変だったので、前述の通り少し平穏な世界をどうぞ。

～第五十話～休めない休日

「号外ー！号外ー！」

キュートスの城下街にはいつも通り…いつもより若干にぎやかな喧騒が広がる。今日は紅葉の節第一週、土の曜。元々の世界での日曜にあたるこの日は、商人が皆大わらわになる繁忙日だ。そして、いつも以上ににぎわっている原因は…これ。

ーーギランに巨大な光の十字架出現！！吉兆か凶兆か！？

足元に落ちている号外を拾い、頭が痛くなる。何々…？一部の専門家の意見によると、ギラン側の正当性が神に認められた証とされ、物議を醸している…。ナンダヨコレ？

「…アキラ？」

「…もうどこから突っ込んでいいかわからん…」

文面に目を通した途端頭を抱える僕を見て、隣を歩くエリーが心配そうに顔を覗き込む。

先ず、アレは僕らが作り出した物で、神云々は関係ない。…まぁ神代の時代の系譜を引く僕らが言うのも微妙な感じがするけど。

次に、この種族は何の神を信仰してるんだ？こっちに移り住み結構な時間が経つが、特定の信仰をしているところなぞ見たことないぞ？どっちかって言うと、個々に信仰している節はあるから、ある種日本に近い部分があるけど。…それぞれ自分にとって都合の良い神サマをな？

そして…一部の専門家って誰だ！！確かに僕らの出生のこともあ

るから、すぐにおいそれと公表出来ることではないけど…それでも国の上層部にはきちんと理解が浸透しているはずだぞ?こんな与太話を吹聴する馬鹿はいないはずだ。そして大臣の爺さんは何やってんだ!魔法監督省のトップだろ?こんな出鱈目が広まれば、国家レベルの混乱が起きるぞ!?そんな適当なことを言う似非専門家なぞ早く突き止めてしょっ引け!

「主、気にするな。これはきっと、東〇ポ的な新聞なのであろう?」

「気にもするだろう?僕は当事者で、軍の責任者の一人なんだから…」

声の音量を下げ、げんなりするメンタルを大袈裟に表現する。…実際大袈裟でもない気もするけど。一部隊の長ということは、それ以下の部隊員に正確な認識を広める必要がある。でないと、一部の情報の綻びから組織の瓦解が始まりかねない。あー…頭痛い。全て本当のこと言うわけにもいかないし、後でセラトリウス団長と口裏合わせしよう。辻褄合わせでっち上げて、なんとか誤魔化すしかない。

「アキラ、向こうに茶屋があるよ?最近出来たんだって!行ってみようよ!そこで少し休もう?」

さっきから頭やら胃やら抑えている僕を気遣って、エリーが休憩を切り出す。

そうだよ。今日は国王直々に言い出したデートなんだよ!

ーーーアキラ君?君がエリーとそういう関係なのは最早周知。どうだ?ここは明日は一日仕事の事を忘れ、我が愛娘と一緒に街にでも行ってみてはどうだ?片や国内で知らぬ者などいない騎士団屈指の

勇将。片や現国王の愛娘にして超ミラクルスーパーハイパースペシャル（以下略）銀河系アイドル。どうだ？このビッグカップルが一般人と変わらず普通に街をデートするなど、民を元気にする薬だと思わないかね？此度の遠征で…心に大きな傷を負った民も多く、兄上やココなど有力な者を失った国としても、ここで活力を取り戻したいところだ。…経済効果もあるだろうし。

…最後にそれが出てくる辺り流石国王だな。つうか、馬鹿殿様のようで色々考えているもんだ。でもエリーは何時から銀河系アイドルになった？キラッ☆とかやってないだろ？…案外良いかもしれない。どこかの変態紳士に作らせるか。

まぁ…置いといて。国王の提案の影に、僕らの出生を聞いてからの心境の変化があったみたいだけど、そこまでは知らん。ただ、政府直下の考古学者が西へ東へ奔走して神代の時代の資料を探し回っているらしい。残ってるのかねぇ…僕らの文献なんぞ。…にしても。

「あまり必要じゃなかったんじゃないかなぁ…？まぁデート出来るならいいけどさ」

ポツリと零してみる。自分で言うのもなんだが、ビッグカップルのゴシップなんかより、皆ギランの謎の十字架の方に夢中だ。

ーーー突如現れた巨大な炎の十字架に勇んで駆けつけた命知らずな冒険者によると、その炎は全然熱くなくて、癒しの効果すらあるらしいぞ！？辿り着くまでに負った傷に、炎が触れると完治したとか！

ーーーｍｊｄ！？でもギランだろ？危なくていけねぇよあんなとこ…。

ーーーでも最大手のキャラバンが、観光ツアーを企画してる最中ら

しいぞ？

…ホント、頭痛い。まぁその命知らずな冒険者の話が本当かは知らんけど、本当に癒しの効果があるならいいなぁ…と。浄化は知ってるけど、もしかしたら、ココの魂がそうさせてるんじゃないか？とか考えたり。

「すみませーん。席二人分空いてますか？」

「はいはい少しお待ちくださいねー」

考え事をしていたら、いつの間にか目的地に着いていたようだ。しかし、この国に茶屋とは…。

「……あっ」

「これは…大召喚師様っ！！」

まさかの…いや、確かにこの国に日本家屋とか、少し考えたらわかるはずだ。…先の遠征の折、僕にやたらと懐いていた狐の獣人、コトリがこの国にいるという情報を持ってさえいれば。

「アーーーッッッ！！」

「おいコトリ！仕事中だろっ！？抱きつくな！」

「いや、主…仕事中とかの問題ではない気がするが…」

「だって、こんな偶然に大召喚師様とお会い出来るなんて！あのプリンセス姫子の『ドキドキッ！！今週の恋愛運』は本物だったのね

！！」

…いや、そんな与太臭いもんじゃなくて、自分で占えや巫女。いや、逆に占うな。んなしょうもないもん。僕？一切信じないね！なんせ占星術や姓名判断、血液型占いや動物占いも全部当たったことないもんね！！

「動物占いとは嫌に懐かしいものを…と言うより、そこまでくれば不憫だな」

「アキラ…その女、誰？」

…エリーの繋いだ手から、絶対零度の殺気を感じる。お前、氷属性なのか？だとしたら、ガラムより凄い才能持ってそうだけど…。

「あっ…コノヒト、エンセイデシリアッタ、ジュウジンゾクノコトリサン」

「…なんで片言なんですの？」

あれ？寒気がするよ？季節の変わり目で風邪でも引いたかな？アハハハ…。

「コトリ、この子がエリー。この国の第三王女で…僕の彼女」

「アキラ、なんで最後小さくなってるのよ？」

べっ別にやましいことないよね？なんでだろうね？

「あっ、コトリ。そうだ、席を頼む」

「…まぁいいですわ。ご案内しましょう」

確認したい。今日は休息日なんだよな？なんで前門の虎、後門の狼状態なの？作戦中じゃないよね？

「ップ！ハハハ！見た？グレン。今のアキラの顔？」

「一人だけ美味しい思いしてる罰だ」

隣の席は、まさかのカイムとグレン、シーリカだった。なんといういつもの面子。

「なんでお前らが居るんだよ？」

「偶々よ。ねっ？」

「うん。グレンは修行の息抜きに、俺とシーリカは買い物中に出くわしてさ。もしかしてアキラもって話してたら、まさかこんな形で会うとはね」

出来れば会いたくなかったがな。シーザス！ガッデム！神は死んだ。

「…主がそれを言ったらいかんと思うぞ？」

「シーリカさん？あの女の人は？」

エリー、目が…笑ってない。怖い。つうかなんで怖いの？僕何もやましいことは…。

「さっきアキラが言った通りよ？遠征で獣人族と合流して、そのときについてきた子」

「ふーん…」

ほら見ろエリー！僕は何一つ嘘なんて言ってないさ！

「しかし…エリーちゃん見事な絶対零度だったなぁ。火の魔術師としては、なんとしても敵に回したくない」

「見事な修羅場だったねぇー」

「ホント…あんなの、蜥蜴人と不死族同時に相手した方がまだマシだよ…」

半ば涙目になりながら男性陣二人に同情を乞う。…あれ？蜥蜴人に不死族？どこかで…。

「あっ、そういえば」

思い出した！！思い出したから、それ以上は言うな！頼むシーリカ！！

「あの蜥蜴人と不死族との戦闘が終わった後、アキラが膝枕してもらってたの、あの子だったわよね…あっ」

シーリカ…皆まで言った後に気づくな。つうかお前、確信犯だろ、それ。…そぉぉっとエリーを横目で見る。

「へぇぇ…膝枕…ねぇ？気持ち良かった？アキラ…」

ヤバイ…。エリーの顔が固まってる…。なまじ端整な顔立ちしてるだけに、恐ろしさが倍増どころじゃない…。

「あっあのさ、エリー…」

「アキラの…」

ええい！時の魔法よ！時間を戻せ！クソッ！無理か！拙いっ！エリーが右腕を大きく振りかぶって…。

「馬鹿ぁぁぁぁーーー！！！！」

「ゲブハァーーーッッ！！！」

平屋の屋根を突き破り、お空の彼方へ飛んでいく僕。ドップラー効果で悲鳴が小さくなっていく。…なんでストレート喰らったのに上に飛んでくの？自然法則は無視なの？馬鹿なの？死ぬの？…死にそうなのは僕でした。

「これが国王が言わんとした、銀河までぶっ飛ばす系アイドルか…」

「主…誰うま…」

ガルーダを召喚せずとも、軽々飛んでいく僕。現在、成層圏。このままの速度だと、重力圏を軽く振りきりそうです、十二宮の皆…僕も今日から仲間になるからよろしくね…。

そんなこともならず、無事に地表に落ちてきた僕。夜まで意識を取り戻すことなく、デートは勿論中止。壊れた茶屋の屋根は、僕の給金から引かれることになりました。なんという理不尽…。

～第五十話～休めない休日（後書き）

コトリ、久々に登場させました。積極的な巫女さん…ふぅ。ということで、日常編はやっぱり馬鹿やらないと。いやぁ…楽しく書けました（笑）

～第五十一話～ただいマテリアル（前書き）

休んでる間にリア充してた白カカオです。いや、休んでたわけじゃないですよ？初ライブがあったり次のライブがあったり、三角関係に巻き込まれてたり仙台から友達帰ってきたりで、ほとんど家にいなかったんですｏｒｚ今日も今日で夜勤があったり明日は友達のライブだったり、節電で長めの盆休みだけど全然休めないんですけど…

～第五十一話～ただいまテリアル

「ただいまー」

ウラヴェリア戦とかあって実に数ヶ月ぶりに神谷家の門をくぐる。その前は月一ペースで帰ってたんだけど、よくよく考えたら向こう以上に資産を残してないこっちにそうそう帰っても、お金には限りがあるわけで。…早急にこちらと向こうの経済的インフラの整備を要求する。…大丈夫だよな?経済面では、親善大使の仕事なんてないよな?

そして久しぶりとは言っても、たった数ヶ月で何か変わるわけでもなく…。

「あら、おかえりー。全然帰ってこないから、どっかで野垂れ死んでるかと思ったわ」

仕事もせずに開口一番喧嘩売ってくる姉貴だったり。

「おかりなさい。少し、痩せたんじゃない?今ご飯できるから、座って待ってなさい」

相変わらず上手そうな晩飯を作ってくれるお袋だったり。

「おかえり、お兄ちゃん!元気だった?」

姉貴とは違い、気遣ってくれる順子だったり。

「おう晶。帰ったか」

「晶ちゃん、お久しぶりね」

「兄貴？と、千尋さん！？お久しぶりです！」

珍しく兄貴夫妻が帰ってきていた。あれ？でも、千尋さん妊娠中じゃ…？そういや、親父の声が聞こえんな…。

「よーしよし。ショウちゃん、お爺ちゃんですよー」

「まうー？」

…息子に気づかずに初孫にかまけている馬鹿親父。初…孫…？

「生まれたんですか？千尋さん！？」

「えぇ。晶ちゃんが向こうの世界に行ったって聞いてから、割とすぐに」

「へぇぇ…親父、ちょっと寄越せ」

「あぁ！？何をする放蕩馬鹿息子！」

「気づいてんなら挨拶くらいしろよクソ親父！それに僕を追い出したのは親父の方だろ！？…ねーショウちゃん」

ーーー駄目だ、主も完全に骨抜きにされておる。

五月蝿い。この天使のスマイルに勝てる者なんかいるか。そーれ、高い高ーい。

「きゃっきゃ。ぶいー」

おっ？喜んでるな？でもこれ以上はテーブルに被害が及びそうだから普通に抱っこしてやるか。しかし、僕も伯父さんか。悪い気はしないな…。伯父さん…か…。

「だー？」

可愛らしく小首を傾げるショウちゃん。あぁ、大丈夫だよ。ちょっと感傷に浸ってただけだから。…って、わかるわけないか。

「翔太って言うの、その子。ふふ、晶ちゃんと昭彦からもじったのよ。二人とも、『ショウ』の字がつくでしょ？」

「…僕？」

幸せそうに微笑む千尋さんに、疑問を投げかける。

「うん、だって二人とも、私の理想の男の子で、兄弟なんだもの」

「…理想？」

さっきから疑問符ばっかだな、僕。

「明るくて掴みどころがないけど、そのくせすいすい人の心に入ってくる晶ちゃんと、いつも難しそうな顔してるけど誠実で、不器用で伝わりづらいけど本当は凄く優しい昭彦…この子にも、二人みたいに人から慕われる男の子になってほしくて」

…なんか、そうストレートに褒められると照れるっつうかむず痒

いっつうか…。

「あ…ありがと」

「キモいから照れるな、晶」

台無しじゃクソ姉貴。

「でもお兄ちゃん、赤ちゃんの扱いそんな上手かったっけ？」

「昔はお前含め親戚のガキんちょの子守とかよくしてたからな」

「これなら、いつショウちゃんに従兄弟が出来ても安心ね」

「ブッフォ！」

水を噴きかけた。

「千尋さん…たぶん私のこと飛ばしたわよね？」

「美月ちゃんはもう少し落ち着いたらねぇー」

…いきなし何言ってんだ、このお義姉さんは。

「そういえば晶？エリーさんとはまだなの？」

「ちょっ」

ようやくありつけようとした豚カツを落としかけた。

「エリー…さん・外人さん？」

千尋さんが不思議がっている。まぁ当然か。

「あぁ、千尋さんは知らなかったのよね。この子今向こうの世界に行ってるじゃない？」

「そうでしたね。なんでも親善大使に任命されたとか…私も病院でニュース見ててびっくりしたわ」

「でね？そこの王女様と交際してるのよー。驚きよねー」

「えっ…えええぇぇぇぇーーーー！？」

…いや、お袋？エリーとそういう関係になったのは、つい最近なんだけど…いや、もう間違っちゃないけどさ。そして、千尋さんの反応が正しいんだよなー…。相手はロイヤルファミリーだもんなぁ…。

「でね？お兄ちゃん軍の隊長さんやってるんだよ？凄いでしょ！」

いや、順子？お前が胸を張る意味がわからん。つうか、僕その辺言ったっけ？

「…なんで知ってんだ？」

「こないだ、ベイン国王が家に来てな？一緒に食事をしているときに聞いたんだ。…よくやっているそうじゃないか」

親父…知ってるか？親父達も、大概にこの状況に麻痺ってるんだ

ぜ?見てみ?千尋さんを。フリーズしてるから。これが正しい反応だ。

「まぁ…な」

あえて素っ気無く返し、テレビを見る。

「昨夜未明、警察は都内某所で大規模な立ち入り調査を行い、〇国系麻薬シンジケートの一斉摘発がありました」

「へぇー…」

麻薬…ね。向こうではそういうアングラ文化とかあるのかね?今度自警団も兼任してるジュダイさんにでも聞いてみよ。

「調べによりますとこの組織は、拳銃の密売にも関与している模様で…」

へぇ…銃の密売ね…。例えば向こうに取引されたら、それこそ無双だろうなぁ…文化レベル、中世で止まってるし。

「どうしたのお兄ちゃん?難しい顔して」

「いや、何でもないさ。さっ、食わないと肉掻っ攫うぞ?」

「あー!駄目ー!」

ーーー…ふぅ。

ダービー、飯中だ。氏ね。そういえば、全然泣かないなぁ…翔太。

～第五十一話～ただいマテリアル（後書き）

これ、三度目の投稿です。主に誤タッチとかで。ほのぼの展開でした。

～第五十二話～末恐ろしい子…！（前書き）

白カカオです。マテリアル編、続きます。すみません、副題ネタに走りました（笑）

～第五十二話～末恐ろしい子…！

ーーーカシュッ！

風呂上りの乾いた喉が、小気味のいい開封音にその先の享楽を期待する。まぁ簡単に言うと、ひとっ風呂入ったあとのビールは格別というわけです。…それが地味に体内季節感がずれていたとしても。

「くぅー！やっぱ残暑を吹っ飛ばすにはビールねっ！」

「…勝手に人のビールを飲むなクソ姉貴」

そう、キュートスではすすき（？）とか十五夜（？）がもうじき綺麗に映える時期なんだけど、こっちはまだ全然暑さ現役の九月だったりする。地軸のずれなのかなんなのか、こっちと向こうは実に一年に百日近い誤差がある。暦を確認すればわかるけど。

「まぁまぁ。もう一本開ければいいじゃない」

千尋さんが宥める。なんという天使…千尋さんマジ天使。…ということで千尋さんが取ってくれたビールを再び開け、ようやく喉に爽快感を与えてやる。

ここはリビング、時刻は夜の十時半過ぎ。オーバー二十歳組で団欒しているところだ。まぁ…はぶられているのは順子と翔太だけなのだが、翔太は赤ん坊らしくご就寝。順子は自室で試験勉強中だ。なんでもスポーツ特待で志望校に進学は問題なさそうなんだけど、受けた模試の結果が納得出来なかったらしい。兄貴辺りに似たのかなぁ…この準完璧主義。あまり出来がいい妹を持つと、片身が狭くなるから自重して貰いたい。主に僕とか姉貴とか。

「しかし、晶そんなに体締まってたっけか？生傷も多いし…つうか、どうしたその切り傷！？」

今の僕の格好は上半身裸にバスタオルを首から掛け、下は…うん、一応寝巻き用のハーフパンツを履いている。あっ、そりゃ兄貴も目をひん剥くわけだな。

「あぁ、これはこないだ軍の遠征の時にちょこっとな」

白夜に袈裟懸けに切られた時の傷を撫でてみる。あの時ココがやられたりダアトに行ったり、帰ってきたらマドラのおっさんがやられたりで自分の怪我をそうこうする余裕がなかったのだ。まぁ、あの痛みを忘れない為にちょうどいい傷だったりする。…流石に兄貴とか姉貴は白夜のことを覚えているだろうから、誰にやられたとは言えないけど。

「ちょっと…そんなに危ないの？向こうの兵隊さん…」

流石に姉貴も心配になったようだ。そりゃ改めてこの派手な傷に触れたらそう思うだろうなぁ…能天気な姉貴でも。

「まぁ…でも、向こうでは優遇されてるから。一般兵の皆よりは安全だよ」

ちょくちょく前線にでしゃばってるとは言えないけど。

「あっ、そう言えば」

台所仕事が終わったお袋が輪に入る。本当に、家族総出の久しぶ

りの団欒だ。

「晶、こないだ総理から連絡があって、『親善大使の任務、ご苦労だった。今後も二つの世界の架け橋として活躍してくれる。ことを願う。君の口座に気持ち程度だが給金を振り込んでおいた、確認しておいてくれ』だって」

お袋、別に声真似しなくてもよくね？似れるわけないんだから。

「総理からって…晶ちゃん、本当に何者なの…？」

千尋さん、大丈夫っす、たぶんそちらに迷惑はかけないんで。

ーーーいや、フォローは口に出して言おう、主。

だって、なんか何を言っても追い討ちになりそうで。千尋さん、常識人だから。この家の馬鹿どもと違って。

神谷家の平穏な夜は更けていく……。

「なんじゃこりゃあああああ！！！！」

翌日お袋から聞いた総理の言葉が気になって、近くのコンビニの現金自動預け払い機で確認してみた。一十百千万十万百万…。

ーーー主。何も銃で腹を打たれたような声を出さなくても…。

状況に気づき、視線をこちらに向けた他のお客さん及び店員さん

に頭を下げる。

ーーーだって、いっ…一千万だぞ!?一千万だぞ!!?

ーーーおっくせんまん!おっくせん…アイタ!…すまん。

いや、こないだ親父から貰った退職金だって目をひん剥いたのに、だって…えっ?ちょ…ごめん、思考が働かない。

ーーーふうむ。我は金銭という概念が全くわからんからな。勿論金銭という物の価値もだ。先日の玩具屋の値段のくだりは、全てノリでカバーした。

ーーーいや、そんなドヤ風味で言われても別に凄くはねぇし。

まぁ…なんというか、ある意味扱いに困る金だな…。仕方ない、とりあえず翔太におもちゃでも買ってやるか。つうか、最早向こうの世界がメインになりつつあるから、下手すりゃこんな使い方しても一生こっちで暮らせる可能性あるしな。なら家族の為にとか使ってやる方が僕としても有意義な使い方というもんだ。まぁ、先ずはパチンコで一勝負だ。

ーーー主、これ以上無い散財するな…。

ほっといてくれ。なんせ娑婆の空気は久しぶりなんだ。

ーーー…どこに収監されていたんだ主は…。

それは…軍というある種の監獄に?

あっというまに財布につっこんだ数万を無為に散らし、玩具屋に寄ってから神谷家に帰る。まだ乳幼児ということで声が出る絵本とその他教養玩具を買ってきてやったのだが、当の本人はおねむの時間だったようだ。今それを与えると間違いなく眠気が醒めてしまうので、起きてからのお楽しみにしてやることにする。今リビングの隣の客間で、千尋さんが本を読み聞かせてやっている。

「…晶、これはまだ早いんじゃないの？」

「うん…私もそう思う」

姉貴と順子に言われてちょっと落ち込む。いや、音感は幼い頃の生育が大事なんだけどなぁ…。

「うん、まだ早いな」

小さい鍵盤のおもちゃのピアノを弄りながら、兄貴まで女性陣に同意する。うーむ、兄貴にも理解して貰えないか…。

ーーー主は翔太に英才教育でも仕込む心算なのか…？

はいはいわかったよ！僕が悪かったよ！…と、少し拗ねてみる。

「でも、ショウちゃん喜ぶと思うわよ？子供って、音が出るの好きだから」

「だろっ！？流石お袋わかってくれる！」

…ほぅら見てみろ。ドヤ顔で、ふすまが開いた隙間から千尋さん達の様子を窺う。

「初めに、神は天地を創造された」

いやいやいや!!ちょっと待て!?零歳児に創世記!?別にキリスト教徒じゃないよね!?僕の記憶が正しかったら!聖書とか確かに眠くなるかもしれないけど!…と言ったら、敬虔な教徒さんに怒られそうな気がするけど。

「地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた」

…たぶん、物心ついてもしばらくは理解出来ないと思いますよ?そこらへんの単語の難しさは。…なんで昔話とか童話じゃないんだ…。ある意味昔話だけど…。千尋さんは常識人の枠じゃなかったのか…?

「神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった」

「ひあい…あえ?」

なん…だと…!?

「ショウちゃん!?もう一回言ってみて!!?」

どうやら千尋さんが嬉しパニックになっている。いや、最初にしゃべるのはパパかママだと相場で決まってるだろ…。なんで聖書の一節なんだよ…。いや、脇から生まれて「天上天下唯我独尊」とか言わなかっただけマシだけどさ…。いや、違うだろ!まだ生後数ヶ

月だぞ!?しゃべることがそもそも異常だって!!

「ひあり…あれ!ひあり!あえ!」

ラ行発音しやがった。どうなってんだ…。

ーーー主…。

ーーーなんだ!?

藁にも縋る思いでダービーに耳を傾ける。だってさ、この異常性に気づいてるの、何故か僕だけなんだもん…。

ーーー翔太…あやつ、光の属性持ちかもしれん。

……ホワッツ?

ーーーもしかしたらだが…あの子はゲートがこの付近に顕現したときは細胞分裂の真っ最中。そして、頻繁にそこを出入りする魔性を帯びた主…。もしかして、胎児の内に影響を強く受けた結果かもしれん。そして、あの子は泣かないだろう?普通の子と中身…魂の発育レベルが違うのやもしれぬな。

何その独立属性のバーゲンセール。団長に僕に、翔太?稀代の才能なんじゃねぇの?独立属性って。

ーーーまぁ、主自身が規格外であるからな。

酷く無いか?人外扱いか?

ーーー少なくとも今までの主を見る限り、最近は特に規格から外れておる。あっ、いい意味でだぞ?それで皆救われている所があるわけだし。

いい意味って、便利な言葉だよね。フォローありがとうダービー。ちょっと布団で泣いてくる。

～第五十二話～末恐ろしい子…！（後書き）

神谷家がチート仕様になっているのは気にしないで下さい。つうか、この子だけです。

～第五十三話～強制召集略して強襲（前書き）

白カカオ惨状…参上です。日常系の受けが想いの外良くて軽く複雑です（笑）ほのぼの好きだからいいんですけどね…。勿論嬉しいですよ?ありがとうございます！さて、時間が許す限り頑張りますか！

～第五十三話～強制召集略して強襲

「…何でここにいる？」

時は遡ることほんの数分前。そう、思考を取り巻く環境も全く正常なはずのたった数分前。

「おはよー…」

驚くほど規則正しくなってしまった生活リズムのおかげで朝からベッドを出た僕。完璧なオフ日にこんな早く起きること事態が、こっちにいた頃を考えると正気を疑うことなのだが、向こうの日が昇ると起きてしまうリズムに侵食されてしまったらしい。

「お兄ちゃん、おはよう」

洗面所に行くと、順子が顔を洗っていた。学校はもう二学期が始まっていて、登校する準備をしているようだ。化粧っ気がないこいつは、寝癖頭さえなんとかしてしまえば男並に準備が早い。うんうん。お前に化粧はまだ早い。肌悪くなるしな。その内いやでも化粧しなければいけない時期が来るさ。社会人になれば、化粧はある種女の人の身だしなみみたいなもんだしな。だがまだお前はしなくていいぞ。しなくても充分可愛いからな。

ーーー兄馬鹿…。

お前だって愛でていたろうが、我が妹を。順子に生返事をすると、

わしゃわしゃと歯を磨く。うぇ、無精髭生えとる。寝癖も酷い。こんな姿じゃお外に出れないが、別に今日はダレる予定だし、出かける時に整えればいっか。

「お兄ちゃん、お兄ちゃんがこんな早く起きてるのも珍しいし、今日は一緒に朝ご飯食べようよ？」

「んん？ふぁあ」

同意を示そうとしたのだが、如何せん口に歯磨き粉がたっぷりな為正しく発音出来ない。それでも順子はわかってくれたようだ。

「楽しみにしてるねっ！」

髪のブラッシングとドライヤーをかけ終わった順子が、ニヤケながら洗面所を後にする。…ニヤケながら？

「ぺっ！そうかそうか。そんなにイケメンな兄貴と飯を食うのが嬉しいか。可愛い妹め」

ーーー自分でイケメンとか言うか。それに妹君のブラコンに困っていたのではないか？

離れて暮らしている、年が離れた妹のことが可愛くないはずがないだろう。自慢の妹だし。全く、兄貴冥利に尽きるというもんだ。
一部の人種の羨望の眼差しが目に浮かぶ。
そうして、ニヤニヤしながらリビングに向かった。…普通の朝食を期待しながら。

「おはよーアキラ！」

…頭を振ってもう一度確認する。

「どうしたの？」

今度は薄目で見てみる。…どっからどう見てもエリーだった。

「…何でここにいる？」

普段から規則正しい生活を送っているが故一同に揃っている神谷家…仕事に行った親父除く。その中に、なんでかエリーが一緒に朝食を取っていた。エリーの前の目玉焼きが半分崩れている。

「何でって、ゲート通って来たんだよ？アキラの家覚えてたし」

「手段じゃない。どんな理由でこっちの世界にお前がいるんだ？」

最早色々諦めてエリーの隣、僕の席に着く。デザート用の林檎を最初に齧り、頭をすっきりさせる。…訂正、すっきりさせようとする。

「えっと…ぐんぶしれい？」

「伝令か。で、用件はなんだ？」

「『護国騎士団後衛魔術師団第三部隊長アキラ殿、休暇が終わり次第、セラス西部アララギ島にて稀少幻獣種保護の任務を命ずる』だって。セラトリウス団長から」

しっかり言えるじゃねぇか。なんでさっきのは疑問系だったんだよ。

「つうか、伝令はシーリカの仕事じゃなかったか？」

「ううん、シーリカさんの魔法、ここまで届かないから。あと…お父さんから、ごゆっくりだって」

家族がいるところで出来るか馬鹿国王。

「そういえばエリーさん、随分早起きなのね？」

「へっ？」

「いやね、朝ご飯の仕度してたら、窓の外に見覚えのある人がいたから、誰だと思ったらエリーさんだったのよ」

お前…朝早いどころじゃないぞ？お袋が起きる時間って…。

「アッハハハ…すみません」

エリーが空笑いをして謝る。一応それなりに悪い気はしてるんだな。

「そこから晶の部屋案内したんだけど…」

「……えっ？」

何してるの？いやマジで。

「晶ちゃんの寝顔見たら満足して出てきたんだよね」

千尋さんが便乗してきたが、どうやら楽しんでいるようだ。クッ…女だらけだとアウェー感がヤバイ。エリーも顔を赤くしている。

「お姫様って聞いてたからすごく固い子想像してたけど、蓋を開けてみたら普通の女の子でなんとなくホッとしたわ。これからヨロシクね、エリーちゃん」

「はいっ！千尋…さん？」

「うんうん、良かった良かった」

姉貴が何でいい感じに締めようとしてるかは知らんが、ようやく順子のさっきのニヤケ顔の意味を理解した。

「あーーーーー！！私のウインナーーーーー！！」

兄貴を謀ろうとした罰じゃ。

ーーー残念、それは私のおいなりさ…

黙れ馬鹿指環。絶賛爽やかな朝だ。壊すな。

「ううう…いってきまぁす…」

順子が最後に残したウインナーを僕に食べられ、意気消沈してバッグを持つ。

「あれ？じゅんちゃんどこ行くの？」

「学校！エリーちゃんも行く？」

行くわけないだろ馬鹿たれ。

「行くーーー！！」

「行けるわけないだろ馬鹿たれ」

「いいじゃない、途中までなら。雨も降ってるし、晶、順子と一緒に送って行ってあげたら？」

「「やったーーー！！」」

五月蝿い。眼鏡かけた超能力者ばりに喜びやがって。

「…へーいへーい」

重い腰を上げて出かける仕度する。順子の学校は自転車だとそれなりに時間がかかるが、車だと結構余裕をもって登校出来る。順子も、下校するとき交差点からこっち側の自転車泣かせの坂を上らなくてすんだと喜んでいるのだろう。その気持ちはわかるけど、母校を同じくする者としては。いや、家の前の坂だから違くても同じか。

「間に合わせるから待ってろ」

そう言うと、二階に上がり着替えをする。流石にお年頃のお子様方が大挙する所にスウェットでは行けまい。順子的にも。しょうがないからジーンズに柄シャツを着て、もしかするとそのまま出かけ

るかもしれないから一応ネックレスとかもつける。幸い寝癖もすぐ直せそうだし、髭も電気シェーバーで一分もいらない。

「おそーい」

順子がブーたれている。

「間に合ったんだからいいだろ」

エリーと千尋さんと三人で朝のニュース番組の犬のコーナー見てたくせに。

「ほれっ！」

後部座席に座るエリーに、全く被っていないキャップを投げて渡す。

「これ何？」

「被れ」

「なんで？」

「耳、目立つだろ？」

なんとも端的な会話を交わし、坂道を下る。カーステからは、目覚めの一発と激しめの洋楽が流れる。

「あぁ、なるほどね」

助手席の順子は納得したようだ。流石我が妹。

「ふぇ？」

「まだこっちの世界には、エリーちゃんみたいな子来てないからね」

そう。神谷家は感覚が麻痺ってたかもしれないが、他の方々はエルフの存在など基本的に見たことがないのだ。パニック必至である。

「なるほどぉ…」

エリーも納得してくれたようで、素直にキャップを被る。よしよし、耳ちゃんと隠れてるな。

「…えへへ、アキラの匂いだ」

「馬鹿言ってんな」

僕はそんなに被ってない、その帽子。…似合わないから。

そんなことをしている内、早くも順子の高校に近づいてきた。県立ひばり野高校。どこかのギャルゲーみたいな名前だか、れっきとした県内有数の進学校だ。そのくせ部活も活発な文武両道、さらに結構生徒も垢抜けているという色んな意味でブランド校だ。…僕はサボり魔の底辺だったけど。

「じゃあ、行ってくるね、お兄ちゃん」

助手席を開け、順子が出る。近くに友達もいたようだ。

「おう。いってら」

軽く手を挙げると、順子の友達数人が僕に気づいたのか頭を下げる。

「じゃあ私こっち座るね」

エリーが後部座席から助手席に移る。雨が降ってるから、サッとドアを閉めても少し濡れたようだ。

「ふー…アキラ、帽子、ちょっと暑い」

エリーが帽子を脱ぐ。馬鹿っ！ここで脱いだら…。

「キャー！！あの子」

あーほら、パニクってる。急いで出る…

「可愛いーー！！」

「向こうの世界の子かなー？キレー！！」

「運転してるの、三組の神谷さんの兄さんじゃない？」

「テレビで見たー！！ちょっと、かっこよくない！？」

…なし崩し的に僕までバレた。あーあー車にたかるな。パパラッチかお前らは。

数分後、出勤してきた先生によって蜘蛛の子のように散らされたが、囲まれていた時間と同じくらい説教をくらった。

～第五十三話～強制召集略して強襲（後書き）

年頃の女の子って、有名人を見るとたぶんこんな反応なんでしょうね。たぶん…。色々受難な回でした。

～第五十四話～人手不足（前書き）

白カカオです。今回で、マテリアルの世界はしばしおさらばです。
この間お気に入りしてくれた方、切らないでください（笑）若干プライベートとかでネガってる白カカオです。

～第五十四話～人手不足

しばしドライブを楽しんだ僕らは、昼前に家に帰って来た。雨は相変わらずで、一向に弱まる気配はない。途中お子様禁止のホテルに行ったが、これは決してやましい気持ちで行ったわけではない。単に休みたかったのと、エリーが喜びそうだったからだ。資金には余裕というのもおこがましいくらい余裕があるし。案の定エリーは楽しんでくれたのだが、小一時間運転して体が凝った僕は、マッサージチェアでまったりしていた。

「ただいまー」

「あら、早かったのね」

「おかえり、晶ちゃん」

「おあーいー。まうー」

車から家までの短時間で濡れてしまった僕らを、お袋と千尋さんと翔太が迎える。

「キャー！可愛い！！何これ！？」

「何っておま…赤ちゃんに決まってるだろ」

こらこら。濡れたままで翔太を抱くな。翔太が風邪引いたらどうすんだよ。

「ふふふ。はいこれ。赤ちゃんがそんなに珍しい？」

「うんっ！私、人間の赤ちゃんは初めて！」

そうか。エリーは家族で一番下だもんな。赤ん坊を見ることもなかなかなかっただろう。まして、エルフじゃなく人間の赤ん坊なんか初めてで当たり前だ。

「ふーん…やっぱり耳、小さいね」

「当たり前だ。引っ張るな」

「であー！あー！」

耳を引っ張るエリーに、翔太が必死に抗議する。うん、なんか微笑ましいな。

「あむっ！」

翔太がエリーの胸元に顔を突っ込む。腹でも減ってんのか？

「ねぇ千尋さん、この子どうしたの？」

エリーが翔太の行動に首を傾げている。

「あらあら。おっぱいでも欲しいのかな？さっきあげたばかりなのに」

「おっぱい…？」

「ちょっ！！出すな！しまえしまえ！！お前はまだ出ないだろ！！」

いや、出たところでどうなんだって話だけど。

「赤ちゃんって、おっぱい好きなんだぁ…ふふ、アキラと一緒だね」

ドレスに胸をしまいながらエリーが笑う。いや、意味が違うしこの場で言うな。…ほら、なんか居たたまれない感じになっちゃったじゃん。

「あっ…僕、体冷えたから風呂入るわ」

こういうときは逃げるのが一番だ。戦略的撤退とも言う。

「じゃあ私も…」

「来んな!!後から入れ!」

…ったく。これ以上実家で僕をアウェーにしてどうする。まぁ、風呂に入れば少しは落ち着くだろう。箪笥から着替えを持ってリビングに戻る。忌々しいことに、家の風呂場はリビングを経由しないと行けないのだ。

「あっ晶!今は…」

お袋の声を無視して脱衣所のドアを開ける。

「…晶、何してんの?」

「隠せぇぇぇーーー!!!」

急いでドアを閉める。…間の悪いことに、僕が部屋に行ってるうちに姉貴が入っていたようだ。しかも服を脱ぐタイミングにカチ合ったのか、半裸っつうか…下着の下以外全部脱いでいた。

「だから言ったのに…」

頼むからもっと断固止めてくれ。別に嬉しくねぇぞ、こんなハプニング…。

「心折れた…部屋戻る」

「じゃあ私も」

「悪い、エリーはここにいてくれ。一人になりたい」

「私とエリーちゃんでナニを…」

「何もしねぇよ!!さっさと入れ馬鹿姉貴!!!」

…教訓。人の話は最後まで聞こう。

「…ふぅ」

自分の部屋に戻り、ベッドに倒れこんで一息つく。…なんで自分ちでこんな疲れにゃならんのだ。

ーーー…ふぅ。

いや待て。お前は違うだろエロ指環。…もうどうでもいい。とにかく疲れた。寝る。おやすみ。

ーーー待て主、こんな時間に寝ても後で後悔するぞ？

いや、別にいいし。どうせ明日になれば向こうに戻らねばならんのだ。最後の休暇くらいゆっくり休ませてくれ。

ーーーいや、主の義姉上の…。

んっ？馬鹿姉貴の？

ーーーいや、義理の。

あぁ。わかりづらい。サウンドオンリー状態なんだから音だけでわかるようにしろ。…で、なんだ？

ーーー授乳シーンを見逃し…。

うるせぇぇぇぇ！！！お前いつぞやの棚上げになった、男風呂でウホッいい男わっしょい祭決定な。

ーーー後生だ！！後生だ主ぃぃぃぃーーー！！！

却下。寝る。

「……のぁっ！！」

はぁはぁ…嫌な夢を見た。何故か戦場で上半身裸の筋骨隆々の漢達が、更に何故か僕のところまで押し寄せてきてその波に飲まれた

僕は…！！…目が覚めなかったらどうなってたんだろう。考えるだけで寒気が…いや、考えたくない。シャツが寝汗でぐっしょりだ。

ーーーぷーくすくす。

…お前かダービー。お前、魔力の供給止めるぞ？いやガチで。

ーーー正直すまんかった。

あーあ。全く疲れがとれた気がしない。風呂入ろ…。

「風呂…」

脱力した体を引きずり、リビングに下りる。翔太とエリーがじゃれあってて、お袋と千尋さんと姉貴が談笑している。テレビに目を向けると、夕方の情報番組がやっている。もうそんな時間か…。昼飯…食いそびれた…。

「誰も…入ってないよな…？」

「入ってないわよ？」

「サンキュ」

お袋の言葉を今度は最後まで聞き、安心して風呂に入る。シャワーが汗を流していく感覚が心地いい。ものの十数分で風呂から出た僕は、とりあえず風呂上りの一杯を喉に下そうとしたが…。

「駄目。アンタまだ飲酒禁止」

「…なんでだよ」

「アンタ明日から向こうに戻るんでしょ？今日はみんなで外食に行こうかって話になってるから。昭彦兄さんとお父さんにも連絡済」

それはわかったけど、なんで労わらなきゃならん僕に運転させようとするんだ…。

「納得いかないようね。そりゃ、アンタが男だからよ」

くたばれ男女不平等社会。

一家団欒の夕食が終わり、一同我が家へ。どうせまた来るし、適当に挨拶を済ませ、自分の部屋に戻る。素っ気無くしてるけど、やっぱ家族っていいもんだな。

「…で、なんでお前がここにいる？」

「恋人と一緒に寝るのは普通じゃない？」

流れでエリーは僕の部屋で一緒に寝ることになった。布団をもう一枚お願いしようとしたが、のらりくらりかわされ結局寝具は一つ。しかし僕もこのベッドは譲る気はない。…結果、背に腹は代えられず一緒の布団に寝ることに。

「はぁ…わかった。さっさと入れ」

色々諦めてエリーをベッドにエスコートする。文句をいいつつ壁

際を譲るあたり、僕はどこに出ても恥ずかしくない紳士なのだ。部屋の電気を消して布団にもぐる。

「アキラ…んっ…」

いきなり唇を重ねようとしてくるエリー。人んちで発情すんな。

「だってあまり構ってくれなかったじゃん…」

「それはともかく、実家でするわけにはいかん」

「いつもウチでしてるくせに…」

「いつもって言うほどしてないだろ！それにお前んちは城で、防音ばっちりだろうが！」

声を潜めながらツッコミは忘れない。

「でも…」

「…ん？待てエリー」

おもむろに枕元の電気のリモコンをオンにする。

「「「…あっ」」」

「…何やってんだお前ら」

ドアから覗く双眸が三つ。上からお袋、姉貴、順子だ。

「いやね、ウチの息子がエリーさんに粗相がないように見張っておかないとって…」

「上に同じ」

「私は！…お兄ちゃんとエリーちゃん、どうなのかなって…」

……。

「ただの出歯亀だろうがあああああ！！！！」

「だって…ね？」

「だってじゃねぇお袋ぉぉぉ！寝ろ！今すぐ寝ろ！！」

「晶、そんな大声出すと千尋さんとショウちゃんが起きるでしょ」

「元凶が何抜かしてんだ馬鹿姉貴！！！」

「だって香奈子さんが来てた時は普通に私の部屋に響くくらい…」

「エリーの前で元カノのこと話すな順子ぉ！！！つうか聞いてたのかお前っ！！」

「アキラ…私なら、みんなに見られても…」

「いいわけないだろがあああ！！！お前はドコでナニに目覚めたんだ！！！」

現クリエーター…お願いだから、もう一人ツッコミ役増やしてく

れ…身がもたん…。

そして変なこと言った罰として、エリーに本当に何もせず休暇最後の夜は更けていった。

～第五十四話～人手不足（後書き）

なんか書いてて素直に、リア充爆発しろって思いました。いや、私も爆発しなければいけないか（笑）つうか、姉が欲しい…。

～第五十五話～再会（前書き）

キャッスルカカオです。私事ですが…こないだ初ライブ終わったと思ったら、次のライブが来月に決まってます。練習スタジオの確保と、まさかのドラムボーカルをさせられる可能性が出てきててんやわんやしてます。つうか、二週間半でドラム三曲にボーカル五曲覚えるとか鬼畜過ぎんだろ…ｊｋ…ｏｒｚ

～第五十五話～再会

なんだかんだ充実した…かは微妙な休日を終え、早速セラス西のアララギ島へ向かうことになった僕ら後衛魔術師団第三部隊。今回は個別任務で他に部隊はいない。何故か知らないけどウチの部隊は、後衛のはずが遊撃部隊的ポジションになってしまっているらしい。

「隊長がアキラさんですし、妥当な成り行きだと思いますよ」

「デンゼル、あまり泣きたくなるようなことを言うな」

「隊長が部隊の顔なんですから、平気でほいほい前線に行っちゃうアキラさんが部隊長なら、そういう目で見られても仕方ないです。ココさんもなんだかんだ言って前に出てましたし。正直、ボクを含め前衛向けの魔術師もそれなりの割合を占め、かつトップが魔法理論の破壊者的存在のアキラさんです。純粋な後衛になり得るはずがありません。他の部隊員も、完ッッ璧に染まってますよ。アキラさんの色に。勿論歓迎すべき事ですのでボクはこのままでいいと思いますが」

デンゼル…長文のそこかしこに聞き捨てならんエキスがふんだんに含まれてた気がするが…料理なら完璧にいやがらせにスパイスたっぷりな罰ゲーム…。つうか、ペロ…これは青酸カリ位の致死量なんだが。うん、ちょっと泣いてくる。騎乗だから逃げ場ないけど。

「アキラさん、泣いてないで見てください。例の…『奇跡の火架』ですよ」

獣人族の集落ルートから逸れて、もうすぐ西の海に差し掛かる辺

り。ガラリオン山脈の途切れ目から、先日僕らが放ったクリスクロスの壮大なオブジェが見える。つうか、ここから見えるんだ、アレ…。

「あぁ…そうだな」

遠い目で視線を逸らす僕。他の部下達もざわつき始める。

ーーーアキラ殿、天下の初まりの者達のアキラ殿ならば、こんな任務第三部隊だけで楽勝じゃろう?それともこの期に及んでまだ一人じゃ不安かの?まぁアキラ殿にとってここは所詮異界…心細さに押しつぶされても仕方のうて…そこまで言うならもう一部隊つけてやっても…

ーーーやってやるよクソじじい。

ーーーアキラ君、幾ら君が成果を上げようとも、君の部隊はまだ若い。命を削る戦場から離れ、他にも多くの経験を積むことが引いては君の力になるだろう。君の部隊にも優秀な風魔術師はいるだろう?万が一何かあったなら、伝令を飛ばせば良かろう。アキラ君、健闘を祈る。

セラトリウス団長の挑発からのカルバン団長の諭し。…断れるわけないだろうが、こんな鮮やかなコンボ。はぁ…でも意地張るんじゃなかった。まさかこんなタイミングで心労背負い込むとは思わなんだ。あの三人の誰かを道連れにしてやりたい気分で一杯だ。適任はシーリカ辺りだろうか。カイムは駄目だ、いつものスマイルでどこ吹く風で逃れそうだ。グレンはグレンで、うっかり口が滑って色々機密事項がバレかねん。僕らに関する。…そうなると、やっぱシーリカか。…いや、もう止めよう。あいつはここに居ない。考える

だけ詮無き事だ。

「あー…なんで遠征費用削減中に遠征させるんだよ…」

よって、一部隊だけなのだ。

「何かおっしゃいましたか？」

「いや、何でもない」

もうすぐアララギ島が見える沿岸部に着く。…っと、アレ？

「アキラ、まさか海を渡るのに何の準備もせずに来たのかい？」

カイムが砂浜に一人で立っていた。

「…あっ。でもなんでお前がここに？」

「部隊の予定は全幹部に通達されるでしょ？で、休みボケしたアキラのことだから絶対普段の遠征のままで来ると思って」

…忘れてた。よく考えたら、舟とか必要じゃねぇか。確かに見える距離だけど、泳ぎは無理。そこまで凶暴じゃないけど海獣の類もいるし、そもそも食料とかどうすんだって話だ。いやぁ…渡りに舟ってやつだ、文字通り。

「片道金貨一枚で手を打とうか」

ーーーピシッ…

全員の時が止まった。とんでもねぇ守銭奴だ、コイツ…。ほら見ろ、入りたての子とか涙目じゃねぇか。いや、元々僕の不注意が悪いんだけどさ。

「大丈夫、アキラからしか貰わないから。下の子から搾取するわけないじゃん」

会場から溜息が漏れる。…って、僕から取るのは確定かよ。

「流石カイム副隊長！」

「懐が広い！」

「あの爽やかな笑顔が素敵！」

待て待て。あいつ搾取って言ったの聞こえなかったか？お前らの隊長が食われようとしてるんだぞ？

「天下のアキラ様とあろうお方が、高々金貨一枚を渋るのかい？あぁ可哀想だ。シーサーペントとか半魚人（サハギン）、クラーケンまでも生息しているというのに…。何人も命を落とすだろうなぁ…。果たしてこの中の何人が無事に島に辿り着けるのだろうか…救いの手を払いのけられた俺には、ただただ祈るばかりしか出来ない…」

「無駄に隊員の不安を煽んな。あいつら個々の能力はさほど高くねぇよ…。わかったよバカイム。払えばいいんだろ？食料とか備品の問題もあるし、手ぶらで来た僕に選択権はねぇよ」

「毎度ありー！」

懐から差し出した金貨を渡すと、カイムがホクホク顔で受け取る。

「こういうのを隙間産業っていうんだろうね」

「いや、絶対違う」

「アハハ！そう微妙な顔しないでよ。最上級の安全で向こうまで届けるから」

色々落胆している僕を尻目に、隊の子達はカイムが用意してくれた何隻もの舟に荷を運ぶ。お前ら…少しは自分とこの隊長を敬え。つうか慰めろ。

「諦めてください。これも一種の親しみの形です」

「んなわけないだろ！」

「それに慰めて欲しければ、アキラさんにはあんなに可愛いお姫様がいるじゃないですか」

「…言ってて恥ずかしくないか？デンゼル」

「アキラ！みんな準備できたみたいだよ！じゃあ、行こうか。俺はここでお見送りだけど」

カイムが促すと、確かに準備は出来ていたようだ。荷を積む舟に二人ずつ配置し、他は少し大きめの舟にスタンバイしている。

「じゃあ、頼んだよ、ババムート」

ーーーザバァァァ！！！

「我が主君のご友人、必ずや無事に渡そう」

……よう、出目金。お前はいつから君主になったんだ？カイム。

～第五十五話～再会（後書き）

ふと、みなさんお気に入りの話とかあるのかなぁとか思ったりしました。別に投票とかは募りませんけど（笑）もしお気に入りがあるのなら幸いですっつうか作者冥利に尽きます。

～第五十六話～歓迎…？（前書き）

白いカカオ…略して白カカオです。なんか久々に爆睡しました。これが正しい休日の過ごし方だと思いたいです。…更新しろや。っつうことで参ります。あー…柴咲コウいいなぁ。薄桜鬼やりたい。

～第五十六話～歓迎…？

バハムートの背びれ尾ひれに縄で舟をくくりつけ、牽引させること一時間足らず。何気に距離が近かったアララギ島。砂浜に下ろされると、出目金はそのまま海に帰って行った。道中、流石に海の覇者に歯向かう者はいないらしく、なんとも平和な船旅だった。…船酔いさえなかったら。

「ううえっぷ…」

「大丈夫ですか？はい、水です」

「あぁ…悪い」

エルフの連中はバランス感覚がいいのか三半規管が強いのか、ピンピンしている。僕が潰れている間、デンゼルが指揮を執り周囲の警戒をさせている。

「デンゼル、この島の地形はどうなっている？」

「えぇ。地図によりますと、中央に一つ大きな火山がありますね。その火山が内陸のかなりの割合を占めています。そして、その周囲からこの砂浜の手前までぐるっと回るように密林地帯があります。北部に行けば多少平原や礫地帯があるようですが…。ちなみに今我々がいるところは、この島の西部。この砂浜です」

そういうと、僕に見えるように地図を見せてくれる。なるほど、ここから数十メートル位のところにもうジャングルの入り口が見えるあたり、あまり大きくないのかもしれない。

「…ん？」

結構な標高がありそうな火山のてっぺんあたり、数個の飛行物体が見える。実際それくらい大きな火山かはわからないが、視認できる辺りかなり大きそうだ。

「…？あぁ、アレですか。この島は、ロック鳥とサンダーバード…それに鳳凰やフェニックスの生息域です。たぶん、アレでしょうね。もしかしたら、ケツァコアトルもいるかもしれませんね」

なんという猛禽のオンパレード。ゲームばりに同時にエンカウントしたら、僕は裸足で逃げ出す自信ある。

「主だって、ガルーダを支配下においておるだろう」

「アレとそれは話が別。理性と野生の区別はせにゃならん。はっきり言って、僕は怖い。それに、鳥の顔ってなんだか苦手なんだ」

頼むから、その大型猛禽類まで調査しなきゃいけないとか言うなよ…？マジで泣きたい。

「ドラゴンスレイヤーが何を言ってるんですか…」

「五月蝿い。さぁ、回復した。そろそろ行こうか。ケルピーとか牛鬼が出てきたらめんどうだ」

ケルピーとは半魚馬で、性格は獰猛。人肉が好物で、海に引きずり込んで捕食するというなんとも恐ろしい馬だ。でも馬と魚の合い掛けとか、刺身にすると美味そうだ。牛鬼は、日本人の沿岸に住む

人なら一度は聞いたことはあるかもしれない妖怪だ。頭部は牛、胴には虫や蜘蛛のような数本の腕。さらに羽も生えていて飛行も可というぶっちゃけキメラだ。こっちも性格は残忍で、さらに毒も吐くというやっかいこの上ない妖だ。実家海沿いじゃなくて良かった。まぁ山は山で、天狗とか入道とかで大変だけど。実際は熊のが問題だ。

まぁそんなやつらが出ない内にさっさと密林へゴー。密林も、どんなやっかいなやつがいるかわからんけど。とりあえず、今回の任務は幻獣の保護だ。害獣の殺害許可は下りているので、障害になりそうなやつには退場してもらうが。ぶっちゃけさっき挙げた連中も広義で幻獣の類なので、無闇な殺生は避けるべきなのだ。

つうか、保護というか生態調査が一番大きい。多少資料位はあるのだが、新しい情報が欲しいらしい。そして、その上で稀少なものを発見した場合は生息域を特定して、人の立ち入りを制限するのに使うらしい。そこまで人が来るような所ではないのだが。

「おっ？」

森に入ること数十分。目の前をさっと小さい影が走った。大きさ的にはリス位の小動物なのだが、このファンタジーの世界にそんな平和な生物がいるとは思えないのだが…。

「アレは、カーバンクルですね」

さっきの影を追うように、もう一匹走ってきた。こちらは僕らに気づき、立ち止まり首を回してみせる。ふさふさした白い体毛に、大きくつぶらな瞳。額に特徴的なルビーが光る。

「おっ、戻ってきた」

先ほど僕らの前を駆けていったもう一匹が、後から来たカーバンクルの元に来る。こちらは、エメラルドが光っている。

「番いか…」

「珍しいですね。どうやらこの辺りは当たりのようです」

「デンゼル、辺りは当たりって」

「カーバンクルの宝石は、装飾品としてだけでなく、魔道媒体としての価値も高く、乱獲が懸念されていました。そして、番いがいるということは、この辺が生息地として間違いないでしょう。元々広範囲に生息している種ではないはずですから」

うん、説明台詞ありがとう。とりあえずここは報告対象地域に入れた方が良さそうだな。

ーーーシュバッ！！

「「っ！？」」

ーーーズゥーン！！ズゥーン！

「「！！？」」

突然足元に恐らく威嚇の矢じりが突き刺さり、地鳴りが響く。

「おい、デンゼル！この島に亜人はいないはずじゃなかったか！？」

「えっ、えぇ。そのはずですが…」

隊に動揺が広がる。拙いな、完全に想定外だ。

「第二種警戒態勢！早く！！」

まだ亜人からの襲撃と言う決め付けは出来ないが、向こうは明らかに意思を持った知的生物だ。ここは明確な指示をした方が隊員としても行動に方向性が出て、統制も執りやすくなる。ちなみに、第一種はギラン側との有事の際の警戒態勢だ。

ーーーズゥーン！！

ーーーメキメキ…バキッ！！

こちらの態勢が整った直後、地鳴りがすぐそこまで近づいた気配が止み、代わりに正面の木々がへし折られる音が聞こえる。巨大な腕が姿を現した。

「ゴー…レム？」

誰かの呟きが聞こえた。目の前に現れたのは間違いようも無い、土で出来たクレイ・ゴーレムだった。

～第五十六話～歓迎…？（後書き）

今回数箇所明らかな説明台詞がありましたが、やっとこさ資料が手に入ったので使ってみたかった次第です（笑）あとケルピーとか牛鬼とか、あまり有名な幻獣ではないので一応…。

～第五十七話～歓迎っ…迎撃！（前書き）

すみません、最近不定期な上文字数が減ってる気がする白カカオです。ホント、忙しすぎなんだけど何これ？この小説書き始めたときの比じゃないんですけど…。なんで、すみません。忙しさを言い訳とかかっこ悪いな…。

～第五十七話～歓迎っ…迎撃！

「レオッ！タウルスッ！！」

「「応っ！！」」

突然現れたゴーレムに、とりあえずこちらは十二宮のパワー派で対抗する。単純に考えると僕らを侵入者として牽制の攻撃だと考えるのが妥当なラインだが…。武器を使う、ゴーレムを使役するという二点から、本能に任せての攻撃とは思えない。つうか、ゴーレムの本能とか知らんし。

「ゴーレムは僕と十二宮がなんとかする！みんなは各自自分の身を守ることに徹してくれ！」

この攻撃が威嚇だと仮定して、先ずはこちらに敵意がないことを示さなきゃいけない。神性総動員してこの辺りフルボッコにするのは簡単だけど、今回の目的は調査だし、一つの部族を簡単に滅ぼしてしまうのはよろしくない。無闇に敵を作るのは馬鹿の所業だ。ということで、加減しつつ身も守るという非常に面倒くさいことをしなければいけなくなった。

「グオオォォォ！！」

「ぬぅ…ガアアア！！」

目の前ではレオとタウルスが二体のゴーレムを抑えている。なんとなく二人を出したけど、まさか二体目がいたとは…。部隊員はウォールや力場を作り備えている。ウチの部隊は単純なパワー型がほ

とんどいなく、変化球系ばっかだ。そしてゴーレムは機械神（デウス・エクス・マキナ）に近い、さらに幻獣と神器の中間種（アーティファクト）のような物だ。存在が特例過ぎて、こいつらの手にはまだ余る。

「すみませーん、ボク雷系なんで、クレイには手出し出来ないんでー」

ええい！知ってるわデンゼル！お前は黙って皆に気を配ってろ！…って、三体目キターーー！！！

「クッソ、マジかよ！？」

もうどうにも僕も参加するしかない。

ーーーサジタリウス、ビスカス。お前らは隙を見て、奴らの間接を狙え。動かなくするだけでいい。

ーーー…御意。

ーーーわかったよー！

声に出さず、人馬宮のサジタリウスと双魚宮のビスカスに命令を下す。サジタリウスは文字通り射手座のケンタウルス、ビスカスは魚座の双子だ。ちなみに姉と弟。見た目は人間なら中学生位だ。水属性ならアクアリウスという声もあるだろうが、アクアリウスはどっちかって言うと防御特化なきらいがあるから、水の攻撃特化ならこの二人なのだ。

「とりあえず、動くな！！」

地面に手を着き、地面越しにゴーレムに停滞の魔法をかける。
最近わかったんだけど、詠唱や呪印などを用いた方が魔力の輪郭が明確化して効果アップするらしい。初級魔術師は魔力のチャンネルを開き易いように皆そのような手順を踏んで媒体にするんだけど、そりゃ魔法も発動し易くもなるもんだ。力の底上げになるんだもん。中級からは調子こいて詠唱破棄して簡略化するのが誰もが通る道らしいんだけど、上級になると最終的に魔術媒体を使い始める。ようは気持ち…イメージ力だからね。大事だよ、形。

「こいつ…重い…」

持ち属性の土を伝導させて僕の魔力効率を上げ、それでもこの一体を足止めするのが精一杯だ。このゴーレムも土だから、相性抜群のはずなのだが、レオとタウルスの援護に向かう余裕がない。魔力には余裕があるけど、残念ながら今の僕にはさらなる魔力の凝縮とか出来るほど錬度があるわけではない。ついでに言えば、四体の神の召喚に土、時魔法のチャンポンというフルコースっぷり。まだしんどくはないけど、確実に僕の魔力がカリカリと減っている。
ちなみに時を使うときに大抵ミックスさせているのは、幾らかでも世界に対する時間干渉を減らす為に、自然属性の魔力を上乗せさせて気持ち中和させているからだ。

「流石限りなくデウス・エクス・マキナに近い何か…想像以上だ」

「何気に余裕あるな、主？どうだ、もう一体くらいフォイフォイ出してみてはどうだ？」

「馬鹿、軽口叩けるだけだ。これ以上はただ向こうを悪戯に刺激するだけだ。それに…もう充分かな？サジタリウス！ビスカス！」

僕の声と同時に、二人…三人？が実体化するとともにゴーレムに向けて矢を放つ。このサジタリウスの矢は矢じりにビスカスの『侵食する水』を付属させている。その矢が正確にゴーレムの肘や膝に突き刺さる。いやぁ、流石射手座というだけある。レオとタウルスを避けてゴーレムにヒットする。

ーーー……ズゥゥゥン！！！

三体のゴーレムが時を置かずに倒れる。膝を破壊されたゴーレムは立っておれず、更に肘も破壊したので抵抗も出来ない。

「もういいぞ？四人とも、サンキュ」

僕が声をかけると、神達が消えていく。部下達を断続的に襲っていた矢も、それを機に止んでいる。どれ、ゴーレムは有人操作が可能だったはず。もしかしたら、あちらさんの誰かが乗っているかもしれない。どれどれ、一応確認してみるか…。

ーーーバシュッ！

「ちっ！近づくニャー！！」

斜め上前方から僕の足元に再び矢が刺さると同時に、妙に高い声が響く。…つうか、ニャー？

「うっさい」

どうせ僕の周りに時魔法の減速をかけてて矢は届かないので、余裕綽綽で目の前に倒れているゴーレムに近づく。難なく辿り着くと、

ゴーレムのうなじ辺りにちっこい何かが見えた。

「…ケット・シー？」

そこには服を着た一匹の猫…ケット・シーが目を回していた。よく見ればこのゴーレム、小さく猫耳になってやがる。

～第五十七話～歓迎っ…迎撃！（後書き）

ケット・シーは亜人なんじゃないかという突っ込みもありそうですが、手元の幻獣ファイルとかいうコンビニに売ってる本に載ってたので勝手にこのアララギ島に分類しました。それならエルフも今までの種族もみんな幻獣なんじゃないかという自己完結…ｏｒｚ

～第五十八話～和解と協力　（前書き）

白カカオです。ここ数話のサブタイの話数間違えてたてたので修正しました。で、修正してて気づいたのですが、もう結構な話数いってますね…。このペースの進行度だと、たぶん完結は二百話まで目安になります（笑）閑話とか挟めば更に…。ジャンプでも数年連載するレベル（笑）

～第五十八話～和解と協力

ゴーレムに潰されて泡吹いてるケット・シーに治癒の魔法をかけてやる。戦闘終了と同時にこちらの迎撃態勢を解いたのが良かったのかもしれない。陰からの、おそらく他のケット・シー達の他の隊員に対する攻撃は止んでいた。つうか、隊長が攻撃されてるのに何一つアクションを起こさない部下とは何なのか…。

「信用されておるのだよ。いいことではないか」

「普通あのレベルの矢を喰らえば死ぬって。僕が時魔法持ってなかったらハリネズミだぞ」

「それはもう周知ではないか。いざとなったら体を構成する分子を変異させて硬化という手も考えておったのではないか？」

「いや、そんな変異させればとんでもない負荷かかるし却下してた。そもそもそれは錬金術に近い分野だし、僕の魔術が出来るのは近い原子にしか変えられない」

だからわざわざ地中をアナライズして銀とか探したりしてたんだし。それが出来りゃもう何でもありだろ。

「あの…」

「んっ？」

気絶から目が覚めたケット・シーが恐る恐る声をかけてきた。

「その…有難うございましニャ。私、貴方を襲ったのに殺さないどころか治療までしてもらっニェ…」

この種族は語尾がデフォルトでニャ行になるのか…い段とかは結構苦しそうだけど。つうか女の子か？この子。若草色で狩人のような服装は、それで性別を判断するのは難しい。顔は…猫だし。

「気にすんな。こっちは元々略奪するつもりとか敵意とかはなかったし」

「それはますます申し訳ないニャ…」

おっと、それはそうか。

「私はケット・シーのミーニャニャ。警備をしてたらたまたま貴方達を見かけて、武装してあったから侵略者かと思って攻撃ををしてしまった次第ニャ…」

「僕はアキラ。キュートスの騎士団長からこの島の調査の任を受けて来た。別に危害とか加えるわけではないから安心してくれ」

「キュートス…いいところだニャ。随分繁栄していると聞くニャ！みんにゃ！出てきて大丈夫だニャ！」

おおっ！ぞろぞろと出てくる出てくる！二足歩行の猫達が。個人的にはペットに服着せるのは反対だけど、これは可愛い。

「これはキュートスの騎士様。とんだ無礼、許してくれニャ」

中から歳のいった猫が前に出る。

「いや、もとより驚かせたのはこっちだから…って、尻尾二本生えとる！？」

「ワシも歳じゃからニョ」

ケット・シーと猫又のハイブリッドとかすげぇな。

「ワシはケット・シー族の長老、ニャ太郎ニャ。改めて歓迎するニャ」

ちょ、ニャ太郎って。太郎て。なんでいきなし日本風なんだよ。吹きかけたわ。でも、ウォーレンの時より簡単そうで良かった。

「ご好意、痛み入る」

「この先にケット・シー族の集落がある。そこで茶でも飲みながら話そうニャ」

「じゃあ、お言葉に甘えようかな」

それから歩くこと数分、木々の上に小さい小屋が建てられた集落が見える。これがケット・シーの集落か。部隊員も、なんとなくテンションが上がっている。

「…して、此度はどのようなご用件でこの島に来たのニャ？」

流石に猫サイズの家に入れるはずも無く、外で茶を貰いながらニャ太郎…長老と語らう。

「アララギ島の調査でね。それと、ついでに部下の訓練も兼ねて」

「そうか。我々はいいお相手になりましたかニャ？」

「いや、全く」

「そこまで言い切らなくてもいいではないニャ…」

長老がそこはかとなく肩を落とす。

「はっきり言って、いきなしゴーレムは反則過ぎだろ!?僕がいなかったら正直どうなったかわからんぞ？」

「むぅ…それは済まなかったニャ」

「アキラ様、長老。お茶のおかわりはいかがかニャ？」

ミーニャがお盆を抱えニコニコ近づいてくる。人間サイズの物を運ぶお盆は、さぞかし重いだろうに。

「あぁ、頼むニョ」

「かしこまりましニャ！」

跳ねるように駆け出すミーニャ。こうして見ると、年相応…かはわからないが、普通の女の子といった感じがする。猫だけど。

「でも…比較的平和主義のケット・シーがあんな強力過ぎる武装を持つなんて、わけがあるんだろ？」

「主、それはまた面倒事を抱え込むフラグ…」

「いや、ほら一応これも調査だし」

「よく聞いてくれたニャ…」

ミーニャからお茶のおかわりを受け取ると、長老は重い口を開き始めた。僕もついでにおかわりを口につける。

「この島のあの大きな火山はご存知かニャ？」

「あぁ…真ん中のでっかい…」

「そうだニャ。あの山はエラ・フラシアン火山…エラ山と呼ばれておるニャ」

「トイレのトラブル八千え…」

「それはクラ◯アンだ馬鹿ダービー。水を差すな」

気持ちはわかるけど。

「その山に近づくにつれて凶暴な幻獣が多く生息するのだがニャ…」

ふむふむ。これは資料作成のいいヒントになりそうだな。

「時折こちらに下りてきて、暴れていく獣がおるのじゃニョ…」

ふむふむ。いい予感はしない。

「その獣の名はマンティコア。我らの中でも少なくない被害が出ておニュ…」

「その為のゴーレムか」

「そうニャ。倒してくれとは言わニャい。しかし、この島の内部まで調査を続けるのニャら…くれぐれも気をつけてニョ」

「有益な情報をどうも。見つけたら、なんとかするよ」

「助かるニャ…しかし」

「いいよ。情報をくれただけで、僕ら的にはありがたいことだ」

「…済まニャい」

気づいた。もうな行が全般猫語になってる。心を開くとこうなるのか。しかし、またどうしたもんかねぇ…。マンティコアか…。

～第五十八話～和解と協力　（後書き）

猫語、正直ムズいです（笑）気を抜くと忘れるし、不自然な感じになるし…。でも、猫の可愛さは不滅です。

～第五十九話～森の奥へ行ったら意外な合流した（前書き）

白カカオです。大まかなプロットしか構築されてなくて、細かい話の展開がその場で作ってるのでなかなか浮かばない時はしんどいです。でも頑張ります。

～第五十九話～森の奥へ行ったら意外な合流した

ケット・シー達にしばしの別れを告げ、一路火山…までは行かなくとも森の奥へ。

「主、火山には行かないのか？」

「うん。今の僕には魔鳥どもと渡り合うとか無理」

「そんなことはないと思いますが…」

デンゼルが首を傾げているが、お前はきっと僕が鳥が苦手なのを忘れている。以前香奈子と『世界の鳥博覧会』なるものに行ったことがあるけど、その時は綺麗な色した鳥達に逆にグロテスク感を覚えて十分で出てきてしまった。…流石にアレは悪いことしたと思ってるけど。でも香奈子は僕が鷺ですら近くで見れないこと知ってたくせに。鶏肉は好物なんだけどなぁ…。

「せめてあいつらの一人でもいれば…。いや、グレンは駄目だな。あの鳥ども軒並み火属性だから歯が立たん。そうなると属性的にガラムあたりなんだけど…あいつは何故か相性が悪いんだよなぁ…」

「俺が何だって？」

「うをっ！？」

背後からの意外な声に思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。…何故お前が居る？ガラム。

「カルバン団長からの命令でな。一応陰から護衛をするように頼まれたんだよ。…俺も本当はお前の護衛なんかお断りなんだがな」

「あっそ」

「他ならぬカルバン団長のご命令だ。断るわけにはいかないからな。しょうがないから着いてやるよ」

「はいはいさいですか」

ーーー主、相性が悪いのは主の態度にも問題があるのではないか？いつも喧嘩売っておるし。

だってなんか気に食わねぇんだもん。こいつの選民思想的な部分。

「だから火山の調査もサボるんじゃないぞ？」

「ゲッ！」

カルバン団長…僕はきっと貴方を恨む。

「でもお前じゃあの魔鳥どもが相手じゃきついんじゃないか？」

「馬鹿め。俺が前衛魔術師団第一部隊長だと知って言ってるのか？」

何っ！？お前何時の間に昇格してたんだよ！？

「…その顔は本気で知らなかったようだな。お前らがウラヴェリアを討伐しに行ってた時に俺がただ遊んでたと思ったか？その裏で俺の部隊はガラリオンに棲む赤竜（レッド・ドラゴン）のところに行ってたんだよ。…残念

ながら留守中のようで討伐まではいかなかったがな」

「ホントはチキって逃げたんじゃないのか？」

字面で見えるなら草を生やす勢いで煽ってやる。こいつの顔真っ赤なとこ楽しいんだもん。

「…ふん。そんな低俗な挑発に乗るか。…風に乗りて歩むものよ。応えよ」

ガラムがいきなり詠唱したと思ったら、紫と緑の煙が集まり一つの槍を形作る。ちょっ！？グレンのレーヴァテイン並に神気がやべぇ。

「神槍ゲイボルグ。更にこいつの元はイタクァだ」

「待て！なんつー厨仕様。ケルトとクトゥルーのハイブリッドとかどういうことだ！？」

槍自体の気から、こいつがゲイボルグであることは間違いない。普通の良質な武器からはこんな威圧感あるオーラなんて出ないし、他の三人の武器を感じたのもでかい。…つうか、僕も反則級の持ってるけどさ。更にハスターの眷属…ウェンディゴの名でも有名なイタクァで生成とかどういうことだ？

「…納得言ってないようだな。この槍は元々俺の所有物だったらしい。赤竜の財宝庫に転がってた所を回収したんだよ。そして、こいつを手に取った時に溢れてきた記憶の数々が、これが俺の物だという証拠…。これでグレン共に遅れを取らずに済んだというものだ。…なぁ？ノア＝キーランス？」

「っ！？」

「こやつ、覚醒者か！？」

こいつ、僕の前世を知ってやがる。ということはこいつ…ガラムも初まりの者たちか、もしくは敵対者か？

「お前のことも思い出したよ。あの時はまさかしゃべるとは思ってなかったがな、指環の。ヘブンズ・ゲートと言った方がいいか？」

「…どういうことですか？アキラさん」

デンゼルがいぶかしむ様に僕に詰問する。ガラムのアホめ、簡単にばらしやがって。この場で適当に取り繕うには厳しいぞ？無策過ぎる。

「悪い、デンゼル。後で説明するから、ちょっと待ってくれ。…で、お前は誰なんだ？ガラム」

一睨みするようにジロリとガラムに顔を向ける。場合によっては、今ここでこいつを始末しなければいけばいいかもしれない。

「そういきり立つな。下々の民は隠し事が多くて大変だな。俺のような貴族階級にはわからん苦労だ」

「貴族、主と我の記憶…まさかお前！？」

「気づいたか指環の。俺は詭弁を論ずる者（フィロソフィア）、ガラム＝ヘラクトドス。ヘラクトドス公爵家の第一子だ」

まさかこいつが僕らの仲間だったとは…。なんだこれ？ちょっとあまりに唐突で頭が回らない。

「聞いたことがあります。太古の昔、千年王国という全てが神の元に当統治された国がありました。その中の最も力を持った家…その名が、たしかヘラクトドスだったと…」

「マジか。つうかデンゼル、なんでお前がそんなこと知ってるんだ？」

「少し前、大臣達が古代文献を探し漁っていたことがあったでしょう？その中の資料の一部を知人の関係者に見せて貰ったのです」

こら、それ完全に情報漏えいじゃねぇか。この国本当に大丈夫なのか？

「お前の部隊にも勉強熱心な部下がいたようだな。どうだ？お前、ウチの部隊に入らないか？雷属性のデンゼル。歓迎するぞ？」

「いいえ、有り難い申し出ですがお断りさせて頂きます。ボクはあくまでアキラさんの補佐ですから」

「ほぅ…アキラ。どうやってこいつを洗脳したんだ？」

「してねぇよ！人聞きの悪いことを言うな」

「人聞きの悪い？お前の性格を鑑みれば妥当な線だと思うがな？」

「おっ前…」

「おっ？やるか？」

「馬鹿め。僕にも輝くトラペゾヘドロンがあるのを知らないのか？」

大剣を召喚し、正眼に構える。

「面白い…いつぞやの続き、今ここでやろうか？」

「なぁ、お主ら。なんだかんだ言って実は仲いいのではないか？」

「ボクも同感です。いたら喧嘩ばかりだけど、いないならいないで寂しいとか」

「「そんなことあるか！気色悪い！」」

「おー。一字一句ハモった」

「真似すんな！」

「貴様こそ！」

互いに無駄に一触即発の空気が流れる中、一匹の空気が読めない乱入者が木々を縫って空から下りてきた。

ーーーグルルルル…

「…ガラム」

「なんだ？」

互いに視線も体制も変えずに会話する。

「とりあえず、一旦休戦しないか？」

「お前と意見が合うのは全く遺憾だが、同感だな。任務がわざわざ来てくれたようだしな」

ガラムの正面、僕が首だけ後ろに反らすと、一体の大きな獣…ライオンのようで尻尾に蠍のような棘を生やしたマンティコアが唸りを上げていた。

～第五十九話～森の奥へ行ったら意外な合流した（後書き）

ここでガラムと出すとは私も想定外でした（笑）そしてガラムの武器、考えた結果がこれだよ…。まだ頭が固いようです。

～第六十話～霜柱の共闘その１（前書き）

ホワイトチョコレートです。ご指摘を受け、とりあえず第一章の修正をしました。中には自覚していたにも関らず放置してしまっていた物もありましたが、これほどまでとは…。自分の注意力の無さに、夏休みの最後の日を思い出しながらやりました。でも、やっぱりきちんとした形で読者の皆さんに読んでいただきたいしなぁ…。またご指摘やご報告等どございましたら謹んでお受けいたします。

～第六十話～霜柱の共闘その1

「グァルルゥゥゥーーー！！！」

マンティコアが一瞬で間合いを詰め、僕とガラムの間に突進して来る。間一髪二人とも直撃は避けたのだが…。

「なんで助走もなしにこんな破壊力があるんだよ…」

マンティコアが頭から突っ込んだ先、樹齢四桁もかくやという立派な大木がへし折れていた。マンティコアがゆっくりと僕らに向き直る。

「総員各班ごとにまとまり、迎撃体制を取れ！必ず救護班と攻撃班は一組になれよ！…ガラム」

「なんだ？キーランス」

「…その呼び方はこの際いい。お前の隊、隊列はどうしてる？」

「なんだ唐突に。定石どおり、属性をばらして何班か作っているが」

「良し！各班ガラム部隊長の班に随伴しろ！救護班は怪我人の保護、攻撃班は前衛のサポートに徹しろ！」

「おいっ！貴様勝手に…」

「それが…部下を守る為の最善の策だ。皆、僕やお前とは違うんだよ。お前も、部下は失いたくないだろう？」

「クッ…仕方ない。総員、キーラ…アキラ部隊長の指示に従え！」

バラバラと、しかし迅速に指示通りにまとまる。ガラムも、伊達に隊長を冠していないようだ。指示系統の確立がしっかりしている。これなら、少なくとも被害は最小限に抑えられそうだ。

「おい、キーランス…」

「なんだよ貴族様」

ガラムが呼び方を改めてくれないので、僕もちょっと皮肉って呼んでやる。

「貴様、今まで小賢しい手を使って何度も戦場を潜り抜けてきたらしいな」

「小賢しいとはなんだ」

「癪だが、今回はお前に指揮を預けてやる。…ヤツの戦闘力は、恐らく竜族クラスだ」

「あぁ」

突進の直前のあの威圧感は、緑竜を倒した時に近くで感じたそれに似ている。…まぁ、あの時はマドラのおっさんが無双してくれたけど。

「そして、非常に口惜しいが、俺の部隊にはまだ竜クラスとの戦闘の経験がない。この間は、留守だったからな」

「そうみたいだな」

ガラムの隊員を横目で覗き見る。このレベルの敵に対して緊張するのは当たり前だが、ガラムの隊員やデンゼル…あのバリアス戦を経験していない隊員達の緊張の種類が微妙に違う。恐怖の色が主に滲み出ている。古参の魔術師団員は臆せばそれが穴となるのがわかっているのか、ただ静かに集中するばかりだ。

「本当に癪だが…指揮は貴様に預けてやる」

「…どうした？お前がそんな弱気に」

「俺のプライドなど…部下の命には代えられん」

グレンも最初はいきり立っていたが、向き直って正面から対峙したマンティコアの威圧感に若干押されているようだ。こいつも、いっぱしの部隊長というわけか。自分の力…経験不足を認め、部下の為に最善を尽くす。全く持って正解だよ。僕も逆なら同じことをするだろう。でもな…。

「お前の気持ち、受け止めた。でもな、ガラム…」

「…なんだ」

「今は僕と『お前』が頭なんだ。脳が恐怖に萎縮しては、体も動けなくなっちまう」

「貴様…！この俺が貴様に頭を下げているのに…」

「いつもどおりにやってみろよ」

「っ！？」

「絶対に勝つって自信を持て！ヤツを倒すのは自分の力なんだと笑ってやれ！お前は…部下達の希望なんだ。部隊長ならきっとなんとかしてくれるって、僕達の部隊長は凄いんだって信頼してくれる。そんな希望が弱ってたら、僕やお前より弱いあいつらはどうすればいいんだ？絶望しかないだろう？だから、いつもみたいに高笑いしてやれ！部下達を安心させてやれ！」

「っ！？キーラ…」

「大丈夫だ！！」

長口上を待ってくれる程マンティコアは辛抱強くはないらしく、ダッシュして僕目掛けて鋭い爪を振り下ろす。さっきのアレを見ていたから、気配さえ読み間違えなければ避けることは難しくない。ったく、戦隊ヒーロー物を百回見直してからきやがれ！

「だから！笑えって！お前が笑えば、部下の士気は上がる！士気が上がれば、最大限の動きを示してくれる！そうすれば！こんな獣相手に遅れを取るわけないだろう！？部下を守るのはお前なんだ！ガラム！！」

マンティコアの追撃をギリギリでかわしながら、ガラムに講釈たれてやる。ったく、世話の焼けるお坊ちゃんだ。

「言うようになったではないか、主！」

「伊達にあの世は見てねぇよ！」

「そもそも見てないであろう！？」

攻撃の余波が、マンティコアの爪の形そのままに周囲に広がる。部下達は壁を生成してなんとか難を逃れるが、間に合わない者にはやはり相応の傷を負わせる。幸い、深手を負った者は居なさそうだ。救護班が迅速に治癒をかける。

「よしよし、流石僕が手塩にかけた部下達だ。優秀優秀。…デンゼル！」

「…聞いてましたよ、アキラさん。どんな相手でも怯んだら負け、勉強させてもらいますよ。全班、散らばり敵に的を絞らせないで下さい！我々がバラければ、その分一度に受ける被害も小さくなります。この森の中難しいとは思いますが、出来うる限り散ってください！」

優秀な僕の副官は、僕の意図をほとんどちゃんと汲んでくれたようだ。だけど、六十点だな。

「お前ら質問だ！こいつに勝ちたいか！？勝って功績を挙げたいか！？」

別に皆まで聞く必要はないのでそのまま勢いで叫ぶ。

「挙げさせてやる！前衛魔術師団第一部隊員に告ぐ！動き回りながら攻撃魔法でヤツを削り続けろ！」

「しかしそれではマンティコアの注意が…」

「後衛魔術師団第三部隊攻撃班！お前らは前衛の連中の補佐だ！威力と命中率強化の！救護班は引き続き消耗した者の回復に努めろ！」

「だからアキラさん！そうすると無闇に的を…」

「的を絞らせない為にお前らを動かしてんだろ？それに、最終的に狙われるのはあくまで僕とガラムだ。リーダーを先に始末しようとするのは本能だからな」

「しっしかし…」

「デンゼル…僕を、誰だと思ってる？」

「「「っ！？」」」

部下達一同の目の色が変わるのがわかる。…指示という名の演説に夢中で、さっきからかすり傷が増えているのはご愛嬌。別に致命傷じゃないし。

「古代竜も倒した…竜殺し…」

「そうだ！僕は竜殺し（ドラゴンスレイヤー）のアキラ！その僕が獣相手に負けると思うか？間違いを犯すと思うか！？」

「「「！！！」」」

僕の宣誓から数テンポ間を空けて、次々と攻撃班が前衛魔術師達にサポートの魔法をかける。

「お前ら…」

「俺は！俺たちは！アキラ部隊長を信じた！あの人が居る限り、負けるはずがない！」

「勝って…ヤツに勝って、私達も力になれるってアキラ様に見せてやるわ！」

僕の部下は、いい感じに火が点いてくれたようだ。いいぞ、もっとやれ。

「…射て！氷の魔弓！」

僕の部下の熱気に感化されたのか、前衛魔術師からの最初の一撃がマンティコアに命中する。

「グッオオオオオ！！！！」

たぶんそれほどのダメージではないだろうけど、マンティコアが悲鳴を上げる。意外と役者だな、獣の癖に。

「いける…いけるぞ！」

「遅れを取るな！ヤツを倒すのは俺だーー！！」

一度きっかけがあると、次々と前衛魔術師達の飛び道具がマンティコアに飛び交う。時々ある反撃に傷つく隊員もいるが、救護班が素早く対処する。

「…役者なのは主であろう？前にも似たようなことはあったが…」

「今までパワーバランス的に、ここまでいい感じの実戦経験をさせられなかったからな。今回は、数の暴力ってやつだ。この先僕がいなくても、隊がそれなりに高いクオリティになるように仕上げておかないと。竜殺しの僕の傘の下では、いつまでも強くなれないから。口でああ言ったけど、僕は手を出すつもりはほとんどないよ。それに…」

「？」

「ガラムの自信もな」

「…」

「あいつ、竜殺しの僕、ウラヴェリアを倒したカイムとグレン、シーリカに劣等感に似た焦りを持ってるみたいだから。個人レベルならそれもいいかもしれないけど、部隊を率いるトップとしてはいささか頼りない。あいつは…つうか、トップはそうなんだけど、無駄に自信持って強引に引っ張るくらいがちょうどいいんだよ」

「ガラムの…仲間の為…か…」

「あいつだって、一応仲間であることには変わりないからな。前世的にも」

ダービーも色々と思うところがあるようだが、僕は件のお山の大将をそろそろ気にかけなければならん。無駄にプライドが高いあいつが僕に頭を下げてまで望んでいる成功だ。あいつにも、それなりの成果を得てもらわにゃいかん。大きく息を吸い込む。

「ガラムーーー！！！」

戦況を呆然と見ているガラムに向かって声を上げる。

「お前の部下が必死こいて戦ってるんだぞーーー！！お前は何やってんだ！！！！まだチキってんのかーーー！！フォイフォーーイｗｗｗｗ」

草生やして煽ってやった。

～第六十話～霜柱の共闘その１（後書き）

区切りがわからず半端にやっちまいました。まぁいつものことですが（笑）続きます。

～第六十一話～霜柱の共闘その２（前書き）

ダブルキャストのサントラ聴いてます、白カカオです。ついにと言うかいつの間にかと言うか、六十話まで来てました。目標の二百話以内完結出来るのかな…、

～第六十一話～霜柱の共闘その２

「フォイフォーイｗｗｗｗ」

たぶん凄くむかつく顔してんだろーなぁとか思いながらガラムを煽る。いや、むかつかせる為にやってるんだけど。

「チキン竜田ガラム風は美味いフォイ……って馬鹿！あぶねぇ！！」

ガラムのすぐ横の班を襲っていたマンティコアが、蠍の尾を大きく婉曲させてガラムの死角から貫こうとしている。マンティコアで一番厄介なのは、爪でも牙でも突進力でもなくあの尾なのだ。毒性はこの世でもトップクラス。勿論致死毒で更に解毒方法もない。まぁ生身でマンティコアを倒せる人間なんてほぼいないから、血清とかが作れないだけなのかもしれないけど。どちらにせよ、今までそれを仕掛けてこなかったのは単なる幸運でしかないだろう。

「…りて…あゆむ…よ…」

「おい！ガラ…」

急いで加速の術式を頭の中で演算するが、間に合わない！遅滞とどちらにするか逡巡してしまったのが仇になったか！

「ヒグオオおおおおおお！！」

マンティコアがガラムを貫こうとする刹那、悲鳴を上げたのは逆にマンティコアの方だった。ヤツが悶えて体がずれて、氷漬けになった尾の切断面が見えた。

「…黙って聞いていれば…貴様…」

ガラムが青筋立てて氷の槍（アイスジャベリン）ゲイボルグを僕に向ける。ヤバッ！あの野郎煽りすぎたのが仇になったか！？

「馬鹿！お前今はそれどころじゃ」

「うるせぇぇぇ！！！」

横薙ぎに槍を払うと、伸びた切っ先がマンティコアの四肢を襲い、氷漬けにする。それまでの部下達の猛攻と反撃で消耗し自重に絶えられないその四肢が、砕けてマンティコアがダルマ状態で崩れ落ちる。その時の悲鳴は、マンドラゴラもかくやと言うほど殺人的な五月蝿さだった。

「…静かにしろ、畜生風情が」

ガラムは静かに言い放つと、ゲイボルグをマンティコアの延髄に突き刺す。小さく悲鳴を上げた獣は、そのまま動かなくなった。

「おっ…おぉ…」

「ガラム…様…」

「「「おおおおおおおおおお！！！！」」」

部下達の歓声が響く中、ガラムが表情を変えずに僕と対峙する。

ついでに、槍術の構えも解かない。

「いやいや、もう戦闘は終わっただろ…」

「貴様との殺し合いはまだ始まってすらいない」

「さっきまでの殊勝な態度はどうした」

「知るか」

「見てみろ、部下の安堵の表情を。誰一人無くしてないだろう？お前が守って、お前の部下が頑張ったんだ」

ガラムが不機嫌そうに部下の方を振り向くと、部下達が畏敬の念を込めて畏まる。さっきまでのへたれたガラムではこの表情を見せなかっただろう。逆に、自分より部下の命を優先させた所を見せたからこそ、尊敬の眼差しが強く表れているのかもしれない。

「ふんっ…それについては貴様の功績だ。俺が貴様に全権を委ねたのだからな。…だがな」

再び僕を向きなおすと、穂先をやや下に構えた、突進に適したような構えを取る。

「俺の願いに応えてくれたことには礼を言おう。貴様の力は認めよう。しかし、俺を愚弄した事実だけは許されん」

「馬鹿！アレはお前がへたれてたから…」

若干縋るようにガラムの後ろ、前衛魔術師達を見やる。誰かストッパーになってくれないかとか考えて見てみたんだけど、駄目だ。あいつらまたいつもの小競り合いくらいにしか思ってない。

「覚悟しろよ…んっ？」

またも頭上から羽音がする。どうやらもう一体マンティコアがいたようだ。

「ちょうどいい！悪いがお前は少し利用させてもらう！」

マンティコアがガラムのゲイボルグの間合いに入る手前、先に僕が輝くトラペゾヘドロンを召喚し、それを頭上のマンティコアに振る。ただ漠然と魔力を行使するのではなく。カタパルトのように射出するイメージ。たぶん、こうやってイメージした方がマンティコアに魔力が到達するのが速い…気がする。それが、形を伴う物なら俄然そうな気がする。

「主、全部憶測か」

「五月蝿い！タウルス！キャンサー！」

「うむっ！」

「あいあいさー！」

発射された魔力が、先にタウルスを形成する。空中で斜め下に頭を構えたマンティコアの背後に回り、チョークスリーパーのように拘束する。

「アキラさん！尻尾が！」

デンゼルの叫びと同時に、巨蟹宮のキャンサーがマンティコアの

背中付近に現れる。その左手には、ロック○ンやこぶらのように、鋏のギミックがされている。バ○ットでもいいけど。別に銃じゃないし。

「悪いね！ちょっとオイタが出来ないようにちょん切らせてもらうよ」

右手と重心移動で器用に背中を伝い尾の根元をロックすると、手早く凶悪な蠍の尾を切断する。マンティコアの降下速度が速いのか、鮮血が上に舞い上がる。

「ぬぅん！！」

ーーーバキッ！！

頚椎が砕ける嫌な音が聞こえると、それでも念の為にタウルスはそのまま更に首に力を掛け、引きちぎる。数秒後、無残な獣の死骸が空から降ってきた。

「うわっ…えげつな…」

思わず僕がそう漏らしてしまう程、凄惨な死体だった。という音が聞こえるレベルで、辺りは静まりかえっていた。

「あっ…圧倒的じゃないか…」

「これが…竜殺しのアキラ…」

ガラムの部下から呟きが聞こえる。いや、そうでもないよ？

「ガラム！」

さっきまでいきり立っていたガラムを見ると、呆然と立ち尽くしていた。

「まだやるか？魔剣の召喚に神性二体同時召喚。これだけでも今の僕は充分消耗しているぞ？今なら確実に勝てるんじゃないか？」

一瞬間をおいて、ガラムが面白くなさそうにゲイボルグを引っ込める。

「ふんっ！どこまでも不愉快なやつだ…今の貴様を倒したところで、弱ってる相手をただ蹂躙した卑怯者の汚名しか残らないじゃないか」

「そうか、僕が全快になったら相手になってやるよー！」

「…ふん」

うん、これが狙いでマンティコアを一人で倒したんだよね。召喚魔法がどれ程魔力を消耗するか、わからないほどガラムは馬鹿じゃないからな、…無限の魔力（エターナル・マナ）のことは勿論伏せといて。

ーーー主もワルよのぉ。

ーーーいやいや、お代官様ほどでは。

実際、属性魔法より魔力消耗したのは事実だからね。嘘は言ってない。

「クゥン…グルルル…」

僕の脇の茂みから、小さい唸り声が聞こえる。足で突いてみると、そこから一体の小さな獣が飛び出してきた。

「マンティコアの…幼獣か？」

その赤毛の体毛と、そこだけ異質な尻尾。おそらく…いや、間違いなくマンティコアの幼獣だった。

「…どけ！キーランス」

ガラムがその姿を確認すると、なんの迷いも無く槍を向ける。

「だが断る」

「…！アキラさん！？」

デンゼルが驚きの声を上げるが、僕は別に譲る気はない。

「貴様…何を考えている？」

「たぶん…今の二体のマンティコアは番いだったんじゃないか？」

「…？」

二つの部隊員の中で、クエスチョンマークが浮かぶ。

「…かもしれませんね」

ガラムのところの副官、ルバードが臆しもせずに二体の亡骸を調べる。どんな生物でも、性器の確認が出来れば雌雄がわかる。無性生殖とか両性具有じゃなければだけど。

「確認が取れました。先に襲って来た方が雌、後からアキラ様が始末された方が雄のようです」

「ありがとう、ルバード。一番自然な解釈は、小さい子を残した縄張りに入って来た僕らを、母親が子を守る為に襲い、母マンティコアの悲鳴を聞いた父マンティコアが戻ってきたと言ったところか」

自分の出した結論に、思わず閉口してしまう。どんな風当たりにもほぼ鉄壁な精神的防御を誇る某掲示板の住人である僕らの。唯一に近い弱点が母ちゃんであり、親だ。あいつらに感情があるかどうかは知らんけど、その心中を想像して思わず胸が痛くなる。

「だからどうしたというのだ。襲ってきたから殺す。弱肉強食は世の常だ」

「あぁ。間違ってないよ。でも僕の推測が間違ってなければ…間違ってなくても、こいつらにとって僕らはただの侵略者（インベーダー）…己の家族の平穏を脅かすものだ」

「……」

重い沈黙が辺りを支配する。たしかにみんなわかっている。ガラムのいうことも正しいとわかっているのだろうが…。

「確かに僕らには、ケット・シー達からマンティコアの退治の依頼

に近い忠告を受けた。しかし、先に領地侵犯を犯していたのがケット・シーだとしたら…」

これは僕の考えすぎだろう。単純にエサを求めたマンティコアがケット・シーの集落で暴虐を尽くしただけかもしれない。しかし、僕の推論も、確固たる資料がない今では否定しきれないことの事実だ。

「し、しかし…」

「わかってるよ、デンゼル。マンティコアに。ケット・シー達が襲われているのも事実だ。でも…この子はまだ無実だ」

「っ!?おい、キーランス!貴様まさか…」

「そのまさかだよ、ガラム。この子は、僕が飼う」

足元の幼獣を拾い上げ、赤ん坊や猫を抱くように両腕で包み込む。

「突然両親を失ったんだ。この子一人じゃろくに生きていけないだろう?どんな命だって、無下に消えていいものなんてないんだ」

たぶんわけもわからず、僕の両腕に爪を立てたり噛み付いたりしてくる。まだ顎の筋肉が発達していないのか甘噛みにしかならないのがやけに可愛らしい。爪でがりがりやられるのは…ちょっと痛いけど。

「成長したら…同じように人を襲うかもしれんぞ」

ガラムが理解出来ないような、苦い顔を向ける。まぁ当然だろう

な。

「そうならないように躾けるよ。万が一そうなってしまったら…僕が責任を持って処分する」

その万が一の時を想像して、少し胸が痛くなる。

「ふんっ！その女子供に甘いところが、昔から気に食わないんだ、キーランス！…お前ら！行くぞ！」

ガラムが悪態をついて踵を返す。いや、お前の任務は僕らの護衛だろうが。どこに行くつもりだ？

「…甘さに関しては我もガラムに同意だよ、主」

「何言ってんだ。ウラヴェリアの城で、なんのためらいも無く人蛇（ナーガ）の女を切り捨てただろうが」

「その後、ガンガン心が痛んでおったくせに。それに、そのときだけではないか？主が女子供を手にかけたのは」

「…性別とか特に気にしてなかったからなぁ」

まっいっか。とりあえず、森の奥に進もう。

～第六十一話～霜柱の共闘その２（後書き）

念の為、アキラが倒したシーンはやっつけではありません（笑）あくまで力の差を見せる為の瞬殺なので、あしかわず。…あと、ご指摘を受けた修正は明日必ずやります！後手後手ですみません…。

～第六十二話～デンゼルの失態と旅の道連れ（前書き）

溜まっていた修正、やっと消化しました。ここまで多いとマジで疲れた…。そして話数こないだ修正しますたって言ったけど、全然ずれっぱなしでした。なんというミス…。あと五十七話の『カリカリと減っている』の件で質問がありましたが、アキラの保有魔力と消費魔力を相対的に比べて、ガリガリまではいかないだろうなぁ…ということで軽めに伝わればとカリカリと表記しました。わかりづらくて申し訳ないですｏｒｚ

～第六十二話～デンゼルの失態と旅の道連れ

マンティコアの襲撃が終劇して、一路火山へ。本当は行きたくないんだよなぁ…。鳥苦手。

「ヤー！ヤー！」

上着の中に入れてたマンティコアの幼獣がひょこっと顔を出す。たぶんマ行とかナ行が発音出来ないんだろうな。唸ることは出来るっぽいけど。ベースが猫科だから愛くるしいことこの上ない。

「おー。腹でも減ったか？待ってろ、お前にも食えそうな物出してやるから」

バッグの中身をゴソゴソ漁る。たしか出立前にエリーから貰ったクッキーもどきがあった気が…あった！

「ほれ」

小さく割って口元に持っていくと、前足を使って器用に食べている。

「和むなぁ…可愛いは正義」

愛猫と一緒についでに僕ももそもそと食べる。この甘さは蜜か？わかっているじゃないかエリー。帰ったら頭を撫でてやろう。

「頭を撫でるのはいつもやっておるだろう」

「エリーが喜ぶならご褒美には変わりないだろ？元手もかからんし手間もかからん。低コストな実にいい子じゃないか」

「ふんっ！色ボケが」

隣…から少し離れたところを歩くガラムが悪態をつく。やっぱこいつ気に食わない。

「守る者がいる人間は強いんだよ、ガラム」

「綺麗事ばかり並べやがって。虫唾が走る」

「まぁ童貞にはわからんだろうな」

「どっ、どどど童貞ちゃうわ！」

はいはいテンプレテンプレ。

「許婚がいて、更に婚前交渉は禁止なんだろ？お前んち。情報は割れてんだ、無理すんな」

「大体一国を統べる王家の貞操概念がそんなに甘くてどうするんだ…。それもこれもあの男が国王になってから…」

「はいはい、これ以上は止めような？その不敬罪まがいの発言は僕の胸の中だけに留めておいてやるから。…貸し一な。いや、さっきの件も含めて貸し二だ」

「さっきのは俺様を侮辱したにも関らず、なんのお咎めも無しにしてやったんだ。プラマイゼロだ」

「僕がお前の矛を収めてやったんだろ？」

「主、まさかあの瞬間に〇ソミソテクニック的なやりとりがあっ」

「ねーよ！誰得だ。曲解しすぎだろ」

「なら今その下劣な指環と一緒に葬ってやろうか？」

「護衛対象を葬ってどうすんだ。馬鹿かお前は」

「貴様っ…！」

「ねぇルバート」

「どうしたデンゼル？」

副官二人が顔を見合わせている。なにやら小さくて聞き取りづらい。

「あの二人、実は仲いいんじゃない？」

「奇遇だね。俺もそう思ってたんだ」

なんでそこだけはっきり聞こえるんだよ。確信犯かお前ら。

「「断じて違う！！」」

…心外なことにハモりやがった。

「「真似すんな！！！」」

「……ハァッ…」

ダービー、溜息つきたいのは僕の方だ。

道中色々あった。また性懲りも無く僕に突っかかってきたガラムが、八つ当たりに蹴っ飛ばした木の根が実は木の根じゃなくてマンドラゴラで、運悪く抜けてしまいよもや全員死に掛けそうになるというアホなアクシデントがあったり、僕をして完璧超人（パーフェクト）と言わしめるあのデンゼルが簡単にドライアドの魅了（チャーム）に落ちかけたり、

「アキラさん、その話はホントもう止めましょう。全く…女性の色香にやられるとはどうかしてる…」

「その割にお前、ルバートが的確にこめかみ（テンプル）を殴るまでノリノリだったじゃん」

「あの…アキラさん…」

「まぁ、いーんじゃねぇか？僕とエリーだって種族は違うけど上手くやってるし。お前に木の中で何百、何千年も添い遂げる覚悟があるならな」

「勘弁してください…」

まぁ、一番アレなのはグレムリンどもだったけどな。最初はなんか着いて来る気配あるなぁ程度だったけど、一個体あたりの魔力が

小さかったから放置してたんだ。…と思ったら見事に嵌まったよ、落とし穴。なんと古典なと思ったけど、いざ嵌まってみると思った以上に深くて驚いた。つうか、自由落下だけで底に設置してある禍々しい物に刺さるレベルの深さ。流石に懐からマンティコアの幼獣…なげぇな。マンちゃんが…

「主卑猥」

黙れ。マンティコアなんて文字抽出したらそれだけで下ネタの出来上がりなんだから、妥協点を見つけるんだよ！…まぁマンちゃんが…

「それなら『黒いケルベロス』なんてどうだ？いい感じに」

邪気眼も影羅も求めてねぇよ！黒くねぇしケルベロスでもねぇし！とにかく腰を折るな！いいな！

「シュン…」

シュンとか声に出すなきめぇから。まぁ、なんだ。話を戻そう。マンちゃんが懐から飛び出そうとした時は血の気が引いたけどな。穴から這い上がってから二三匹拳骨かましてやったら、大泣きして逃げ出してその後は命に関るような悪戯はしなくなった。基本的に悪戯以上のことはしてこない連中だから、少しくらいなら目を瞑っていた。小動物可愛いし。…と思ったら賑やかなパーティーが出来上がっていたのは何ゆえ？何ゆえ懐いてるの？

「そのうち貴様の隊旗はグレムリンになりそうだな」

「…薄ら寒いこと言うなガラム。どこぞの熊本の対幻獣小隊だよ。

アレは猫だけど」

まぁ…なんだ。平和に進んでたんだ。この日までは。

「…で、なんで起きたらこんなとこにいるんだ？」

ボスに時間を飛ばされて無い限りは、今日はこの島に来て五日目のはずだ。そして四日目は森の中で酒盛りして寝たはずなんだ。グレムリンのチビどもが、夜用にチビチビ飲むために持ってきた酒樽にヒビ入れやがって、勿体無いから仕方なくハメ外すかと皆で飲み潰れていたはずだ。ここに着くにはまだ時間がかかるはずなんだ。

「なんで僕だけこんなとこにいるの？どう見ても火口付近なんだけど…」

ーーーブワサッ！ブァサッ！！

巨大な羽の音と共に、巨大な影が幾つか僕の傍に舞い降りる。目覚めた時はお天道様は高く昇っていたのに、夜と言われても納得出来そうなくらい辺りが暗くなった。うん、悪い予感しかしない。

「主、腹を決めよ…現実を受け入れなければ待つのは雛のエ…」

「雛とか言うなあああああああ！！！」

もう勢いついでに見上げてやる。見上げてや…る…。

「あっ…え…」

想像以上の迫力だった。この島に到着した時に見えた物についての確信。ロック、サンダーバード、不死鳥…全部、今目の前にいるでっかい鳥の呼称だ。…鳥ではないけど、ケツァコアトルがいなかっただけマシか…。マシだと思いたくない…。だってさ、だってさ…。

「エグッ…えぐっ…」

「大の大人が泣くな主」

彼〇島から脱出しようとした時の海にいる邪鬼みたいにズラッと並んで見下ろしてるんだもん！！こえぇよ！マジこえぇよ！！つうかなんでロック鳥もサンダーバードも量産型なんだよぉ…。うわあああああああん！！ガラムでもシーリカでもカイムでもグレンでも、この際鳥大好き香奈子でもいいから助けてくれよおおおおおおおおおお！！！！

～第六十二話～デンゼルの失態と旅の道連れ（後書き）

いや、実際買った資料のサンダーバードが、こんな感じでマジこえぇんです…。量産型は後付けですが。あっ！そういやダービーみたいなオリジナル神器とかアイテム武器出すかもって最初に自分で言ったやん！ヘル・ブリングを無銘の大剣くらいしか出してないじゃん！！ガラムの武器そうしとけばよかったんだ…ｏｒｚあと、マンティコアの鳴き声がたけしのこじろーみたいになってますな。偶然です。後書き書きながらふと気がつきました。

～第六十三話～八時でもないのに全員集合（前書き）

白オです。前話修正しようと確認したら、後書きまで誤字ってました。流石にそこまでは面倒見きれないぞ…。全部確認するのは大変めんど…時間がかかるので、このまま続けようと思います（笑）

～第六十三話～八時でもないのに全員集合

「…」

「……」

「……」

「…どうする？ダービー」

「主のことは主が決めよ」

ただいま、鳥（で出来た）籠に軟禁状態です。神谷晶です。どうしてこうなった…。

「そうやってナレーションして現実逃避するのは、初めてこっちの世界に来た時以来だな」

「現実逃避もしたくもなるさ」

何をするわけでもなく、ただ黙って見下ろしているのが逆に怖い。ただでさえ苦手な鳥の顔が頭上いっぱいに広がる…上位ランクの戦闘力を持つ化け物どもと相対してるよりまだ怖い。もう古代竜最強と名高い赤竜（ファイアー・ドラゴン）とサシで戦うから勘弁してくれ…。

「なんでこんな怪鳥いっぱいいるんだよ…不死鳥だってグレンとこのレーヴァテインになってんじゃないのかよ…」

「いつから私が一体だと錯覚していた？」

「しゃべった!?そしてそのセリフはオサレ大先生のとこのヨ○様…もとい○染!なるほど…つまりこれは斬○刀鏡花水月の能力か…。良かった、鳥なんていなかったんだ。よーし、パパも天鎖○月で頑張っちゃうぞー!」

「…悔いはないよう全力でボケきったか?」

「いや、お前が目の前にいるってことはまだ完全ではない」

「主…もう諦めよ」

ダービーの心の溜息が聞こえるが、全力で無視する。

「まだ挨拶が済んでなかったな。はじめまして、人間よ」

「いや、グレンの剣で一回会ってる」

「だから主…」

「やだ!全力で拒否する!」

「あれは私の旦那だ。私は不死鳥♀。生と死、永劫の営みを司る神鳥の片割れだ。旦那がそちらでお世話になっているようだな」

意外に礼儀正しい鳥に思わず面食らう。

「私の旦那の主は一緒ではないのか?」

「えー…と。今回は僕ともう一人だけです。こんな事態になるなら

ボコしてでも連れてきたかったんですが…」

「そうか…かれこれもう四百年も会っておらんからな。流石の私も寂しくて毎晩一人で慰めて…」

「聞きたくない！そして初対面の人間に、そんなことカミングアウトするような鳥を僕は断固として火の鳥だと認めない！手〇先生に謝れ！！」

「まぁそう熱くなるな。お主が熱くならなくても私のそこはもう充分熱く…」

「五月蝿い淫乱鳥！お前はダービーと同レベルか！」

「どれ、不死鳥の。少し尻をこう…」

「お前は何を言ってるんだダービー！」

ハァ、ハァ…疲れた。意味も無く色々疲れた。つうか反動で張り詰めてた色んなものが断裂した。こら、見下ろしてる鳥ども。なに若干赤くなってんだ。なに不死鳥の後ろに乗ろうとしてるんだ。

「お前らいい加減にしないと焼き鳥に…」

…出来なかった。僕土属性だった。思わずツッコミ用に出した輝くトラペゾヘドロンが所在無く彷徨う。…どうすっぺ、これ。

「「「ゲギャーーー！！」」」

「おお！？こえー！何なんだよ一体…」

数羽のロック鳥とサンダーバードが飛翔する。

「拙いぞ人間！そなたが出したその剣の魔素に当てられ、我を見失い興奮しておる！」

「えぇーーー……酷い」

「元々知性も理性も持ち合わせてない連中。そなただけさらって来たのも、単にエサとして上等な質がありそうなそなたを本能で選んだだけであろう。謝罪する」

「エサとか言うなあああ！！謝罪するなら何とかしてくれこの状況」

「一羽ならまだしもこうも多勢だと…つうかいつの間にか全羽飛んでおるな」

なんかもう生気が抜けた目で上空を見てやると、エ○ァシリーズみたいに円を描いて飛んでいる。うわぁー…大丈夫だよね？あの赤い汎用人型決戦兵器みたいに串刺しにされたりとかしないよね？ロンギヌスの槍とか持ってないよね？…とか考えてると、ふと一羽が姿を消した。

ーーー……ボアアアア！！！！

反射的にその場から跳躍したから助かった。消えた一羽のロック鳥が、音速を超えて僕に特攻してきたようだ。風切音が巨大な物体が僕の隣を横切った直後に聞こえる。

「ってぇ……っ！？」

ロック鳥はあまりに巨大だ。その巨体をかわせても、音速を超えたそれから生まれる衝撃波の範囲から逃れることは出来なかった。まともに喰らい、強かに岩に叩きつけられる。そして今度は更に高速…サンダーバードが強襲する。今度はかわすことすら出来ず、体当たり…つうか轢かれて体が上に跳ね上げられる。

「これがホントの疾風迅雷…サンダーバードの名は伊達じゃねぇな」

「主！関心している場合では」

「わかってる！」

ここは火口付近。それなりに標高が高く、このままではそのまま鋭角な岩肌の斜面を滑落する。それだけはマジで洒落ならん。鍛えてるとはいっても限度がある。肉体の強度は常人のままだ。

「ガルーダぁ！！」

先の予想を大きく上回り、眼下に木が生えれることが出来る位の標高が低い森林地帯が見えたところで、こちらも飛行ユニットを召喚する。ゆっくり元の火口まで戻ると、ガルーダの翼をしまう。鳥相手に空中戦を挑むほど馬鹿ではない。

「つうか、不死鳥が助けてくれれば良かったんじゃ…」

「私は二度目の死から絶賛蘇生中だ」

見てみると、さっきの衝撃波から受けたダメージか、半身を失い

それを復元している最中だった。

「つうか二回死んでたのかよ!?アホなことやってるからだ、マヌケ!!」

一通り言いたいこと言ってやった後、輝くトラペゾヘドロンを地面に突き刺し、心を落ち着かせる。

「ゲギャ!ゲギャギャ!」

うるせい。ゴブリンみたいな鳴き声出しやがって。自分らは飛行タイプのポケモンだから地面タイプの技は効かないってか?

「主、アレのどこがポケモンだ」

「ちなみに日本での正式名称はポケットモンスターだけど、欧米ではそのままポケモンになっている。何故ならポケットモンスターとはいわゆる隠語で、それが意味するものはちん…」

「いい加減集中しろ!」

「しとるわ!!こう見えて!」

仕方ない。とっておきを試すしかないか…理論上は出来なくはないんだけど、これをやると他の魔術師の立つ瀬が無い上になんでもありじゃないかと読者の皆さんからクレームの嵐が予想…

「来るぞ!」

「もうかよ!!」

二三、ロック鳥が消えたのが確認出来た。数テンポも間を開けないで、やつらは特攻してくるだろう。土属性は効果なし。召喚魔法も、あれほどの威力を持った相手だ。マドラのおっさんのミョルニルのように押さえつけるには無勢過ぎる。多角攻撃されては効果なし。嘴きっと痛いし。よって有効とは思えない。時属性も、それだけであの破壊力を抑える力を行使した場合世界に与える影響は想像出来ない。加速でも長時間、停滞や遅延も効果範囲を広げざるを得ない。どうなるかわかったもんじゃない。つまり限りなく詰みに近い状態だ。…なら、ちょっとチート能力を黙認してもらうしかない。じゃないと死ぬ。

ーーースゥ……

目を瞑り、更にコンセントレーションを高める。生死が関る状況で更にぶっつけ本番のとっておき。こんな背水の陣では、今更隙を作ろうと大して変わらん。魔力を自分から少し広げ、陣を敷くように充満させていく。

「主！力が暴走しかける！止めろ！」

「どっちにしろ…出来なきゃ死ぬ可能性大なんだ」

土属性のアビリティを駆使し、周りの空気中の分子をサーチ、ロックオン。時の魔法である空間の分子は振動を加速させ、別の空間の分子は振動を停滞させていく。空気の対流が生まれ、気流が出来る。

「荒ぶれ！空の竜…竜巻！！竜が、鳥ごときに負けるか！！」

僕を中心に現れた竜巻に、ブレーキが利かない数羽が飲み込まれ、羽を散らして吹き飛ばされる。異変に気づいた残りの鳥どもも飛び込むが、弾き飛ばされ到底僕に辿り着けない。

「主！目が…」

無理やり他の属性の領分に割り込んだ為に、体の方がやられたようだ。開けた目からは、血の涙が流れる。視力は失ってないが、若干血でぼやけている。まぁ精度はともかく、火足す氷で風を作り出すという、これだけで三つのの属性分、更に時属性をかなり強いた魔法だ。仕方ないだろう。グレンとガラムとシーリカが知ったらどうリアクションするか楽しみだ。…つうか、とりあえず成功…でいいのかな？

「肉体的負担を考えると、なるべく使わない方が良いだろうがな…」

「まぁまぁ。おー…竜巻の中で雷まで出来てら。デンゼルも唖然とするだろうなぁー」

粉塵を巻き込み視界が完全にシャットアウトされ、竜巻の外の様子が確認できない。…こりゃ改善の余地があるな。

「でもさ、ダービー…」

「なんだ？」

「竜巻にも穴はあるんだよな…ゴクリ」

「たわけ」

そう、竜巻は空気の渦。そして渦には必ず『目』がある。だから僕が無事なわけなんだけど…。それにあいつらが気づいたら、どうすっぺ。

「むぅ!?主!!」

ダービーの声と同時に、竜巻の天井が暗くなる。クッ!こんなに早く気づかれるか…。そして暗くてよく見えないそれは、僕に急降下してきて…。あっ、僕死んだかな。

ーーーズシャアアア!!!

竜巻が霧散した。っということを確認出来るということはまだ僕は生きている。頭上から降ってきたそれは僕から数十センチずれたところに降り立ち、金という言葉ではまだ足りない…金色の羽を広げそこに鎮座していた。

「ほ、鳳凰…そなたか…」

鳳凰!?また猛禽!!?状況悪化したーーーー!!!

～第六十三話～八時でもないのに全員集合（後書き）

すみません、展開に無理がある回でした。陳謝。

～第六十四話～本当の敵（前書き）

白カカオです。私の生活に平穏の二文字はないようです。ということでばたばたとしてて更新できませんでした。申し訳ない…。

～第六十四話～本当の敵

「お主…キュートスのアキラだな？」

「えっ？あ、あぁ…」

いきなり現れた猛禽にいきなり名を呼ばれて。思わずあいまいな返事をしてしまう。なんで名乗る前に僕の名前知ってんだ？

「…久しいな、大鵬」

「よせ、指環の。その名は伏義と女？が消えた時に捨てたよ。今は鳳凰と呼んでくれ」

「待てダービー。なんでこいつを知ってる？」

さも当然のように旧知の知人と会話するようなこの空気。つうか間違いなくこいつら知り合いだ。僕はその経緯を勿論知らないから、当然のように聞き出す。

「主、大鵬…鳳凰は瑞獣だぞ？神を束ねる我が知らないはずがないであろう」

「そもそも瑞獣から説明して欲しい」

「それは我輩が答えよう」

ちょ！閣下！！まさかの自称が閣下！？

「十万飛んでなどと生温い寿命ではないぞ？我輩は」

「オゥフ！読まれてる！」

「瑞獣とは、全て生き物の長。そして吉兆をもたらす神。その代の人間の統率者が生誕する時、我輩らの同胞が天を翔ければその朝廷は栄えるという。…もっとも霊亀は飛べんがな」

「あーあー、そういやちょっと勉強したな、鳳凰と麒麟と応竜と霊亀だろ？今思い出したわ」

「左様。そしてこの…お主らがアララギ島と呼んでおるこの島は、霊亀の背中だ。こやつは元来のんびりしとるからな…休憩している間に土が積もり、生物が棲みついたのだ。ちょうどいいので、我輩らもここを宿り木代わりに使っておるのだ」

「休憩で島になるって。スケールでかすぎだろ…。でもさ、ここ火口じゃん？火口ってことは火山じゃん？霊亀って水のはずだろ？」

不死鳥が隣でうんうんと頷いているが、こいつたぶん何もわかってないな。

「主。アレは主とグレンが起こした物と同じ魔道爆発（フレア）だ。極々小規模に限定した、な」

「そう。それこそが霊亀が未だに健在だという何よりの証拠。そういや煉獄育ち…あやつもあの時そのアキラと一緒に起こしたのであったな」

「待て。尚のことおかしい。それだと水系の瑞獣の霊亀の魔素とい

うのがますます説明つかなくなる」

なにやらまだ繋がりがありそうな話を全力で僕に引き寄せる。これ以上余計な情報は今はいらん。

「主。魔素とはそもそもは魔法の純粋な構成要素でしかないのだ。あの時主が起こしたフレアは、ただの主の資質が周囲の魔素を瞬間的に吸収、爆散させたに過ぎん。燃焼を伴わないただの衝撃波だ。しかしグレンの属性は火であろう？主と同じく…いや、あやつは己自身のみの魔素を爆散させたため、グレンの魔力＝火属性＝燃焼を伴った爆発と周囲が認識してしまった。よってあのような事態になったのだ。魔法とは意識、イメージ。世界の共通意識がなしたものだ。主もあちらの世界の堅物どもにそう説明したであろう？」

まぁなんとなくはわかった。外的要因で、白にも黒にもなるのね。でもそうなると、

「なんで僕のは土なり時なり顕現しなかったんだ？」

「土の爆発なぞ、軍で一番頭が柔軟な主が頑張ってイメージできなければ、起こりうるわけなかろう。その主が無意識にやらかしたことだ。それに時属性のフレアなぞ起こしてみろ。時間流入や流出、跳躍に退行などいっぺんに起きて世界そのものが無に帰すわ。ちなみに緑竜の最期のアレ。アレもあやつの命をかけたフレアだ」

周囲に融解毒を撒き散らしたアレか。なるほど納得。つうか時のフレアで世界崩壊とか洒落なんねぇな…。たぶん意識的にやるもんじゃないから、なるべく時より土を優先させるように思考回路を構築する必要があるな。

「…で、アキラ。あれが霊亀の魔素というのはわかったな？」

「うん。ここが『亀』じゃなくて『島』っていう共通概念で、霊亀の魔素の吐き出し口が火山みたいになったってことだろ？」

「正解だ、主。相変わらず、一度概念を頭に入れれば理解が早いな。ちなみにランゲルハンス島は島ではないが、皆の認識が島という物に染まってしまうと…」

「別に体組織はかわらねぇだろ！つうかランゲルハンス島とか高校の生物の授業だわ！どーでもいいし！！」

「…して、そなたは何故ここに来たのだ？珍しい」

不死鳥が話しについてこれないのか、鳳凰に話を振る。たしかに…。

「なに、古巣に帰るのに理由がいるのか？…ということではなく、我が領域内に最近感じた特異な魔力を感じたのでな」

「最近感じた…？あぁ。お前」

「おったよ、大陸に。そして、お主らが何をしたかも知っておる。お主、あの吸血鬼を倒した時に四神の陣を敷いておったろう？」

「あ？あぁ…」

いきなり鋭くなった鳳凰の眼光に、思わず気圧される。こえぇよ…鋭い目を鷹の目とかよく言うけど、実際向けられるとこんなに迫力あんのな。しかも鷹どころか鳳凰だし。

「たしかにお主、金色の守人、隠者、煉獄育ちの四大元素持ちの四人で繰り出すあの陣は強力無比だが、なるべく控えた方がよい」

「ふぇ？」

「強力な技とは、すなわちそのまま周囲に与える影響も大きい。そしてお主らは世界の歴史…全ての次元、時空…遥か彼方創世より変わらぬ重要人物。それを知り、お主らに気づいて利用、排除しようとする輩も鬼のようにおる。…まぁあの大陸の、ギランと言ったか？その者どもとお主らが敵対しているのもそのような所からなのだが…。今までは覚醒者もほとんどおらず、ギランの連中も本能から来るただの縄張り争いくらいにしか考えてなかったのだが、今はもう気づいておる。お主ら初まり（スターターズ）の者たちの存在に。そして指環の。ギランにてお主の主らのことを、理性で認知しうる者…心当たりあるな？」

「……七つの大罪（セヴンス・デッドリー）ども…」

急にダービーから、歯軋りのような気配と共に強い殺気を感じる。七つの大罪…暴食、色欲、強欲、憤怒、怠惰、傲慢の七つのヒトに科せられし罪…。

「勿論アレんも健在だ」

「アレ？アレってなんだよ」

「原初の世界…ココルが死せる遠因を作り、主…ノア＝キーランスを死に至らしめた、許されざる我の最大の敵！ベヒモス…マモン…！」

不意に、ダービーの心中と共に僕の胸もざわついた。

～第六十四話～本当の敵（後書き）

寄り道しながら書いたら、結構な時間がかかってしまった…。いや、必要資料読んだりですよ?その結果片付けの最中に懐かしい本を見つけた時のような脱線が始まり…。もっと投下時間早くできたはずでした。すみません。トイレ行くの我慢しながら書いたんで勘弁してください。

～第六十五話～スクランブル（前書き）

最近週一ペースで申し訳ない、白カカオです。ニコニコの準備とか同窓会とか人間関係とか色々ありました…。現実逃避でおもいではおっくせんまん聴いて涙出てきました（笑）

～第六十五話～スクランブル

「…そろそろ出てきたらどうだ？」

鳳凰が僕の後方に向かって声をかけた。山肌の影から、ぞろぞろとガラム率いる前衛第一部隊と後衛第三部隊が現れた。

「お前ら、何時の間に…」

「朝起きたらアキラさんがいないもんで、魔力探査と風魔術師の追い風（プスピード）を使って来ましたよ。強力な魔道反応を感じて心配してきたら、大きな鳥と雑談ですか、全く…」

「こいつとこの周囲の有様を見て感想がそれか。全く、時々お前が怖いよ」

「それは褒め言葉として受け取っておきます」

デンゼルの後ろを見ると、僕の部隊の風魔術師が肩で息をしている。まぁこの人数全員に補助魔法をかけたんだから当然か。苦労かけたな。

「ちなみにガラム部隊長も、こう見えてなかなかの狼狽っぷりでしたよ」

デンゼルがニコニコ…というよりニヤニヤしながらガラムを見やる。

「ばっ！…俺の任務が、こいつのポカのせいでしゃかになることを

恐れただけだ」

「はいはいツンデレツンデレ」

「貴っ様…」

「ところでアキラ様。先ほどからシーリカ様から伝令が繋がっておりますが」

「お前っ！早く言えよ！」

とりあえず鳳凰と不死鳥を置いといて、ルバートが取り出した水晶…のような玉を受け取る。これは中に雷属性が封されていて、魔力の増幅や指向性を高める効果がある、なかなかのアイテムだ。

「はいはいどうした？」

友人との電話のように適当な対応をする。仕事という意識が感じられないのはほっといてくれ。

『はいはいじゃないわよ！こっちに今すぐ戻ってきて！東の平原に不自然な魔道反応があるの！アンタの任務は今これを聞いた時点で終了！そっちの調査に入るわよ！』

「全く、人使いが荒いと言うかなんというか…」

『文句言わないの！セラスにとっては勿論だけど…私達にとっても大変なことになりそうなことだから…』

シーリカの声から必死な様子が伝わる。なんだよ矢継ぎ早に…休

ませろ。

「それは…どういうことだ？お前さんが『私達』ということは、我らに関係あることなのだろう？」

『あっ！ダービー！？アキラより貴方の方が物分りよさそうね。ちょっと待ってて』

玉の向こうからガサゴソと音がすると、密談モード…というべきか、周りに聞こえないように音声を僕らだけに向ける。これもこの玉の機能なのだから驚きだ。科学が発達しないわけだ。

『さっきは他の部隊員がいるだろうから説明をぼかしたけど、ここからはトップシークレット。魔道反応の正体は、たぶん新たなゲートだと推測されているの。そしてその付近から…見覚えのある魔力の気配が感じられたわ』

「見覚えのある気配？」

「チッ！空気が読めねぇのか貴様は。部下どもに聞こえるだろ」

「あっ、ごめん…」

『色欲のアスモデウス、ベルフェゴール…』

「……あいつらか…！！」

ガラムの表情が険を帯び、若干魔力の放出が見られる。なぁ、なんでこいつこんないきんでんだ？

ーーー…主は他の者と比べて、まだフィルターのかかりが強いようだな。七つの大罪ども…やつらは主達がいた原初の世界の崩壊の直接的な原因を作ったとともに、主ら初まりの者たちに深く因縁を刻み付けた。『色欲』のアスモデウス、ベルフェゴールの二人…やつらのせいで、ガラムの家…ヘラクトドス家は没落したのだ。

ガラムの家が没落？公爵家だったか？

ーーーあぁ。最も有力な家系であったヘラクトドス家に侵入したやつらが当時の当主…ガラムの父を唆し、神器戦争の引き金を作ったのだ。戦時は一応有力氏族として前線から離され庇護を受けていたが、戦争が終結した後、ヘラクトドスは民衆から糾弾を受け、ガラムなど子息の誰かに相続する前に自殺。その魂はイスカリオテにて地獄の最下層、コキュートスに導かれたと言う。

当主を背信の徒としておいやられ、ヘラクトドス家は没落。戦後でインフラも整わない内に民衆の手によって最有力の権力者を失った世界の中心の国は自ら崩壊の道へ…か。まぁ、背信って言っても、別に何か信仰があったわけではないだろうけど。

ーーーその通りだ。つまり『色欲』の二人は、ガラムにとって前世からの倒すべき怨敵というわけだな。…我らにとっての『強欲』のベヒモス、マモンのようにな…。

ちなみに、他のやつらにもいるのか？そういう敵が。

ーーーすまん、我の記憶もまだ完全ではないのでな…。

『ちょっとアキラ！聞いてる！？』

「おっ、おう！聞いてるぜ？」

『じゃあすぐ戻ってきてね！今日中に！』

「今日中！？」

ーーーブツッ！

無理難題押し付けて勝手に通信切りやがった。ここから海岸まで、どんなに頑張っても一週間近くかかる。風魔術師の疲弊具合を考えると、まぁそれくらいが妥当なラインだろう。そこから今度は小舟で二日。来る時はバハムートに引っ張って貰ったからすぐ来れたけど、人力では流石に速度に限界がある。土属性と雷属性の肉体強化をかけてもそれくらいが精一杯だ。更に航海中に襲撃を受けることも考えるとさらに延びる可能性があるし…どんなに頑張っても半月はかかるぞ！？それを一日て。無茶にも程があんだろ。

「…何をしている。早く行くぞキーランス」

「…だな。半月かかる道のりだ。早く出るにこしたことはないか」

「何を言っている。一日で充分だ」

「…は？」

何を言ってるんだこいつは。アララギからキュートスまで、どんなだけ時間かかると思ってるんだ。こんな計算もできないのかこの貴族様は。

「おい鳳凰！」

「なんだ、ヘラクトドスの坊よ」

「…まぁいい。俺らを乗せてけ。ロック鳥やサンダーバードどもにも指示を出せ。今日中に俺らをキュートスに運ぶのだ」

待て待て待て！いきなりナニヲイッテン…

「仕方ない。大罪人どもが関っている以上、それくらい力を貸そう」

「えぇーー！？いいの！？」

「アキラ、貸し一だぞ。その代わり、数百年ぶりに旦那の顔を見せてくれ」

鳳凰の隣に侍っていた不死鳥も同調した。お前はそれが目的か。

「…ふぅ。なんか他に手段もないか。総員、搭乗準備！整い次第至急キュートスに向かうぞ！」

～第六十五話～スクランブル（後書き）

出勤前なので、半端ですがこれでご勘弁を…。次話は、きちんと時間取って書きます。

～第六十六話～招かれざるインベーダー（前書き）

ども、読者さん。ども初見さん。白カカオです。これを書き始めてから四ヶ月経ってました。最初のペースを貫いてると軽く百話いってそうな感じでびっくりしてます。歌、上手くなりたいです。

～第六十六話～招かれざるインベーダー

鳳凰の背にガラムが乗り、不死鳥の背中に僕が乗り、一同キュートスへ。帰りにケット・シーの一族にマンティコアのことを報告するのを忘れてたことに気がついたけど、まぁいいやと開き直って不死鳥に意識を向ける。なんか息が上がってるし、やっぱこの速度で飛ばすのは疲れるのか？

「なぁ、大丈夫か？不死鳥」

「なに、全く問題ない…ふぅ」

「いや、やっぱ無理してんだろ？回復かけてやろうか？」

「いや、数百年ぶりに殿方に乗られていると考えると…」

「クソ変態かお前は。僕は降りてガルーダ使うぞ」

「いや、嘘だ。私に乗っててくれ」

その乗るって単語に他意を感じるんだよ！…まぁいい。僕は寝る。羽毛でふかふかだから寝心地いいし。

「ミャー」

僕の腕の中に戻ったマンティコアがごろごろと顔をこすりつける。ああ、癒されるなぁ…。おやすみ、マンティコア。

「ニャー！ミヤー！」

わかったわかった。ダービー、相手してやれ。

「我は今指輪だぞ…」

うん、知ってる。おやすみ。

「ダービー、今何時だ？」

「こっちに時間の概念がないから何とも言えんが、日の傾き方から言ってだいたい夕刻四時くらいか」

気づくと、眼下にセラスの大地が広がっている。この速さだと、キュートスまであと三十分足らずか。あくまで体感だけど。

「なぁ不死鳥！キュートス国の手前で降ろしてくれ！グレンも呼んでやっから！」

「お主の温もりを感じられるのもあと僅かか…後ろ髪が引かれる思いよ」

「お前の後ろ髪ってどこだよ。つうか気色悪いこと言うな。覚えてるか？元々僕は鳥嫌いなんだ」

「女の子に向かって気色悪いとはなんぞ。私は今悲しみの炎に身を焦がされて…」

「おい馬鹿！やめろ！僕が焦げる！！」

こいつ、自分が不死鳥だってこと忘れてやがる。抑えていた不死鳥の身に纏われた炎が一気に炎上しやがった。熱いよ馬鹿！！
それから数分後、キュートス国手前についたんだけど…。

「迎撃体制用意！！！」

ちょっと待て！着陸する手前不穏な声が聞こえてきたぞ！？

「後衛騎士団第二部隊弓兵配置完了しました！」

待て待て待て！！勘違いされとる！！僕僕！！敵違う！！

「待て！僕だ！後衛魔術師第三部隊長のアキラだ！！」

「えっ…」

いまの声はジュダイさん！やっと見覚えのある声が聞こえた！よし！これで勝つる！

「ブ〇ント自重」

「ちゃんとさんをつけろよ馬鹿指環」

「ふん！助かったと思ったらその気の抜きようか。よくそれで生き残れたもんだな」

「お前とは鍛え方が違うのだよ、貴族様」

「きっさま…！」

ガラムが鳳凰から飛び降りて、ゲイボルグを構えやがった！馬鹿！ゲイボルグ級の武器を構えたら…。

「「「ギェヤーーー！！！」」」

ほら！ロック鳥とサンダーバードが騒ぎ出しやがった。まだ乗っている部隊員達が振り落とされている。まぁほとんど高度がない状態まで降りてたから、大した怪我はしないと思うけど。

「全員整え直せ！！」

「待って待ってジュダイさん！」

「おいおい敵襲かぁ？」

もんのそとからおまつりおとこがあらわれた！

「グレン！ちがっこれは…」

僕が言うまでも無くレーヴァテインを構えるグレン。だから人の話を聞…。

「やめなさい！！！」

不死鳥からこいつとは思えない声が聞こえる。その途端、暴れていた鳥どもが一気に大人しくなった。

「えっ…」

待て、お前火口のときこれだけの人数はどうのって言ってなかったか？

「ご息災でしたか…貴方…」

不死鳥がグレンに顔を向け、懐かしそうな表情を浮かべる。あぁ、なるほど。

「アキラ」

「ん？」

「帰って来て早々悪いんだけどさ…」

「あぁ、コレ？こいつ、お前のレーヴァテインの不死鳥の嫁だってよ」

不死鳥の背中から飛び降り、親指で鳥を指してやる。

「長い間、寂しい思いをさせた、お前。変わりなかったか？」

グレンのレーヴァテインからいきなり声がする。僕とグレンが驚く前に、

「嗚呼、四百年ぶりの貴方の声…！それだけで私の下半身は…」

「全年齢向けだっつったろ馬鹿鳥！！」

思わず突っ込んでしまった…。

「ふっ、今夜は我の剣がお前の…」

「乗っかるなこの馬鹿剣！」

グレンがレーヴァテインの腹を門の壁に叩きつける。よくわからないけど、アレは痛そうだ…。そしてグレン、グッジョブ。

「あぁ！貴方！」

「うっさい！！」

「なるほど…客観的に見て、我もああいう扱いを受けていたのだな。主、これからはもっと我を」

「却下。お前もアレも自業自得だし」

「ねぇ、俺らの武器もああなのかな…」

「知らない。…考えたくない…」

ようカイムにシーリカ。どうしたそんな疲れた顔して。

ここは会議室。議題はシーリカの言っていた例のゲートの話。集まっているのは隊長格ばかりで、副官すら人払いされている。ちなみに僕がアララギ島に行ってる間、カイムは後衛魔術師団第四部隊長に昇格している。だからなんで僕がいない間に事が進むんだ…。

「して、シーリカ。東の平原の現状を報告せよ」

「はい。現在もゲートは拡大中。東の平原の民に、避難勧告は出されていないようです」

円卓に姿勢正しく座るシーリカが、神妙な面持ちで報告する。

「待て、ゲートってせいぜい人一人分の大きさじゃないのか？」

「それは、アキラが来る時のゲートでしょ？ゲート自体は、大きさは不定形なの。石ころサイズから、文化交流の時に国王様と大臣が作った人数人なら余裕で入るくらいのサイズまで…。でも自然発生型でここまで大きくなって、まだ成長し続けているものって…」

「…あいつらのテコ入れだろうな」

国王が眉間に皺を寄せて苦々しく口を開く。こうして見ると、迫力あるんだな…。

「あいつらと言うと…」

ジュダイさんが聞くと、セラトリウス団長が国王の代わりに答えた。

「七つの大罪（セブンス・デッドリー）…ギラン側を支配し、我らにとっての最大の敵じゃよ」

団長の言葉に、カイム、シーリカ、ガラムが下を向く。なるほど、こいつらは因縁をしっかり見据えてるもんな。でも、こいつらの敵が誰なんだろう？

「七つの大罪…傲慢のルシファー、ベリアル、憤怒のサタン、アラ

ストル、嫉妬のレヴィアタン、ベルゼバブ、怠惰のベルフェゴール、アスタロト、リリス、強欲のマモン、ベヒモス、暴食のベルゼバブ、モロク、色欲のアスモデウス、ベルフェゴール。計十三名からなるこの世界の闇を司る者達だ。まぁ…こやつらに関しては、君達の方が知っているだろう?アキラ君、シーリカ、カイム。グレンにガラム?」

突然国王から名前を呼ばれ、僕ら五人が一斉に顔を上げる。

「国王!!それは…」

「もう、いい頃合いじゃないか?大臣。彼らは、この国の…世界を守る為に重い使命を背負っている。彼らの負担…我らも幾分でも背負わせてもらおうとは思わないか?」

「しっ、しかし…」

「それとも彼らのような若者が、身を裂くような思いをしておるのに、みな任せて我ら年長者は胡坐をかいておればいいのか?」

「うぬ…」

「もういいだろう?セラス南部の湖より封印を解かれ、今この城にある預言書『ナコト写本』。これに書かれた『原初より生きとし、そして継がれし魂。すなわち初まりの者たち。六人が再び集いし時、再び聖と邪の戦が起こるだろう。その者達、深き痛みと共に地に堕とさん』…初まりの者たち、スターターズ…。君達のことであろう?神なる神器に選ばれし五人よ」

会議室を静寂が支配する。これは…何とも居づらい。

「大変です！」

長く感じた静寂の時間は、けたたましい扉を開ける音によって壊された。

「貴様！立ち入り禁止を書いてあるだろう！！」

「申し訳ありません！カルバン団長！しかし火急の…」

「よい、話せ」

「はっ！」

国王の許しに、下級騎士が片膝をついて報告する。

「東の平原より報告！ゲートが開かれました！中から黒尽くめの人型の軍勢が攻め込んでいます。平原の長、九尾を筆頭に迎撃しておりますが、やつらの妙な遠距離攻撃により確実に削られております」

「妙な攻撃…？」

「はっ！魔法ではない物理攻撃のようですが…これが、回収してきた物です」

下級騎士が国王に何かを渡す。不意に悪寒が走り、急いで国王の下に寄る。

「アキラ君？」

「これは…」

国王の手のそれを覗き込み、戦慄した。なんでこんな物がここに落ちているんだ…。

「アキラ君…？何か…」

「九ミリパラベラム…これは…僕の世界の武器です…」

そんな…なんで…。

「主！落ち着け！」

「僕の世界の人間が…何で…」

「落ち着け！主のせいではないだろう！？一旦落ち着くのだ！」

「どういうわけかはわかりませんが…アキラ君には悪いですが私達の世界が侵略されていることに変わりはありません」

「カルバン団長！？」

後衛騎士団第一騎士団長になったアレンさんが制止してくれるが、僕の為とわかってても他人事にしか聞こえない。思考が追いつかない。

「全騎士団長に告ぐ。これより東の平原にてセラス防衛戦を行う。至急準備せよ！」

～第六十六話～招かれざるインベーダー（後書き）

お詫び。七つの大罪を冠する悪魔に関しては、オリジナル要素を多分に含めます。あと9ミリ弾を出しましたが、ミリ系に関してそこまで明るくないです。まぁ創作ということで許してください。

～第六十七話～咆哮、血煙、悪意の嵐《前編》（前書き）

ども、白カカオっです。失調してます。色々と。しばらく週1…よくて2くらいのペースに下がってしまうかもしれませんが、楽しみにしていただけると幸いです。

～第六十七話～咆哮、血煙、悪意の嵐《前編》

バタバタと城と軍部施設が跳ねている。ベイン国王就任以来…いや、キュートス国建国以来の緊急事態だった。セラスはギラン側には防衛線を展開しているが、内側からの攻撃にはめっぽう弱い。まして、襲撃があったのは夜間。電気が無いこの世界は、太陽と共に一日のリズムがある。冥の刻は、こちらの世界の住人でさえ不死族を筆頭とする魔族に警戒して外出など規制がかかる時間帯なのだ。それを打ち破る宣戦布告のなき大量虐殺。これが、今東の平原に起こっている事実だ。それもその相手は、アキラの故郷…マテリアルの住人。

「アキラ！」

シーリカが手を引っ張っている。しかし僕は動かない。…動けない。ちょっとやそっとの展開なら慣れた。エリーとダビデの六星環…ダービーに出会ってから、僕の日常は異世界になった。そして僕も、この世界の住人になることを受け入れた。向こうにすんでた頃の僕にとってそれは、いつか夢想していたファンタジーの世界との邂逅。初めは多少は混乱もあったけど、それでも僕はこのファンタジーの世界に溶け込んでいた。そこには科学も、環境破壊もくだらない国家の威信、利権をかけた戦争、差別も無い…美しい世界だった。

でも…この銃弾はそれを全て打ち砕いてくれた。僕の世界の汚い部分が、この美しい世界を陵辱しているという事実を、まざまざと見せつけた。侵食、侵入、汚染…この世界に、僕の世界の汚いところが持ち込まれた、証だった。

だから僕の脳は動かない。僕はニンゲンで、この国のみんなはエルフ、襲われているのは獣人で、このセラスの同胞。そして襲って

いるのは僕の世界のニンゲンで、つまり僕の同胞…。僕と同じ血が流れているニンゲンが、僕の守りたい者達…その僕が守りたい者達が守ってきた者達を蹂躙している…。眩暈すらしない。完全な思考停止。

「ごめんなさい、ごめんなさい…ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい…」

何に謝ればいいのかもわからない。何を謝ればいいかもわからない。でも、ただ謝罪の言葉が口から勝手に溢れている。もしかしたらわかっているのかもしれないけど、ただ…。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい…ごめんなさ…」

ーーーパァン！

頬が熱くなった。視界から入ってくる情報を頼れば、シーリカが僕を平手で打ったのがわかる。ただ、痛みも無い。何も感じない。

「アンタ…わかってるの!?緊急出動だよ!?スクランブルだよ!!?敵はアンタの世界の人たちかもしれないけど、今アンタが動かなければ、この世界の人たちがいっぱい死んじゃうんだよ!!アンタ隊長でしょ!?私達の仲間でしょ!?」

僕が動かなければ、この世界の人たちが殺される…僕の同属の手によって…。僕の…。

「あっ…ああ……アアアアアアアアアアアア!!!!」

わけわからず叫び声を上げる。壁を横殴りに殴ると、分厚い石壁

に罅が入った。

「アアゥ！！」

頭を打ち付ける。額が割れて血が飛び散るが、それでも理性が戻ってこない。自虐だが正常に戻ろうとする僕の本能が次の手段を探していると、扉の前に国王と一緒に、悲痛で蒼白な顔を浮かべたエリーが見えた。

「エリー！！」

エリーの肩がビクッと跳ねた。恐怖の色も窺えるが、正常でない今の僕にはそんなことは知ったこっちゃない。

「僕を殴れ！」

「やだよ…出来ないよ…」

エリーの肩を掴むと、その震えの大きさが分かる。

「いいから殴れ！」

再度大きく跳ねるエリー。どうあっても僕に抗えないとわかったのか、遠慮がちに右手を上げる。

ーーーペチン

上げた勢いで推し量れる、平手打ちとも言えない、フェザータッチが返って来た。

「クッ…しょうがない。タウルス！」

乱暴にエリーから離れると、僕が暴れて若干広くなった会議室の中央にタウルスを召喚する。

「アキラ殿…私の力では、あー…」

「五月蝿い！早くやれ！」

召喚された直後から戸惑っていたタウルスが、主の命と腹を決めて殴る。城中に届く轟音響かせて、僕は壁の絵画よろしく張りついた。肉体的ダメージから、大量に吐血する。内臓が、いくつかやられているかもしれないが…こうして自己分析ができるくらいなら頭がはっきりしてきた証拠だ。大丈夫！戻った！…と思う。

「タウルス、お前、加減したな…」

「加減をせんと。アキラ殿が本気で死んでしまうではないか」

ペッと口の血を吐くと、膝から崩れ落ちた。

「アンタ馬鹿ぁ？」

「ア○カ乙」

模写しているとしか思えないような仁王立ちをしたシーリカが、僕の頭上にいるのがわかる。

「はぁ…。アンタの部隊は、私がデンゼルに伝えておいたから今準備中。…ったくアンタのおかげで、私んとこもガロンが一人で息巻

いて頑張ってくれてるわ」

「それは…あいつにも悪いこと…したな…」

視界がチカチカして、青色吐息な僕。自業自得だけど。

「主、バルゴーを呼んでおいた」

「サンキュ。気が利くな…相棒…」

「ふん！こんなドエムの治癒なんてホントはしてやらなくてもいいんだからね」

「出番が無さ過ぎてツンデレ乙」

「キィー！！！！」

とか言いつつ、しっかり手当てをしてくれるバルゴー。ホント、ツンデレ乙。

「アキラ…」

立てるまで治癒が進むと、エリーが顔をぐしゃぐしゃにしながら僕に歩み寄ってくる。

「アキラは別に悪くないから…もうあんなことしないで…」

ギュっと抱きしめられると、さっきの自分がどんだけ異常だったか思い出される。あー…。

「それに…好きな人を殴れるわけないじゃん…」

「悪い。ほら、もう大丈夫だから」

頭を撫でてやると、上目遣いに僕を見上げる。そのまま数瞬、二人が停止する。

「はいはいもう回復したでしょ？エリーちゃんには悪いけど、さぁ…行くよ！」

シーリカの声に、小さく頷く。タウルスの腕力で目が覚めたが、その後のエリーの体温が一番の破壊威力だ。心のもやが、いつの間にか霧散していた。僕は…僕に出来ることをやるだけだ。この世界の住人として！

ーーー主は戻ったと思っているだろうが、本当にそうか？わけのわからない気持ちの整理の仕方をしておるし、あの銃弾を見てから、主の魔力の波形が不明瞭なままだ…。ただでさえも主の魔力は感情に左右されやすい。このまま主と対等…それ以上の敵と遭遇したら…。

「行くぞシーリカ！」

ーーー聞いておらんし。

「風魔術師、総員追い風の魔法を発動！東の平原まで、全速全身じゃ！」

セラトリウス団長の鬨の声と共に、全身が魔力に包まれる。こうして初めて自分がかけられると、なかなか優秀な魔法だ。体が軽くなった感が凄い。しかし、まだ足りない。

「更に…加速！！」

僕がその上に、加速の魔法を上掛けする。この世界が侵略されてるんだ。時間干渉なんぞ知ったことか！

「アキラ殿！？」

「団長！一刻も早く、さぁ行きましょう！」

「…うむ！出撃じゃ！それぞれの任は向かいながら伝える！」

「「「「おう！！！」」」」

数千は下らないエルフの軍勢が、広野を駆ける。乗馬はいない。自らにかかった魔法効果が、騎乗の意味を無くしている。馬を使うより、この足の方が速い。

「皆のもの！聞け！今回の最優先事項は、東の平原の住人の安全の確保じゃ！いつぞやのゴブリンども相手とはわけが違うぞ！相手は未知の武器を使う…向こうの世界の住人じゃ！」

「「「「おう！！！！」」」」

「作戦は先だってのバリアスの時と同じ！騎士団と魔術師団がツーチームセルで散開！獣人族の生き残りを見つけ次第護衛と安全な場所に誘導！そして…攻撃してくる敵は打ち殺せ！やつらはインベー

ダー。一片の情けもかけるな！アキラ殿…」

「わかってます。いっそ殲滅してくれても構いません。団長もおっしゃった通り…やつらは敵です。『僕ら』の。これが終わったら、僕もしかるべき行動を取ります」

「うむ！では見えてきたぞ！皆のもの、身魂を投げ打ってでも守り抜け！」

「「「おおおおおお！！！！」」」

団長の声を聞きながら、すぐに届く遥か前方を見た。パラララという銃声と悲鳴…。硝煙の臭いまでもが届いているようだった。

戦場は悲惨の一言では表現出来ないほどの惨状だった。そこかしこに死体の山。荒廃した居住テント…のようなものは、一つ残らず荒しつくされた後だった。目を背けたい欲求を抑えながら、一つ一つ、一人一人を目に焼き付けていく。これが…僕の同属がやらかして、今も元の世界のどこかで繰り広げられている現実だった。前衛騎士団第三部隊と共に戦場を闊歩する。付近で戦闘音が聞こえるが、部隊長のラスティンさんが無視して前に進む。

「ラスティンさん！」

「アレは…誰かの持ち場だろう？そんで俺たちも、加勢にいけるほど余裕ある状況じゃねぇはずだ。こっちはすでに、何人も護衛対象を抱えてるんだぞ。気持ちはわからんでもないが、熱くなるな。俺らに出来る事は、あいつらの無事を祈って、こいつらを無事に安全

な場所に届けるだけだ」

左目が傷で潰された、精悍な顔が僕を振り返る。この人は顔だけでなく、首筋や腕などいたるところに裂傷の痕がある。一体、どれだけの修羅場を潜ってきたのだろう…。

「ラスティンさんは…」

「俺は、十二の時に両親を亡くした。騎士団もその時からだ。戦で俺みたいな子供を作らない為にな…。死線なら幾度も潜ってきた。そして…数え切れないくらい救えなかった命もあった」

「……」

言葉が出てこない。守りたかった者。守れなかった者。後者は、きっと前者より多いのだろう。だからこの人は、こうも冷静でいられるのかもしれない。全てを救えないことを知っているから…。

「ご両親も…勇敢な方々だったんでしょうね…」

「勇敢かどうかは知らん」

「へっ？」

「両親が死んだのは、流行病でだ」

……。

「ただ…」

「俺を守って死んでいったのは本当だ。まだ小さい俺に触れないよう、俺だけでも生き残れるように自分を犠牲にして…な。最期は俺の為に自ら命を絶ったよ」

……。

「俺を生かす為の自己犠牲は感謝もしてるが、同時に愚かだとも思ってる。両親を失った子供の気持ちを全く考慮にいれてないってことだからな…っと。つまらない話をしたな。前方に敵確認だ」

「ちょ！そんな暢気に」

思わず遮蔽物に身を隠させるが、銃声は聞こえてこない。

「まだ大丈夫だ、やつらは俺らに気づいていない。今のうちに、ルートを変えれば遭遇しなくて済む」

「了解。デンゼル。もうちょい南側に進路を取るぞ」

「承知しました、アキラさん」

護衛の隊列の前方をデンゼルに任せると、僕はラスティンさんのところに近づく。

「エルフは…お前ら人間より五感が良いようだな」

「いきなり嫌味か皮肉か？」

「お前、アレんとこ行こうとしてんだろ？」

「だって！助けなきゃ！」

「さっき言ったろ？俺らにも余裕はないって」

「でも…」

食い下がりに食い下がる。さっきはスルーしてしまったが、気づけば後方の銃声は止んでいるのだ。楽観的に考えれば、こっちの誰かが敵を倒した。悲観的且つ現実的に考えると、逆にやられてしまったか…。正直エルフの体力と防具の装甲の堅さを鑑みても、正面からぶつかればサブマシンガンに軍配が上がるだろう。アレは核や戦略兵器とまではいかなくても、人が手に持って扱える中では最強の部類を誇る、『小さな大量殺戮兵器』なのだ。その武器にある程度理解がある僕が行くことで、少しでもこちら側の生存率を上げれるなら…。

「半刻だ」

「…えっ？」

「半刻で戻って来い。間に合わなければ、例え部隊長格のお前でも知らん。まぁ…お前が簡単にやられるタマじゃねぇのは知ってるけどな」

ラスティンさんが呆れたように溜息をつく。途端、心臓が早鳴りを始めた。なら、早く行かないと…。

「まっ、現実を見てくるのが関の山だと思うがな。行って来い」

背中を叩かれると、その勢いのまま戦闘の気配がある前方に駆け

出した。駆け出した…はいいけど…。

「どっかで感じた気配だな…」

そういや、全く銃声がしない。さっきは距離で聞こえないのかとも思ったけど、よくよく考えたらここに着く前から銃声は聞こえてたんだ。同じ領域にいて聞こえないわけがない。これはどう考えても魔法同士の戦いだ。魔法同士…そういや、鳳凰とか、会議でシーリカが言ってたな。七つの大罪ども…だっけ?そいつらか?

ーーーキィンッ!!

「クッ…」

「フハハハハ!その器は、お前に不釣合いだったのではないか?死霊の女王!」

「五月蝿い痴れ者!蠅風情が愉快そうに謳うな!ベルゼバブ!!」

この会話…そして、この声は…!

「ヘラァーーーー!!!!!」

僕より先に、ダービーが咆哮した。

～第六十七話～咆哮、血煙、悪意の嵐《前編》（後書き）

例の如く、思ったより進みませんでした。脳内で描いている像を文で表現するには、情報量を甘く見ていました。こんな初歩なことを…。

登場人物紹介《とりあえず主要三人編》（前書き）

ご指摘をいただきまして、ここで今まで出てきた登場人物を紹介したいと思います。確かに人数多くて、作者自身把握しきれてない節があるからなぁ…。第六十七話を前編と銘打っていながら若干半端ですが…。読者の皆さんのおさらいも兼ねて楽しんでいただけたら幸いです。…ぶっちゃけ、私自身もキャラ確認するとき、話数が多くてめんどくさい（笑）

登場人物紹介《とりあえず主要三人編》

《主要人物》

・神谷晶（カミヤ・アキラ）
『属性』土・時
『装備』天国への扉（指環）・輝くトラペゾヘドロン（大剣）
『所属』マテリアル～キュートス護国騎士団～・初まりの者たち
『役職』後衛魔術師団第三部隊長
『前世』ノア＝キーランス

本作の主人公。二十代半ばまで日本で育ち、父親が社長を勤める会社で悠々自適な生活を送るが、帰宅途中異世界に繋がる「ゲート」、並びに指環を発見。その「ゲート」から現れた少女、エリーと関ることで一般人ながら稀有な形で異世界との接触する。紆余曲折を経て半マテリアル界キュートス国に籍を置き、現在護国騎士団後衛魔術師団第三部隊長を務める。その正体はこの世界の創造主（クリエーター）の気まぐれにより、最も創造主に近い存在であるノア＝キーランスなのだが、本人はまだ完全な覚醒に至っていない。気分屋で割と現代人的な感性の持ち主であるが、激情家で一旦火がつくと歯止めが利かない一面を持つ。

戦闘スタイルは主に魔法。時属性という稀代の才能と、土属性を現代知識で活用するという彼以外ではこの世界では為しえない戦術を使用する。状況に応じて右手に装備している「天国への扉」により、様々な神性を召喚、使役する。個人技能も一般兵レベルより抜き出ているが、なるべく犠牲を出さぬよう狡い手段にでる事も。ある意味目的の為に手段を選ばない。

現在の主な戦果は、古代竜緑竜（ランド・ドラゴン）討伐、ヨグーソトース（分体）討伐、迷いの森とキュートスの和平締結、ウラヴェリア討伐。

鳥嫌い。学生時代に香奈子という恋人がいたが、進学を理由に破局。現在はエリーと交際している模様。忘れがちだが、マテリアル界と半マテリアル界を繋ぐ親善大使という大儀もおざなりに務めている。

家族構成は父、母、兄、姉、妹。現在はご厚意によりキュートス城の一室を間借りしている。

・ダービー

『属性』変態

『正式名称』ダビデの六星環・天国への扉（ヘブンズ・ゲート）

『能力』全ての神性の召喚、使役・増幅（ブースト）等、装備者への魔法補助

『半身』ナイアルラトホテップ

アキラの相棒で、通称変態指環。創造主が作り出した指環で、神器（アーティファクト）戦争は、ダービーの所有を巡る天界大戦であった。キュートス城の国宝庫に収められていたが、賊に盗まれた際にアキラの魔力を察知、自らの意思でマテリアル界にその身を落とし、アキラの所有物となる。夜な夜なアキラの夢に介入し、アキラがキュートスに関る一因を作る。かなりの好色家で、その気を見せる度にアキラから教育的指導を受けている。今や定着しきっているダービーという呼称は、アキラがダビデの指環という名称が長いからと端折って命名。本人もこれを気に入っているので結果オーライ。危なく、ヘブンズ・ゲートからブンさんにされかけたり、ダービーの子音からＤＥＢＵの意でＤＢと名づけられかけることも。

なんだかんだで今ではアキラの一番の理解者。自身を装備したことによってアキラの心臓に芽生えた『無限の魔力（エターナル・マナ）』が原因で、今までの主が辿った末路を思い、懸念している。

その正体はクトゥルー神話における盲目白痴の神、アザトースの息子であるナイアルラトホテップであることが生命の樹、ダアトにて発覚したが、本人はほとんど性格変化などの兆候は見られない。

若干女装癖がある疑惑が浮かんだが、真相は不明。実体化をする際は、褐色の肌に銀髪に近い白髪、長身のタキシード姿というナイ神父に酷似したものが定型である。

アキラの前世、ノア＝キーランスにいた時代に、その主を七つの大罪（セブンス・デッドリー）どもの『強欲』のマモン、ベヒモスによって殺害され、今にも続く確執になっている。それから現世までの間に死霊の女王（レイス・クィーン）ヘラの魂が封印された『地獄をもたらす者（ヘル・ブリング）』との間に何かあったようだが、現在は不明。

外見は白、青を基調として神代文字の刻印、水晶が付随された指環。錆びに弱い。

・キート＝エル＝リーナス（エリー）
『属性』???
『人種』エルフ
『所属』キュートス国王家
『役職』第三王女

最近なかなかに影が薄いメインヒロイン。城の倉庫から盗まれたダビデの六星環の捜索を父、キート＝ベイン3世に命じられ、マテリアル界に向かった際にアキラと出会う。アキラが逢った初めてのエルフで、アキラがキュートスの住人になる要因になる。アキラに対しては初めから彼の人柄に好感を持っていて、かなり初期から恋愛対象としてアキラを見ていた。アキラがキュートスに駐在して最初の頃は若干頭がよわ…幼稚な発言や行動が目立ったが、度重なるアキラの出撃や、姉のセリーヌ王女からの指摘により自身の恋心を自覚してから急速な精神的成長が見られる。アキラがギランに出向する際、出向前夜にアキラと関係が結ばれてからは更に顕著になった。

性格は良くも悪くも女の子らしい性格。やや直球型。やきもち妬

きだが、アキラの一挙手一投足に一喜一憂する（作者的に）可愛い一面も。

しょっちゅう城下に遊びに行き、王女三姉妹の中では知名度、人気共に高い。意外なことに、料理の才を見出す。

外見は腰近くまで伸びた金髪に、ワンピース風のドレスコードを身につけることが多い。エルフのテンプレ通りの端正な顔立ちだが、クールビューティーと言うよりは歳相応のあどけなさが残る、綺麗より可愛らしい派。スタイルはアキラ曰く可も無く不可もなく。意外に出るとこは出ている…らしい。

家族構成は父、母、姉が二人。

登場人物紹介《とりあえず主要三人編》（後書き）

待って？本編書くより疲れるってどういうことだ（笑）まだ三人しか書いてないのにこのザマだよバーニィ。つうか、いつの間にか色々積み重なってたんだなぁ…。たぶん登場回数がシーリカより少ないエリーだって、結構書いた気がするぞ？まぁ…少し休んだら初まりの者たち編、書きます。

登場人物紹介《初まりの者たち編》（前書き）

本日三度目の投稿です。よく考えたらこれ、初見さんにとってはネタバレが十二分に含まれてますね（笑）小説を後書きから読む悪癖を持つ方なら問題ないと思いますが（笑）…貴志祐介さんの後書きのパクリました。すみません。

登場人物紹介《初まりの者たち編》

《初まりの者たち（スターターズ）》

創造主が作った初めの世界の住人にして、現世界の秩序を影で守る六人の総称。原初の世界における神器戦争にて、七つの大罪（セブンス・デッドリー）どもとそれぞれ因縁を持つ。アキラのように転生している者、寿命で死せずその姿を変えない者、魂の形を変えた者など様々だが、現在半マテリアル界に全員集結している。

それぞれ魔力は実体を持つ生物の中では最高峰であり、選ばれた神器を持つ。覚醒の度合いにもよるが、初まりの者たち特有のオリジナルの合体魔法を使用出来る。また同じく覚醒の度合いにもよるが、その神器の特性や魔力の高さから、属性魔法最上位の『浄化』もデフォルトで使える。ぶっちゃけチート集団。

・カイム

『属性』水

『装備』マナの壷（壺型神器）

『所属』護国騎士団・初まりの者たち

『役職』後衛魔術師団第四部隊長

『種族』エルフ

『通称』金色（ゴールデン）の守人（スランバー）

『召喚獣』バハムート

初まりの者たちの一人にして、原初の世界から転生していない者の一人。よって正確な年齢は不詳。現種族はエルフであるが、原初の世界が人間と亜人の区別がさほどなかったため、もともとの型は不明。金色の守人とは、上位の神々から、幾多の神器の守護を任命された一族の総称で、勿論現在はカイムしかいない。ゴールデン・

スランバーとはビー○ルズの曲名で黄金のまどろみの意味だが、これはこの一族が有事の際はまどろむ事も許されないほどの守護っぷりから、まどろむことの出来る貴重な時間＝黄金のまどろみとされた。作者がビー○ルズや仙台を舞台にした某小説（映画）からインスピレーションを受けたか否かはあえて黙秘しておく。

キュートスでアキラが騎士団に入団した際、最初に話しかけた人物。初めは涼宮なんとかの憂鬱の○泉のように微笑を絶やさない好人物であったが、後々実は力を隠していて、その行動に様々な思惑がある節がある。ミステリアス、考えが読めないとも言える人物。ココの弔い合戦の際、彼女に対する言葉の端々から、意外に仲間思いな顔も覗かせる。一時期観察という理由でグレンの部隊の副官を務めていたが、四章にて後衛魔術師団第四部隊長に就任していたことが発覚。

普段は後衛に務めている為詳細な戦闘スタイルは不明だが、属性魔法が主要であることがウラヴェリア編で窺える。水属性の特性で、水に関する物を操作出来ることは明確だが、神器・マナの壷と高い魔力で様々な流動体を使役し、山中で津波を起こすことも可能。召喚獣バハムートを得た経緯に関しては、閑話魚釣りを参照。

容姿は長身で、エルフ族にもれなく容姿端麗。金髪で短髪とまではいかないが短め。

・グレン

『属性』火

『装備』レーヴァテイン（長剣）

『所属』南西の村～護国騎士団・初まりの者たち

『役職』前衛魔術師団第二部隊長

『種族』エルフ

『通称』煉獄育ち（フロム・フラム）

『召喚獣』不死鳥（フェニックス）

『前世』グレン＝エグソダス

初まりの者たちの一人で、アキラと同じく転生者。ココがウラヴェリアによって殺害された際に覚醒、神剣レーヴァテインもこの時実体化させる。元はココと同じくキュートス国の南西の外れにある村の出身だが、二十歳になった時に志願して護国騎士団に入団する。

カイムと共に騎士団内で初めてアキラと仲良くなった一人。ナンパで女好きな性格。アキラとは悪友のような関係で、いつも一緒にいる。若干好戦的で明るい性格。アキラとともにハメを外すことも多々あるが、実は頭の回転も速い。やや直情型。ココの事を妹のように思っており、現に原初の世界では兄妹だった。神器戦争の際にヘブンズ・ゲートの気配を嗅ぎ付けたマモン、ベヒモスの襲撃により、妹ココル、ノア＝キーランスを目の前で亡くしている。原初では、中流よりやや上のエグソダス家の長男に生まれる。煉獄育ちの二つ名は、グレン＝エグソダス時代はその名の通り、煉獄にて生を受け、その業火を玩具のようにして育ってきた為。よって火属性の耐性は極めて強い。

戦闘スタイルは火属性による広範囲攻撃。レーヴァテインは主に魔力行使の触媒として使用しており、斬撃に使うことはアキラよりは少ない。そのレーヴァテインを使い、ウラヴェリア編でアキラ、カイム、シーリカと四人でオリジナル合体魔法にして火属性最上級魔法の一つ、『聖なる十字架（クリス・クロス）』を発動させている。ココが死亡した際、そのショックと怒りからアキラと同等の魔力爆発を起こしている。ダービー曰く、暴走すればクトゥルー神話の最上位神性の一人、クトゥグアをも呼び出せる器。

容姿は肩口まで伸ばした金髪に、カイムと似た背格好。穏やかな印象を持つカイムに比べ、やや勝気な表情。整った顔立ちをしているが、普段の言動から三枚目の印象が強い。

・シーリカ
『属性』風
『装備』五火七禽扇（鉄扇）
『所属』護国騎士団・初まりの者たち
『役職』後衛魔術師団第二部隊長
『種族』エルフ
『通称』隠者（ハーミット）
『召喚獣』？？？

初まりの者たちの一人で、カイムと同じく転生せずに現世まで生きながらえている。アキラとは、バリアスの攻防戦にて初対面。隠者とは原初ではまだその二つ名はついておらず、初まりの者たちの一人として様々な世界で影から干渉していた過去からつけられた呼称。

気立てが良く姉御肌で、面倒見がいい。お転婆なところがタマに傷だが、その性格から交友関係は広く、騎士団内でも信頼は厚い。寡黙な副官で水属性のガロンと一緒にいることが多かったが、アキラ達が関ると途端に振り回される苦労人。普段は冷静な部類だが、戦場で特別な仲間がピンチになったりトラブルになると、感情を露にすることも見られた。恐らくアキラ達の影響だと思われる。ちなみに彼氏持ち。転生していない為かカイムと並んで原初に関する思索が多く、本来は経歴から表舞台に立つことすら拒んでいた節があるが、アキラやグレンの覚醒など状況がそれまでと一変し、覚悟を決める。

戦闘スタイルは所属する魔術師団から後援が多いが、本来は五火七禽扇による鎌鼬や衝撃波、気圧変化による遠隔攻撃から、鉄扇の破壊力を活かした近接物理攻撃など多彩。召喚獣に関してはいまのところ不明。

容姿はモデル体型で、背中まで伸ばした金髪。年上のお姉さん系の綺麗め。イメージは某女性ファッション誌の専属モデル。

・ガラム
『属性』氷
『装備』ゲイボルグ（槍）
『所属』護国騎士団・初まりの者たち
『役職』前衛魔術師団第一部隊長
『種族』エルフ
『通称』詭弁を論ずる者（フィロソフィア）
『召喚獣』イタクァ
『前世』ガラム＝ヘラクトドス

初まりの者たちの一人で、転生者。アキラ達がウラヴェリア討伐に任に就いていた時に別件で単独班でガラリオン山脈の赤竜（ファイア・ドラゴン）討伐に向かって行った際、竜の宝物庫から実体化したままのゲイボルグに触れ、覚醒。

キュートスでも地位のある家出身なのかプライドが高くやけに選民思想が強い。常に上から目線。つうか完璧に〇フォイ。初めはアキラを下等な種族と見下していたが、次々と功績を挙げられ内心は劣等感に似た焦燥感を抱いていた。反面精神的成長か性格かは不明だが、冷静に自分の実力と実情を正確に客観視でき、部下の為に頭を下げることくらいは出来るようになった。その際、認めてはいるが自分の戦闘経験の少なさを不甲斐無く感じ、精神が折れかけたことも。ツンデレ。

戦闘スタイルはの氷属性魔法を使ったアイスメイクが主だったが、その頃から槍を好んで作っていたようだ。現在は覚醒による魔力の増加とゲイボルグを入手したことと、氷、すなわち冷却のプロセスを科学的に理解（実はアキラがマテリアル界から持ち出した資料からの知識であるが、ガラムはそれを知らない）し体得しつつあるので、また違ったアプローチを模索している模様。

原初では原初の世界きっての名家、ヘラクトドス公爵家の次男として生を受け、同世代のノア達とも交流を持っていたが、ほとんど傍観組だったようだ。神器戦争の際は家柄上戦場から離されて擁護されていたため、ノア達に何があったか知らない内に戦争が終結していた。そして戦争の起因が当時のヘラクトドス家の当主である父が七つの大罪どもの一角、『色欲』のアスモデウス、ベルフェゴールに唆されたものと知り、『色欲』の二人に激しい憎悪を持つ。ヘラクトドス家はその後没落。ガラム自身がどうなったかは不明。

容姿はオールバックかと思いきや、現在はマッシュルームカットにイメチェンしたとか。常に不敵な笑みを浮かべているが、少し煽られると人相が変わるほど険を帯びる。イメージは勿論〇フォイ。

・地獄をもたらす者（ヘル・ブリング）
『属性』闇
『装備』地獄をもたらす者（ヘル・ブリング）（腕輪）
『所属』初まりの者たち
『通称』死霊の女王（レイス・クィーン）
『前世』ヘラ
『召喚獣』？？？

初まりの者たちの一人だが、神器戦争後に己の魂を神器たる腕輪に封印。現在唯一初まりの者たちのコミュニティに参加していない。アキラのマテリアル界での知人、黒城白夜の装備品として暗躍している。

実体化して白夜の傍らにいることが多く、その姿は彼女の幼少時…ヘラの成長した姿である。妖艶で蠱惑的な笑みを浮かべ、主として選んだ人間に対しては絶対的服従を誓う。原初から現世にいたるまでの間ダービーと何かあったようだが、詳細は不明。一方的に憎んでいるようにも見られる。

能力は闇に属した物を自在に操作でき、その支配力はヘラ時代でさえ下級悪魔相手にも及ぶ。現在は主、黒城白夜に数々の装備品を与えている。

容姿は腕輪としては赤と黒が基調の、天国（ヘブンズ・ゲート）への扉と対を為すよく似た装飾。ダービーの水晶にあたる部位には、ルビーが埋め込まれている。実体化した際は、腰まで伸びた黒髪に、黒のイブニングドレス。色白で、黒曜石のような瞳が特徴。イメージは漫画ぬらり〇ょんの〇の羽〇狐。

・黒城白夜（コクジョウ・ビャクヤ）

『属性』闇

『装備』地獄をもたらす者（ヘル・ブリング）（腕輪）・魂喰い（ソウル・イーター）（片手剣）・罪人の剣（ガリアン・ソード）（蛇腹剣）・漆黒の天使（フォービドン・エンジェル）（鎧）

『所属』初まりの者たち（？）

『種族』人間

元は日本人で、幼少時は劣悪な家庭環境で育つ。目の前で両親の心中を見せ付けられ、施設に預けられる。思春期に同じ施設で出会った少女に影響を受け、施設を脱走。その後、その少女の父親に鍛えられ、内戦が続く某国のレジスタンスの筆頭として国を挙げて危険視されていた。ちなみにアキラとは、アキラの妹が生まれる際に母方の実家がある白夜の故郷にアキラが訪れ、交友関係を築く。

敵にアジトを発見され、目の前で子供達が蹂躙されて自身も死の淵に立たされた時に、昔白夜の腕の中で死んでいった女の子からの形見につけていた腕輪（ヘル・ブリング）が白夜の無念や怒りの思念を受け、腕輪の主に選ばれる。その後はレジスタンスを抜けながらも、影ながら革命の為手を汚していた。

半マテリアル界に渡った後、ギラン領ウラヴェリア伯爵家の世話になり、キュートス側との対戦時はアキラに正体を明かして精神的

揺さ振りをかけることに成功し、圧倒。魔道爆発後にマドラの隙を突き致命傷を負わせるも、そのタフネスを侮り頭部に一撃を喰らい、昏倒。その後行方不明。本来は優しい性格をしていたが、家庭環境と生い立ちから心の奥底に封印されているが、タマにちらりと甘さが出ることがある。

戦闘スタイルは漆黒の天使による遠隔攻撃の無効化及び、両手の剣による中距離、近接物理攻撃。魂喰いは初めはただの片手剣だが、敵を斬り血を吸うことにより魔力増加。刃が伸び、切れ味が増していく。これは魔力が血液に乗り身体を巡るという概念から。罪人の剣は蛇腹状で、その節一つ一つに鋭利な刃と棘がついている。この棘で敵の創傷を広げ、組織を破壊して死に至らしめる。

容姿は襟足を伸ばした黒髪の長身。肌はやや褐色気味。パーツは整っているが酷く冷たい眼光を放っている。イメージはＰＣゲーム聖○るかなの暁○。武器は完全にＢ○ＳＴＡＲＤ！！のオマージュ（つうかこれは丸パクｒｙ）。

・ココ

『属性』火

『装備』？？？

『所属』南西の村～護国騎士団・初まりの者たち（？）

『役職』後衛魔術師団第三部隊副官

『種族』エルフ

『通称』鍵（キー）

『前世』ココル＝エグソダス

原初の世界でのグレンの妹という前世を持ち、半マテリアル界でもグレンの幼馴染。ウラヴェリア討伐戦で、ウラヴェリアからアキラを庇い胸を貫かれ、それが致命傷をなりアキラの腕の中で死亡。

アキラ、グレンが覚醒する為の要因（キー）となることが宿命付けられた人物。原初でも神器戦争の際、まだ幼いココルは皆の逃走についていく身体能力がなく、瓦礫の下敷きになって死亡。グレンとノアはそれを救出しようとするもその間にマモン、ベヒモスに追いつかれ、ノアは直後攻撃を受け死亡している。

気弱ではっきりしない性格だが、バリアス攻防戦後のアキラの緑竜討伐の際にアキラの才能に驚愕し、次第にその姿勢に目を奪われアキラに恋愛感情を抱く。その後アキラと肩を並べられるようになる為に必死に修行し、アキラの部隊の副官に任命されるほどに成長する。引っ込み思案な性格が災いし、想いを告げるのは死の間際であった。シーリカと共に、よく城下に足を運んでいたエリーとの交流もあった模様。

戦闘スタイルは火の属性魔法が主だったらしいが、アキラ曰くここでも性格が災いし、攻撃はイマイチ。しかしアキラの部隊に入ってからは後援としてメキメキ頭角を現した。明確な戦闘描写はないが、ウラヴェリア編の食屍鬼（グール）に囲まれた際のグレンの発言から、徒手空拳もある程度使えると思われる。

容姿はエルフの割に背が低く、年下のエリーと同程度。ショートカットでつぶらな瞳。シーリカと並び、アキラがその容姿を作戦に組み込む程の可愛らしさ。イメージはＮＡＲ○ＴＯの日向ヒ○タ。

登場人物紹介《初まりの者たち編》（後書き）

なんとか日付変わる前に間に合ったー。なにやら実際作中に出てない設定まで書いてしまったみたいですが、気にしないでください（笑）

容姿に関しては今までほとんど明確な描写はしていませんでしたが、あくまで私のイメージです。読者さんのイメージもあるとは思いますが、違ってた、イメージが崩れた等ありましたらすみません…。

～第六十八話～咆哮、血煙、悪意の嵐《中編》（前書き）

ども。人物紹介は、本編も進めながらやります。じゃないと私自身も作中の流れを忘れる恐れがあるという…（笑）

～第六十八話～咆哮、血煙、悪意の嵐《中編》

とりあえず、目の前に二人いた。…としか言いようがない。二人の姿が視認しづらいのだ。近くに人間達がこの集落を蹂躙した証の戦火が燻っているにも関らず、だ。二人の魔力は、わずかな光なら受け付けないほど暗い。ただ、その影達が交わした会話と、ダービーの咆哮から誰と誰が戦っているのかはわかる。

「白夜ぁぁぁぁぁ！！！」

見つけた倒すべき敵…マドラのおっさんの仇を見つけ、僕も更に加速する。…これはラスティンさんとの約を破ってしまうかもしれない。

「っ！？晶！？」

「ノア＝キーランス？ヘブンズ・ゲート！…こんな時に…」

一人の体から、二人の気配がする。ダービーから聞きかじった内容には、白夜の傍らに居た女…ヘル・ブリングは、自分の魂を神器に封印した、ダービーと同じ意思を持つ装備品らしい。おそらくサポートに回っているのだろうか。ようやく視認した白夜に疲労の色が滲んでいる。

「ヘル・ブリング…ヘラ。こいつは…」

「ようやくやつらの動きを察知出来て、決着をつけてやろうと思った結果がこれさ…」

「馬鹿か…無茶をせずに、我らにも伝えれば良かったものを…」

「五月蝿い！貴方の手など借りずとも…」

「久しぶりの再会のところ邪魔して悪いが、お前は…ノア＝キーランスとヘブンズ・ゲートか。全く大物がこうも釣れるとは、『色欲（ラスト）』の二人に乗って、雑魚の相手もしてみるもんだな」

「何だと！？」

相対する影の声に、白夜が吼える。僕にしてみれば、とりあえず初まりの者たちの怨敵と、マドラのおっさんの仇と三つ巴の様相でしかないんだけど。

「ふん！ヘラの犬が、我らと対等でいるつもりか？」

「ベルゼバブ！私の器を愚弄することは許さん！」

なんかヒートアップしている所悪いけど、僕だって時間がないんだ。さっさとこいつらをぶっ殺してラスティンさんとこに戻らなきゃいかん。どっこいしょ…っと。

ーーーパラララララ！！

別に卑怯とかそんなのは戦場ではかんけぇねぇし。足元に転がっている人間の亡骸からウージーを拾い、でかい影に向かって銃弾を放つ。うをっ！？初めて知ったけど、サブマシンガンの反動って結構厄介なんだな。つうかこんなもん撃ったことあってたまるか。

「…効くと思ったか？」

「いや、一応。なんとなく」

硝煙が霧散していき、そいつの姿が初めて見えた。僕らより若干大きめの体躯に、全身漆黒の体毛。背中には、蠅を思わせる小さい羽が恐らく数百枚蠢動している。…キモい。同じ虫科でも、モスマンの方がまだ可愛げがある。

「ったく髑髏髑髏って…センスがねぇ中坊のアクセサリーか」

その顔だけ、やけに闇に浮かんでいた。短く刈ったような立たせた髪に、チャラそうな表情。しかし口は獰猛な笑みを浮かべている。左頬に髑髏の刺青と、右耳に同じく髑髏のピアスをしていた。つうかよく見たら、唇にもピアスしてやがる。マジチーマーみてぇだな。

「よう色男。ようやくそのツラが見えたな」

「主、侮るなよ？やつは七つの大罪どもの一角にして、地獄の皇太子…『嫉妬（エンヴィー）』のベルゼバブ。蠅の王とも呼ばれる、七つの大罪どもも最速の男だ」

「へっ！女に手を出すのが最速なんじゃねぇのか…よっ！！」

輝くトラペゾヘドロンを横薙ぎに振るい、斬撃を飛ばす。加速を上乗せした真空波だ。幾ら最速の男でもかわせまい。

「ほう…更に遅延の魔力まで内包させ、我を封じようとしたか。なかなか考えたが…甘い」

すぐ横でぞっとする程低い声が聞こえる。つうか、振るった剣の上に乗ってるとかなんというベタな！

「ふんっ！」

大剣はその大きさから、間合い内に入ってこられると滅法隙がでかい。ましてや、こいつは最速の男だ。かわす隙もなく顎を蹴りでかち上げられてしまった。

「ぐあっ！！」

簡単に吹き飛ばされてしまうが、飛ばされながらも反転し体勢を整える。クソッ！得物を離しちまった！

「ラトホテップ！」

ダービーが叫ぶと、輝くトラペゾヘドロンは僕の掌に帰ってきた。流石半身、便利なもんだ。

「晶っ…」

気づくと、白夜の近くに飛ばされていたようだ。片手剣を地面に突き刺し、やっと立っているようだ。ぶっちゃけ、知るか。

「あいつの体は、俺との漆黒の天使（フォービドン・エンジェル）と同じ、遠隔からの飛び道具を無効化する…。魔術師のお前らとは、すこぶる相性が悪い…」

「へっ！お前の防具の性能もポロッと暴露してくれてありがとよ！これでこいつと戦いながら、お前をどうやって殺すか算段もつけれるってもんだ」

「主！そんなこと言っておる場合では…」

「ノア！貴方に白夜は…」

「おやおや。あんなに仲良しクラブだった初まりの者たちが仲間割れか？二人で来ればまだ勝機はあるのに、愚かだな」

「うっせぇ蠅男！おめぇも白夜も敵じゃボケェ！」

「晶…ここは共闘を…」

「だが断る。マドラのおっさんを殺したお前と、僕が手を組むと本気で思ってるのか？」

「違う…違うんだ晶…」

何か言ってる白夜を無視して、目の前の蠅野郎をどう始末つけるかを考える。さて、遠距離攻撃が効かないとなると、攻撃手段の半分以上が潰されたことになるな。十二宮を呼ぼうにも、こいつはサタンに次ぐ力を持つと言われている地獄の皇太子、ベルゼバブ。…言っておくけど、僕もそれがどれくらい凄いことかは見当つくよ？もともとそっち系の世界にはそれなりに知識はあるし。…となると、十二宮クラスではちときつい。つうかかなりきつい。でも近接攻撃しか効かないという鬼畜スペック。…となると、また夜叉を憑依させてってのが一番正解に近いと思うんだけど…。

ーーーパチンッ！

唐突に、指を弾く音が虚空に響いた。なんだ？一番いい装備でも

くれるのか？いや、充分いい装備だけどさ。

「ベル！こいつの相手はいささか飽きた。お前が代わってくれ」

「えぇ。せっかくあのお金持ちの坊やが転生したって気配があったから来てみたけど、期待外れだったわ」

瞬きをしていたわけでもないのに、一瞬にして現れた二人の男女。一人は牛のように顔が突き出ていて、羊のように鼻の下が長い中年風の男。額には小さい角が二本生えていて、背中には薄汚れた翼が生えている。もう一人の女は、悪魔にそのような概念があるのかわからないが、下着のが透けている黒地のキャミソールのようなもの。背中には、こちらは手入れをしているのか綺麗な黒翼が生えている。こちらも頭に、いかにも小悪魔ですっと言わんばかりにちょこんと角が一本顔を出している。顔は間違いなく美女の部類だろう。

「アスモデウスにベルフェゴールか…。勘弁しろよ。こっちはノアの小僧が来てやっと面白くなってきたところなんだ」

「てゆーかアスモデウス、ベルゼバブのことを『ベル』って呼ぶの止めてくれない？私が呼ばれてるみたいで気になるから」

「前から俺はベルのことはベルと呼んでたんだ。お前の方が新参だろう？状況で判断くらいしろ」

「ベルフェゴールの方がお前より位階が高…いや、低いがな」

「細かいことを言うな、ベル。それよりこいつ、お前吸うか？」

「いや、いいさ。食事なら目の前に極上品がいる」

男の方…アスモデウスが肩に背負っていたものを放る。放られたそいつは、意識はないのだろうがその左手の槍だけは離していなかった。

「ガラムッ！！」

「あらっ？キーちゃんいたのね？私もちょっとやる気だそうかな」

気だるそうに、しかしそれすらも妖艶な雰囲気を纏ったベルフェゴールが舌なめずりする。並みの野郎なら、それだけでふらつきそうな天然の魅了（チャーム）だ。

「だからさっきそう言っただろう…」

「しかし、もう一人の男も手負い…。三対一じゃ、また勝負をつまらなくさせるのではないか？まぁ、その男は色々楽しめそうだけどな…中にいる、ヘラも含めてな」

「貴方って、ホントに悪食なのね。その汚い欲棒さえ満たせればなんでもいいのね」

「悪魔が自分の欲求を我慢してどうする」

「それもそうね。…私はキーちゃんに楽しませてもらおうかしら。この子がどんな顔して喘ぎ声を聞かせてくれるか楽しみだわ…」

「好き勝手言ってくれるな…悪いが、三対三だ」

黙示録の悪魔ども駄弁っている内に、ガラムと白夜に回復の魔法

をかけて復活させてやった。戦場で隙を見せる方が悪い。

「随分な有様だなぁ？ガラム。お前には荷が重すぎたか？」

「馬鹿が。部下どもを気にしている内にここまでやられただけだ。最初から俺だけならこうはなってないわ」

「おうおう。じゃあ一人任せるぜ？…ところで、その部下達は？」

「俺が引きつけている内に騎士団に任せて逃がした。……何人かやられたがな…」

「そっか…頑張ったんだな、お前。でも、それなら今回は負けないだろ？」

「貴様に労いをかけられるとはな。無論だ」

ガラムの目に一筋の光が見える。よし、これなら大丈夫そうだな。

「晶…お前…」

「多勢に無勢だから仕方なくしてやったんだ。言っとくが、こいつら倒したら消耗したお前を殺すからな」

「外道…貴方、本当は悪魔なんじゃないの？」

白夜の中から、女の声が聞こえた。ヘル・ブリング…こいつもまだ健在のようだな。

「主はこういう男だ。ヘラ、でもそれどころではないだろう？」

「クッ…。貴方のこと、許したわけじゃないからね」

「…もう仲直りはいいか？ハンデは充分だろう？」

ベルゼバブが退屈そうに足元の土を靴先で掘っている。あぁ。おかげでこっちは整ったぜ。

「その余裕こいたマヌケ面を、ほえ面に変えてやんよ！」

三者が一斉に相手の正面に立つ。

「またお前か…俺はヘラを纏う男が良かったんだが…」

「次はもっと楽しませてやろう…貴様の痛みという快楽を以ってな！」

アスモデウスにはガラム。

「はぁ…お前も懲りないな。俺としてはノアの小僧が良かったんだけどな」

「悪いが、今回はさっきのようにはいかない！」

「私の主を侮辱したこと、後悔させてやるわ！

ベルゼバブには白夜が。そして…。

「私は希望通りで満足よ？さぁ…早く来て！キーランス！早く私を満たして！」

「悪いけど、僕はこう見えて一途なんだ。それにお前をここで倒せば、怠惰（スロウス）の時に楽出来るからな」

「あぁんもう！いけずねぇ…でも、そういうクールなところも素敵…」

「お主が本当にそう思うなら、残念ながら見当違いも甚だしいぞ？主はクールとは程遠い人間なのだ」

「ますます素敵…。そういう男が私に這い蹲るのを想像するだけで…濡れてきちゃうわ」

「這うのはお前だ、淫乱女！お前の血でその体を濡らしてやんよ！」

僕は大剣を振りかざし、ベルフェゴールに突進した。

～第六十八話～咆哮、血煙、悪意の嵐《中編》（後書き）

あぁ、前編中編という時は、だいたいその話内で終わらないフラグ…。最後若干アレな表現ありましたけど、これくらいなら大丈夫ですよね？ねっ？

登場人物紹介《キュートス国王家編》（前書き）

ちわ。本当は軍部と一緒にする予定でしたが、字数が眠気に勝てずに…ｏｒｚでも、こうやってカテゴライズした方が読みやすいですよね？…そうだと言ってよバーニィ。

登場人物紹介《キュートス国王家編》

《キュートス国》

半マテリアル界における大陸（名称不詳）の、中央に横断するガラリオン山脈から南側…セラス地方の最も勢力のある国。主な構成種族はエルフ。現国王はキート＝ベイン三世。王国とは言っても即位は世襲ではなく、次の世代で一番影響力がある者が次期国王に選ばれる。しかし、現国王の家系が今の所最も長く支持されているため、幼い世代は知らない者も多い。ちなみに『キート』の姓はその時代の国王家が受ける。小高い丘の上にキュートス城、その傍らにセラス地方最大の軍事力を持つ『護国騎士団』の軍部施設が建っている。さらに眼下には城下町が広がり、この国の繁栄を象徴している。国土は広く、国をぐるりと囲む城門付近には晶によってもたらされた農業技術による農耕地が、未発達ながら存在する。

北にドワーフの集落バリアス、北東に（旧）緑竜の森、北西にに迷いの森、南西にグレン、ココが育った火の部族の村、南に実りの森が隣接している。晶が世界をを渡る時は、大抵実りの森付近にゲートが出現する。温暖気候で、日本によく似た四季がある。

国名が類似しているが、国と地獄の最下層の嘆きの川は特に関連性はない。

・キート＝ベイン三世

『属性』雷

『所属』キュートス国王家

『役職』キュートス国王

『種族』エルフ

現キュートス国の国王で、『騎士王』の異名を持つ。本編には未

登場だが、護国騎士団の地位を内外に知らしめた歴戦の勇者でもある。その頃は兄、マドラの影響もあり大変なかぶき者で豪胆な性格をしていたが、長男アレンとセリーヌ、ディーン、リーナスの三人の娘が生まれてからはその鳴りを潜めている。しかし今でもその存在感とカリスマ性は顕在であり、普段はだらしないところばかり見せているにも関らずが臣下が離れたり謀反が起きない所以であったりする。また、ゲートが繋がった際にマテリアルと半マテリアル界との橋渡し的役目も果たしており、それは今でも現在進行形である。突如娘のリーナスが連れて来た、国宝の指環を嵌めた晶の人間性を一目で見抜き、異世界人にも関らず国に受け入れる、友人と呼び器の大きさもある。

恐妻家なところもあるが、夫婦仲、家族仲は良好であり、末女のエリーの事を猫可愛がり一緒にハメを外すくらいの親馬鹿。一度懐に入れてしまえば地位や種族など関係なくフランクになってしまい、よく妻のシャロン王妃にたしなめられている。一度ダービーとY談で盛り上がっている所、シャロンに見つかりフルボッコにされたことも。ちなみにその時のネタは晶の姉妹であった。

年齢は百十歳前後で、人間の二～三倍の寿命と言われるエルフではかなり若い国王である。

容姿は厚く引き締まった体躯に、若干青みがかった白髪の短髪のオールバック。前髪は立ち気味。口髭と少し伸ばした顎鬚。目力があり、黙っていれば渋くてダンディーなオジサマ。

・キート＝シャロン

『属性』火

『所属』キュートス国王家

『役職』南西の村～キュートス国王妃

『種族』エルフ

キュートス国の王妃で、普段は晶をして完全無比と言わしめる賢后。しかし一旦気が緩むと口調から思考回路まで全ておっとりのんびりした天然キャラに変化する。それはもう、パンがないならお菓子をｒｙを地で言いそうなくらい天然になる。

ベイン国王とは、まだ騎士王として現役でやんちゃしていた頃の国王が付近で深手を負い、それを匿ったことから。ベインがその器量を見初め、拉致同然で連れ立ったという話もあるが、本人は自分の意思で嫁いだと明言している。実はグレン、ココと同じ火の部族の出だったりする。あまり社交的ではないココがエリーと仲が良かったのは、同郷の娘というシャロンの計らいがあるのかもしれない。

容姿は、背中まで伸ばした銀髪に、白のドレス。いつも柔和な笑顔を浮かべている。年齢は百歳前後。

・キート＝アルト＝レントン（アレン）
『属性』火
『所属』キュートス国王家・護国騎士団
『役職』キュートス国第一王子・後衛騎士団第一部隊長
『種族』エルフ

影が薄い第一王子。普段はニコニコしているが、いったんネガティブスイッチが入ると結構深くまでダイビングする。底が知れない晶に憧れに似た恐れを感じているが、晶が酷く落ちたときは気遣う心配りが出来る一面も。酒耐性は、下戸なエルフ族の中でも更に弱い部類。

第一王子ということで火属性にも関らず後衛に回っているが、才覚は平凡にも関らず努力で部隊長に上り詰めた。あれ？最初の方に既に部隊長みたいな描写があったような…アレは（仮）、もしくは見習いってことで…。ちなみに武器はアダマンタイト止まりのまま

らしい。どれでも充分上等な素材なんだけどね…。属性は母親譲り。
容姿は金髪の短髪で、普段着でも礼装を好む。年齢は六十歳手前。

・キート＝セレナ＝ライトネス（セリーヌ）
『属性』雷
『所属』キュートス国王家
『役職』キュートス国第一王女
『種族』エルフ

慈母星の宿命を負っているような慈愛に満ちた第一王女。性格、容姿ともに母親譲りで微笑を絶やさず、いつもエリーの世話を焼いている。しかし最近エリーがしっかりしてきていることに、安心と一抹の寂しさを感じている。晶とエリーのハプニングの第一発見者になることが多く、そういったことからか晶とエリーのことをいつも気にかけている。雰囲気に似合わず実は俗っぽいことにも理解があり、内心でエリーに押し倒せばいいのにと不満を思ったり、晶とエリーの事後の朝には、晶がエリーを『食べた』と表現していることから、恐らく昼ドラとか好きそうなタイプ。耳年増。
一人で城下に下ることも多く、その際はカレンの食堂で読書をしている。遠縁の親戚筋に許婚がいるが、本人は満更でもない様子。
容姿は背中まで伸ばした長い金髪に、金や銀系のドレスが多い。顔も母親似で、柔和な印象で、兄のアレンも同じ系統を受け継いでいる。年齢は五十歳前後。

・キート＝デイライト＝ナルティック（ディーン）
『属性』氷
『所属』キュートス国王家
『役職』キュートス国第二王女

『種族』エルフ

ひきこ…学者体質の第二王女で、他の家族と比べてやや温度が冷たい印象を持つ。博識で本の虫。ぶっきらぼうな男言葉を使うが、本人はそれでどうという意識はない。公務は果たすが、基本的に目立つことや人前に出ることは嫌い。外出も滅多にしないが、兄妹姉妹とカレンの食堂に向かう時は何を言わずとも着いていく。ツンデレという噂もあるが、証拠不十分の為現在は否定的な意見が多い。兄妹姉妹の中で唯一氷属性の持ち主だが、別に複雑な家族背景があるわけでもなく、ただの遺伝の変異的なものらしく本人も自らを研究対象にできると歓迎している。

口数少なく、滅多に笑うことはない。しかし感情に乏しいというわけではなく、王女としてのあるべき姿…特に品格に関して偏執した考えを持っており、感情を露にすることを恥ずべき行為として律している為。しかし内心は感情表現を惜しまないエリーのことを、羨ましがっている。多くの矛盾や葛藤などパラドックスを持っているが、それが人間（ホモ＝サピエンス）に最も近い思考をしていると本人及び周囲の人は気づいていない。

容姿はショートカットの銀髪で、暗色系のドレスを好む。年齢は四十歳前後。

・ダイ・ジーン（大臣）
『所属』魔法監督省
『役職』魔法監督大臣
『種族』エルフ

作者のノリと勢いと気分で名づけられた可哀想なジジイ。国王とは、公務を越えた信頼関係があり、側近としてほとんどの時間を城内で過ごしている。晶のこの世界のことや、魔法というものの概念

を教えた人物。ドMで男色家の疑いがある（晶の推測のみ）。
容姿は背の低く、ルックスはスター・〇ォーズのヨー〇に近い。
年齢は二百歳前後。

～第六十九話～咆哮、血煙、悪意の嵐《後編》（前書き）

こんばん！本編も進めます。前回の紹介では、出すこともないだろうと思って裏設定を色々出してしまいました。テヘペロ。

～第六十九話～咆哮、血煙、悪意の嵐《後編》

はっきり言って、僕の剣技は二流以下だ。それでもこうもかわされるとは思いもしなかった。加速をかけた剣戟は、読まれているかのようにのらりくらりベルフェゴールに避けられる。永遠とも思える追いかけっこは、小一時間繰り広げられた。その間、ずっとそんな状態。かと言って、打開する策も思い浮かばず虚しく剣が空を切る。

「いい！いいわぁ！その殺気、ゾクゾクしちゃう…」

「お前は何でもアリか！」

「やぁねぇ。そんなことないわよぉ？貴方だからこんな絶頂手前の興奮を味わえるの！さぁ！早く！焦らさないで！」

「なら止まれクソ女」

そんな調子で小一時間。向こうのふざけ具合をよそに、本気で当たる気がしない。更にこんなアホな会話も挟まれて…。もう、精神的にきつい。

「主！単調になるな！自分の持つカードを全て使わんと、こやつらには勝てんぞ！」

ええい！わからいでか！僕の持ちネタは、土、時、召喚魔法に、この輝くトラペゾヘドロン。…しかないなら、それを活用して勝つしかないじゃないか。カードの複合、使うタイミング、順番…。って、そんなこと考えなくても良かった！なんで僕はこれを見逃して

たんだ。フィールドが広いから逃げられるんだ。なら、動ける範囲を限定されれば…。

「あら？もう終わりなのぉ？なら、私が責めていいのね？」

ベルフェゴールが、唇を舌で舐め上げる。そのきらめく唇は、どこまでも蠱惑的だ。

「馬ぁ鹿。鬼ごっこが終わっただけだ。壁（ウォール）よ！！」

どこかの錬金術師のように、パンと手を叩く。無詠唱でも良かったけど、魔法は形から入った方がその威力や精度が上がるのはこないだ学習したばかりだ。これが僕が土属性魔法で最も多用していた得意魔法だ。防御にしか使ってなかったけど、意外と汎用性あるのよ、これ。一瞬にして地の利を奪い、僕とベルフェゴールを、数メートル四方に高い土壁が覆う。せいぜいボクシングのリングくらいの広さだ。間合いとか攻撃とか考えて。

「あぁ！キーちゃんと二人きり！目くるめく甘美を考えるだけで…はぁん！」

「…触れずに達するとか、逆に尊敬するよ。僕でも無理だ」

言い切ると同時に、加速で一瞬で間合いを縮め、腰砕け状態のベルフェゴールを袈裟切りに斬る！よし！手応えあり！

「あぁ！」

…別に、卑怯とかこの際関係ねぇよな？あいつが勝手にイっただけだし、僕何もしてないし。

「…いいわぁ。やっぱりキーちゃん最高…」

壁の逆側に、今切り伏せたはずのベルフェゴールが立っている。斬られた瞬間に空間を飛んだのか、そのキャミソール紛いの服は破れ、その肢体が露になっている。

「厄介だな、その能力。空間を限定してもイタチごっこになりかねない」

「じゃあ、私がキーちゃんのとこに行ってあ・げ・る」

そういうや否や、ベルフェゴールが目の前に突如出現した。クソ！反則だろこれ！とっさにバックステップして避けたが、ローブの前面の胸から腹にかけて十字に切られている。切られたところがだらしなくはだけ、肌にも薄い血のラインが走っているのがわかった。せいぜい皮一枚切られたくらいだ。ただちに影響はない。

「キーちゃんの裸、綺麗…それに…美味しい」

「待て！別に脱いだわけじゃねぇだろ！誤解を生む表現はやめれ」

「誰に？今は私とキーちゃん二人きりなのに…」

ベルフェゴールが鋭利に尖った爪を舐める。あいつの武器はそれか。ゴブリン時と同じだな。しかし、たしかにあの空間跳躍能力は厄介だが、それと爪による攻撃だけで、七つの大罪に居座れるはずがない。もっと何かあるはずだ。何か…。

「えっ？貴女達も楽しみたいの？そうねぇ…どうせ貴女達も私の一

部なんだから、それもいいかもね。乱パも嫌いじゃないしねぇ」

ーーーパチン！

再び、虚空に指を弾く音が響いた。途端、ベルフェゴールの傍に何人もの蝙蝠の翼を持つ女が立っていた。実際見たことはないけど、たぶん夢魔（サキュバス）だな。その容姿が若干エリー入ってるのが何よりの証拠だ。夢魔は、獲物が欲する姿をとって現れる。

「あら、こういう子がいいの？キーちゃんってロリ…」

「断じて違う！」

そう突っ込んでおいて、

「やだ…キーちゃん…いきなり突っ込むなんて」

「黙れ」

ともかく、気づいたこと一つ。ベルフェゴールの顔が変わってる。正確には首から上が。

「あれ？気づいた？」

「気づかないはずがないだろう」

髪が短くなり、内巻き気味になっている。顔も、さっきのけだるそうな上気した顔から、あどけなさ残る妙齢のそれになっていた。

「私は二人で一つの身体。さっきまでのは怠惰（スロウス）の私。これが、色欲（ラスト）

本来の私よ」

「チェンジしたなら服も直せよ馬鹿」

「やぁよ。露出高くしたのはキーちゃんじゃないの。こっちの方が好みなんじゃないの？」

陽気に笑うそいつは、純粋に艶っぽい行為を望んでいるかのようなあどけなさだ。危うくその屈託のない笑顔に篭絡しかける。

「……」

別に敵にこんな素直な反応を見せる必要性はないだろ。なんだこのザマは。

「キーちゃん可愛い…。まぁいいわ、貴女達！楽しんでなさい！」

ベルフェゴールの一声とともに、一斉に夢魔の群れが押し寄せてくる。かわし、切り伏せ、しかしまだまだ増殖する。悪夢だな…。エリーに似た容姿を次々と切り倒す現状も含めて。

「あれ？弾切れかな？」

それは唐突に訪れた。つうか意外に早かった。なんだ、打ち止めか？制限があるなら、好機を逃す手はない。僕は夢魔の群れを振り切り、無防備なベルフェゴールを狙う！

「危なかったけど、残念だったな！」

横に一閃。ベルフェゴールを切り倒そうとした直後…。

「残念、本当にこれが弾切れ。本当に残念だわ…」

僕の剣は、壁のように現れた夢魔を斬ったに過ぎなかった。胴体が離れきらない内に、ベルフェゴールの背後に意識を飛ばす。お前が壁を負ってることくらい織り込み済みだ！今ならサキュバスの壁が死角になり、僕の行動を察知出来ないはずだ。

「これで本当に終わりだ！！」

ベルフェゴールの背後の壁から、槍やら何やらとりあえず刃物系の武器を生成し、一気に貫く。あまり僕が突っ込み過ぎると自分の作ったトラップに正面衝突しかねないから、死角な内に減速する。

「あああぁぁ！！！」

絶頂に似た絶叫を発し、ベルフェゴールが膝から崩れる気配がした。これなら一溜まりもないだろう？

「はっ！はぁ…ぁ…ん…」

って、まだ生きてやがる。流石世界の敵。タフネスは規格外か。つうかこれ正しく喘ぎ声か？ドMにも程があるだろ…。しかし、もうこいつにさっきみたいな魔力は残っていまい。

「じゃあな、淫乱。文字通り死ぬ程逝かせてやるよ」

憮然と立つ僕を、濡れた上目遣いで見上げる。ホント、こいつのコレは命を懸けたプレイだな。死ぬ間際までこれとは。

「責められるのも大好きだけど、責めるのも同じくらい大好きなのよね…」

「残念だったな。もうお前に僕を責めるだけの体力は残ってないだろ？」

「えぇ。いっぱい果てて、少し疲れちゃったわ…」

…なんだ？こいつのこの余裕は。なんだ？この違和感は。こいつの目は、死にかけの目じゃないことは確かだ。しかし、こいつにほとんど力が残ってないことも確かだ。なのになんだこの焦燥感は…。

「疲れて、幻惑（テンプテーション）に裂く魔力がなくなっちゃった…」

待て、幻惑（テンプテーション）？こいつ、そんなのかけた動きなんてなかったんじゃ…。

「ほら、見て？キーちゃん。私じゃなくて、あの子達…」

ベルフェゴールが、指についた自分の血を舐め取り、僕の後ろを指す。罠だろう？僕が目が離した隙に、空間跳躍で逃げる。そんな所じゃないか？

「別にそのまま冷たい目で私を射殺してくれてもいいんだけどね。それでもイけそうだから。でもね…」

なんだ？なんなんだこの得体の知れない恐怖は。

「貴方とのプレイにとって…さっきのプレイにとって、私が消耗することが最大の意味だったの…。ねぇキーちゃん？切り札は、最後

までとっておくから効果があるのよ?」

振り向いてはいけない。ブラフだろう?…しかし、僕は見てしまった。わかってしまった。こいつが言っていた言葉の意味を…。

「ぁっ…」

声が出てこなかった。それは絶望。それは悪夢。

「宣言通りになったわね?キーちゃん。私の前に這い蹲らせてあげるって」

笑みを含んだベルフェゴールの声が、僕の耳の傍で聞こえた。

「なんで…」

なんで気づけなかったんだ。なんでこんなことになったんだ…。脳裏に、フラッシュバックがよぎる。あの時はココ。僕の目の前で、ウラヴェリアに貫かれたココの姿。そして今度は…。

「私の空間跳躍は、何も自分だけなんて言ってなかったわよね?あの時、アスモデウスも一緒だったこと、キーちゃん完全に忘れてたわよね?つ・ま・り、これは貴方のミス。貴方が招いた事態」

「貴方が護っていた、護ろうとした子達。…この過去形は、あってるわよね?空間跳躍でこの子達を呼んで、私が怠惰(スロウス)から色欲(ラスト)に代わった時に同時にかけた、邪眼より強力な感覚支配…それが、私の力。この壁を作ったことも仇となったわね。これじゃ、お友達の声も聞こえないもの」

「そしてそれでこの子達を夢魔達に見せ、キーちゃんに攻撃させていた。貴方は敵だと思い、なんの躊躇いもなくこの子達にその凶刃を向けた…」

「貴方は何のために此処に来たの?この子達を護る為よね?あっははは!それなのに、自分で手をかけてたら世話ないわよねぇ?ねっ言ったでしょ?キーちゃん。這い蹲るのは貴方だって」

ベルフェゴールの言葉に嘘はなかった。そこに転がる斬殺死体はさっきまで僕も一緒にいて、今はラスティンさんと共に避難しているはずの、今回の任務の護衛対象…東の平原の住人、獣人の子供達だった。逆に膝から崩れ落ちた僕の背中から、抱きつき手を回すベルフェゴール。首筋に舌が這い、淫靡な感覚をもたらす。受け入れたくない、悪夢なんて生易しいものじゃない現実に心を砕かれた僕に、その悩ましげな官能がすんなり入ってくる。僕の瞳は、何も映していなかった。

「最高…今のキーちゃん、本当に最高よ…。さぁ、楽しみましょう?貴方も私と同じ、快楽奴隷となって、永久に官能を貪りましょう?私と一緒に…」

～第六十九話～咆哮、血煙、悪意の嵐《後編》（後書き）

なんだこの官能小説。いや、Ｒ１５の禁則事項は犯しません。あしからず。わっふる言っても一線を越えません。この続きをノクターンで書く予定もありません（笑）でも、羨ましくはあるんだよなぁ…。自分なら、一発で篭絡しそうだ（笑）

～第七十話～天使の梯子（前書き）

初カキコ…ども…。ということで、なんだかんだ連日投稿です。色々ありまして、まぁ…。別にニートじゃないですよ?働いてますよ?心境の変化です（笑）いつまで続くかわからないけど。

～第七十話～天使の梯子

ベルフェゴールの手が、ローブの襟から滑り下り、僕の体をまさぐる。僕は抵抗出来ず、ただただその悦楽に身を任せていた。ダービーの声も、今は聞こえない。失ってばかりの戦いを、ただ忘れたかった。

「っ！はぁ…」

その手が僕の弱点を次々と攻略していき、耳元で僕の喘ぎに反応した、ベルフェゴールの愉悦が聞こえる。

「いいわ…もっと、もっと…感じて…」

ベルフェゴールはいつの間にか服を脱いでいて、僕もローブを脱がされる。背中に、ベルフェゴールの体温を感じる。耳を舐める、水っぽい淫靡な音が直接脳を刺激する。僕はなすがままだった。

「キーちゃん…代わって…」

ベルフェゴールが正面に来て、その両足を開く。何も考えられず、ただ生殖本能に突き動かされ、行為に及ぶ。

「あっ！いきなり…すごっ…上手い…」

舌を突き出し、無心にベルフェゴールを舐める。自分の口から発する音に、舌先に感じる感触に、鼻腔を支配する媚薬のような女の匂いに、艶やかな声に、僕の頭は更に白に染まる。

ただ、しばらく五感を全て使い、『女』を貪る。どれくらい時間が経ったかわからない。完全にトランス状態になっていた。

ーーー主、最低だな…。

ダービーの、ような声が聞こえる。

ーーー失望したよ。

ーーー堕ちるところまで堕ちたな。

ーーーアンタなんか、顔も見たくない。

聞き覚えのある声が、ぼんやり聞こえた。

ーーー晶、お前は何をしている。

ーーー私は、そんな子に育てた覚えは…。

ーーーお前は神谷家の恥だ。二度と帰ってくるな。

ーーーアンタみたいな屑が弟なんて、悪夢ね。

ーーーお兄ちゃん…不潔…。

これは…誰だっけ。あぁ家族か。随分遠くに来てしまったんだな…。

ーーーマスターマスターのそんな姿、見たくない…。

ーーー今のアキラには、付き従えんな…。

ーーーうらやま…けしからんな。

ーーーお主、そんなに醜い男だったのか。

アクアリウス、レオ、タウルスにバルゴー…十二宮のお前らか。なんだよ。人間は色々あるんだよ、お前ら神サマと違って。

ーーーあきちゃん…もう、やめて…。

……香奈子の声が、ことさら大きく響いた。香奈子…僕が一度、愛した人…。そんな目で、僕を見ないでくれよ…。

ーーー…ラ君…。アキラ君…！

「ココッ！！」

突然体が飛び起きた。自分の意思じゃなく、夢を見て飛び起きるような、そんな感覚。駄目だ…頭が痛い…。

「…どうしたの？さぁ…早く続きをして…？それとも、もう挿入れたくなった？それでもいいわ…さぁ、早く…」

相変わらず、僕の下でベルフェゴールの官能的な声が聞こえる。この状況はなんだ…。美女が、裸で僕を求めている。頭が働かない…この頭痛も、このまま欲求にしたがったら収まるのだろうか…。

ーーーアキラ！お願い、戻ってきて…

「っ！！エリー！」

性欲の重力に負ける一歩、いや半歩手前。ようやく、心が戻ってきた。僕が…帰って来た！

ーーー魔術師様…。

「「魔術師様…」」

頭上に、天啓のように護るべきだった、護らなければいけなかった子供達の姿が浮かぶ。その姿は、天使のようだった。

「アキラ君…」

「ココっ！」

似た境遇で僕の手からその命を散らした、ココが導いている。

「魔術師様…」

「あっ…あぁぁ…」

涙が止まらない。自分がしてしまったことが、光景がよぎる。僕は…なんてことを…。

「ボクたちは、魔術師様を恨んでなんかいないよっ！」

「なんなの…なんなのよこれぇ！！？」

ベルフェゴールが吼える。快楽のクライマックスを迎える直前におあずけをくらったのだ。色欲の権化の怒りは怒髪天どころではないだろう。

「泣いてくれた…私達の為に悲しんでくれた」

「名も知らない僕たちの為に、涙を流してくれた」

「それだけで、充分嬉しかったよ」

「魔術師様が来てくれなかったら、きっともっと酷い殺され方してた」

「だから…もう泣かないで…」

子供達の声が、天から降ってくる。そんなはずないだろ！殺されて、命を失って、そんなこと思えるはずがないだろう！！

「思えるよ…私がそうだったから…」

ココが、優しく微笑んでいる。

「前世でもそうだったんだね。トロい私を助けようとしてくれたんだね…」

「お前っ！記憶が…」

「同じ過ちを繰り返さないで…。護れなかった人の為に、アキラ君の命まで無駄にしないで…。アキラ君が護れなかった命は、私が導

くから…」

薄くなっていく、ココの姿。待て！待ってくれ！

「ありがとう…今でも、そう思ってくれるんだね…。大丈夫！この子たちはもう大丈夫だから…アキラ君は、自分の為に戦って…そんなアキラ君が、大好きだから…」

ガラガラと僕が作った防壁が崩れ落ちる。外の空気が、戦場の臭いが僕を迎える。

「天使の…梯子…生命の樹…」

その階段から、何人の天使が下りてくる。一人が、ココを見て頷く。ココもそれに応え、子供達の手を引く。

「待て…行くな…」

「大丈夫。私がお願いしたから。大天使様に、アキラ君を護ってくれるように、お願いしたから…」

「ココ…」

「さぁ！アキラ君！立って！」

ココが叫んだ直後、足元が揺らいだ。

～第七十話～天使の梯子（後書き）

今回は、二部制でいきます。では、数時間後に（笑）…ベッタベタだなぁ。

～第七十一話～八大地獄（前書き）

七十話を書いて、今そのままこれ書いてます。話の構成上とはいえ…どうなんでしょう。

～第七十一話～八大地獄

「ノアを真似たか。学習能力はあるようだな」

アスモデウスが、下卑た笑いを浮かべる。俺はキーランスを参考に、氷の壁を作りこいつの行動範囲を狭める。クッ！あいつの後塵を拝するとは…。しかし、効果的なのもまた事実だ。俺は、一族の誇りにかけてこいつを葬らねばならない。我が一族…ヘラクトドス家の名誉の為に！

何も答えず、無心で槍を振るう。外したそばから、接触したところが次々に凍る。

「フハハハ！いいぞ？さっきとは、集中力（コンセントレーション）が違う！殺気が違う！お前の言葉に、嘘はなかったようだな！いいぞ！貫いてみよ！貫かれるのも嫌いではな…」

「黙れ異常性癖が。耳が穢れる」

ミドルレンジからの突きをかわされ、アスモデウスのすぐ傍の壁に、横ばいに氷柱が出来る。幾合隔てても、形勢は変わらないように見えた。

「…なんだ。買い被りか。最初は見直したが、同じ事一辺倒ではないかそれなら、こっちから行くぞ！責めるのが、俺の真骨頂…」

「安心しろ。もう終わった」

転調は、慣れがあるから効果があるのだ。同じ事の繰り返し。次第にそれは思考を停止させ、裏の狙いを気づかれ難くする。お前の

敗因は、その慢心だ。

「何っ！？」

ようやく自分の置かれた状況に気づいたか。攻撃を外す度に作られた氷柱。氷の壁で隔離され、氷点下数十度の世界でそれは次第に成長し、肥大化する。途中からアスモデウスを囲うようにわざと攻撃を外し、次第にやつの活動範囲を狭めていく。そして最終的に…あいつは身体一つ分まで追い詰められるまで気づかなかった。いや、俺相手ならいつでも倒せると油断していた。だから、この氷の檻に気づかなかった。

「貴様…謀ったな！？ただの犯され方じゃ済まさないぞ！！」

「やれやれ…。お前らは終始そればかりか。その分だと、あの女も同じか？まぁあいつがどうなろうと知ったこっちゃねぇが。下品で下劣で愚劣な悪魔。お前との因縁も終わりだな。残念だったな、見せ場がなくて」

「きっ…貴っ様ぁぁぁぁ！！！」

最後の仕上げにその胸をゲイボルグで貫き、氷の檻は施錠された。気づくと、悪趣味な笑いがこみ上げていた。これでは、あいつ…キーランスと一緒ではないか。気に食わん。

さて、もう一人の獲物も横取りしてやるか。こいつは、思ったより手応えがなかったからな。

「フンッ！ハッ！」

中距離の攻撃はこいつには効かない。罪人の剣（ガリアン・ソード）をしまい、魂喰い（ソウルイーター）を斬りつける。血を吸っていないこいつは、今はただの片手剣だ。そして、こいつはやはり簡単に吸わせてくれないだろう。

「ホンット、まだまだ青いなぁ、お前は。しかし、ノアが来てからはだいぶマシになったか。これが友情パワーってやつか？」

ベルゼバブがかっこつけて講釈垂れながらステップでかわす。

「黙れ！」

からかわれて頭に来る。他の二人がどうなっているかは、その土と氷の壁に阻まれてわからない。

「主！これを！」

内側からヘル・ブリング（晶の指環はヘラと呼んでたか？）の声が聞こえた。鎧に守られていない、左手に手首から何かが這い上がる。数瞬で形を成したそれは、篭手だった。

「なんっだ！？これ…！」

その間もベルゼバブの攻撃は続く。やつは一人で盛り上がっているのか、こちらの変化に気づいていない。

「いいからそれで受けて！打って！」

よくわからないまま言うようにする。まだやつの速度についていけない俺は何度か攻撃を喰らってしまうが、偶然にもその内の一つ

を左手の篭手で受けることに成功する。

「これは…！」

やつが柄にもなく怯んでいる！今だ！

「ガッ！！」

胸の中央に俺の掌底を受け、ベルゼバブが派手に吹っ飛ぶ。なんだ！？今まで魂喰いを受けても平然としていたこいつが。

「それは…破魔の篭手か！」

「えぇ。ご名答」

「お前が操るのは魔の物だったはずだろう！？何故そいつを持っている！！」

「あら、これだって破『魔』よ？『魔』を冠する物に変わりなくてよ」

俺の内側から、ヘル・ブリングの皮肉たっぷりの声が聞こえる。悔しいが、俺にはこいつらの会話がわからん。

「破魔の篭手…またの名を、ヤールングレイプル。雷神トールが所有物で、貴方が殺したマドラの武器、ミョルニルと力帯メギンギョルズと三位一体の宝具。これそのままでも魔を砕く力がある、立派な武具よ」

マドラ…晶との禍根を産んでしまったあの一件。あいつの一撃で、

俺は全てを悟った。いや、魂が理解したと言った方がいいのだろうか。雷の一撃を受け、俺の全ての脳細胞が働き、五感はおろか第六感までが刺激され、天啓を受けた。そのショックで、しばらく意識不明に陥る羽目になったが…。

俺は、晶と和解しなくてはならない。今のままでは、確実に俺たちは争う運命にある。そしてそれは、世界崩壊の足がかりになってしまう。あの一撃で…俺は予見した。黙示録を見た。変えなければならない運命…。晶の身内をこの手で葬って和解などと、なんて都合のいい話だ。俺なら無理だ。しかし、その元凶を作った張本人がここにいる。俺も晶も、戦う理由なんて、己の大事なものを護りたい。ただそれだけだったのに。

「クッ！ミョルニルは葬ったというのに、まだ邪魔をするか…」

「ベルゼバブ…俺はお前を倒さねばならない。前世の因縁というだけでなく、世界を護り…晶との絆を取り戻す為に！」

「勝手なことを！この世界に来たお前らを精神操作（マインド・コントロール）していたのは、レヴィアタンの独断だ。俺は関係ない」

「それでも…『嫉妬（エンヴィー）』は俺の敵に変わりない」

「ハッ！確かにそうだな！だが一撃当てただけで調子に乗る…っ！？」

やつの胸に裂傷の痕のようなものを見つけ、突進して魂喰いを斬りつける。理由はわからない、だが、正解な気がする。

「グッ…バァ！」

血が噴出し、魂喰いを濡らす。剣がメキメキと音を立て成長する。

「貴っ様…気づいていたのか？」

「なんとなく…だよ」

「正解だ！我が主！破魔の篭手に打たれたそこは、少しの間魔力抵抗値が落ちる。魔素の塊であるそいつらにとって、鎧を剥がされたようなものだ！後は…わかるな？」

「おうよ！ヘラ！」

「その呼び方は止めろ！」

魂喰いに斬りつけられて魔力を削がれたのか、ベルゼバブの動きはかなり精彩を欠いている。今の俺もボロボロだが…これなら対抗出来る！

「調子に乗る…！？」

俺らの数メートル先、晶が作った壁が突然音を立てて崩れた。どうした…無事なのか？晶…。

僕が作った壁が瓦解した。その原因は、降り立った二人の天使によるものだった。

「あっ…こんなの…」

ベルフェゴールが喘ぐが、それも僕も無視して一人の天使が言い放った。

「七つの大罪が一角、ベルフェゴール…お前の命運は、最早尽きた。永久に地獄を彷徨え」

すらりとした長身に、ウエーブがかった流れる金髪。純白の衣に、孔雀のような翼…。そいつは、女だった。

「ミ…ミカエル…」

「そう。我が名はミカエル。神に似た者。貴様らを奈落に落とす、断罪の天使だ」

ミカエル…大天使長ミカエル。なんだこいつの神気は…。僕にもわかる。規格が違いすぎる。

「安心して。貴方と仲間は大丈夫だから。旅立った貴方の大切な人たちも、ラファエルが送っているわ」

もう一人の天使…僕に話しかけるそいつも、ミカエルとほとんど遜色のない神気を纏っている。圧倒的過ぎて、息をするのも忘れてしまっている。

「私はガブリエル。神の人、ガブリエル。私たちは、貴方の味方だから」

ショートカットに落ち着いた口調。顔は下手すると僕より年下なんじゃないかと思う位童顔だが、見誤るはずがない。

「セ…熾天使(セラフ)か……」

「安心しろ、人間。今は、お前をどうこうする心算はない」

「元より、貴方は創造主に選ばれた天国への扉(ヘブンズ・ゲート)の主。さぁ…心を空にして。私達が、貴方の敵を討ち滅ぼす力を授けます」

ガブリエルの手が僕の頬をなぞり、僕は目を閉じた。輝くトラペゾヘドロンに、ミカエルの手がかかる重みを感じた。

「我、断罪の剣となりて、神の御名に応えん」

目を開けると、ミカエルが僕の剣に溶け込んでいく。火…炎の魔力が、右手を焼く。

「ちょっ…ちょっと！聞いてないわよこんなの！ベルゼバブ！アスモデウス！」

ベルフェゴールは何時の間に用意したのか、服を着て、飛びのいている。横目で見ると、膝をついたベルゼバブ、氷漬けになって身動きが出来ないアスモデウスがいた。ガラム、油断してんな？まだ生きてるぞ？そいつ。

「神の枝葉…ヒトの悲しみを満たす器。我は罪を受ける器とならん」

僕の体内に、水の魔力が満たされる。相克する魔力を受け、僕の手が火傷を負うことはない。

「「時を越え、闇と氷の力を得て、地の底に其らを封せんとす！奈(ナ)落(ビス)

落！八寒地獄！！マカハドマ！！！」」

更に白夜とガラムの魔力を吸収し、その剣先に渦巻く物は…。

「ブラック…ホール…」

「全てを引き寄せ、光すら閉じ込める地獄への入り口…。さぁ、やつらに引導を渡せ！」

ミカエルの声が頭に響き、僕は本能のままに七つの大罪どもへ向け、その剣を振るう。

「待て！それは駄目だ！幾ら俺らでも、そこだけは抜けられない！」

「いや！嫌っ！まだ足りないの！キーちゃん！まだ貴方の命を吸い尽くせて…」

「むぉ！うえあえん！いあわ！えあうほろふえ！（クソ！抜け出せん！貴様！ヘラクトドスめ！）」

「待て！ノア！そこだけは嫌だぁぁぁ！！！」

「いや！いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

「ふおおおおぉぉぉぉぉぉ！！！！」

三者三様に、その黒い闇に吸引され、何事もなかったかのように辺りに静寂が訪れた。火が爆ぜる音だけが、周囲に響く。

「地獄の最下層の氷原は、いくら貴様らでも寒かろう…だが、同情

はせんぞ」

「ノ…アキラ。お疲れ様。疲れたでしょう。今はゆっくりおやすみ」

放心状態の僕からいつの間にか抜けたガブリエルが微笑むと、僕は糸が切れたかのように気を失っていった。

待て！まだ白夜がいる…あいつも、やらなきゃいけないのに…つうか、任務が…。

……

……

…

～第七十一話～八大地獄（後書き）

なんか一番大事なところなのに急いでしまった感があってすみません。ホントすみません…出勤時間が迫ってるんです…。短いスパンで二話とか、ホントに言わなきゃ良かった…。あっ、色々オリジナル設定加えてます。篭手とか、天使の名前の意味微妙に変えてみたり。あと、個人的には同性愛は否定も差別もしません。私に関る事でなければですが（笑）

登場人物紹介《護国騎士団編》（前書き）

ども。三話またぎで紹介続きです。初まりの者たちは別にやってしまったので、騎士団の他の人の紹介です。あっ、アレン王子もやってたか。

登場人物紹介《護国騎士団編》

《キュートス国護国騎士団》

キュートス国の軍にしてセラス最大の兵力を持つ。現国王キート＝ベイン三世が『騎士王』と呼ばれる所以も、直接兵を率いて護国騎士団の隆盛に強く関っていることによる。騎士団は、身体能力や武器を扱う繊細さで、フィジカルでの直接攻撃に長けた騎士団と、明晰で、魔法補助や魔法攻撃に長けた魔術師団に分かれる。更にそれぞれ前衛後衛に分けられ、その属性を元にさらに分隊に分けられる。しかし魔術師団でも部隊長クラスになると、（本来は魔法媒体の）武器の特性から白兵戦に出る事も少なくない。

ちなみに大魔導士や歴史に名を残す者は、ほぼ魔術師団から出ているという若干騎士団にとっては不憫な事実もある。これはエルフの社会…キュートス国が魔法に対して重きをおいていることに所以する。勿論、獣人族のコミュニティのように単純に強い者が特別視されているところもある。

入隊は志願制で、騎士団養成の学校もある。施設はキュートス城のすぐそばに建っていて、城から軍部庁舎を挟んで反対側には演習場もある。更に特別棟や宿舎、食堂や資料室、図書館等設備は充実していて、団員は建物内で主な生活をするものがほとんどである。

騎士団はキュートス国の花形であり、訓練の厳しさに脱落する者も後を絶たないが、隊長格など名前が売れている者は城下では特に人気があり、姿絵やグッズ等が販売される者もいる。キュートスは意外に俗っぽい国。

《騎士団》

・キート＝マドラ＝グランダル

『属性』雷

『装備』ミョルニル（槌）
『所属』護国騎士団
『役職』護国騎士団騎士団長
『種族』エルフ

前騎士団長で、現国王キート＝ベイン三世の実兄。筋骨隆々のその体躯は、とてもエルフには見えない。歴戦の勇者で、弟のベインと共に護国騎士団の隆盛に一躍買っている。原初の世界に因縁があるわけではないが、ただのエルフにしてその存在を超越した者。相棒のミョルニルは雷帝トールの所有物にして、最強の武器の一つ。その重さは単位では図れず、マドラの魔道資質によってしか扱いきれる物ではない。騎士団に入団する前は冒険者紛いのことをしていて、単身でガラリオン山脈に上り竜を討伐。大魔導士にも並ぶ最も名誉のある称号竜殺し（ドラゴンスレイヤー）を持って凱旋してきた。最初はその豪胆で豪快で適当な性格からホラ話にされかけたが、その竜の首を直で持ってきたことから間違いないとされた。同時に、この男なら何をしてもおかしくないという共通意識を持たせたエピソードでもある。

初めは晶をエルフでないただのひ弱な人間と決め付けていたが、ただの余興の私合（試合）で興味を持ち、緑竜の森にて晶の真価を認める。また、晶とグレン・ガラムの試合を嗅ぎ付けて好戦的な性格が故テンションが上がり、世界蛇ヨルムンガルドしか耐え切れなかったというミョルニルを晶達に投げつけるというお茶目でおっちょこちょい☆な一面も持つ。

ウラヴェリア討伐の任務に際して、晶とグレンの魔道爆発（フレア）の煽りを受けてダメージが癒えぬ間に、後ろから白夜の剣を受け、倒れる。その間際に雷属性の補助魔法、細胞筋力。神経伝達のオーバーヒートにより白夜に捨て身の一撃を当て、白夜を昏倒させた。その時の接触で白夜の脳内電流が流れ込み、白夜の過去や思想、本来の姿を知り、白夜に晶と和解するよう促すと共に、覚醒のきっかけとなった。最期は晶の腕の中で憎まれ口を叩きながらも晶に本心を告げ、

目を閉じた。享年百十五歳。
名前のモチーフはかき混ぜ棒のマドラーと、聖剣デュランダルから。

・カルバン・ヴェル・コーチ
『属性』氷
『装備』？？？
『所属』護国騎士団
『役職』騎士団総括～護国騎士団騎士団長
『種族』エルフ

マドラの死去により、護国騎士団の統括から騎士団長に推挙された。この組織での統括とは、それぞれのトップ、騎士団長と魔術師団長の意見意向などをまとめ、それを元に以下の団員に徹底させる云わば補佐役。前団長のマドラが好き勝手やっているように見えたにも関らず、組織が機能していたのはカルバンの働きが大きい。マドラ程豪気でインパクトはないが、堅実で冷静沈着で仕事は雑務まで完璧にこなす精密機械っぷりは、団員の信頼も厚い。気分やモチベーションによる浮き沈みがない為、敵に回すとこれ以上無いほど厄介な相手。特別突出しているところがあるわけでもないが、全体的にハイスペック。団長は例外なくオリハルコン製の神話級の武器を持っているので、彼もなにかしら持っていることは間違いないが登場は未定。
スラッと背が高く、神経質そうな印象を受ける。原理は不明だが、方眼鏡をかけている。髪は蒼白のオールバック。年齢は若く七十前後。
名前のモチーフはカルバン・クラインとヴェル・サーチ、コーチを合わせたものだが特に深い意味はない。別にブランド指向ではないが、作者はグッチのベルトとカルティエのライターが欲しい。

・ラスティン
『属性』雷
『装備』バスタードソード
『所属』護国騎士団
『役職』前衛騎士団第三部隊長
『種族』エルフ

全身に傷跡残る、キュートス歴戦の戦士。強面の外見に似合わず、子供好き。幼い頃流行病で両親を亡くしている。その経歴から、戦場で非情に徹することの大事さを知っている。年齢は七十歳前後だが、貫禄がある。

・ジュダイ
『属性』風
『装備』加護済(エンチャント)みのフォルシオン（ミスリル）
『所属』護国騎士団
『役職』後衛騎士団第二部隊長
『種族』エルフ

『風のジュダイ』というなんの捻りもない二つ名を持つ部隊長。比較的温和な人物で、晶とも交流がある。
襟足を伸ばした短めの金髪に、騎士団の基本装備である白銀の鎧をずっと愛用している。年齢は五十歳前後。

《魔術師団》

・セラトリウス＝ナル＝ルーシ
『属性』無
『装備』大極図（水晶型武具）
『所属』護国騎士団
『役職』護国騎士団魔術師団長
『種族』エルフ

二世代の間護国騎士団を支えてきた大魔導士。その属性を持つだけで歴史に名を残すことが約束された『独立属性』の、『無』を持ちそれに恥じない功績を残してきた。現在の護国騎士団のスタイルは、セラトリウスが確立した。頭脳明晰で、だがしかし状況によっては自ら進んで矢面に立つ。かつてはギランの盟主、ウラヴェリアと死闘を繰り広げた事も。面倒見が良く、部下に寛大なところもあるが、それ故年少のマドラや晶にあまり敬意を持たれていない…というより、いいように振り回されている苦労人。堅物で常識人と思われがちだが、西の草原の獣人族の長を博打で嵌めるという下衆い一面も。現在は後進の教育に力を入れ、晶たち愛弟子の成長に心から喜んでいると共に、高齢ゆえの身の振り方も考え始めている。

戦闘スタイルは主に後方支援。『無』の能力と、相克、相殺の宝貝『大極図』による敵攻撃の無効化、吸収がメイン。しかしその攻撃の特性が、魔法や魔術の類の側面が強いものしか効果を発揮しない。すなわち、物理的側面が強い攻撃は無効化出来ない。しかしそれは武具を使った戦い方にすぎないので、『無』属性の特性である、他の属性魔法の『模倣』することで敵を圧倒している。あらゆる属性の魔法を『模倣』することが出来るが、それを極めることは出来ない。また晶の『時』や白夜の『闇』など、独立属性は『模倣』出来ない、

顎鬚を長く伸ばしていて、総白髪で禿げてはいない。年齢はキュートス最高齢で二百歳前後。イメージはハリーポッターシリーズのダンブルドア校長。

名前のモチーフは『なにもない』という意味のナル記号と、老子（ろうし）から。セラトリウスはタイプ時の打ち易さと語感から。

・ルバート
『属性』雷
『装備』ツヴァイハンター（大剣）
『所属』護国騎士団
『役職』前衛魔術師団第一部隊副官
『種族』エルフ

いつも何事にも興味なさげな態度だが、任務中は優れた分析能力と冷静な判断力でガラムを補佐する副官。珍しく富裕階級の出身で、それもありガラムの懐刀として可愛がられている。デンゼルとは同期で同じ属性なこともあって仲が良い。

戦闘時は巨大な剣、ツヴァイハンターを避雷針代わりにして敵陣に巨大な雷の雨を降らせる。また、ガラムとの連携で雷によって生じた高度の熱量を敵に放ち、ガラムの作り出す超低温の空間で生じた磁場でコントロールし、相手を蹂躙する。

自分の容姿に頓着が薄く、いつも寝癖頭。痩せ型だが、骨格はがっちりしている。年齢は四十歳前後。

・ガロン
『属性』水
『装備』鉄拳（ナックルダスター）

『所属』護国騎士団
『役職』後衛魔術師団第二部隊副官
『種族』エルフ

寡黙で、心を開いた相手にしか滅多に声を発しない。幼い頃エルフでは珍しい黒髪であることから迫害紛いの行為を受け、親からも虐待を受けていたことによる後遺症だが、その環境から脱却しようと騎士団に入団し、そこでシーリカと出会う。その中には勿論ガロンをいじめていた子供たちもいたが、彼らが訓練について行けずに辞めていくなか、ガロン一人だけ残ったことが自信にも繋がり、今の地位を得た。

得意分野は水を形状固定化しての壁の生成や瓦礫除去など大作業で、裏方に回ることが多い。得物の鉄拳はメリケンサックのことで、相手に当たる部分には鉄製の太く鋭利な突起が付いている。

長身で、前述の通り黒髪。渋い外見をしているが、実は弱冠四十五歳。

・デンゼル
『属性』雷
『装備』ツヴァイハンター（大剣）
『所属』護国騎士団
『役職』後衛騎士団第三部隊副官
『種族』エルフ

前衛魔術師団からコンバートされ、殉職したココの後任を務める。晶の部隊は属性に囚われない雑多な混合部隊とされている。それゆえ、後衛でありながら遊撃部隊としての顔も持つ。

仕事を全て完璧に近いクオリティを誇るがカルバンのように怜悧な印象もなく、どちらかというとカイムのようにいつも微笑を絶や

さない。が、どうしてもその笑顔が胡散臭く、たまに見せる鋭い眼光がデンゼルがただのお人好しでないことを証明している。同期に、前衛魔術師団第一部隊副官のルバートがおり、たまに飲みに行く仲。型破りな行動が多い晶を密かに心酔しているが、その胡散臭さで信じてもらえないある意味可哀想なキャラ。

オールラウンダータイプだが、ツヴァイハンターをルバートと同じく避雷針代わりにしての、雷のカーテンによる壁の生成と、電気信号による細胞活性での治療を得意とする。特に雷の壁は一分の隙も無く、並みの相手では攻略不可能なほど。

金髪セミロングに、糸目。たまに開く。年齢は四十歳前後。

名前のモチーフは、ＦＦ７スピンオフのデンゼルから。

登場人物紹介《護国騎士団編》（後書き）

意外と人物多くて苦労しました。ジュダイさんが不憫…とお思いかもしれませんが、一番不憫なのは項を書くギリギリまで忘れられていたガロンさんです（笑）

～第七十二話～接吻と過去と真実と（前書き）

今友人宅でＰＣ借りて書いてます。普段ノートパソコンだから、キーボードの違いに若干悪戦苦闘してます。感覚がわからない…。

～第七十二話～接吻と過去と真実と

幸い僕が目を覚ましたのは、まだ作戦の途中だった。作戦完了までまだ時間がかかりそうだと、うつむいたラスティンさんが教えてくれた。

「すみません、ラスティンさん…僕の勝手な行動で…。つっ！」

起き上がろうとしたが、身体中が痛くて思わず声が漏れる。

「大体は、お前を連れてきたシーリカから聞いたから、もう謝るな。相手は、国王が言ってた七つの大罪とやらなんだろう？戦いの魔力は、俺のところにも届いていたからどれだけの相手かはわかる。もういいから、今は横になってろ」

「すみません…あっ、デンゼル呼んでもらえますか？」

「わかった。少し待ってろ。俺の方こそ、子供たち…守れなくてすまんな…。突然現れたあの女の、妙な魔法にかかって…抗えなかった…」

「わかってますよ。あいつのアレは、そうそう耐えれるものじゃないですから…。それに、あいつはもう倒しましたから…」

ラスティンさんは自嘲気味に申し訳なさそうに笑うと、僕のいるテント…のようなもの（土魔術師が生成した簡易シェルター）から出て行った。僕が気を失っていたのは、せいぜい二、三時間のようだ。

「なぁ、ダービー」

ーーーなんだ？主。

「あの後、どうなった？」

ーーーどうもこうも、ラスティンが言っていたとおりだ。シーリカやグレン、カイムが来て、グレンとカイムは魔力探査を使ってガラムを元の隊へ連れて行って、シーリカは主を連れてここまで…。

「そっか…意外に力あんのな、あいつ」

思考がスカスカで、ふとどうでもいいことを思ってしまう。

ーーーいや、主を担いでいたのはガロンだ。

「あー、さいですか」

まぁ、逆お姫様だっこという醜態を晒す事態は免れたようで良かった。…逆にどこか一部の（腐）女子に需要がありそうな画にはなったけど、そっちのがまだ自然だし。

「…っ！？白夜は！？あいつをまだ殺して…！…ってぇ…！」

身体の痛みを忘れて飛び起きようとして、激痛に変な体勢で倒れこむ。くっ…これで明日の作戦まで間に合うのかよ…。つうか、白夜をやれんのか…？いや、やらなきゃ！あいつは僕の…。

「…もうそこに来ておる」

突然ダービーが声を出したかと思うと、聞き捨てならんことを言っているので急いで首を回す。そこには、幾晩も憎み倒したかつての友人…白夜がいやがった。

「…白夜……！」

無意識に枕元の剣を探り、握り締める。

「我が呼んだのだ、主」

「…なんだと？」

「晶…俺は…」

そう言うと、白夜は僕に近づいてきた。うっごけ…右手…。アレがわざわざ間合いに入ってきてんだ。あんな鎧、今なら簡単に斬れるだろう？だから、動け…。

「動け…ぐぁ！」

何故かさっきより痛みが増している。そもそも骨折しているみたいに、腕自体を動かす事が出来ない。

「主…すまん…」

なんで謝る？

「我が、一時的に主の腕の神経を遮断しておる」

「なんで！？お前に…お前にそんな権利が…お前ごとき、僕の魔力

供給がないとなにも出来ないくせに…」

「侮るな！我を誰だと思っておる！…主が爆発的に成長するうち、主の依存せん魔力くらい備えることくらい出来たわ！…正確には魔力の備蓄のようなものだが…」

「ダービー…お前、裏切るのか…？」

「違う！違うが主…すまん、今は我の言う事を聞いてくれ…すまん…」

「晶…」

いつの間にか僕のすぐ傍までまで来ていた白夜が、ゆっくり手を伸ばす。くっ！おいっ！こんな無防備な時に…手には何も持ってないみたいだけど、首を絞められたら、頚椎を折られたらマジで死んじまうじゃねぇか。おい！動けっ！動け…！

「…えっ？」

その手は僕の首をあっさりスルーして、額に乗せられる。こいつの属性がなんだか知らんが、その魔力を直接脳に叩き込まれたら脳が破壊されることは免れまい。そういう殺りかたもあったか。…じゃねぇよ！

「……えっ？」

と思ったら、更に意外な行動をしてきたから思わずまた間抜けな声を出してしまった。白夜の手から脳へ、脳から全身へ。微弱な電流のような魔力が流れ出し、足先まで染み渡る。と感覚を確認して

いたところで気づいた。

「痛くない…？」

「お前のその痛みは、神の力たる熾天使（セラフ）を直接身体に入れたことで、本来混沌（カオス）で出来ている俺ら人間の身体が拒絶反応を起こしたからだ。まぁ、それも徐々に慣れるらしいが。それを俺とヘル・ブリングの闇の魔力を流し込むことで中和した」

「へっ！あの時のお返しか敵に塩を送ったか。どっちにしろ、愚かだな。丸腰できやがって僕…の…」

「主、気持ちはわからんでもないが、いい加減にせんか？」

おい馬鹿！なにやってんだダービー！また神経ブロックしやがって、お前はベン○エースか！しかも今回は声帯まで麻痺らせやがって！

「晶、ちょっと苦しいかもしれんが、我慢してくれ…というより、本当にこれしかないのか？ヘル・ブリング」

「そう言ったでしょ？さぁ、早くやって」

入り口のところにいる、黒い影が笑う。くっ！何をするつもりだ…！

「晶…すまん！」

白夜がそう自分に言い聞かせるように言うと、顔を近づけてくる…何をするつもりなんだ…っておい！マジで何をするんだよ！

ーーーおい馬鹿！やめろ！やめろ！マジでやめろ馬鹿！

声帯が麻痺ってる僕の声が出るわけもなく…解説したくない。したくないけど読者の皆様に伝える義務が僕にあるから伝える。僕もこんな恥辱屈辱筆舌し難いこの悪夢のような出来事口にしたくないが、夢であって欲しいが…白夜が唇を重ねてきやがった。

ーーーいっ！ちょ！いって…！

脳髄にビリビリと痺れたような痛みが走る。

ーーーすまん晶。さっきみたいに直接脳に送ると、今度こそお前の脳を壊しかねないからな…俺もヘル・ブリングに抗議はしたんだが…。

ーーーあるだろ！絶対他になにかあるだろ！！……。

突っ込みが終わった直後、脳内に白夜の思念と記憶が同時に流れてきた。

ーーー俺が手にかけた、お前の身内…マドラの魔力の残滓だ。俺も今、お前の記憶や想いを感じている…。

白夜の言う事を信じるなら、マドラのおっさんの雷の魔力が脳に信号を送り、互いの情報を共有させているようだ。返事もせずに、いつの間にか白夜の記憶に見入る。小さいころの虐待されてきた記憶、施設に押し付けられて、安堵を感じる心、僕に出会った記憶、一人の少女との出会い…。

ーーーお前、初めてとはいえマグロかよ…だせぇ。

ーーーうっうるせぇ！中坊がいきなり上手くてたまるか！つうかお前だってそのころ童貞のくせに！…じゃねぇ！何見てんだ！

白夜を無視して、流れ込んでくる記憶に意識を向ける。その少女とともに施設を脱走し、どこかの国の小さな組織に入って、リーダーが殺されて白夜がその代わりになって…。

ーーー…なん…だよ…これ…。

目の前で虐殺されていく子供たち。白夜と同化した僕は何も出来ない。過去のことだとわかっているけど…。

ーーーやめろよ…やめろよ…！

なおも、虐殺は続く。そして、銃口が白夜を向いたとき…。

ーーーあぁ。お前も、僕と同じだったんだな…。

護りたかった者、護れなかった者…。それらを失い、その力を手に入れた。もう、失わないように、もっと護れるように…。

ーーーザー！ザー！

一瞬、今までにないノイズが走り、場面転換が起こる。なんだったんだ？今の…。

「たぶんそこで、本格的に主に七つの大罪どもの干渉があったのね…」

外耳が、ヘル・ブリングの声を拾う。どうやって、こいつ僕らのアレがわかるんだ？ヘル・ブリングの押し殺した声が耳に入る。

「悔しいけど、そのとき既に私は洗脳済み。でも主はそういう性格だから、いつか私…いや、七つの大罪どもに洗脳された我の意思に反するかもしれない。それなら主も洗脳してしまえばってことじゃないかしら。もっとも、私を洗脳した嫉妬（エンヴィー）のベルゼバブは貴方が倒してしまったけどね…」

その音は白夜がゲートをくぐっている間にあった。今の記憶が白夜がウラヴェリアの城に滞在しているあたりだから…相当前に行われていたことになる。そして…。

ーーーやめろ！…やめろ！！

白夜が悲痛な声を上げる。僕と白夜は同い年だから、記憶の進む速度も一緒なのだろう。僕の方は…白夜が、マドラのおっさんの胸を背中から貫いたところだ。

『人間は人間同士、仲良くしろや…』

頭の中で、マドラのおっさんの懐かしい声が聞こえる。映像は、そこで途切れてしまった。

「晶…すまん…すまん…謝って許される事ではないことはわかってる…だけど、俺にはそれしか言葉がっ…」

白夜が唇を離すと、よだれが糸を引き、涙が僕の顔を濡らした。

…ってなんて嫌な表現をするんだ！

「ヘル・ブリング。お前は?」

「何が?」

「話を全て信じるとして、お前が洗脳されて、それが解けたの」

今にも切腹しそうな白夜を放置して、入り口に目をやる。

「私がされたのは、ヘラとしての魂を腕輪に封印している最中…。私は意識の感覚が変わったのは器を変えたからだと思ったけど、ベルゼバブの意識が介入していたのね…。主が解けたのは貴方のおじさんの一撃をくらった時だけど、私はついさっき…この、主が生きてきた世界と酷似した状況の戦場を主が見た時。そして、ベルゼバブが現れたとき…」

「ダービー…どう思う?」

「嘘はついていないだろう。今のヘル・ブリング…ヘラは、皆と一緒にいるのに自分だけ特異な資質を持ち、それに思い悩む小さな少女の時のヘラそのものだ。さっきはまだ影響が残っていたが、今は完全に抜けている」

「ヘブンズ・ゲート…私、昔…貴方や世界中の皆になんてことを…」

「もうよい。過ぎた事だ。我は気にしておらん。しかし主は…」

ダービーの言葉に、白夜がうな垂れていた顔を上げる。その目に、光源が少ないにも関わらず僕が映っている。

「正直、おっさんを殺したことに関してはまだ憎いと思ってる、洗脳されているからと言って、やったこと全てが許されるとも思えないし、思わないし」

白夜はそれでも僕を見ている。温情や同情を期待するわけでもなく、僕の言葉を受け入れる覚悟がある、しかし悲痛な顔で。そこにすこしでも媚や哀れな顔が浮かんでいたら、次の言葉は出てこなかったと思う。

「でも、どこかでお前を許している、許したい僕もいる。お前が、僕と同じ思いで戦ってきたのがわかったから…緑竜の時に、こんなすれ違いはもうしたくないって、辛さ味わってきたから…」

「晶っ…！」

白夜が、枯れた声を吐き出した。そこにどんな想いがあるかは、意識が離れた僕にはわからない。…もうアレはしなくていいけど。

「でも、お前は国の英雄を殺した男だ。お前を恨んでいる人間は沢山いる。裁きは、キュートスに帰ってから受けるべきだと思う。逃がしてやってもいいけど、僕がお前ならそんな惨めな生き方したくないからな」

…実は、ここで一つカマかけてたり。

「わかってる。それがお前が出した答えなら、受け入れよう。お前の恋人が許してくれるとは思えないが、それも俺がやったことだ。因果応報…ってやつだな。お前の国の国王の兄を殺した俺は、死刑ですら許されないだろうな」

「…よし、合格」

「…あっ？」

「お前が自分の罪から逃げて、惨めでも生きていたいってやつだったら…僕はここでお前を斬ってた。でも受け入れてるみたいだから、僕はお前の味方になってやってもいい。まぁ個人的にはお前の立場なら、どんなに惨めでも生きていたら勝ちだって思うけどな」

…僕の言葉に。空間が凍りつく。

「ノア…晶！貴方はぁー！」

「ヘラ。主はこういう男だ」

『人間は人間同士…』

「いつになったら許せるかわかんないけど」

『仲良くしろや…』

「それでも、許してやるよ。エリーにも、わからせる」

それが、マドラのおっさんの願いならな…。

～第七十二話～接吻と過去と真実と（後書き）

正直、これはどうなんだろう…洗脳からの和解落ち…。納得出来ない読者の方々いっぱいいるんだろうなぁ…。ごめんなさい。

～第七十三話～幕間（前書き）

ども。登場人物紹介のところで、なんとラスティンを忘れていたので追記しました（汗）短いですが…。あとは作者が言うのもなんだけど、ホントのモブの方々なんだよなぁ…。七つの大罪どもに関しては、もう少し落ち着いてから…この章が終わった後にでも。そういや、用語とか色々解説せにゃならんこともあるなぁ…設定とか実は後付け多かったりするから、にんともかんとも…。ちなみに、この話の中核の初まりの者たちも後付けだったりします。悪いね、ヘボ作者で！

～第七十三話～幕間

「…そろそろいいですか？アキラさん」

入り口前から、デンゼルの声が聞こえる。そういや、こいつ呼ぶのラスティンさんに頼んでたんだったな。

「お前、いつからいた？」

「そいつとアキラさんが、長い口付けをしてるところからですよ」

「ほぼ最初からじゃねぇか…で、どこまで聞いてた？」

「大体全部聞いてます」

……。

「納得いかないところは多々ありますが…まぁ、ボクはアキラさんに従うだけですよ。アキラさんのことだから、きっと何か考えがあるのでしょう」

「おい、人聞きの悪いことを言うな」

「…で、そいつ。どうするんです？この作戦中」

「僕が、団長に話す。近くに確かシーリカの隊があったはずだろ？それで、承諾を得たら僕の部隊手伝わせる」

「おいっ！アキラ！」

「ラスティンさん、大丈夫。こいつはそれしか選択肢がないから。もし何かあったなら…」

「何かなんて、するわけないだろう。晶は、小さい頃に俺を受け入れてくれた俺の恩人だ。洗脳が解けた今、晶と敵対する理由も、裏切る理由もない。それに…」

白夜が拳を握り締める。篭手をしていない裸の掌から、爪を立てて滲んだ血が滴る。

「俺の大切な人達は、同じ人間に殺された。…ちょうど、今回みたいに。今度こそ…護りたい。理不尽から、蹂躙される人たちを…」

白夜がうつむく。他の面々を見ると、ラスティンさんは難しそうな顔をしている。デンゼルはまだ納得してないようだ。

「デンゼル、マドラ前団長の意思でもあるんだ」

「…はぁ。わかりましたよ。でも勘違いしないでください。ボクは、アキラさんを信用してるんですから」

「二人とも…すまん、今だけでいい。俺を信じてくれ…」

「白夜。話に行こう。デンゼル、シーリカの部隊はどこで休んでる？」

「ここでて左に行った所に集落跡があります。シーリカ部隊長はそこにいます」

「悪いな」

「おいっ！アキラ、体はもういいのか？」

「大丈夫です。白夜に治して貰いましたから」

そしてどうしても同行したいというデンゼルとヘル・ブリング…ヘラを含めた四人でシーリカのところに向かう。時間にして、徒歩で十分足らず。その間、ずっと無言だった。

「たのもー」

シーリカの部下達が頭を下げるのに片手で応えると、シーリカが休んでいると思わしきテントみたいなのの入り口を開ける。

「どこの道場破りよ。それに急に開けたりして、私が着替えてたら…って、彼は…」

「久しぶりね、シーリカ。と言っても、ウラヴェリアの時ぶりだけど」

「ヘラ…！」

シーリカの眉間に皺が寄る。しかしその顔も、次の瞬間別のなんとも言えない表情に変わった。

「こうして顔を見るのも、数世界ぶり…。アンタのことだから、何かあったってのはわかってる…」

シーリカがヘラを抱きしめる。そういやシーリカは、転生してな

いんだったな。その分、原初にたいする憧憬も強いのだろうか。

「私、とんでもないことしてしまった…」

「大丈夫…わかってるから！わかってるから…これからは、私も一緒だから…」

二人の声が震えている、そういや初まりの者たち中で、女性はこの二人だけだったか。今は、ココ…ココルはいないから。数少ない同性の同胞。何か思うことがあるのだろうか。

「ココルの時も、ホントは辛かった…。この世界でも、助けられなかった…」

「わかったから！わかってるから…」

「えぇーと…無粋なことしてごめん。シーリカ、セラトリウス団長に繋いでくれるか？」

すっげぇ声かけづらかったけど、頑張った。僕頑張った。

「えっ？…あぁ、ごめん。ちょっと待ってて」

若干涙目になっているシーリカが、五火七禽扇を手に握り力を込める。

「団長、シーリカです。えぇ。えぇ…今アキラに代わります」

代わると言いつつ、音声を拡張するシーリカ。ハンズフリー機能みたいなもんだ。

「セラトリウス団長、アキラです」

「おぉ。ご苦労じゃな、アキラ殿」

「幾つか報告することと、許可を頂きたいことがあるんですが…」

「報告はよい。千里眼で大体見とる。嫉妬（エンヴィー）に色欲（ラスト）か…難儀であったの」

「はい…」

戦闘のことを思い出し、思わず唇を噛む。確かに倒せた。撃退出来たけど…また僕は、護れなかった…護れなかったばかりか、自らの手をかけてしまった…。

「主、全て主が悪いわけではないであろう？」

「わかってるよダービー。わかってるけど…」

「して、許可とはなんじゃ？」

「マドラ前団長を殺した、初まりの者たちの最後の一人…ヘラ、白夜が今一緒にいるんですが、今回の作戦中だけでも僕の部隊の管理下におきたいのですが」

「それはつまり…」

「裁きは、国に帰り次第受けさせます。ですが、白夜の力があれば。こちらの戦力が大幅に上がることもまた事実です。万が一何かがあ

ったのなら、僕が白夜を処分して、僕が国に帰ってから処罰を受けます」

「アキラっ!?」

シーリカが驚いているが、僕も覚悟が伝わったのか再び口をつぐむ。

「初まりの者たちの最後の一人か…。よい。好きにするがよい。この世界…全ての世界の調停者。大いなる意思に、私は委ねる。思うようにするがよい」

「寛大な判断、ありがとうございます。それと…」

「まだあるのか?」

「はい、今回の作戦が終わって白夜の処分が決まったら…一度、向こうの世界にいかせてください」

「…それがよいかもしれんな」

「アキラ、どういうこと?」

シーリカとラスティン、デンゼルが首をかしげているが、白夜とヘラはわかったようだ。この二人は、向こうの世界の実情を知っているから。

「今回、黒幕は確かに色欲(ラスト)の二人だったけど、それだけじゃない気がするんだ。もっと向こうの世界の黒い部分が関っているような…。幸い、僕は向こうじゃ一般人とは少し違う立場があるから、最大限

まで利用して真相を突き止めてくる。…じゃないと根本的解決にならないし、二つの世界の壁が大きくなってしまう」

無言の時が流れる。白夜が俯いているのは、その黒い世界を知っているからだ。

「確かに僕と…白夜がいた世界は、綺麗でもあるし科学が発達した魅力的な世界ではあるけど、同じ位後ろ暗い世界でもあるよ。でも、その部分は一部でしかなくて、多くはちょっと愚かな、でも善良で無垢な人たちなんだ。でもその一部が強すぎるから、その大半の人たちも自覚無く黒く染まってしまうこともある…。だから僕は、少しでもその部分を消毒してくる。しなくちゃいけない。それが出来るのは、きっと僕だけだから…」

僕の噛み締めた唇から、一筋血が落ちる。悲痛な気持ちではない。これは覚悟だ。

「重いね…」

シーリカが、震える声を無理に抑えて言った。

「私達が背負ってるものは、いつの世も重い。そうよね？ヘラ。だけど、今一番重いのはきっとアキラだから…」

シーリカが、背中に手を回して僕を抱き締める。その僕より少し小さな体は、背負ってきたものの重さに震えていた。

「だから、頑張って。ヘラが帰って来て、ようやく私達皆揃った。私達はみんな、世界を変えてしまうほど恐ろしい運命を背負っているけど、それを理解できて力を貸せるのも私達だけだから…。だか

ら、帰ってきて。私達…仲間のところに」

姉御肌に見えて、実は人一倍不安を感じていたのは、シーリカなのかもしれない。カイムと同じくその身一つで悠久の時を越えてきて、この世界でも初めはその運命を手放そうとして…でも、僕たちが集まるのを信じて待っていたのは、シーリカなのかもしれない。

「大丈夫。僕はちゃんと戻ってくるから。この世界の、エリーとお前らが僕の居場所だから…」

「ゴホンッ！」

背中で咳払いが聞こえた。

「いい雰囲気なところ申し訳ないですが…いいんですか？アキラさん、シーリカ部隊長。リーナス王女が待ってるのに」

デンゼルの毒が炸裂する。不覚なことに、今のこの部屋の状況を失念していたらしい。

「これは友好のハグだよ」

「まぁわかってますけどね」

「よし、団長から許可も下りたことだし、明日の夜明けとともに掃討戦に出るぞ。攻撃は、ラスティンさん頼む。デンゼルは僕と敵の手から逃れた獣人たちの保護。…今回は護り抜くぞ。デンゼル。お前の魔法にも期待してる」

「わかりました。でもこっちからの攻勢は本来の任務には…」

「デンゼル。攻めなきゃ、攻められるだけだ。それに、僕は敵の兵器にお前らより覚えがある。被害は最小限に食い止める」

「晶。俺は…」

「白夜。お前は単独で特攻して殺しまくれ。自分達と同じ人間が銃弾の雨をものともせずに突っ込んできたら、きっとあいつら『化け物だ！』って動揺するから。そこで敵の隊列が破れたところを、ラスティンさんに任せる。お前の鎧なら、サブマシンガンの銃弾も受けれるだろ？」

白夜が、強く頷く。自分の手で英雄を失ったキュートス国への償いに、その身を捧げる覚悟を決めたようだ。ぶっちゃけ、僕にしてみれば適材適所で利用してるとこがでかいんだけどね。

「晶…。俺は、殺す事に躊躇いはない。向こうの世界にいたときもそれが日常だったし、それでこの世界の人たちへの償いに少しでもなるなら、喜んでこの手を血で濡らそう」

「ん。期待してる。よし、じゃあ戻るぞ！夜明けまで時間が無い。デンゼル、皆に急いで準備させて」

「了解しました」

「つうか人の部隊んとこで作戦会議するのもどうかと思うけどな、私…」

シーリカがなんか言ってた気もするけど、細かいことは気にすんな。

「あっ！あとガロン！…ありがとな、運んでくれて」

「なんだ、気づいてたのか」

壁にもたれて腕を組んでいるガロンが、驚きの表情を浮かべる。

「別に隠れてるこたぁねえと思うけど」

「お前達の事情はわかった。俺は、シーリカとともに行くだけだ」

「…そういえば、私達の内部事情って、トップシークレットだったはずよね…いいのかしら、伏せられてるのに副官が二人も事情知っちゃうとか」

「アキラさんは、アキラさんですから。それにこうでなくちゃ面白くないし」

「うむ、シーリカはシーリカだ。それ以上でもそれ以下でもない。今まで一緒に戦ってきたシーリカであることに変わりはない」

「ガロン…ありがと」

「じゃっ、シーリカ。サンキュな！」

手を上げて自分の持ち場に戻る。夜の外は、大分冷えるな。

「ホント、きな臭いことになったなあ…。でも、住み分けを侵して、陵辱していい理由なんてない。絶対止める。何があっても、この世界は護ってやる…」

ボクの決意は、白い息とともに空に浮かんだ。

「好き勝手に呼んで最後は挨拶もなしか…全く、マドラといい勝負じゃわい。本当に…」

「あっ」

シーリカが、その声にセラトリウス団長と繋がりっぱなしなことに気づいた。

～第七十三話～幕間（後書き）

すみません。私も繋がってるの忘れてました。では、次話『掃討戦』で。久しぶりに部隊戦書くかぁー。

～第七十四話～掃討戦（前書き）

ども。さっき某作者さんの小説を書くにあたって的なところ開いて見てました。正直へこみました。あかんことばっかやってるやん、オレ。どうせオ○ニー小説ですよ！いいもん！二十○歳のおっさんがいいもんとか…。でも、本当にこんな小説読んでくれて、ましてお気に入りに入れてくれたり感想くれたり評価してくれたり…本当に、本当に有難う御座います。

～第七十四話～掃討戦

「うおぁぁぁぁぁ！！」

白夜が駆ける。その身に数百では利かない銃弾を受け、それでも尚ひるまず、その両手の剣を振るい圧倒する。その後ろには、夥しい程の死体の山が出来上がっていた。

「続けーっ！一人も残すな！敵を逃すたび、我らの後ろの護るべき者達の血が流れるものと思え！」

ラスティンさんの咆哮が轟く。前衛騎士団第三部隊が散開し、バラバラになった敵を斬り伏せていく。

「ボク達も！魔力尽きるまで！みんなを護るのです！怪我人には一刻も早い治療を！」

デンゼルが叫び、その両手に握った身の丈を遥かに越える大剣を振りかざす。その切っ先に、幾重もの雷が落ち、カーテンのように獣人達を包囲する。

「全員出すぞ！お前達で皆を護るんだ！僕から離れてもいいから、なるべく多くの敵を再起不能にするんだ！僕が命令する！殺せ！」

十二宮を全員召喚する。男性陣は勇ましく猛り、戦場を縦横無尽に走る。

「アキラ…」

「マスター…」

「アキラ殿…」

僕の従者の中の古参の三人、レオとアクアリウス、タウルスが物憂げな面持ちを向ける。人間を攻撃することでの僕のメンタルを心配しているのか、それとも単に今まで見守って来た者達に攻撃することを嘆いているのか…。

「…言ったろ？総攻撃だ。情けはかけるな」

「でも！マスターの…」

「構わない。大丈夫。ヒトを殺す躊躇いより、こんな酷いルール違反した同属の恥に対する怒りのが勝ってるから」

「アキラは…本当にそれでいいのか？もしアキラが直接迎撃していることが分かれば、向こうの世界でのアキラだって…」

「だから構わない。それに、僕がいることがバレた方が好都合だ」

「…？」

「これだけ強大な同属を敵に回すことの重大さを、連中と交渉するときの判断材料に出来る。それに、実際その光景を僕が見てきたと証言の裏づけが出来る上に、各国の首脳陣に対する脅しにも使える」

辺りで悲鳴と怒号が絶え間なく聞こえる。これだけの乱戦だ。味方にも相当の被害が出ているだろう。

「よし！わかったら行け。レオ！緑竜のときみたいなフィードバックの心配も今は無用だ。ほとんど影響ないし。タウルスも、こないだ僕を殴ったときみたいな手加減は無用だ。殺せ。アクアリウスも、主人の命令だ。一切情けはかけるな。あんな攻撃ごときでダメージを受けないお前らが戦うことで、この戦いで流れる血を最小限に抑えられるんだ。お前らの主人を…また護れないことで悲しませないでくれ」

最後の一言が効いたのか、三人が険しい顔で戦場に向かう。奥を見ると、キャンサーとかアリエスあたりが血を浴びながら嬉々として敵を狩っている。いやぁ、好戦的な性格のやつはこういうときに頼りになる。

そして…僕もここでのうのうとしているわけにはいかない。思い知らせてやる。僕は…お前らみたいな人間の味方じゃないってことを。大剣をしまい、手元に転がっているウージーを手に取る。同じく死体からちょうどいいサイズの服を剥ぎ取って着る。どこからどう見ても敵の友軍に見えるだろ。

「主、それでは防御力が…。誤認攻撃をされる危険性もあるではないか。そんなリスクばかりのことを何故…」

「敵の指示系統を混乱させる。やつら無線かなんかで連絡を取り合ってるはずだから、味方に裏切り者がいると思って、間違いなくぐちゃぐちゃになるぜ。そういう情報はすぐに伝わるからな。そういう工作の方が、後々影響でかいのさ」

「しかし、主が攻撃を受けた場合…」

「なに、繊維を修復するくらい造作もないよ。それに、バルゴーを同行させる。防弾チョッキで庇いきれないところは、バルゴーに逐

次回復させるさ。最初からちっちゃいバージョンで少しずつの回復なら、影響ないだろう？」

「適当であろうが、なぜそなたの勘はこうも当たるものか…」

「……これが…創造主の『実現力』か…」

僕の胸ポケットにバルゴーちっさいバージョンが収まると、参戦しに走る。

…っと。一つ大事なこと忘れてた。

「アスクレピオス！デンゼルたちの魔力回復は任せたぞ？」

僕の隊の陣の中心に、心配になるレベルに病弱そうな男が現れた。

「貴方…いつから知っていたのですか？」

「なに、十二宮が呼べて、十三番目のお前が呼べないはずがないだろ？」

「本当に…今まで傍観していましたが、本当に規格外ですね、貴方は。わかりました。引き受けましょう」

ニッと笑うと、顔を引き締めて再び前方を向き、思い出したように地中に潜る。正面から行っては、こっちサイドの人間だとまるわかりだ。まぁ乱戦だから気づかないかもしれないけど、注意はしすぎることはない。土属性の天然の土竜爪で掘る！掘る！掘る！

「…アナタは後衛のはずでしょうに…アキラさん」

デンゼルの呆れた声が聞こえたような気がしたが、キニシナイ。

作戦は、見事過ぎるほどに成功した。死体が転がっている地点をサーチして、その下から僕登場。そして、錯乱したかのように銃乱射。どこぞ映画じゃないけど、快…感…っ！良心の呵責？人を殺すことに対する躊躇い？ないない。だってこいつら、この世界を汚した時点で敵だもん。同情の余地も情状酌量の余地もないない。それでもやっぱり攻撃は受けるわけで…その度に、

「全く、なんという無茶を…。それともただの馬鹿なのか」

バルゴーが治してくれる。最初から小さいから、サイズが変わることもない。ちなみに味方に当たらないように、ケンタウルスから必中の魔眼の魔力を少し分けてもらってたり。短時間だけど、その時間内に引っ掻き回せればいいんだし。勿論味方からの誤爆もあるけど、僕の存在が味方のブレーキになったら元も子もないから、特にリアクションせずにこっそりバルゴーに回復させている。

「ヒャッハーーー！！汚物は消毒…」

ーーー主、ソレ、チガウ。

気にしない気にしない。つうかやっべ、楽し…。敵さんが口々に何か叫んでいるが、気にしないでパラララーっと。うん、ダメージ気にしなくていいっていいな。これから採用しようかな。

「…ってアレ？」

地上の物質は全て有限である。安易に無から有を作り出すことは出来ず、魔法の世界も魔力というものを消費し、等価交換として奇跡を生み出す。…つまり、単に弾切れなわけで。

「貴っ様ぁぁぁ！！」

的なことを言ってるんだろうけど、

「わっかんねぇよおおお！！！」

好機と見たか周りの量産型敵さんが銃を向けるが、こちとら武器は銃だけじゃねぇんだなコレが。

「残念賞ぉぉぉ！！」

敵の直下から土槍を練成して、一気にブワァっと。これはヴラド公ももびっくりな串刺しっぷり。周囲に奇妙なオブジェの林が出来た。

「…秘儀、日本語でおｋ」

「主、ふざけっぱなしではないか」

「いやぁ、気に食わないやつらを無双するのって楽しいね」

「人間は半分天使半分悪魔と言うが…こういうときの主はマジ悪魔だな」

「大丈夫、大罪は含んでないから」

七つのはね。普通に殺人罪っつうか快楽殺人に近いところもあるんじゃないかという突っ込みはあると思うけど、ここは戦場だし。人殺すところだし。ほら、こういうとこで活きる人もいるわけで。人斬り以蔵とか。

視界を広げてみると、十二宮の連中も白夜もラスティンさんも派手にドンパチやってるみたいだ。少し離れたところに、デンゼルの雷カーテンも見える。つうか結構範囲広がってんのな。他の部隊も見えるし。全容を見ると、九割方こちらが押しているようだ。敵の数はかなり減っている。それを数の暴力で圧倒し、そこが片付いたら他のところに救援に行く。いいスパイラルだ。怪我人こそ多く出ているものの、こっちの頭数はほとんど減ってないようだな。銃弾の嵐は脅威だけど、急所に当たらなければどうってことはないという、かなり無茶な僕の助言が功を奏している…のかな。実際人間ならそうもいかないけど、こっちは人間よか頑丈なエルフだし、回復役いるし。ようし！もいっちょやるかな！

「…お前は逃がしてやる」

ゲート付近に拡大した総軍かけたガチンコ戦は、とうとう人間側を追い詰める局面まできた。その背後にはゲート。七つの大罪どもが作ったせいか。それを構築する魔力は禍々しい。正直、近くにいるだけで軽い吐き気がするんだけど、たぶんこいつらは気づきもすないんだろうなぁ…。元々を魔力を感知する感覚器官なんてないし。

「ーーーーー！！」

ここまで運良く生き残った職業軍人が何か喚いているが、ぶっちゃけ何言ってるかわかんない。ダービー！通訳！

「死にたくなければ今すぐここから去れ！そしてその無様な戦果を泣きつくんだな！」

おっと、白夜に先越された。つうかお前、外国語話せんの？

「俺が外国にいたこと忘れたか？それに、これは英語じゃないか。わからなかったか？」

白夜に言われて、足元の死体についてるドッグタグを首からひったくる。ふむふむ…なるほど。アノ国の地名か。自分で同じ服着といて気づかなかった。

「どうやらそこだけじゃないようだけどな」

「白夜、どういうこと？」

「多国籍軍ってことだ」

白夜が忌々しげに吐き捨てた。たぶん、紛争で散々見たくもない現実見てきたんだろうなぁ…。しかも、今回と似た状況の。

「お前ら、人間だろう…？何故化け物の味方をするんだ…？」

一人の軍人が怯えた表情を浮かべながら、尚も聞かずにいられないように口を開く。

「ふんっ！」

血糊がベットリついた輝くトラペゾヘドロンを、無造作に振り抜

いた。その軍人の首が綺麗に跳ね上がる。

「…お前らみたいな人間の方が、よっぽど化け物だろ。大統領に伝えろ。エルフの国のお前らの同胞が、あのときお前を消さなかったことを後悔している、と。そして…すぐ迎えに行ってやる、ともな」

剣を向けると、へたりこんでいた軍人数人が脱兎の如くゲートに逃げ出した。

「…むんっ！」

セラトリウス団長が、太極図を掲げると、そのゲートはそれに吸い込まれるように霧散した。わざわざ、敵に入り込まれるような隙をそのままにしておく手はない。僕もそう思う。

「アキラ殿…」

「わかってます…」

足元の死体の襟元に国旗が縫い付けられているのを見つけ、毟り取る。…なるほどね。

「アキラ、俺の方で三カ国分発見した」

白夜が僕に数枚の布切れを渡す。どれもこれも、紛争が続いている、日本から離れた国のものだった。

「…サンキュ」

それを握り締めると、無造作にポケットに突っ込む。宣戦布告は

した。大義名分も充分にある。後は…。

「あっ」

僕は大変拙いことをしてしまったかもしれない。

「アキラ、どうしたの？」

今回の作戦で終ぞ接点がなかったカイムが、いつもと『ほぼ』変わらない笑顔を向ける。やはり初めて見る未知の兵器との戦いに、こいつもかない消耗したらしい。

「セラトリウス団長！」

カイムの質問に答える代わりに、団長に進言する。

「なんじゃ急に…」

「白夜の処分、待ってもらえませんか？ついでに、明日に向こうに行く許可を！」

「なんじゃ藪から棒に」

「あいつらに最後に言い捨てた時に、僕のことを、敵の頭が特定出来る発言しちゃいました。もしかしたら、向こうの家族が危ないかもしれないんで」

「はぁ…肝心な所が抜けておるな、ホント。良い。行って来い」

「有難う御座います」

「アキラ！俺は…」

「お前は牢にでも入ってろ」

あー…マジやらかした。

～第七十四話～掃討戦（後書き）

晶目線で、結局周りとのリンクがないまま掃討戦やっちまいました。だって状況的に晶単体が一番いいんだもん…。他の人と連携とると不自然な状況だし。それと、ゲイボルグの性能を今日初めて知りました。チートだなぁと思うと共に、これ使えんだろーがぁ！って叫びたくなるようなものまで…。ガラム、頑張って活躍して、それを書かせてくれ。

～第七十五話～怒られた（前書き）

おはようございます。気分的にこんばんわ。夜勤明けです。長々と店長にありがたいお説教されたせいですぐ寝る気が醒めてしまったので、時間の有効活用ってことで書きます。

～第七十五話～怒られた

セラトリウス団長が作戦終了を宣言した直後、僕は文字通り消える勢いでキュートスに戻る。団長はこの一族の長、九尾と話があるとのことなので、火急的速やかに帰らなければいけない僕は、先に帰る許可を得ている。白夜のことは、あの件を知っている者が何をするかわからないので団長に預けておいた。

意識的には、ボスのキン〇クリ〇ゾンレベルの時間跳躍を引き起こす勢いで駆ける。つうか、半分跳躍してた。時間の歪み？馬鹿者！家族の安否と天秤にかける方がどうかしてる。つまるところ、僕は自分の周りの世界がよければ他なぞ二の次三の次なのだ。

という事で、もう着いた。時間にして、ものの数分。なんとか星雲からきた巨人が帰るより若干遅い程度だ。東の平原に向かう時は作戦を伝達する時間があったことを考えると、鬼のような速さだ。

「主、いくら最後の方は魔力を節約していたとはいえ…天使を憑依させて八大地獄を使って尚、時魔法にこの量の魔力を割けるとは…どこに隠しておった」

「馬鹿っ…いくら無限の魔力（エターナル・マナ）を持ってるとはいえ、限界に近いっつの。十二宮プラス蛇使い座（アスクレピオス）も召喚してたんだぞ…体力を魔力に変換してやっとだっちゅうの…」

「何時の間にそんな高度な技術を…そしてその十年以上前に旬が過ぎたギャグ…。主がやってもちっとも萌えんが」

「やかましい」

前述の通り体力値まで魔力に差し出して、両膝に手をかける姿勢

になった偶然の産物だ。その消化した魔力が、筋肉内で乳酸に変わってしまっている事実に戦々恐々しなければいけないわけだが…まぁ、大事の前の小事ってことで。自己犠牲の精神ってやつだ。

っと、くだらないこと考えてる場合じゃない。とりま国王のとこ行かんと。

「主…とりまって…」

「…言ってみただけだ。恥ずかしくなるから指摘すんのやめれ」

「…全く、貴方はいつもそう気が抜けているの？」

毎度お馴染みになってきた森から城門が望む辺りで、背後から声が聞こえた。最近めっきり聞くことが少なくなった声だが、聞き間違えるはずがない。部外の者にとっては滅多に聞けるもんじゃないけど、僕にとっては数えるのも面倒なくらい聞いている声だ。つうか城にいるときはほぼ毎朝。

「ディーン王女！珍しいじゃんか！つうかなんでここに？」

「だって千里眼の強化は、私が研究して成し遂げた成果ですもの。私も使えて当然ですわ。それに、お父様は執務で席を外せないの。話す時間くらいはあると思うけど」

他の姉妹と比べると短めの髪を押し撫でると、いつもながらのクールなトーンで言った。さすが学者肌だな。

「なるほどね」

「エリーは、部屋でおとなしくしてるわ」

「おう。サンキュ」

「じゃ、行きましょ」

踵を返すと、スタスタと先を歩くディーン王女。うーん…流石と言うか勿体無いというか…。

「何か言ったかしら？」

「独り言だ。気にしないでくれ」

「そっ」

歩幅は狭いから、難なく追いつくことが出来るのがちょっと可愛いと思ったり。うーむ…。

「お父様。アキラ様が帰ってきました」

「うむ。アキラ君。書類に目を通しながらですまない」

国王の部屋が、大量の書類で埋め尽くされている。たぶん内容は、東の平原の住人の、必要とあらば移住する便宜を図る為のものだとか、これからのセラスの諸国の連盟の意向だとか、そんな感じだろう。つうか、若干崩れてきて見えてる。

「不思議ですね。国王がこんなシリアスな顔で執務に当たってるシチュエーションも」

「アキラ君。すまないが手短に頼む」

「あっ…すみません」

怒られてしまった…。

ーーー当たり前だ。普段はあんなだが、今は国家の危機だ。国王が真剣にならずになんとする。

まぁね。まぁ、僕ものんびり構えてる暇はない。向こうの家族の命に関るかもしれないのだ。

「正式な報告はセラトリウス団長並びにカルバン団長からあると思いますが、何せ僕は火急の事態なので…。まず、東の平原の侵入者は皆殲滅しました」

「ふむ。ご苦労だった」

「ハッ！そして、マドラ前団長を手にかけた、白夜とも接触し、今はセラトリウス団長に預けています」

「妥当な判断だな。しかし彼も初まりの者たちの一人。アキラ君や他の者が連れるものだと思っていたが…」

相変わらず視線は資料から離れないが、きちんと僕の報告にも耳を傾けてくれている。この人、実は真面目にやれば凄いんじゃないか？

「それは…まだ、禍根を残している者もおりますので。軍のトップ

に預けた方が皆納得するかと。部下の者達には緘口令がしかれておりますので、彼らにとっては僕らはただの部隊長ですから」

「ふむ」

「して、ここからが本題なのですが…」

「言ってみよ」

「一旦。向こうの世界に戻りたいのです。いつ帰れるかはわかりませんが、この件を収束させる為に…」

「よい。行って来い」

「お父様!?」

後ろに控えていたディーン王女が、目をひん剥いて反応する。

「アキラ様は今やこの国の重鎮の一人!そう簡単に返事をされては…」

「ディーンよ。向こうの世界の人間が関っている以上、アキラ君の他に適任がいるか?」

「うっ…」

一瞬こちらの方を覗いた国王の眼光に、ディーン王女と一緒に僕まで怯む。

「私とて、何も考えずに返事をしているわけではない。それに、ア

キラ君は私らの期待に見事応えてきた。友人として、義理の息子として、部隊長として、軍師として、戦士として…アキラ君を見てきた私が信用して任せると言っておるのだ」

「国王、義理の息子はまだ早いんじゃ…」

こんなシーンだから仕方ないけど、真剣な顔で言われてもどういうアレかわからん。

「…わかりました。アキラ様を、お父様を信じます。差し出がましい事を言って、すみませんでした」

「ちょ…もういいんじゃないですか、国王？ディーン王女も別に考えなしに言ったわけじゃ…」

ちょっと空気が居づらいので、試しに仲裁に入ってみる。普段仲睦まじい家族の姿ばかり見てきているので、この空気はちょっと心苦しい。

「いいのです、アキラ様。私が短慮でした。…ではアキラ様。渡したい物があります」

ディーン王女が片手に持っていた皮袋からなにやら取り出す。乳白色の小さな小瓶だ。

「アキラ様。これは先日開発した秘薬、エリクサーです」

なんと！ポーションより先に、こっちを目にするとは。胡散臭い青色の瓶じゃないし。

「これは経口で服用し、体内に染み渡ると体力を魔力に変換する効果をもちます」

「…ディーン王女、それ、使わなくても僕出来るんだけ…」

「向こうの世界では魔法が使えないことをお忘れですか？」

…忘れてた。普通に時空間を跳躍したりして事を起こすつもりだった。あぶねー…。

「一般の兵では調節が難しい為、なかなか踏み切ることが出来なかったのですが…」

実験も兼ねてるのね。

「でも、向こうで魔法が使えないことに変わりはないんじゃ…」

「向こうの世界に、魔力と言うものに対する具体的な概念がないからです。あちらの世界に、アストラル体であるはずのヨグ＝ソトースが出現したことがあったでしょう？アレは分体で思考能力というものはありませんが…構成する物そのものが魔力だった為出現可能だったのです。向こうに渡ればアキラ様の中の体組織の魔力回路は眠ってしまいますが…今申し上げたことと同様に、アキラ様の体内という限定された空間内に魔力という構造が出来ているのならば、出来ることは限られるやもしれませんが理論上は魔法を行使することは可能です」

なるほど。エリクサーで強制的に体力から魔力を作り上げてしまえば、回路は眠っているだけだから使えないことはないというわけか。眠っているのと死んでしまうのはまた違う現象だし。

「わかった。サンキュ」

「ちなみにまだ試作の域を超えていませんので、使用する際は少量ずつ使う事をお勧めします。全て飲んでしまったところで、持続時間は不明ですので」

「でも、実験も兼ねてるんじゃないのか？」

「ふぅ…」

ディーン王女が俯いて盛大な溜息を吐いた。

「いくら実践機会だからと言って、空気を読む事くらいは出来ますわ」

「なるほど…ところで」

「なんでしょう？」

少し前から気になってたことをいい機会だから聞いてみる。

「僕の袋やディーン王女のその皮袋…どう考えても四次元ポ○ットばりの収納力なんだけど、どうなってんの？そんな便利な物が出回るほど、この国の技術は発達してるのか？」

「いえ、市販の物はただの袋ですわ」

「…？」

「私が改造しました」

……おい。

「ちなみに」

「企業秘密ですわ」

釘刺された。つうか企業て。

「…ということでごめん、エリー」

準備とか時間の都合もあり出かけるのは明日の明け方だ。そんな場合じゃないと思うかもしれないが、抜けた事に家の鍵を持っていないのだ。それに情報が敵さんに伝わり僕の家族になにかしらのアクションを起こすとしても、報告を受けておいそれとすぐに行動を起こすのは物理的に不可能だ。僕が確認した最も近い国でさえ、かなりの距離がある。そしてその国はそれほど発達しているわけじゃないし。…工作員がいる可能性は考慮しなきゃいけないが、僕んちは駅からも高速道路からも離れ、空からも着陸地点の確保が不可能な山ん中だ。そして田舎ネットワークを侮ってはいけない。ただでさえも排他的で閉鎖的なコミュニティだ。異分子がいれば、浮かないわけがない。僕は初めて実家の田舎さ具合に感謝した。

ということで、少々時間が空いたのでエリーに挨拶に来ている。今回の作戦は早かったけど、結局全てを解決するに至るまでは時間がかかる。そしてそれを為せるのが僕しかいないのだから、当然エリーは置いてけぼりになる。下手に連れて行ってやつらに嗅ぎつけられたら、それこそ弱点をわざわざ提供してやるようなもんだ。なら寂しい思いをさせてでも、ここにいさせるのが安心で安全っても

んだ。

「私もっ…」

「駄ぁ目」

ほら。やっぱりこういう事を言い出す。懇切丁寧に説明してやると、エリーは渋々納得してくれた。初めの頃は置いておいて、エリーは決して頭は悪くない。

「そんな顔するな。なるべく早く戻ってくるから」

頭を撫でてやるが、その頭は一向に上がらない。なんだかんだ言って、よく考えたら先のアララギ島の遠征とかで暫く顔も見せれずにいたのだ。久しぶりに会ったと思えば、僕は錯乱してたし…。

「なぁエリー」

エリーの顎に指を添えて、僕を向かせる。別段抵抗することはなかった。

「帰ってきたら、手料理食わせてよ。エリーの手料理が食えるって思えば、半死どころか九割死んでも這って帰ってくるから」

あーあ、一級フラグ建築士の本領発揮だこりゃ。まぁ今まで数々のフラグをへし折ってきた僕だから、これは逆に生存フラグととって差し支えないだろ？旗殺し（フラグブレイカー）のの異名を持つ僕なら…。

ーーーそんな異名は轟いておらんぞ。

さいですか。空気を呼んで脳内に話してくれてありがとさん。

「そうだよね…旗殺し（フラグクラッシャー）の異名は伊達じゃないよね…」

ーーー何時の間に轟いておる！？

…ホントだよ。

「ップ！ッハハハ！」

「…どうしたの？アキラ」

「ックク…！アッハッハッハ！！」

エリーが真顔でそんなこと言うから、何か壷に入ってしまった。しかもなぜか三倍速い彗星のマスクの人で脳内再生されたからなおさらだ。

「…アキラ？」

「いや、なんでもないよ！ありがとうエリー！おかげですっきりした！」

「…なんかモヤモヤする」

僕の呼吸が落ち着いたのは数分後だった。その間の腑に落ちなさそうなエリーの顔が、またなんとも可愛かった。それがまた滑稽で時間がかかってしまったのだが。…しかし、これで余計な力が抜けた。僕は、僕らしくやろう！…やらねばならんことは、どんな手を使っても完遂するまでだ。どうやってやつらの意表をついてやろう

か。

「ありがとな、エリー」

エリーの前髪をあげて額にキスしてやると、エリーもなんだかわからなそうな、でも安心したような顔を浮かべた。

「…ご飯の約束。絶対だからね！」

エリーが笑顔で、僕の唇にキスをした。おーおー。それもフラグだぜ？でもその前のキスが白夜の野郎だと思ったらかなり複雑な気分になったからチャラだろう。アレをカウントしたくはないけど。

～第七十五話～怒られた（後書き）

全然進まなかったので、もしかしたら夕方から晩あたりに次話書くかもしれません。仮定です。ディーンの説明文のあたり、かなり苦労しました…。

～第七十六話～フレンチ☆トースト（前書き）

結局昨日書けませんすでした。すみませんでした。ということでバンドの練習に間に合うように書きますのでした。前書きふざけ倒してすみませんでした。いや、昨日書けなくてすみませんってのはホントです。

～第七十六話～フレンチ☆トースト

軽く仮眠をとって早朝…。ちゃちゃっとゲートを作って久しぶりの我が家に帰る。珍しく親父の車がある。さて…曜日の感覚がわからないから、今日は果たして何曜日なのだろうか…。恐らく、玄関を潜ればお袋が朝食を作ってるだろうから、聞けばいいか。

ちなみに、対物用のローブとかは置いてきた。かさばるし、そもそもそんな敵とエンカウントするつもりはないし。第何倉庫に正面突破とかするわけでもないし。持ってきたのは、ディーン王女から貰ったエリクサーだけだったりする。

「平和だな…」

「あぁ、間に合ったようだな、主」

一応気配を探ってみるが、どうやら敵影らしき姿は見えない。まぁ居たら居たでエリクサーの実験台にするつもりだったけど。まぁ、家族に何もないならそれが一番だ。

「随分肝が据わってきたな、主」

「何度死線を潜ってきたと思ってんだ。たぶん今の僕なら、総合格闘技のグランプリでも勝てるぞ。こっちの人間が数人寄ってきたところで、負ける気がしねぇもん。ただいまー」

無用心なことにこの家は朝誰かが起きると、新聞を取りに行ってそのまま鍵を開けっ放しにしている。伊達に二十年この家で育ってきたわけではない。

「あら、晶。今日はまた随分早い時間にきたものね」

「おう晶。帰ってきたか」

予想通り、台所ではお袋が朝食を作っている。そしてリビングには、親父がテレビをつけながら新聞を読んでいた。

「今日、何曜日？」

「日曜日よ。ほら」

お袋に促されてテレビに目をやると、小さい頃に毎週見ていたテレビ番組が映っている。それでようやく、今日は日曜という実感が湧いてきた。

「里美、晶の分も朝食作ってやれ」

「はいはいわかってますよ」

一見亭主関白なように見えるけど、その実ラブラブなのはバレバレユカイなのだ。そんな所も、実にいつも通りだ。

「親父、会社は？」

「今日は接待もなしの丸一日オフだ。…全く、お前が持ってきたあの金属のおかげで、ここのところ休みと言う休みがなかったからな」

あの金属というのは、文化交流の際にキュートスから流通された、アダマンタイトだ。熱や電気の伝道率が極めて高く、その上水に浮かぶほど質量が軽い。さらにモース硬度もダイヤモンドの次に硬い

九。半マテリアルの世界では、魔法かドワーフの職人の技術でしか加工する事ができなかった代物で、こちらの世界でもダイヤモンドカッターとか専用の機械でしか加工出来ないだろう。つうかこっちの世界ではレアメタルとして扱っているから、非常に貴重な金属として流通先も選ばれているらしい。ちなみに原産地はガラリオン山脈。バリアスから流れてきている。そして、親父は国王や総理から便宜を図ってもらい、そっちの卸の方面にも事業を広げている…もといやらざるを得なくなっているらしい。現状のままだと独禁法とかの問題があるから、今は地下事業としての仕事だそうだ。

「まぁ…ご愁傷様。でも、その分潤ってるんだろ？」

コーヒーメーカーから自分の分を一杯カップに注ぎ、クリープと角砂糖をがっつり入れて親父の斜向かいに座る。テレビでは、当たり障りのないローカルニュースが流れている。昨日はここから少し離れた市でお祭りがあったらしい。

「相変わらず甘党だな」

「ほっとけよ。でも砂糖とクリープ置いてるってことは、誰か使ってんだろ？」

「アレは、順子用だ」

「あー…なるほど」

「懐いてた兄貴の名残なんだろうな。あいつもお前に似て、未だにブラックは飲めん」

「そっか…」

ちょっと居たたまれなくなる。大切な家族は、同じように僕のことを大切に思ってくれているらしい。少し、センチメンタルな気分になる。

「会社は順調だ。お前が持ってきてくれたアレのおかげで、新たな技術も開発出来そうだ」

「そっか。お役に立てたなら何よりだよ」

「まぁ…どこから嗅ぎ付けたのかは知らんが、たまに脅迫めいた電話や手紙も来るようになったがな…」

「…あっ、あのさ…」

「さぁさ、朝ごはん出来たわよ」

お袋がお盆にご飯を乗せて持ってきた。朝食はどうやらパンのようだ。僕が小さい頃から大好きだった、フレンチトースト。まさか僕が帰ってくるのを予見してたわけではないだろうけど…。

「やぁねぇ。また戦争でもあるのかしら」

三人でテレビを見ていると、外国で軍拡の動きがあるらしいことが流れていた。ポケットに入れた小さな国旗の当て布を、ギュッと握り締めた。

「物騒ねぇ。晶、貴方のところはどうなの？また…戦争しに行ってるの？」

お袋が心配そうに僕の顔を窺う。相変わらず戦ばっかりだ。それも、家族の知らないところで世界の命運を懸けた戦いばかり続いている。つい表情に出てしまう。

「あのさ、そのことなんだ…。今のニュースのこともひっくるめて」

その言葉に、親父もフォークを置いて僕の方を見る。兄貴や姉貴、順子がいないところで話を進めるのもどうかと思うけど、それでも、両親には早く言っておきたい。

「昨日…ほんとについ昨日さ、戦争…してたんだ」

親父もお袋も、真剣に耳を傾けてくれている。口は挟まないから話せということだろう。

「ウチの国の東に平原があって、そこに敵が現れたって、スクランブルで…」

言葉が詰まる。ここから先の話に、僕は怯えているのかもしれない。

「その相手は…こっちの人間だった…」

そこから導き出される、安易に予想出来る…僕がしたことが両親に知られることに。

「沢山…人を殺した…」

確かに軍人だけど、人を殺したことに変わりはないんです…。人としての禁忌を犯したことに、変わりはないんです…。親父、お袋

…二人の子どもは、向こうの世界の少し違う生き物とはまた違う、僕らと同じ人間を殺したんです…それも、嬉々として。

「説明しなさい」

親父の眼光が鋭くなる。最近どこかで似たものを見たと思ったら、国王のそれとよく似ていた。

「向こうの世界との繋がり…ゲートが現れて、そこから、こっちの世界の軍が押し寄せてきた。勿論こっちの銃火器とか向こうの人達は知るわけもなくて、多くの人…獣人たちが殺された。そして、僕たちに援助の要請が回ってきた…。何の宣戦布告もない、虐殺だったよ…小さい子供達も、いっぱい死んだ…」

目の前に、あの戦場の映像がフラッシュバックする。焼け落ちた家屋。元、獣人の無残な死体。そして…。

「護れなかった…。結果的に攻めてきたこっちの世界の人間は撃退したけど、救えたはずの多くの命を救えなかった…」

視界がぶれてきた。声が情け無いほど不明瞭になるのがわかる。お袋が立ち上がる気配がしたが、その前に親父の静かな声が聞こえた。

「晶…お前、何様のつもりだ?」

ピタッと、お袋が止まる。二人して、親父の迫力に押し負ける。

「確かにお前は向こうでは偉くて、凄く必要とされている人間かもしれない。でもお前はただの『人間』なんだ」

親父の言葉が胸に刺さる。ただの人間…。神に選ばれし子ども…ノア＝キーランスではなくて、ただの人間だと…。

「お前は俺と里美の間に生まれた、人間の子だ。人間じゃないわけがないだろう」

「人を救う？結構なことだ。軍人なら、その義務もあるかもしれん。だがな、人に手は二本しかないんだ。この短い、二本の手しかないんだ。人は、手の届く範囲の限られた人間しか救えない。俺がお前らを守ってきたように、里美がお前らを守ってきたように…」

親父の言葉が加速する。その言霊が、僕の胸の中にストンと落ちてきた。

「確かにお前は人を殺したのかもしれない。こっちの世界では殺人罪だ。でもな、お前はお前の護るべき人たちの為に戦ったんだろう？エリーさんや、お前の友達は、お前が戦ったことで護られたんだろう？今も生きているんだろう？ならそれでいいじゃないか。利己的になれとは言わん。でもな、奢るなと言ってるんだ。護れなかったなら、その命を大事に背負ってやればいいんだ」

「親父…」

「…なんだ？」

「親父って、過去に何かあった？」

「なにもないが」

「何もない人間が、そんな言葉出てくるはずないだろ」

「受け売りだ」

…は？

「誰の？じゃあ親父の知り合いに、何か…」

「本だ」

……。僕の感動を返せ。なんか馬鹿馬鹿しくなって、目の前にあるフレンチトーストを一切れ食べる。

「あっ、それで用件なんだけどさ。こないだ各国の首脳が何故かここに集まって皆でキュートス行ったことあったじゃん？その時に不穏なこと言ってた禿げオヤジの国の軍人が、ぶっ殺した連中に混じっててさ、軽く脅しといたんだけど、たぶん脅し文句的に僕が相手だってばれてるだろうから、親父とかお袋とかの保護を総理に頼みに来たっつうことだから」

「そんな大事な事を適当に言うな！」

うるせぇ。親父が悪い。

「お袋、サラダおかわり！胡麻ドレもつけて」

「はいはい」

「あっ。あと親父、飯食ったあと総理にホットラインつないでくれる？僕が話あるって言ったらたぶん空気読んで聞いてくれるから」

「お前…親と総理を何だと…」

うるせぇ。親父が悪い。

「一気に弛緩したな、主」

「だってなんか親父に色々ぶち壊されたし、工作員の一人や二人いたところでどうせ僕の敵じゃないし」

「さっきまでのシリアスな空気はどこに行ったのか…」

さぁ？レッド◯ルでも飲んで翼が生えたんじゃない？

～第七十六話～フレンチ☆トースト（後書き）

なんか作者本人的にも腑に落ちない回で申し訳ないです。家のくだり、ここまで引き伸ばすつもりなかったんだけど、まさか丸々一話使うとは…。あっ、そういや登場人物紹介にこっちの家族まだ書いてなかった。近々書きます。

～第七十七話～ブラック長谷川（前書き）

卍解したい白カカオです。前回のタイトル若干遊びましたが、自重はしません。最近ふざけ成分が足りないと言う声があったんですが、この流れでどう入れればいいのでしょうか。ちょいちょい入れてますけど。

～第七十七話～ブラック長谷川

随分親父も偉くなったもんだ。たかが地方豪族…じゃなくて田舎のプチ富豪が、いつの間にか一国の総理と懇意な仲になっているとか。

「お前のせいだ。お前が妙なことに巻き込まれるからだ」

さいですか。ということで総理にサラッと事情を話して、僕は明日我が国の首都に向かう事になった。家族は諸事情があって連れて行くことが出来ないので、僕が不在の間心配だと告げたらなんとＳＰを数人回してくれるそうだ。なんというＶＩＰ待遇。今晩には到着するそうなので、とりあえず新幹線の切符を手配して休むことにした。

「テレーレーレテッテッテー」

「昨晩はお楽しみでしたね」

「ネットサイコー」

ということでド○クエ風に一晩明かした後、僕は新幹線で一路総理の首相官邸へ。駅までなんと総理直々に迎えに来てくれるそうだ。運転するのは運転手さんなんだろうけど。着くまでの数時間暇だったので、ずっと駅弁を食って寝て食っちゃ寝スタイルを堪能していた。久しぶりのこっちの外食もいいもんだ。

「うっぷ…総理…袋かなんかないっすか…」

「主…あんなに詰め込むから」

「だって牛タン弁当上手すぎなんだもん…」

「相変わらず緊張感がないな、君らも…」

総理が袋を渡してくれて、僕は安心して横になった。リムジンが広くて助かった。

「して…大変だったな、晶君」

「いやぁ…あんな高級車にぶちまけたらどうしようかと思いました…」

「向こうの世界でのことだ！」

恐れ多くも総理が突っ込みを入れてくれた。いやぁ、お手数をお掛けしまして…。

「で、こちらが確認済みの参加国です」

テーブルの上に、ふにゃふにゃになった国旗布を広げる。数は片手で足りる範囲だが、その中には主要国会議に参加する国のものも含まれていた。そのラインナップを見て、総理が顔を顰める。

「総理のところには声はかからなかったのですか？」

「日本は反戦国家だからな。見てみろ、積極的に他国を侵略する国ばかりだ。我が国は、侵略してまで奪う愚かさを犯さないさ」

「これオフレコでよかったっすね…下手すりゃジャパンバッシングおきる発言ですよ?まぁ…総理のそういうところ支持しますけど」

思わず周りを見渡してしまい、取り繕うように水を飲んだ。総理は総理で、豪快な笑いを上げている。意外と型破りな人なんだな…。

「で、君はこの後どうするつもりかね?晶君」

「えぇ。勿論降りかかる前の火の粉を払いに行くつもりです。問題が起きそうなら…てゆうかたぶん起きるので、僕を日本国籍から外していただいても構いません」

日本人差別とか起きそうだもん。何カ国もの国の首脳をちぎっては投げちぎっては投げするんだから。文字通りちぎる。肉とか骨とか。

「そこまで気にせんでよい。むしろ、支持される可能性も五分五分に高いからな」

「…ホワイ?」

「つい数ヶ月前、中東のある国のトップが革命で殺された。晶君の一家と懇意になる、少し前くらいかな」

革命…最近聞いたな。

「今その国は、その革命を引き起こしたレジスタンスの女性リーダーを支持し、彼女を国家元首において復興しているよ」

「総理、その国って…」

「君も知っていると思うよ。〇×△だ」

確認の為に一応聞いてみたけど、やっぱり頭を抱えるハメになった。紛れもなく白夜の記憶を覗いたときの、あの国だった。

「…どうしたのかね、晶君」

「そのレジスタンスって、誰か国際指名手配とかなってたりしませんか？」

「いや、そのようなことは聞こえてこないが…」

「すみません、それ、僕の身内…のようなものです。ついでにそのリーダー、幼少時代日本で過ごしてたりします」

まぁあいつなら、目撃者は皆殺しとかしそうだもんな。敵である自国軍は、憎き敵なわけだし。軽く説明してやると、流石に総理は驚いているようだ。

「晶君の友人がその革命に関っているならある意味納得だな」

「関ってるっつうか、暗躍ですけどね」

「して、君も同じように暗殺しようと」

「そのつもりでしたけど…。よく考えれば、暗殺だったらただ頭がすげ変わるだけで状況が変わらない可能性もあるんですよね…」

「では君がしでかしたことは、我が国が責任を持って解明する…と

いうことにしよう」

「…しよう？」

総理の目が怪しく輝く。この人、裏が読めない。こあい。

「君は、向こうの世界を侵害されないように意思表明をしたいわけだろう？」

「はい」

まぁ私怨もありますけど。言うに言えない内情も。まさかこっちの世界ではフィクションの産物の、悪魔が関ってるとか言っても黄色い救急車を呼ばれかねないし。今日び敬虔なクリスチャンでも信じないだろう。せいぜいちょっとアレな預言者もどきか、悪徳新興宗教家くらいだ。

「なら、君の犯行だとわからせればいい」

「…へっ？」

「なんならここで声明文でも書くかい？我が国でそれを受信して、時間を置いて君が行動を起こす。我が国も護衛に参加はするが、その実顔パスで通してしまう。実は戦争主義国に辟易している国や団体も多々あるんだ。私が声をかけてその国や団体を後押しする。…勿論先頭をきるのは我が国だ。幸い…というのも不謹慎かもしれんが、件の戦争で我が国は反戦国家の第一人者として知られている。その首脳が支持することに、なんの不自然な点もないだろう。そして君が戦争主義国の主要部分を叩くことで、その国の首脳候補達も考えを改められるだろう。そうすれば、主要各国が反戦主義という、

実にクリーンな世界の完成だ」

総理が不敵に笑う。いや、その笑顔マジでこえぇ…つうか黒すぎる。世の中知らないほうが良かったことがあるもんだなぁっと再確認する。家族には話せまい。下手に事情を話したら、一家失踪とかマジで可能性がある。

ーーー主、この男、旧支配者の臭いがする。

ーーー旧支配者って、クトゥルーとかクトゥグアとかハスターとかのアレだろ?総理は一般の人なんじゃねぇの?

ーーー旧支配者、我と同等の外なる神、そして旧神…旧神は、元はヒトだったと言われておる。我も詳しい事はわからんが…。

ーーーアカシックレコード検閲すればいいじゃん。

ーーーそれほど重要なことでもないし、主の精神にも多大な影響があるぞ?

ーーー是非やめてくれ。

ーーーでだ。総理の心にも邪神ではないが、クトゥルーレベルの支配力を持つ力が芽生えておるということだ。

ーーー…マジかよ。

「どうしたのかね?晶君」

少し沈黙が長かったか、総理から声がかかる。今目の前にいるた

だの人だと思っていた男性は、実はとんでもないお方でした。正直肝を冷やしている。

「いや…そう上手くいくもんかなと…」

「大丈夫だ」

「…？」

「選挙に当選したとき、総理に就任したとき…全て私の思い通りにことが運ぶ。今回も、きっとそうだ。根拠はないに等しいがな」

…これが旧支配者レベルの実現力か。この人が悪い人じゃなくて良かったと心から思う。いや、相当黒いけど。そして若干勧善懲悪の思想が強いけど。たぶん己の理想…幸運にも国家、世界の平和の為ならどんな手も厭わないタイプの人なんだろうな。たぶん…僥倖。

「…総理の豪運、期待してますよ」

百パー成功するんだろうな。つうか下手すれば僕の出現も、総理の理想を果たすための歯車なんじゃないかとすら思う。おい、創造主（クリエーター）も真っ青だぞ。つうか現時点で僕より上だと思う。ダービー、僕じゃなくて、この人が創造主に選ばれてんじゃないの？

「して、僕はいつまで待機してればいいんですか？」

「まぁそう急くな。一週間時間をくれれば、充分下準備できる。君はホテルでゆっくりしてくれててもいいし、観光でも好きにしてくれればいいさ」

…こっちも別の意味で世界の命運が懸かってるというのに、たかが一週間とな。器が違いすぎる。まぁ僕もそんなに時間かけたくないから助かるけど。向こうの世界を空けるのも、ことが終わるまで家族から目を離すのも不安だし。

「…わかりました。…あーーー！じゃあ僕は一仕事前にゆっくりしてます。頼りにしてますよ、長谷川総理」

「あぁ。大船に乗った気でいてくれ」

その顔は、テレビで見ていた穏やかな総理の顔そのものだった。さっきまでの寒気がするような裏の顔とは全く違う。たぶん、この実現力を誠実にマニフェストを果たすことに向けているから、民衆に指示されているんだろう。悪は全て滅びるべきとは僕は思わないけど、この人はこのままでいて欲しい。その方が、たぶんこの世界が平穏になることに繋がるから。

～第七十七話～ブラック長谷川（後書き）

そういえばこないだ政治には極力触れないと言いましたが、思いっきり触れてる?…すみません。この作品「ぼくがかんがえたさいきょうチーム」に近いアレがあるの、で寛大な心で読んでください。僕自身、政治に関しては全くの素人であることを自覚しているので…と免罪符を打っておきます。

～第七十八話～次から本番（前書き）

アイルーが可愛くて仕方ない白カカオです。某動画サイトに挙がってるモンハンのアレをＢＧＭに書きたいと思います。短いからループ苦行になるかもしれないけど…つうかこんな内容だけど…。

～第七十八話～次から本番

某電気街で新しいゲームを買ったり、アレな喫茶店に行ったりして暇な時間を見事に浪費して、来たるその日。僕は再び首相官邸に来ていた。余暇の間はずっとサングラス常備で。だって一日目そのまま外出したら、何故か囲まれてしまったんだもん。芸能人じゃねぇっつうの。順子に電話で愚痴ったら、

『だって国王様の会見の後、お兄ちゃんの何か特集？見たいなのテレビで流れてたもん。『一般人から異世界の使者に成り上がったシンデレラガール！！』とか。私の学校でも話題持ちきりで大変だったんだから』

とのことだ。どうりでこないだ順子を車で送っていった時にも囲まれたわけだ。つうかガールは女の子に使うもんだぞ。単純に順子が間違えたのかそれともマスコミがマス○ミなのか…。そういや、僕国王のアノ発言の後すぐ向こうに戻ったし、交流の手配の時もテレビなんて見てなかったからなぁ…。

ということはさておき、またお茶とか出してもらって柔らかいソファーに腰をかけてたりする。このお茶請けの羊羹とも相性抜群でうめぇな…玉露。

「ところで、首尾はどうですか？総理」

「あぁ。滞りなくだ。全てが順調だよ」

…流石旧支配者。いや、現支配者とでも言うべきか。

「何か言ったかい？」

「いえ！何にも！」

意外とヘル・イヤーなんだな、総理。総理にはヒトのままでいてもらわないと困る。この世界のトップは、あくまでヒトでなければならない。異端でなく、民衆と同じ『ヒト』で。

「では、すぐにでも」

「おや？もう行くのかね？」

「えぇ。日本は昼でも、向こうは夜ですから。こういう仕事は、夜の方がいいです」

「昼の暗殺もインパクトがあると思うが…某大統領みたいに」

「最近ではあまり関係ないようですよ？某テロリストの親玉みたいに」

そのやりとりに、二人で顔を見合わせて笑う。ニヒルに富んだ学生の会話のようなノリだが、忘れてはいけないのはこれは一国の要人の、それもとてもきな臭い計画の会話なのだ。

「それに、僕は飛び道具は専門ではないので。ライフルもありませんし」

「そうなのかい？というより、そもそもこちらでは魔法は使えないと以前言っていたな、そういえば」

「まぁ…今回はちょっとしたタネがあるので、多少なら…。もっと

も、こないだお見せしたみたいな怪獣大戦争みたいなことは出来ませんよ?自身にちょこっとかける程度です」

「そうか。どれ、少し見せてくれんか?」

総理が悪戯っ子のような笑顔で身を乗り出す。ホント、好奇心旺盛というか柔軟というか…以前持っていた厳格なイメージからはすでに乖離してしまっている。

「駄目です。これは虎の子なんですから。それに、総理に使ったらなんだかエラいことになりそうで…」

「ハッハッハ!それは残念だ!」

だって魔力が覚醒とかされたら、それこそルルイエ浮上の悲劇が繰り返されるかもしれない。マジ勘弁。

「では、ここでゲート作って向こう行くんで、それで勘弁してください」

「そうか。それはそれで楽しみだな」

「…念のため言っておきますけど、閉じますよ?」

「なにっ!?」

あからさまに玩具を取り上げられた子どものようなリアクションをする総理。だから貴方は首相なんだから自重してください。

「僕とこうして話してるだけで、対外的に問題あるんですから。向

こうの世界との癒着的な意味で。ベイン国王が出入りするゲートが、日本にだけ作られてるって事実だけであまり心証良くないのに、総理が自由に出入りできるゲートがあるなんて知られてみてくださいよ。それこそまたミサイル飛んで来る口実作るようなもんですよ。ただでさえ隣国があんな感じなんですから」

「なるほど。念には念をってことだな。ここには各国の首脳を招くこともあるしな」

「ということです。では、終わったら…顔出しますか？」

「いや、いい。向こうでも色々あるんだろう？私より親御さんのところに行って、向こうに帰りなさい」

そう優しげな顔を浮かべると総理は、唐突に一枚の紙切れを出してきた。

『我は半マテリアルの世界より復讐の為に参った者である。先日我が世界が、そちらの世界の人間侵略を受け、多くの罪もない民が命を奪われた。我はその無念の意を受け、我が身を地獄の業火に投げ打ってで侵略者に同等の報いを与よう。貴様達、覚悟しておくがいい。蹂躙された無垢なる民の、怒りと絶望の重さを。そして、後悔するがいい。自分達が犯したことが、どれほど罪深いことかを。最後にこの手紙をこの国に託したのは、この国が我が世界にとってとても大切な友人であるとともに、先の侵略に関与していない、信頼のおける国であるからだということを明記しておく』

…ワードで書かれたそれは、また絶妙に日本は埒外ということを主張した内容だった。少し頭を抱えて、上目遣いで総理を見る。

「総理…ちなみにこれは…」

「あぁ。私が書いた」

本気で頭抱えたくなった。つうかこの半マテリアルの住人（仮）、日本語達者すぎるだろう。まぁその辺は、総理が上手くやってくれるさ。そう信じるしかない。

「…では、やつらの悪事を白日の下に晒すことと、僕が無為に人誅を下しているわけではないということを公開してくれること、頼みましたよ」

「あぁ。その点も大丈夫だ。というより、全てが終わった後も、晶君の犯行だとバレないようにするから安心してくれて構わんよ」

待て、総理。こないだ話してたこと忘れたのか？僕の犯行じゃないと意味がないと…。

「総理！それでは意味がな…」

「世界規模で、軍拡の動きがあるだろう？その矢先の今回の声明文。主要国が調査して不自然なところは丸でない。それに、この世界とあちらの世界は不可侵条約を結んでいるはずだ。腐った果実を一掃出来るさ」

なるほどね。ホント恐ろしいわ、この人。

その後少ししてゲートを開いて閉じた僕は、いざ出したのはいいとして別にキュートスに戻ることもないので次元の狭間でどうする

か悩んでいた。異世界とも違う異空間なそこは、とてもサイケな背景で彩られていた。

「なぁダービー。ここどこ？」

「簡単に言うと、多重次元だな。文字通り幾重にも次元が重なり合わされて…」

「あぁ、だからあそこで人の顔したお花が笑いかけてるのか」

「向こうでは名状しがたい物体が陽気に笑っておる…というか主、よくこんなところにいて気が狂わんな」

「何でだろうね。おーおー。ボブ・〇ーリーに似たおっさんが笑顔で葉っぱ勧めてきてるぜ」

「いや、アレは…本人だろうな…」

上下左右もわからない空間で、ただでさえ三半規管が弱い僕が酔わないのはおかしい。なにゆえ？

「ところで主。ここに長居しては、恐らくこないだ主が封印したあの三人が干渉してくると思うんだが…」

「…なに？」

「八大地獄で封印された者が行き着く先は、多重次元。ここと同じだ。つまるところ…」

あの大罪人どもの顔を思い浮かべる。と言っても、一番印象が強

いのはベルゼバブとアスモデウスよりベルフェゴールなんだけど…。
あの凄惨なシーンと、淫猥な体験が交互に浮かぶ。

『…んっ…あら…？キーちゃん…どこ…？』

「主！今思い浮かべたであろう！？言わんこっちゃない！」

「げぇっ！勘弁だぞ流石に！どうしたら出れる！？」

「先ずは四次元を目指せ！あそこなら三次元と近い上に、追加することも時間軸だけだから主の力でも容易い！」

『キーちゃん…ぁっ…はぁん！…早く…遊びましょう…？二人きりで…』

「おおい！急げ僕っ！」

目を閉じて脳内をクリアにする。ただでさえ強烈な視覚効果が強いここでは、イメージどころの騒ぎではない。視界の次元を閉鎖することで、いらない情報を全てシャットダウンする。すると、近くにベルフェゴールの魔道反応があることがわかった。感覚距離は近いけど、次元に邪魔されて直接近いわけではない。マジ危ねぇ…。
それすらも一旦リセットすると、頭の中に図面を広げる。そこで一つ疑問が浮かんだ。

「…ダービー」

「なんだ？」

「三次元に足すもう一つの次元って、時間じゃなくて空間という説

が今有力なんだけど…」

「細かい事はいいのだ！どちらも事象じゃなくて概念的存在なのだから、それを足すことに意味があるのだ！」

…なんか、珍しく力押しじゃね？まぁ、いいや。手段が仮定でもあるなら、試してみるか。

「…あっ」

「あーもう！なんだ主！」

「ここって魔術使えんの？」

「マテリアルの世界では魔法はフィクションという集団意識があるから制限されるだけだ！早くせんとあの女が…」

「わかったよ」

全く、思いつきでゲート作ったらえらい目にあったよ。

再び図面を広げると、そこに点、更に点を作り結び線にする。更に囲って面を作り、面を繋げて立体を。ここからがちと難しいんだけど、休暇中にネットカフェで色々読み漁っていたのが功を奏した。ただ休んでたわけではなんだよ？全く、『あっ！ここ進〇ゼミでやったところだ！』バリのご都合展開で呆れるけど、利用できるなら利用しよう。

立方体の中にもう一つ立方体を作り、その対応する位置の頂点を同じく結ぶ。そしてその中の立方体外の立方体に近づくにつれて、その方向の面が大きくなり、外の立方体の面と同等の大きさになる。繋がれたラインを新たな外側の立方体の辺として、回転し循環する。

そして僕自身と僕の周りの空間をその辺上に見立てると…。

「主！その調子だ！」

僕は目を閉じているからわからないけど、ダービーには次元の位相の変化がわかっているらしい。僕はそのままその四次元立方体が静かに固定されるのをイメージし、最終的にはただの立方体を内包した立方体になった。僕がいる次元の位相をその立体から切り離し、三次元の完成である。でも三次元って僕のマテリアルの世界にリンクするよな…。

「主！我の魔力でゲートを作ってマテリアルに戻る！備えよ！」

「備えよって…うおあああああああああああ！！！」

「落ちてんじゃねぇかダービーーーー！しかも下海だぞ海！どこだここはあああ！」

自分の声にドップラー効果がついてるのがわかるのはいささかシュールな感じだったけど、今は絶賛パラシュートなしスカイダイビングを決行中だ。待って！思考が働かない内に着水寸前じゃねぇか！今からじゃガルーダの翼も間に合わない！頭でその先をイメージしながら袖口に持っておいたエリクサーを一口飲む。なんだこれ！ちょっとうめぇじゃねぇか畜生！

「主！」

「おるあああああああ！！！」

水なんぞ、片足が沈む前にもう片足を水面に叩き込めばどうってことない！僕は時の加速と土の肉体強化で水面を駆けていた。幸い近く陸地が見える。降下中に周囲を見たアノ感じだと、たぶん島だろう。そこ目掛けて一直線だ！

「主…飛ぶのが間に合わないからと言って、走る選択肢を選ぶとは斜め上過ぎるぞ…。普通は衝撃を和らげて泳ぐ手段をとるというのに」

「こんな事態に前例があってたまるかっ！僕はっ！泳ぎはっ！五十メートルがっ！限界なんだよっ！つうかっ！エリクサーの中にっ！海水入ったらっ！どーすんだっ！」

「なるほど…」

かくして、無人島に辿り着いた。不幸中の幸いだな。人がいる島なら大騒ぎになってるところだった。とりあえず少し休んでから出発しよう。ここどこだかわからんけど…まぁ、まっすぐ進んだら陸地に辿り着くだろう。いやぁ、エラい目にあったもんだ。

～第七十八話～次から本番（後書き）

次元に関する理論は適当です。多少は調べましたけど、文系な頭ではさっぱりです。物理なんて勉強したことないわ…。トンデモ設定なので、突っ込みはなしな方向で。あと本文に書いてはいないけど、水面走りの理論も借り物です。藤竜版封神演義の武吉です。

登場人物紹介《マテリアル編》（前書き）

昨日の回で次から本番とか言っておいて一話挟んでやったぜへっへっへ…すみません。登場人物紹介は今回でラストです。七つの大罪どもはまだ何も考えてな…シークレットな部分が多いので。ちなみに用語とか必要な方いますか？つうか用語等の説明回欲しい方いますか？おられましたらまた追って書きたいと思います。

登場人物紹介《マテリアル編》

《マテリアル界》

地球が存在する我々の世界。マテリアルとは『物質』を意味し、反対に精神や魂など視覚できないものは『幽星(アストラル)』という。キュートスが存在する世界は『半マテリアル』といい、マテリアルの世界の物理法則や物質的要素、魔法や幻獣達など、いわゆる『フィクション』の存在を構成する反物質を有する事に由来する。

尚マテリアル界で起こる超常現象は、半マテリアル界の更に奥、アストラル界からの干渉を受けた物であり、アストラル界はいわゆる『神の座』、つまり我々が信仰する神性達、また神話等に出てくる神性達が棲むところであり、三つの世界は密接な関係にある。それらの神々は、マテリアルや半マテリアルの世界の住人の思想や信仰に基づいてその力を行使しており、中には物理法則を支えている者もいる。よって互いの干渉なくては世界が成り立たなくなってしまうのである。

ちなみにアストラル界とは総称であり、それぞれが『生命の樹(セフィロト)』の分派した星の一つである。

《神谷家》

・神谷剛三(カミヤ・ゴウゾウ)

『所属』マテリアル界日本国某県

『役職』神谷コーポレーション代表取締役社長

『種族』人間

一代で、某県では名を知らないものはいないほどの地名度と規模を持つ、神谷コーポレーションを築いた傑物で、晶の実父。仕事に厳しく、また休日もほぼ仕事に費やすほどの仕事人。近寄りがたい

威圧感を放つが、その実仕事から離れると身内に甘いところもあり、妻に対してはギャップがあるどころではないくらいのラブラブっぷりを発揮する。家庭に入ると厳格な父親を一応演じており、特に躾け面は厳しかったのだが、残念ながら反映されていない子どもが約二名いて、頭痛の種になっている。

長身で総白髪。眉間の皺が癖になっていて。、太目の眉と目力の強さが特に目立つ。名前のモチーフはデモンベインの覇道鋼造から。年齢は六十代前半。

・神谷里美（カミヤ・サトミ）
『装備』ミョルニル（槌）
『所属』マテリアル界日本国某県
『役職』専業主婦
『種族』人間

勤めていた旅行会社を寿退社をし、四人の子宝に恵まれた晶の実母。意外にもその出会いは剛三の一目惚れであり、のんびりした性格から剛三のアプローチにも最初は気づかなかった。結婚後は家庭に入り、神谷コーポレーションの発展を…というより剛三の活力となり支える。内助の功というか良妻賢母というか、意外と出来た母親である。

料理上手の〇上手で、夫婦仲、家族仲は極めて円満であり、おしどり夫婦としても近所の有名人である。そののんびりしているが気が使える性格からご近所付き合いも良好で、自慢の車で井戸端会議ならぬ、街中にでてシャレオツなカフェで女子（？）会にも積極的に参加している。子ども達に対しては若干過保護気味。

家にいるときも化粧は欠かさず、美容にもかなり気を使っている為年齢にそぐわない外見の若さ。名前のモチーフは語感と知人から。年齢は五十代前半。

・神谷昭彦（カミヤ・アキヒコ）
『所属』マテリアル界日本国某県
『役職』地方銀行勤め
『種族』人間

晶の実兄で、神谷家の長男。現在は妻子と共に近くで別居している。剛三の息子らしく生真面目で、若干神経質なきらいがある。高校卒業後に都内の某国立大学をトッププクラスで卒業するエリートだが、その頃に知り合った後の妻、千尋が同郷と知り、二人で実家に戻り、数年後結婚。現在は地銀で役職を持つ程出世したが、詳細は未ｔ…不明。ムッツリで、晶にはバレているようだがパソコンの中に秘蔵のフォルダがある模様。

輪郭は四角型で、大学時代ラグビー部だった為か骨格もがっちりしている。黒縁眼鏡。名前のモチーフはなんとなく。年齢は三十代前半。

・神谷千尋（カミヤ・チヒロ）
『所属』マテリアル界日本国某県
『役職』地方銀行勤め
『種族』人間

昭彦の妻で、晶の義理の姉。昭彦とは大学時代ゼミが一緒だったことから交際が始まる。しっかりもので、登場人物の中ではかなりの常識人。なので神谷家の最近の非現実的な出来事にいつも驚いている。他の家族とも仲が良く、女性陣とはたまに一緒に出かけたりしている模様。晶がキュートスに行っている間、長男が生まれた。

長髪で、いい意味でルックスも十人並だが、極端に垢抜けたりしてない普通の子がいいという人にはストライクゾーンド真ん中な感じ。名前は作者の以前の職場の先輩（男）から。現在二十代後半。

・神谷翔（カミヤ・ショウ）
『属性』光
『所属』マテリアル界日本国某県
『役職』乳幼児
『種族』人間

昭彦と千尋の間に生まれた第一子。千尋が妊娠時に、晶がキュートスと日本との二重生活を送る為に近場にゲートを頻繁に生成していた為、魔力の影響を受けてマテリアルの人間ながら独立属性の『光』を持っている。つうか生後間もないのに、発音が未発達ながら聖書の一節を発した化け物。

身体能力は今の所不明で、一般の乳幼児と変わるところはない。名前は昭彦の昭（ショウ）と、晶（ショウ）から。勿論零才。

・神谷美月（カミヤ・ミツキ）
『所属』マテリアル界日本国某県
『役職』フリーター
『種族』人間

晶の実姉で、晶以上に神谷家の問題児。性格はかなり奔放で、男性遍歴も多い。典型的なスイーツ（笑）。しかし懐の広さはなかなかであり、その器量から人望は厚い。というより友達が多い。以前はパチンコ屋で看板コーヒーガールをしていたが、仕事のきつさから退職し、今はその頃の貯金で悠々自適なフリーター生活を楽しんでいる。晴彦という彼氏がいる。

髪型はやや長めのセミロングのストレートで、茶髪。スタイルも良く、サバサバしたお姉さん系で、晶が学生時代には隠れファンも多かった。名前の由来はゲーム『ダブルキャスト』の赤坂美月から。年齢は二十代後半。

・神谷順子（カミヤ・ジュンコ）
『所属』マテリアル界日本国某県
『役職』公立高校三年生
『種族』人間

晶の実妹で、神谷家の次女。陸上部に所属し、インターハイ予選では短距離走で全国手前まで迫ったが、惜しくも届かなかったようだ。スポーツ推薦で、関東の大学に進学が決まっている。成績も優秀で性格も明るく素直。これんてエロｇ：。しかし男女関係には疎く、興味は実兄である晶にばかり向いてしまうブラコンっぷり。晶の懸念の材料になっている。
ショートカットで、部活の時はポニーテールにしている。身長は低め。名前はなんとなく。年齢は十八歳。

《その他関係者たち》

・倉橋香奈子（クラハシ・カナコ）
『所属』マテリアル界日本国某県
『役職』不明
『種族』人間

晶の学生時代の恋人。晶とは三年間同じクラスで、帰宅部グループでよくつるんでいた。二年生の時に香奈子から告白して交際がスタートしたが、互いの進学先が分かれ、遠距離恋愛になることが確定した際に、破局。彼女の夢が何であるかは不明だが、現在同じ県内にいることはわかっている。晶との家族とも仲が良く、いつか必ずまた顔を見せるという約束は忘れていない様子。遠くないうちに

本編にも登場する予定であるが、どこで出てくるかは未定。ブラコンの順子からの視線が気になっていたが、お互いに嫌いあってはいなかったようだ。

髪型はセミロングで、童顔。身長は平均くらいだがスタイルは細すぎず太すぎず。名前はなんとなく。年齢は晶と同い年。

・晴彦（ハルヒコ）
『所属』マテリアル界日本国某県
『種族』人間

美月の現在の彼氏。意外とチャラい系でなく、堅実系。奔放な美月に翻弄されっぱなしで、晶とたまに愚痴りあいをしている。

スーツ眼鏡。キャラモチーフはアダルトゲーム『世界で一番ＮＧな恋』から。年齢は美月と同い年。

・長谷川（ハセガワ）
『所属』マテリアル界日本国某県
『役職』内閣総理大臣
『種族』人間

第九十九代内閣総理大臣。昨今外交関係に弱かった日本国の、対外関係を飛躍的に向上させた立役者。柔和で温厚そうな物腰だが、最近裏側はかなり黒いことがわかった。常識人の皮を被ったトンデモ人物。その支配力は、旧支配者レベルである。

総白髪で上背はあまりない。名前のモチーフは知人から。年齢は五十代半ば。

登場人物紹介《マテリアル編》（後書き）

なんとか書き終えました…。つうか神谷家の人の多さに驚きました。
そしてデモンベイン、ＢＡＳＴＡＲＤ！！，クトゥルーからかなり影響を受けている事を改めて自覚しました。

～第七十九話～スターゲイザー（前書き）

どもカカオです。軽く寝違えたっぽいです…。昨日スカイプ中に寝落ちしたから絶対それだ…。でも書くことに支障ないので書きます。

～第七十九話～スターゲイザー

「あー…星が綺麗だな…」

目の前には満天の星空。僕は砂浜に寝っ転がって現実逃避していた。

「月が…綺麗ですね…」

「うっせぇ！気持ちわりぃんだよクソダービー！誰のせいでこんなことになってんと思ってんだ！」

ショボンとするダービーを尻目に、現状を再確認する。僕はこれから、あの戦争に参加した国の首脳をぬっ殺しに行かなければいけない。そして今僕がいるところはどっかの島。気分的に南国。

「だって…主が次元迷ってる間、地球が自転待ってくれなかったんだもん…」

「自転止まったらえらいことになるだろうが…」

「…ちなみにここはオセアニア諸島あたりだ、主」

「現在地わかってんのか馬鹿タレ。先に言え」

…ということであっさりわかった現在地。幸い無人島らしいので、なんの躊躇いもなくガルーダで飛行出来る。まぁ誰かいたところでやるんだけど。…最初はあの国潰そうと思ったんだけど、時差とか距離的に作戦変更するか。別にどこから潰そうと気分の問題だから

関係ないんだけど。

「じゃあ、夜半過ぎになったら決行するか。ダービー。月が南中から傾いたら起こしてくれ」

「…寝るのか？主」

「あぁ。三次元に戻ってきてから無理したから、若干疲れた」

出来れば二次元に行く方法も知りたいんだけど、難しそうだから夢に見るだけにしよう。あー…月と星の光がちょうどいい感じだ。真っ暗だとちょっと怖いし。安心して寝よう。

「主、そろそろ頃合いだぞ」

夢の中にダービーが起こしに来ると、大あくびをして体を起こした。

「ガルーダの飛行速度と加速の効果を演算して、主の体力の回復を考慮したギリギリの時間だ」

「んっ…サンキュ」

さて、寝起き一発エリクサー！少し喉も乾いていたので染み渡る染み渡る。…そういう飲み物じゃないけど。

「それじゃ…行くか。着地点の座標はお前に任せる！」

「了解だ！」

ガルーダの翼を借りてビュビュンっとひとっ飛び。飛行機と同じような高度で飛んでるから管制塔で観測されてるかもしれないけど、どうせ未確認飛行物体で済まされるんだからキニシナイキニシナイ。…まぁその飛行物体が観測された方角で、暗殺が次々と起これば関連付けられるかもしれないけど…まぁキニシナイキニシナイ。

「っと。到着」

サクっと目的地に着いた僕が今いるのは、標的の家…の屋根上。国としては中東の某国。いい家に住んでるな。まぁ今から、永遠に手放す事になるんだけど。普通に侵入するのもなんなので、分子配列を細工して、人為的にトンネル効果を起こしてストンと降りてやる。たしか、すぐ下で寝ているはずだ。

「遊び心を忘れない主だな…」

「復讐なんてただでさえも気落ちする仕事、楽しまねばやってられん。殺す間際の表情とか、断末魔とか…」

「人間の心は天使と悪魔、善と悪が混在する混沌（カオス）だと言うが…今の主は完全に悪に傾いてるな」

「いいの。平和の裏側には、こういう汚れ役も必要なんだから」

ということで、いざストーン！

「なっ！？何者だ！！」

「ダービー通訳！」

思いの外着地のときの音が大きかったらしく、簡単に標的が起きてしまった。

「ＳＰは何をしている！」

「無理もないさ。僕は天井から来たんだから」

「なっ何を！貴様は誰だ！何が目的だ！」

意外に可愛らしい寝巻き姿で、禿げたおっさんが喚いている。その格好だと逆に滑稽だぜ？

「何って、こんな夜更けに来るなんて、暗殺に決まってるじゃん」

「あっ暗殺！？貴様はどこの国の…」

「最近アンタ方が侵攻に失敗した国の者だよ」

ポケットから、血染めのその国の国旗を出す。蒼白だった顔色が更に変わり、月明かりしかないにも関らず土気色になっていくのがわかった。

「貴様は…！そういや向こうに一人日本人が要人を務めていると聞いたが、まさか…」

「そっ。ご名答ー」

「待て！貴様の国には攻めておらんはずだろう！！」

ガタガタ震えて、両腕で体をかき抱いている。似合わねぇぜ、おっさん。

「馬鹿だなぁ。アンタらのとこと違って、仲間意識が強い世界なんでね。隣人がやられてるのを傍観なんて出来るはずがないさ。同胞の為なら命を投げ出す…そんな連中なんだよ。だから、直接関係ないなんてことはないのさ。あの世界に土足で踏み込んだ時点で、お前らは敵」

「しっしかし！貴様は人間だろう！？人間なら、こちらの世界の世界が豊かになる方が喜ばしいんじゃないのか！？」

「…アンタ馬鹿だろ。奪って得るものに幸せなんか感じるはずないだろ。向こうとこっち、共存して、初めて本当に繁栄足りえるんだよ」

「だがっ…あんな化け物どもと与するなんぞ…」

…よくこんな小物をトップにしたもんだ。これはもう何が悪いのかわからん。

「はいはい。死亡フラグ乙。つうか、不可侵条約っつうもんがあるだろ」

「そんなもの！向こうを支配して得られる物を考えると護るメリットが…」

「もういいや。駄目すぎる、こいつ」

言葉を遮って溜息を漏らす。何かもう聞くに堪えないから、さっくり殺っちゃお。

「なぁ、お前アメリカのバンドとか聞く？」

「いきなり何を…」

「T．レックスって知らないか。そのバンドにマーク・ボランってすげぇボーカルがいたんだけどさ」

「わけのわからない話をするな！」

「マーク・ボランはさ、自分は三十歳前に全身バラバラになって死ぬって予言してたんだ」

「その話とコレとなんの関係が…」

「まぁ聞けよ。で、マーク・ボランは本当に全身の血管がボロボロになって死んだんだ」

頭まで真っ赤にして声を荒げる禿げを無視して、冷ややかに語ってやる。今のフレーズで、自分がどうなるかわかってないんだろうな。僕がここに来た意図を覚えていれば蒼白になって命乞いするところなんだけど。

「ちなみに魔法って便利でさ、個人個人属性があるんだ。例えば僕は土の属性。今日は鉱物を使ってみようと思う」

「魔法など、笑い話にもならん！それで脅しのつもりか！？」

「ちなみに今回のテーマは鉄。鉄分って、人間の体内にも結構あるよね。血液中にさ」

「馬鹿馬鹿しい！おい！だからＳＰはどうし…」

「無駄だよ。壁の素材を変えて、今ここは完全防音だから」

「クッ！なら…」

禿げがベッドの枕元に手を伸ばした矢先、軽く実力行使にでる。僕は動かないけど。

「グッギャアアア！！！」

その伸ばした手から、指が五本丸ごと消えている。否、切り落とされている。

「貴様っ…何を…」

「だから言ったじゃん。ま・ほ・う。お前の血液中の鉄分を凝固させて刃物に変えて、そのオイタしようとした指を切り落としただけ」

ここまでヒント出してまだわからないのか。禿げは脂汗を流して震えている。刃物を生成する量の鉄分を失ったのだ。貧血のそれもあるのかもしれない。ブルブル…ぼくはわるいはげじゃないよ。

「で、おさらい。マーク・ボランというバラバラになって死んだ偉人の例を出しました。実際は血管の破裂だけど。そして、今大ヒントなことに僕が魔法で出来る事を実際にやって見せました。さぁ、導き出される答えはなんでしょう？」

禿げは答えない。ようやく自分の末路に気づいたのか、パニックで声が出ないのかもしれない。まっ、関係ないけどね。

「つうことでさよならだ。奪っていいのは、奪われる覚悟がある者だけだ。…奪っていい理由にはならないけど。じゃねっ」

満面の笑みを浮かべてやり、対象の全身の鉄分を消費して、体内から一気に放出させる。禿げは赤いスプリンクラーになって、その場に倒れた。でもこれじゃ、なんだかよくわからないな。最悪、初見はエボラ出血熱だ。

「じゃあ分かりやすいようにっと」

禿げから出てきた剃刀状の刃物を並べて、意思表示をする。

「これでよしっ！」

「ａ　ｄｅａｄ　ｐｅｒｓｏｎ…報復か。なんだ主、洒落た遊びをしおって」

「だから、遊び心は大事なんだって。まぁ…最後の単語は足りなくて血文字にしたけど。明日の朝になれば発見されんだろ。さっ、次行くぞ次！出来れば今晩中に済ませたいんだ」

ガラっと窓を開け、夜風を浴びる。禿げが血をブチ撒かしたせいで鉄臭くて仕方なかったから、外の空気が旨い。

「ダービー。次、ヨーロッパな」

「了解だ」

月夜に、翼の生えた人間が舞った。目撃者がいたなら、天使にも悪魔にも見えただろう。

～第七十九話～スターゲイザー（後書き）

自分が英語全然なんで補足説明します。復讐となるとｒｅｖｅｎｇｅとなりますが、どちらかというと不正に対する報復という意味合いのａｖｅｎｇｅ（ａ　ｄｅａｄ　ｐｅｒｓｏｎ）という言葉を選びました。…すみません、ヤフー辞書です。あっ、あと殺害方法はジョジョ第五部のスタンド、エピタフから引用してます。

～第八十話～暴君の最期《前編》（前書き）

お久しぶりです。何の予告もなく一ヶ月以上間を空けてしまい申し訳ないです。ライブの予定が立て続けに入ったり体調崩したりでこっちを更新する余裕がありませんでした。そんでライブまだ一つ消化してないのがあるので、また空くかもしれませんが…見捨てにいてくれた方々、ありがとうございます。後編は出来れば今週中に…出来れば…。

～第八十話～暴君の最期《前編》

「はぁっ…はぁっ…んぐっ！…ふぅ」

世界最大級の都市のビルの屋上で、今僕は羽を休めている。アレから、何人も血でこの手を染めてきた。許しを請う者、傲慢に開き直るもの。最期まで状況を理解出来なかった者…。色々いたが、僕は復讐の旗の下に慈悲をかけずに断罪してきた。地球の自転に合わせて行動しているため、僕の夜はまだ長い。

「エリクサーは、体力と引き換えに魔力を生み出す秘薬だからな。もう随分減ったな、主…」

「あぁ…でも、これで最後だ」

摩天楼から見下ろす下界は、様々な色で人の営みを教えてくれる。その一つ一つがそこに人が生きていることの証明で、命の証だ。今の僕には、何故かとてもそれが眩しく見える。

ふと視線を外すと、そことは対称的に真っ暗な影が覆う区画がある。光があれば陰もある。夜の闇で視認は出来ないが、もしかしたらその壁には血痕の一つでもあるのかもしれない。それはつまり一つの命が失われていったことの証明だ。そして今の僕は、そっちの方が心地好く感じてしまうかもしれないと思えた。

「随分遠くに…来ちゃったんだなぁ…」

「急にどうした？主」

ここは緯度が高い。もうこの時期は雪が振り出してもおかしくな

い寒さになる。吐く息が白く舞い、儚く霧散していった。

「僕ってさ、お前と出会うまで…エリーと出会うまで、本当になんの変哲もない、普通の人生を送ってきたんだ…」

「…話してみよ、主。そういう心境なのであろう？」

僕はどうやら、寒い季節が好きらしい。何かセンチメンタルで、ノスタルジックで、何か胸を締め付けるような空気が、この季節にはある。

「…サンキュ。僕はただ、ドラマチックな何かもなくて、平凡な人生をこれからも送っていくんだろうなぁって思ってた。特に頭がいいわけでもなく、プロみたいにスポーツが出来るわけでもなく、芸能人みたいに何か持ってるわけでもない…。本当に、普通の人間だったんだ。特に何をするわけでもなく、ただ人並みに仕事して、人並みに結婚して、人並みに子ども育てて人並みに死んでいく…そう思ってたんだ」

袖口からエリクサーの小瓶を出して、軽く左右に振ってみる。残り一口分しか残っていないその液体が、頼り気なく波を打つ。

「それがいつの間にか異世界に渡って、空想の話でしか見たことのない物に触れて、僕とは違った人種と出会いって、その中で大切な人たちを見つけて、いつの間にか世界を巻き込むなんて重い役目を背負って、戦って傷ついて、殺して…」

煙草を一口吸ってみる。吐息のそれとは違って、少し長い間その紫煙は虚空に残る。初めて訪れてた国、いつもと違う空で吸った煙は、現実味のない味がした。

「なぁ、ダービー。僕ってさ、学生の頃とか一回も喧嘩とかしたことないんだぜ？格闘技もしたことないし、勿論殴った事も殴られた事もない。まぁ…親父の拳骨はしょっちゅう喰らってたけど」

「主の記憶は多少は確認しているからな。そのくらいはわかる。…主の性格を考えると、妥当でもあり意外でもあるがな」

「事なかれ主義だったからな。でもさ…そうも言ってられなくなってしまったんだよな…」

もう一口煙を吸うと、何かを形作るようで、何も成せずに散っていく。今までの僕のようで、今の僕の心境のようでもあった。

「僕は僕の大切なものを護る為に、沢山殺して、奪ってきた…。半マテリアルの世界だけじゃなくて、この世界でも…」

「主、今は…」

「うん、わかってる。ここまできたら、僕には僕が出来る事を全力でやるしかないんだ。それしか出来ないし」

「主…後悔しておるのか？我が巻き込んだ運命に、従うことに…」

ダービーが心許なさそうに訊ねてくる。最近のダービーは、どこか不安げだ。僕は体内の魔力の残量を確認し、それが大丈夫だと判断すると、ダービーをこの世界に『召喚』してやる。よく考えたら、僕がコイツを自分の意思で顕現してやったのは初めてだった。

「ある…じ…？」

「どうだ？この世界は。寒いだろ？」

強風が吹き荒れる高層ビルの屋上は、それ相応の装備をしていないと凍えるほど寒い。そんな寒空の中、ダービーはただ目を丸くしていた。

「…あぁ」

ダービーは目を伏せると、ただそれだけ呟いた。

「お前、寒さの感覚とかあるのか？」

自分で振っておいて、随分な言い草だと思う。

「いや。しかし、主の考えている事もわかるし、感覚を共にすることも出来る」

「そっか。…この寒いって感覚は、生きてるからなんだ。僕がまだ、人間だからなんだ」

「主…」

「向こうの世界に戻ったら、ノア＝キーランスでもいい。なんぼでも七つの大罪どもと戦ってやってもいい。ただ…この世界でだけは、神谷晶でいたいんだ…たとえそれが人殺しの名前でもいい。親父とお袋がつけてくれた、兄貴と姉貴と順子が育ててくれた、香奈子が愛してくれた神谷晶でいたいんだ。人間でいたいんだ…」

消えかけの煙草をにじり消し、膝を抱えて体育座りになる。表面

積を極力減らすと、冷たい風が少しでも和らいでほっこりする。組んだ腕の上から正面の景色を覗く。色とりどりのネオンを浴びたガラス張りのビルは、夜にも関らずに明るく写っている。

「主…我は、なんと声をかければよいのかわからぬ。それより、いいのか?こちらでは魔力は限られておるというのに、我を具現化してしまって」

「いいんだ。きっと、誰かに聞いて欲しくて、それがお前だったんだ。こんな僕の相棒でいてくれてるお前に、僕が産まれた世界の空気を感じて欲しかったんだ。…まぁ寂しかったってのが理由の大半だけど」

若干照れ隠しに腕に口を押し付けて話すと、背中からダービーの腕が回ってくるのがわかった。ちょっ!僕は男に抱かれる趣味は…って、女?

「男の姿のまま抱きしめられても主は嬉しくないでしょうから、勝手に姿変えたわよ?主…我は、やはり主が我の主で良かった…。主は、ちゃんと人間よ。確かに主は普通の人間じゃないかもしれない。もう純粋にこちら側の人間じゃないかもしれない。…けどね?それが今までの主を否定するわけではないの。主はこの世界の血を引いて、この世界で育って…それが、向こうの、ううん。こちらの世界にも必要な人間になったってだけの話。主がこの世界にいたって事実は、未来永劫変わらないわ。そして…勿論主は普通の人間でもあるわよ?普通の人間と同じように笑って、普通の人間と同じく泣いて、怒って…。みんなとおんなじ。寧ろ、どの人間よりも人間らしいわ。だから、主が我とこの景色を共有したいと思ってくれたのが凄く嬉しかった。我は、人間ではないから…。主…我は貴方の従者。心も体も、全て主の為に捧げるわ…。だから主?我も一緒に…」

「あぁ、勿論だ。僕が滅びる時まで、僕はお前と共にいるよ。ダビ子」

「ちょっ！せっかくいいシーンなのに」

「女の姿なのにダービーじゃ変だろ？」

「ダビ子ってのもどうなのよ！？」

「ップ！ッハッハッハッハ！！」

ビルの屋上に、笑い声が飽和する。転げ回って、立ち上がって…腹を抱えて笑う。その声は学生でいっぱいの喫茶店のようで、家族連れで賑わうデパートのようで…。

「ヒー…笑った笑った…。サンキュ！元気出た！」

「我は…主の力になれた？」

「充分だ。これで、やつを笑ってぶっ殺しにいけるよ」

「我は…逆に主に助けられてばかりだな…」

ダービー（女）が正面から抱きついてきた。

「肝心な時に役に立てないこともあったのに、主は我と共にいてくれる…。本当に…大好きだ、主！」

エリーに気を使ったか、僕の唇でなく頬に口をつける。

「…何やってるんだ？」

「親愛の印だよ。…好きってことさ」

何を言ってるんだこいつは。

「あっ、わかってるだろうけど、そういう意味じゃないからね？」

「…勿論わかってるよ。さっ、そろそろ行こうか」

服についた埃を叩くと、最後のエリクサーを一飲みした。

「…やっぱもう情報は伝わってんのかな」

「そうみたいだな」

上空から眩しいくらいの光を確認し、僕は少し離れた民家の庭に降りた。不法侵入？今から巨悪の親玉を討つんだ。この際目を瞑って欲しい。迷惑はかけないし。

「最初みたいに上からは不可能。正面なんて論外。上も前も駄目なら下があるじゃない」

「なんだその中途半端なアントワネットは」

「よく考えずに発言した。今は反省している」

「政治家の会見にもそんな酷い声明はないぞ」

「まっ…そろそろ行こか。ダービー」

ということで地下から侵入する策に出ました。幸い僕は土属性だし。庭を勝手に掘り返して土中に潜る。勿論穴は塞いで何事もなかったかのように見せることも忘れない。さっき迷惑はかけないと言ったばかりだし。

「うわっ…ダービー、暗っ！何かない？何か！」

「辛抱せよ主。魔力探査で方角と位置だけは見ておいてやるから」

「ダービー…お前にはわからんと思うけど、手探りで進むって予想以上に怖いんだぞ」

「安心せよ。せいぜい出会ってもモグラかミミズくらいだ。というより主が土を読めば一番早いのではないか？いつもの探索（サーチ）で」

「あー…最近やってなかったからすっかり忘れてたよ」

ブツブツと文句を言いながら進むと、数分もかからず目的地に着いた。

「アイタッ」

と思ったら目測を見誤って壁に激突してしまう。言うならば背泳ぎで勢い余ってゴールの壁にぶつかるアノ感じ。

ーーーおい、今何か聞こえなかったか？

やべっ！中の見張りか誰かが今の音に気づいたらしい。迂闊すぎだろ僕。

ーーー…気のせいだろ？ここは地下だぜ？

…良かった。馬鹿で良かった。まぁ誰もこんなところから攻められるとは思わないか。さて、ここはいっちょ派手にぶちかましてやりますか。

「スゥ…爆砕（エクスプロージョン）！！」

コンクリートの結合間に瞬間的に空気を押し込み、壁を粉砕する。どこからその空気を持ってきたかというと、僕の後ろの土を掘って出来た空間を一気に埋め、ピストン運動の要領でその空間全ての空気を目の前の壁に突っこんだんだったり。結果、僕もその勢いで地下室のなかに転がり込む。

受身をとると、騒ぎで駆けつけた他の警備が銃口を向ける前に時魔法の『停止』をかける。範囲はこの建物内全域。結構な魔力を消費するので呼吸がしんどい。無限の魔力（エターナル・マナ）を持ってるからと言って、こちらの世界ではエリクサーで体力から魔力を生成しているのだ。魔力は無限でも、体力は有限だ。日ごろ鍛錬を積んでる僕ですらこうなのだから、一般人が服用すれば一発でミイラになるんじゃないか？この薬。ディーン王女に後で改善の余地があることを告げないといけないかもしれんな。

「大丈夫だ主。独立属性などと消費の大きい特殊な魔法を使うのは、正味主とセラトリウス、白夜くらいだ。普通に魔力を行使するぶんにはなかなか優秀な薬だ」

「…さいですか」

「それより、急がなくていいのか？」

「おおぅっ！？」

こうしている間にも、僕の魔力はギュンギュン減っている。『停止』の能力が続く限り、僕の魔力も減っていっているのだ。油断すると、帰りの分の魔力が枯渇する。体力が空で倒れるともいうが。

「よーし、パパ頑張っちゃうぞー」

「そうやって魔力の無駄遣いを…」

「どうせオーラスなんだからいいじゃないか。なるようになるさ」

扉を開けるのが面倒で前w…最初にやったトンネル効果のアレ、『透過』で大統領の部屋に入る。魔力の残量を見たら、帰り分くらいは残っている。ここから先は、特別魔法は使うまい。

「…おろ？」

部屋に入ると、そこに窓辺に腰をかけて外を眺める老人が見えた。停止をかけた時点で時間が止まっているはずだから、このじいさん…大統領はずっとそこにいたのだろうか。最早必要もないので、停止の効果を解く。こいつには、いきなり部屋の気配が増えたと思うだろう。

「…よぉ。大統領閣下。殺しにやってきたぜ？」

「…存外に遅かったじゃないか。アキラ・カミヤ」

あれ？不思議に思ってない？

～第八十一話～暴君の最期《後編》（前書き）

ども。結局間が空いてしまいましたね…。すみません。ひたすら陳謝です。

～第八十一話～暴君の最期《後編》

その男は、月明かりが差し込む部屋で見てみると、老年と壮年の間あたりの印象だった。酷く疲れているような、しかしどこか達観しているような…そんな表情を浮かべていた。カランと音を立てて、グラスの中の氷が転がる。

「君がここに来たということは、私も最期の時が来たということだな」

「…あぁ…お前で最後だ」

短いやりとりの後、更に少し静寂が訪れた。相変わらず、部屋の外は騒がしい。早く手を下さなければと思っていた矢先、その男…大統領が口を開いた。

「少し、ほんの少しでいい、時間をくれないか?」

「何を今更。悪あがきは」

「みっともなく命乞いなどしない。ただ、責務を果たしたいだけだ。その後、煮るなり焼くなり好きにしてくれて構わない」

「主…」

ダービーが僕の顔色を窺うような声を上げる。どこまで信じていいかわからない。こいつは僕の敵なのだから。しかし、大統領のその言葉に嘘はないように見える。

「…いいよ。でも、少しでも疑いがかかるような素振りがあったら…」

「わかっている。私は君の怨敵だが…信じてくれ」

「トラスト・ミーね。そう言った政治家は今頃何してくれてんだか…」

僕の呟きを流し、大統領は電話機に手をかける。

「もしもし。私だ。これより大統領官邸の武装解除を指示する。そう、今からだ。挨拶はよい。全軍撤収だ。最後の晩くらい、ゆっくり過ごさせてくれ…。…撤収だと言ったろう！大統領命令だ！」

少し乱暴に電話機を叩きつけると、もう一度電話をかけ始めた。

「…ご機嫌はいかがかな？ミスターハセガワ。全く…私もヤキが回ってきたようだな。…うん？いや、来ておるよ、ここに。私が直々に雇いたいくらいのヒットマンだ。ハハハ！いや、気にする事ではない。これは私の自業自得だ。私が去った後…この世界は任せたぞ。君が仮定しているであろう我が国の次期指導者は、まだ若い。君が導いてやってくれ。…君との積もる話はまだまだあるが、これ以上君の国で育った宝を待たせるのは失礼だろう。では、息災でな。健闘を祈る」

「…誰と話してたんだ？」

「国防長官と、ミスターハセガワだ」

「責務って、何しゃべってたんだよ」

「聞いた通りさ。軍の撤退は、大統領の裁量だろう?それと…ミスターハセガワには、この世界の未来を託しに」

「そうか」

「彼は素晴らしい指導者だ。そして、人望もあり、君を始め後進にも恵まれている」

「いや、僕は別に日本を…」

「彼が…少し羨ましいよ」

氷が融けて薄くなったであろう…匂いから察するにウイスキーを口に含む。スコッチの空き瓶が、同じテーブルに見て取れた。

「少し…話をさせてくれないか?その為の、軍の撤退だ。何、別に寿命稼ぎじゃないさ」

「…最期の言葉くらいは聞いてやるよ」

僕が返事すると、大統領は微笑み十字を切った。根っからのキリスト教信者が、なんであんな暴挙にでるか。

「勿論、全て話すんだろうな?」

「オフ・コース」

そう小さく言うと、残りの液体を飲み干した。

「君も知っている通り、我が国と君の国は文字通り何十年と世界を牽引してきた。私は、そのトップとしてかなりの年月を捧げてきた。しかし、ミスターアキラ？」

「めんどくせえからアキラでいいよ」

「そうか。アキラ、私がいつ今の妻と一緒になったかご存知かい？」

「…知らないわけないだろ。僕もニュースくらい見るさ。五年くらい前だったか？」

「六年前だ。お互い再婚だったということは？」

「…知らない」

ニュースの内容までは覚えていない。ただなんとなくへぇと思った事柄はあったから、恐らくそれがそうかもしれない。

「私がまだただの地方の政治家だった頃、前妻がいたんだ。長いブロンドの、とても綺麗な女性だった」

「…長くなるのか？その話」

「まぁ聞いてくれ私はとても彼女を愛していた。彼女が喜ぶ顔を見たくて、毎日自分の時間を全て仕事に向け、私が仕事を成す度に、彼女はとても喜んでくれた。彼女の笑顔を見るために、私はなんでも出来る気がしていた。…しかし、その笑顔の合間に見せる寂しげな顔に気づいてやることが出来なかった…。今思えば、私の失敗はすでに始まっていたのかもしれん。私は知事まで昇進し、その頃はあまり家にも帰ることが出来なかった」

「他の男に寝取られでもしたか？それともベタに病でも患っていたか？」

僕が冷ややかに茶々を入れると、大統領は自嘲気味に笑った。

「どちらかと言えば後者だな。最も病ではなく事故だったが」

「…事故？」

「私達夫婦は残念ながら長いこと子どもに恵まれなくてな。手を換え品を換え、不妊治療を繰り返し、何度も検査も受けた。そしてようやく妻が子どもを宿したんだ」

「良かったじゃないか」

「…私がそれを知ったのは、病院の霊安室だった」

…茶々を入れたことを少し後悔した。

「仕事中に妻から電話がかかってきてな。大事な話があるから家に帰れないなら会いに来ると、面会出来る時間を教えてくれと。私が時間を指定すると、妻のとても嬉しそうな声が返って来た。それがやけに印象的で、そして私が聞いた彼女の最後の声になった…」

ヤバい、駄目だ。感情移入するな。話が終わった後、僕はこいつを殺さなきゃいけないんだ。

「いつまでも来ない妻を頭の片隅に追いやってまた仕事をしていると、病院から電話がかかってきた。…薬中の暴走した車が、家を出

た妻にぶつかってきたそうだ。救急車の中でまだ意識があった妻は、最期までお腹の赤ん坊を案じていたという」

「……」

もう声が出ない。僕なら、なりふり構わず報復しに行っているかもしれない。

「私は慟哭したさ。仕事にも出れなかった。アルコール中毒手前にも陥った。しかしふらつく頭で仕事に戻り、そして仕事に集中し、それでも一生死んだ妻を愛し続けようと誓った。君の国なら、『操を立てる』というやつだな」

「なんか男が言うのは違う気がするけど」

「今の妻とは、勿論公表は出来ないがあくまで形式だよ。国のトップが独身だと拙いという体裁だな」

「…はっきり言って悪習だと思う」

「ふふ…君はまだ若いな。世論というのは、そういうものだ。いずれ君にも分かるさ。そしてある日…そう、約一週間前、彼女は再び私の前に現れた」

間違いなく予想はついた。ベルフェゴール（色欲）が現れたんだろう。

「私はキリスト教信者であるとともに現実主義者でもある」

「矛盾してねぇか？」

「絶対起こりえないと思った。しかし彼女は私の心に問答無用で入ってくる。私は溺れるしか術を持たなかった。そして、君の世界に渡ったときの出来事を思い出した。魔法などという空想の賜物が実際存在する世界が隣合わせにある。それなら、有り得ない話ではないのではないかと」

有り得ないわけではない、僕も実際死んだ後のココと出会っている。有り得なくはないが…あくまでも向こうの世界での話だ。マテリアルの世界ではほぼ有り得ない。大統領の話を聞くに、心霊現象の類ではなく、共に過ごしていたらしいニュアンスが取れる。

「キリスト教お得意の、悪魔の所業とは考えなかったのか？」

「…私にはどちらでも良かった。目の前に愛する女性がいる。それだけで充分だった。実際君の世界が欲しいと言われたとき、目の前の女性が妻ではないと確信したよ。慎ましい彼女が、そんな事を言うはずがない。しかし…それすら私にはどうでも良かった」

「…で、僕の世界に侵略してきたと」

「…あぁ」

「最低だな…」

「理解している」

「でもさ…」

僕の声に、大統領がちらりと僕を見た。ダービーも僕を見上げる

気配がする。

「あのな？ダービー。僕さ、こいつ殺したくない気もする」

「…アキラ？」

「主！？」

「だってさ…わかる気がするもん。僕も、エリーの身に同じ事が起こって、僕の身に同じことが起こったら、同じようなことをする気がする…」

いつしか僕は床を見下ろしていた。馬鹿げているのはわかってる。敵に共感するなんて、何のための復讐かわからない。殺された向こうの仲間ものことも、あのときの怒りも、この感情を持ってしまっただけで全て無に帰してしまうのもわかっている。でも…この人の純粋な愛だけは理解せずにいられなかった。純粋というのは、時としてグロテスクな物だと誰かが言っていた。乱暴な言い方をすれば、ストーカーも、カニバリズムや愛憎劇の末の猟奇事件だって、純粋な愛の末路だ。それを理解して、共感してしまう時点で、僕はもう駄目なのかもしれない。

「アキラ…私が言うのもなんだが、君は私を裁かなくてはいけない。断罪するために、この世界に戻ってきたのだろう？それに、私の犯した罪を裁くのに、君はもっとも相応しい。この世界と、向こうの世界を担う…そして、このような形の愛を理解できる君なら…」

「覚悟は出来てんだな？僕は腹を括る」

「勿論。殺される相手が、君で良かった…」

「でも」

「うむ？」

「殺すのは明日だ。理解は出来る。同情も出来る。でもアンタには自分のしたことをきちんと負って逝ってもらわないと困る」

それが利己的で傲慢な僕の自己満足だとしても、なんとか今の気持ちと義務をとを折り合いをつける為には、どうしても大統領に悪者になってもらわなくてはいけない。…いや、実際悪者なんだけど。

「ふむ…いい笑顔だ」

「全世界に向けた、テレビ放送の手配、してくれ」

「お安い御用だ。それが私の贖罪に繋がる事なら、どんな事でもしよう」

大統領がそう言い放った時、月光が一層強く光った。

翌朝、大統領官邸周囲は人ごみで溢れ、交通規制が敷かれた。対称的に、報道の規制が敷かれることはなかった。全てを白日の下に晒すのが、大統領の望みでもあり、この出来事の終着でもあったからだ。僕と大統領が並び立ち、テレビ局のカメラが一斉に向けられる。フラッシュも焚かれ、日中のそれとは別の眩しさがあった。

「もう…いいか？」

「あぁ。アキラこそ、言う事はないか？」

「後は、長谷川総理が上手くやってくれるさ」

短く最期の会話を済ませると、僕は大統領から少し距離を取った。僕の手には、大統領の私物の護身用の拳銃が一丁。後からその銃弾を調べると、おいそれと大統領の物であると発覚し、これが大統領の意思であると証明されるであろう。僕は大統領の後ろ側に人がいないことを確認すると、大統領が目を閉じると同時に引き金を引いた。銃声が鳴り止む間に、彼は頭蓋の中身を後ろに飛び散らせ、そのまま大の字に倒れた。この国二度目の、大統領殺害のテレビ中継だ。もっとも今回は暗殺ではなく、処刑だったが。

「ふぅ…」

僕は暫く下を向き、溜息を漏らした。一つの歴史的所業が終わったという虚脱感と、彼に対する、この出来事に対する様々な気持ちを抱え、少し何も考えたくなかった。フラッシュや怒号ですら、僕の意識には入らなかった。

ーーーズダーン！

呆けている僕に向けて、またも銃声が響く。周囲で悲鳴が飛び交い、フラッシュが更に焚かれる。今僕の手には、一つの銃弾がある。恐らく、大統領の支持者からの襲撃であろう。強化をかけていない手は熱く火傷をしていたが、何故だか少し嬉しい気持ちになった。大統領は犯してはならない罪を犯してしまったけど、それでも彼を信じる人がいてくれたことが、何故だか嬉しかった。二度目の銃声が響く。外したと思ったのだろうが、足元の土で壁を作り、今度こ

そ僕が防御したのだと教えてやる。周囲の喧騒が別のものに変わるもがわかったが、これで何をしても無駄だとわかったのだろう。次の銃声はなかった。

「魔力、使っちまったなぁ…まいっか。長谷川総理がなんとか帰らせてくれるさ」

一人ごちると、僕は官邸の中に戻った。

～ダービーの考察～

やはり、我の思った通りになったな…。主の優しさは、敵をも拾い上げてしまうほど深い。白夜の時も、今回も…。しかし、それは危うさでもある。今回のように目的を見失いかけても敵を救おうとしてしまうことが、主の存在を危うくしてしまうことにならなければ良いが…。主、どうか、強く心を持ってくれ。我からそれを伝える事は出来ぬ。しかし、七つの大罪どもの内三人を討った今、全面戦争まで最早時間はない…。まだやつらの内六つ残っている…。我を創造せし創造主よ…どうか、主を救ってくれ…。主、わかったであろう？くれぐれも愛を向ける方向を間違えるな。そして、主を愛するもの達を、護るべき者たちを間違うな…。大丈夫だ。主には我が、初まりの者たちが、家族が…エリーがついている。だから、主、どうか道を違わないでくれ…。

～第八十二話～救済（前書き）

ども。これにて第四章は終わりです。そろそろ完結が見えてきました。年内は無理ですが。つうか、しばらくまた休載します。充電期間が少し欲しいです。〇樫並に不定期で申し訳ないですが。

～第八十二話～救済

あの後、僕は厳重な警備の中日本に送り返された。長谷川総理の配慮で、僕の家周辺の警護は暫く続けられるそうだ。ネット上などの僕に関する情報は全て規制されたらしく、報道や表現の自由などに触れそうだが、それが僕の家族…国民を守る為の必要悪だと判断したそうだ。

「…ふぅ」

海辺の国道をのんびりとドライブしていたが、少し疲れを感じて路肩に車を停める。家には、ほとんどいなかった。わかってくれている、味方でいてくれていると信じているはずなのに、その視線が怖かった。実際はそうされていないのだが、腫れ物を触るような扱いを受けそうな気がして居たくなかった。それだけは我慢出来なかった。途中で寄ったガソリンスタンドでも、店員が僕と気づくや否や態度が急変したことも今の気分に拍車をかけているのかもしれない。一応総理に面会した時に被っていた帽子とか何やらで顔は出来るだけ隠していたが、マスクまで装備してしまうといかにも怪しくなってしまう為に却下した。必然、どうにもバレ易くなってしまう。

「生きづらそうだな、主」

ボーっと波間を見ている僕に、ダービーが声をかけてきた。

「まぁそりゃこっちの世界ではそうされてもおかしくない事をしたからねぇ…覚悟はしていたけど、やっぱちょっとしんどいわ」

夕日が沈む海は、何時見ても美しい。オレンジが海面に反射し、

某絵画のような幻想的な風景を描き出す。黄昏時という言葉は、本当にこういう時の為にあるらしい。昔の人は上手い事言ったもんだ。みるみるうちに空の色が橙から藍に変わっていく。カレンダーではもう十二月。日のある時間はどんどん短くなっていく。

「主…主の居場所は」

「わかってるよ。僕は本当にこっちの世界では異分子になったしまったし、向こうで悠々と暮らす方向にシフトするよ。うん、未練はない。腹括った」

「いや、違うぞ主。主は…」

「さぁ、そろそろ帰るか。海から山まで帰るのは、そこそこ時間かかるし。今日はもう飯食って寝るさ」

晩御飯は、お袋に頼んで部屋の前に持ってきてもらえばいい。明日には僕の財産は全て家に預けて、向こうの世界に帰ろう。白夜の件も片付いていないし、エリーがきっと、今か今かと僕の帰りを待ってる。なんだかんだ言って、結構な日数をこちらで過ごしてしまった。東の平原の獣人達はどうなっただろうか。そんなことを考えながら、カーステレオの音量を爆音に上げ、峠道を駆けた。

「ただいまー。お袋、飯僕の部屋まで持ってき…」

靴を脱ぎ、顔を上げる瞬間、僕の言葉が途切れさせられた。

「あのー…どちらさんですか？」

リビングで家族と一緒に談笑している、見覚えのない女性のお方。

なにか僕に気づいたような顔をしているので、恐らく僕も知っている人なんだろうけど…。以前の職場…親父の会社には、プライベートで僕の家に訪れるような女性の知人はいない。一瞬で思考をを巡らせるが、如何せん該当する女性が出てこない。

ふと、女性が僕の元に近づいてきた。ショートカットでボーイッシュな印象を受ける。その癖その髪はきちんと手入れされていて、彼女が近づくとなんだか懐かしい香りが鼻腔をくすぐる。

「久しぶり…本当に、久しぶり…。晶…あきちゃん！」

僕がその首筋にある黒子を見つけたのと同時に、彼女は抱きついてきた。僕の胸元に収まる身長、シャンプーの匂い、首筋の黒子…そして何年経ってもなお、聞き間違えるはずのない声。以前僕が大好きだった声の持ち主、香奈子その人だった。

「…おい」

「あっ！ごめんね？あきちゃ…晶にはもう婚約者がいるのに…てゆーか、御家族の前で抱きついたりして」

「いや、そうじゃなくて」

「あっ、私がいたら入れないよね？ごめんね？すぐどけるから」

「じゃなくて！」

抱きついて数瞬後に離れた香奈子に向かって、思わず大きい声をあげてしまう。動揺が隠し切れない。

「なんで香奈子がここにいるんだよ！」

「なんでって、テレビで見たよ、大統領の。その時の晶の最後の背中が、なんか辛そうな感じがして…ホントは昨日も一昨日もきたんだけど、晶家にいなかったし」

「それにしてもさ…」

「それに…晶のお母さんとも約束したし。…また、必ず遊びに来るって」

はにかみながらそういう香奈子の顔を、僕は見ることが出来なかった。

「…さ、晶、香奈子ちゃんも。積もる話もあるだろうし、晶の部屋でゆっくりしたら?晶のご飯は、後で私が持っていくから」

「つってもさ…」

「大丈夫よ、何も変なことはしないから」

「その心配はしてねぇ!ったくなんで無駄にそういうとこオープンなんだよ」

「私だってそれなりにいい歳よ?晶のご家族には色々知られてるみたいだし、恥じらいなんて持ってても仕方ないじゃない」

バッとリビングを見渡すと、若干名が顔を逸らす。…何話してたんだよ、香奈子も含めてお前ら…。つうか精神的疲労がやばいんだから突っ込ませるな。

「…もういい。着いてくるなら勝手にしろ」

「晶ちょっと冷たくなったんじゃない？学生の時はあんなに愛し合った仲なのに」

…突っ込む気にもなれん。僕は無言で階段を昇る。そのすぐ後ろから香奈子の足音が聞こえるが、振り向くのも面倒だ。

ガチャリとドアを閉めると、後ろから香奈子の体温を感じた。

「変な事はしないんじゃなかったのか？」

「やっぱり晶の背中、なんだか寂しそう…」

「…無視かよ」

「社会に出れば、スルースキルくらい身につけなきゃやってられないの」

「バカタレ。僕だって経験しとるわ」

「晶の部屋、すごい久しぶり！あの頃と全然変わってないじゃない」

僕の背中から離れると、香奈子は懐かしそうに部屋の中を物色する。

「とことん無視かよ」

「あー！灰皿！晶もすっかり染まってしまったのね…」

「何にだよ」

「肺がヤニに」

「正解すぎるけどだからどうした」

そんなあまりに軽いキャッチボールに、やけに穏やかさを感じる。別れる前の僕らの空気そのままだ。未だに入り口で立ち尽くしている僕をヨソに、香奈子はベッドを背もたれにテーブルの前に座る。香奈子が意識しているかはわからないが、そこは香奈子の定位置だった。その隣で僕がベッドに腰をかける。それが、いつもの僕らのポジションだった。

「ねぇ晶、私も吸っていい？って灰皿ある時点でこの部屋禁煙じゃないもんね。吸っちゃお」

そういうと、香奈子はバッグから有名ブランドの煙草ケースを出す。

「お前、煙草なんか吸ってたのか？」

「お互い様じゃない」

笑いながら細身の煙草をくわえると、手馴れた手つきで火を点ける。僕もいつもの位置に腰をかけると、香奈子の煙草の箱から、微かにメンソールの香りがした。

「なぁ」

「どうしたの？」

「何で女の子の煙草ってさ、そんな細いんだろうな」

「知らないわよ」

香奈子は笑うと目がなくなるくらい細くなる。そんなことまで覚えてる自分に驚いた。

「なんで田舎の若い喫煙者って、みんな煙草ケースも財布もそのブランドなんだろうな」

「知らないわよ」

香奈子がもう一度笑うと、そこが僕の一番好きなところだったことを思い出す。香奈子の隣の床に座りなおし、僕も一服することにした。彼女と違ってケースに入れていないから、ポケットからくしゃくしゃになった煙草が見える。

「じゃあなんで持ってるんだよ」

「なんとなく」

「なんだそりゃ」

短いやりとりで数度目の笑い声が響く。僕自身、ここ数日ほとんど笑うことがなかったため、厳密にはここ数日間で数度目の笑い声だ。

「私が自分の意思とか気分じゃなく、誰かに流されたこと今までであった？」

「…ねぇな」

そんな確固たる自分を持ったところも、僕が好きだったところだ。

「晶に告白した時だけよ?流されたの」

「アレは香奈子が勝手に雰囲気に流されただけだろ。僕は無実だ」

香奈子が妙なことを言いやがったおかげで、少し微妙な空気になってしまった。

「あっ!懐かしい!卒アル!」

立ち上がり、香奈子は勝手に本棚から卒業アルバムを取り出す。僕らの高校時代のアルバムだ。こういうものは、意識しないと案外見ないもんだ。僕も年単位で見た記憶がない。

「アッハハ!晶髪短ーい!」

「あの時は生活指導の吉岡に無理矢理さぁ」

「懐かしー!いたねぇ、ヨッシーとか」

「あの時はびびったよなぁ、佐野んちで飲み会やろうとした時」

「あったあったー!二人でスーパーに買出しにいったときに偶々居てね!」

「なー。なんでそう言う時に限ってエンカウントするんだろうな」

いつしか、時を忘れて二人で思い出談義に盛り上がっていた。本当に不思議な事に、香奈子と話していると、さっきまでの鬱屈した気分がいつのまにか霧散してしまっていることに気づいた。

「あっ、そろそろ私…」

「あぁ…もうそんな時間か」

時計を見ると、日付が変わる少し前くらいだった。今日も明日も平日のはずだ。香奈子も仕事があるのだろう。そして僕もそろそろ向こうの世界に帰らなくてはいけない。

「香奈子…」

そして僕は聞かずにはいられなかった。

「僕が、怖くないのか?」

立ち上がる香奈子を見上げる形で、僕は声をかけた。

「…なんで?」

不思議な事に、香奈子は本当に何を言っているかわからないという顔で笑ってみせた。

「だって、一応罪のは問われてないけど、世界中の首脳を殺し回った大量殺人犯だし、魔法なんて異端な力も使えるし…」

「それで?」

「僕と関りあるって知られたら、どうなるかわかったもんじゃないし…」

「それで？」

「それでって、お前さ…」

突然、目の前が暗くなると同時に、上半身が柔らかい体温に包まれた。

「おいっ！？」

「ふふふ…あの時と、逆だね…」

「だからっ」

「私達が、別れた時と…」

その言葉に、二の句を継げなくなってしまう。脳内にフラッシュバックするあの日と似たシチュエーションに、思考が一瞬途切れた。

「まぁだグジグジ悩んでるの？」

「…？」

「晶が悩んでる時って、大体同じ。自分の事より周りのことばっか考えて、がんじがらめになって…。私前も言ったよね？晶は自己評価が低すぎるって」

そんなことあったかと、記憶にダイブする。そういや、僕が悩ん

でいるといつも、その言葉が返って来た気がする。

「そういうのって晶の優しさからだと思うし、私が惚れたところでもあるんだけど…。辛いだけだよ?それ」

香奈子の服から、香水の香りがする。気分が落ち着く香りが、残念ながら僕にそこまで香水の知識はない。ただその香りのおかげで、香奈子の言葉がすとんと心に落ちてくる。

「それにね?自己評価が低いってことは、自信がないってことでしょ?自分を信じてないからでしょ?それって、晶の周りの人に対して失礼じゃない?」

失礼?いや、僕はそんなつもりじゃ…。

「晶に良い所がいっぱいあって、だから…晶の事が好きだから、晶についてきてくれるんでしょ?向こうの世界の人も…私も」

香奈子の考え方は、たまに僕に啓示的な発想をくれる。僕なんかじゃ到底思いつかない、香奈子に勝てないと思っていたところだ。

「晶は優しいから、自分を慕ってくれる人には全力で応えようとする。でもたまにそれが空回っちゃって、こういう風になっちゃう。だから晶?私達のこと、晶の周りの人のこと大切に思うなら、自信持って。それが礼儀だって言ったら、晶はそうせざるを得ないでしょ?」

最後の方は冗談めかした口調だったけど、僕の目頭が熱くなるのを止められなかった。

「私にとっては、今でも晶は大切な人だよ？だから、こっちの世界の晶の居場所は私が作るから…」

もう、涙が出てくるのを止められない。一旦決壊してしまった堤防は、水が引くまでその意味を為さない。

「向こうに婚約者がいるのは聞いた。けど、親友になるのなら構わないよね？愛情と友情はベクトルの向きが違うだけで本質は同じだって、晶昔テレビ見てるとき言ってたよね？ドラマで『私と友達どっちが大事なの？』なんて馬鹿馬鹿しいこと言うヒロインに対して。本質が同じなら、私はそれで満足出来るから。私、ちゃんと晶の中身まで知ってるんだから。例え人を殺しても、そうせざるを得ない理由があるんだって、晶はそんなこと喜んでする人じゃないって、私知ってるから。私がずっと見続けてきた晶は、絶対的な意味で間違った事はしない人だって、必ず筋は通す人だって、知ってるから。私は、そんな晶がすきだったんだから。ふふっ、過去形にしちゃったね。今も好きだよ。ごめんね？別に困らせたいんじゃないから。安心して？言ったでしょ？私は親友っていう特殊で満足だから」

僕が欲している言葉をいとも簡単に紡いでくれた。居場所を作ってくれるって、僕はこの世界にいてもいいんだって、本当に欲しい言葉を香奈子はくれた。ただ嬉しかった。胸の中が、形容しがたい感情でいっぱいになる。ただそれが少し前とは違う、感謝と幸福に満たされた感情だということは理解出来た。肩の震えで、香奈子にはきっと僕が泣いてることを気づかれているだろう。でも、決壊した涙腺を直す術を僕は知らなかった。たぶん、この涙はカイムでも操れないだろう。

「香奈子…僕も香奈子が…」

「ふふふ。駄目だよ？晶。その感情だけは流されたら」

香奈子の胸にかき抱かれた顔を、香奈子に向ける。きっと僕今酷い顔をしてるんだろう。

「晶には大事な子がいるんでしょ？バレないと思って、裏切ったら駄目。そんなの、私が好きな晶じゃないよ？だから…気持ちは嬉しいけど、駄目」

そう言って、香奈子は僕を離した。

「約束する…必ず、また帰って来るって」

「じゃあ指きりね。ゆーびきりげんまん」

「ガキ」

「五月蝿い。ほら晶も」

「はいはい。うーそつーいたら針千本飲ーます」

「「ゆーびきった」」

「ふふ…じゃ、帰るね」

「おう」

階段を下りると、パジャマ姿のお袋と出くわした。

「あら？もう帰るの？」

「はい、明日も仕事がありますので」

「もう大人だものね。晶、送っていきなさい。香奈子ちゃん、また遊びに来なさいね？晶いなくても」

「はい！また来ます」

数年前と同じだと思ったが、特に考える事はなかった。決定的に、僕らの表情が違っていたから。

家を出ると、どうやら香奈子も似た感想を持っていたようだ。

「まるであの日の再現みたいだったね。ほら、天気も」

空を見上げると、月や星の綺麗さまであの時と同じだった。田舎の冬の空気は、本当に澄んでいる。

「でも、やっと返せたかな？」

「何を？」

「あの日、晶にはもう甘えられないって言ったでしょ？よく考えたら、付き合ってた間甘えた分晶に返せてなかったなって」

「馬ー鹿。そんなもん考えた事なかったよ。付き合った頃はお互い様なんだから、プラマイゼロだ」

「じゃあ今回の件で、私から晶に貸し一だね」

「…そう取ってもらっても構わないよ」

街頭の光が、二人の影を伸ばす。その光に負けないくらい、月明かりが輝いていた。

「じゃあその借りさ、向こうの世界で返すよ」

「どういうこと？」

「今回は侵略って形でこっちの人間が向こうに入ってきたけどさ、いつか、また平和に交流出来るような世界を僕が作ってみせる。綺麗なんだぜ？向こうの世界も」

「出来るのー？晶に」

「出来るさ。向こうではそこそこ偉いんだぞ？僕」

「あのさ、晶。思ったんだけどさ」

「ん？」

香奈子がなにやら真剣な顔をしている。横顔をのぞき見るが、やっぱ香奈子は美人の部類に入ると思う。

「『僕』じゃなくて、『俺』の方がいいんじゃない？」

「なんだよ藪から棒に」

「その方が、自信もつくんじゃない？」

「根拠は？」

「なんとなく」

「またかよ」

二人の笑い声が夜道に響く。なんとなく、それだけでえらく清清しい気分だ。

「…わかったよ」

「俺を信じろ、香奈子」

「……うん！」

香奈子の、今日の三本指に入るほどのいい笑顔が見れた。いや、今日一番かもしれない。

「じゃあ…ここで」

「おう！…気ぃつけて帰れよ！」

「うん！またね！晶！」

十字路で手を振る香奈子。不思議と、寂しさはあまり無かった。だって俺は、この世界に戻ってきていいんだから。

「なぁ、ダービー」

空気を読んでずっと黙ってくれていたダービーに声をかける。

「俺さ、まだ全然香奈子に勝てないな」

「勝つ必要なんかなかろう？」

「ん？」

「勝たなくても。護ることは出来るぞ」

「まぁ…その通りだな」

でっかい借りを作ってしまったけど、これですっきりして向こうに帰れる。向こう着いたら…とりあえず少しダラダラしよう。白夜？少しくらい遅くなっても構わん。

～閑話休題～聖夜の奇跡（前書き）

どうも。白カカオです。二日遅れのクリスマスプレゼントです。…プレゼントなら当日に投稿しろやってことですが、夜勤明けプラス連休をリア充に過ごしたので…。被りたかったなぁ…サンタ帽。ということで、最終章スタートの閑話です。

～閑話休題～聖夜の奇跡

「アキラ君！アキラ君！メリークリ○○ス！」

「えぇーい！朝っぱらから書き手に自重を余儀なくさせるような言い間違いをするな！クリスマスだクリスマス！」

キュートスに帰ってきて数日目の朝、なんか色々間違った国王が僕…俺の部屋に飛び込んできた。サンタの服は白じゃなくて赤だし、連れているのはケンタウロスじゃなくてトナカイだ！ヒゲは…まぁ正解にしておくか。別に三つ編みにする必要はないんだけど。どっかの校長じゃあるまいし。

「しっ、しかし向こうの留学生から送られた資料を元に、仕立て屋に作らせた物なのだが…」

「…一応その資料とやらを見せてもらおうか」

国王が素直に差し出した手から、一枚の紙を受け取る。ナニナニ…？服のニュアンスは大体合ってるハズ…白黒なのがやけに気になるけど…。

「生地は基本的に白の無地で…ってなに？倒した敵の返り血で真っ赤に…っておい！留学生！お前らの周りにはサンタ討伐戦の猛者しかいないのか！？知識が偏り過ぎだろ！」

「サンタ討伐戦…？サンタとは子供たちにプレゼントを配る存在なのではないか？」

「その認識が出来て、なぜ極一部の人間によって作り出されたレッドキャップ紛いのサンタの衣装を作らせた…」

「しかしサンタは、家の煙突から入れるほどの小さいおっさんなのだろ？レッドキャップの亜種だという考察も出来…」

「ない！なんでそんなとこだけ現実主義なんだよ！もっと突っ込むとこあんだろ！トナカイとソリは空飛ばねぇとか！」

「いや…そっちの方が夢があっていいかと…」

「めちゃくちゃすぎんだろ！

「そうか…妻や娘たちにもサンタの衣装をさせてやろうと思って楽しみにしてたのだが…残念だ」

…おい、待て？妻や娘ってことは…エリーもか？

「主…」

流石ダービー。一心同体だ。俺が考えたことに一瞬でたどり着いた。エロセンサーともいう。

「主！ハーリー！ハーリー！ハリアップ！」

「わかってる。まぁ落ち着け。…国王、もしかして、さっきの企画書に女性用のサンタコスも描いてあるか？」

「あぁ…描いてあるがしかしこれは違うのであ…」

「ちょっと貸してみろ」

国王の手から件の紙をひったくると、裏面にたしかに描いてあった。…間違いない、俺の推理通り、日々の戦いに心も体も疲れきった男どもに夢と希望を与える、ミニスカサンタのそれが。

「国王、無駄じゃねぇぜ？」

「おお！どうしたアキラ君！かけてもいない眼鏡が光って見えるぞ！」

「なぁんだ、簡単なことじゃねぇか。国王…いや、オッサン！仕立て屋に行って、この俺が塗りつぶした部分に赤い布をあててもらってくれ！それだけで謎は全て解けた！」

「き…君は一体…」

「神谷晶、探偵さ」

「ヒャフゥー！さっすが主ぃ！いよ！大統領！」

「いや、ダービー…大統領はやめてくれ。こないだの今じゃ色々しんどい」

「……朝っぱらからなにやってんのよ、お父様たち。朝ごはん、いらないの？」

水色のネグリジェのような寝着をキタ━（ ゜∀ ゜）━！…もとい、着たディーン王女がドアの前で冷ややかな視線を送りながら立っていた。

「…ディーン王女がそこにいたことなど、まるっとお見通…」

「そ。アキラ様は朝ごはんいらないのね」

「いる！いる！すぐ行く！」

国王がバタバタと娘の後を追うのを横目に、窓の外を眺める。そうか、今日は向こうだとクリスマスなのか。マテリアルと半マテリアルが共有する、初めての年、初めてのクリスマスだった。白く雪が舞う中、街がにわかに活気づく気配が感じられた。

俺がこっちに帰ってきてから、いや…向こうにいる間もか、色々あった。

まずは、白夜の処分。初まりの者たちが全員揃い、国はその存在を公に公表するに至った。これから起こることは、間違いなくこの世界…いや、位相や次元を超えた全ての世界を巻き込む最終戦争という出来事だ。その重要なピースを国民に隠すなんてことは到底出来るはずもなく、それを乗り越える為には、初まりの者たちの最後のピースである白夜…ヘル・ブリングのヘラの存在は絶対的に必要なことだった。国民の動揺はやはり大きく、今や伝説級（レジェンドクラス）の英雄であるマドラのおっさんを討った張本人である白夜に対する非難の目、そしてそれを許し味方に入れた騎士団への視線は冷たいものがあったが、時間が経つにつれて少しずつ…本当に少しずつだが緩和されていった。彼らは今、シーリカの家に間借りしているようだが、男である白夜の肩身は狭いようで…たまに来るシーリカの彼氏と仲良くなることでなんとか間持ちしているらしい。シーリカとヘラの尻に敷かれている白夜も、少し見てみたい気もする。

そしてもう一つ懸念していたこと、獣人族の移民。これにはやはり住居の手配や職の斡旋など、国の執行部がなんとか準備をしていたらしい。正確には同時進行だが。元々そこそこ広い領土があるキュートスだ。仮設住宅などは早く手配していたらしい。土魔術師達は臨時収入が入ったと喜んでいたそうだが、それって土建屋の仕事だよな？魔術師って頭脳労働者じゃないのか？まぁ微妙な心境だけど、結局バリアスから住み着いたドワーフたちの協力も得て、まぁ順調そうだから良し…かな？適材適所って言うし。しかし住むところがあってもここもギリ資本主義…まではいかないけど、働かざるもの食うべからずの世知辛い世の中だ。勿論自給自足も出来ないことはないが、それは肉食系獣人なら持つだけの話。草食系獣人は、作物は育つまで時間がかかる。なら買わなければいけないが、いかんせん先立つものがない。となると収入が必要なわけで。それには元々東の平原の長、九尾の筋の者で元西の平原の住人、そして現キュートスの住人である狐型の獣人巫女のコトリが積極的に行動してくれているらしい。そういや九尾の婆ちゃん…最近知ったんだけど、やっぱり女性らしい。まぁ玉藻の前だったり妲己だったり傾国の美女だった彼女はやっぱ女性だわな。…彼女は荒れた平原に残ることを選んだそうだ。元来あまり人の多いところに居座る主義ではないらしい。…若い頃に贅を尽くしすぎたから、今は隠遁したいといったところがもっぱらの本音だそうで。獣人族の問題も、いずれ時間が解決してくれるだろう。俺の中では、バリアスの時と同じ感じになるんではないだろうかと睨んでいる。

「アキラー！こっちこっち！」

ぼんやりしながら街を歩いていると、ミニスカサンタの格好をしたエリーが俺を呼んでいる。今俺たちは、国王一家一同引き連れて街を闊歩…散歩している。朝食の時に浮かれきった国王がぶちまけた今日一日サンタコス令で、王家お揃いでサンタの格好をしている。

勿論俺も巻き込まれたが、食客でありエリーと夫婦にもまだなっていないというグレーなところを突き、帽子だけ被るという見事な落としどころに落ち着いた。…まぁこの一家がお祭り好きなところも相変わらずで、そんな人たちが統治している国なのだから、国王の『無駄な』カリスマ性も相まって国民の大多数がお祭り好きに染まってしまうこともある意味必然で…今晩には町中がサンタコスで溢れるだろうことが予想つく。確かに俺も祭は嫌いではないし、美麗なエルフ達の（ミニスカ）サンタコスなんて眼福であることに変わりはないのだけど…あまり巻き込まれたくないのもまた事実。

ーーー主！主！ここは天国か！？いや、ヴァルハラか！？

ーーーそれは今通り過ぎた女の子が多いバーの名前だろうが。

つうかフィクションの世界がなんて名前の店やってんだ。

ーーーもう…我はこの世に未練はない。今すぐ死んでしまっても構わない。

ーーーお前って死ぬの？殺していいの？

ーーー…やめてくれ。主に介錯を任せたら、阿鼻叫喚で死ぬより恐ろしい地獄を味わいそうだ。

ーーーわかればよろしい。

「アキラ！早く！」

「お、おう！すぐ行く！」

エリーの隣りに駆けつけると、腕に気持ちいつもより強めにしがみついてきた。

「どうした？」

「また考え事してたでしょう？」

「いや、ダービーと会話を…」

「また…昔の彼女のこと？」

帰ってきて俺の一人称の変化に気づいたエリーは、少しナイーブになっているようだ。懇願されては隠し事はできない性質（タチ）の俺なので、馬鹿正直に話してしまったのがいけなかったのかもしれない。エリーが俺の過去の…特に恋愛ごとに敏感なのは知っていたはずなのだが。

「…違うよ」

「嘘。少し間があったもん」

…特別意味はなかったんだけどなぁ…。最近のエリーは少し不安定だ。もしかしたら、この戦いの終末が近づいていることを感じているのか…前から妙なところに敏感な節があったし。からの初まりの者たちの国民に対する公表…何も思うなという方が無理があるか。

「なぁエリー」

「んっ？」

小首を傾げて俺を見上げるエリー。不覚にも少しドキッとしたのは胸の内に留めておこう。

「国王とかアホみたいに騒いでるけど」

「アホとはなんだアホとは」

「向こうの世界で、一般的に何をするかわかってるか？」

「うーん…わからないや」

「…だろうな。プレゼントを渡すんだ。親は子供に、恋人たちはお互いに」

「プレゼント…かぁ。アキラは何かくれるの？何か欲しいものあるの？」

自分で話を振っておいてなんだが、特に欲しい物がなかったことに気づく。こっちの世界に来てから、めっきり物欲と無縁になってしまった。

「…いや…特にないや。でもエリーには何かあげようと思ってる」

「何かって何！？」

「馬ー鹿。それ言ったらサプライズにならねぇだろ。それにまだ考えてないから、教えれない」

「ええー！」

頬を膨らませてエリーが抗議する。ここ数ヶ月の間に落ち着いたのは間違いないのだが、こういう時に出る子供っぽさは相変わらずだ。愛嬌があっていいと思うけど、それは親馬鹿？…は違うな。彼氏馬鹿？…とは言わないよな。とりあえず、たぶん馬鹿なんだろう。

「…でも私は、アキラにプレゼント出来る事、あるかな」

そんなくだらないことを考えていたから、エリーの小さい呟きを聞き漏らしてしまう。

「なんか言ったか？」

「ううん！何も言ってないよ！」

「おーい！アキラ！」

なんつうかベタなタイミングで、少し離れたところからカイムの声が聞こえた。手に袋を持っているところを見ると、どうやら買い物中らしい。

「おう。何買ってんだ？」

「これさこれ！」

カイムがニコニコしながら袋から出した物は、俺を脱力させるには十分なものだった。

「…なんでお前も乗ってんだよ」

「アキラだって被ってるじゃない、帽子」

「これは精一杯の妥協案だ」

カイムが次々とサンタグッズ…いや、クリスマスグッズを出していく。というより、サンタっぽいコートを出してそのまま着おった。

「似合う？」

一回転して見せるカイム。お前そんなキャラじゃなくね？

「はいはい似合う似合う」

「エリーちゃんも可愛いね」

「えへへ。ありがとう、カイムさん！」

カイムの言葉に嬉しそうに俺にしがみついてくるエリー。腕に当たる感触は…まずまずだな。

「カイム、アキラとエリーちゃんも！ってゆうか、国王様んち大集合？」

「お前ら、何やってんだ？」

さらに少し前方からシーリカにヘラ、白夜組、隣の路地からグレンとガラムが現れた。なんというエンカウント率。

「お前ら何してんの？」

「私は、外が楽しそうだからヘラとお買い物に。荷物持ちもいるし

ね」

「まぁ…そういうことだ」

シーリカの言葉に、ヘラが恥ずかしそうにそっぽ向く。二人の頭にも、俺らと同じくサンタ帽。似合っているが、ヘラ的には恥ずかしそうだ。

「白夜…ご愁傷様だな」

両腕に複数の袋、更に抱えるようにテンプレな大小様々な箱の山。トドメに背中になにやらデカい物を背負っている。これは最早なんらかの修行と言っても差し支えないだろう。

「そう言ってくれるなら手伝ってくれ、晶」

「却下」

「俺は…なにやら祭の声が聞こえてきたからこの引きこもりを連れて外に」

「ふんっ！余計なお世話だ」

「…の割に、帽子どころか服までサンタコスを纏っているのはどういうことだい？ガラムくんやい」

「うっ！五月蝿い人間風情が」

なんか久しぶりに聞いたな、それ。

「まっ、みんなクリスマス楽しんでるみたいだし、俺とエリーは国王のとこに戻るかな。じゃ、メリークリスマス！」

たぶん、メリークリスマスの意味もわからないだろうが、そう言い残すと俺とエリーは国王のご一家のところに戻った。そこかしこで出店や、路上パフォーマーやらバーゲンやらで賑わっている。うん…どこも誰もみんな、楽しそうだな…。平和過ぎて、何か胸が締め付けられる。この平穏が永遠に続かないのなら、せめて少しでも長く…安らかでありますように…。

「っておい！国王の野郎もしかして酒飲んでやがるな！？」

「えっ！？ちょっと待ってアキラ！」

「てめぇ馬鹿国おー！酒弱いエルフがドワーフと勝負なんか出来るわけねーだろうがー！！」

エリーの手を引き、賑わう街中を走る。空は雲が覆い被さり雪がちらつくのに、少しも寒さなんか感じなかった。この街の熱気と、繋いだ手に伝わるエリーの体温で。

「…やっと落ち着いたな」

酔いつぶれた国王を背負い野次馬の群れを抜け、夕方からさらに城を開いた晩餐会が続き、身も心もクタクタに疲れきっていた。終盤になりある程度落ち着いたところで、俺とエリーは俺の自室に避難していた。どっかりとベッドに腰かけて、年寄りみたいに声を上げている。

「でも…楽しかった」

椅子に腰掛け、テーブルに肘をかけたエリーが、照明代わりの蝋燭に照らされて見える。オレンジの明かりが温かく、エリーの美しさを引き立てていた。

「なぁ、エリー…昼に言ってたこと」

「…昼？」

「プレゼント」

「くれるの！？」

エリーが椅子から飛び上がって、大袈裟に喜ぶ。たぶん嬉しいこととか楽しいことがあると、エリー基準で童心スイッチが入るんだろう。

「まぁ色々考えたんだけどさ、エリー最近俺とのこと色々不安がってるじゃん？だからさ、不安がなくなる物用意した。つうか、これから作る」

「これから…？」

俺はベッドから立ち上がると棚からあるものを出す。

「…ウォークマン？」

「そ」

「ウォークマンくれるの？」

「またそれは違うんだけどな。まぁ見てろって」

ウォークマンの中の金属分子をいじり、変移させーの圧縮しーので形を整えていく。たぶん物理とか化学の人たちが見るとぶっ倒れるようなことを、イメージだけで作り上げる。そして出来上がったのは、小さな輪っかだ。

「…指輪？」

「あぁ。結婚しよう、エリー」

「……えっ？」

呆気にとられるエリー。これが俺からのサプライズ成分を多分に含んだクリスマスプレゼント。つうかこれ以上のサプライズが人生にあってたまるか。下手すりゃありそうだけど。

「返事、くれないの？」

「えっ？…えぇ！？」

「そうか、受け取ってくれないならこのプレゼントはあげれないな」

「えっ！？やだ。やだ！貰う！」

「じゃあ…プロポーズ、受けてくれるな？」

「あっ、はい…でも！なんで？これ、アキラの大事な物じゃ…」

おずおずと手を伸ばしては引っ込めるエリーに笑いかけることをやめられない。

「これ見たとき、エリー驚いて喜んでくれただろ？だからまたこいつで、エリーに驚いて喜んでもらいたかったんだよ。思ったより喜んでくれてないみたいっつうか、リアクション薄いけど」

「そんなことない…そんなことない！ありがとう…あれ？」

エリーの目から一筋の涙が流れる。それを見て、俺は安心してもう一度エリーに告げた。プラスアルファをおまけしてやって。

「これをエリーが受け取ってくれたら、正真正銘、俺はエリーだけのものだ。その誓いは、未来永劫違えることは出来ない。俺がエリーから離れることはない。受け取って…くれるか？」

エリーが俺を見て、たっぷり間を空ける。言葉の意味を噛み締めているようで、現実を受け入れるようで、心の整理をしているようで。でも俺は安心して待っていられた。

そして数秒後、エリーは今までに見た一番の…泣き笑いを見せてくれた。

「…はい！」

そしてその細い指に指輪をはめた直後、エリーは僕の胸に飛び込んできた。ミニスカサンタの、俺の世界一大事なヒト。

「私からも…でもこれはプレゼントっていうか、報告かな？」

「いいよ、プレゼントでいい。話してみて」

「私…子供出来たみたい」

…今度は俺が言葉を失う番だ。今、なんて言った?

「……えっ?」

「子供…出来た。アキラと私の…子供…」

エリーに…子供?いや、たしかにエリーとするときは何故か避妊を気にせず中で…ゲフンゲフン!…は置いといて、マジか?

「それも…双子みたい。魔力を二つ感じるから、たぶん…」

「えっ…えっ…」

「アキラ…泣いてる?もしかして、嬉しくなかった?私、ここからじゃアキラの顔が…」

「……嬉しくないわけ…ねぇだろっ!エリー!お前と俺の子供だぞ!アッハハハ!最っ高のプレゼントじゃないか、エリー!そんな宝物が出来て!嬉しくないわけないだろう!アッハハハハハ!!」

「アキラ…!アキラぁ!」

「幸せだっ!今俺、すっっげぇ幸せだ!幸せだぞちっくしょー!!」

嬉しくて嬉しくて、幸せで嬉しくて、全ての感情が吹き出てもま

だ足りないくらい幸せで、それでも足りないとわかっててなお大声を上げて歓喜する。自分の声を聞いて何度も実感する。実感しようとする。今この瞬間は、現実なんだと！

「私もっ！すっごく幸せ！」

「エリー！」

「アキラ！」

「エリぃー！」

「アキラぁ！」

何度も互いの名前を叫び、手を取り振り上げ、抱きしめあう。最も原始的で、しかし最上級な喜びの表現。今ならきっと、世界の全てを愛せるなどと馬鹿なことすら浮かぶほどの幸せ。

ーーーゴーン！ゴーン！

「あっ…」

十二時を告げる鐘が鳴る。救世主（メシア）と呼ばれた男が生まれ落ちた日を告げる鐘が鳴り響く。

「お外…綺麗だね…」

「…あぁ」

幾度も鐘の音が響き、窓の外には月明かりに照らされて雪が深々

と降り積もる。蛍の光はたしか、雪灯りを頼りに勉学に勤しむ歌だったろうか。これだけ明るければ、それもわかる気がした。でも、これだけ美しくて幻想的な風景を目に、果たして昔の人は勉強は捗ったのだろうか。

「どうしたの？アキラ」

ーーーゴーン！ゴーン！

「なんでもないよ」

もう一度、ギュッとエリーを抱きしめる。

ーーー大丈夫。エリーはどこにも逃げやしない。十二時の鐘が鳴ってもどこにも行きやしない。エリーはシンデレラではないから。シンデレラより幸せにしてみせる、世界一愛しいヒトだから…。

ーーー主…くっさ。

ーーーこういうときはきちんと空気読め、ダービー。

～閑話休題～聖夜の奇跡（後書き）

だいぶ長くなりましたが、本当はもっと詰め込むつもりでした。まぁ今年もなんやかんやありましたが、来年は２０１２年予言の年ではありますが、願わくば自分自身、大切な人、家族や友人達…勿論読者の皆さんも幸せでありますように、幸せになれますように…最後の方書きながらそう考えました。ジョンも歌っていますが、そして過去形ですが、皆さんメリークリスマス！えーんどハッピーニューにゃ…イヤー！

～第八十三話～時は迫りし（前書き）

皆さん明けてましたおめでとうございます。今年もクリエーター並びに白カカオをよろしくお願いします。さて最終章に入りましたが、一周年は迎えないつもりです。これ書き終えたらまた新しいの書くと思いますが、そちらも気に入ってくれたら幸いです。あっ、『チーム「H」』の方は無期限凍結中なので全く新しいの書くと思います。前置きが長くなりましたが、最終章本編スタート！どぞ

～第八十三話～時は迫りし

俺とエリーの挙式は国を挙げての大事になってしまった。籍を入れたところで特に生活が変わるわけではないので、何の準備も必要としないままさっくり挙げてしまった。その影では色々と動いてくれた人達もいたっぽいけど、明かされない以上心内で感謝を告げるのが礼儀というもんだろう。たぶんそれなりに報酬貰ってるだろうし。

セレモニーとは面倒なもんで、眼下に城下町が望む城の広いバルコニー…のようなところでお披露目。国王が大仰になにか宣言していたが、残念ながら長すぎてすっかり内容を失念してしまった。周りには国王家に、マテリアル界の俺の家族。隣のバルコニーには大臣など要職の方々に、何故か長谷川総理。…まぁ何故かとは言ったがなんとなく理由はわかるけど。そして眼下には沸きに沸く護国騎士団及び民衆の方々。こんなほとんど接点のない俺らの挙式を心から祝福してくれているようで、目頭が熱くなったのを覚えている。

そして…

「では誓いの口づけを…」

なんでそんなところまで日本のそれを再現してるんだ。ここ数日国王がなにやら深刻な顔で部屋に篭っていたのは、これ勉強してやがったな？最近は重要な公務も無いのにとか不思議には思っていたけど、俺の思慮が完全に不足していた。おかげで異世界でこういうことなってる感が全くないじゃないか。つうか衆人環視どころかキュートスの全国民の前じゃねぇか。これって公然猥褻とかじゃないのか？いや、駅の改札でキスしてるカップルもいるし、ならんか。つうか人並みに羞恥心を持ち合わせている俺としては、

「誰が『人並み』だって？」

五月蝿いダービー。つうかお前もあの時煽ってたよな？つうか下手すりゃ一番煽ってたよな？いいや、過ぎたことは気にしない。大人なんだ俺は。まぁとりあえず顔から火炎系魔法が出るほど恥ずかしかった。土属性だけど。そして打ち合わせたようにその瞬間打ち上がる魔術師達の祝福の雷砲やら火砲やら水砲やら。すぐ側の民衆被害被ってたじゃねぇか。主に水濡れとか鼓膜とか。

なんやかんや終わって数日続いた国挙げてのお祭りが終わって、やっと一息ついた今日この頃。ここの国民は…何かにかこつけて騒ぎたいだけなんじゃないかと思ったり…。こないだのクリスマスの時もそうだったし。キリストなんてエルフに比べたらただの人間だろ人間。

…まぁいいや。今日の重要な要件、それはエリーの検診。つうかぶっちゃけ、俺は立ち会う初めての検診だったりする。マテリアルの世界では超音波を使ってエコー見たりするが、こっちでは映像では見えないがお腹の中の魔導反応を感知して発育状態を調べるらしい。ゆったりしたドレスを着たエリーが仰向けに寝そべり、城お抱えの医師…ここでは医療系の魔術師のご老人が手をかざしている。

「ふむふむ…」

「どうですか？」

医師の声に思わず敏感に反応してしまう俺。こういうとき、父親は何も出来ないもんだと初めて実感する。オロオロうろつかないだけ、まだプライドを保ってるけど。

「プックク…大丈夫よ。アキラ。今のところ順調ってこないだおっしゃってたから」

エリーが俺が狼狽えているのを見かねて声をかける。エリーのその表情は、お腹が膨れるにつれて母親のそれらしくなってきた。まぁ基本的にエリーはエリーだけど。

「主、みっともないぞ。ここはどっしりと構えておくのがアダルトというもんだ」

「お前は孕ませたことないからそう言ってられるんだ」

「全く…」

医師の爺さんが何やら呟く。その続きが気になり思わず背筋が伸びる。

「全く、驚くばかりだよ。この調子だと、予定日は一週間後というところだな」

「一週間!?」

待て!幾らなんでも早すぎないか?十月十日じゃないのか!?

「ふふ、アキラ。アキラの世界では違うかもしれないけど、エルフは妊娠してから出産まで半年程度で済むの」

「…それにしても発育が良すぎる気がしないでもないがな…儂もここまで早い赤子は初めてじゃわい。大奥様の時も平均のそれであったのに。まぁ旦那が大魔導士だから納得せんでもないが…」

医師の爺さんが首を傾げているのが不安を煽る。いや、何か不具

合があるのならそれは言うと思うが、それでも医師のその態度が不安になる。

「あの…先生？早産ってことですよね？それなら何か発達に障害があったりとか…」

実際計算上、平均が半年と言ってもエリーの出産はその二ヶ月近く早い。

「いや、魔導反応は全く正常じゃ。いや、むしろ赤子にしては高すぎるくらいじゃが…」

俺の息子、大丈夫だろうな？いや、性別まではまだわからないけど。

「だって、アキラの子供だもん」

エリー…それで片付ける気か？

そして瞬く間に一週間。エリーは元気な子供を無事産み落とした。しかし…。

「まさか、双子とはな」

驚いた。本当に驚いた。確かに医師は魔導反応が大きいとは言っていたが、二人もいたらそりゃ大きいわな。エリーの腹がそこまで大きくならなかったから、全く予期できなかったとも言えなくはないが。

「それにそれぞれの魔力値も一般の赤子と比較にならん。これがもし片方だけなら、普通の三分の一程度の期間で生まれていたかもしれんな…」

「一人だと早すぎるから二人にして調整しましたってそんなアホな！」

「…ビエーン！」

「デヤーー！！」

「ほらアキラ、大声出したからヨッドとエダイが泣いちゃったじゃない」

エリーが息子たちを宥めて頭を撫でる。割とすぐ泣き止んだ息子たち、ヨッドとエダイが仲良くエリーの左右の乳房を分けあって機嫌を直す。ちなみに両方男の子だ。兄の方がヨッドで弟の方がエダイ。名前は、生命の樹第二のセフィラ「知恵」のコクマーが神名ヨッド、第三のセフィラ「理解」のビナーが神名エロヒムから戴いた。エダイのエロヒムに関しては、エロヒムだと俺が若干聞き覚えがあって息子の名前だと違和感を感じ、ロとムを足して「台」、それをもじってエダイにした。ヒには可哀想なことをしたと思うが。この二つのセフィラは二つ並びになっている。名前は順番でつけたが、上下無く仲良く育って欲しいという思いを込めて名付けた、そして俺を象徴するセフィラ、ダアトより高位のセフィラでもあるので、親父越えして欲しいというささやかな意味も込めて。

「まうー？」

「だー！」

無心にエリーの乳を貪っている二人の首に、ヨッドにはトルコ石、エダイには真珠で出来た首飾りをかけてやる。くどいようだが、それぞれセフィラを象徴する宝石である。俺の水晶みたいなもんだ。

「あっ！馬鹿、口に入れんな！」

「子供はなんでも口に入れるからな…ひらめいた！」

「通報する間もなく叩き割ってやる、クソ指輪。つうかヨッドもエダイも男だろ。ショタにも達してないペド野郎かお前は」

「主、かの人を越えし最も新しい神、旧神もシャイニングガチペドヘドロンを用いたと…そしてそのシャイニングガチペドヘドロンは今は主の手に…」

「あーもう！某魔導探偵のおかげで輝く(俺の愛剣)トラペゾヘドロンが大変な事に…」

「ほら、アキラ大声出さないで」

「あっ…サーセン」

いつの世も、父とは母を前に弱いものだ。

「アッハハハ！かの大魔導士アキラも、エリーちゃんの前では形無しね」

「…無様ね」

「…なんでお前らがいるんだ？シーリカ、ヘラ」

「後学の為」

「右に同じ」

「お前らな…」

「あっ、大丈夫よ？男どもは部屋の外だから」

「いや、そういう問題では…」

「あとキーランス？父親なんだから授乳中のヨッドとエダイを羨ましそうに見ないの」

「ばっ！ヘラ！お前適当な事言うなよ！」

「いーや、見てたね」

「シーリカ…貴様まで…」

「二人も抱いてみる？可愛いよ？」

俺が劣勢と見ると、愛息子を引換えに亭主を救うエリー。何という内助の功。落とさないでねと二人にヨッドとエダイを渡すと、

「キャー！ちっちゃーい！可愛いー！」

「…愛らしいな」

俺の方には目もくれずはしゃぐシーリカとヘラ。ヨッドもエダイも二人に懐いているようで…つうか美女二人に抱かれてご満悦のようだ。

「…間違いなく主の子だな。女たらし」

「お前の血も混じってないだろうな、女好き」

「アキラ、私暫く安静だって言われちゃったから、少しの間ここに寝泊りするね」

「おう。つうか寝泊りもなにもここも城だろうが」

「うん…でも、暫くアキラと一緒に寝られないから…」

「…あぁ」

検診後、エリーが陣痛始まるまでの数日間は軍部に休みを貰い一緒にいたので、少し寂しい気もする。まぁ今は母体と子供の身が第一。親父は我慢するさ。

「じゃ、ありがとうエリーちゃん。また一緒に遊ばせてね」

「…また来るよ」

シーリカが明るくヨッドをエリーに返す。ヘラも、意外にも名残惜しそうにエダイを手放す。エリーに抱かれた二人は、安心したように二人寄り添ってんまんましている。眠いのかもしれない。

「うん！また遊んであげてね！」

「あと、ちょっとアキラ借りてくよ」

「はい。いってらっしゃい、お父さん」

「あぁ、行ってくる。話が終わったら戻るよ」

エリーがヨッドとエダイの手を取ってバイバイする。その姿にグっとくるものがあった。その光景で、ようやく父親としての自覚が湧いた気がする。俺はシーリカとヘラの後に続き、決して広くはない病室を去る。

「…いいのか？アキラ」

壁にもたれて腕を組んでいるグレンが声をかけてくる。いつものチャラい様子は、ない。

「あぁ。無事に産まれてきてくれたからな。後は…エリーに任せるさ」

「とかクールに言っちゃって、ホントは子供の成長見たいんだよね」

ベンチのような長椅子に座っていたカイムが、見透かしたような笑顔で毒づいてくる。

「…そりゃそうさ。命より大切な愛息子達だ。一人前になるまで見守りたいさ。でも…」

「その為には越えるべき障害が大きすぎる、だろ？」

「…俺のセリフを取るなよ。ホントガラム、お前ってやつは…」

「でも。まだ生きて帰れないと決まったわけじゃない。そうだろ？晶」

「…あぁ！」

ガラムと並んで立つ、白夜に力強く頷く。

「七つの大罪（セヴンス・デッドリー）…あいつらを倒さなきゃ、ヨッドもエダイも危険にさらされる…」

ヘラが苦々しく呟く。その顔には、影などでは済まされない闇が見えた。

「あの子達の未来の為に、頑張らないとね！お父さん！」

シーリカが俺の肩を叩く。その感触が力強く、握る拳に力が入った。

「俺は見てないが、双子の男の子なんだろ？ヘラ」

「あぁ。エリー譲りの綺麗な金髪のヨッドに、キーランスに良く似た黒髪の方が弟のエダイだ。二人とも、モフモフしてすごく温かかった…」

「お前は…生きろよ、ヘラ」

白夜の声に、俺を含め一同が白夜を向く。真意を探る言葉を探す

前に、白夜が口を開いた。

「この中で、一番能力が低いのは俺だ。ヘラがいなければ並の魔術師と変わらん。しかし…足でまといにはならん。ヘラ、晶…お前らが危ないときは、俺が命をかけてでも…」

「お前、何言って…」

「何を言ってるのよ！」

シーリカが壁を殴る。声が廊下に木霊した。熱くなって、ここが病室前だってことをすっかり忘れてしまっている様子だ。

「おい、エリーに聞こえ…」

「アキラ…アンタも同じような事、考えてたでしょ」

一転して押し殺すような声を俺に向けるシーリカ。

「似たようなことってなんだよ」

「私等の誰かの為に、命かけようとかそんなところよ！」

ぶっちゃけ白夜の言葉を探ろうと思考していたが、胸の内に同じことを思っていたこともまた事実なので否定出来ない。

「おい、落ち着けって…」

「ガラムは黙ってて！あーもう！マテリアルの人間はみんなこうなの！？」

「いや、そんなことはないと思うぞ？そうなら地球はもっと平和に…」

「馬鹿なこと言わないでよ！アキラも…勿論白夜、アンタも。私たちは仲間なのよ？誰か一人かけてもダメなんだから…みんな…一緒に帰るって…」

「シーリカ、先ず落ち着けって…」

カイムがシーリカをかき抱くと、シーリカはカイムの胸の中で泣き声を押し殺していた。金色の守人に隠者…離れていたとはいえ、悠久の時をその体一つで越えてきた二人だ。その幾星霜の旅の終着を前に、カイムはシーリカの心中を一番に理解出来るのかもしれない。尤も、カイムが同じ心中かは知らないけど。

「アキラ…」

シーリカの頭を撫でながら、カイムは優しげに俺に微笑んだ。そこに不思議と、いつもの胡散臭さはなかった。

「アキラは…帰らなくちゃいけないんだよ。ここに…エリーちゃんとヨッド君、エダイ君の元に。父親は、家族のことを一番に考えなくちゃ」

至極当たり前の事なんだろうけど、カイムに言われてハッとした。

「白夜も…」

今度は、白夜を諭すカイム。

「君は決して一番ドベなんかじゃないよ。ヘラがいなきゃ何も出来ないって言ってたけど、本当に長い間、ヘラ…地獄（ヘル・ブリング）をもたらすものを見てきて、君が一番彼女を乗りこなしてる。逆に言えば、ヘラは君じゃなきゃ本領を発揮出来ないんだ。もしかしてまだマドラ全団長を殺したことを気に病んでいるのかもしれないけど…もしそうなら、あまり時間はないかもしれないけど、ヘラを『使いこなす』ことに集中してくれ。それが、一番の贖罪だよ。俺達の中で、一番伸びしろがあるのは、君かもしれない」

カイムの言葉に、下を向く白夜。時折ヘラの方を向いては、また俯く。白夜が血が滲むほど拳を握り締めた時、ヘラがおもむろに白夜の掌を開けその傷口にキスをする。

「白夜…お前、汝は妾の主だ。胸を張れ。そして…最後の戦いを前に、もう一度誓いを結ぼう。そして、勝とう！その為なら…汝が真に力を発揮出来るのなら、妾はもう一度立ち戻ろう。ベルゼバブに惑わされた頃の力すら利用しよう！血も涙も無い、鬼神のように戦場を駆け、敵の血を浴びて笑う汝に立ち戻らせてやろう！それが…この戦いに必要なことならば…」

最初はヘル・ブリングだった頃の妖艶で不敵なヘラと、今のクールなヘラのギャップに戸惑ったものだが、思えばその頃から天国（ヘヴンズ・ゲート）への扉…ダービーと相対した時はその熱さは共通していた。あのヘラの人格は、ベルゼバブによって作られたものだったのか…そしてヘラの言葉を聞くに、今もその人格は今も残っているのか？はたまたただの二重人格なのか。ふとそんな事を思っていた。

「『あっち』のヘラに、戻るんだな」

グレンが相変わらず腕を組んだまま尋ねる。その顔は幾分深刻そうなソレを含んでいた。

「…あぁ。私も白夜の為に、この世界の為に、全てのカードを出そう。あの時の私の方が、最大限の闇の力をコントロール出来る」

「そうか…」

「何をそんな深刻そうなツラしてんだ？」

全力を制御出来るなら、それに越したことはないと思うけど。

「いや、子供の頃ヘラは不安定になるとあのモードになったんだけどな、幼心ながらあの時のヘラの色っぽさに何度…」

「ナニをした！いや、ナニもするな！」

真面目なツラでしょうもないことを真剣に言うグレンに、ヘラが何かを投げつけた。カーンといい音がして、グレンの顎にクリーンヒットした何かが跳ね返る。それが何かは、何故か認識出来なかった。どうでもいいけど、ヘラ、お前も何がナニになってるぞ。

「まっ、俺がナニを言いたいかってーと…」

「ナニいい加減自重しろ」

「俺らは生きることしか考えてねーってことだよ。アキラ、白夜」

急にカッコイイことを言い出しやがったグレンのその言葉に、俺と白夜は顔を見合わす。互いに目をパチクリさせ、頭の中を整理す

る。

「…ったく、人間風情は気苦労が絶えんな。貴様ら、くれぐれも俺の足を引っ張るなよ」

やれやれと顔の横で手を振るガラムに、二人で不敵に笑ってやる。

「お前の人間風情、久々に聞いたな」

「お前こそ足を引っ張るなよ、氷の馬鹿王子」

いきなり言うようになった白夜に、ガラムを除く他の面々が笑い、いいぞもっとやれとはやし立てる。決戦の日が、近づいている。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3945t/

クリエーター

2012年1月10日04時11分発行